御徒町樹里の西遊記(四百文字小説)

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
御徒町樹里の西遊記（四百文字小説）

【Ｎコード】
Ｎ２６８９Ｏ

【作者名】
神村律子

【あらすじ】
御徒町樹里は旅の僧です。ありがたい教典を授かりに西を目指しています。
弟子がどんどん増えて行く予感がします。
西遊記の枠では収まり切らず、封神演義、北欧神話、果ては古事記日本書紀に至るまで、ネタがあれば取り込みます。とにかく節操のないお話ですので、あまり真剣に読まない事をお奨めします。かるーく、流すように読んでくださいませ。　できる限り毎日更新致します。

第一話　出会い編

昔々のお話です。

御徒町樹里はお坊さんです。

西にある仏様の国にありがたい教典を取りに行くために馬に乗って旅をしています。

ある日、樹里は大きな山の近くを通りかかりました。

その山にはかつて天界を騒がせた一匹の猿が封じられています。

猿の名は、孫左京。いかにも悪そうな名前と顔をしています。

左京は彼を封じた観音様から、

「ここを徳の高い僧が通りかかる事がある。その者の弟子になるのを条件に、そこから出してもらいなさい」

と言われました。

左京は悪知恵の働く猿でしたから、その僧を騙して出してもらい、サッサと逃げようと考えていました。

そして彼は、五百年もの間待ちわびていた僧が来たのを知りました。

「おおい、旅のお坊様」

しかし、樹里は馬に揺られて行ってしまいます。

「おおい！」

結局樹里はそのまま通り過ぎてしまい、孫左京は次の僧が来るのを待つ事になりました。

めでたし、めでたし。

第一話　出会い編（後書き）

こんな具合に続いて行きます。

第二話　続・出会い編

御徒町樹里は旅の僧です。

仏様の国にあるありがたい教典を授かるために西を目指しています。

天界を荒し回った暴れ者の猿である孫左京が樹里を待っていたのですが、樹里は気づかずに行ってしまいました。

左京が途方に暮れていると、樹里が戻って来ました。

「おおい、旅のお坊様あ」

でも樹里はまた通り過ぎてしまいました。

左京はガックリしました。

すると、観音様が堪りかねて樹里の前に現れました。

「これ、御徒町樹里。お前は孫左京を助けて自分の弟子にするのだ。わかったか？」

「孫正義さんですか？」

「誰がヤフーの社長の話をした！？」

観音様は激怒してしまいました。

こうしてまた樹里は左京の前に現れました。

「旅のお坊様あ」

左京は声の限りに樹里を呼びます。

「あ」

樹里は左京に気づいたようです。

「お坊様あ」

左京は本当に泣きました。

「こんなところに財布が」

樹里は落とした財布を探していたのでした。

第二話　続・出会い編（後書き）

まだまだ続きます。

第三話　遂に出会い編

御徒町樹里はある国の僧です。

西にある仏様の国でありがたい経典を授かるために旅をしています。

樹里は孫左京という猿を探していました。

「だから、俺がその孫左京だって！」

左京は必死に訴えます。

「おお！」

樹里は左京を見ます。

「リーグ優勝おめでとうございます」

樹里は深々と頭を下げました。

「だからその孫さんじゃねえよ！」

ようやく樹里に気づいてもらえた左京は、

「貴方の弟子になりますからここから出して下さい」

と言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「こんなところに扉があります」

樹里が扉を開いて左京のいる洞窟の中に入って来ました。

「何でそんなところに扉が？」

怪奇現象に怯える左京です。

「よし、出られるぞ」

左京は扉を開こうとしましたがダメです。

「どうすればいいんだ？」

左京は樹里に尋ねました。

「さあ」

樹里はまた笑顔全開です。

「……」

また途方に暮れる左京でした。

第四話　洞窟脱出編

御徒町樹里は仏様の国に経典を授かりに行く途中です。

今は、孫左京と共に洞窟に閉じ込められています。

樹里が入って来た扉が開かないのです。

「おお」

樹里は言いました。

「まさか、引き戸だったとか言うオチじゃないだろうな?」

左京が言います。

「出口はこちらでした」

樹里は別の扉を開いて外に出ました。

「何だと!?」

左京は後に続こうとしましたが、扉は開きません。

「俺を出してくれ!」

左京は樹里に言いました。樹里は、

「そこから出たかったのですか?」

「さっきからそう言ってるだろ！」

左京は血管が切れそうです。

「どうぞ」

樹里は扉を易々と開きました。唖然とする左京です。

「これで俺は自由だ」

左京は樹里を突き飛ばして逃げようとしました。

「きゃっ」

樹里が倒れて帽子が脱げます。

「え？」

左京は樹里が女の子なのに気づきました。

（か、可愛い）

「私を弟子にして下さい」

エロ左京誕生の瞬間でした。

第五話　妖怪の棲む村編

御徒町樹里（おかちまちじゅり）は仏様の国に経典を取りに行く旅の僧です。

途中で暴れ猿の孫左京（そんさきょう）と出会いました。

左京は樹里の可愛さにやられて一緒に行く事になりました。

「あとは犬さんとキジさんが集まればいいのですね」

樹里が笑顔で言います。

「お師匠様、それ、お話が違います」

左京は顔を引きつらせて言いました。

「そうなんですか？　ではあとカニさんとウスさんですか？」

「それも違います」

左京は頭痛がして来そうです。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

樹里達はしばらく道を進み、ある村に入りました。

左京は暴れ者ですが、とにかく強くて勘のいい猿です。

「ここ、妖怪がいますよ」

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔です。

「お坊様」

そこにいきなり現れる凶悪犯のような男。

「出たな、妖怪！」

左京が耳の穴から如意棒を出します。

「私は村長です、妖怪ではありません」

樹里は村長の話を聞く事になりました。

第六話　妖怪の森編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために旅をしている僧です。

樹里は、弟子になった猿の孫左京とある村に入り、そこでどう見ても凶悪犯の村長から妖怪の話を聞く事になりました。

「この村の奥に森があって、そこに妖怪がおります」

「そうなんですか」

深刻な話なのに樹里は笑顔です。村長の顔が引きつります。

「その妖怪は大変スケベな妖怪で、毎年生け贄を要求して来るのです」

凶悪犯顔が悲しそうにしても同情できないと思う左京です。

「村一番の娘を差し出せと言って来るのか？」

左京が尋ねます。すると村長は、

「いえ。村一番の美少年を差し出せと言って来るのです」

「何？」

左京はギョッとします。

「男が好きなのか？」

「はい。女の妖怪ですから」

左京は女と聞いて色めき立ちます。

「美人なのか？」

「絶世の美女です」

村長は呆れているようです。

「俺が囮になる。それで全部解決だ」

左京はニヤリとしました。

第七話　囮の猿編

御徒町樹里（おかちまち　じゅり）は旅の僧です。仏様の国を目指しています。

ある村に立ち寄った樹里達は、凶悪犯顔の村長に妖怪の話を聞きました。

妖怪は美少年が大好きだそうです。

樹里の弟子、暴れ猿の孫左京（そんさきょう）が囮になり、妖怪を退治する事になりました。

しかし本当は左京は妖怪が絶世の美女だと聞き、口説こうと思っていました。

（俺様ならどんな女もイチコロさ）

エロ左京全開です。

（俺は五百年も女を断っていたんだ。今夜は夜通しそいつとお楽しみだぜ）

（早く来い、エロ妖怪）

左京は美少年に変身し、森の中の木の切り株の上に座りました。

樹里と村長は木の陰から左京を見ています。

「お待ちィ」

妖怪が現れました。

ワンレンで巨乳でミニスカで扇子を持ってます。

顔は確かに怖いほどに奇麗です。

「優しくしてね」

左京は呟き、妖怪を見て固まりました。

見覚えのある顔です。

「お前は亜梨沙か」

「誰あんた?」

妖怪は眉をひそめました。

第八話　妖怪の正体編

御徒町樹里は仏様の国に経典を授かりに行く旅の僧です。

途中で立ち寄った村で妖怪退治をする事になりました。

樹里の可愛さにやられた暴れ猿の孫左京は、妖怪が絶世の美女と聞き、自分を囮にして妖怪をおびき寄せました。

すると驚いた事にその妖怪は左京の顔見知りでした。

「私は確かに亜梨沙だけど？　あんたは？」

「俺だ、孫左京だ」

左京は正体を現しました。すると亜梨沙と呼ばれた妖怪が奇声を上げます。

「左京ゥ、会いたかったわん」

左京の顔を巨乳に埋もれさせる亜梨沙です。

「あんた、五行山に閉じ込められていたはずでしょ？　出られたの？」

「ああ。徳の高いお坊様のおかげでな」

左京は樹里を見ました。樹里は笑顔全開で、

「こんにちは」

亜梨沙は左京を切り株に叩きつけると、樹里に駆け寄ります。

「結婚して下さい」

いきなり告る亜梨沙です。

「その方は女の人だ」

左京の言葉に亜梨沙は石化してしまいました。

第九話　亜梨沙を助けろ編

御徒町樹里は仏様の国に教典を授かりに行く旅の僧です。

途中立ち寄った村で出会った亜梨沙と言う女の妖怪は、樹里の弟子である孫左京という猿の昔の友人でした。

亜梨沙は樹里が女性なのを知ってショックで石化してしまいました。

「お師匠様、何とか亜梨沙を助けて下さい」

左京はもう一度あの巨乳に顔を埋めたい一心から、樹里に頼みました。

しかし、凶悪犯顔の村長が反対します。

「その女は村の男の子をたくさんたぶらかして悪い子にしてしまったんだ。そのままにしておいて町の石屋に売るんだ」

「何て事言うんだ。やっぱり妖怪だな？」

左京が疑います。しかし村長は、

「違います！　私は顔は怖いけど、心は優しいんです」

樹里を見ると、亜梨沙にお経を唱えているようです。

「お師匠様あ！」

左京は号泣しました。

でもよく見ると、樹里はうたた寝をしているだけでした。

そのせいで左京まで石化してしまいましたとさ。

第十話　亜梨沙の願い編

御徒町樹里は旅の僧です。弟子の孫左京と言う猿と共に西を目指しています。

樹里達はある村で亜梨沙と言う美貌の妖怪に出会いました。

亜梨沙は樹里が美少年と勘違いし、左京に女性だと知らされて石化してしまいました。

左京も樹里がお経で亜梨沙を助けてくれていると勘違いし、樹里がうたた寝しているだけだと知って石化してしまいました。

「勘弁して下さい、お師匠様」

石から生まれた猿である左京は簡単に復活しましたが亜梨沙は元に戻りません。

「そうなんですか」

樹里はお経の本を出しました。

「オンアロリキヤソワカ」

樹里が真言を唱えると観音様の力で亜梨沙が元に戻りました。

「ありがとうございます、お坊様。私もどうか弟子にして下さい」

亜梨沙は樹里に願いました。

「そうなんですか」

亜梨沙も弟子になり旅をする事になりました。

「惜しい事をした」

亜梨沙を売ろうと思っていた村長は悔しがったそうです。

第十一話　亜梨沙の秘密編

御徒町樹里は旅の僧です。教典を授かるために西を目指しています。

お供は石猿の孫左京と巨乳妖怪の亜梨沙です。

しばらく先に進むと樹里達は大きな町に入りました。

「野宿しなくてすむな」

左京が早速宿を探しに行きます。

「お師匠様」

亜梨沙が樹里を見ます。

「はい」

樹里は笑顔全開で応じます。

「左京とはどういう関係なのですか？」

亜梨沙は直球を投げました。

「他人の関係です」

危険球が返って来ました。

その夜です。

樹里達を宿屋の主人がもてなしてくれました。

左京と亜梨沙は意地汚くご馳走を食べました。

食べ過ぎた左京と亜梨沙は食堂で寝てしまいました。

「ブヒブヒ」

豚の鳴き声が聞こえます。

「うん？」

左京は目を覚ましました。亜梨沙がいた所に豚が寝ています。

「亜梨沙が豚に食われた！」

左京が叫びました。するとその豚が目を覚まし、

「ああ、左京。おはよう」

と言ったので左京は固まってしまいました。

第十二話　亜梨沙の正体編

仏様の国へと旅をしている御徒町樹里一行はある町の宿屋でもてなしを受けました。

意地汚い猿の孫左京と巨乳妖怪の亜梨沙は食堂で寝てしまいました。

左京が豚の鳴き声で目を覚ますと何と亜梨沙が豚になっていました。

「亜梨沙、お前……」

左京は恋人同士だった事もある不二子的存在の亜梨沙の正体に驚愕しました。

「左京、私を嫌いになった?」

亜梨沙は妖術で巨乳の美女になっていたのです。

「嫌いにはならないが消したい過去の記憶はある」

左京は身震いしました。亜梨沙は巨乳美女に変身して、

「これでも?」

「う……」

スケベな左京はあっさりと亜梨沙とよりを戻して、その巨乳を堪

能しました。

翌朝です。

亜梨沙は樹里に自分の正体を明かして詫びました。

「そうなんですか」

全然気にならない樹里です。

「次はレンガの家を造るのですね？」

「お師匠様、それ、違う話です」

亜梨沙は泣きながら言いました。

「そうなんですか」

こうして一行は再び西を目指しました。

第十三話　大河の妖怪編

御徒町樹里は旅の僧です。ありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「喉渇いた」

石猿の孫左京が馬を引きながら愚痴ります。

すると実は豚の妖怪の亜梨沙が、

「この先に大きな川があるわ」

「そうなんですか」

樹里が笑顔で応じます。

やがて川が見えて来ました。

「大きな川ねえ」

亜梨沙が呟きます。

「大井川ですか？」

樹里が尋ねます。

「お師匠様、国が違います」

左京が突っ込みます。

ふと岸辺を見ると、老いた母親と若い娘が泣いています。

「どうしたのですか？」

樹里が声をかけました。すると母親が、

「この川に棲む妖怪に娘を差し出せと言われて……」

樹里が左京を見ます。左京はそのウルウルの瞳にやられました。

但し樹里が花粉症で目がウルウルなのは内緒です。

「この孫左京様が妖怪を退治してやる！」

左京が言いました。すると娘が泣きながら、

「ありがとうございます。これからもホークスを応援します」

「その孫さんじゃねえ！」

左京は切れました。

第十四話　樹里危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指して旅しています。

川岸で泣く母娘を見かけ、川に棲む妖怪を弟子の孫左京が退治する事になりました。

左京は娘が美人なので下心ありです。

「妖怪はあの中州にいます」

母親が言いました。

「地元福岡ですね」

樹里が左京に言います。

「その中洲じゃねえしその孫さんじゃねえ！」

左京は戦う前から疲れました。

「行くぞ、妖怪」

左京は中州まで飛びました。

「ヒヒヒ」

母娘が不気味に笑います。

「ご馳走をどうぞ」

「はい」

亜梨沙は母親が出した料理に食いつきます。

「うわわ！」

中州はドロドロで、左京は足を取られました。

母娘が妖怪でした。

「お坊様、お待ちしておりました」

母親が樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「徳の高い僧を食らうと寿命が千年延びるのだ」

母親と娘の口が耳まで裂けます。

「お師匠様！」

左京が気づきますが、動けません。亜梨沙は料理に夢中です。

樹里、危機一髪です。

第十五話　思いがけない展開編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は妖怪の罠に嵌りました。

石猿の孫左京は中州に嵌り、巨乳妖怪の亜梨沙は料理に嵌っています。

「さあ、お坊様、頂かせてもらいますよ！」

妖怪の母娘が口を大きく開いて樹里に襲い掛かりました。

その時でした。

「ぐえ！」

二匹の妖怪を跳ね飛ばした者がおりました。

「何だ？」

妖怪はビックリしてその者を見ます。

「馬だけど実は龍の馨さんです」

樹里が笑顔全開で言います。

「ども」

照れながら馬が挨拶します。

「何だと！？」

左京は仰天しました。

「とどめです」

馨が後ろ足で妖怪親子を蹴飛ばしました。

「ひえええ！」

二匹は空の彼方に飛んで行ってしまいました。

「ねえ、もうご馳走ないの？」

亜梨沙が場違いな事を言いました。

左京はようやく中州から抜け出しました。

そして馨に小声で、

「たまには交代させろ。お師匠様を俺の背中に乗せたい」

「いいですよ」

こうして変態条約が締結されました。

第十六話　大河の妖怪――本物編

御徒町樹里は旅の僧です。ありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は妖怪親子の罠にかかり、本当は龍の馬に助けられました。

「どうしてあいつらが妖怪だって気づかなかったんだろう？」

石猿の孫左京が首を傾げます。すると豚の妖怪の亜梨沙が、

「左京ってば、鈍いの？」

「うるせえ！」

樹里達は川を渡るために舟を探しました。

でも見つかりません。

樹里が左京を見ます。左京はその瞳にやられ、

「俺が舟を探して来ます」

と自慢のきんと雲に乗り、舟を探しに行きます。

「はっはっは！」

どこからか笑い声が聞こえます。

「何？」

亜梨沙が馬の陰に隠れて周囲を見ます。

すると川から色っぽい女の河童が現れました。

腰蓑と胸当てしか着ていなくて巨乳です。

「あ、〇桜の河童さんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が楠トシエだ！？」

意味不明に切れる河童です。

「孫左京がいなくなるのを待っていたのさ！　食わせてもらうよ、坊主！」

樹里はまたピンチです。

第十七話　河童の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西へと旅しています。

樹里達は大河に棲む女の河童に襲われました。

石猿の孫左京がいない隙を突いた姑息な作戦です。

「誰が石川進だ！？」

河童は意味なく切れています。

「私がやっつけます！」

本当は龍の馬が河童に向かいます。

「ＯＨ！　モーレツ！」

河童は昭和の悩殺ポーズで馬を気絶させました。

「ブヒン！」

馬はそのまま下流に流れて行きました。

「私にはそんなの通用しないわよ、エロガッパ！」

亜梨沙が凄みます。すると河童は、

「誰が鳳啓助だ！？」

と切れ、

「飛ばない豚は只の豚だ！」

と竜巻を起こし、亜梨沙をふっ飛ばしました。

「きゃあ！」

亜梨沙は河原に叩きつけられて気を失いました。

「どうよ、この強さ。惚れちゃう？」

河童は樹里に流し目を使います。杉良〇郎も真っ青です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「待てえ！」

そこへ左京が戻って来ました。

「もう戻ったか」

左京と河童は睨み合いました。

第十八話　河童の正体編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

旅の途中で出会った女の河童に、本当は龍の馬と豚の妖怪の亜梨沙が倒されてしまいました。

河童が樹里に襲いかかろうとした時、樹里に下心がある石猿の孫左京が戻りました。

「あんたの事は知っているよ、孫左京」

河童が言います。左京は、

「言っておくが俺は球団は持っていないぞ」

「わかってるよ。私だって天界にいたんだからさ」

「何!?」

河童の意外な過去に驚く左京です。河童はキッと左京を睨みつけ、

「私は天帝の近衛大将だったのさ」

と言いながらも胸の谷間を強調します。

「おお」

左京は思わず見入ってしまいます。

「隙あり！」

河童が口から粘液を吐きます。

左京は素早くかわしましたが粘液は左京を追いかけて絡みつきました。

「ううっ！」

左京は動けなくなりました。

「昔年の怨み、今晴らすぞ」

「関根勤の怨みですか？」

樹里が言います。

「誰がそんな事言った！？」

河童がまた切れました。

第十九話　河童の敗北編

御徒町樹里は仏様の国にありがたい経典を授かりに行く途中ですが、ピンチです。

本当は龍だけど馬の馨は川に流され、豚の妖怪亜梨沙は気絶し、石猿の孫左京は河童の粘液で動けません。

「坊主を食らえば私は元の姿に戻れるのだ！」

河童が叫びます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。左京が焦ります。

「お師匠様！」

河童が竜巻で樹里を吹き飛ばしました。

「きゃっ！」

樹里の帽子が飛び、長い髪がなびきます。

「女ァ！？」

河童は唖然とします。

「このヤロウ！」

左京が樹里の「女の子パワー」を受け、粘液を断ち切ります。

「ヤロウじゃない！　私は女だ！」

河童が切れますが、左京は耳から如意棒を出し、

「うるせえ！」

と彼女の頭の皿を叩き割りました。

「ギャビン！」

河童は皿の水を失い、倒れてしまいました。

左京が更に叩こうとすると、樹里が、

「お猿さん」

と呼びかけます。左京は樹里のウルウル目を見てしまい、

「わかりました、許します」

と引き下がりました。

第二十話　更に弟子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるため、西を目指しています。

途中、様々な困難に出会いましたが、持ち前の笑顔で乗り切って来ました。

「本当にあの笑顔は凶器だ」

石猿の孫左京はすっかり樹里の虜です。

左京の活躍で倒した河童をどうするか会議中です。

河童は縄で縛って木に吊るされています。

「こんな女、切り刻んで殺しちゃいましょうよ」

豚の妖怪亜梨沙が言います。

「でもその前に胸当てと腰蓑の中を確認しないと」

実は龍の馬も本当はエロいようです。

「俺はお師匠様のご判断にお任せします」

左京は樹里を見ました。樹里は目を瞑っています。

亜梨沙も馬の馨も樹里を見ました。

「おはようございます」

樹里は目を開けて言いました。寝ていたようです。

「勘弁して下さい」

左京は泣いて懇願しました。

「河童さんは弟子にします」

樹里が言いました。

「どうしてですか？」

左京が尋ねます。すると樹里は、

「どうしてでしょう？」

左京はまた石化してしまいました。

第二十一話　君の名は？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるため、西を目指して旅をしています。

強敵だった河童を倒した後会議を開いて樹里の一声で河童を弟子にする事になりました。

河童に酷い目に遭わされた豚の妖怪亜梨沙と龍だけど馬の馨は気分が悪そうです。

「私を許して下さるのですか、お坊様」

河童は涙ぐみます。その顔を見て馨は恋に落ちてしまいました。

「私からもお願いします、お師匠様」

突然の裏切りに亜梨沙は唖然とします。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で馨を見ました。そして、

「貴女は天界に戻りたいのでしょう？　私を食べても天界には戻れませんよ」

とまともな事を言ったので、左京が元に戻りました。

「ありがとうございます」

河童は樹里の弟子となりました。

「名前は何て言うんだ?」

左京が言います。すると樹里が、

「三平さんですよ」

「違います、お師匠様」

河童が即座に否定します。

「でも河童と言えば三平では?」

「誰が水木茂だ!?」

河童の名は「蘭」でした。

第二十二話　大物妖怪登場編

御徒町樹里は仏様の国を目指して旅する僧です。

お供には石猿の孫左京と豚の妖怪の亜梨沙と河童の蘭がいます。

それに樹里が乗っている馬は、本当は龍の馨です。

今は草原を進んでいます。

「いつ代わってくれるんだ？」

左京は樹里を自分の背中に乗せたくて馨に囁きます。

「次の宿を出たらで」

「おう」

左京は嫌らしい顔をしました。

「お師匠様！」

蘭が何かを感じたようです。亜梨沙も鼻をヒクヒクさせて、

「妖怪の臭いね」

左京も本気モードになり耳から如意棒を出します。

すると一行の前にズラズラと下っ端妖怪が現れます。

ネズミの妖怪のようです。

「旅の僧、我がご主人様の糧となれチュー」

ネズミ妖怪の頭が言いました。

「岡田さんですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。頭のネズミはムッとして、

「違うチュー！　俺達は金ちゃん銀ちゃんの城の者だ！」

「二郎さんは元気ですか？」

樹里が尋ねます。頭はますます怒って、

「誰がコント５５号だ！？」

と切れてしまいました。

第二十三話　ネズミ妖怪の襲撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は草原でネズミの妖怪に襲われました。

「頭来たチュー。やってしまえ！」

ネズミの頭が手下に指示します。

「亜梨沙、蘭！」

石猿の孫左京が言います。

「あいよ」

亜梨沙が答えます。蘭は、

「あんたの命令は聞かない！」

と言いながらもネズミ達を粘液で縛ります。

「ツンデレか」

左京が舌打ちします。

「誰が西川史子だ！？」

蘭が切れます。

亜梨沙は豚に戻りその巨体でボディアタックです。

「ぐえええ」

ネズミ達は次々に下敷きにされます。

「おらあ！」

左京の如意棒が唸り、頭を追い詰めます。

「ウフフ」

頭が気色の悪い笑い方をします。

「何がおかしい？」

左京が怒鳴ります。すると頭は、

「我らは囮。坊主は頂いたぞ！」

と言うと、手下達を連れて逃げました。

「何だと！？」

振り返ると、樹里の姿はなく馬の馨が人参を貪り食っています。

「龍のクセに人参に釣られやがって！」

左京は歯軋りしました。

第二十四話　囚われた樹里編

御徒町樹里は旅の僧です。ありがたい経典を授かるために西を目指しています。

ネズミ妖怪の罠にかかり樹里は連れ去られました。

左京は焦ります。

「亜梨沙、連中の臭いを辿ってくれ。お師匠様を助ける」

亜梨沙は巨乳美女に戻り、

「任せて」

蘭が馬の馨を見て、

「いつまで人参食ってるんだ、役立たず！」

「ひ！」

馨は片思いの相手にそう言われ、落ち込みました。

樹里は洞窟で双子の妖怪の前にいます。

「貴方が噂のお坊様ね。貴方を食べると、お肌がプルンプルンになるのよね」

双子の眼鏡をかけた方が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。眼鏡をかけていない方が、

「アタシ達は金ちゃん銀ちゃんと言う有名な妖怪よ。少しはビビりなさいよ！」

と怒りました。すると樹里は、

「小夏さんはお元気ですか？」

「アタシは銀四郎じゃないわよ！」

と銀ちゃんが切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔のままです。

「イラつくわ、この坊主ゥ」

銀ちゃんが言いました。

第二十五話　洞窟突入編

御徒町樹里は仏様の国を目指す旅の僧です。

樹里は妖怪の策略で囚われてしまいました。

石猿の孫左京は豚の妖怪亜梨沙の鼻を頼りに洞窟を見つけました。

「この中にいる。間違いないわ」

亜梨沙が胸を張って言います。

「本当かしら？」

河童の蘭が負けずに胸を突き出して言います。

「何よ、無駄に巨乳ガッパ！」

「何ですって、豚に真珠！」

いがみ合う亜梨沙と蘭を置き、左京は洞窟に入ります。

「待ってよ、左京」

亜梨沙が追いかけます。

「グズグズしない！」

蘭が龍だけど馬の馨の尻を叩きます。

「はい」

叩かれて喜ぶ馨。変態です。

樹里はまだ妖怪と話していました。

「ムカつく坊主だわ！」

銀ちゃんが言います。金ちゃんが、

「私が頭を頂くから」

「なら、あそこは私が頂くわよ」

話がエロくなりそうです。

「何よ、弟の分際で！」

金ちゃんが切れます。

「酷い！　私は妹よ！」

銀ちゃんも切れます。

どうやら二人はオ〇マのようです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第二十六話　洞窟進撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために旅をしています。

途中で金ちゃん銀ちゃんと言うオ〇マの妖怪に拉致され、樹里は洞窟に連れて行かれました。

樹里の可愛さにやられてしまった石猿の孫左京、豚の妖怪の亜梨沙、そして河童の蘭が樹里を助けるために洞窟に入りました。

おまけで本当は龍だけど馬の馨もいます。

「お師匠様！」

左京は大声で叫びながら進みます。

「おらあ！」

次々にネズミ妖怪が現れます。

「どけ！」

左京は如意棒を振り回して蹴散らします。

「何だか凄い勢いね」

蘭が呟きます。亜梨沙はムッとして、

「左京はお師匠様にゾッコンなのよ」

「ヤキモチ妬いてるんだ？」

蘭が嬉しそうに亜梨沙を見ます。亜梨沙はキッとして、

「うるさいわね！　無駄に巨乳は黙ってなさいよ！」

「何ですって！？」

また罵り合いが始まります。

左京は樹里の事を心配していました。

（お師匠様は可愛過ぎるから、変態妖怪に妙な事をされて……）

妄想で鼻血を出す左京でした。

第二十七話　双子妖怪の怒り編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために旅をしている僧です。

樹里は金ちゃん銀ちゃんという双子の妖怪に拉致されました。

樹里の弟子の孫左京と亜梨沙と蘭が樹里救出のために洞窟へ乗り込みました。

双子妖怪は樹里の身体のどこを食べるかで揉めています。

「あんたは腕と脚でも食べなさい、銀！」

兄（？）の金ちゃんが言います。すると弟（？）の銀ちゃんは、

「納得が行かないわ！」

二人は喧嘩を始めました。

「何なのよ、あんたは！」

「それはこっちの台詞よ！」

壮絶な喧嘩です。血を見そうです。

「幽体離脱を見せて下さい」

樹里が笑顔で言います。

「誰がたっちだ!?」

双子らしい息のあった突っ込みです。

「服を剥いてあげるわ、坊主!」

金ちゃんが樹里の帽子を青龍刀で弾き飛ばします。

樹里の長い髪が広がります。

「女?」

双子の顔色が変わります。

「私達はこの世で可愛い女が一番嫌いなのよ!」

醜い二人が叫びました。

「お師匠様」

そこへ左京が現れました。

第二十八話　左京対双子妖怪編

御徒町樹里は仏様の国にありがたい教典を授かりに行くために西を目指しています。

樹里は双子の妖怪に拉致され、今まさにその命は風前の灯火です。

「可愛い女！　この世からいなくなって欲しい存在よ！」

金ちゃんが叫びます。銀ちゃんが頷きます。

「てめえら、お師匠様を虐めたのか？」

左京は如意棒を振り上げて言います。

「うるさいわね、猿！　あんたもその女も一緒に切り刻んであげるわ！」

銀ちゃんが叫ぶとゾロゾロとネズミの妖怪が出て来ました。

「やっておしまい！」

金ちゃんが命じます。ネズミ達は一斉に左京と樹里に襲いかかりました。

「危ない！」

左京は樹里を庇います。

「左京！」

豚の妖怪亜梨沙と河童の蘭が来ました。馬の馨も一緒です。

「雑魚は頼む。俺はあの気色悪い二匹をぶっ倒す」

左京は双子の妖怪を睨みます。

「ムカつく猿ね！」

金ちゃんが切れます。

「うおお！」

敵味方入り乱れての戦いです。

「そうなんですか」

相変わらずマイペースの樹里です。

第二十九話　双子妖怪の反撃編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指して旅をしています。

双子の妖怪に拉致された樹里を助けるべく、左京達が洞窟に乗り込みました。

「俺のお師匠様を虐めた罪はきっちり償ってもらうぜ！」

左京が襲いかかる雑魚ネズミを次々に打ち倒しながら、双子に迫ります。

「何よ！？　あんたから切り刻んであげるわ！」

双子は青龍刀を構え、左京に斬りかかります。

「うりゃ！」

左京は二人の刀を如意棒で弾いて戦います。

「私達はあんたよりずっと強いのよ！　死になさい！」

双子は青龍刀をもう一振りずつ持ち、四刀で攻撃して来ます。

「うわわ！」

左京も捌き切れなくなり、服を斬られたり顔を斬られたりしました。

「うう」

左京は挫けそうです。

「お猿さん！」

樹里が祈るような目で左京を見ています。

「お師匠様！」

左京は樹里の「女の子パワー」を勝手にもらいました。

「俺は負けねえ！」

如意棒が扇風機のような速さで回転し、双子の青龍刀を弾き飛ばしました。

第三十話　双子妖怪の正体編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西へと旅をしています。

拉致された樹里を救出するために左京と亜梨沙と蘭が戦います。

馬は見ているだけです。

「雑魚は片付いたわ！　後はそのおっさん二人よ」

亜梨沙が言います。すると銀ちゃんが、

「誰がおっさんよ、豚女！」

「何ですって！？」

亜梨沙が切れます。

「止めだっ！」

左京が如意棒を振り上げます。すると樹里が、

「武器を失った相手を叩くのはダメです」

と進み出ました。

「お師匠様がまともな事言ったわ」

亜梨沙は蘭と顔を見合わせます。

双子の妖怪は大ネズミでした。

「ですが、この二匹はこのままだとまた悪さをします」

左京は収まりません。すると樹里がウルウルとした瞳で左京を見ます。

「わかりましたよ」

左京は顔を赤らめて如意棒をしまいます。

「ありがとうございます」

双子のネズミは頭を下げました。そして、

「クライマックスシリーズ、頑張って下さい」

「その孫さんじゃねえ！」

左京は切れました。

第三十一話　火焔山編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

ネズミの妖怪を更生させた樹里一行はまた旅を始めます。

「この先には火焔山（かえんざん）と言う一年中溶岩を噴き出している山があります。そこは難所ですから気をつけて下さい」

金ちゃんが言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で答えました。

「何故そんな事を教えるんだ？」

石猿の孫左京が尋ねます。

「私達は間違っていたのよ。可愛い女の子を憎んでも私達は救われないの」

銀ちゃんが答えます。

「そうか」

左京は微笑んで応じました。

樹里達は双子妖怪と別れ、西を目指しました。

火焔山の麓です。

鉄扇公主（てつせんこうしゅ）は風の化身で芭蕉洞という洞窟に棲んでいます。

そして「芭蕉扇（ばしょうせん）」と呼ばれる巨大な扇を持っています。

「旅の僧がここに向かっている？」

手下の報告に公主は目を見開きました。

「確か孫左京が同行しているはず」

公主はギュッと拳を握りしめました。

第三十二話　鉄扇公主編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために旅をしています。

樹里達が山岳地帯に入ると辺りが異常に暑くなって来ました。

石猿の左京は暑いのには強いのですが、他の者達が倒れそうです。

「もうダメ、この暑さ……」

河童の蘭は目が虚ろです。

「私もダメ……」

豚の妖怪亜梨沙もフラフラです。

馬の馨もヒーヒー言っています。

「お師匠様は暑くないんですか？」

左京は樹里を見上げました。

「全然暑くないです」

樹里は笑顔です。

「流石お師匠様だ。俺達とは違う」

「そうなんですか」

左京は、

「暑さの原因はあれだな」

と天空を見上げました。

溶岩を噴き出す火焔山が周囲を灼熱地獄にしているのです。

「鉄扇公主が持っている扇であの山を鎮められるらしい」

左京が言うと亜梨沙が、

「だったら早くそれを借りて来てよ、左京」

「でも、相手は牛魔王の女房なんだぜ」

「牛魔王？」

亜梨沙と蘭が驚愕します。

「その牛魔王が頭が上がらないんだからな」

左京は溜息を吐きました。

第三十三話　芭蕉洞へ編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

火焔山のせいで一行は暑くて参っています。

火焔山を鎮めるには鉄扇公主の扇で扇げば良いのですが彼女は牛魔王の妻です。

牛魔王は泣く子はもっと泣き、寝た子も起きると言う妖怪です。

「左京って牛魔王とは友達じゃなかった？」

豚の妖怪亜梨沙が昔の事を思い出します。石猿の孫左京は、

「二人は喧嘩中なんだ。牛魔王の友達の俺が行っても貸してもらえないよ」

「役立たず」

河童の蘭が罵ります。

「うるせえ！」

左京は苛つきました。

「私が二人の仲を修復しましょう」

樹里が言いました。

「お師匠様がまともな事を言ったわ、左京！」

亜梨沙が仰天します。

「鉄扇公主の邸に連れて行って下さい」

樹里が言います。すると左京は、

「わかりました、お師匠様」

と言うなり、何故か馬に変身します。

「何で馬になるのよ？」

訝しそうな顔で亜梨沙と蘭が左京を見ます。

「別にィ」

下心丸出しの左京はトボケました。

第三十四話　樹里、鉄扇公主と会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

火焔山の溶岩を止めるために樹里と石猿の孫左京は鉄扇公主のいる芭蕉洞に向かっています。

左京は天にも昇る気持ちです。

彼は馬に変身し、樹里を乗せています。

（お師匠様の太腿が……）

もはや変態話なので割愛します。

ほどなく芭蕉洞の入口が見えて来ました。

「何者ぞ！？」

忍者のような姿の女達が刀を抜いて樹里に迫ります。

「お師匠様、降りて下さい。俺が片づけます」

左京が言いますが、樹里は、

「私達は争うために来たのではありません」

「おお！」

樹里のまともな言葉が最近増えている事に左京は感動します。

「私は旅の僧です。鉄扇公主殿はおられますか？」

女達は顔を見合わせます。

「私が鉄扇公主だ。何の用だ？」

鉄扇公主が登場です。

「お猿さんはそのままで」

樹里に耳元で囁かれた左京は恍惚とします。

「私は御徒町樹里です。お願いがあって参りました」

樹里は左京から降りて言いました。

第三十五話　見捨てられた孫左京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と弟子の孫左京は風の化身である鉄扇公主に会いに来ていました。

「どんな願いだ？」

公主は美人ですが、高圧的です。

（変わってねえな）

左京は思いました。

「芭蕉扇を貸して下さい。火焔山を鎮めるために」

樹里が答えます。公主は笑って、

「いいよ」

あっさり承諾する公主を疑う左京です。

（妙だな）

「その代わり条件がある」

「何でしょうか？」

樹里が笑顔で尋ねます。

「その馬を私によこしな。そうすれば芭蕉扇を貸そう」

左京はギョッとします。

（見破られたか？）

公主はニヤリとして左京を見ました。

「いいですよ」

樹里もあっさり応じました。

（お師匠様あ）

左京は心の中で泣きます。

樹里は公主から芭蕉扇を受け取り、帰って行きました。

左京はそれを唖然として見送ります。

公主が左京を見ます。

「わかってたのか」

左京は術を解きました。

「当たり前だ。私を舐めるな」

二人は睨み合いました。

第三十六話　孫左京対鉄扇公主編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は芭蕉扇を借りるために孫左京が化けた馬を鉄扇公主に渡してしまいました。

左京は術を解き、公主と戦う決意を固めます。

（芭蕉扇を持っていないのなら、こいつは俺の敵じゃない）

「行くぞ、公主！」

左京は如意棒を振るいます。

「バカな奴らだ。あの坊主に渡したのは偽物だよ。本物はこれさ！」

公主は胸の谷間から小さな扇を取り出し、それに息を吹きかけて大きくしました。

「何だと！？」

左京は焦ります。

（芭蕉扇があるという事は？）

「お前の負けだ、石猿！」

公主が芭蕉扇を一振りすると、左京は飛ばされてしまいました。

「うわあ！」

左京は遥か彼方まで飛ばされ、歩いている樹里の前に落ちました。

「どうしたんですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。本当は文句を言いたい左京ですが、

「只今帰りました」

とだけ言い、また馬に変身します。

「今度は牛魔王の所に行きましょう」

樹里が言いました。

第三十七話　嫉妬深い牛魔王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鉄扇公主の夫である牛魔王は孫左京が公主の所に現れたのを知りました。

「猿め、何のつもりだ？」

自分には愛人がいるのに公主に男が近づくと嫉妬する牛魔王です。

「旅の僧がこちらに来ます」

手下が報告しました。牛魔王は、

「猿め、公主と結婚するために俺を殺す気だな」

牛魔王は只の嫉妬バカのようです。

そうとは知らない左京は牛魔王の邸を目指しています。

（ずっとこのままでいられたら……）

左京の妄想が暴走しています。

「そこまでだ、猿！　ぶち殺す！」

牛魔王が現れました。

「お名残惜しいですが降りて下さい」

「そうなんですか」

左京は術を解き、

「牛魔王！　どういうつもりだ！？」

「こういうつもりだ！」

牛魔王は巨大な鉈を振り回しました。

「危ない」

左京が樹里を庇った時に樹里の帽子が取れました。

「女？」

牛魔王は驚き、

「愛人になって下さい」

と樹里に言いました。唖然とする左京です。

第三十八話　牛魔王味方になる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王は樹里の可愛さにやられた第二号として降参しました。

左京は事情を説明し、協力を求めます。

「無理だ。あいつに言う事を聞かせるのは不可能だ」

鉄扇公主の事になると、途端に弱気な牛魔王です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で言います。すると牛魔王は、

「貴女のために公主を説得します」

と跪きました。

「エロ魔王だな」

「うるさい、お前にだけは言われたくない！」

醜い罵り合いです。

そして樹里と左京は牛魔王とその手下数千を従え、芭蕉洞に向か

います。

「牛魔王様が攻めて来ます！」

公主の手下が慌てふためいて報告しました。

「そのような事があるものか！　あの腰抜けにそんな勇気があるはずがない」

「あの旅の僧が女で、牛魔王様はその色香に迷ったようです」

「何！？」

公主は餅つきを始めそうなほど激怒しました。

「左京め、許さぬ！」

公主は芭蕉扇を取り出すと外へと飛び出しました。

第三十九話　鉄扇公主の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と石猿の孫左京は、牛魔王と共に鉄扇公主のいる芭蕉洞に行きました。

「何しに来た、このバカ亭主!?」

公主は芭蕉扇を振りかざして凄みます。

「わああ、ごめんなさいィッ!」

牛魔王は借りて来た猫より大人しく引き下がります。

「あんた!」

公主が樹里を睨みます。

「よくもうちの宿六を誑かしてくれたね?」

公主が芭蕉扇で扇ぎます。

「うわああ!」

左京達は全員その風に飛ばされてしまいました。

「え?」

公主は呆然とします。樹里は飛ばされていません。

「どうして吹き飛ばないんだ?」

公主が激怒して言いました。樹里は笑顔全開で、

「芭蕉扇は私が持っているからですよ」

「はあ?」

意味がわからず唖然とする公主です。

「それは偽物だよ。何を言っているんだ」

公主が鼻で笑うと、

「そうなんですか」

樹里がブンとその偽物で扇ぐと、

「ひえええ!」

と公主が洞窟の奥まで飛ばされてしまいました。

第四十話　樹里の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鉄扇公主の所に行きましたが、左京達は芭蕉扇で飛ばされ、樹里だけが残りました。

その樹里が偽物の芭蕉扇で扇ぐと何故か公主が吹き飛んでしまいました。

「何なんだ、あんたは？」

ボロボロになった公主が外に出て来ました。

「私は旅の僧です」

「そんな事を訊いてるんじゃないよ！　どうして……」

するとそこに観音様が現れました。

「おお」

さすがの公主も土下座します。

「まだわからぬのか、公主よ。この者には我らの加護があるのだ。お前の扇などおもちゃと同じよ」

「はい」

公主は震えています。観音様は微笑んで、

「牛魔王とよりを戻すのだ、公主。そしてまた仲睦まじく暮らせ」

「はは」

公主は地面に額を擦りつけて言いました。

観音様は樹里を見ます。

「お前の働き、皆が見ておる」

「はい」

樹里は笑顔全開で、

「どちらさまですか？」

「忘れたんかい！」

観音様は怒って消えてしまいました。

第四十一話　樹里、芭蕉扇を託される編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

風の化身である鉄扇公主と図らずも対決して勝利した樹里は本物の芭蕉扇を公主から託されました。

「貴女の事をよく知らずに大変な無礼を働き申し訳ありませんでした」

公主は手下を勢揃いさせて樹里に詫びました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「旅のご無事を祈っています」

「ありがとうございます」

樹里は公主達に見送られ、芭蕉洞を去りました。

しばらく進むと、怒り心頭の孫左京と牛魔王がやって来ました。

「あれ、どうしたんですか？」

左京は二つの芭蕉扇を持っている樹里を見て驚きました。

「芭蕉扇をお借りできましたよ」

樹里が笑顔で言います。すると牛魔王が、

「また偽物かも知れません。試した方がいいですよ」

「そうなんですか」

樹里がブンと右手の芭蕉扇を振るうと、

「うへえ！」

左京達は遥か彼方に飛んでしまいました。

「良かった、本物です」

樹里は笑顔全開で言いました。

第四十二話　火焔山鎮火編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鉄扇公主から芭蕉扇を託された樹里は弟子の亜梨沙と蘭が待つ火焔山の麓に戻りました。

ヘロヘロな亜梨沙と蘭が笑顔になります。

「芭蕉扇を借りて来ました」

樹里が笑顔全開で言います。

「左京はどこですか？」

亜梨沙が尋ねます。

「わかりません」

それも笑顔で答える樹里にゾッとする亜梨沙と蘭です。

「山を鎮めますね」

樹里がブンと左手に持った芭蕉扇で扇ぐと噴火が収まりました。

「おお！」

周囲の温度が下がり過ごし易くなりました。

「私も一つ欲しいわ」

亜梨沙が言います。

「こっちは偽物ですから本物だけ返せばいいでしょう」

樹里が言います。蘭が、

「こちらの方が本物のように見えますけど」

と樹里の右手の芭蕉扇を指差します。

「そうなんですか」

「さっき噴火を止めたのはこっちよ。こっちが本物でしょ？」

亜梨沙が口を挟みます。

「うーん」

結局どちらが本物かわからなくなってしまいました。

第四十三話　本物はどっち？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鉄扇公主から借りた芭蕉扇の本物がどちらなのかわからなくなった樹里は、結局二つとも返す事にして本当は龍なのに馬の馨に乗り、芭蕉洞を目指します。

今度は亜梨沙と蘭も一緒です。鉄扇公主は敵ではないからです。

するとそこへポロポロになった孫左京が牛魔王と現れました。

「芭蕉扇の本物がわからない？」

左京は事情を聞いて呆れます。牛魔王が、

「金の刺繍があるからこちらが本物です」

亜梨沙が、

「おかしいなあ。火焔山の噴火を止めたのはこの芭蕉扇だったよ」

「そんなはずはない。試して下さい」

牛魔王は樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里がもう一つの芭蕉扇で牛魔王を扇ぐと、

「ほらねーっ！」

と言いながら飛んで行ってしまいました。

牛魔王はそのまま芭蕉洞まで飛ばされてしまいました。

「貴方」

公主が潤んだ瞳で言います。牛魔王は芭蕉扇を差し出し、

「やり直そう」

と言いました。

第四十四話　再び西へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王が本物だと言った芭蕉扇を持ったまま飛んで行ってしまったので、孫左京は仰天しました。

「こっちが本物なのか？」

左京は樹里から芭蕉扇を借りて、

「おりゃっ！」

と振るいますが何も起こりません。すると蘭が、

「なるほどね」

「何かわかったのか？」

左京が蘭を見ます。すると蘭は巨乳を突き出して、

「それが偽物なのよ。但し、お師匠様に取ってそんな事は関係ないの」

「どういう事よ？」

亜梨沙が尋ねます。蘭は益々得意そうに、

「お師匠様はどんな扇でも芭蕉扇と同じ力を発揮できるという事よ」

そこまで言って、蘭は大変な事に気づきます。

「って事は今までの俺の苦労は何だったんだ？」

左京が涙ぐみます。

「お猿さん」

樹里が声をかけます。

「はい、お師匠様」

「ありがとう」

左京は樹里に笑顔でそう言われ嬉しそうです。

「スケベ」

亜梨沙が囁きます。

「うるせえ」

また西へと旅が始まります。

第四十五話　謎の美男子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鎮まった火焔山を越え、次なる国に入りました。

そこには、今まで出会った人達とは全く違う容貌の人達が歩いています。

「わあお」

豚の妖怪の亜梨沙が叫びます。河童の蘭も思わずお粧ししてしまいます。

「何、この町？　いい男だらけじゃん」

亜梨沙は涎を垂らしながら周囲を見渡します。

「そうなんですか」

樹里は相変わらず笑顔全開です。

「お師匠様ってどんな男の人が好みなんですか？」

亜梨沙が尋ねます。石猿の孫左京がドキッとします。

「優しい人です」

樹里が答えました。

「お師匠様、そつがなさ過ぎです」

亜梨沙はつまらなそうです。左京はホッとしています。

「蘭はどんな男の人が好み？」

馬の馨がギクッとします。蘭は、

「私は野性的な男が好き。強引に迫るのも好みね」

馬の馨は呼吸困難に陥っています。

「お嬢さん方、お茶しない？」

不意に現れた美男子が亜梨沙と蘭に声をかけました。

第四十六話　亜梨沙と蘭、ナンパされる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達はある国に入りました。

そこは「男前天国」です。

「こんな国すぐに出ましょう。面白くないです」

馬の馨が囁きます。左京が、

「そうでもないぞ、見ろ」

金髪美人が歩いています。

「おお！」

馨は雄叫びを上げました。

亜梨沙と蘭は美男子と歓談中です。

「僕はリック」

リックはウィンクしました。亜梨沙と蘭はメロメロです。

「私は亜梨沙」

「私は蘭」

二人は争うようにしてリックに自己紹介します。

「あのお坊さんは？」

リックが樹里を見ます。亜梨沙は慌てて、

「あの方は私達のお師匠様。美形だけど男なの」

リックは、

「そうなんだ」

と笑顔です。亜梨沙と蘭はその笑顔にまたニヤけます。

「お師匠様、お茶して来ます」

亜梨沙と蘭はリックと行ってしまいます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。

「お師匠様、俺達もお茶して来ます」

左京と馨も行ってしまいます。

樹里は一人になってしまいました。

第四十七話　樹里、またさらわれる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

豚の妖怪亜梨沙と河童の蘭は男前のリックにナンパされました。

石猿の孫左京と馬の馨は金髪美女をナンパしました。

こうして樹里は一人になりました。

「お坊様、私の子供を助けて下さい」

一人の女性が樹里に近づきます。

「そうなんですか」

女性は、

「こちらです」

と樹里を誘導します。

樹里は女性について行ってしまいました。

「くそ」

左京達は金髪美人にすぐに振られました。

「私、猿と付き合うつもりはないのって、だったら最初から言え！」

左京は激怒しています。馬の馨が、

「左京さん、お師匠様がいません」

「何？」

左京はハッとしました。

「さっきの女、妖怪か？」

左京と馨は辺りを探しましたが、樹里はいません。

「どこに行ったんだ、お師匠様」

左京は自分が情けなくなりました。

（お師匠様一筋を誓ったのに！）

「亜梨沙と蘭までいない。仕方のねえ女共だ」

自分の事はすでに棚の上の左京です。

第四十八話　亜梨沙と蘭、騙される編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は左京達が離れた隙を突かれて連れ去られました。

左京と馬の馨が探しましたが、樹里はどこにもいません。

亜梨沙と蘭はリックと茶店で寛いでいました。

「あのお坊様はそんなに凄い方なんだ」

リックは亜梨沙の話に頷きます。

「私達はお師匠様をお守りするために同行しているの」

ベラベラ喋る亜梨沙に蘭はうんざりしています。

「君達も強いの？」

リックが尋ねます。亜梨沙は照れて、

「私達は女だから強くないわ」

と蘭を見ます。蘭は、

「ええ」

とだけ返します。

「本当は強いんでしょ？」

リックが言います。

「そんな事ないって」

亜梨沙が言った時、

「だったらここで死ぬにゃん！」

急にリックの口調が変わります。

「亜梨沙！」

蘭が亜梨沙を抱えてリックから離れます。

「逃げても無駄にゃん。この町の住人は皆僕の手下だにゃん」

リックの尻から尻尾が二本伸びています。

「猫又？」

蘭は仰天しました。

第四十九話　猫がいっぱい編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の弟子である石猿の孫左京と豚の妖怪の亜梨沙と河童の蘭は猫又という妖怪の策略で樹里と離れてしまいました。

「お前ら、本当にアホにゃん」

猫又は二本の尻尾を振りながら言います。

「ムカつく猫ね！」

亜梨沙と蘭は猫又を睨みつけます。

「お前達の相手は僕の可愛い部下がするにゃんよ」

ゾロゾロと現れる子猫軍団。猫好きの方には堪らない光景です。

「私猫アレルギーなの。任せた！」

自分だけ逃げようとする亜梨沙を蘭が捕まえます。

「よく見てみなさいよ。こんなチビ共、私達の敵じゃないわ」

「そうかなあ。じゃあねん」

猫又は茶店を出て行きました。

「おねいさーん！」

子猫軍団がエロい目で襲い掛かります。

「いやああ！」

「こらあ、どこに潜り込んで……」

蘭の絶叫が聞こえます。

ここから先は限界です。皆様のご想像にお任せします。

「もうダメ……」

二人は子猫のエロ攻撃でダウンしました。

第五十話　こっちも猫がいっぱい編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は連れ去られ亜梨沙と蘭は子猫軍団にやられてしまいました。

孫左京と馬の馨も町の人達が全員猫又になり取り囲まれました。

「お師匠様を探さなくちゃならないのに」

左京は如意棒を取り出し振り回します。

しかし相手は猫なのでそれをあっさりかわします。

「すばしこい連中だ」

「左京さん、芭蕉扇を使いましょう」

馨が言います。すると左京は、

「あれはお師匠さまでないとダメなんだよ」

「そうでした」

猫又軍団が舌なめずりして囲みを狭めます。

「ここは頼んだ！」

左京はきんと雲を呼び自分だけ乗って行ってしまいます。

「薄情者！」

馨の絶叫が虚しく響きます。

樹里は大きな邸の地下牢に入れられていました。

猫又のリックが現れます。

「お前、高名な坊主らしいね。僕が食べてあげるよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「プロットは大丈夫ですか？」

「え？」

何故かギクッとする猫又です。

第五十一話　孫左京の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は猫又に捕まっています。

「む？」

リックは樹里が芭蕉扇を背負っているのに気づきます。

「こいつはいいにゃん」

リックは芭蕉扇を樹里から取り上げ、

「これで鬼に金棒にゃん」

「猫に小判ですね」

樹里は笑顔全開です。リックは、

「猫をバカにするにゃ！」

と樹里を扇ぎました。何も起こりません。

「偽物にゃん！　ふざけるなにゃん！」

リックは樹里に芭蕉扇を投げつけます。そして、

「怒ったら暑いにゃん。それで扇ぐにゃん」

「はい」

樹里がブンと扇ぐとリックは地下牢の端まで飛ばされ壁にめり込みました。

「どういう事だにゃん？」

意味がわからないようです。

左京が亜梨沙達のいる所に現れました。

亜梨沙と蘭はまだ子猫の攻撃を受けています。

「これでも食らえ」

左京が何かをばら撒くと、子猫達が正体を現します。

子猫は実はエロジジイ猫でした。

「変態共め」

左京は猫又を如意棒で一掃しました。

第五十二話　猫まっしぐら編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は偶然にも猫又を倒しました。

「反則にゃん！」

リックは壁から抜け出し喚いています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

左京は全裸の亜梨沙と蘭にムシロをかけました。

「あ！」

亜梨沙と蘭が気がつきます。

「あんたねえ！」

状況を把握していない亜梨沙が立ち上がってしまいます。

「亜梨沙、服を出して着ろ」

「え？」

亜梨沙は自分が全裸だと気づきました。

「左京のエッチ」

「違うよ！」

蘭はムシロを身体に巻きつけ、

「助けてくれてありがとう」

「素直になったな」

蘭は、

「私は元々素直だよ」

二人は妖術で服を出して着ました。

「このジジイ猫達は？」

亜梨沙が倒れている猫を見ます。

「猫又は年老いた猫がなるものだ。子猫がいる訳ない」

「それにしても呆気なかったわね」

蘭が言います。

「またたびを撒いたのさ。猫まっしぐらだからな」

「なるほどね」

すっかり忘れられている馬の磐でした。

第五十三話　やっぱり猫は好き編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙と蘭を助けた左京は、ようやく馬の馨の事を思い出して助けました。

「信じられません」

馨は激怒しました。彼は失禁して気を失っていたのです。

それを片思いの相手である蘭に知られ、死にたい程です。

「まあまあ。ほれ」

左京は蘭達に見られないように馨に袋を渡します。

「何です？」

「蘭の使用済みの胸当て」

それを聞いて馨は鼻血を吹きました。

「後はお師匠様ね」

亜梨沙が言います。

「お師匠様の事だから猫又をやっつけてたりして」

「まさか」

左京達は亜梨沙の嗅覚を頼りに樹里を探しました。

リックは手下が全員左京が持って来たまたたびでやられたのを知り、焦ります。

リックは牢の中に入って来ました。

「奴らが来る前にお前を食べるにゃん」

リックは樹里を捕まえようとします。

「きゃっ！」

樹里の帽子が取れました。

「女の子？」

リックは唖然とし、

「弟子にして下さい」

一件落着しました。

第五十四話　リック弟子になる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は禁断の「女の子」パワーでリックを倒し弟子にしました。

地下牢に辿り着いた兄弟子の左京と姉弟子の亜梨沙と蘭は口あんぐりです。

「兄（あに）さん、姉（あね）さん、宜しくお願いするにゃん」

リックは妖力を失い只の猫に戻っていました。

「猫又は人間の女の子に恋をすると力を失うんだにゃん」

リックは照れ臭そうに言います。

「アホか」

左京は呆れました。

（ライバル出現か。決着をつけないとな）

左京はリックを見て思いました。

「さすがお師匠様ね」

亜梨沙は称賛しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。馬の馨はリックを警戒しています。

(蘭さんは素敵だから気をつけないと)

馨はまたたびを隠し持つ事にしました。

「お近づきの印に肩を揉みますにゃん」

リックは亜梨沙に飛びつき肩を揉むフリをして違う所を揉みます。

「このスケベ猫!」

亜梨沙はリックを地面に叩きつけました。

第五十五話　孫左京破門される？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

新に加わった弟子リックを伴い、樹里達は西に向かいます。

「お坊様！」

あからさまに怪しい雰囲気の男の子が駆け寄って来ます。

孫左京は即座にそいつが妖怪だと気づき、

「おらあ！」

と如意棒で打ち倒してしまいます。

「ひ、酷い」

その妖怪は血糊を使って怪我のフリをし、

「お坊様、お助け下さい」

と言いましたが、樹里は馬の馨の上で熟睡していました。

「見てなかったんかーい！」

どこかで聞いた事があるような言い回しで、妖怪は姿を消しました。

「何、今の？」

豚の妖怪の亜梨沙が言います。蘭が、

「聞いた事ある。白骨精よ。人間の姿に化けて哀れを誘って騙すのよ」

左京は舌打ちして、

「今度現れたら止めを刺してやる」

亜梨沙が、

「あのエロ猫は？」

リックの姿がありません。

「あ！」

リックは樹里の背中に乗っています。

「お師匠様、起きるにゃん」

「てめえ！」

左京がリックを叩き落としました。

第五十六話　孫左京遂に破門される？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

妙な妖怪が現れたので、弟子の孫左京達は警戒します。

でも新弟子のリックだけは隙があると亜梨沙の胸を揉んだり、樹里の背中に飛び乗ったりしています。

「あの猫何とかしてよ」

亜梨沙が囁きます。

「ああ」

左京も怒っています。

（亜梨沙はともかくお師匠様にまで！　エロ猫め）

白骨精が若い女性に化けて現れました。

「私の息子は貴女に殺されました！」

妖怪は左京を指差します。

「うるせえ、妖怪！」

左京は如意棒で打ち倒します。

「お坊様、この猿を破門して下さい」

妖怪が樹里を見ると亜梨沙達と食事中です。

「聞いてなかったんかーい！」

妖怪はまた妙な身振りで言い、逃げました。

「また逃げられた」

左京は舌打ちしました。

「多分もう一回来るわよ」

蘭が言います。

「そうかにゃん」

リックが蘭の腰蓑を捲ります。

馬の馨がそれを見て鼻血を出しました。

「このエロ猫！」

蘭の踵落としが炸裂しました。

第五十七話　孫左京とうとう破門される？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

白骨精と言う妖怪に翻弄される孫左京。

やりたい放題の猫リック。

樹里一行は問題を抱えていました。

性懲りもなく白骨精が現れます。今度は老婆の姿です。

「お前は私の孫と娘を殺した！」

妖怪は杖を振り上げて左京に向かいます。

左京は一計を案じ反撃しません。

妖怪は杖で左京を叩きますが杖が折れてしまいます。

「ええい！」

今度は道の石を投げつけますが、石猿の左京は痛くも痒くもありません。

「悔しい！」

妖怪は大きな岩を持ち上げ左京に投げつけます。

左京は素早くかわします。

「にゃん！」

亜梨沙のお尻を触っていたリックが下敷きになりました。

「いい気味だわ、エロ猫！」

亜梨沙が言います。

「気がすんだか？」

左京は妖怪を見ます。

残酷なシーンなので割愛します。

妖怪はボコボコにされました。

「お猿さん、破門です」

左京がビックリして見ると、

「破門です」

と樹里は寝言を言っていました。

第五十八話　烏鶏国入国編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は次の国に入りました。

その名は烏鶏国（うけいこく）です。

「高級な卵を産む鳥ですね」

樹里が言います。

「それは烏骨鶏です、お師匠様」

孫左京は樹里の微妙なボケに突っ込みます。

「国王が優れた方で民は豊かな暮らしをしていると聞きました」

河童の蘭が言います。

「じゃあ宿も高級ね？」

豚の妖怪の亜梨沙が言います。

「僕はお師匠様と寝るにゃん」

猫のリックがボケます。しかし誰も相手にしません。

「でも様子が変ですよ」

実は龍なのに馬の馨が辺りを見て言いました。

豊かな割には貧しい姿の人達が路上に座り込んでいます。

「臭うな」

左京が言うと、蘭が、

「妖怪がいるわね」

「しかも王室にな」

左京は遥か彼方に見える宮殿を見上げます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「貴様ら動くな！」

いきなり王国軍が取り囲みます。

「何だ、一体？」

左京は樹里を庇いながら兵を睨みました。

第五十九話　妖怪が国王？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は烏鶏国に入りました。すると突然兵が現れ、囲まれました。

「何だ、てめえら？　この方を御徒町樹里様と知った上での狼藉か？」

孫左京が凄みますが、

「そんな奴知らぬ。取り押さえよ！」

左京が抵抗しようとすると、

「ダメです、お猿さん」

樹里が耳元で囁いたので左京はフニャッとしてしまいました。

樹里達は宮殿に連行されました。

そして国王の前に引き出されます。

「お前か、御徒町樹里と申す者は？」

国王が尋ねます。

「はい」

樹里は笑顔全開です。

「こいつ」

左京は一目で国王が妖怪なのを見抜きます。

亜梨沙達に目配せします。

「国を騒がせた罪でお前達を明日の朝処刑する。引っ立てろ」

国王が命じました。

樹里達は地下牢に入れられました。

「国王は妖怪です」

左京が言うと、樹里が、

「来年こそは日本シリーズに出ましょう」

「その孫さんじゃないです！」

突然のボケに脱力する左京でした。

第六十話　孫左京変身編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は烏鶏国の地下牢に入れられました。

明日の朝処刑されてしまうのです。

「僕はまだ死にたくないにゃん」

猫のリックが泣き叫びます。

「私だって嫌よ」

豚の妖怪の亜梨沙も泣き出します。

「心配するな」

石猿の孫左京が言いました。

彼は蠅になります。

「鍵を奪って来る」

左京は飛んで行き、牢の番人を元の姿に戻って倒し鍵を奪って戻ります。

「誰にでも変身できるの？」

亜梨沙が興奮気味に尋ねます。

「もちろんさ」

左京は亜梨沙に変身しました。

「おお！」

「お師匠様は？」

左京は変身しません。

「何だ、ダメじゃん」

亜梨沙が言うと、

「できるよ」

と変身すると何故か亜梨沙と同じ衣装の樹里です。

「自分の願望じゃん」

亜梨沙と蘭が大笑いします。

「申し訳ありません」

左京は土下座して詫びます。

「良かったですよ」

樹里は言いました。

「ありがとうございます」

左京は樹里の優しさに感激しました。

第六十一話　馨復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

石猿の孫左京の活躍で地下牢を脱出した樹里達は只一人別の場所に監禁されている実は龍だけど馬の馨を探しに行きます。

「今まで一緒じゃなかった事に気づかなかった」

蘭が言いました。すると左京は、

「そんな事あいつの前で言うなよ」

「どうしてさ?」

「どうしてもだ!」

左京が強い口調で言うと蘭はムッとします。

左京は先発し次々に兵を倒します。

やがて地下道から外に出られました。

兵に取り囲まれて馨が檻に入れられています。

「何て事を!」

左京は歯軋りします。

「こいつの命が惜しければ大人しくしろ」

歩兵隊長が馨に槍を突きつけて言いました。

「問題です」

突然樹里が言います。

「子丑寅卯。次は何でしょうか？」

馨はハッとします。

「辰です！」

馨は変化し龍に戻りました。

「うわあ！」

兵達は驚愕します。馨は檻を破り樹里の元に来ました。

「戻れましたね、馨さん」

樹里が笑顔で言いました。

第六十二話　一旦逃げましょう編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は烏鶏国の国王によって牢に入れられましたが石猿の孫左京の活躍で脱出、龍の馨も元の姿に戻りました。

「全員歯を食いしばれ！」

左京は闘志満々です。すると樹里が、

「ここは逃げます」

「え？」

唖然とする左京です。

「馨さんに乗って下さい」

「重い」

馨が定員オーバーを訴えますが、

「誰が曙だ！」

と河童の蘭が却下します。

「逃がすな！」

弓矢が飛んで来ます。

「ひい！」

馨は蛇も驚く蛇行運転をして逃げました。

「おええ」

豚の妖怪の亜梨沙は酷い乗り物酔いです。

「汚物を撒き散らすな！」

左京が怒ります。

一行は町から離れた森へと逃げ込みました。

「どうして逃げたんですか？」

左京が不満をぶつけます。でも樹里のウルウル目で黙ります。

「誰か来るわ」

すっかり吐き終わった亜梨沙が鼻をヒクヒクさせます。

「追手か？」

左京が構えます。

「待て。私は追手ではない」

一人の男前が登場です。

第六十三話　樹里、夢を見る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は妖怪が支配する烏鶏国の宮殿から脱出して森に逃げました。

そこに男前が現れました。

「怪しい。この前の事があるから」

豚の妖怪の亜梨沙と河童の蘭は猫のリックを睨みます。

「美人に見つめられると照れるにゃん」

どこまでもポジティブなリックです。

「貴方は烏鶏国の王子ですね？」

樹里が言います。男前は、

「何故それを？」

樹里は笑顔で、

「夢の中に貴方のお父上が現れたのです」

亜梨沙と蘭の目の色が変わります。

「本当の王子様なんですか？」

龍の馨が不機嫌になります。

「どんな夢だったのですか？」

左京が尋ねます。王子も興味津々で樹里を見ます。

「貴方のお父上は妖怪に殺され井戸に投げ込まれたそうです」

「何と！」

王子は衝撃を受けています。亜梨沙と蘭は好感度のために涙ぐみます。

「それで？」

左京が促します。樹里は熟睡していました。

「寝ないで下さい！」

左京が懇願します。

第六十四話　夢の続き編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は烏鶏国の国王の霊の話をします。

「国王は王子只一人が真実を知っているので王子に会って欲しいと言いました」

樹里の話に王子は泣きました。

「そして王子を助けて妖怪を退治して欲しいと」

左京は王子を見て、

「すぐに宮殿に乗り込みましょう。妖怪をぶちのめして一件落着だ」

「そう簡単には行かないのです」

王子が暗い顔をしたので亜梨沙と蘭が、

「どうしてですか？」

とザ・ピーナツ並みのハモりで尋ねます。モスラが飛んで来そうです。

「母が一緒なのです。今乗り込めば奴は母を殺めて逃げましょう」

左京は樹里を見ます。樹里は亜梨沙を見ます。亜梨沙は蘭を見ま

す。

蘭はリックを見ようとしましたがいません。

「エロ猫め、どこに行ったんだ?」

左京は嫌な予感がしました。

ここは宮殿の控えの間です。

「そうか。王子が一緒か」

国王が言います。

「はいにゃん」

リックが嬉しそうに応じました。

第六十五話　王妃救出編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は烏鶏国の王子と出会い、王国を乗っ取った妖怪退治のために作戦会議中です。

「それにしてもあのエロ猫、どこに行ったんだ？」

石猿の孫左京は猫リックの事が気にかかります。

「あんな奴いない方がいいのよ」

「その通り」

亜梨沙の言葉に珍しく同意する蘭です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開ですが、リックの事を覚えていないと思います。

「王妃様を助け出す事が最優先よ」

蘭が言います。左京が、

「俺と亜梨沙が兵隊に化けて宮殿に忍び込み王妃様を助け出しますから、王子様は蘭と馨を伴って、妖怪を倒して下さい」

「わかりました」

王子が頷くと亜梨沙と蘭が見とれるようにして頷きます。

そしし作戦開始です。

左京と亜梨沙は難なく王妃のいる部屋へと向かいます。

「王妃様、助けに参りました」

左京と亜梨沙が王妃の部屋に入ると、

「待ってたにゃん」

と王妃の姿をしたリックが言いました。

第六十六話　罠にはまった樹里達編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

妖怪に乗っ取られた国を救うため、樹里達は行動を開始しました。

しかし、猫リックの思わぬ裏切りにより、孫左京と亜梨沙は王妃の部屋で待ち伏せに遭いました。

「てめえ、裏切ったな！」

左京がリックを罵ります。リックは、

「裏切ってないにゃん。元々僕はお前らの味方じゃないにゃんよ」

「ムカつく猫！」

亜梨沙が歯軋りします。

「ここで死ぬにゃんよ、猿と豚」

リックはそう言って部屋を出て行きます。

入れ替わりにたくさんの兵隊が入って来ました。

「左京、最後に貴方と一緒で良かった」

亜梨沙が言うと、左京は、

「死んでたまるか！」

左京の本音は、

「亜梨沙と死ぬのは嫌だ。お師匠様の膝の上で死にたい」

です。

「おらあああ！」

左京の如意棒と亜梨沙のボディアタックが炸裂し兵達は蹴散らされます。

「急がないと王子達が危ない」

左京が言うと、亜梨沙は風を巻いて走り去ります。

「王子様ァッ！」

第六十七話　王子危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と亜梨沙は猫リックの裏切りで罠にはまりましたが何とか抜け出しました。

「王子様！」

亜梨沙は世界記録を更新して王子の元へと走ります。

事情を知らない王子達は宮殿内を進んでいます。

「おかしい」

王子が言います。

「何がですか？」

ピッタリ寄り添う蘭が尋ねます。王子は苦笑いして、

「蘭さん近過ぎます」

「はい」

蘭は嬉しそうに離れます。龍の馨は不機嫌です。

「そうなんですか」

「わっ！」

何故か最後尾にいる樹里に驚く三人です。

「お師匠様は隠れていてくれないと困ります」

蘭が言うと、樹里は、

「そうなんですか」

王子が、

「仕方ないでしょう。行きますよ」

「はい」

四人は進みます。

「ここまで兵が一人もいません」

王子がさっきの話をします。

「そう言えば」

蘭は辺りを見渡します。

「まるで来て下さいというような感じがします」

「その通りだよ、王子」

目の前に偽の国王が現れました。

第六十八話　王子の威厳編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭と王子と樹里と馨はすっかり歩兵部隊に囲まれています。

「愚か者めが。お前達の企みなど、我らに筒抜け。引っ立てろ」

偽の国王が命じます。しかし王子が、

「貴様ら、この私に縄を打つのか!?　恥を知れ！　それでも烏鶏国が誇る歩兵部隊か！」

と怒鳴ると、歩兵達は尻込みしました。偽国王は舌打ちして、

「おのれ」

と姿を消しました。

「さすが王子様」

蘭が目をウルウルさせて言います。

「いや、安心するのはまだ早いです。ここで待ち伏せされたという事は」

「左京達も危ない？」

蘭が呟きます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「おーい」

そこへ亜梨沙と左京が走って来ました。

「無事でしたか」

「王子達こそ、ご無事で何よりです」

左京はそこまで言って樹里がいるので仰天します。

「どうしてここに？」

樹里は、

「歩いて来たからです」

「そういう事ではなくてですね……」

左京は脱力しました。

第六十九話　リック暗躍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は左京・亜梨沙と合流しました。

「母上がいないのですか？」

王子は左京達の話を聞いて驚愕します。

「ええ。あのエロ猫が裏切って、俺達を罠にかけたんです」

「やっぱり」

蘭はムッとします。リックの一番の被害者は蘭だからです。

「とにかく、王妃様を探しましょう。そしてあの妖怪を退治しましょう」

「ええ」

左京は樹里を見て、

「お師匠様は馨に乗って城から離れて下さい」

「はい」

樹里は笑顔全開ですが、左京は不安です。

（本当に離れてくれるのかな？）

猫のリックは王妃が監禁されている城の奥の部屋にいました。

「何です、貴方は？」

王妃は美人です。巨乳です。リックの好みです。

「王妃様、僕のお嫁さんになるにゃん」

「嫌です、汚らわしい」

王妃は迫るリックから逃げます。

「助けて、貴方、助けて、王子」

王妃は泣きながら叫びます。

「叫んでも無駄にゃん」

リックは狡猾に笑いました。

第七十話　王妃反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

猫リックは樹里達を裏切り妖怪に味方しました。

それもこれも、王妃が好みのタイプだったからです。

リックは情報を提供する代わりに王妃を要求しました。

「もう王妃様は僕のものにゃん」

リックの目は変態の目です。

「助けてー！」

王妃は力の限り叫びます。

「叫んでも無駄にゃん。この部屋は他と離れてるから誰にも聞こえないにゃん」

すると王妃は、

「そうなの。誰にも聞こえないの」

「そうにゃん。だから早く服を脱ぐにゃん」

変態道まっしぐらです。

「ならば私も猫を被っている必要はないね」

「え？」

急に口調が変わった王妃にリックはビクッとします。

「本当は私は格闘家なのよ、エロ猫！」

「にゃんだって？」

リックは全身の毛が幽体離脱しそうなくらい驚きました。

「は！」

王妃の高速の掌底（しょうてい）がリックの腹に炸裂しました。

「ギャン！」

リックはそのまま壁まで飛び、めり込みました。

第七十一話　樹里、探索する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は龍の馨に乗り宮殿を飛び立ちます。

「行って欲しい所があります」

「はい」

樹里は夢で国王が告げた井戸を探しました。

「井戸の中にある国王のご遺体を運び出すのです」

「ええ？」

馨は龍のクセに蛇と死体が苦手なのです。

「あそこです」

宮殿の裏庭に井戸があります。

馨は仕方なく井戸の前に降りました。

「待っていたぞ、坊主」

するとそこに国王に化けた妖怪が手下をたくさん連れて現れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「何がおかしい！？」

妖怪が切れます。

「国王の遺体は渡さぬ。お前達も冥土に送ってやる」

妖怪は正体を現しました。昭和のコントのこそ泥のような顔です。

「メイド喫茶ですか？」

樹里が尋ねます。

「この時代にそんなものあるか！」

妖怪はまた切れました。

「ところでこそ泥さん」

樹里が言います。

「誰がこそ泥だ！　俺の名は獅子魔王だ！」

妖怪は更に切れます。

第七十二話　王妃救出？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が妖怪と対峙している頃、孫左京達は宮殿内を進み、王妃のいる部屋の前まで来ました。

「母上！」

王子が叫びます。

「王子」

王妃の声が答えます。

「ご無事でしたか」

「はい」

王妃はリックを締め上げ、

「もし本当の事を言ったら三味線にするぞ」

「はいにゃん」

リックは真っ白な灰になりそうなくらいビビッていました。

扉が破られ、王子達が駆け込みます。

「あ、エロ猫！」

亜梨沙が言います。

「この猫さんが危ないところを助けて下さったのです」

王妃のあまりに意外な話に左京達は唖然とします。

「そ、そうにゃん。僕は裏切ったフリをして妖怪の目を欺いたんだにゃん」

リックは汗まみれで嘘を吐きます。

「怪しい」

蘭がリックを睨みます。

「とにかく母上がご無事で良かった。後は妖怪退治です」

左京は何も言わずに駆け出します。

（そんな事よりお師匠様が心配だ）

妄想で鼻血が出そうな左京です。

第七十三話　樹里、妖怪と対決する?編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は獅子魔王と話しています。

「ところで麻央さん」

「誰が市川海老蔵だ!」

妖怪は切れまくっています。

「真央さんですか?」

「誰が花より男子だ!」

芸能界に詳しい妖怪です。

「では獅子てんや瀬戸わんやさん」

「古過ぎて誰にもわからんわ!」

妖怪は突っ込み疲れています。

「何故この国を乗っ取ったのですか?」

妖怪は水を飲んでから、

「国王がまつりごとを真面目になさぬからだ」

「金魚すくいをさせなかったとか？」

「その祭じゃねえ！」

妖怪はフラフラです。

「そうなんですか」

樹里は真実に辿り着いたようです。

「お師匠様！」

鼻に紙を詰めた孫左京がきんと雲でやって来ました。

「鼻、どうしたんですか？」

樹里が尋ねます。左京は赤面して、

「訊かないで下さい」

そして地面に飛び降り、

「妖怪共、まとめてぶっ飛ばしてやるぜ！」

「それには及びません」

樹里が言いました。左京は唖然とします。

第七十四話　意外な正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は途方もないボケで獅子魔王を疲れさせました。

「どういう事ですか？」

孫左京が尋ねます。樹里はニコッとして、

「お猿さん」

「はい」

その笑顔に赤面する左京です。

「オンアラハシャノウ」

樹里が印を結び真言を唱えると獅子魔王が震えます。

「ひい！」

彼は頭を抱えて蹲（うずくま）りました。

天から光が差して一人の菩薩様が現れ、その光で手下の妖怪は消滅しました。

樹里が跪いたので左京は土下座します。

「御徒町樹里、よくぞ見抜いてくれた」

「はい」

菩薩様は獅子魔王を見て、

「この大馬鹿者が！」

「申し訳ございませぬ、文殊菩薩様」

描写するのも憚られるような折檻が始まります。

文殊菩薩様は樹里を見て、

「こやつは我が乗り物。連れて帰る故、後は頼むぞ」

「はい」

菩薩様に首を掴まれ獅子魔王は天へと連れて行かれました。

「さすがはお師匠様ですね」

左京はすっかり感心して言いました。

第七十五話　樹里、国王の霊と会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

獅子魔王は飼い主の文殊菩薩様に折檻され天界に連れて行かれました。

井戸の周りには王妃と王子も来ています。

「今から私が陛下と会って参ります」

樹里が言うと王子が、

「私も一緒に」

「井戸の中は冥府の入口です。仏法者以外が入ると冥府に連れて行かれます」

樹里は王子に言います。

「お師匠様がまたまともな事言ってる」

亜梨沙と蘭は驚愕しています。

「では」

樹里は一人で井戸に入りました。

孫左京は心配でたまりません。

（冥府にも変態がいて……）

止まったばかりの鼻血がまた噴き出します。

樹里は井戸の底に降りました。そこは暗くて何も見えません。

「烏鶏国の国王陛下はおいでですか？」

樹里が声をかけました。

「ここに」

ボウッと国王の霊が現れます。

「貴方は死すべき人ではないのに冥府に落ちました。私と共に戻りましょう」

と樹里が言うと、

「戻りたくないです」

国王は首を横に振ります。

第七十六話　戻りたくない理由編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は妖怪に殺された烏鶏国の国王の霊と話しています。

「何故戻りたくないのですか？」

「王妃が怖いからです」

樹里はキョトンとしました。国王は涙ぐみます。

「あの女は王妃になる前は優しい女でした。ところが王妃になると遂に本性を現したのです」

「黄色い悪魔になったのですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がタイガーマスクだ！」

古過ぎてわかりにくいボケと突っ込みです。

「ですから戻りたくないのです。このまま冥府にいさせて下さい」

国王は深々と頭を下げます。

「妖怪はこの国が乱れているので入れ替わったと言っていましたが？」

樹里は話題を変えます。

「そうです。でも国が乱れたのは私のせいではありません。王妃の浪費が原因なのです」

「パンがなければお菓子を食べればいいのにと言ったのですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。

「誰がマリー・アントワネットだ！」

国王の霊は疲れていました。

第七十七話　樹里、井戸から戻る編

御徒町樹里はありがたい経典授かるために西を目指しています。

樹里は国王の本音を知りました。

「では私は外に戻ります。新しい王妃様と末永くお幸せに」

樹里が言うと国王は蒼白い顔がもっと蒼くなりました。

「気づいていたのですか？」

「はい」

樹里は笑顔です。

「こちらに来てすぐに亡くなった女性を好きになりました。王妃の事はどうでもいいのです」

国王は言いました。

「わかりました」

樹里は国王に頭を下げると、

「お猿さん、上げて下さい」

と声をかけます。

「はい」

孫左京が応じ、きんと雲が降りて来ます。

「では」

樹里は国王にお辞儀し井戸から上がりました。

「どうでしたか？」

王子と王妃が尋ねます。

「手遅れでした。冥府の者が連れて行った後でした」

「そうですか」

王妃は嘘泣きし、王子は号泣しました。

左京と亜梨沙と蘭は背を向けて肩を震わせています。

樹里は切なそうに王妃と王子を見て、

「では私達はこれで」

と言うと、馬に戻った馨に乗りました。

第七十八話　更に西へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は国王の霊の真意を王妃や王子に伝える事なく烏鶏国を出ました。

「お師匠様」

勘のいい河童の蘭が樹里に近づきます。

「本当はどうだったのですか？」

「内緒です」

樹里は笑顔で言います。蘭は仕方なさそうに引き下がりました。

樹里は蘭を見て、

「人は知らない方がいい事もあるのです、蘭」

蘭は天変地異がおこるのではないかと真剣に心配しました。

「それにしても意外なのはリックよね」

豚の妖怪の亜梨沙が言います。

「王妃様の巨乳目当てだと思ったのに本当に敵を欺くために動いていたなんて見直しちゃった」

リックは照れながらもエロい目をして、

「だったらまたそのオッパイ揉ませて欲しいにゃん」

「調子に乗るな、エロ猫！」

でも亜梨沙は笑っています。

リックは思いました。王妃様と利害が一致して良かったにゃんと。

「妖怪が出るかも知れねえから俺は先に行きますね」

左京が走り出しました。

第七十九話　謎の仙人編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

一番弟子の石猿孫左京は暴れ者ですが樹里に「やられている」ので絶対服従です。

二番弟子の豚の妖怪亜梨沙はいい加減ですが、左京に惚れているので樹里を裏切る心配はありません。

三番弟子の河童の蘭は、口が悪いですが、どうやら左京に気があるようなので、裏切らないでしょう。

そして樹里が乗る馬に変化している龍の馨も、樹里に恩があるらしいので、心配ないでしょう。

不安なのは、猫のリックです。

この前はうまくいったのですが、これからも彼は風見鶏になりそうです。

「峰竜太さんの元奥さんですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。

「それは海老名美どりさんですし、今も奥さんです、お師匠様」

いろいろとまずい事になりそうなので、左京がすかさず突っ込みます。

するとそこへ、

「お前が噂の旅の坊主か」

と突然仙人が現れました。

「天本英世さんですか？」

「誰が死神博士だ！？」

仙人は切れました。

第八十話　仙人の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は天本英世風の老人に出会いました。

そうです、仙人かどうかは訊いてみなければわからないのです。

作者にはそれがわからんのです（いえ、わかっています　作者）。

「儂は蛇仙人じゃ」

仙人のようです。何故か「どや顔」で言いました。

「蛇が千人さんですか？」

「その千人じゃない！」

蛇仙人はまた切れます。

「蛇なら千匹だろ」

左京が悪乗りします。仙人は完全に怒ってしまいました。

「貴様ら、儂を愚弄しおって！　皆食い殺してくれるわ！」

仙人は大蛇の姿になります。

「おらあっ！」

左京が如意棒で大蛇を叩き伏せます。

「むぎゅう」

蛇はのびて消えてしまいました。

「儂のお師匠様に言いつけてやる！」

仙人の捨て台詞に左京が突っ込みます。

「子供か！」

樹里が深刻な顔をしています。左京は、

「どうしたんですか、お師匠様？」

すると樹里は、

「道を間違えました」

左京は危うく石化しかけました。

第八十一話　奇妙な天気編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蛇仙人と言う妙な妖怪に一方的に絡まれた（と思っている）孫左京は蛇仙人を叩きのめしました。

すると蛇仙人は捨て台詞を吐き、逃げました。

「師匠って誰かしら？」

亜梨沙が呟きます。

「あんな奴の師匠、大した事ないよ」

孫左京は余裕です。

「あれ？」

馬の馨が空が急に曇ったのに気づきます。

「わわ！」

いきなり嵐になりました。

「お師匠様」

左京は術で合羽を出し、樹里に着せます。

「どこか雨宿りできる所は……」

辺りは草原で何もありません。

「あっちに建物があるわ」

亜梨沙が鼻をヒクヒクさせます。

左京達は亜梨沙の鼻を頼りに走りました。

やがて古びたお堂に辿り着き、一行は雨を凌ぎます。

「わーい」

陽気に騒ぐ河童の蘭は妙に浮いていました。

「この雨妙だな」

左京が言います。

「水神の龍として断言しますがこれは普通の雨ではありません」

馬の馨が言いました。

「妖怪か」

左京が身構えます。

第八十二話　蛇仙人の師匠登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は突然の嵐に遭い古びたお堂に避難しました。

孫左京は如意棒を取り出して、

「馨、一緒に来い。今回はお前関連だ」

「私もそう思います」

馬の馨は龍に戻り左京と共に飛び出して行きました。

「馨の関連てどういう意味？」

考えるのが苦手な亜梨沙が蘭を見ます。

「龍絡みって事でしょ」

蘭はイラッとして答えます。

「ムフ」

奇妙な笑い声がしました。

「何？」

亜梨沙と蘭が声のした方を見ます。

「ムフフ、今このお堂はハーレムにゃん！」

猫のリックが雄叫びを上げています。

「手始めは亜梨沙ちゃんからにゃん」

リックは亜梨沙に飛び掛りました。

「この！」

亜梨沙が扇子でリックを叩き落とします。

その頃左京達は蛇仙人と対峙していました。

「またてめえか」

蛇仙人はニヤリとし、

「お師匠様お願いします」

「おう」

黒雲をかき分けて龍が現れました。それを見て馨が叫びます。

「兄さん」

驚く左京です。

第八十三話　激闘編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と馨は蛇仙人の師匠と対峙しています。

「兄さん、どうして？」

馨が尋ねます。すると通は、

「弟の分際で兄貴に楯突くのか？」

左京はつい見たままを言ってしまいます。

「お前小さいな」

蛇仙人と馨が快晴の空より蒼くなります。

「何だと！？　今俺の事、チビって言ったか！？」

急に沸点に達する通です。左京は意味がわかりません。

「ぐおお！」

通は変化して人間の姿になりました。子供みたいです。

「小学生？」

左京のボケが炸裂します。馨と蛇仙人は連れ立って逃げました。

「殺す！　跡形もなく消し飛ばす！」

通は更に怒り闘気を発します。

「死ね！」

通の猛攻です。左京はなす術なく殴られます。

人間サンドバッグならぬ石猿サンドバッグです。

「左京さん！」

馨が叫びます。しかし左京は殴られるままです。

「く」

我慢できなくなった馨が通と左京に間に入ります。

「兄さん！」

通の動きが止まります。

第八十四話　左京反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

馨の兄通の猛攻に孫左京は顔が変形する程です。

「兄さん、もういいだろう」

馨は殺されるのを覚悟しました。

自分は死にかけていたのを樹里に救われた。

今その樹里が信頼する左京が死にかけている。

（お師匠様のためにも左京さんは守る）

馨は通を睨みます。

「ほう。いい面構えになったな、馨」

通がニヤリとします。その時、

「隙あり！」

と左京が如意棒で通の頭を殴ります。

「……」

唖然とする馨です。

「よくもここまで俺を殴ってくれたな！」

今度は左京が通を滅多打ちです。

「てめえ！」

通が反撃しようとしますが、左京は、

「させるか！」

とどこかで聞いた台詞を吐き分身の術を使います。

無数の左京が現れ通を殴ります。

「いい加減にしろ！」

通が更に闘気を強くし分身左京を全部吹き飛ばしました。

「俺を本気にさせたいらしいな」

通が言います。左京はニヤッとして、

「もう本気だろ」

と挑発します。

第八十五話　西の龍王現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と龍の馨の兄である通の戦いは激烈を極めました。

あれほど荒れ狂っていた嵐は二人の闘気で吹き飛び、太陽が顔を覗かせます。

「どりゃああ！」

左京が振り下ろした如意棒を通が受け止め、更に蹴りを繰り出します。

「おっと！」

左京はそれをかわします。

二人の戦いは果てしなく続くかと思われました。

「何をやっておるか、お前達！」

天が割れるかと思えるくらいの大音量の声が聞こえます。

あれだけ暴れていた通がビクッとして動かなくなりました。

「聞いた事がある声だぞ」

左京も動きを止めました。

「通、修行を抜け出してそんな所で何をしておる?」

声が言います。途端に通は土下座をして、

「父上、申し訳ありませぬ！　お許し下さい！」

すると天から金色の龍が降りて来ます。

左京はそれを見て、

「げげ、西の龍王か?」

とビビります。

左京は昔、龍王の宮の柱の一本である如意棒を盗んだのです。

第八十六話　通、天に帰る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はかつて如意棒を盗み出した相手の西の龍王が現れたのでビビりました。

「久しいな、猿。元気か？」

「お、おう」

心臓が爆発しそうな程なのに左京は虚勢を張ります。

「お前の所業を考えるとここで八つ裂きにしたいところだが今は大事な役目があるな」

その言葉にホッとする左京です。龍王は馨を見て、

「成長したな。好きな女子でもできたか？」

「はい」

馨は顔を赤らめます。龍王はニヤリとして、

「精進しろ」

と言うと震えている通を見て、

「行くぞ」

「はい！」

通は龍に戻り西の龍王と天に昇って行きました。

「そう言えばあいつは？」

蛇仙人は失禁して倒れています。

「この」

左京が蹴飛ばすと仙人は蛇に戻り逃げてしまいました。

左京と馨が戻ると亜梨沙達が出迎えます。

「どうした、その顔？」

左京は顔が倍くらいになったリックに尋ねました。

「何でもないにゃん」

リックは涙ぐんで言いました。

第八十七話　子供のいない村編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は草原の端で小さな村に入りました。

「今夜はまともな所に寝られるかな」

孫左京が宿を探しに行きます。

「妙ですね」

蘭が言います。

「何がよ？」

亜梨沙が尋ねます。

「わかんないの？　子供がいないのよ」

蘭がイラッとして言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「子供なんかいなくていいにゃん。僕は女の子がいれば幸せにゃん」

リックが言いました。でも全員無反応なので彼は凹みました。

「若い夫婦もいるみたいなのにどうして子供がいないのかしら？」

亜梨沙が言うと、リックが、

「きっと男共が種なし……」

と言いかけボコられます。

「お師匠様」

左京が戻って来ました。

「村長に気になる話を聞きました」

「木になる梨ですか？」

樹里が尋ねます。

「違います」

左京が突っ込みます。

「草原の反対側に妖怪がいるそうです」

「そうなんですか」

樹里達は村長の話を聞く事になりました。

第八十八話　子供がいない理由編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は草原の端にある小さな村に入りました。

その村は子供のいない村でした。

石猿の孫左京が村長から気になる話を聞いたと言い樹里は村長に会う事になりました。

そして村長の邸です。

「私がこの村の村長です」

村長は凶悪犯顔でした。どこかで会った事があります。

「お兄さんは元気ですか？」

樹里が尋ねます。すると村長は、

「兄は遠い村で村長をしております。元気だと思います」

彼は何故そんな事を訊かれたのか不思議のようです。

「この村に子供がいない理由を教えて下さい」

「兎のせいなんです」

村長は深刻な顔で言います。左京が、

「化け兎が現れて村の子供を次々に襲ったらしいです」

と補足します。豚の妖怪の亜梨沙が、

「それで子供がいないんだ」

「全員食べられた訳ではないのです。村の奥にある洞穴に隠れているのです」

村長が言います。

「どうかお助け下さい」

村長が樹里に言いました。

第八十九話　兎出現編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

草原の端にある村で化け兎退治を頼まれた樹里一行。

まずは子供達がいる洞穴に行きます。

「亜梨沙と蘭はここで子供達を守ってくれ。俺と馨で兎退治に行く」

孫左京が言うと亜梨沙が、

「あの猫も連れて行ってよ」

と囁きます。左京はリックを見て、

「役に立たないよ」

「いいから！」

亜梨沙がうるさいので左京はリックを連れて行く事にしました。

「行くにゃん」

リックは馨の背の樹里の前に陣取っています。

「てめえ！」

左京が怒りますが、

「お猿さん」

と樹里に微笑まれ引き下がります。

「お師匠様」

リックは樹里に擦り寄ります。

左京は爆発寸前です。

左京達は草原の反対側に来ました。

「む？」

すると一羽の可愛らしい兎が現れました。

「みゅ」

妙な鳴き声です。

「もしかして」

樹里が言いかけると左京が、

「気をつけて下さいね。内容によってはオランダの絵本作家に訴えられますので」

と釘を刺しました。

第九十話　その兎、凶暴につき編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

化け兎退治に出かけた樹里達は早速兎に遭遇しました。

「もしかして酒井法子さんですか？」

樹里が尋ねます。

「それも何かと問題発言です、お師匠様」

「みゅ？」

兎は樹里達を不思議そうな顔で見ているだけで襲ってくる様子はありません。

「おかしいな。普通の兎なのか？」

その兎はいなくなってしまいました。

「兎鍋にするにゃん」

リックが兎を追いかけます。

「おい」

左京が止める間もなく、リックは草むらに入りました。

「ぎえーっ！」

その直後リックの悲鳴が聞こえます。

「どうした？」

左京が追いかけます。

草むらの中でリックが化け兎に襲われていました。

「やっぱり！」

左京は如意棒を取り出します。

「おら！」

兎は身軽でサッと逃げます。

「うげ」

左京はその変貌振りに驚きます。

兎の口は大きく避けています。

「ヒュー！」

兎は左京を威嚇しながら逃走しました。

「逃げた？」

疑問に思う左京です。

第九十一話　陽動作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は兎に遭遇し猫のリックが襲われました。

左京が反撃すると兎は逃げてしまいました。

「お師匠様」

左京は樹里の所に戻ります。樹里は無事でした。

「て事は」

左京は村の方を見て、

「亜梨沙達が危ない」

亜梨沙と蘭は子供達に紛れるために子供に変身しています。

「可愛いでしょ？」

亜梨沙がポーズを決めますが、蘭は、

「全然」

「何よお！」

洞穴の外に妖気が漂います。

「出た！」

亜梨沙と蘭は外に出ました。

「ヒュー！」

化け兎が一羽いました。

「囮になって引きつけるわよ」

「はいな」

二人は逃げるフリをします。

「助けて！」

「ヒュー！」

化け兎が追って来ます。

「ひ！」

化け兎は二人を飛び越え立ち塞がります。

「がああ！」

化け兎は口を大きく開け二人を食べようとしました。

「何だ、ババアか」

化け兎は二人に噛み付く寸前でそう言い、洞穴に戻ります。

「誰がババアだ！」

蘭と亜梨沙が切れます。

第九十二話　化け兎強襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

化け兎の陽動に嵌められた樹里達は子供達がいる洞穴に向かいます。

「亜梨沙と蘭じゃ不安だな」

孫左京は樹里たちに先行してきんと雲で洞穴に着きました。

「ヒュー」

化け兎はまさに洞穴に飛び込むところです。

「おら！」

左京が如意棒を伸ばし兎を牽制します。

「左京、そいつは私達が仕留めるわ！」

亜梨沙が叫びます。

「何？」

左京は亜梨沙と蘭の闘気に驚きます。

「私達をババア呼ばわりした罪、償ってもらうわ！」

蘭が怒鳴ります。

（それは仕方ないと思う）

左京は心の中で思いました。

二人は元の姿に戻り兎に攻撃開始です。

「うりゃあ！」

蘭が竜巻で攻撃、亜梨沙が豚に戻ってボディアタックです。

「ヒュー」

しかし身軽な兎はそれをかわし亜梨沙が竜巻で飛ばされます。

「きゃあ！」

「何してんのよ、豚！」

「何ですって！？」

二人の醜い争いが始まります。

「お前の相手は俺だ」

左京が兎に言いました。

第九十三話　村の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は化け兎と睨み合っています。

「覚悟しろ、化け物め！」

左京が言うと、化け兎は、

「何も知らぬよそ者が」

と言い捨て逃げました。

「何だ？」

左京は拍子抜けしました。

樹里は気絶したリックを抱いて馬の轡と共に洞穴を目指していました。

「む？」

轡が何かに気づきます。

「死臭がします、お師匠様」

「歯周病ですか？」

「違います」

軽くボケながら樹里は臭いの元に近づきました。

「これは……」

馨は仰天しました。

大きな穴が掘られ、沢山の兎の死体があります。

「見てしまいましたね」

樹里の後ろに凶悪犯顔の村長が現れました。

「見ていませんよ」

樹里が笑顔で言います。村長はイラッとして、

「惚けた事言ってるんじゃねえよ、坊主！」

ゾロゾロと村人達が現れます。

全員鎌や鍬を持っていて怖いです。

「蝙蝠さん、蝙蝠さん」

樹里が言いました。

「黄金バットですか！」

馨が仕方なく突っ込みます。

第九十四話　村の真相編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と馨は村の真の秘密を見てしまい、凶悪犯顔の村長以下、村人の一団に囲まれました。

「村の秘密を知られた以上生かしておく訳にはいかない。ここで死んでもらおうか」

凶悪犯顔の村長はやはり凶悪な人間でした。

「そうは行くか！」

馨が龍に変化し、巨大化します。

「ひえぇ、龍だ！」

村人達は仰天して逃げ出します。

「左京さん達の所に行きますよ」

馨はそのまま空を飛んで逃げます。

「逃がすか！」

村長は怯まずに樹里達を追います。

「村長は本当に人間でしょうか？」

馨が呟きます。

「キカイダーですか？」

樹里が言います。

「ネタが古くて誰もわかりません」

馨が溜息を吐きます。

「左京さん！」

そこへ孫左京と亜梨沙と蘭が走って来ました。

「お師匠様」

馨が手短に話をします。

「そういう事か」

左京は化け兎の「何も知らぬよそ者が」という言葉の謎が解けました。

「村長め」

左京は村長を睨みます。

第九十五話　子供のいない真相編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

村の秘密を知った樹里一行は村長達に殺されかけました。

龍になった馨が樹里とリックを乗せ脱出します。

孫左京達も合流しました。

するとそこに凶悪犯顔の村長が来ました。

「村の秘密を知った以上生かして返さんぞ！」

怖い顔をもっと怖くして村長が叫びます。

「化け兎は仲間の仇を討つために人間を襲っていた。てめえらが先に兎を殺したんだろう！？」

左京が如意棒を振るいます。

「私の子供は兎を追いかけていて川に落ちて死んだ。他の村の子供も何人も死んだ。兎のせいで死んだんだよ！」

村長は泣きながら言います。

「嘘はいけませんよ」

樹里が前に出て言います。

「お師匠様のまともバージョン？」

亜梨沙が蘭と顔を見合わせます。

村長がギクッとします。

「兎の死体の下には子供達の遺体がありました。どういう事か説明して下さい」

左京達は樹里の言葉に仰天します。

村長の顔が真っ青になりました。

第九十六話　更に真相編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は村の裏の顔を知る事となりました。

村長は項垂れて話し始めます。

「娘が川で溺れて死にました。そばで見ていた子供達は助けようともせずに逃げたんです」

左京は樹里を見ます。樹里は黙ったままです。

「私は娘の復讐のためにその子供達を殺しました。そして大きな穴を掘って埋め、兎のせいにしました」

「それで村の連中を騙して兎狩りをさせたのか？」

左京は呆れています。

「子供を埋めた上に兎の死体を捨てて隠すつもりでした。でもお坊様には見えたのですね」

「はい。子供達の泣き叫ぶ声も聞こえました」

亜梨沙と蘭が震えます。

「貴方は仏門に入り生涯をかけて供養しなさい」

「はい」

村長は泣き崩れました。

樹里は子供達と兎達のために読経しました。

村人達も真相を知り皆が村を出てしまいました。

樹里達が村の外れまで来るとあの兎がいます。

兎はペコリと頭を下げ、草むらに消えました。

第九十七話　急に寒い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が続いて訪れた所はとても寒い国です。

「なまら寒いにゃ」

猫のリックはちゃっかりと樹里の懐で温まっています。

「いつか殺す」

孫左京は呟きました。

「寒くないの、あんた？」

亜梨沙は腰蓑と胸当てだけの過激スタイルの蘭に尋ねます。

「全然」

それを見て馬の馨は興奮しました。

「寒い訳だぜ、雪が降って来た」

左京が空を見上げました。大きな雪がシンシンと降って来ます。

「妙ですよ、左京さん」

馨が言います。

左京は周囲を見回しました。

街を歩いている人達は皆薄着で震えながら歩いています。

「貧乏で服が買えない訳じゃないよな」

左京は周囲を探ります。

「あれか」

左京は街の反対側にある山を睨みました。

頂上付近が雪でおおわれています。

「妖怪の臭いがします、お師匠様」

「そうなんですか」

リックが樹里の胸に顔を擦り付けています。

「このエロ猫！」

左京はリックを叩き落としました。

第九十八話　虎の妖怪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が訪れたのは寒い国でした。

「雪が酷くなって来た。宿屋を探そう」

孫左京が走り出します。

「お前も仕事しろ！」

とぼけるリックを蹴飛ばす蘭です。

「にゃん！　動物虐待にゃん！」

リックが涙目で抗議します。

「お前は妖怪だろ！」

蘭の踵落としが炸裂します。

「お師匠様」

亜梨沙が大きめの笠を樹里に被せます。

「ありがとう、亜梨沙」

樹里が笑顔で言うと亜梨沙は照れました。

「きゃ！」

突然の突風に蘭の腰蓑が捲れ、亜梨沙のスカートが翻ります。

「ブブ！」

馬の馨が鼻血を噴き出します。

「エッチな風」

亜梨沙が言った時です。

「旅の坊主、儂の糧となれ」

突然、虎の顔をした妖怪が現れました。

「伊達直人さんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がチビッ子ハウスだ！」

妖怪が切れました。

「我が名は虎大王だ！」

「では私はツケメンで」

樹里が言います。

「その大王じゃねえ！」

妖怪はまた切れました。

第九十九話　虎大王、樹里を誘拐する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に虎大王と言う妖怪が現れました。

「このスケベ！　さっきの風、あんたでしょ！」

亜梨沙と蘭が虎大王に言います。

「知らんな」

「何ですって!?」

蘭が竜巻攻撃をします。

「ムン！」

しかし虎大王は気合でそれを消しました。

「おらあ！」

亜梨沙渾身のフライングボディアタックも、

「フン！」

という鼻息で吹き飛ばされてしまいます。

「亜梨沙！」

蘭が亜梨沙を助けに行こうとすると、

「はあ！」

虎大王が口から灼熱の炎を吹き出し、蘭を燃やします。

「あつつ！」

蘭がのた打ち回ります。

「蘭さん！」

馨が樹里を降ろし、龍に変化して炎を水で消します。

「よくも蘭さんを！」

馨が大王に向かいますが、

「オン！」

大王の闘気で馨は吹き飛ばされました。

「ぐえ！」

しかも馨は亜梨沙の上に落ち、更にそのまま飛ばされてリックも巻き添えです。

「来い！」

大王は悠々と樹里を捕まえると飛び去りました。

第百話　孫左京、虎大王を追う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

虎大王と言う妖怪が亜梨沙と蘭と馨を倒し、樹里を攫いました。

戻った孫左京は唖然とします。

「大丈夫か、蘭？」

蘭は酷い火傷です。亜梨沙と馨は気絶しておりリックはペシャンコです。

「お師匠様が……」

蘭が呻きながら言います。左京は術で蘭を治癒しながら、

「喋るな。わかってる」

左京は虎大王が故意に残して行ったと思われる妖気の痕跡を感じていました。

「誘ってやがるのか。いい度胸だぜ」

左京は吹雪の向こうに見える山を睨みます。

虎大王は山の頂上にある自分の城に戻り樹里を鎖で繋ぎました。

「坊主の手下の一人がこちらに向かっています」

大王の部下が報告します。

「そう言えば、天界を荒らしたと言う猿がいなかったな。そいつか」

大王はニヤリとします。

「どれほど強い奴か知らんがこの儂の敵でない事は確かだ」

すると樹里が、

「虎の威を借る狐ですね」

「俺は虎だ！」

大王は切れました。

第百一話　孫左京、登山する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里を攫われた孫左京達弟子は樹里奪還のために作戦会議中です。

町の外れにある寺院に宿を取る事ができたのです。

「蘭は傷が酷いから、エロ猫と留守番」

「ええ！？」

蘭は傷が痛むのも忘れて叫びます。隣でリックがニンマリします。

「馨は亜里沙を乗せて山の頂上へ俺と一緒に行く」

「僕も残ります。蘭さんが心配です」

馨の必死の訴えに左京は、

「わかった」

と頷きました。リックが舌打ちします。

「やったあ！　左京と二人きり！」

亜梨沙が喜び左京は溜息です。

こうして左京は亜梨沙と共にきんと雲で雪山の頂上を目指します。

「寒いよ、左京ゥ」

亜梨沙が身体を密着させるので左京はドキドキします。

「山頂付近は吹雪だな」

左京は仕方なく地上に降りました。

「歩いて登るぞ」

「ええ!?　左京、おんぶしてェ」

亜梨沙が甘えますが左京はそれを無視して登り始めます。

「お師匠様」

左京は樹里が心配でした。

第百二話　雪山の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と豚の妖怪亜梨沙は雪山登山中です。

二人は山を舐めていると登山家に言われそうなくらいの軽装です。

「さぶいよ、さぎょうぅ」

亜梨沙が鼻からツララを垂らして言います。

「術であったまれ」

「ぞんな術、づがえないぼん」

亜梨沙は震えながら言い返します。

左京は仕方なく術で厚手の服を出しました。

「左京大好き！」

亜梨沙が大喜びすると、

「バカップルめ」

と声がします。

「何者だ？」

左京が如意棒を、亜梨沙が扇子を構えます。

するとたくさんの虎妖怪が現れました。

「我らは大王様の親衛隊だ。城には行かせぬ！」

「どけェッ！」

大混戦です。

如意棒が虎妖怪を叩き伏せ、扇子が虎妖怪を張り飛ばします。

「大阪名物か？」

「誰がチャンバラトリオだ！」

亜梨沙が切れます。

樹里は虎大王と話しています。

「私を食べるのですか？」

「我らは人間を根絶やしにするのが目的だ」

大王はニヤリとします。

第百三話　虎大王の黒幕編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は虎大王の言葉に驚きました。

「我らの仲間が沢山人間共に狩られ毛皮を剥がされた。我慢の限界だ」

大王は咆哮するように言います。樹里は、

「そうなんですか」

と頷き、

「ところで胡麻ダレさん」

「誰がツケメンだ！」

大王は切れました。

「吹雪は貴方の仕業ですか？」

樹里が尋ねます。大王は、

「違う。これは別物よ。只我らにも都合がいいのだ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「私をここに連れて来た理由は？」

「お前を攫えばあの猿が来る。まともに戦ったら勝てぬがここなら勝てるのだ」

大王はニヤリとします。

「猿の首を土産にすれば我らの仲間を甦らせると言われたのさ」

「どなたにですか？」

樹里が尋ねます。

「それは言えぬ」

「本当は忘れたのでは？」

樹里が言うと、

「バカにするな！」

大王が切れます。

左京と亜梨沙は虎妖怪を全員倒しました。

「行くぞ」

二人は城を目指しました。

第百四話　孫左京、虎大王と対面する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

虎大王には孫左京を倒すための秘策があるようです。

「ところでＬＥＤさん」

「誰が発光ダイオードだ！」

樹里のボケに大王はイラつきます。

（早く来い、孫左京。儂の身が持たぬ）

手下に邪魔をさせておいて身勝手な大王です。

その頃左京と亜梨沙は城の門の前にいました。

「ぶち破るぞ、亜梨沙」

「はいな」

二人が体当たりをしようとした時、いきなり門が開きました。

「な、何だ？」

左京と亜梨沙は拍子抜けです。

「大王様がお待ちです。どうぞ」

虎の妖怪が皆揃ってお辞儀をします。

急に丁重な扱いになったので左京と亜梨沙は顔を見合わせて訝しがります。

「怪しい」

二人は警戒しながら城に入りました。

左京と亜梨沙は樹里が鎖に繋がれている部屋に通されました。

「ごゆっくりどうぞ」

手下の妙な言葉に左京はギクッとします。

「猿、待ちかねたぞ」

虎大王が言いました。

自分のせいなのに惚けた大王です。

第百五話　孫左京対虎大王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と亜梨沙は、樹里が囚われている城の中まで辿り着きました。

しかしそれは虎大王の罠だったのです。

「猿、覚悟しろ！」

虎大王は鎖鎌を取り出しました。

「気をつけて、左京。強いわよ」

亜梨沙が囁きます。

「目じゃねえよ、こんな奴」

左京が如意棒を構えます。

亜梨沙は隙を見て樹里に駆け寄りました。

「そこの豚。坊主は勝手に連れて帰れ」

「うるさいわね！」

亜梨沙は鎖を壊し樹里を助けます。

「ありがとう、亜梨沙」

樹里はニコッとして言います。そして、

「ツケメンさんには秘策がありますよ」

と左京に言いました。

「儂は虎大王だ！」

大王が突っ込みます。

「ありがとうございます、お師匠様」

左京は大王を睨み、

「かかって来い！」

「行くぞ」

大王が鎌を振り回し始めます。

「おりゃあ！」

左京が如意棒を振り上げようとしましたが重くて持ち上げられません。

「な、何だ？」

左京は混乱しました。

第百六話　虎大王の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は虎大王の罠に嵌りました。

「どういう事だ？」

左京は重くて持ち上げられない如意棒を見て呟きます。

「愚かな猿よ。この部屋は猿封じの間なのだ。お前は今は只の猿。その豚にも勝てぬ」

「何！？」

左京はとうとう如意棒を落としてしまいます。

「左京！」

亜梨沙が駆け寄ります。そして、

「えい！」

と左京を殴ると左京は吹っ飛びました。

「何しやがる！？」

左京は激怒しました。でも亜梨沙は、

「あら、ホントだ」

と嬉しそうです。虎大王はニヤリとして、

「お前の首を欲しがっている方がいらっしゃるのだ」

「首を渡したら死んじまうだろう！」

左京が怒鳴ります。大王は、

「だから死ね！」

と鎌を振り上げて突進します。

「わ！」

左京は慌ててそれをかわします。

「お猿さん」

樹里が駆け出し、何かに躓きました。

「あ」

樹里の唇が左京のほっぺを直撃します。

「ふおお！」

左京は雄叫びを上げました。

第百七話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

虎大王の罠で力を失った孫左京。

しかし、ある事故のおかげで完全復活です。

「何だ？」

虎大王は唖然とします。

「うおお！」

左京は如意棒を拾うと、一気に大王の前へと飛びます。

「うわ！」

大王は左京の攻撃をかわし、飛び退きます。

「どうしてだ？　何が起こったのだ？」

大王には訳がわかりません。

「おらあ！」

如意棒が大王の鎖鎌を弾きます。

「くそ」

大王は抜け穴を使って逃げました。

「待てこら！」

穴は塞がり、入れません。

亜梨沙が、

「城の様子が変よ」

「何？」

振動が伝わって来ます。

「崩れるのか」

左京は樹里に、

「失礼します」

と言うと抱きかかえ、

「逃げるぞ、亜梨沙」

「はいな」

三人は崩壊し始めた虎大王の城から脱出しました。

「逃がさねえぞ」

左京はきんと雲で大王を追いかけます。

「亜梨沙、お師匠様を頼む」

「はいな」

亜梨沙が応じました。

「お猿さん」

樹里は左京の無事を祈りました。

第百八話　孫左京、凍る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

虎大王は抜け穴から逃げました。

「許さねえぞ」

左京は樹里との事故を思い出し、鼻血を垂れ流しながらきんと雲で虎大王を追います。

「いた！」

吹雪の向こうに虎大王の姿を確認します。

大王は炎の車輪を足に着け飛んでいました。

「待てこら！」

左京が大王に追いつきかけた時です。

一陣の風が吹き左京が凍ってしまいました。

左京は動けなくなりました。

「助かりました」

虎大王は吹雪の中に立つ影に話しかけます。

「お前は用済み」

影はそう言うと虎大王を凍結させ、粉微塵に砕いてしまいます。

「……」

それを目の当たりにした左京は焦りました。

「お前も死ぬのだ！」

左京は必死に動こうとしますが何もできません。

影が近づいて来ます。

（死にたくない！　せめてお師匠様と……）

妄想が暴走し鼻血が盛大に噴き出します。

「うおっ！」

影は驚いて飛び退きました。

「やった！」

鼻血で氷が溶け左京復活です。

第百九話　影の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は虎大王を追いかけていてその黒幕に遭遇しました。

黒幕は虎大王を用済みと始末してしまう冷血漢です。

「てめえ、誰だ？」

影が正体を明かします。

「我が名は孫右京。貴方の双子の兄ですよ、左京」

その姿は確かに左京と瓜二つです。

「ふざけるな！　俺は天涯孤独。石から生まれた石猿だ！　親兄弟はいねえよ！」

言いながら悲しくなる左京です。すると右京は、

「そんな事を言っていいのですか？　後悔しますよ」

「しねえよ」

左京は涙を拭って叫びます。右京はフッと笑い、

「わかりました。残念です」

と言うと雲に乗って飛び去ってしまいました。

「誰なんだ、あいつは？」

左京はしばらく右京が飛び去った方を見ていました。

さて、その孫右京です。

「孫左京。謎の力を持っている。私の氷結術を破るとはな」

妄想の力で破られたとは思いません。

「しばらく様子を見ましょうか」

不気味に微笑む右京です。

第百十話　羊の妖怪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が訪れたのは山の麓に長閑な牧草地が広がる国です。

「ペーターは元気ですかね」

樹里が笑顔で言います。

「それ、お話が違います」

孫左京は仕方なく突っ込みます。

先日の「事故」以来左京は樹里をまともに見られないのです。

そのせいで亜梨沙はご機嫌斜めです。

「左京め！」

猫のリックは亜梨沙の八つ当たりでボコボコです。

「酷いにゃん」

でもＭっ気があるリックは快感を覚え始めています。

「お坊様」

そこへ男が走って来ました。

「何者！？」

蘭が前に出て尋ねます。その男は、

「羊の化け物が出るんです。お助け下せえ」

と泣きながら言いました。

男は村の青年団の団長です。

夜になると羊の妖怪が現れて家畜を逃がしてしまうそうです。

「夜を待って妖怪退治だ」

左京は樹里を見ないで言いました。

「クロちゃんは元気ですか？」

樹里が尋ねます。

「その団長じゃないです！」

団長はムッとしました。

第百十一話　今夜はご馳走編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羊の妖怪が出るという長閑な国を訪れた樹里達は青年団の団長に妖怪退治を依頼されました。

孫左京は妖怪が現れる夜を待つ事にしました。

「貧しい国ですが、ご馳走を用意しました」

団長が樹里達に料理を出します。

豚の妖怪亜梨沙は大喜びです。

「我々が丹精込めて育てた豚の丸焼きです」

亜梨沙は気絶しました。

「私達は御仏に仕える身です。肉は頂けません」

樹里が丁重にお断りします。

樹里達は団長達の接待でご馳走を食べました。

「うまくいったな」

団長が副団長に囁きます。

「旅の坊主を差し出せばこの国は安泰だ」

食事には睡眠薬が入れられていて、左京も亜梨沙も蘭も眠ってしまいました。

馬の馨は家畜達と一緒にいます。彼は泣きながら人参を食べています。

「あれ？」

団長達は樹里を連れ出そうとしますが樹里は眠っていません。

「何で起きてるんだ？」

「眠くないからです」

樹里は笑顔全開です。

第百十二話　龍の馨、珍しく活躍する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

青年団の団長の策略で左京達は眠らせました。

「坊主を連れて行くぞ」

団長が青年団の面々に言います。

樹里は青年団に取り囲まれました。

「お師匠様」

馨が樹里のピンチを察して龍に変化して現れます。

「龍だ！」

青年団は逃げ出します。

「団長さんを捕まえて下さい、馨さん」

「はい」

馨はヒョイと団長をつまみ上げます。

「ひえええ！　食われる！」

「誰がお前なんか食うか！」

馨はムッとしました。

樹里は左京達を起こし、団長に話を聞きました。

「こんな酷い奴の話なんか聞かない方がいいですよ、お師匠様」

左京は相変わらず樹里を見ないようにして言います。

「そうです。早くこの国を出ましょう」

蘭が同意します。

「それより、エロ猫がいないわよ」

亜梨沙が言います。

「またあの猫、裏切るのか？」

左京が呟きます。

リックは山に入っていました。

「羊の妖怪様、僕は貴方の味方だにゃん」

その通りでした。

第百十三話　樹里一行、森へ行く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

青年団の団長の策略に嵌りかけましたが、昼間寝ていて夜は眠らない樹里と食事は人参だった馬の馨のおかげで助かりました。

「てめえ、どういうつもりだ？」

孫左京は怒って団長に言います。

「羊の妖怪が旅の坊主を差し出せば、この国から出て行くって」

「またそれか」

うんざりする左京達です。

「私が羊さんの所に行けば良いのですね？」

樹里が笑顔で尋ねます。

「何言ってるんですか！」

左京は思わず樹里を見てしまい、また鼻血を吹きます。

「ばっちいな、左京」

亜梨沙は呆れています。

「とにかく羊の妖怪を何とかしないと」

蘭が言います。左京は鼻血を止めながら、

「エロ猫が多分絡んでる。一緒にとっちめてやるぞ」

団長はお詫びの印と羊の妖怪がいる森の場所を教えてくれました。

「どうしてお師匠様がいるんですか？」

左京は何とか鼻血を堪えて尋ねます。

「歩いて来たからです」

皆項垂れています。

第百十四話　羊妖怪現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は羊の妖怪がいる森に着きました。

「亜梨沙と蘭はお師匠様を守ってくれ。俺と馨で妖怪を倒す」

孫左京が言うと、

「お師匠様、いないよ」

亜梨沙が言いました。

「何ィ！？」

顎も外れんばかりに驚く左京です。

その頃樹里は猫のリックと森を歩いていました。

「羊さんはもの凄く強くて僕でも敵わなかったにゃん」

「そうなんですか」

樹里は笑顔でリックについて行きます。

「連れて来ましたにゃん」

「そうか」

樹里の前に巨大な羊が現れました。

「お前が旅の僧か？」

「はい。貴方が洋（ひろし）さんですね？」

樹里が尋ねます。

「さんずいはいらねえんだよ！」

妖怪は切れました。

「では、？さん」

「さんずいを残すな！　俺は羊だ！」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

妖怪は怒り疲れています。

「本当に高名な旅の僧なのか？」

羊妖怪が尋ねます。

「間違いないですにゃん」

リックは焦っていました。

第百十五話　リック危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は猫のリックに騙されて羊妖怪の所にいました。

「ふざけた坊主だが徳の高いオーラを感じる。食させてもらうぞ」

羊がその大きな口を開いて言います。

「ジンギスカン鍋ですか？」

樹里は笑顔で羊に対して決して言ってはいけない事を言いました。

「殺されたいのか！？」

羊妖怪が叫びます。そのせいで風が起こり樹里の帽子が飛びます。

「え？」

目が点になる羊妖怪です。

「この坊主、女ではないか！　これでは不老長寿にはなれぬ！」

羊妖怪はリックに詰め寄ります。リックは今にもチビりそうです。

「そんなの僕知らないにゃんよお」

「騙したな、猫！　この女共々地獄行きだ！」

樹里とリックがピンチです。

「お師匠様」

孫左京と亜梨沙と蘭と馨が来ました。

「女の手下か。皆まとめて殺してやる！」

羊妖怪は雄叫びを上げます。

左京が素早く樹里を庇います。

リックは羊妖怪と左京達に睨まれ、危機一髪です。

第百十六話　逃亡者リック編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

猫のリックは羊妖怪と孫左京に睨まれ、風前の灯状態です。

（どっちに着くのが正解かにゃ？）

小さい脳みそをフル回転させてリックは考えます。

そしてハタと閃きます。

「兄貴の言う通りにしたけど、兄貴が言う程羊はバカじゃなかったにゃん」

リックは全部左京のせいにしてこの場から逃げるつもりです。

「貴様か、この私を騙したのは！」

羊妖怪が左京を睨みます。

「あのな！」

左京が探すと、リックはすでに逃げた後です。

「てめえをぶっ飛ばしてから考えるよ、あのエロ猫の事はな！」

左京は如意棒を振りかざします。

「そんなものでこの私が倒せるか！」

羊妖怪は巨大化します。その背丈は某東京タワー並みです。

左京も驚いてしまいました。

リックは森を抜け牧草地に戻って来ました。

「ここまで来れば大丈夫にゃん」

「何が大丈夫だって？」

鬼の形相の亜梨沙と蘭がいました。

リックは少しチビりました。

第百十七話　孫左京対羊妖怪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は巨大化した羊妖怪とにらみ合っています。

「そんな小さな棒でこの私が倒せるのか、猿？」

はるか上空で叫ぶ羊妖怪です。

「この左京様をなめるんじゃねえ！」

如意棒がグングン延び、羊妖怪に迫ります。

「届いておらんぞ」

鼻で笑われます。左京は歯軋りして、

「延びろ！」

と念じますが、ダメです。

「擦ってみたらどうですか？」

樹里が如意棒を擦ります。すると如意棒は壮絶な勢いで延びました。

「……」

左京は唖然とします。

「ぐわああ！」

如意棒は羊妖怪を突き上げ月まで延びました。

「ぐえええ」

羊妖怪は月にめり込んで気絶しました。

樹里が手を放すと如意棒は元の大きさに戻りました。

「不思議な勝利だ」

左京と馨は妄想が暴走し鼻血を噴きました。

樹里達は団長達に礼を言われ、きちんとしたご馳走を頂きました。

翌日、樹里達は出発します。

リックは反省のため如意棒の先に吊るされました。

第百十八話　悲しい村編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達はある村に入りました。

誰かの葬列に出会います。

樹里達は手を合わせ、死者の冥福を祈ります。

一人の老人が近づいて来て、

「お坊様、お助け下さい」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

老人は村長です。

「凶悪犯顔の村長はどうしたんだ?」

孫左京が不思議がります。

「この村はある妖怪に呪われておるのです」

村長が言います。

「妖怪？　呪われてる？」

左京は嬉しそうです。

村長の話を要約しました。話好きの老人で一晩中続いたからです。

昔、村にいた女性が妊娠しました。

彼女は臨月まで畑に出ました。

子供は無事生まれたのですが、彼女自身は死んでしまいました。

その女性が妖怪となり出産間近の家に現れ子供を死産にしてしまうのだそうです。

「話が重過ぎるわね」

眠い目を擦りながら亜梨沙が言います。

すると樹里が、

「寝てました。最初から話して下さい」

全員固まってしまいました。

第百十九話　姑獲鳥（うぶめ）出現編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達はある村に出る女の妖怪の話を聞きました。

「お師匠様、勘弁して下さい」

左京は鼻血を抑えて言います。

樹里の居眠りのせいで村長の長話を二度聞いたのです。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

左京はその笑顔のせいでまた鼻血を噴きます。

「左京ったらお師匠様に欲情してるんでしょ？」

亜梨沙が囁きます。

「違うよ！」

でも鼻血が何よりの証拠です。

夜になりました。

左京達はその日に出産を控えた妊婦がいる家の前で見張りです。

樹里が家の壁にお経を書いています。

「これで平家の怨霊は入れません」

「お話が違います、お師匠様」

左京がすかさず突っ込みます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。

「来たよ、左京」

亜梨沙が言います。

夜空を舞う大きな鳥がいます。

「あれか？」

鳥は左京達の前に降りて来ました。

「トリック観た？」

と尋ねる鳥は、顔が髪の長い女で、身体は鷲でした。

第百二十話　リック、一目惚れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達はある村で妖怪退治を依頼されました。

現れた妖怪は人面鳥でした。姑獲鳥（うぶめ）です。

「トリック観た？」

誰も答えないので妖怪はまた訊きます。

「観たにゃん！　僕、山田奈緒子のファンだにゃん」

猫のリックはたちまち姑獲鳥に取り入ります。

「可愛い猫だねえ。もっとそばにおいで」

姑獲鳥はニヤリとします。

「姑獲鳥さん、よく見ると僕のタイプだにゃん。彼女になって……」

リックがそこまで言うと姑獲鳥はパクッとリックを食べてしまいました。

左京達は仰天します。

「私も新喜劇のファンですよ」

樹里が笑顔全開で言います。

「誰が山田花子だ！」

姑獲鳥は切れました。その途端に口からリックが飛び出ます。

「助かったにゃ……」

リックは気絶して失禁です。蘭が箒でリックを隅に掃き出します。

「妊婦がいるだろう？　出しな」

姑獲鳥が凄みます。

「そうはいくか」

左京が負けずに言いました。

第百二十一話　姑獲鳥の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

人面鳥妖怪である姑獲鳥（うぶめ）　が現れました。

正体は、子供を産んで死んでしまった女性の怨みです。

姑獲鳥は妊婦を呪おうと動きます。

「無駄だぞ。お前の呪いなんてお師匠様の経文で全部無効だ」

孫左京が胸を張って言います。

「すみません、誤字脱字だらけです」

樹里が一生懸命経文を直しています。

左京は唖然としました。

「間抜けな坊主め。我が呪いを届かせん！」

姑獲鳥がおぞましい啼き声を上げます。

「ひい！」

臆病者の馬の馨が震えます。

「気持ち悪い……」

亜梨沙が吐きそうです。

「お皿が割れそう……」

蘭が苦しんでいます。

「俺には効かねえ！」

左京が如意棒で攻撃します。

でも姑獲鳥は素早くて当たりません。

「むっ？」

姑獲鳥は家の中が静まり返っているのに気づきます。

壁を蹴破ると誰もいません。

「これが本当のトリックです」

樹里が言います。

「ふざけるな！」

姑獲鳥は切れました。

第百二十二話　妖怪裏事情編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

姑獲鳥（うぶめ）は激怒しました。決してメロスではありません。

「この私の怨み、お前達にわかってたまるか！」

姑獲鳥は更に奇声を発します。

「ううう！」

亜梨沙と蘭が苦しみ出します。

「苦しみ悶えよ、無駄に巨乳！」

姑獲鳥は何故か嬉しそうです。

「お前、実は貧乳だな？」

孫左京が言います。

「誰が仲間由紀恵だ！」

「おい、せめて役名で言えよ！」

左京が言い返します。

「私は赤ん坊を嬉しそうに抱く女が憎い！　だから殺す！」

姑獲鳥は妊婦の居場所を察知したのか、飛び立ちます。

「気づかれたか！」

飛んで行く姑獲鳥を左京がきんと雲で追います。

「お猿さん！」

樹里が後ろに飛び乗りました。

姑獲鳥は村外れにある寺院に降り立ちます。

寺院の本殿には沢山の経文が書かれていますが姑獲鳥には通じないようです。

「見つけたぞ」

姑獲鳥は本殿の扉を蹴破り、中で震えている妊婦とその夫を睨みました。

第百二十三話　姑獲鳥泣く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

姑獲鳥（うぶめ）は妊婦とその夫に迫ります。

「お前の赤子が憎い」

姑獲鳥は奇声を発します。

「おやめなさい」

樹里が入って来て言います。

「邪魔すると殺すぞ、坊主！」

姑獲鳥はごくせんのように凄みます。

「貴女の娘さんに貴女と同じ思いをさせるつもりですか？」

樹里の言葉に姑獲鳥はギョッとして妊婦を見ます。

必死になってお腹の我が子を守ろうとしている妊婦の顔が自分と重なります。

「まさか……」

姑獲鳥は樹里を見ました。樹里は微笑んで、

「貴女の赤ちゃんはもうそんなに大きくなりました」

姑獲鳥の目から涙が溢れて流れます。

「うおお……」

姑獲鳥は号泣しました。すると人間の姿に戻りました。

「お母さん?」

妊婦が呟きます。姑獲鳥だった女性は頷きます。

「業は解けました」

樹里は言って、

「オンカカカビサンマエイソワカ」

と地蔵真言を唱えます。

女性は光に包まれて消えて行きました。

第百二十四話　また西へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の力で姑獲鳥（うぶめ）は成仏しました。

「ありがとうございました」

妊婦と夫が樹里に礼を言います。

「お母さんの事、しっかり弔ってあげて下さいね」

「はい」

妊婦と夫は涙ぐんで頷きました。

後ろで見ていた孫左京も思わずもらい泣きです。

樹里達は村長以下多くの村人に感謝されもてなされました。

「もう食べられないにゃん」

気絶していただけのリックが一番食べました。

「図々しい猫ね」

お腹パンパンの亜梨沙が言うのを白い目で見る蘭です。

その蘭を外からジッと見つめる馨は人参しか食べていません。

「僕は龍なんだけど……」

涙ぐむ馨です。

「さすがお師匠様です」

左京が鼻血を堪えながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

（惚れ直した……）

その笑顔に失神寸前の左京です。

翌朝です。

樹里達は村を発ちました。

「もう許してにゃん」

まだ如意棒に吊るされているリックです。

第百二十五話　思わぬ出会い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が訪れたのは活気に満ちた市場のある国です。

誰もが大きな声でお客を呼び込んでいます。

「そこの奇麗なお姉さん」

一人の男が声をかけます。

「なあに、お兄さん？」

嬉しそうに応じる亜梨沙と蘭です。すると男は嫌な顔をして、

「オバさんは呼んでないよ、その馬に乗ったお姉さんだよ」

「てめえ、ぶっ殺すぞ！」

亜梨沙と蘭は激怒しました。

「あ？」

孫左京が樹里を見上げると樹里の帽子がなくなっています。

「お師匠様、帽子がないですよ」

「そうなんですか」

樹里達は僧侶用の帽子を売っている店に行きました。

「いらっしゃいませ」

店の人は結構可愛い女の子です。

「僕と付き合ってにゃん」

リックがすかさず言います。

「まあ、可愛い猫」

女の子はリックを抱き上げます。

「僧侶用の帽子はありますか？」

樹里が尋ねました。すると女の子はリックを床に叩きつけて、

「樹里でしょ？」

と言いました。

第百二十六話　幼馴染との再会編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が訪れた国の市場には樹里の知り合いがいました。

「私よ、渚。ほら、小さい頃一緒に遊んだ」

女の子はリックを踏みつけたのも気づかない程興奮しています。

「そうなんですか」

多分思い出していないな。孫左京は樹里の笑顔を見て思います。

「懐かしいわ。元気だった？」

渚は嬉しそうに尋ねます。樹里も笑顔で、

「はい」

と応じます。

渚は樹里達を自分の邸に招待してくれました。

「凄いご馳走にゃん」

ボロボロのリックが叫びます。

亜梨沙と蘭も料理の豪華さに唖然です。

「さあ、召し上がれ」

渚は笑顔で言います。左京は何となく不安でした。

（どうしてこんな異国にお師匠様の知り合いが？）

左京は食べるフリをして誤魔化し様子を見る事にしました。

亜梨沙達は満腹のせいなのか薬が入れられていたからなのか、眠ってしまいました。

左京も寝たフリをします。

渚がその様子を見てニヤッとしました。

第百二十七話　渚の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は幼馴染の渚と思わぬ再会をしました。

そして渚の邸でご馳走を振舞われます。

不審に思った孫左京は食事をせず、様子を窺いました。

すると全員が寝たと思った渚がニヤリとします。

「ちょろいな、こいつら」

すると樹里がムクリと起き上がります。

ギョッとする渚です。

「渚さんは小さい頃流行病で亡くなっています。貴女は何者ですか？」

「坊主、わかっていたのか？」

渚に化けた何者かは悔しそうに樹里を睨みます。

「やっぱりそうか！」

左京も如意棒を出して起き上がります。

すると渚は正体を現しました。

狐です。それも尾が九本あります。

「私は九尾（きゅうび）の狐。金ちゃん銀ちゃんの母親代わりだったのさ」

「キュウリのきゅうちゃんですか？」

樹里が言います。

「誰が漬物だ！」

狐は切れました。

「金ちゃん銀ちゃんをよくも更生させてくれたね。お礼をさせてもらうよ」

狐は牙を剥きました。

第百二十八話　九尾の狐の復讐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は樹里の幼馴染を名乗る渚の邸に行きましたが渚の正体は九尾の狐でした。

「金ちゃん銀ちゃんだと？」

孫左京が眉をひそめます。

「そうだよ。あいつらはガキの頃から私が世話をしていたんだ。余計な事しやがってさ！」

狐は牙を剥いて樹里を威嚇します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「死にな、坊主！」

九尾の狐がニヤリとすると周りの壁全体が狐に変化しました。

「げ」

左京は慌てて身体の毛をむしり分身を出します。

「雑魚を片づけろ！」

チビ左京が狐に向かいます。

「やるね。でも私の方が強いよ！」

九尾の狐が左京に襲い掛かります。

「おらあ！」

左京は如意棒を振るいます。

「何？」

亜梨沙達がその騒ぎに目を覚まします。

「きゃ、何これ？」

無数の狐達がミニ左京達と戦っています。

「そいつらを頼む」

左京が言います。

「あいよ！」

亜梨沙と蘭は樹里を庇いながら狐を撃退しました。

第百二十九話　激闘編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と亜梨沙と蘭は、九尾の狐軍団と大乱戦です。

「お師匠様」

そこへ異変を感じて龍に戻った馨が現れます。

左京達は狐達を押し返します。

不利を悟った九尾の狐はそっと逃げ出そうとしていたリックを捕えます。

「この猫がどうなってもいいのかい？」

九尾の狐が会心の「ドヤ顔」で言います。

左京と亜梨沙と蘭と馨が一瞬止まります。

「助けてにゃん」

リックが涙ぐんで懇願します。

「おりゃあ！」

また戦い始める左京達です。

「嫌われてるな」

九尾の狐が可哀想な子を見る目でリックを見ます。

彼女はリックを放り出して、

「一旦退くよ」

と姿を消しました。狐達も次々に消えました。

「酷いにゃん」

リックは号泣しました。

「猫さん」

樹里が言います。

「皆さんは貴方が助かるようにわざと無視したのです」

「本当かにゃん?」

左京達は皆顔を背けました。

「やっぱり違うにゃん!」

また号泣するリックです。

第百三十話　わだかまり編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

左京達は九尾の狐を撃退しました。

でもわだかまりが残ります。

「僕は見捨てられたにゃん」

猫のリックはへこんでいます。

「お前は今まで何度も裏切ってるだろ！　反省しろ、エロ猫」

孫左京は容赦がありません。

彼はリックが樹里にまでエロ攻撃をするのが我慢できないのです。

「そうよ、エロ猫」

亜梨沙も容赦しません。蘭は話すのも嫌な程のようです。

「そんなに責めたら可哀想ですよ」

龍の馨が言いました。

「馬に同情して欲しくないにゃん！」

リックは悪態をついて走り出します。

「何なんですか、あの猫は！？」

温厚な馨もムッとしました。

「にゃん！」

リックは通りに飛び出して荷車に跳ねられました。

「アホか」

呆れる左京達です。

「そんな事を言ってはダメですよ」

樹里が言います。左京達はギクッとして樹里を見ました。

しかし、樹里は転寝をして寝言を言っただけでした。

左京達は唖然としました。

第百三十一話　九尾の狐の策略編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

猫のリックは宿屋のベッドの中で目を覚ましました。

「気がつきましたか？」

そこには樹里の顔がありました。

「お師匠様」

リックは樹里に抱きつきます。

「このエロ猫！」

孫左京がリックを叩き落とします。

「にゃん」

リックは床にめり込みました。

「そのエロ、何とかしろ！　仮にもお師匠様だぞ！」

お前にだけは言われたくないと思うリックです。

「鼻血王子」

ボソリと悪口を言って部屋を出て行くリックです。

「てめえ！」

怒る左京を亜梨沙と蘭が止めます。

「まあまあ、左京」

そう言いながら巨乳で攻撃する亜梨沙です。

「何してんのよ、あんた？」

蘭が呆れます。

リックは宿屋の外で通りを眺めていました。

「可愛い猫だ事」

奇麗な女性が立っています。

「私の案に乗れば酒池肉林だよ」

九尾の狐のようです。

「あんたは嫌われ者だ。あいつらをやっつけたくないかい？」

リックはその誘いに乗る事にしました。

第百三十二話　リックはいずこ？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

猫のリックは九尾の狐の「酒池肉林」の誘惑に負け、加担する事を約束しました。

そうとは知らない樹里達は、リックの事を心配しています。

「あの馬鹿猫、どこに行ったんだ？」

孫左京が苛ついて言います。

「左京が言い過ぎたのよ」

自分も十分に酷い事を言っていたはずの亜梨沙が罵ります。

「二人共喧嘩しないで下さい」

馬の馨が仲裁します。

「あいつ、敵についたりしないわよね？」

蘭が呟きます。

「やりかねないな。そしたら今度こそ許さねえ。仲間とも思わねえ」

左京が言い放つと樹里が、

「あなた達はどうしてそんなに冷たいのですか？」

と言いました。

「お師匠様のまともバージョンが起動したわ」

亜梨沙が蘭に囁きます。

「猫さんはあなた達に責められて出て行ったのですよ。迎えに行くのが本当の仲間です」

樹里のウルウルした瞳にやられた左京は、

「今から探して来ます」

と宿屋を飛び出しました。

第百三十三話　孫左京、罠に嵌る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里に叱られた孫左京は猫のリックを探して街を歩き回ります。

「仕方ないわね」

文句を言いながら亜梨沙と蘭がついて来ます。

「どうしてあんたが来るのよ、蘭？」

「いいじゃない、別に」

亜梨沙は蘭が左京に気があるのを見抜いているので心配なのです。

哀れなのは蘭に片思いの馬の馨です。

「エロ猫の臭いがしないか？」

左京が尋ねます。亜梨沙は鼻をヒクヒクして、

「こっちよ」

と走り出します。左京と蘭がそれを追いかけます。

三人は町外れの草原に出ました。

「あれか」

草原にある木にリックが吊るされています。

「捕まっていたのか」

すると狐の軍団が現れました。

「邪魔だ！」

左京達は狐達を一掃しリックに近づきました。

「うわ！」

リックに辿り着く直前に三人は落とし穴に落ちました。

「引っかかったにゃん」

鉄格子が降り、穴が塞がれます。

鉄格子の上からリックと九尾の狐が見下ろしていました。

第百三十四話　樹里、さらわれる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は九尾の狐の策略で落とし穴に落ちてしまいました。

「バカだねえ、お前達は？　罠だって気づかなかったのかい？」

九尾の狐が高笑いします。

「畜生！」

左京は歯軋りしました。蘭が、

「あの猫、今度こそ殺す」

何故か一番五月蝿い亜梨沙が騒ぎません。

「お前達はそこで干涸びるにゃん」

リックはニヤリとして立ち去りました。

「お師匠様が危ない！」

左京が変身して脱出しようとしますが変身できません。

「無駄だよ。このお札のせいで、あんたらは妖術が使えないのさ」

九尾の狐は鉄格子に貼られたお札を示しました。

「坊主は頂くよ」

九尾の狐も立ち去りました。

「ひっ！」

術が使えない亜梨沙は豚に戻っていました。

「亜梨沙、その蹄で土を掘って脱出だ」

「ブヒブヒ」

亜梨沙は土を掘り始めました。

樹里の所に雑魚狐達が現れます。

「こいつら！」

馨が龍に変化して戦いますがやられてしまいました。

第百三十五話　樹里、九尾の狐と対決する？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と馨は狐達に捕まり九尾の狐がいる邸に来ました。

「にゃにゃーん」

猫のリックは美女達を侍らせ盃を持っています。

「夢のようにゃん」

九尾の狐はそれを横目で見て、

「どうだい、坊主？　私に力を貸してくれたらあんたも酒池肉林だよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「狐様、お師匠様は女ですよ」

リックが言います。九尾の狐はニヤッとして、

「知ってるさ。私を誰だと思ってるんだい？」

「キュウリのきゅうちゃんですよね？」

樹里が言います。

「だから私は漬物じゃないんだよ！」

九尾の狐が切れます。

「坊主には弟子が死んで行く所を見届けてもらうのさ」

狐は狡猾に笑いました。

「猿は茹で猿、豚は丸焼き、河童は酢の物、馬は刺身だ」

リックはゾッとします。馨は震えています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。

「ところで坂本さん」

「誰が上を向いて歩こうだ！」

狐はまた切れました。

第百三十五話　樹里、九尾の狐と対決する？編（後書き）

クライマーズ・ハイを読んでいるので、ふと思い出しました。

第百三十六話　樹里、更に九尾の狐と対決する？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は九尾の狐と話をしています。

九尾の狐は樹里のボケに疲れ、息も絶え絶えです。

「ところでハイキングウォーキングさん」

「誰がコーラコントだ！」

すでに相手が誰なのかわからないボケです。

「じゃあ、藤子不二雄さんですか？」

「誰がオバQだ！」

狐はもう突っ込むのも嫌になっています。

「貴女は何のために私をさらったのですか？」

ようやくまともな質問です。

「知れた事。お前にありがたい経典を手に入れてもらっては困るからさ。金ちゃん銀ちゃんが更生しようがどうしようが関係ないのさ」

狐は本音を吐きました。樹里は笑顔全開で、

「そうなんですか」

その時狐は猫のリックがいないのに気づきました。

「まさか、あの猫がここを抜け出せるように私の気を引いていたのか？」

九尾の狐は歯軋りしました。樹里は、

「違いますよ。私はお話が好きなんです」

「嘘を吐くな！」

九尾の狐は切れました。

第百三十七話　リック走る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の陽動で九尾の狐の邸を抜け出す事に成功した猫のリックは泣きながら走っていました。

「ごめんにゃん、ごめんにゃん」

彼は九尾の狐の真意を知り、怖くなっていたのです。

その頃、落とし穴の中の孫左京達は、豚に戻ってしまった亜梨沙の活躍で穴を掘り進めていました。

「後もう一息だ、亜梨沙」

左京が励ます。

「ブヒブヒ」

亜梨沙は懸命に蹄で穴を掘りました。

（今回は大活躍ね、私ってば！）

亜梨沙は樹里に誉められ、左京に惚れ直される自分を妄想しています。

「後もう少し！」

亜梨沙は遂に地上に到達しました。

「やったわ、左京！　私、やったわよ！」

亜梨沙は穴から飛び出して喜びます。

「さ、行くぞ、亜梨沙」

リックが戻って来てお札を剥がしたおかげで、あっさりと穴から出ていた左京が言います。

亜梨沙はもう少しで石化しそうでした。

九尾の狐は樹里を睨みます。

「許さないよ、坊主！」

第百三十八話　樹里、その上また狐と対決する？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九尾の狐は樹里が猫のリックを脱出させた事に激怒しています。

「坊主、舐めた真似を！　八つ裂きにしてやる」

狐は牙を剥いて威嚇します。しかし樹里は笑顔全開で、

「ところで金八先生」

「すでに原型を留めてないぞ！」

狐は脱力して突っ込みます。

「何故貴女は経典を恐れるのですか？」

「それは言えぬ」

狐は狐らしい狡猾な顔になりました。

「本当は忘れたのでは？」

「何度も同じボケをかますな！」

狐は読者に成り代わって魂の叫びを放ちます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で、

「怖い人が見張っているから言えないとか？」

狐の顔が二日酔いの中年サラリーマン並みに悪くなります。

「そ、そ、そんな事はない」

丸分かりな程狼狽えています。

「全部話して楽になりませんか？」

「誰が容疑者Xだ！」

意味不明に切れる狐です。切れながらも何故か震えています。

「お師匠様！」

孫左京達が到着しました。

第百三十九話　孫左京対九尾の狐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は戦闘態勢です。馬の馨も龍に変化します。

狐はニヤリとしました。

（猫はまた裏切る。彼奴（あやつ）に居場所はない）

彼女はリックを見ました。

リックはその視線に気づきビクッとします。

「何してやがる、女狐！」

左京が如意棒を振り上げます。

「く！」

狐は飛び退き、手下を繰り出します。

「おらあ！」

亜梨沙と蘭が雑魚退治です。

「猫！」

九尾の狐が怒鳴ります。リックはまたビクッとしました。

「猫さん、私達は仲間ですよ」

樹里が笑顔全開で言いました。

「お師匠様」

リックは号泣です。

「猫！　私が誰か忘れたのかい！？」

狐が切れます。

「キュウリ売りの坂本さん」

リックが怯えながら答えます。

「誰だよ、それは！」

狐は血管が切れそうです。

「どこ見てやがる！」

左京が如意棒を振り下ろします。

狐はボンと煙を出し、樹里に化けて並びます。

「お師匠様が二人？」

左京達は愕然としました。

第百四十話　二人の樹里？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九尾の狐は樹里に化けて並び、左京達を混乱させます。

「左京、良かったね、お師匠様が二人に増えたよ」

亜梨沙が暢気な事を言います。呆れる蘭です。

「ふざけるな！　お師匠様に化けるなんてとんでもねえぞ」

左京は喜ぶどころか激怒しています。

「亜梨沙、臭いでわからない？」

蘭が囁きますが、

「二人が近過ぎてどっちの臭いかわからないわ」

「役立たず」

「何ですって！」

醜い内輪揉めです。

「お師匠様でなければわからない事を訊いてみましょう」

馨が言います。左京が、

「お師匠様の母上様の名前は？」

「由里です」

「玉藻です」

違う答えが返って来ました。見破るチャンスです。

「しまった、お師匠様の母上様の名前を知らなかった」

一同が昭和並みのオチにこけます。

「お師匠様、俺を見て下さい」

左京が言います。二人の樹里が左京を見ました。

（クラクラする）

左京は密かにW樹里を堪能しています。

第百四十一話　遂に決着編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

二人の樹里にウットリする孫左京に、

「こら！」

と亜梨沙がハリセンチョップです。

「あ、いかん」

左京は我に返り、

「偽物はお前だ！」

と如意棒で突きました。偽物はバッと飛び退きます。

「何故わかった？」

狐が睨みました。

「アホか。尻尾が出てるんだよ！」

かなり間抜けな化けっぷりです。

更に攻撃する左京ですが、

「お猿さん」

樹里の顔でウルウルされ殴れません。

「バカめ！」

狐の尻尾が如意棒を弾き飛ばします。

「何やってんのよ、バカ左京！」

亜梨沙が罵ります。

「どうだ、猿。私が偽物とわかっても攻撃できまい？」

狐が化けた樹里が目をキラキラさせます。

左京は何もできません。すると本物の樹里が、

「オンマリシエイソワカ！」

と摩利支天の真言を唱えました。

「ぐお！」

狐の化けの皮が剥がれます。

「ヤロウ！」

呼び戻した如意棒で左京は狐を叩き伏せました。

「むぎゅう」

狐は気絶しました。

第百四十二話　黒幕の正体？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九尾の狐は孫左京に倒され、樹里の経文で妖力を失い普通の狐に戻りました。

「貴女の後ろにいるのは誰ですか？」

まともモードの樹里が尋ねます。亜梨沙と蘭は唖然としています。

左京と馨は感動しています。

「それは言えぬ」

狐は口を割りません。

「力ずくで言わせてやろうか！」

左京が先程の仕返しとばかりに凄みます。

「言えば一族郎党皆殺しになるのだ。それだけは例え何があろうと言えぬ」

狐はガタガタと震え出しました。

「そんなに怖い奴ってもしかして和田〇キ子？」

亜梨沙が爆弾発言です。作者の命が危ないです（嘘です）。

「わかりました。これに懲りて悪さをしてはいけませんよ」

樹里は狐達を許し、解放しました。

「あれ程の妖怪が恐れる奴。そんな奴はあいつしかいません」

左京が言います。

「悪魔コツリですか？」

樹里が言いました。

「シリーズが違います、お師匠様」

左京は脱力しました。

第百四十三話　思わぬ結末編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

左京と樹里の力で九尾の狐は只の狐に戻りました。

今裁判中です。

「死刑よ、この猫」

亜梨沙が言います。

「死刑は酷いにゃん、皆を助けたにゃん」

リックが泣きながら弁明します。

「リックさんがいなければ大変でした」

馨が言います。

「ご裁定を」

左京が樹里を見ました。

「寝てました」

全員石化しました。

樹里の仲裁でリックは許されましたが、如意棒吊るしの刑は続く事になりました。

「もう絶対裏切らないにゃん。お師匠様の下着に誓うにゃん」

「変態猫！」

蘭の踵落としが炸裂です。

その時です。前から見た事がある女の子が来ます。

「樹里じゃない？」

「どちら様ですか？」

樹里は笑顔で尋ねます。怪しむ左京達です。

「渚よ」

樹里以外はギョッとします。

「渚さんは亡くなったはずでは？」

「死んだのは私の双子の妹の汀よ」

「そうなんですか」

そんな話を笑顔でかわす樹里と渚に唖然とする左京達です。

第百四十四話　渚の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の幼馴染の渚が現れました。

また偽物かと孫左京達は焦りましたがどうやら本物のようです。

「じゃあね、樹里。また会いましょう」

そう言うと渚は消えてしまいました。

「ゆ、幽霊？」

亜梨沙と蘭は自分達が妖怪なのに震えます。

「渚さんは自分が亡くなった事を自覚していないのです。それで双子の妹が亡くなったなどと言っているのです」

樹里の悲しそうな顔に左京は鼻血を垂らしました。

「何妄想してんの、エロ猿！」

蘭が怒ります。すると猫のリックも鼻血を出していました。

「エロいオヤジばっかね」

亜梨沙も呆れます。

馬の馨は慌てて顔を俯かせて鼻血を誤魔化しました。

樹里達は渚のために読経しその国を出発します。

左京は神妙な顔です。

「どうしたの、左京？」

亜梨沙が尋ねます。

「狐の黒幕だよ。多分奴だ」

「和田〇キ子？」

「違うよ！」

作者は命がやばいです。（そんな事はありません　作者）

第百四十五話　孫右京再び編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は峠を登っている途中で小さな街に入りました。

「これより先、宿屋ありません」

その看板を見て前世の嫌な記憶が甦る孫左京です。

「ボッタクリの店があるぞ、ここ」

彼は亜梨沙に囁きました。それを見てムッとする蘭、更にそれを見て悲しそうな顔になる馨です。

「取り敢えず、良心的な宿を探して来ます」

左京が走り出します。

「ああん、左京、私も行くゥ」

「あんたはここでお師匠様を守るの！」

蘭が引き止めます。

「何よ、無駄に巨乳！」

「あんたに言われたくないわ！」

また醜い罵り合いが始まります。

その時でした。

「おやおや、また仲間同士で喧嘩ですか？　いけませんねえ」

非常に穏やかで品のある声がしました。

「声に貧がありますね」

樹里が言います。

「貧ではなく品ですよ、お坊様」

現れたのは虎大王をあっさりと始末した孫右京と名乗った猿です。

右京は感情不明の笑みを浮かべています。

第百四十六話　孫右京の急襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に孫左京に瓜二つの孫右京が現れました。

「左京ったら、何気取ってるの？　似合わないわよ」

亜梨沙が鼻で笑います。すると右京は笑顔のままで、

「豚はお黙りなさい」

といきなり如意棒を出して亜梨沙を叩き伏せました。

「ぎゃ！」

亜梨沙は豚の姿になって気絶です。

「あんた誰？」

蘭が樹里を庇いながら右京に尋ねます。

「私は孫右京。左京は私の愚弟です」

「え？」

蘭と馨は顔を見合わせます。

「蘭さんはお元気ですか？」

樹里が尋ねます。右京は笑顔で、

「私はその右京ではありませんよ、お坊様」

と冷静に返します。

「お師匠様のボケが不発に終わったにゃん」

リックが知った風な口を利きます。

「さて、皆さんの楽しい旅はここでおしまいです。お疲れ様でした」

右京はそう言うと、瞬く間に蘭と馨を打ち据え、リックを蹴り飛ばします。

「にゃーん！」

リックは遥か彼方に飛んで星になりました。

第百四十七話　孫左京対孫右京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫右京の急襲により、亜梨沙、蘭、馨、そしてついでにリックもやられてしまいました。

「お坊様、貴女にはここで死んで頂きますよ。他の下等な妖怪共は貴女を食べて不老不死になりたがるようですが、私はすでに不老不死ですからね」

あくまで冷静に話す右京はあのカッとなり易い左京と本当に双子なのでしょうか？

「私が経典を授かると何かまずい事があるのですか？」

まともモードの樹里が起動しました。右京はフッと笑い、

「ええ。あんなものを広められたら我々妖怪は迷惑なのです」

「そうなんですか」

そこへ左京が戻って来ました。

「やっぱりてめえか、スカシヤロウ！」

左京は如意棒を振るいます。

「無駄無駄！」

右京はそれをことごとく如意棒で受けて弾き返します。

「バカな？　如意棒はこの世に一つのはず……」

左京は唖然としました。

「今度は私の番ですね」

右京が踏み込み、左京に仕掛けました。

第百四十八話　孫左京の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と孫右京。鏡に写ったかのようにそっくりな二人の対決が続いています。

「おりゃあ！」

やたらに叫び捲って攻撃する左京と全く声を発さずに戦う右京は対照的です。

「うわ！」

左京の如意棒が弾き飛ばされます。

「止めです、左京」

右京が冷静に告げます。如意棒が振り下ろされ左京の頭を直撃しました。

「ぐ……」

左京がそのまま地面に倒れました。

「さてと」

右京が振り返ると樹里達がいません。

馨が力を振り絞り樹里達を乗せて逃げたのです。

「父上に相談しましょう。あの孫右京、尋常でない強さです」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「まあいいでしょう。どこに何を相談しようとも私に勝てる者はいませんからね」

右京は雲に乗り飛び去りました。

馨は父である西の龍王の宮に来ていました。

龍王に事情を説明すると龍王は、

「そやつは恐らく、六耳猴（ろくじびこう）だ」

と答えました。

第百四十九話　孫右京の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫右京の出現で樹里の弟子達は次々に敗れました。

そして左京までもが右京に倒されたのです。

竜の馨は父である西の龍王の元へと樹里達を連れて逃げました。

西の龍王の答えは、

「そやつは恐らく、六耳猴（ろくじびこう）だ」

「何者なのですか？」

馨が尋ねます。西の龍王は、

「天界の太上老君の弟子だった猿よ。実力は孫左京を遥かに上回る。あやつは相手の術を全て盗んでしまうのだ」

苛烈な気性のため太上老君に破門され、術を封じられたのだそうです。

「太上老君の封印が破られたとは思えぬ。天界の誰かが裏で手引きをしたのだろう」

西の龍王は馨を見て、

「儂はこれから天界に行く」

馨は驚きました。西の龍王をそこまで恐れさせる敵の存在に。

「いくら孫左京が秘術を尽くして戦ったところで六耳?猴には到底勝てぬのだ。天界の助けを借りるしかない」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じました。

第百五十話　天界騒然編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

馨の父西の龍王は天界へと向かいました。

「お猿さんは大丈夫でしょうか？」

樹里が心配そうに言います。

「大丈夫ですよ。左京は殺しても死なないですから」

亜梨沙が答えます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じました。

（お師匠様も左京の事が好きなのかな？）

妙な事を心配している亜梨沙です。

天界は西の龍王の報告を聞き、騒然としました。

「あの猿が甦ったと言うのか？　孫左京以上の脅威だ」

天帝は顔を引きつらせます。

「私が参ります、陛下」

脱獄囚のような顔の男が言いました。

彼の名は河東真君（かとうしんくん）。決して犯罪者ではありません。

「おお、そうか。あの孫左京をあっさり倒したお前なら大丈夫だろう。頼むぞ」

「はは」

河東真君は西の龍王と共に下界に向かいました。

意識を回復した左京は樹里達が西の龍王の下に避難した事を知りました。

「右京め」

左京はリベンジを誓いました。

第百五十一話　河東真君、下界に降りる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

河東真君（かとうしんくん）は西の龍王と共に孫左京のいる所に現れました。

彼は天帝の妃の弟の奥さんの従弟です。そして左京とは因縁の仲です。

「てめえ、何しに来た!?」

左京は河東真君を見るなり激怒します。

「鎮まれ、猿！　河東真君は天帝の勅命で下界に来られたのだ。無礼であるぞ」

西の龍王に一喝され、左京は黙ります。

「貴様が歯が立たなかった六耳（ろくじびこう）?猴とやらを、倒しに来たのだ。感謝するがいい」

河東真君は尊大な態度で左京に言います。左京は歯軋りしました。

「頼みましたぞ、真君。儂は太上老君に会いに参ります」

西の龍王は天界へと飛翔しました。

「どこにいる、六耳?猴?　我が名は河東真君。貴様を退治に来た」

河東真君が怒鳴ると、

「はいィ？　貴方如きが、神にも等しい力を持つこの私を退治する？　笑わせてくれますね」

と言いながら、孫右京が雲に乗って現れました。

第百五十二話　河東真君対孫右京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京を倒した孫右京を退治するために天界から脱獄囚顔の河東真君(しんくん)が来ました。

「なるほど。確かに貴方は我が愚弟左京を倒した男。しかし、私は愚弟よりずっと強いですよ、バ河東真君」

孫右京は不敵な笑みを浮かべて穏やかに言います。河東真君は、

「貴様、私の幼少時の渾名を何故知っている!?」

と激怒しました。

「こら、俺の事を我が愚弟とか言ってるんじゃねえよ、偽者!」

左京が怒鳴ります。

「取り敢えず、貴様を倒す!」

河東真君が動きます。彼は天界一速い韋駄天について足を鍛えましたので自信があります。

「私の動きが見えるか?」

「見えますよ」

河東真君は右京に足を引っ掛けられて倒れました。

「どお！」

河東真君は顔からこけます。

「アホか」

左京が鼻で笑いました。

「愚弄しおって！」

河東真君は青龍刀を振りかざします。

「みっともないですねえ」

右京が笑います。

第百五十三話　河東真君敗れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天帝の妃の弟の奥さんの従弟である河東真君（かとうしんくん）は孫右京にあしらわれています。

「弱過ぎますねえ、バ河東真君。左京の方がまだ骨がありましたよ」

「うぬぬ！」

河東真君は顔を真っ赤にして怒りました。

「許さぬ！」

青龍刀で斬りつけます。右京はそれをあっさりかわします。

「は！」

右京は耳から出した如意棒で河東真君を叩き伏せます。

「まだだ！」

河東真君は如意棒を跳ね除け右京の懐に飛び込みました。

「む？」

一瞬焦ったかに見えた右京ですが、

「醜い顔ですねえ、貴方」

と言うと腹に如意棒を打ち込みます。

「ぐおお……」

河東真君は堪らず膝から崩れます。

「はあ！」

更に如意棒がその後頭部を打とうとした時、

「待てよ！」

左京の如意棒がそれを止めます。

「何をしているのですか？　この男は貴方の仇ですよ」

右京が澄ました顔で言います。

「うるせえ！」

左京は如意棒を構えました。

第百五十四話　西の龍王、太上老君と会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

左京達が戦っている頃西の龍王は天界で太上老君と会っていました。

「お久しぶりです、老師様」

龍王は人に変化しています。彼は跪きました。

「久しいな」

太上老君とは仙人の頂点の人です。その仙術は無限で天界最強の術者でもあります。

「猿が暴れております」

「そうか」

老君は腕組みをして目を瞑ります。

「六耳（ろくじびこう）？猴は老師様の弟子の中でも有能な者でした」

よく見ると老君は居眠りをしていました。

「寝てるんじゃねえ、ジジイ！」

龍王は怒鳴りました。

「今ジジイとか言わなかったか？」

老君は目を擦りながら尋ねます。

「言ってませんよ。空耳でしょう」

老君は今度はイビキを掻いています。

「寝るなー！」

龍王は切れました。

龍王は自分の宮に戻り、樹里に杖を授けました。

「それはあの六耳？猴の術を封じるものだ。それを使い、左京を助けなさい」

「はい」

樹里は笑顔で応じました。

第百五十五話　孫左京、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は孫右京と戦っています。

天界から来た河東真君（かとうしんくん）は見かけ倒しでした。

「おりゃあ！」

左京はミニ左京を繰り出します。すると右京もミニ右京を繰り出します。

「おらあ！」

左京が巨大化すると右京も巨大化します。

「孫左京め、私と戦った時より強くなっている」

河東真君が呟きます。

そこへ龍の馨に乗った樹里が現れます。

「お師匠様、杖を使って、六耳猴（ろくじびこう）の術を封じて下さい」

馨が言いました。すると樹里は、

「はい」

と笑顔全開です。

「む？」

右京が樹里達に気づきます。

「あのお坊様を捕まえなさい」

ミニ右京が樹里に向かいます。

左京も樹里達に気づきます。

「させるか！」

左京はミニ左京で追撃します。ミニ同士が入り乱れて戦います。

「もらった！」

その一瞬の隙を突き、右京が左京の喉を如意棒で突きました。

「ぐえ！」

左京はそのまま後ろに倒れました。

第百五十六話　樹里、孫右京を撃退する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指します。

孫左京は孫右京の攻撃で仰向けに倒れました。

「お猿さん」

樹里が馨から飛び降りて左京に駆け寄ります。

「お坊様を捕まえなさい」

右京の命令でミニ右京が樹里に襲いかかります。

「がああ！」

馨がミニ右京を水流で蹴散らします。

「邪魔をしないでくれませんか」

右京は一足飛びに馨のそばに来て如意棒で馨を殴り倒します。

「ぐう……」

馨は地面にめり込んで気絶しました。

「さあ、お坊様、死んでもらいますよ」

右京が樹里に如意棒を振り上げます。

「えい！」

樹里が西の龍王から授かった杖で右京を殴りました。

「そのような杖で叩かれても痛くありませんよ、お坊様」

右京はニヤリとしもう一度如意棒を振り上げます。

「ぬおお！」

すると何故か右京はよろめき如意棒を落としてしまいました。

「何だ？」

右京は驚愕しています。

（おかしい。力が出ない）

「まさか！」

右京は蒼ざめ、

「ではまた」

と逃げました。

第百五十七話　孫右京の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は孫左京すら苦戦した孫右京こと六耳（ろくじびこう）?猴を撃退しました。

「お師匠様、凄いですね」

左京は喉を擦りながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「太上老君様にお借りした杖の力ですよ。それであの六耳?猴の術を封じられるんです」

意識を回復した馨が言いました。

「あのジジイが絡んでるのか」

「孫右京と名乗る者は老師様の弟子だったのです」

左京はギョッとします。

「ジジイの弟子……。つええ訳だ」

左京は太上老君とお釈迦様にだけは勝てないと思っています。

「ところで、かとうまことくん」

樹里が笑顔で言います。

「その読み方で呼ぶな！」

河東真君（かとうしんくん）が切れました。

孫右京は天界を目指しています。

（あの杖が下界にあるという事はジジイの所にはないという事だ）

孫右京は太上老君を殺すつもりです。

「待ってろ、ジジイ」

と右京は呟きました。

第百五十八話　太上老君対六耳？猴編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里に敗れた孫右京こと六耳（ろくじびこう）？猴は、天界の太上老君の邸に行きました。

「ジジイ！　覚悟しろ！」

六耳？猴は正体を現しました。孫左京とは似ても似つかない凶悪な顔です。

でも怖さなら河東真君（かとうしんくん）の方が上です。

六耳？猴が乗り込むと、老君は庭で椅子に座って眠っています。

「死ね！」

六耳？猴が老君に襲いかかりました。

「ほい」

しかし老君は寝たフリをしていたのです。

あっさりと攻撃をかわします。

「おのれ！」

六耳？猴は更に老君に向かいますが、

「ほい」

と老君が杖を出したのでギョッとして飛び退きました。

「単純な奴じゃな。お主を封じる杖なぞ楊枝のように沢山あるぞ」

老君がドサッと杖を出したので、

「ひ！」

六耳？猴慌てて逃げ去りました。

「何じゃ、つまらん」

老君は真顔になって、

「奴が術を使えるという事は、彼奴（あやつ）が動いたか」

と呟きました。

第百五十九話　孫左京、如意棒を西の龍王に返す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は六耳（ろくじびこう）？猴が落として行った如意棒を確かめます。

「同じ物だ。どういう事だ？」

「それは多分東の龍王様の宮の柱ですよ。だからそっくりなんです」

馨が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「如意棒をお前の親父に返しに行こう」

左京が言います。

「どうしてですか？」

「これで貸し借りなしにして改めて借りたい物がある」

左京は何か企んでいるようです。

左京は樹里をきんと雲に乗せて西の龍王の宮に行きました。

河東真君は放置のようです。

「いい度胸だ。この儂の宮に来るとはな」

西の龍王が言いました。左京は、

「柱を返しに来たんだよ。長い事借りてて悪かったな」

「そうか。東の王の柱を手に入れたか？」

龍王が気づきます。

「それがどうした？」

「いや別に」

龍王も自分の宮の柱が戻ればそれでいいようです。

「代わりに欲しい物がある」

左京は言いました。

第百六十話　樹里、真言を授かる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は西の龍王に如意棒を返しました。

そして代わりに欲しい物があると言います。

「何が欲しいのだ？」

龍王は警戒して尋ねます。馨も心配そうです。

「お師匠様に龍王の真言をくれ。それだけだ」

左京は跪いて言った。

「お猿さん」

樹里がウルウルした瞳で左京を見ます。

龍王はニヤリとして、

「わかった。良かろう」

「この申込書に必要事項を記入して下さい」

馨が書類を差し出します。左京は唖然としました。

「そうなんですか」

樹里は書類に書き込みます。

「本来であれば有料だが今までの活躍と柱を返した事で無料だ」

龍王が恩着せがましく言うと馨が、

「有料なんて嘘ですから気にしないで下さい」

「バラすな、阿呆！」

龍王は馨に怒鳴りました。

「八大龍王の真言は、オンメイギャシャニエイソワカじゃ。それを唱えればたちまち洪水が起こり、敵を呑み込む」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第百六十一話　河東真君の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が西の龍王の所に行っている間に六耳猴（ろくじびこう）が戻って来ました。

「坊主達はどこだ？」

するとそこへ大きな犬二匹を連れた河東真君が現れました。

「その悪人面がお前の本当の顔か。何と恐ろしい顔だ」

河東真君が笑います。すると六耳？猴は、

「顔の怖さの事をお前に言われたくないわ、バ河東真君」

と言い返します。河東真君は、

「うるさい！　あの孫左京も仕留めた我が僕の太路（たろ）と治路（じろ）に踏みつけられるがいい！」

と犬を解き放ちます。

「ぬ？」

犬はまるで風のように動き六耳？猴に牙を剥きます。

「ガウ！」

「く！」

六耳？猴は如意棒がないのに気づきました。

「おのれ！」

六耳？猴は大蛇に変化し、犬を絞め殺そうとします。

「ガウ！」

しかし太路治路コンビは素早く捕まりません。

「ぐああ！」

六耳？猴は腹と首を噛まれのた打ち回ります。

河東真君はガッツポーズです。

第百六十二話　切れた六耳？猴編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

脱獄囚顔のくせに活躍する河東真君（かとうしんくん）は、六耳？猴（ろくじびこう）を追いつめていました。

「うがおお！」

大蛇の姿の六耳？猴は身体を高速回転して太路治路（たろじろ）コンビを振り払います。

「貴様ァッ、許さぬ！」

六耳？猴は元の姿に戻り、身体から炎を噴き出しました。

「七百八あるこの俺の術の中の一つで貴様を殺す！」

炎を身に纏（まと）った六耳？猴が河東真君に突進します。

「太路、治路！」

河東真君は犬を呼び寄せ、それを迎え撃とうとします。

「温いわ！」

六耳？猴はそれを撥ね除け真君を地面に叩き付けます。

「死にくされ！」

六耳？猴の顔はもはや悪人ではなく鬼です。

「ぐうう……」

さすがの真君もこのままでは死んでしまいます。

多分誰も泣く者はいないでしょうが。

「うるさい！」

地の文に突っ込む人でした。

「真打ち登場！」

その言葉と共に孫左京が現れました。

第百六十三話　孫左京、奮戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳（ろくじびこう）？猴の術で河東真君（かとしんくん）が倒されるところでした。

「戻ったか、孫左京。まとめて始末してやる」

鬼の形相の六耳？猴に左京はギョッとしました。

「それがお前の正体か、化け物」

「私は仙人だ。天界をも従えられる最強の仙人だ」

六耳？猴は大威張りです。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で会話に加わります。

「お師匠様は西の龍王に真言を授かったんだ。お前なんかたちまちやられちまうぞ」

左京も大威張りです。すると六耳？猴は鼻で笑い、

「片腹痛い」

「てめえ、今バカにしたな！」

左京が如意棒で攻撃します。

二人の戦いは果てしなく続きます。

「貴様、急に強くなったな！」

六耳？猴が歯軋りして言います。

「俺は常に進化するのさ！」

左京は樹里に、

「お猿さん、頑張って下さい」

とめぞん一刻式応援をしてもらったのは内緒です。

「行くぞ！」

左京は突進しました。

第百六十四話　六耳?猴の黒幕編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

左京と六耳?猴(ろくじびこう)の戦いが続く最中、樹里は河東真君(かとうしんくん)の手当をします。

「ところでかとうまことくん」

「その読み方で呼ばないでくれ！」

河東真君の様子が変です。彼は樹里が女の子なのに気づき、ドキドキしているのです。

天界の英雄も只のエロオヤジでした。

「誰がエロオヤジだ！」

登場人物が地の文に突っ込むのは禁止します。

「悪いお猿さんの背後に何かが見えるのですが、何でしょうか?」

河東真君は、

「気づいていたのか。奴の後ろにいるのは第六天魔王だ」

「杉田か〇るさんですか?」

「誰が鳥の詩だ！」

河東真君が華麗な突っ込みを披露します。

「仏法を滅ぼそうとしている魔物だ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「太上老君様が天帝陛下とお話しになっている」

河東真君は言いました。

ふと見ると樹里は寝ていました。

「寝るな！」

河東真君は切れました。

第百六十五話　孫左京危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は六耳猴（ろくじびこう）の変幻自在の攻撃で苦戦しています。

「うわあ！」

左京は跳ね飛ばされて倒れました。

「止めだ、孫左京！　俺の影！」

六耳猴が河東真君も驚く凶悪顔で迫ります。

「お猿さん！」

樹里が駆け寄ります。

「邪魔するな、坊主！」

六耳猴の攻撃が樹里に当たり、樹里は倒れました。

「お師匠様……」

左京の中で何かが切れました。

「てめえ！　可愛い女の子に何しやがるんだ！？　てめえだけは許さねえぞ！」

左京が怒りに燃えます。

「抜かせ。お前など私の足元にも……」

六耳？猴の自慢話が終わらないうちに左京の如意棒が彼の顔面を襲います。

「グガ！」

六耳？猴は後ろに飛びます。

「まだだ！」

左京はそれを追い抜き、更に如意棒で叩き伏せます。

「おらおら！」

如意棒の乱れ撃ちです。

「ふおおお！」

「わわっ！」

いきなり六耳？猴が巨大化しました。

左京はいきなりピンチです。

第百六十六話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里が倒れたのを見て切れ、六耳（ろくじびこう）猴に猛攻をかけました。

しかし六耳猴は巨大化して、再び攻撃に出ます。

「よくもやってくれたな、孫左京！　粉微塵にしてやる！」

「うるせえ！　お師匠様の仇、討たせてもらうぞ！」

左京も巨大化します。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で立っています。左京は唖然とします。

「バカな、生きていたのか？」

六耳猴も驚いています。

「躓いてしまいました」

樹里が笑顔で言うと六耳猴はムッとしました。

「どこまでも惚けた坊主だ」

左京は嬉し泣きしました。

「ご無事で何より！」

そして六耳？猴を睨み、

「勝負だ！」

「ほざくな！」

二人の怪獣並みの戦いが始まります。

「さあ、太路（たろ）に乗って。離れた方がいい」

河東真君が樹里に声をかけます。

「大丈夫です」

樹里は動きません。

「わかった。私も力を貸そう」

と河東真君は言いました。

第百六十七話　黒幕登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

巨大化した孫左京と六耳?猴(ろくじびこう)の戦いに巨大化した河東真君が加わります。

「太路(たろ)、治路(じろ)、来い！」

犬まで巨大化して参戦です。

「余計なお世話だ、バ河東真君！」

「うるさい！」

二人が罵り合っている隙に、六耳?猴は逃げました。

「あ、待て！」

その時です。天が暗くなり、雷が轟きます。

「陛下」

六耳?猴は雲の上で跪きます。

「孫左京、御徒町樹里、その他の者共よ」

大音響の声が言います。

「私はその他か！」

河東真君が切れます。

「我は第六天魔王。仏法の破壊者なり」

「私は森伊蔵の方が好きです」

樹里が笑顔全開で言います。

「誰が幻の焼酎だ！」

第六天魔王が切れました。

「今回は一旦退こう」

「一旦木綿？」

樹里のボケは容赦がありません。

「誰がゲゲゲの女房だ！」

魔王は疲れているようです。

「次はこうは行かぬぞ」

次の瞬間、空は明るくなり、雷は止みました。

第百六十八話　太上老君現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達一行は何とか六耳（ろくじびこう）?猴を撃退しました。

彼の背後にいる第六天魔王は更に強力な敵です。

「ほい」

樹里達の所に太上老君がやって来ました。

「何しに来た、ジジイ?」

孫左京が睨みます。

「左京、失礼よ!」

天界にいた事がある蘭が窘めます。

「こたびはようやったな、猿」

老君はそう言いながら亜梨沙の巨乳を揉みます。

「何すんのよ!」

亜梨沙が殴ろうとしますが老君はそれをかわし今度は蘭のお尻を触ります。

「お止め下さい」

蘭は老君と顔見知りなのできつい事が言えません。

「いい加減にしろ！」

左京が老君を如意棒で殴ります。

「さすがに痛いぞ、それは」

涙目で抗議する老君ですが、蘭と亜梨沙の冷たい視線を浴び、しょげます。

「そんな事をしに来た訳じゃねえだろ？　用件を言え」

左京は樹里を庇いながら言います。

老君が樹里にエロ攻撃をしたら容赦なく叩き伏せるつもりです。

第百六十九話　太上老君の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

仙人の頂点である太上老君が樹里達の所にやって来ました。

「本題に入ろうかの」

老君は一同を見渡します。

「あの六耳（ろくじびこう）？猴の背後には、仏法の破壊者である第六天魔王がおる」

「ああ。そうみたいだな」

孫左京は警戒心を緩めません。

「これからの旅は今まで以上に厳しくなるぞ」

老君が真顔で言ったので左京と蘭はギクッとしました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「困った事があったらいつでも呼んでくれ。儂はすぐに駆けつける」

老君はそう言って蘭と亜梨沙のお尻を触ります。

「きゃあ！」

二人が叫んだ時、老君はすでに消えていました。

「呼ばないでね、左京」

亜梨沙が言いました。

「誰が呼ぶか、あんなスケベ」

左京は言いました。

「あのジジイに比べれば猫の方がまし……」

そこでリックがいない事に気づいた一行です。

リックは遠い町にいました。

「誰も来ないにゃん……」

第百七十話　マザコン妖怪登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるため西を目指してます。

樹里達は先発していた（？）猫のリックと合流し次の国を目指します。

そこは昼尚暗い森が続く所です。

「何だか怖いわ、左京」

そんな事を言いながら孫左京に身体を密着させている亜梨沙です。

「くっつくな！」

左京が怒鳴ります。

「あんたもよ、エロ猫！」

亜梨沙のお尻にしがみついていたリックが蹴飛ばされます。

「強烈なスケベジジイの後だと猫のエロに気づかなくなりそうね」

蘭が言います。

「そんな凄い奴がいるのかにゃん。僕は弟子になりたいにゃん」

リックは憧れの目で言います。

「変態共が」

左京が吐き捨てます。

「見つけたぞ！」

森の上から声がしました。

「誰だ！？」

左京は周囲を見渡します。

「ママの仇め」

「ママだと？」

左京が眉をひそめます。

「エンドラさんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が奥様は魔女だ！」

声の主が姿を現します。

「てめえは紅孩児（こうがいじ）か？」

左京が言いました。

第百七十一話　鉄扇公主の息子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達一行は、深い森の中で妙な妖怪に出会いました。

孫左京はその妖怪を知っているらしく、

「てめえは紅孩児（こうがいじ）か？」

「猿に呼び捨てにされる覚えはない。よくもママを苛めたな」

紅孩児は左京を睨みつけます。

「ママ？　鉄扇公主を苛めた覚えはないぞ」

左京が言い返します。

「鉄扇公主の子供なの？」

亜梨沙が驚きます。

「豚、ママを呼び捨てにするな」

「何ですって！？」

亜梨沙が切れます。

「亜梨沙、そいつ、芭蕉扇を持ってるわ」

蘭が囁きます。

「え？」

亜梨沙は馬の馨の後ろに隠れます。

「河童、伊達に年食ってないな」

紅孩児は口が悪いようです。

「うるさいわね！」

蘭も切れました。紅孩児は芭蕉扇を出し、

「ママの仇だ！」

といきなり振るいます。

「きゃあ！」

「にゃん！」

亜梨沙と蘭とリックが飛ばされて、木に叩きつけられます。

「次は貴様だ、孫左京！」

紅孩児は左京を見ました。

第百七十二話　芭蕉扇対芭蕉扇？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鉄扇公主の息子の紅孩児（こうがいじ）が攻撃して来ました。

「お師匠様、お願いします」

孫左京は樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里は馨から降りて背中の偽芭蕉扇を持ちます。

「それは只の扇。何をするつもりだ？」

紅孩児は鼻で笑いました。

「えい！」

樹里が扇を振るうと紅孩児は遥か彼方の木まで飛ばされました。

「な、何？」

彼は理解不能のようです。

「ふざけやがって！」

紅孩児は木から抜け出すと樹里に突進し、

「お返しだ！」

と芭蕉扇を振るいますが、

「ひえぇ！」

と馬の馨が飛んだだけで樹里は笑顔全開です。

紅孩児は頭が混乱しました。

「このやろ！」

彼はすり替えられたと思い、樹里の扇と取り替えます。

バカな子のようです。

「おら！」

当然扇いでも何も起こりません。

樹里も扇ぎます。

「えい！」

今度は本物の芭蕉扇なので強力です。

「うへぇ！」

紅孩児は森の外まで飛ばされました。

第百七十三話　紅孩児の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

紅孩児（こうがいじ）は樹里のデタラメな芭蕉扇攻撃に遭い、遥か彼方に飛ばされました。

「あの坊主、許さない！　あいつがママを苛めたんだな」

思い込みと逆恨みで出来ているのが紅孩児のようです。

樹里達は紅孩児を撃退しまた進み始めました。

「あのマザコン、また来るんじゃない？」

亜梨沙が孫左京に言います。左京は、

「来るだろうな。でも芭蕉扇の本物はこっちにあるから大丈夫だ」

「窮鼠猫を噛むにならなきゃいいけどね」

蘭が難しい事を言います。

「嫌だにゃん、猫は噛まないで欲しいにゃん」

リックが怯えます。それを馬の馨が白い目で見ます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「待たせたな」

紅孩児が予想通り登場です。

同行者がいます。

大きな牛です。身体は人間です。蘭と同じく腰蓑を着けています。

「友達のみのぽんた君だ。お前達をやっつけてくれるそうだ」

紅孩児は得意そうです。

第百七十四話　みのぽんた現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

紅孩児（こうがいじ）は友達のみのぽんたを伴い戻って来ました。

「ぐお！」

みのぽんたは雄叫びを上げて左京達に向かってきます。

右手に大きな斧を持っています。

「おら！」

左京が斧を如意棒で受けます。

「馬鹿力め！」

左京の足が地面にめり込みます。

「坊主、お前は僕が殺してあげるよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「そうはさせないわよ！」

蘭と亜梨沙が立ち塞がります。

「邪魔するな！」

紅孩児が火を吐きます。

「きゃ！」

蘭と亜梨沙は驚いて避けます。

「ならば僕が！」

馨が龍に変化し水で火を消しました。

「三匹かかりとは卑怯だぞ！」

紅孩児が言います。

「では私が」

樹里が前に進み出ます。

「かかって来い」

紅孩児が言うと、

「オンメイギャシャニエイソワカ」

樹里は八大龍王真言を唱えました。

洪水が起こり紅孩児は流されました。

「ひい！」

みのぽんたは彼を助け出すと逃げました。

第百七十五話　しつこい紅孩児編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

紅孩児（こうがいじ）とみのぽんたの攻撃を退けた樹里達は森を抜けて次の国に入りました。

畑が広がる所を過ぎると街に出ます。

「待たせたな」

そこへまた紅孩児が現れました。みのぽんたも一緒です。

「しつけえよ、てめえら！」

孫左京が進み出て如意棒を出します。

みのが左京に突進します。

「またお前か！」

激しい戦いが始まります。

「坊主、今度はさっきみたいにはいかないぞ」

紅孩児は一足飛びに樹里のそばに飛翔します。

「お師匠様！」

それに気づいた左京と蘭と亜梨沙が叫びます。

「死ね！」

紅孩児は火を吐きました。

「危ない！」

馨が避けますがそのせいで樹里が落ちます。

「きゃ！」

樹里の帽子が飛びます。

「何が『きゃ！』だ！　止めだ！」

紅孩児が樹里に迫ります。

「お師匠様！」

蘭と亜梨沙が駆け寄ります。

「あ」

紅孩児は樹里が女の子だと気づきました。

「ママに似てる」

紅孩児は呟きました。

第百七十六話　孫左京対みのぽんた編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が紅孩児（こうがいじ）と戦っている時、孫左京は牛の妖怪みのぽんたと激突していました。

「このヤロウ！」

「ぐおお！」

ぽんたは怪力です。左京が押されています。

「こいつ、牛魔王より馬鹿力だ」

左京は焦りました。

「ぐうう！」

ぽんたの腕に更に力が入り、左京の両足が地面にめり込みます。

「ぬおお！」

その時、視界の端に樹里が馨から落ちるのが見えました。

「お師匠様！」

左京はエロパワーがみなぎり、みのぽんたを押し返します。

「どりゃあ！」

如意棒が一閃し、ぽんたは倒れました。

左京は樹里に駆け寄りました。

「てめえ！」

左京が攻撃しようとすると、紅孩児は、

「兄（あに）さん、よろしくお願いします」

と頭を下げました。

「はあ？」

拍子抜けする左京です。

樹里の女の子力により紅孩児は弟子になりました。

「お師匠様、ママに似てるんだ」

照れ臭そうに言う紅孩児は気持ち悪いです。

第百七十七話　みのぽんた、切れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

紅孩児（こうがいじ）は樹里の弟子になりました。

孫左京は不満そうです。

「お師匠様はママと同じくらい奇麗です」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「さあ、兄さん、姉さん、行きましょう」

紅孩児はやる気満々です。

亜梨沙と蘭は白けており、馨は敵意に満ちた目で見ています。

リックはその隙に亜梨沙の胸を揉もうとして殴られます。

その時でした。

「グガー！」

みのぽんたが起き上がりました。

彼は激怒しています。

「みの君、もういいんだよ、戦わなくても」

紅孩児が言いました。しかしみのは納得がいかないようです。

「ぐがおお、ぐごあああ！」

みのが叫びます。そして紅孩児を斧で叩き伏せます。

「ぐう……」

みのは更に亜梨沙達に襲いかかります。

「てめえ！」

左京が斧を如意棒で受けます。

亜梨沙が小声で、

「けしかけといて自分だけ弟子になったりしたら普通怒るわよね」

と蘭に言いました。

第百七十八話　みのぽんた、暴れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

紅孩児（こうがいじ）は、樹里に敗れ、弟子になりましたが、みのぽんたは納得がいきません。

「ぐがお！」

斧を振り回して猛り狂うみのは、孫左京ですら手を出せない状態です。

「あいつと会話ができる紅孩児がやられちまったからな」

左京は気絶している紅孩児を見ます。

「お師匠様を守るぞ」

亜梨沙と蘭が頷きます。すると樹里が、

「私が説得しましょう」

と進み出ました。

「危ないですよ！」

左京が止めようとしましたが、樹里はみのに近づきました。

「朝ズバいつも見てます」

樹里が笑顔全開で言います。

「そのみのじゃないです」

左京達は項垂れました。

「が？」

みのの動きが止まります。

樹里は帽子が取れたままなので、只今「女の子パワー」全開です。

しかもみのは大きいので樹里は上目遣いのウルウル瞳です。

「ごお！」

みのは斧を投げ出し樹里に跪きました。

一件落着です。

唖然とする左京達でした。

第百七十九話　牛魔王との再会編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

みのぽんたは樹里に敗れ、弟子になりました。

紅孩児（こうがいじ）とみのが弟子になり、一行は大所帯です。

「多過ぎるわ、これだと」

食い扶持が減りそうな予感の亜梨沙は心配しています。

「それはともかく、面倒な事になりそう」

蘭も不満そうです。

リックも、紅孩児が樹里から離れないので樹里に擦り寄れません。

「お師匠様にスリスリできないにゃん」

それはちょうどいいんだよ、と孫左京は思いました。

すると牛魔王が雲に乗って現れました。

「紅孩児、何を考えてる！」

「うるせえよ、親父！」

母は「ママ」なのに父は「親父」。根深いマザコンです。

「母上がお前の声を聞きたがっている。すぐに行け」

「ママが？」

紅孩児はそれを聞くと挨拶もそこそこに飛び去ってしまいます。

「お前も儂の所に戻れ、ぽんた」

みのは名残惜しそうに樹里を見ながら牛魔王と去って行きました。

ホッとする左京達です。

第百八十話　強敵の予感編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王はみのぽんたを自分の邸に連れ帰ると、戻って来ました。

「何だ、お前？　まさか弟子になるつもりか？」

孫左京が訝しそうな目で言うと、

「違う。この先、とんでもない魔物がいると聞き、伝えに来た」

「魔物？」

リックが漏らしそうです。馨も震えます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「以前、太上老君の所にいた奴らしいのだ。途轍もなく強くて、凶暴らしいぞ」

牛魔王が真顔で言ったので左京は、

「何て奴だ？」

「獨角？大王（どっかくじだいおう）だ」

牛魔王が答えると、

「どこが痔だようですか？」

樹里が尋ねます。一同が項垂れます。

「違います。獨角？大王です」

「そうなんですか」

左京は牛魔王を見て、

「どんな奴なんだ？」

「それはわからん。見た者は全員死んでいる」

「だったらどうしてそいつの事を知ってるんだ？」

「う……」

このヤロウ、話を盛ってるな、と左京は呆れました。

第百八十一話　獨角?大王の野望編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王は孫左京の旧友です。

彼はこれから先にいる魔物で、獨角?大王（どっかくじだいおう）というとても強い妖怪がいる事を教えました。

「危なくなったらこれを吹け。そうすれば助けに来る」

牛魔王が左京に笛を渡します。左京は呆れています。

「江木俊夫さんは元気ですか?」

樹里が笑顔全開で言います。

「マグマ大使じゃないです」

牛魔王は項垂れて言いました。

獨角?大王の住処です。

金兜山金兜洞（きんとうざんきんとうどう）。

大王は大きな椅子に座り、頭に一本生えた角を撫でています。

「旅の僧はどこまで来ている？」

「もうすぐこの洞窟の近くに来ます」

手下が答えました。大王はニヤリとし、

「坊主を人質にしてあのジジイに復讐してやる」

どうやらこの妖怪も逆恨みと思い込みでできているようです。

「ジジイを仕留めれば天界はこの俺様のものだ」

大王はその醜い顔同様、心も醜いのでした。

第百八十二話　獨角？大王の罠編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は何も知らないまま、獨角？大王（どっかくじだいおう）がいる金兜山金兜洞（きんとうざんきんとうどう）に近づいていました。

「猫さん」

猫撫で声で呼ばれたリックがそちらを見ると美少女が手招きをしています。

「にゃーん」

実は幼女趣味のリックは絶叫しそうです。

そしてあっさり幼女の姿をした大王の手下に捕まりました。

蘭はギクッとします。

「これは」

取れ立ての胡瓜が笊の上に山盛りです。

怪しいと思う事ができない程蘭は魅了されています。

「ああ」

蘭は胡瓜に近づき網にかかってしまいました。

「あら？」

リックと蘭がいないのに気づいた亜梨沙が振り返ります。

「あの二人、そういう関係？」

おかしな妄想を始めた亜梨沙の視界にイケメンが立っています。

「わお」

亜梨沙は無防備に近づきイケメンに殴られます。

「蘭さん達がいませんよ」

馨が言います。

「しまった！」

左京は焦りました。

第百八十三話　獨角?大王の罠その弐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

獨角?大王の罠でリックと蘭と亜梨沙が捕まりました。

「畜生、もう現れたか、妖怪め」

孫左京は如意棒を出します。

「ブヒヒン！」

急に馬の馨が雄叫びを上げます。

「どうしたんだ?」

馨は樹里を振り落として暴走します。

「お師匠様！」

左京は樹里を受け止めました。

樹里を抱えた時、右手が何やら柔らかいものを掴んでしまいました。

「すみません、お師匠様！」

左京は樹里を降ろすと土下座しました。

「そうなんですか」

樹里は何とも思っていないようです。

左京は謝りながら洪水のような鼻血に苦しんでいました。

馨は蘭の幻を見せられていました。

「馨ちゃん、いらっしゃい」

艶かしい顔で誘う蘭。馨は突進しあっさり落とし穴に落ちます。

「馨も捕まったか」

左京はきんと雲を呼び、樹里と共にそれに乗ります。

「しっかり掴まって下さい」

「はい」

左京は至福の時を過ごしました。

第百八十四話　獨角?大王現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

獨角?大王（どっかくじだいおう）の罠で次々に弟子が囚われの身となった樹里一行。

孫左京は、

（このままずっとお師匠様と二人きりで旅をしたい）

などと不届きな妄想に耽ります。

その時です。

「お猿さん!」

樹里が叫びました。

左京がハッとして前を見ると、大きな身体で角が一本生えた魔物が雲に乗って待ち構えています。

「獨角?大王か?」

左京は樹里を庇うようにして構えます。獨角?大王はニヤリとして、

「孫左京、その坊主を貰い受ける」

と大きな声で言います。

「うるせえんだよ！　そんな大声出さなくても聞こえるって」

左京はきんと雲を反転させて樹里を逃がします。

「てめえはここでくたばれ、化け物！」

如意棒を振り上げて左京が飛びます。

「バカめ。この儂に勝てると思ったか」

大王は懐から白く輝く輪を取り出します。

「吸い込め」

「何？」

如意棒がその輪の中に吸い込まれてしまいました。

第百八十五話　孫左京奮闘する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

獨角（どっかくじだいおう）？大王が出した不思議な輪で如意棒を取られた左京は、

「このヤロウ！」

と素手で大王に攻撃します。

「バカめが！」

しかし大王はあのみのぽんたより怪力です。

「ぐうう！」

左京は右腕を折られました。

「くそ！」

慌てて隼に化け、逃走します。

「逃がさぬぞ、猿！」

大王が追って来ます。

（俺はともかくお師匠様だけは！）

左京はきんと雲に追いつきました。

「ブ」

樹里はきんと雲の上で太腿丸出しで飛んでいます。

風で衣が捲れているのです。

左京の身体に訳のわからない力が漲ります。

多くの人はエロパワーと呼びます。

「てめえはついて来るな！」

左京は元の姿に戻り、大王の角を蹴り飛ばします。

「ぐあぁ！」

大王は逃げ出しました。

「角が弱点なのか？」

左京はきんと雲に降りました。

「お猿さん」

樹里が嬉しそうに左京を見ます。

「無事で良かったです」

左京も微笑みました。

第百八十六話　孫左京、西の龍王を訪ねる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

獨角(どっかくじだいおう)？大王を何とか撃退した孫左京は折られた右腕の激痛に耐えながら、樹里と共に西の龍王の宮へと向かいました。

龍王はすぐに最高の治療師を左京の怪我の回復に当たらせました。

「厄介であるな、それは」

龍王は左京と樹里に言いました。

「獨角？大王は、あの六耳(ろくじびこう)？猴より始末が悪い。彼奴(あやつ)の持つ輪は金剛琢と言って、あらゆる武器を吸い込んでしまうのだ」

「黄金の豚ですか？」

樹里がボケます。

「字は似ているが、全然違う」

龍王が突っ込みます。

「元は太上老君の持ち物なのだ。彼奴が老師様の所から逃げ出す時、持って行ったらしい」

「またあのジジイ絡みかよ」

左京はムッとしました。

「彼奴に勝つのは至難の業。天界に助けを求めた方が良い」

左京は返事をしませんでした。

二人は龍王の宮を出ました。

亜梨沙達を助けなければならないからです。

第百八十七話　孫左京、命懸けの戦いを決意する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

西の龍王の宮を出て、孫左京と樹里は亜梨沙達がいなくなった場所に戻りました。

「お猿さん」

樹里が真顔で言います。左京は思わず緊張します。

「ありがとう。本当にありがとう。貴方がいなれば、私は……」

樹里が涙を流します。左京はどうしたらいいかわからなくなってしまいました。

あまりに感動したので、鼻血を出すとかのエロ展開はありませんでした。

（これで俺の中の恐怖心は消えた。死んでもお師匠様を守る。そして、何としてもあの妖怪を倒す）

獨角（どっかく）？大王（じだいおう）に怖じ気づいていた自分に気がついた左京は、樹里の言葉に奮い立ったのです。

（そして生きて返れたら、お師匠様と……）

結局最後は鼻血を噴き出す左京です。

しかし、どうすれば勝てるのか思いつけません。

「畜生、結局あのジジイに頼るしかないのか」

左京は樹里を牛魔王の邸に匿ってもらい、天界へ向かいました。

第百八十八話　太上老君の教え編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里の涙を見て、獨角(どっかくじだいおう)？大王との決戦に挑む決意をしました。

彼は忌ま忌ましく思いながらも、太上老君の所に出向きます。

「よう来たな、猿。あのバカ者が現れたか」

太上老君は余裕の笑みです。左京はムッとして、

「てめえのバカ弟子のせいで酷い目に遭った。何とかしてくれ」

「彼奴(あやつ)は我が弟子にあらず」

老君は恍けます。左京はイライラして、

「禅問答してるんじゃねえんだよ！　どうすればいいのか、それを教えろ。あいつはへんな輪っかを持っていやがるんだ」

「それは金剛琢じゃな。あらゆる武器を吸い込んでしまう」

「そんな事は龍王のジイさんに聞いたよ！　対策を教えてくれ」

左京が詰め寄ります。老君はニヤリとして、

「その引き換えに頼みがある」

老君の提案に左京はゾッとしましたが、背に腹は代えられません。

「わかった。頼んでみる」

と答えました。

第百八十九話　孫左京、金兜山金兜洞に行く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君に秘策を授かった孫左京は、獨角？大王がいる金兜山金兜洞に向かっています。

左京の動きを知った大王は、手下をその隙に牛魔王の邸に向かわせます。

「猿はどうでもいい。儂が手に入れたいのはあの坊主だ。天界を脅迫するには、あの坊主がどうしても必要なのだ」

大王はその自信から、手下の全てを牛魔王の邸に行かせ、たった一人で左京を待ち構えます。

「あそこか！」

左京はきんと雲から飛び降り、洞窟の中に入ります。

「よく来たな、猿。恐れを知らぬ愚か者よ」

大王はニヤリとします。その後ろに囚われの身となった亜梨沙達が檻の中に入れられているのが見えます。

「左京！」

亜梨沙と蘭が叫びます。

「左京さん！」

馨が涙ぐみます。リックは寝ていました。

「来い、猿。まだ返り討ちにしてやる」

獨角？大王は金剛琢を出して言いました。

第百九十話　牛魔王、奮闘する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は孫左京の旧友である牛魔王の所に匿われています。

「お館様、獨角?大王の手下がやって来ました」

牛魔王の部下が告げました。

「隙を突く気か。舐めおって！」

牛魔王がいつになくやる気満々なのは樹里がいるからでしょうか?

「牛魔王さん、頑張って下さいって言って下さい」

牛魔王は樹里にお願いしました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で、

「牛魔王さん、頑張って下さい」

「はい！」

大喜びで邸を出て行こうとした時、牛魔王は奥方である鉄扇公主が入って来たのに気づきます。

「後でお話があります、お館様」

静かに言う鉄扇公主に蒼ざめる牛魔王です。

鉄扇公主は樹里の前に跪き、

「貴女のお命を狙う者は我らが全て排除致します故、ご安心下さい」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

牛魔王は部下達と共に大混戦です。

敵も強く、牛魔王は苦戦しました。

第百九十一話　孫左京の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は獨角大王（どっかくじだいおう）と睨み合います。

「猿、お前の如何なる武器も無力だと学ばなかったのか？」

大王が挑発します。左京はニッとして、

「対策は万全だぜ！」

と言うと如意棒を出します。

「何が万全だ！」

金剛琢が如意棒を吸い込みます。

「ありがとさん」

左京はそう言うと消えてしまいました。

「何？」

大王がギョッとします。

左京は如意棒に化け自分の分身を使ったのです。

「ここが金剛琢の中か」

左京は無数の武器が漂っている不思議な空間にいました。

「あった！」

左京は如意棒を見つけました。

「見てろよ！」

左京は如意棒を持ち、

「伸びろ！」

と叫びます。如意棒は大きく太くなります。

「む？」

獨角？大王は金剛琢が振動しているのに気づきました。

「猿め、何をした！？」

次の瞬間、金剛琢の穴から如意棒が飛び出し、大王の顔を突きました。

「ぐが」

大王は後ろに倒れました。

第百九十二話　獨角ʔ大王の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は如意棒が開けた穴から武器を抱えて飛び出します。

「ざまあ見ろ、間抜け」

左京は金剛琢を奪い取り大王を蹴飛ばします。

「よくやった、猿」

そこへ太上老君が現れます。

「スケベジジイ！」

蘭と亜梨沙がハモります。

「老師様！」

獨角ʔ大王が震えます。

老君が右手をかざすと、大王が牛になりました。

「こやつは儂の乗り物じゃ。隙を見て宝を盗み、妖力を身につけたのじゃ」

「自分の乗り物くらいちゃんとしろ！」

左京が怒ります。老君はニヤリとして、

「そう言うな」

と亜梨沙のお尻を撫でます。

「きゃ！」

更に胸を揉みます。

「あんたね！」

亜梨沙が老君を振り解こうとすると、

「亜梨沙、堪えてくれ。それがジジイへの報酬なんだ」

左京が俯いて言いました。

「ええ！？」

亜梨沙は仰天しました。

「お持ち帰りはできんのか？」

老君が言ったので、

「いい加減にしろ！」

と蘭が踵落としを決めました。

第百九十三話　旅の再開編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西をめざしています。

亜梨沙は自分が犠牲になった事で怒っています。

「そんな条件を呑むなんて酷い」

亜梨沙は泣いています。左京は、

「亜梨沙達を救い出すためにジジイの知恵が必要だったんだ」

「どうして私なの？」

亜梨沙はまだ怒っています。左京は小声で、

「お前が一番奇麗で可愛いからだよ」

亜梨沙が途端にご機嫌になります。

「そりゃそうよね」

得意そうに蘭を見る亜梨沙です。

「何？」

蘭は不思議そうです。

（本当は亜梨沙が単純で騙しやすいからだなんて絶対言えねえ）

左京達は牛魔王の邸に行きました。

「随分苦戦したんだな」

顔が腫れた牛魔王に左京が言います。

「強敵だったよ」

牛魔王は奥方の鉄扇公主にビンタされたとは言えません。

「樹里様、ご無事で」

牛魔王達に見送られ樹里達は旅に戻りました。

「猫さんは？」

樹里の言葉に左京達はハッとします。

リックは洞窟で目覚めました。

「何故誰もいないにゃん？」

第百九十四話　巨大な魔物編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は峠を越え、大きな湖のある国に出ました。

「榛名湖ですか？」

樹里が言います。

「違います、お師匠様」

孫左京はローカルなボケに項垂れます。

「蘭湖と言う湖です。凶暴な魔物が棲んでいると聞きました」

蘭が言いました。

「あんたの事じゃないの？」

亜梨沙がすかさず茶化します。

「そう言われると思ったから、調べたのよ」

蘭は紙を取り出して、

「湖周辺に住む人々の言い伝えでは霊媚阿壇（れびあたん）という大きな鯨のような魔物が棲んでいるとか」

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言います。

「何だ？」

左京が前から列を成して歩いて来る一団に気づきます。

黒尽くめの服を着て、頭がすっぽり隠れる黒い頭巾を被った人達です。

「レービアタン、レービアタン……」

左京達はその声にギョッとします。

「え？」

気づくと樹里達はその一団に囲まれています。

左京が樹里を庇うように立ちました。

第百九十五話　霊媚阿壇のいる湖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は大きな湖「蘭湖」がある国に来ました。

そこでいきなり怪しい黒尽くめの一団に囲まれます。

「レービアタン、レービアタン……」

どこかで聞いた事があるようなノリで迫り来る一団です。

「やる気か？」

孫左京が凄みます。

ところがその一団はクルクルと樹里達の周りを巡ると、そのまま去ってしまいました。

「何なんだ、あいつら？」

左京が訝しそうに呟きます。

「あの人達は、あなた達のために呪文を唱えてくれたのです」

可愛らしい女の子がいつの間にかそばにいて言いました。

早速幼女趣味のリックが動きます。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「私は美子（メイズ）と言います」

美子はリックを見ないで樹里に答えます。

「この湖にいる霊媚阿壇は恐ろしい魔物です。決して湖には近づかないで下さい」

美子が言った時、すでに亜梨沙と蘭が水浴びをしています。

その様子を見て馬の馨が鼻血を出しました。

第百九十六話　蘭と亜梨沙攫われる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は大きな湖のある国で美子（メイズ）という少女と出会いました。

「危ないです、すぐに離れて下さい」

美子は湖に入ってはしゃぐ蘭と亜梨沙に言いました。

亜梨沙はともかく蘭までそんな事をするのは妙です。

「取り込まれています、あのお二人」

美子が言います。孫左京が、

「取り込まれてる？　どういう事だ？」

「とにかく、お二人を湖から離れさせて下さい」

美子がすがるような目で左京を見ます。

「僕が助けるにゃん」

幼女趣味のリックが走ります。

美子にアピールするつもりのようです。

「亜梨沙ちゃん、蘭ちゃん、危ないからそこから出るにゃん」

「お前の方が危ない」

声を揃えて言われリックは落ち込みます。

「何してるんだ、猫！」

左京がきんと雲で二人を連れに行こうとした時です。

湖の水が膨張したように膨れ上がり高波が押し寄せます。

「きゃあ！」

蘭と亜梨沙は波に呑まれてしまいました。

第百九十七話　霊媚阿壇現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

湖に突然高波が起こり、蘭と亜梨沙が呑まれてしまいました。

「くそ！」

孫左京はリックを救い、

「馨、逃げろ！」

と叫びます。

「水なら任せて下さい！」

馨は樹里を乗せたまま龍に変化し、高波を押し返します。

「あの子がいないにゃん」

リックが言いました。左京がハッとして辺りを見回すと、美子の姿が消えていました。

「波にさらわれたのか？」

左京は訝しそうな顔です。

「さ、左京さん！」

馨の怯えた声を聞き、左京は振り返りました。

そこには、天にも届きそうな巨大な鯨のような魔物がいました。

魔物は湖から浮かび上がり浮遊しています。

その背中で蘭と亜梨沙が気絶しているのが見えました。

「誰だ、てめえは!?」

左京が怒鳴ります。その魔物は、

「我が名は霊媚阿壇（れびあたん）。湖の守り神なり。その坊主を我が生け贄として差し出せ」

と言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第百九十八話　勝負にならない編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に遂に湖の魔物である霊媚阿壇（れびあたん）が現れました。

「お師匠様を生け贄だと？　ふざけるな！　一昨日来やがれ！」

孫左京は如意棒を伸ばし、霊媚阿壇を突きました。

「空の果てまで吹っ飛べ！」

更に如意棒を伸ばします。

「うわわ！」

ところが霊媚阿壇は微動だにせず、左京が如意棒と共に地面にめり込みます。

「ぐ……。バカな……」

左京は慌てて如意棒を縮めます。

「愚か者。我はこの世と同じ重さ。この世を動かせる者にしか我は動かせぬ」

霊媚阿壇がニヤリとしました。鯨の姿なので、その顔は強烈です。

「猿如き我が動くまでもなし。我が僕（しもべ）で十分」

「しもべ？」

左京はギクッとしました。霊媚阿壇の背中にいた亜梨沙と蘭が起き上がったのです。

「行け、我が僕よ」

亜梨沙と蘭は霊媚阿壇から飛び降り、左京に突進します。

「やめろ、二人共！」

左京は蘭と亜梨沙に叫びました。

第百九十九話　孫左京、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊媚阿壇（れびあたん）が操る蘭と亜梨沙が樹里に襲いかかります。

「仲間を攻撃できるか、猿？　しかも相手はおなごぞ」

霊媚阿壇は得意そうに言います。

「きー！」

蘭は竜巻を起こし亜梨沙は豚に戻ってボディアタックです。

「ふざけるな、てめえら！」

左京は容赦なく二人を叩き伏せます。

「鬼だな、お前は」

霊媚阿壇は呆れています。

「誰であろうとお師匠様に危害を及ぼす奴は許さない」

左京は霊媚阿壇を睨みます。

「鯨さん、あいつはお師匠様に弱いにゃん」

いつの間にか敵方に寝返ったリックが言います。

「てめえ！」

左京は激怒しました。

「そうか」

霊媚阿壇は蘭と亜梨沙を樹里の姿に変えました。

「げ」

顔だけ樹里に変わったので胸当てと腰蓑だけの樹里とボディコンの樹里です。

「……」

左京は鼻血を噴き出します。戦闘不能です。

「えいえい！」

日頃の怨みも加わり二人は左京をボコボコにしました。

第二百話　樹里、起動する？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里の姿をした蘭と亜梨沙にボコボコにされました。

「二人共、やめて下さい！」

馨が樹里を降ろし、左京を救出します。

「龍よ、お前は我と近い一族。何故人間に味方するのだ？」

霊媚阿壇（れびあたん）が馨を睨みます。

「人間は間違いばかりする。この世が乱れているのも全て人間のせいだ。人間は滅ぶべきなのだ」

霊媚阿壇の迫力のある言葉に馨は怖気づいてしまいます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ならば坊主、お前が人間の代表として我の生け贄となれ。さすれば人間を許そう」

霊媚阿壇が言います。すると左京が、

「ふざけるな、化け物。人間を皆殺しにするならすればいい。だが、

お師匠様だけは生け贄になんかさせねえぞ！」

と怒鳴ります。

「お猿さん」

樹里が声をかけます。

「それは間違っています。私は人間達全てを救うために旅をしているのです」

左京はハッとしました。

第二百一話　樹里、霊媚阿壇と対決する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は孫左京を諭してから、霊媚阿壇（れびあたん）を見上げます。

「ところで、ワンタンさん」

「誰が中華料理だ！」

樹里のいきなりのボケに霊媚阿壇が切れます。

「貴女はどうしてそれほど人間を憎むのですか？」

「そのような事、お前に話す必要はない」

霊媚阿壇は身体を震わせて怒ります。

「僕達よ、その坊主を捕えよ」

再び蘭と亜梨沙が樹里に向かいます。

「くそ」

左京は動く事ができません。

「お師匠様！」

代わりに馨が立ち塞がります。

「きーっ！」

蘭と亜梨沙の容赦のない攻撃が馨を痛めつけます。

馨は樹里の前から動きません。

「大丈夫ですよ」

樹里が前に進み出ます。

「オンマリシエイソワカ」

樹里は摩利支天の真言を唱えました。

「グガッ！」

蘭と亜梨沙は真言の力で衝撃を受け倒れました。

「レンタンさん、教えて下さい」

樹里が更にボケます。

「誰が固体燃料だ！」

霊媚阿壇はまた切れました。

第二百二話　美子の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は巨大な魔物である霊媚阿壇（れびあたん）と話しています。

左京は馨が治癒していて蘭と亜梨沙は倒れたままです。

リックは霊媚阿壇のそばで大威張りです。

「ところでジャックランタンさん」

樹里が言います。

「誰がカボチャだ！」

霊媚阿壇が切れます。

「貴女が人間を憎む理由がわかりました」

「何？」

霊媚阿壇は目を見開きます。

「人間の男の子に振られたのですね」

「違う！」

霊媚阿壇は更に切れます。

「では先程いた少女は何故貴女と同じ気を持っているのです？」

樹里の問いかけに霊媚阿壇は息を呑み、左京達は驚愕します。

「出直す！」

霊媚阿壇はそう叫ぶと湖に戻ってしまいました。

「あ」

リックは慌てました。そして、

「ほら、僕の陽動作戦だったにゃん」

と嫌な汗を掻きながら言います。

「お師匠様、さっきの女の子は……」

左京が言った時、

「私がお話します」

美子（メイズ）が現れました。

第二百三話　美子の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美子（メイズ）は樹里達を見渡して、

「お坊様のお察しの通り、私は霊媚阿壇（れびあたん）の娘です」

左京と馨とリックが驚きます。

「母は私が人間に憧れて人間の姿になったのを怒っているのです」

「それで人間は滅びるべきだと？　勝手だな」

左京が起き上がって言いました。

「それだけではありません。父が人間の女性に心を奪われたのもいけないのです」

「鯨か？」

左京が尋ねます。

「サイです」

「サイ？」

左京達はサイを知らないようです。

「フレイさんの元婚約者ですか？」

樹里が言います。

「マニアック過ぎてボケ切れてません」

左京が突っ込みます。

「父の名は部秘模洲（べひもす）。この世の全てと同じだけの重さがある魔物です」

美子が答えました。

「お坊様、父に会って下さい。母と仲直りするように説得して下さい」

美子が涙ぐんで言います。

「僕からもお願いするにゃん」

リックが言いました。

第二百四話　部秘模洲の棲む山編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、巨大な魔物である霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）の娘である美子（メイズ）の案内で、湖の反対側にある高い山へと入りました。

「何が何だかわからないんですけど」

霊媚阿壇に操られていた蘭と亜梨沙は事情がわからないまま山を登っています。

「この山の向こうに父がいます」

美子が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「もう一歩も歩けないにゃん」

リックがフラフラします。

「大丈夫？」

美子が心配して声をかけると、

「気をつけてね。そいつは女と見れば見境なく襲いかかるから」

蘭が警告します。リックが小さく舌打ちしたのを馨は聞き逃しませんでした。

やがて樹里達は尾根に出ました。

山の向こうに更に大きな山が見えます。

「父さん、いる?」

美子が声をかけると、遠くの山が動きました。

「山が動いた!」

亜梨沙が涙ぐんで孫左京に抱きつきます。

第二百五話　部秘模洲の言い分編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は美子（メイズ）の父である部秘模洲（べひもす）に会いに来ました。

「山ではありません。父です」

怯える亜梨沙に美子が言います。

山と思われたのは天に届きそうな巨大なサイです。

角だけで変化した馨より大きいです。

「何だ、美子？　仲裁ならいらんぞ」

部秘模洲が喋ると樹里達のいる山が揺れました。

「父さん、そのままでは話せないわ。人間の姿になって」

美子の声に答え、部秘模洲は人間に変化しました。

超男前です。キム○クも水嶋○ロも敵いません。

「おお！」

蘭と亜梨沙が雄叫びを上げます。

「ところで、バラモスさん」

樹里が言います。

「誰がドラクエの中途半端なラスボスだ！」

部秘模洲はマニアックに切れました。

「貴方の奥方が人間を憎んでいる理由を聞きました」

樹里がまともバージョンで説きます。

「余計なお世話だ。人間に言われる筋合いはない」

部秘模洲は聞く耳を持ちません。

第二百六話　意外な相手編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が会った美子（メイズ）の父である部秘（べひもす）模洲は人間の女性と浮気をしています。

「私はその女性と真剣に交際しているのだ。女房とはよりを戻すつもりはない」

部秘模洲は全く聞くつもりがないようです。

「それなら、女の人の所に行くわ」

美子が言いました。

「構わぬ。行け」

部秘模洲が言います。

「私はここで待っています」

亜梨沙が言います。

「何言ってるのよ、私がここで待つわ」

蘭が言います。また醜い罵り合いが始まります。

「二人は置いて行きましょう」

孫左京が言いました。

帰りは龍に変化した馨に乗り、山を下りました。

そして相手の女性の所へ向かいます。

女性の家は湖から見えない所にありました。

「ごめん下さい」

美子が声をかけます。

「はい」

中から女性が現れました。

女性は樹里にそっくりです。

「姉上ですか？」

樹里の言葉に美子も驚きました。

女性は樹里の姉でした。

第二百七話　樹里の姉は璃里編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は美子（メイズ）の父である部秘（べひもす）模洲の浮気相手の家に行きました。

するとその相手は樹里の姉の璃里でした。

樹里は璃里に事情を説明しました。

「そうなのですか」

璃里は美子を見て、

「私のせいでご不快な思いをさせて申し訳ありません」

「いいえ、そんな」

美子は璃里が頭を下げたのでビックリしています。

「その上、我が妹の旅の妨げになるのは本意ではありません。部秘模洲様とお話します」

樹里達は璃里を伴い、もう一度部秘模洲の所に向かいました。

璃里は部秘模洲に詫び、別れてくれるように言いました。

しかし部秘模洲は納得しません。

「今更そのような事を言うな！　お前も私と添い遂げたいと言ったではないか！」

部秘模洲は怒り心頭です。

「そうよそうよ。勝手よ、貴女！」

何故か亜梨沙と蘭が加勢します。

部秘模洲に取り込まれたようです。

「お前らな！」

左京が怒りました。

第二百八話　奥の手？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は部秘模洲の浮気相手の璃里と共に部秘模洲の説得に向かいましたが、彼は頑として聞き入れません。

「そこまで言うなら、手切れ金をよこせ」

部秘模洲は結局は金の男のようです。

「てめえ、せこいぞ！」

孫左京が怒鳴ります。すると亜梨沙と蘭が、

「猿！　引っ込んでなさい！」

「何だと！？」

関係ない者達がもめている時、璃里は泣いていました。

「そんな。私達の関係はお金で片付くものでしたの？」

璃里のウルウル瞳を見て部秘模洲が狼狽えます。

「いや、そんな……」

璃里は上目遣いに部秘模洲を見て、

「どうかお聞き届け下さい」

左京はあと一押しなのに気づきます。

「お師匠様、帽子を取ってお願いして下さい」

「そうなんですか」

樹里が帽子を取り、女の子パワーが二倍になりました。

左京とリックと馨が鼻血を吹きます。

「どうかお聞き届け下さい」

世界最強のダブルウルウルです。

第二百九話　部秘模洲、折れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と璃里のダブルウルウル攻撃を受けた部秘模洲（べひもす）は、

「わかった。別れる」

そして、

「うう！」

と鼻血を噴き出して倒れました。

ダブルウルウルは無敵でした。

「はい！」

命が危ないと感じた孫左京は樹里に帽子を被らせます。

（多分正面から見たら身体中の血が噴き出してしまう）

「父さん！」

美子（メイズ）が部秘模洲に駆け寄ります。

「義父上（ちちうえ）！」

リックも駆け寄ります。

「何言ってるんだ、あいつ？」

左京と馨は呆れています。

璃里は部秘模洲の様子を見ている美子に、

「これからはお父上と仲良く暮らして下さい」

「ありがとうございます」

美子が頭を下げます。

左京は璃里が泣いているのに気づきました。

「次は母親の方ですね」

左京は樹里に言いました。

「私がお詫びします」

璃里は一緒に行くつもりのようです。

「危険です。母は貴女を見れば殺しますよ」

美子が言いました。

第二百十話　霊媚阿壇の逆上編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は蘭と亜梨沙を残して霊媚阿壇（れびあたん）の所に向かいます。

二人は鼻血を出して倒れた部秘模（べひもす）洲の介抱をするようです。

「あんたはいいわよ、行きなさいよ」

二人は互いを行かせようとしています。

「阿呆が」

孫左京は醜い争いに呆れます。

龍の馨は蘭が部秘模洲に心を奪われているのが悲しいようです。

「誰が日清食品だ！」

蘭が切れます。どこかからパクって来たようです。

樹里達は馨に乗って湖の岸辺に戻りました。

「お母さん、出て来て」

美子（メイズ）が声をかけます。

でも霊媚阿壇は出て来ません。

「指輪を合わせると出て来るのでは？」

樹里が言います。

「誰が大魔王シャザーンだ！」

そう叫びながら、霊媚阿壇が湖から現れました。

霊媚阿壇は璃里に気づきます。

「いい度胸だ。よくもこの私の前に顔を出せたね」

霊媚阿壇は激怒しています。

璃里は死を覚悟しているようです。

第二百十一話　璃里の覚悟編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の姉である璃里は霊媚阿壇（れびあたん）に命を奪われるのを覚悟しています。

「許して下さいとは申しません。ですがお詫びは致します」

璃里は岸辺で土下座しました。霊媚阿壇はどうしていいかわからないようです。

彼女は璃里がごねると思ったのです。

「妹の樹里が経典を授かる旅をしているのに姉の私が不義を働く訳には参りません」

孫左京は璃里の潔さに涙ぐみます。

（さすがお師匠様の姉上）

「惚れたにゃん」

リックが発情しました。途端に馨に踏みつけられます。

「貴女様のお好きになさって下さい」

璃里は霊媚阿壇を見上げます。すると霊媚阿壇は苦笑いして、

「負けたよ。あんたの覚悟、確かに受け取った。あの宿六と別れてくれればそれでいい」

璃里は目を見開き、

「真でございますか、ショコタン様」

「誰がブログの女王だ！」

霊媚阿壇は切れました。

左京は璃里の気持ちを思い、涙しました。

第二百十二話　夫婦の和解編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

璃里は霊媚阿壇（れびあたん）の許しをもらい、泣いています。

孫左京達ももらい泣きです。

「ええ子や、璃里たん」

リックの目が嫌らしく光ります。

「父さんと仲良くして」

美子（メイズ）が言います。

「父さんが詫びてくれればね」

気が強い母を憂う娘です。

そこへ亜梨沙と蘭にしがみつかれて部秘模洲（べひもす）が現れました。

「性懲りもなく女を引き連れてるのかい、このロクでなし！」

部秘模洲は亜梨沙と蘭を振り落とし、

「お前とよりを戻そうと思って来たのだ」

霊媚阿壇も人間の女性の姿になります。リックは目移りしそうで

す。

「美子たんも璃里たんも捨て難いけど霊媚阿壇たんも捨て難いにゃん」

霊媚阿壇はフッと笑って、

「よく言うよ」

二人は抱き合います。美子が涙ぐみました。

「騒がせたな」

部秘模洲が言います。彼は璃里を見て、

「すまなかった」

「いえ」

璃里は気丈にも笑顔で応じました。

第二百十三話　また西へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

部秘模洲（べひもす）と霊媚阿壇（れびあたん）は和解しました。

娘の美子（メイズ）も喜んでいます。

「旅の無事を祈っている」

部秘模洲と霊媚阿壇は美子と共に雲で山の向こうへ飛んで行きました。

「ありがとう、皆さん！」

美子が手を振りました。孫左京達も振り返します。

「姉上」

樹里が心配そうに璃里を見ます。璃里は笑顔で、

「大丈夫。心配しないで旅に出て、樹里」

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「私、この人と暮らしますから」

いつの間にか妖力が復活したリックは男前に変化しています。

「やあ、僕リック」

得意満面な顔に左京達はムッとします。

特に亜梨沙と蘭は「失恋」の痛手から凶暴化しています。

「このエロ猫！」

こうしてリックは璃里と暮らす事になりました。

「では」

樹里達が去ります。

リックと璃里はそれを見送りました。

「やっと厄介払いができたな」

左京が言いました。

第二百十四話　行き倒れのイケメン編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の姉である璃里と厄介者だったリックが一緒に暮らす事になり、一行はホッと一安心です。

「お師匠様、姉上様は大丈夫なんですか？」

孫左京は樹里と瓜二つの璃里の身を案じています。

「大丈夫ですよ。姉は猫が大好きなんです」

樹里は笑顔全開です。左京は何となく背筋がゾッとしました。

ついホラーな展開を想像してしまったのです。

横で聞いていた亜梨沙も、鍋で煮られているリックを想像し、嘔吐しました。

「汚いわね、もう！」

蘭が怒ります。

やがて一行はある町に辿り着きました。

その町は城壁に囲まれていて、兵達がたくさん行き来しています。

何やら物々しい雰囲気です。

左京と蘭が宿屋を探しに行った後、樹里達のそばで若い男が倒れました。

「大丈夫ですか？」

イケメン大好きの亜梨沙が、すぐさま男のそばに駆け寄ります。

「まあ」

イケメンは結構毛深い男性で、亜梨沙の好みのタイプです。

第二百十五話　城壁の町編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は行き倒れのイケメンを助け、城壁を潜り抜けて町に入りました。

そこへ孫左京と蘭が戻って来ました。

「宿屋がありました」

左京はそう告げながらイケメンを見ます。

「何です、そいつ？」

イケメンは樹里の代わりに馨にうつ伏せに乗せられていて、馨は不満そうです。

「イケメンよ」

亜梨沙が嬉しそうに言います。

「違うって。何者なんだよ、そいつ？」

亜梨沙は肩を竦めて、

「わっかりませーん」

「欧米か！」

古い突込みをしてしまう左京です。

たくさんの兵達が城壁の外に出て、あちこち見回します。

「何があったのですか？」

樹里が兵士の一人に尋ねました。

「西から来た魔物がこの町の近くに現れたのです。そいつを探しています」

兵士は樹里が僧侶なので言葉が丁寧です。

彼は会釈をして立ち去りました。

「あ」

城壁の門が閉じられます。

「魔物相手じゃ、城壁なんて意味ねえぞ」

左京が言いました。

第二百十六話　亜梨沙、イケメンに付き添う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は宿屋に到着しました。

「こいつ、撃たれてるぞ。弾は残ってないがな」

孫左京がイケメンを馨から降ろしながら言います。

「ええ？」

亜梨沙が仰天し、左京を突き飛ばしてイケメンを看ます。

「ホントだ。可哀想に」

その時蘭はイケメンを撃った銃弾が銀の弾丸なのに気づきました。

「こいつ……」

イケメンは部屋に運ばれ、亜梨沙が付き添いました。

「亜梨沙、私も付き添うよ」

蘭が言うと、亜梨沙は、

「彼は私が先に見つけたのよ」

「そういう事じゃなくてさ」

蘭は追い出されます。

亜梨沙は不得意ながらも治癒の術を使い、イケメンの傷を治します。

「知らないからね」

蘭はそう呟き部屋を離れました。

「やっぱりそうなのか？」

左京が廊下で声をかけます。

「間違いない。狼男よ」

蘭が小声で答えます。

「ケンさんですか？」

樹里が尋ねます。

「狼少年じゃないです、お師匠様」

蘭と左京は脱力しました。

第二百十七話　亜梨沙、愛に死す？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙は傷ついたイケメンを介抱しています。

「月が綺麗……」

亜梨沙は月明かりの中、イケメンの顔を濡れた布で拭います。

でもイケメンは全く意識を回復しません。

「早く目を開けて」

亜梨沙は愁いを帯びた目で囁きます。

やがて彼女は疲れて眠ってしまいました。

部屋の窓から満月が見えます。

その時でした。

「ぐおっ」

イケメンが目を開きます。

「ふーっ」

イケメンはフワッと起き上がりました。彼は眠る亜梨沙に気づき

ます。

「ぐうう」

イケメンの顔が次第に毛むくじゃらになり、歯が大きくなり、口が裂けます。

彼は蘭の言う通り狼男のようです。

「ブヒ」

亜梨沙は気が緩んだのか、豚に戻ってしまいます。

狼男には、亜梨沙がご馳走に見えます。

「ぐおおっ！」

彼は亜梨沙に襲いかかり、腕に噛みつきました。

「いったあい！」

亜梨沙は驚いて叫びます。

「誰よ、あんた？」

亜梨沙は狼男を振り払いました。

第二百十八話　樹里、狼男と話す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

介抱していたイケメンが狼男に変身して、亜梨沙は噛みつかれてしまいました。

そこへ孫左京と蘭が飛び込んで来ました。

「とうとう正体明かしたな、狼ヤロウ。ぶっ飛ばしてやるぜ」

狼男は左京を睨みます。

「左京！」

亜梨沙が左京に抱きつきます。蘭がムッとします。

「あんたが私の忠告を聞かないから」

「うるさいわね！」

また醜い罵り合いが始まります。

「貴様らも我らの敵か？」

狼男が謎めいた言葉を吐きます。

「何言ってるんだよ、化け物！　今楽にしてやるぞ」

左京が如意棒を振りかざします。

「お猿さん」

そこに樹里が割って入ります。左京は赤面して下がります。

「何か理由がありそうですね」

樹里は左京の前に立ちます。

「ところで元木さんは元気ですか？」

「誰が大神いずみだ！」

狼男は切れました。

「お話を聞かせて下さい、シンさん」

「誰が大神雄子だ！」

マニアック過ぎてわからないボケです。

第二百十九話　樹里、狼男を説得する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は狼男の説得を続けます。

「私は貴方の敵ではありません」

樹里はまともバージョンが起動したようです。

「しかし、味方だと言う証拠もない」

狼男は疑い深いようです。

「やっぱり叩きのめしましょう、お師匠様」

孫左京が言います。

「ダメです、お猿さん」

樹里が頬を膨らませて左京を睨むと、左京は倒れてしまいました。

「か、可愛過ぎる」

彼は悶絶しています。

「話だけでも聞かせていただけませんか？」

樹里の熱心な言葉にようやく狼男は頷きました。

「わかった。但し、その猿は部屋から出してくれ」

「何だと！」

左京は抵抗しましたが、樹里の「ウルウル瞳ほっぺたプウ」の顔を見て気絶します。

左京は部屋から放り出されました。

樹里は深刻な顔をして何かを読んでいます。

「どうしたんですか？」

蘭が尋ねると、

「時代考証が間違っているとお叱りの手紙を頂きました」

蘭と亜梨沙は脱力しました。

第二百二十話　敵の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狼男は満月が雲に隠れたのでイケメンに戻りました。

「おお！」

亜梨沙はさっき噛み付かれたのも忘れて喜びます。

「我らは北の果てにある国の古き神の一族。我が王は主神である欧(おう)殿(でん)を食い殺した程のお方」

何故か亜梨沙は涙ぐんで感動しています。

「ところがそこに妙な一団が現れたのだ」

「たけし軍団ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が講談社だ！」

狼男は切れました。

「奴らは狩人だった。我が一族はそいつらに次々に殺されたが、私は何とかここまで逃れた」

「銀の一族ね？」

蘭が言います。狼男はギョッとして、

「知っているのか？」

「河童は何でも知ってるのよ」

蘭は胸を張りました。すると亜梨沙が対抗して胸を突き出します。

「銀の矢と銀の弾丸を使う魔術師達よ」

蘭は亜梨沙を押さえ込んで言います。

「そいつら、世界中の魔物を退治するんですって」

蘭は吐き捨てるように言いました。

第二百二十一話　狼の王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭は元々天界の人間なので、いろいろな事に精通しています。

亜梨沙は悔しそうに蘭を睨みます。

「銀の一族は魔力で様々なものを作り出すわ。天界でも問題になっているのよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「連中はすぐそこまで来ているはず。もうすぐここにもやって来る」

狼男が言った時、外から馨の声がします。

「大変です、大きな狼がここに向かってます！」

「大きな狼？」

狼男が嬉しそうに言いました。

「モロですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が美輪明宏だ！」

狼男は切れ疲れています。

「きっと俯炎驪琉（ふえんりる）様だ」

狼男は部屋を飛び出しました。

「ああ、待って！」

亜梨沙が追いかけます。二人共、廊下に倒れている孫左京を踏んづけて行きました。

「ぐえ！」

そのせいで左京が起き上がります。

「サンは元気ですかね」

樹里が言うと、

「鈴木敏夫に怒られますよ」

と蘭が言いました。

第二百二十二話　銀の一族対狼の王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狼男を追いかけた色ボケの亜梨沙は、町の城壁の向こうに見える巨大な狼を見てチビリそうになりました。

狼はあの巨大なサイの姿をした部秘模洲（べひもす）と同じくらい大きく、口からはどす黒い妖気、鼻からは灼熱の炎を噴き出しています。

「な、何あれ？」

亜梨沙が震えながら言うと、狼男は得意そうに胸を張り、

「我らが王、俯炎驪琉（ふえんりる）様であらせられる」

樹里が蘭とやって来て、

「フェンディさんですか？」

「誰がイタリアンブランドだ！」

狼男は脱力しています。効いているようです。

「何だよ、あいつ？」

孫左京も出て来ました。

町の住人が皆外に出て来て、近づいて来る巨大な狼を見て、

「逃げろ！」

と走り出します。

「何かで攻撃されているぞ」

目のいい左京が気づきました。

「銀の一族が矢を射ているのよ」

蘭が言いました。

「俯炎驪琉様！」

雲が切れて変身した狼男が走り出します。

第二百二十三話　孫左京、助太刀する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「俯炎驪琉（ふえんりる）様！」

狼男はどうやら自分達の王の援護に向かうつもりです。

「無茶よ。銀の一族に嬲り殺しにされるわ」

蘭が言いました。亜梨沙が、

「左京、助けてあげて」

「やだね。あいつは俺を除け者にしたんだ」

孫左京は根に持つタイプのようです。

「お願いィ」

亜梨沙が巨乳で攻撃しますが、左京は動きません。

「お猿さん」

樹里が耳元で言います。

左京はそのまま倒れそうになりましたが、

「行くぞ、馨」

「あ、はい」

巻き添えにされると思わなかった馨は龍に変化し、左京のきんと雲を追いました。

しばらく進むと、狼を攻撃している狩人達が見えて来ました。

狩人達は皆銀の鎧と銀の兜に身を包んで銀の矢を射ています。

「ゲゲゲ」

流行語大賞を意識した声が左京の口から漏れます。

狩人達は皆絶世の美女なのです。

「あいつらは薔薇鬼(ばらきり)吏という魔導士なんだ」

狼男が言いました。

第二百二十四話　銀の一族編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と馨は、狼男の助太刀のため、狼の王である俯炎驪琉（ふえんりる）のところに行きました。

そこには銀の一族という魔導士の一団がおり、銀の矢で俯炎驪琉を攻撃しています。

魔導士達は銀の鎧と銀の兜に身を包む途轍もない美女です。

「ふおおお！」

狼男がその美女達に襲いかかります。

どう見ても悪いのは狼男です。

「危ない！」

左京が銀の矢を如意棒で弾きます。

「我らを銀の一族と知っての無礼か！？」

中でもとりわけ美しい魔導士が太腿も露な鎧姿で左京達に近づきます。

「お前は手を出すな。これは我らと連中の戦いだ」

狼男は再び突進します。

「手のかかるヤロウだ」

左京は分身を沢山出し、魔導士達を攻撃します。

「只の猿ではないな！？」

とりわけ美しい魔導士が言います。

「当たり前だ。その昔、天界を騒がせた斉天大聖とは、俺の事だ！」

左京が大見得を切ります。ＡＢ蔵もビックリです。

第二百二十五話　薔鏤鬼吏の長編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は狼達の敵である薔鏤鬼吏（ばるきり）と対峙しています。

「斉天大聖だと？　知らぬな」

とりわけ美しい薔鏤鬼吏が鼻で笑います。

「何だと!?」

左京は激怒しました。

「我が名は鷺佗（ろた）。一族の長である」

薔鏤鬼吏はそう名乗ると、無数の矢を一斉に射ました。

すると左京の分身は全てその矢で射抜かれ、消えました。

「つ、強いですよ、左京さん」

馨はビビッています。

「お前達は狼を仕留めよ。私はこの猿を殺す」

鷺佗はニヤリとして弓を構えました。

「俺にそんなものは通用しないぜ」

左京は更に大見得を切ります。

「ぐおおお！」

俯炎驪琉（ふえんりる）が苦しみ出します。

「俯炎驪琉様！」

銀の矢をかわしながら、狼男が叫びます。

「一箇所に集中して射かけよ！」

鷺侘が命じました。

左京がその隙を突いて攻撃します。

「甘いな」

鷺侘はそれを簡単にかわし、弓を射ます。

左京、危機一髪です。

第二百二十六話　孫左京対鷺佗編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と馨は、銀の一族と戦っています。

「があ！」

馨が滝のような水流で薔薇鬼吏達を押し流します。

「いやあん」

彼女達が色っぽい声で流されるのを見て興奮する馨は変態です。

「行くぞ！」

薔薇鬼吏の長である鷺佗が次々に弓を射ます。

「当たるか！」

左京は素早くそれを避けます。

「これでおしまいだ！」

左京が鷺佗に如意棒を振りかざした時でした。

「ぐう！」

かわしたはずの矢が左京の背中に突き刺さります。

「左京さん！」

馨が叫びました。

「その矢は魔法の矢なのだよ。逃れる事はできぬ」

「くそ」

左京は片膝を着きました。

「頑丈だな。今止めを刺してやるよ」

鷺佗が矢を左京の額に向けます。

その時でした。

「ぐおおお！」

俯炎驪琉（ふえんりる）が暴れ出しました。

「く！」

鷺佗は俯炎驪琉の巨大な足をかわしました。

「左京さん！」

馨がその隙に左京を乗せ、戦線離脱です。

第二百二十七話　鷺佗の追撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

矢で射られた孫左京を救出し、馨は逃げました。

「狼の王は任せたぞ」

鷺佗（ろた）は薔薇鬼（ばらきり）吏達に言うと、馨を追います。

「待て！」

彼女の靴には翼が生えていて、空を飛べるようです。

「追って来るよお！」

馨はちびりそうになりながら逃げます。

「落ちよ！」

鷺佗が矢を射ます。

「ひい！」

馨は矢を避けますが、矢は方向転換して襲いかかって来ます。

「わあ！」

馨は怖くなって目を瞑りました。

「おら！」

左京が力を振り絞り、矢を如意棒で叩き落とします。

「左京さん！」

馨は感動しています。

「どこまで耐えられるかな？」

鷺佗は連続して矢を射ました。

「避けきれない！」

その時でした。

「飛んで亜梨沙！」

亜梨沙が豚に戻って飛翔して来ます。

「ほよ！」

矢が亜梨沙に突き刺さります。

「亜梨沙！」

左京は涙ぐんで、

「お前の死は無駄にしないぞ」

「死んでないって！」

亜梨沙が叫びました。

第二百二十八話　亜梨沙の活躍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と馨の危機を救ったのは亜梨沙でした。

「ブヒ！」

亜梨沙に刺さったと思われた矢は全部跳ね返されました。

「く！」

鷺佗（ろた）は返って来た矢を魔法で消しました。

「どうよ、この身体。弓矢なんて全部跳ね返すわよ」

豚の姿で大威張りの亜梨沙は滑稽です。

「醜い」

鷺佗が言いました。

「何ですって!?　許さないわよ、エロ魔導士！」

「エロ魔導士とは何だ！」

鷺佗も怒りました。

亜梨沙は人間の姿に戻ると、鷺佗に向かいます。

「亜梨沙さん、空飛べるんですか？」

馨が尋ねます。

「俺も初耳だ」

左京が答えます。

「とにかく、この隙にお師匠様の所へ」

馨は急降下しました。

「お仕置きしてあげるわ！」

亜梨沙は扇子を振るいます。

「そんなもの！」

鷺佗は亜梨沙の攻撃をかわします。

「はい！」

亜梨沙はいきなり豚に戻り、ボディアタックです。

「ぐは！」

鷺佗はこれをまともに食らい、落下しました。

第二百二十九話　孫左京復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は馨に運ばれ、樹里達の所に戻りました。

先程まで話をしていたのに、樹里の前に着いた途端、左京はウンウン唸り始めます。

俗に言う大袈裟という奴です。

「お猿さん」

それでも樹里は左京の背に刺さった幾本もの矢に驚きます。

「お師匠様、死にそうです」

左京が過剰な演技で言うと、

「そうなんですか」

樹里はお経を唱え始めます。

「まだ早いです、お師匠様」

左京は号泣しました。

「ああ！」

すると左京の背中の矢が消えました。樹里のお経のおかげです。

「さすがお師匠様」

蘭が感心します。

「亜梨沙の奴、いつから空を飛べるようになったんだ？」

左京が蘭に尋ねると、

「スピッツのお陰ですね」

樹里がボケます。左京は唖然としますが、

「お師匠様の真言のお陰よ。孔雀明王真言で飛翔したのよ」

蘭が説明しました。

「但し、そろそろ戻らないといけないの」

「そうなのか」

左京は空を見上げました。

第二百三十話　狼一族、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達が傷を癒している時、狼の王である俯炎驪琉（ふえんりる）は苦戦していました。

馨の水流で押し流された薔鏤鬼吏（ばるきり）達が戻って来て、再び矢を射かけ始めたのです。

幾人かの薔鏤鬼吏は狼男に倒されましたが、まだ人数は多いです。

「ぐおおっ！」

俯炎驪琉は固い体毛に覆われているので、簡単に矢は刺さりませんが、薔鏤鬼吏の長である鷺侘（ろた）の指示で矢を一点に集中して射ているので、段々毛が刷れて来ているのです。

何本かの矢が俯炎驪琉に刺さり、俯炎驪琉は苦しんでいます。

「俯炎驪琉様！」

狼男は走り回って、妖艶な姿の薔鏤鬼吏達を叩き伏せますが、彼自身も矢を射かけられ、動けなくなりそうです。

「もはやこれまでか……」

彼が力尽きそうになった時、更に鷺侘が現れます。

「待ちなさいよ！」

亜梨沙が豚の姿のまま鷺佗を追いかけます。

「しつこい」

鷺佗は苛つきました。

第二百三十一話　鷺佗の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗（ろた）は亜梨沙に向き直り、

「狼も死ね、豚も死ね！」

と何かのパクリを叫びます。

「うるさいわね！」

亜梨沙が怒鳴り返します。

「矢が刺さらぬなら、こうだ！」

鷺佗は鎧の下から銃を取り出しました。

魔力で作り出したのです。

「何よ、それ！？」

無知な亜梨沙にはわかりません。

「死ね！」

銃弾が発射され、亜梨沙に向かいます。

「おらあ！」

そこへ孫左京がきんと雲で現れ、銃弾を如意棒で叩き落としました。

「左京！」

亜梨沙が人間に戻って左京に抱きつきます。

「おのれ、またお前か！」

鷺佗は激怒しました。

「貴様ら、時の流れを飛び越えるらしいな？　その力で何をするつもりだ！？」

左京が真面目バージョンなのは必見です。

「そんな事まで知っているのか」

鷺佗はニヤリとします。

「知れた事。この世の全ての悪を滅するが我らが願い。我らが神の御心である」

「神？」

左京は眉をひそめました。

第二百三十二話　黒幕の影編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は鷺佗（ろた）と睨み合っています。

「亜梨沙、狼を助けに行け。こいつは俺一人で十分だ」

「はいな」

亜梨沙は取り囲まれている狼男の所に向かいます。

「ほう。強がりを。お前如きにこの私が倒せるかな？」

鷺佗が挑発します。

「強がりを言ってるのはそっちだぜ、エロ姉ちゃん」

「エロ言うな！」

鷺佗はムッとし銃をしまうと剣を出します。

「お前はこれで切り刻んでやる」

如意棒と剣が火花を散らしました。

亜梨沙は薔鏤鬼（ばるきり）吏達に豚に戻ってボディアタックをかまします。

「きゃあ！」

薔鏤鬼吏達が倒れます。

「雑魚は私に任せて」

「すまぬ、亜梨沙殿」

狼男がそう言うと、亜梨沙は照れました。

劣勢だった狼族が、豚族の亜梨沙の加勢で巻き返します。

三匹の子豚が知れば、失神しそうです。

「がああ！」

俯炎驪琉（ふえんりる）が炎を吐き、薔鏤鬼吏達をなぎ払います。

まるで巨〇兵です。

第二百三十三話　思わぬ奇襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

馨は銀の一族の事を調べるために父である西の龍王の宮に向かいました。

「亜梨沙、大丈夫かしら？」

蘭は心配そうです。樹里が、

「心配ですか？」

「心配なんかじゃないですよ。あいつが左京の足を引っ張ってるんじゃないかって……」

蘭は赤面して苦しい言い訳です。

「お猿さんの事が好きなんですね」

樹里が直球を投げて来ました。蘭はギクッとして、

「違いますよ！　左京はお師匠様しか見てません」

「そうなんですか？」

樹里が酷く驚いたので蘭も驚きます。

「ええ！？　気づいてなかったんですか？」

「はい」

樹里は笑顔全開です。蘭は左京の事を哀れみました。

その時です。

「危ない！」

蘭は矢が飛んで来たのに気づき、樹里を庇って家の陰に隠れます。

「銀の一族が？」

薔薇鬼（ばるきり）吏達の別働隊が来たようです。

「お前達も始末せよとのご命令だ。死ね！」

薔薇鬼吏達は次々に矢を射かけて来ました。

第二百三十四話　思わぬ助け編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と蘭は隙を突かれ、薔薇鬼(ばらきり)吏達の奇襲を受けました。

「死ね死ね！」

まさしく雨霰のように矢が降り注ぎます。

「ええい！」

蘭が竜巻で反撃しますが、薔薇鬼吏達は素早く動くので効果がありません。

「オンメイギャシャニエイソワカ」

樹里が八大龍王真言を唱えますが、薔薇鬼吏達は空へ飛んで逃げてしまいます。

洪水は虚しく城壁に当たって消えました。

「終わりだ！」

薔薇鬼吏達が一斉に樹里達を狙った時でした。

「真打登場にゃん！」

どこかで聞いたエロい声が響きます。

「まさか」

蘭は嫌な予感に戦慄しました。

「にゃーん、おねいさーん！」

たくさんの子猫が薔薇鬼吏達に飛び掛かります。

「……」

蘭は悪夢を思い出します。

「いや、やめ、そんなところに……」

これ以上は規制対象です。

薔薇鬼吏達は鎧を剥がされ気を失いました。

「にゃん」

そこには得意満面のリックが立っていました。

第二百三十五話　リックの妻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と蘭は危ないところをリックに救われました。

「お久しぶりです、お師匠様」

リックは子猫達と樹里に跪きます。

「猫さん、ありがとうございます。姉上はどうされたのですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。リックは、

「璃里様の言いつけで参上しましたにゃん。そして」

リックが振り返ると、そこには三毛猫柄のビキニを着た可愛らしい女の子がいました。

猫耳を付けているので、アキバ系でしょうか？

「我が妻、遊魔（ゆうま）ですにゃん」

「つ、妻？」

蘭が仰天しました。するとリックが、

「そうなんだにゃん、蘭ちゃん。ごめんにゃん。君とはもうお友達にしかなれないにゃん」

「アホか」

蘭は呆れました。

「よろしくお願い致します、お師匠様」

遊魔は樹里の前で跪きました。

「って事は、この子猫達は？」

蘭が言いました。リックは照れ臭そうに、

「遊魔との子供にゃん」

（早過ぎる）

蘭は唖然としました。

第二百三十六話　黒幕の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは妻遊魔を伴って戻って来ました。

遊魔は樹里の姉である璃里の飼い猫でしたが、リックがナンパし、猫又にしたようです。

そして璃里の命を受け、樹里達に合流したのでした。

「相手がおんにゃの子なら、僕らに任せてにゃん。全部やっつけるにゃん」

リックは涎を垂らして言いました。蘭は呆れ顔で、

「あんた、それでいいの？」

と遊魔に尋ねました。

「遊魔はあ、別に構わないんですぅ」

遊魔はちょっぴりおバカのようです。決してモデルがいる訳ではありません。

「では行くにゃん、息子達よ」

「はい、パパ」

リックと子猫達は、ヘラヘラしながら、左京達の加勢に向かいました。

馨は父の龍王から驚くべき事実を聞きました。

「薔鏤鬼吏達は第六天魔王と繋がっているのですか？」

馨はその配下の六耳（ろくじびこう）？猴を思い出し、身震いします。

「そうだ。一筋縄ではいかぬぞ」

龍王が言いました。

第二百三十七話　亜梨沙撤収編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

馨は父王から聞いた話を伝えるため、樹里の所に戻りました。

「第六天魔王が？」

蘭も身震いしました。六耳（ろくじびこう）？猴の強さはよくわかっているのです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「この人達は？」

馨はムシロをかけられた薔鏤鬼（ばるきり）吏達を見ました。

「気にしなくていい！」

何故か蘭が怒ります。馨はギョッとしました。

「この人は？」

今度はリックの妻である遊魔（ゆうま）を見ます。

「リックの妻の遊魔ですゥ」

「そうですか……」

そしてまたギョッとする馨です。

「リックさんが戻ったのですか？」

「そうよ」

蘭も嫌そうに言います。

亜梨沙は孔雀明王真言が切れて来たのを感じました。

「イケメンさん、ごめん、カラータイマーが……」

「ウルトラマンか！」

狼男は切れました。

「ジュワ！」

亜梨沙はＭ７８星雲に帰りました。

「ウソ吐くな！」

地の文に突っ込む狼男です。

第二百三十八話　鷺佗、激怒する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙が撤収したので、狼男はまた苦戦しています。

孫左京も鷺佗（ろた）との戦いが終わりません。

如意棒と剣が火花を散らしています。

「お前、強いな」

鷺佗が言いました。左京は、

「今頃気づいたか？」

「我らの仲間にならぬか？」

鷺佗は妖艶な眼差しでしなを作り、左京を誘惑します。

胸の谷間と露な太腿が見えますが、左京は動じません。

「お師匠様の方がずっと可愛い」

「何だと！？」

鷺佗はプライドを傷つけられたようです。

「あんな子供みたいな女に私が負けていると言うのか！？」

鷺佗の怒りは凄まじく、左京は後退りしました。

「少女趣味(ロリコン)め！」

「何だと！？」

左京は樹里の事を侮辱されたと思い、激怒します。

「許さねえ！」

左京は如意棒を振り回して鷺佗に向かいます。

「だあ！」

鷺佗は剣を弾き飛ばされました。

「鷺佗様！」

それに気づいた薔鏤鬼(ばるきり)吏達が叫びました。

第二百三十九話　鷺佗、味方を呼ぶ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗（ろた）は孫左京に追い詰められました。

薔薇鬼吏（ばるきり）達が彼女を助けるために動こうとしますが、狼男と俯炎（ふえ）驪琉（んりる）がそれを阻みます。

「覚悟しろ、エロ姉ちゃん！」

左京が如意棒を振り上げます。

「エロ姉ちゃん言うな！」

鷺佗はそう言い返すと、

「お館様、お助け下さい！」

と叫びました。

「親方様？」

左京が言うと、

「誰が相撲部屋だ！」

鷺佗が切れました。

「今行くぞ、鷺侘」

どこからともなく声が聞こえました。

「この声……」

左京には聞き覚えがあります。

「バ河東真君(かとうしんくん)か？」

「誰が脱獄囚顔だ！」

声が切れました。

やがてその声の主が雲に乗って現れました。

「久しぶりだな、孫左京」

それは六耳猴(ろくじこう)でした。

「誰だ、お前？」

左京が真顔で尋ねます。

「忘れたんかい！」

六耳？猴は切れました。

「お館様！」

鷺佗が嬉しそうに叫びました。

第二百四十話　狼の王、本気になる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳?猴(ろくじびこう)の登場は、狼男と俯炎驪琉(ふえんりる)に衝撃を与えたようです。

「忘れたのなら、そのまま死ね！」

六耳?猴が如意棒を取り出します。

「ああ、それは!?」

孫左京が驚きます。六耳?猴はニヤリとして、

「これは南の龍王の宮の柱だ」

「泥棒め！」

左京が罵ります。

「お前に言われたくない！」

二人の戦いが始まりました。

「お館様！」

鷺佗(ろた)が目を輝かせて言います。

「ふおおっ！」

その時、俯炎驪琉が雄叫びを上げ、人間の姿になりました。彼も同じくイケメンです。

亜梨沙がいれば、飛びかかっているでしょう。

「俯炎驪琉様」

狼男が驚きます。

「奴は強いぞ、露津狗（ろっく）。我らも真の力を以て望まねば、勝ち目はない」

俯炎驪琉が言いました。

「こっちの方がかっこいい！」

薔鏤鬼（ばるきり）吏達は俯炎驪琉に魅了されたようです。

「お前達！」

鷺佗が怒りました。

第二百四十一話　俯炎驪琉対六耳？猴編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳（ろくじびこう）？猴は孫左京と激闘中です。

薔鏤鬼吏達（ばるきり）は俯炎驪琉（ふえんりる）に夢中です。

鷺侘（ろた）は部下達に怒り心頭です。

「お館様を応援しないで何とする！」

鷺侘の怒りに仰天した薔鏤鬼吏達が狼男に矢を射ます。

狼男も人間の姿になりました。

「こっちもイケメン！」

薔鏤鬼吏達は矢を射るのをやめました。

「寝ていろ」

俯炎驪琉と狼男の露津（ろっく）狗は次々に薔鏤鬼吏達にキスして倒します。

「何という卑怯な戦法だ」

鷺侘は激怒し、二人に向かいました。

「お嬢さん、私の敵は貴女ではない」

俯炎驪琉の強烈な流し目で鷺佗は硬直しました。

「行くぞ、露津狗」

「はい」

二人は六耳？猴に向かいます。

「む？」

六耳？猴は狼達が向かって来るのに気づきました。

「ここは一旦引くか」

彼は雲で逃げようとしました。

「逃さぬ！」

俯炎驪琉が狼に戻り六耳？猴に噛みつきました。

第二百四十二話　六耳？猴と鷺佗編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

俯炎驪琉（ふえんりる）はもがく六耳？猴（ろくじびこう）をくわえて放しません。

「おのれ！」

六耳？猴は反撃しようにも全身を噛まれているので何もできません。

「ぬう、術も使えぬ」

「我の妖気は術を封じる。死ね、我が一族の仇め！」

俯炎驪琉は牙に力を込めます。

「ぐおお！」

さすがの六耳？猴ももうおしまいかと思われました。

「やった！」

狼男も喜びました。

「お館様！」

硬直が解けた鷺佗（ろた）が銃を取り出し俯炎驪琉を撃ちました。

「ぐああ！」

俯炎驪琉は絶叫し、六耳？猴を放して倒れます。

「俯炎驪琉様！」

狼男が駆け寄ります。俯炎驪琉は小さくなってしまいました。

「露津狗、後は頼んだぞ」

俯炎驪琉はそう言って息絶えました。

「てめえ！」

影が薄くなっていた孫左京が鷺佗に攻撃を仕掛けます。

「お前の相手は俺だ！」

六耳？猴が割って入りました。

二人の猿が睨み合います。

第二百四十三話　リック到着編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

俯炎驪琉（ふえんりる）は鷺佗（ろた）の銃で倒れました。

「おのれ、銀の一族め！」

狼男の露津狗（ろっく）が鷺佗を睨みます。

周囲を見渡すと、薔鏤鬼（ばるきり）吏達も起き上がっています。

「さっきはよくもやってくれたね。覚悟しな！」

彼女達は一斉に弓を引きました。

「くっ！」

露津狗は焦りました。その時です。

「真打登場にゃん」

と声がし、

「おねいさーん！」

子猫達が薔鏤鬼吏達に飛び掛ります。

「ひぃ！」

再び描写できない光景が繰り広げられます。

「エロ猫！」

孫左京は戦いの中でリックの姿を見つけて驚きます。

「や、やめ……」

鷲佗も子猫の毒牙にかかりました。

鎧を剥がされた鷲佗達を見て露津狗も唖然です。

「何という事を！」

六耳？猴（ろくじびこう）が激怒します。

「この下劣猫め！」

彼はリック達に襲い掛かろうとしますが、

「てめえの相手は俺だろう？」

左京がそれを遮りました。

第二百四十四話　黒幕降臨編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳(ろくじびこう)？猴と孫左京の戦いが始まります。

「やるようになったな！」

「喧しい！」

上から目線の六耳？猴に切れる左京です。

露津狗(ろっく)は俯炎驪琉(ふえんりる)にすがって泣いています。

「俯炎驪琉様」

そこへ樹里達がやって来ました。

「お猿さん！」

樹里が杖を放ります。

「ありがとうございます、お師匠様！」

左京が受け取ったのは、六耳？猴の術を封じる杖です。

六耳？猴は杖に気づき、慌てて逃げ出します。

「逃がすか！」

左京がきんと雲で追おうとした時です。

天が暗くなり、雷鳴が轟きます。

「変身忍者嵐ですか？」

樹里が言いました。

「誰が天本英世だ！」

かなりマニアックな応酬です。

「我は第六天魔王だ」

「アンビリバボーですか？」

更に樹里がボケます。

「その麻央じゃねえ！」

第六天魔王は切れました。

「御徒町樹里、我の邪魔をする憎らしい坊主め！」

魔王が言いました。

第二百四十五話　戦い終わる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王は言いました。

「六耳?猴(ろくじびこう)よ、狼の王を仕留めた弾を」

「はい、陛下」

六耳?猴が手を振ると、俯炎驪琉(ふえんりる)の身体から銀の弾丸が飛び出して、空の彼方に消えます。

「何?」

露津狗(ろっく)が驚愕しました。俯炎驪琉の身体が煙のように消えてしまったのです。

「狼の王の妖気、受け取った。大儀であった、皆の者」

魔王は高笑いと共に去ったようです。

「さらばだ、孫左京」

六耳?猴も飛び去りました。空が明るくなります。

露津狗は気を失っている鷺侘(ろた)に近づきます。

「こいつのせいで!」

露津狗は鷺佗を殺そうと爪を立てました。

「おやめなさい、狼さん。その人を殺めても狼の王は甦りませんよ」

まともバージョンの樹里が言いました。

「くっ」

露津狗は歯軋りしました。

「殺したければ殺してくれ。私はそれだけの事をした」

鷺佗が起き上がって言いました。

第二百四十六話　鷺佗の覚悟編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗（ろた）は立ち上がりました。彼女は子猫達に身包み剥がれているので、何も着ていません。

「さあ、殺してくれ」

露津狗は真っ赤になって顔を背けます。

「よせ。もういい」

もう十分いい思いはしたという事でしょうか？

「はい」

亜梨沙が露津狗に紙を渡します。

「す、すまない」

露津狗はそれで鼻血を止めました。

「ほら、あんた達も！」

蘭が、孫左京と龍の馨に紙を渡します。

二人共失血死しそうなくらいの鼻血です。

リックはすでに倒れており、妻の遊魔に介抱されています。

「鷺佗さん、貴女もまた騙されていたのです。ご自分を責めないで下さい」

まともバージョンが再起動した樹里が言います。

「かたじけない、お坊様」

鷺佗は樹里に渡された鎧を身に着けながら泣いています。

「奴らの居場所は知っております」

鷺佗は言いました。

「共に参りましょう。魔王の所へ」

樹里が鷺佗と露津狗を見ました。

第二百四十七話　崑崙山へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は狼男の露津狗と、鷺佗(ろた)率いる薔薇鬼(ばらきり)吏達を伴い、第六天魔王のいる山に向かっています。

「その山の名は、崑崙。世界で一番険しい山々がある所です」

先導をする鷺佗が説明します。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で応じます。

「そこには数多くの魔物がおります。無事辿り着けるかどうか……」

鷺佗は弱気です。

「辿り着けるさ。何せ、この俺様がいるんだからな」

孫左京が胸を張って言います。

「俺は何があっても辿り着く」

露津狗が呟きます。それを心配そうに亜梨沙が見ています。

「お師匠様、いいのですか？　ありがたい経典を授かるのが我らの役目ですよ」

馨は、怖いからか、そんな事を言い出します。

「だったらあんただけ帰りなさいよ、ヘボ馬」

蘭が罵ります。

「い、行きますよ、私は！」

蘭にそう言われて、馨は燃えました。

「行くぞ！」

左京がきんと雲で先発します。

第二百四十八話　伯爵登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は薔鍍鬼吏（ばるきり）の鷺佗（ろた）の案内で第六天魔王がいるという山に向かっています。

孫左京が偵察を兼ねてきんと雲で先発します。

「俺も行こう」

白々と夜が明け始めた薄暗い山道を狼男が疾走します。

「私達は第六天魔王に騙されて世界各地の魔物の王を仕留めました。でも、それはあの第六天魔王の力を強くするための嘘だったようです」

鷺佗は悔しそうに言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言います。

「だから私達は命懸けで戦います、お師匠様」

鷺佗は涙ぐんで樹里を見ました。

「いつの間に弟子になったのよ、あんた達？」

食い扶持が減ると思った亜梨沙がムッとします。

その時でした。

「猿はいないようですね」

甲高い声が聞こえました。

「その声は伯爵か？」

鷺佗が弓を取ります。

「ロリコン伯爵ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がカリオストロの城だ！」

声が切れました。

第二百四十九話　伯爵は吸血鬼編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に何者かが現れました。ロリコン伯爵ではないようです。

「私は吸血鬼だ」

真っ黒なマントに身を包んだ顔色の悪い細身の大男が現れました。

「ドン・ドラキュラさんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が手塚治虫だ！」

伯爵が切れました。

「ここより先は行かせぬ」

「そんな事言っても左京と狼さんはもっと先に行ったよ」

亜梨沙が呆れて言います。すると伯爵はギョッとします。

「何だと？」

どうやら本物のアホのようです。

「お前様、敵が現れましたよ」

リックの妻の遊魔が言います。しかしリックは、

「僕は可愛い女の子としか戦わないにゃん」

と言って欠伸をします。

「弱そうね。私がやっつけるわ！」

亜梨沙が不意打ちのボディアタックです。

「おっと！」

伯爵は素早く蝙蝠に変身してそれをかわします。

「黄金バットさんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が小林修だ！」

伯爵は疲れているようです。

第二百五十話　伯爵怒る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伯爵は怒り心頭のようです。

「お前らまとめて血ィ吸うたろか！」

アースマラソンで留守なのをいい事に露骨にギャグをパクる伯爵です。

「ここは私が！」

鷺佗（ろた）が進み出ます。

「吸血鬼は銀製の武器でしか倒せないのです」

鷺佗は弓を構えます。

「確かにそうだが、私を射る事ができるかな、鷺佗？　お前の愛しい人の居場所は、私しか知らないのだぞ」

「くっ……」

鷺佗の手が弓から離れてしまいます。

「あんたね、卑怯よ！」

亜梨沙が再び不意打ちのボディアタックです。

「お前に言われたくない！」

伯爵はそれをあっさりかわしました。

「はあ！」

蘭が粘液で伯爵を縛ります。

「汚いぞ、唾を吐いたりして！」

「唾じゃねえよ、ボケ！」

蘭が切れました。

「こんなもので私を縛れると思うなよ」

伯爵は得意満面で蝙蝠に変身しました。

でも粘液ですから身体が小さくなっても関係ないです。

やっぱりアホです。

第二百五十一話　伯爵の最期？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は少々アホな吸血鬼と戦っています。

「これで終わりだと思うなよ、愚か者め」

通称「伯爵」は、まだ強がりを言います。

「いいの、そんな事言ってて？　確かさ、吸血鬼って、太陽の光に弱いのよねえ」

蘭がニヤリとします。亜梨沙が嫌らしい笑みを浮かべます。

「……」

伯爵は元の姿に戻り、全身から嫌ーな汗を流しています。

「お、おい、私を早く解放しろ。お前達、どうなっても知らないぞ」

「解放する訳ないでしょ？　貴方はここで灰になるのよ、アホな伯爵さん」

蘭は嬉しそうだ。

「本当に知らんぞ、何が起こっても！」

伯爵は決死の形相で叫びます。

その時、鷺侘（ろた）がハッとしました。

「いけない、蘭さん！　早く伯爵を解放して！」

「何言い出すの、あんた？　まさか裏切る気？」

亜梨沙が鷺侘を睨みます。

「違う。本当に大変な事になるのだ。早く伯爵を解放して！」

鷺侘は真剣な顔で言いました。

第二百五十二話　伯爵変化編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭は鷺侘（ろた）の真剣な表情に何かを感じたので、

「ほら！」

と粘液を解きました。でも時既に遅く、伯爵は朝日を浴びてしまいしました。

「バカ者ーっ！」

伯爵は断末魔を上げ、灰になってしまいました。

「逃げて！」

鷺侘は薔鏤鬼（ばるきり）吏達を伴って飛び去ります。馨も何かを感じたのか、

「お師匠様、しっかり掴まっていて下さい」

と龍に変化して飛びます。

「お前様、逃げた方が良いのでは？」

リックの妻遊魔が言った時、すでに夫はそこからいなくなっていました。

「逃げ足は速いのね」

遊魔はニコッとして子猫達と逃げます。

「私達も！」

蘭が嫌がる亜梨沙を引き摺りながら逃げ出します。

「何でよお？」

亜梨沙は逃げる事に納得していません。

次の瞬間、灰が地面から、無数の小さな蚊が現れました。

「そいつらは吸血蚊だ。血を吸われたら、吸血鬼になってしまうぞ」

鷺佗が上空から叫びました。

第二百五十三話　蚊の大軍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

吸血鬼の伯爵が蚊に変化し、樹里達を追いかけます。

「馨さん、戻って下さい」

「ええ！？」

樹里のトンデモ発言に馨は驚きました。

「降ろして下さい」

樹里は地面に降りました。そこへ蚊の大軍がやって来ます。

「お師匠様、無茶です！」

蘭が叫びます。

「お師匠様、このお話ふざけてますけど、死ぬ時は死にますよ！」

亜梨沙が訳のわからない事を叫びます。

「えい！」

樹里が偽芭蕉扇を振るいます。

「うへえ！」

すると蚊の大軍が遥か彼方まで飛ばされてしまいました。

「おお！」

鷺佗達は仰天しています。

「伯爵を捕まえて、貴女の愛しい方の居場所を訊き出しましょう」

樹里が鷺佗に言いました。

「ありがとうございます、お師匠様」

その発言にまた自分の立場の危機を感じる亜梨沙です。

しばらく戻ると、伯爵が木の陰に倒れていました。

「私の恋人の居場所を言え！」

鷺佗が伯爵を締め上げました。

第二百五十四話　鷺佗の恋人編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は偽芭蕉扇で吸血鬼の伯爵を倒しました。

これさえあればほぼ無敵なので、樹里は一人でも大丈夫だと思います。

「何て事言うのよ！」

亜梨沙が地の文に突っ込みます。

「誰が教えるか」

伯爵は強がります。すると樹里が笑顔全開で、

「もう一度飛びますか？」

伯爵はギクッとしました。

「わ、わかった、言うよ。鷺佗の恋人は猪喪嵐魔（ちょもらんま）にいる」

「何ですって！」

伯爵を締め上げる鷺佗の手に力が入ります。

「ぐえええ……」

「鷺佗さん」

樹里が止めます。そして、

「オンカカカビサンマエイソワカ」

と地蔵真言を唱え、伯爵を浄化しました。

「ひょえ！」

伯爵は霧となって消えました。

「猪喪嵐魔って、あの世界最高峰の？」

蘭が言います。鷺佗は、

「ええ」

彼女は樹里を見ました。

「鷺佗さんはそちらへ。私達はお猿さん達を追います」

「ありがとうございます」

鷺佗達は猪喪嵐魔に向かいました。

第二百五十五話　宮部麗現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達が吸血鬼と戦っている頃、孫左京と狼男の露津狗（ろっく）はゴツゴツした岩肌に差し掛かりました。

「待て、そこの猿と犬」

どこからか声が聞こえました。

「俺は狼だ！」

露津狗が切れます。

「どちらでも宜しいわ。死んでしまう身であるからな」

声の主が現れます。今にもベリーダンスを踊りだしそうな妖艶な衣裳の女性です。

顔の半分を黒い布で隠しています。

「何だ、てめえは？」

左京が凄んで尋ねます。

「わらわは宮部麗（きゅべれい）。美の女神ぞ。ひれ伏すがいい」

宮部麗（きゅべれい）は布を取り、顔を見せました。

美人です。リックが飛び掛りそうです。

「お師匠様の方がいい」

左京はあっさり言います。

(鷺佗の方が可憐だ)

露津狗は心の中で思います。

「何だと!?」

宮部麗は激怒しました。

「わらわより美しい女などこの世におるものか!」

「いるよ、たくさん」

左京は容赦がありません。

第二百五十六話　宮部麗の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と露津狗は、宮部麗（きゅべれい）という女神に出会いました。

決して合コンではありません。そして彼女は宮部ありさの姉でもありません。

「わらわより美しい女がいるのであれば、そやつは殺す」

左京と露津狗は別の女性を思っていますが、答えは一緒です。

「ふざけるな、ブス！」

絶対に女性に対して言ってはならない事を言った二人には天罰が下るでしょう。

「殺す！」

宮部麗は怒り狂いその身を炎と化します。

「神の怒りに恐れおののけ！」

火の玉が左京達に迫ります。

「任せろ」

露津狗が前に出て口を大きく開け、

「がああ！」

と息を吐き出します。あのお話の応用でしょうか？

「ぶおお！」

宮部麗が露津狗の呼気で押し留められます。

「止めだ！」

左京が如意棒で火の玉を叩き落とします。

宮部麗はすぐに復活し、炎の鞭を出しました。

「ＳＭか？」

「誰がにしおかすみこだ！」

宮部麗は切れました。

第二百五十七話　女神の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と露津狗は宮部麗（きゅべれい）の逆鱗に触れてしまいました。

「死ぬまで舞うんだよ」

宮部麗が炎の鞭を振るいます。台詞がまるで金竜飛です。

「く！」

左京と露津狗は鞭の攻撃を受けて後退します。

「まだだ！」

鞭の数がねずみ算式に増えます。

「ぐう！」

さすがの左京も耐え切れません。露津狗も膝を折りそうです。

その時でした。

「オンメイギャシャニエイソワカ」

八大龍王真言が聞こえ、洪水が左京と露津狗と宮部麗を押し流します。

「うへえ！」

樹里達が追いついたのです。

「お師匠様、酷いです……」

左京は嬉し泣きをしながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「貴様か、わらわより美しい女と言うのは？」

宮部麗が宙に浮き上がって言いました。

「我が名は宮部麗。美の女神だ」

「亜梨沙さんのお姉さんですか？」

樹里が尋ねます。

「その宮部じゃねえ！」

宮部麗は切れました。

第二百五十八話　樹里対宮部麗編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

宮部麗（きゅべれい）は樹里を憎悪に満ちた目で睨みます。

「フン、まだガキではないか。わらわほどの魅力があるとは思えぬ」

急に上から目線です。孫左京はムッとして、

「お師匠様を侮辱するのは俺が許さねえ！」

左京は樹里を見て、

「帽子をお取り下さい」

「そうなんですか」

樹里は帽子を取りました。

「うおお！」

途端に左京と馨が鼻血を噴きます。

露津狗もギョッとしました。

「可憐だ」

リックは居眠りをしていましたが起き上がりました。

「お師匠様！」

飛びかかろうとしましたが、妻の遊魔に尻尾を掴まれて倒れます。

「ダメです、お前様」

遊魔はニッコリ笑って夫を殴ります。国定忠治みたいです。

「まさか」

宮部麗の顔色が悪くなりました。

樹里の後ろに多くの加護を見た宮部麗はひれ伏しました。

「貴女こそ美の女神です」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

左京達は唖然としました。

第二百五十九話　第六天の四天王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は、美の女神を名乗る宮部麗（きゅうべれい）を屈服させました。

「貴女には、多くの天界人の加護がございます。私のような者が叶う道理がありませぬ」

「ミニモニですか？」

樹里が尋ねます。

「その加護じゃないです」

宮部麗は項垂れました。

「それより、この先には第六天魔王を守護する四天王がおります。お気をつけ下さい」

「一緒に行きませんか？」

樹里が軽い感じで誘いました。すると宮部麗は蒼ざめて、

「私はこれから家に帰って子供達のお弁当を作らないといけませんので……。さよなら！」

と逃げてしまいました。

「嫌われたのでしょうか？」

樹里が悲しそうに孫左京に尋ねます。

「そ、そんな事はないと思います」

左京はそう言いながら倒れました。

「か、可愛過ぎる……」

左京は痙攣しています。

「四天王か」

蘭が呟くと、亜梨沙が、

「何してんのう、なんちゃって」

と寒いギャグを言いました。

第二百六十話　四天王の影編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は更に先へと進みます。

その時でした。

「これより先は行かせぬ」

不気味な声が聞こえました。

「空耳アワーですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が安斎肇だ！」

声が切れました。

「我が名は威武離猪主（いぶりいす）。第六天の四天王が一人」

黒い影のようなものが現れました。

「そんな所で何してんのう」

亜梨沙がまだ寒いギャグを言っています。

「お前達はここで死ぬのだ」

影が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「誰が死ぬか！」

孫左京が復活しました。

「おらあ！」

如意棒が影を一閃します。

「何？」

しかし、それは本当に影でした。

「愚か者め」

左京の身体が斬り裂かれました。

「ぐうっ！」

左京は血だらけになって倒れました。

「左京！」

蘭と亜梨沙が叫びます。

「お前らも死ね！」

見えない何かが動いて、蘭と亜梨沙も斬られます。

「きゃあ！」

二人も倒れてしまいました。

第二百六十一話　威武離猪主の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、第六天の四天王の一人である威武離猪主（いぶりいす）に行く手を阻まれました。

「猿も豚も河童も倒したぞ、坊主。さあ、どうする？」

頭数にも入れてもらえない事を馨は嘆きました。

「どこにいるんだ？」

馨は樹里を降ろして龍に変化します。

「ほう、役立たずの龍がいたか？」

威武離猪主の声が馨を挑発します。

「ついでだ。お前も切り刻んでやる！」

馨も身体中を切り裂かれました。

「うう！」

馨は地面に倒れました。

「見切った！」

狼男の露津狗が叫びます。

「何!?」

威武離猪主が驚きの声を上げました。

露津狗が地面を踏みつけます。

「やめろ!」

その声と共に突然巨大なカミキリムシが現れました。

「お前は身体の大きさを自在に操り、あたかも消えているかのように見せかけていたのだ」

露津狗が言いました。カミキリムシはニヤリとし、

「それがどうしたというのだ?」

と開き直りました。

第二百六十二話　威武離猪主の恐怖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

威武離猪主（いぶりいす）は露津狗を睨み、

「我が力はこれだけではない。死を以って見届けよ！」

威武離猪主は口から液体を吐きました。

「うお！」

露津狗はそれをかわしました。その液体は岩に当たり、岩を溶かしてしまいました。

「我が唾液はあらゆる物を溶かす。死ね！」

威武離猪主は小学生の喧嘩のように唾液を吐き散らします。

「くそ！」

露津狗は倒れている孫左京達をくわえて、威武離猪主から離れました。

馨は大き過ぎて運べません。

「死ねえ！」

威武離猪主の唾液が馨に降りかかります。

「えい！」

樹里が偽芭蕉扇で馨を扇ぎます。

馨は遥か彼方に飛んでしまいました。

「大丈夫なのか？」

露津狗は馨の身を案じました。

「おお」

樹里はある事に気づき、

「えい！」

と威武離猪主を扇ぎました。

威武離猪主は瞬時に小さくなり、風をかわしました。

「同じ手は通じんぞ」

威武離猪主はニヤリとしました。

第二百六十三話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は何故か凄く幸せな気持ちでした。

「貴方、ご飯ですよ」

樹里が家の中から呼びかけます。

「おう」

左京は畑仕事を終えて家に戻ります。

「ああ、こうしてお前の膝枕で休むのがオラの一番の楽しみだ」

「貴方ったら」

左京は突然現実に引き戻されます。

「お猿さん」

ふと気づくと、左京は樹里の膝枕で寝ていました。

「お師匠様！」

左京はほうれん草を食べた○パイのように元気が出ました。

「うおお！」

彼は一足飛びに威武離猪(いぶりいす)主に攻撃します。

「もう傷が治ったのか、猿？」

「当たり前だ！　俺を誰だと思ってるんだ？」

左京が大見得を切ります。

「鼻血王子」

リックが小声で言いました。

「おらあ！」

如意棒が威武離猪主を一閃します。

しかし威武離猪主は小さくなってそれをかわしてしまいました。

「畜生、キリがねえ！」

左京は苛立ちました。

「俺に策がある」

露津狗が左京に囁きました。

第二百六十四話　露津狗の作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は狼男の露津狗の作戦に乗る事にしました。

「何をヒソヒソ話しているのだ？　猿の浅知恵と狼の悪知恵を合わせても無駄だぞ」

カミキリムシの魔物の威武離猪主（いぶりいす）が挑発します。

「ほざいてろ、虫野郎」

左京が言い返します。

「虫のくせに偉そうな事を言うな」

「何だと！？」

左京の挑発に威武離猪主が反応します。

「貴様、虫をバカにするな！」

威武離猪主が左京に液体を飛ばします。

「当たるか」

左京は液体をかわしました。

「そこだ！」

露津狗が背後から威武離猪主に襲いかかります。

「バカめ、見え見えだ」

威武離猪主は小さくなってそれをかわします。

「そんな間抜けな策でこの私を倒そうと思ったのか？」

威武離猪主が高笑いします。

「思ってねえよ！」

威武離猪主が逃げられないくらい巨大化した如意棒が振り下ろされます。

「ぎえっ！」

威武離猪主は如意棒でペシャンコになりました。

第二百六十五話　威武離猪主の逆襲？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と露津狗の連携で、威武離猪主（いぶりいす）はペシャンコになりました。

「やったぜ」

左京と露津狗が喜んでいると、

「貴様ら、この私を本気にさせたな！」

と声がし、ペシャンコになった威武離猪主が復活し、巨大化します。

「今度は貴様らを潰してやるぞ」

威武離猪主は某スカイツリーくらいの大きさになりました。

「覚悟しろ」

威武離猪主の足が樹里達に迫ります。

樹里が芭蕉扇を取り出します。

「同じ手は通用しないと言ったはずだ」

威武離猪主は笑いました。

「えい！」

樹里が扇ぐと、威武離猪主は小さくなりました。

「愚か者め」

威武離猪主は大笑いしました。

「蘭！」

「あいよ！」

蘭が粘液を吐き、威武離猪主を捉えました。

「何をする！」

威武離猪主は小さいので力が出せません。

「オンマリシエイソワカ」

樹里が摩利支天真言を唱えました。

「どおお！」

威武離猪主は浄化されて消滅しました。

第二百六十六話　次の四天王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の連携で威武離猪主（いぶりいす）を遂に倒しました。

「貴様ら、覚えていろ！　必ず復讐してやる！」

威武離猪主はそう言いながら消えました。

できない事を口にするなんて、本当に最後まで情けない敵です。

「さあ、先を急ぐぞ」

すると前から何かが飛んで来ます。

「敵？」

亜梨沙と蘭が身構えますが、

「いや、馨だ」

孫左京が言いました。

確かに馨でした。何故か飛ばされる前より元気そうです。

「お師匠様、ありがとうございます。落ちた所が回復の泉でした」

「ＲＰＧか！」

左京が突っ込みます。

その時です。

「オーホッホッホ」

女の声がしました。

「僕の好みの女の子の声だにゃん！」

リックが雄叫びを上げます。

「私は四天王が一人、部琉是武舞（べるぜぶぶ）」

真っ黒な衣装の髪の長い美女が現れました。

「ブブゼラですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がワールドカップだ！」

部琉是武舞は切れました。

第二百六十七話　部琉是武舞の戦法編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

部琉是武舞（べるぜぶぶ）は妖艶な笑みを浮かべ、樹里達を見ます。

「威武離猪主（いぶりいす）の腰抜けを倒したらしいけど、私は無理だよ」

部琉是武舞はキッと樹里を睨みました。

「おねいさーん！」

リックが子猫達と共にエロ攻撃を開始しました。

「お前らの相手はこの子達よ」

部琉是武舞が服を払うとそこから無数の蝿が飛び立ちます。

「蝿の王か？」

露津狗が言いました。蘭がギクッとします。

「そんな……。神にも匹敵する力を持つとか……」

リックと子猫達は蝿に襲いかかられ、逃げ惑っています。

「ほう。私の事を知っているとは天界の出身だね？　そうさ。私はその気になれば天界だって手に入れられるのさ」

部琉是武舞は蘭を嘗め回すように見ました。蘭は震えました。

「蚊の次は蝿か。虫ばっかりだな」

孫左京が挑発します。

「猿！　あんたから始末してやるよ！」

部琉是武舞の顔が凶悪になりました。

第二百六十八話　蝿の女王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

部琉是武舞（べるぜぶぶ）は蝿の王でした。

彼女の身体には何万匹もの蝿がいるのです。

「汚い！　あんた、お風呂入ってるの？」

亜梨沙が鼻を摘んで言います。

「私は清潔だ、豚！　お前こそ不潔だろう！？」

部琉是武舞が言い返します。

「何よ！　豚は凄く清潔な生き物なんだから！」

妙な言い争いになって来ました。

「この子達は異常な食欲なんだ。食いつかれたら骨までしゃぶられるよ」

部琉是武舞が言いました。

「骨まで愛してですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が城卓矢だ！」

部琉是武舞は切れました。

「要は、親玉を叩き潰せばいいんだろう！」

孫左京が如意棒を振るって部琉是武舞に打ち下ろします。

「無駄だよ」

部琉是武舞は無数の蝿になってそれをかわしてしまいます。

「うわ！」

蝿達が襲い、左京が蝿で見えなくなります。

「うわ、ばっちい！　左京、暫く私に触らないでね」

亜梨沙が無情な事を言いました。

第二百六十九話　孫左京、蠅に食われる？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は蠅の女王である部琉是武舞（べるぜぶぶ）が変化した蠅の大群に取りつかれました。

「うおお！」

左京は呼吸もできないようです。

「そのまま、我が糧となれ、猿」

部琉是武舞の声が言いました。

「左京！」

蘭が叫びます。

「左京ゥ」

亜梨沙が汚いものを見る目で言います。

「お猿さん」

樹里が言いました。その途端、

「はい、お師匠様！」

左京は如意棒を振り回し、まとわりつく蠅を一掃します。

「何なのよ、あれ……」

蘭と亜梨沙はムッとします。そして互いを睨みます。

「猿め、まだそんな力が残っていたのか。ならば、我が子を皆呼び戻すぞ」

部琉是武舞は、リック達を追いかけていた蠅の一団も呼び戻します。

「猿を食い尽くせ！」

黒い塊が左京に襲いかかります。

「そして、私も！」

部琉是武舞も蠅に変化し、左京に向かいました。

「げっ！」

先程の何倍もの蠅を見て、左京はさすがにビビりました。

第二百七十話　孫左京対部琉是武舞編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は蠅の大群を前にして焦っていました。

「お師匠様、左京さんが危ないです」

馨が言いました。すると樹里は、

「お猿さん、頑張って下さい」

とめぞん一刻式の応援をしました。蘭と亜梨沙は冷めた目で見ています。

「うおおっ！」

左京の身体にエロパワーが漲ります。

「俺は勝つ！」

左京は如意棒を更に速く回し、蠅の大群に対抗しました。

しかし捌き切れるものではありません。

多くの蠅が左京に取りつきます。

「無駄だ。死ね！」

孫左京、万事休すか、と思われた時でした。

「助太刀致す！」

鷺佗（ろた）とその配下の薔鏤鬼（ばるきり）吏達が現れました。

「頼むね、鷺基（ろき）」

鷺佗は一匹の大きなひきがえるを放ちました。

「ゲコ」

ヒキガエルは蠅を長い舌で絡めとり、食べます。

部琉是武舞（べるぜぶぶ）は慌てて元の姿に戻り、

「お前はもしかして……」

彼女はヒキガエルを見て焦っていました。

第二百七十一話　蛙の王子様編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京の危機を救ったのは、薔鏤鬼吏（ばるきり）の鷺侘でした。

彼女は大きなヒキガエルを放ち、蠅を食べさせました。

ヒキガエルの食欲は尋常ではなく、蠅の大群がたちまち少なくなりました。

「おのれ、あの吸血鬼、居場所を話したのか」

部琉是武舞（べるぜぶぶ）は憎らしそうに呟きます。

そしてとうとうヒキガエルは蠅を食べ尽くしてしまいました。

「助かった。礼を言うぜ」

左京が鷺侘に言いました。

「その蛙は？」

露津狗が尋ねます。

「私の恋人だ」

鷺侘の答えに露津狗はショックを受けました。

「蛙が恋人？　可哀想に」

亜梨沙が哀れみますが、

「これは仮の姿。この蠅の化け物に呪いをかけられてしまったのだ」

鷺佗が部琉是武舞を睨みます。

「やはりそうか。道理で見覚えがあるはずだ」

部琉是武舞はニヤリとします。

「だが、我が子の数はその程度ではないぞ」

空を覆い尽くす蠅の大群が現れました。

第二百七十二話　蠅の女王の最期編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

一時的に減った蠅が、今は三倍程に増えています。

ヒキガエルが蠅を食べますが、それ以上の速さで部琉是武舞（べるぜぶぶ）が蠅を出して来ます。

「キリがないわ！」

蘭が苛つきます。

「いつまでそうやっていられるかな？　我が子は無限に現れるぞ」

すでに数万匹は食べたはずのヒキガエルは、さすがに食べる速さが落ちて来ています。

「おねいさーん！」

部琉是武舞の不意を突いて、リックと子猫達が飛びかかりました。

「うわ、よせ、何をする！？」

部琉是武舞は蠅に変化するゆとりもない程焦っていました。

「やっぱり僕の好みだにゃん」

「うわあっ！」

部琉是武舞はリック達に攻められ、絶叫しました。

その間にヒキガエルが蠅を食らい尽くします。

「ひいいっ！」

部琉是武舞は断末魔と共に蠅に変化し、ヒキガエルに食い尽くされました。

次の瞬間、ボンと音がして、ヒキガエルが超イケメンに変身しました。

第二百七十三話　露津狗、失恋する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

超イケメンは鷺佗（ろた）と抱き合いました。

露津狗は呆然としています。

「お互い頑張りましょう」

馨が囁きます。露津狗は黙って頷きました。

「お名前は？」

蘭と亜梨沙がにじり寄って尋ねます。

「鷺基（ろき）です。鷺佗は我が姉です」

「えっ？」

いけません。姉と弟が恋人だなんていけない事です。露津狗は立ち直れません。

「王家の紋章ですか？」

樹里が尋ねました。

「誰がメンフィスとアイシスだ！」

鷺佗と鷺基は切れました。

「我が薔鏤鬼吏一族は、これが普通なのだ」

鷺佗が言いました。そして樹里に跪き、

「この後もお師匠様のために戦います」

と言いました。鷺基もその隣に跪きます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「羨ましいにゃん」

リックが呟きます。

「何か言いましたか、お前様？」

遊魔が尋ねます。

「何も言ってないにゃん」

リックは素早く誤摩化しました。

第二百七十四話　三番目の四天王登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鷺佗と鷺基の姉弟のおかげで、蝿の女王である部琉是武舞(べるぜぶ)を倒せました。

第六天魔王のいる場所を目指して旅は続きます。

「今度は何かな?」

亜梨沙が嬉しそうに言います。

「また虫ですかね」

馬に戻って樹里を乗せた馨が言います。

「もう虫はいいにゃん。次は可愛い女の子がいいにゃん」

リックが言いました。

「お前様」

妻の遊魔がニッコリ笑って殴ります。

「虫はもういいわね」

蘭が言います。

「虫が出て来たら無視、なんちゃって」

亜梨沙が寒いギャグを言います。

「む？」

先頭にいた孫左京が一行を止めます。

鷺佗と鷺基、鷺津狗が身構えます。

「何か来るぞ」

左京が言いました。

すると、土の中から何かが飛び出します。

「悪かったな、また虫でさ」

タキシードにシルクハットという時代に合わない服装です。

「我が名は羽厨逗（ぱずず）だ」

またもや虫です。しかも中年親父風です。

第二百七十五話　羽厨逗の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

三番目の四天王が現れました。

中年親父風で、口が臭そうです。

「誰が歯槽膿漏だ！」

地の文に突っ込む怒りんぼのようです。

「何だか見るからに弱そうだな」

孫左京が言いました。すると羽厨逗は怒って、

「許さんぞ！　こうしてやる！」

と背中を向けると、いきなり土を掘り始めました。

「うわ！」

一番前にいた左京は土だらけです。

「ふざけるな！」

左京が怒鳴ると、羽厨逗は消えていました。

「何？」

周囲を見回しましたが、どこにもいません。

「え？」

突然地面が揺れ、大穴が開きました。

「わあ！」

樹里達は穴の中に落ちてしまいます。

「ええい！」

左京はきんと雲で、鷺佗と鷺基は飛行靴で穴から脱出しましたが、

「出さないよ」

羽厨逗の声がして、上から土が覆い被さりました。

「くそ！」

左京は真っ暗闇の天井を如意棒で突きますが手応えがありません。

「お前達はここで死ぬのだ」

羽厨逗が言いました。

第二百七十六話　暗闇の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は第六天の四天王の三番目の羽厨逗（ぱずず）の策略で穴の中に落ち、閉じ込められてしまいました。

「お前達のいる穴には私の手下共がたくさんいる。血塗れになって死ぬがいい」

羽厨逗の声が不気味に響きます。

「いやあ！」

亜梨沙の叫び声がします。

「きゃあ！」

蘭も叫びます。

「お前様あ」

遊魔の間延びした声が聞こえます。

「何ですか、このむずむずは？」

馨が声を上げます。

「ええい、まどろっこしい！」

孫左京は術で明かりを灯し、飛ばします。

ようやく周囲の様子が見えて来ました。

樹里達は無数のオケラに取り囲まれ、身体に張りつかれていました。

「気持ち悪い！」

亜梨沙が絶叫します。

「お師匠様！」

左京は樹里に張りつくオケラを払い落とします。

「姉さん！」

鷺基も姉の鷺佗に取りついているオケラを叩き落としました。

「おのれっ！」

露津狗は辺りにいるオケラをブレスで焼きました。

第二百七十七話　オケラの襲撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は四天王の一人である羽厨逗（ぱずず）の手下のオケラ軍団に取りつかれていました。

「いくら足掻いても、お前達はそこから出られぬ。死ぬまでもがけ」

羽厨逗の嫌らしい笑い声が響きます。

「畜生！」

孫左京は如意棒を伸ばして天井を破ろうとしますが手応えがありません。

「愚かな猿め。ここは只の地下ではない。我が術によって生み出されし異空間だ。その程度で破れるものではない」

「何！？」

左京は歯軋りしました。

「お前達が悪いのだよ。私の事をバカにするから。オケラをバカにする奴は、皆ここで死ぬのだ！」

羽厨逗の声が叫びました。

亜梨沙達はオケラを払い落としています。

しかし、オケラの数は増すばかりで全く効果がありません。

「どういう事だ?」

鷺佗は眉をひそめます。鷺基が、

「姉上、これはおかしい。オケラが全然減らないぞ」

彼等の足元は既にオケラで埋め尽くされています。

第二百七十八話　異空間の謎編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺侘と鷺基の姉弟は、オケラの不自然さに気づきました。

「お師匠様、これは幻覚です。オケラなどおりません」

鷺侘が言いました。

「そうなんてすか」

樹里は笑顔全開ですが、身体中にオケラがついています。

「何を言っているんだ、裏切り者のアホ姉弟め」

羽厨逗（ぱずず）が明らかに動揺しています。

「オンマリシエイソワカ」

樹里が摩利支天真言を唱えました。するとオケラが消えてしまいました。それればかりか、樹里達は穴の外にいました。

全てが羽厨逗の術だったようです。

「坊主め。よくも我が術を破ったな！」

タキシード姿の羽厨逗（ぱずず）は怒り心頭で怒鳴りました。

「キーキー！」

羽厨逗（ばずず）は奇声を発しました。

「何だ？」

左京が上空を見上げます。

「我が眷属を呼んだ。これでお前達はおしまいだ」

天を埋め尽くす程の蝗（いなご）が現れました。

「食い尽くせ！」

羽厨逗が命じました。

第二百七十九話　蝗の大群編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羽厨逗(ばずず)は蝗(いなご)の大群を呼び寄せました。

「また虫？　ねえ、イケメンさん、食べて」

亜梨沙がドサクサに紛れて鷺基にすり寄ります。

「鷺基はもう蛙ではないのよ！」

鷺佗が亜梨沙を押し返します。

「何よ、役立たず！」

亜梨沙が逆ギレします。

「あんたに言われたくない！」

鷺佗も切れます。

「仲間割れしている場合ではないですよ」

馨が仲裁します。

「その通りだ。でも、いずれにしても手遅れだ」

羽厨逗(ばずず)が愉快そうに言います。

樹里達に蝗が迫ります。

「かああ！」

蘭がありったけの粘液を飛ばし、大きな幕を張りました。

蝗はそれに引っかかり、動けなくなります。

「もうダメ……」

蘭は倒れてしまいました。

「惜しい人を亡くしたわ」

亜梨沙が勝手に蘭を埋めようとします。

「ふざけるな！」

蘭はフラフラになりながら怒りました。

「小癪な真似を！」

羽厨逗は地団駄を踏みました。

第二百八十話　遊魔と孫左京の合体技？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭の機転で樹里達は蝗の大群から守られました。

「私ィ、いい事思いついちゃいましたあ」

遊魔が間延びした喋り方で言いました。

「蝗はあ、蟷螂（かまきり）に食べられちゃうんですよお」

「それだ！」

孫左京が何か思いついたようです。

「初めて使う術だから、失敗するかも知れません。お力をお貸し下さい、お師匠様」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。そして、

「大好きです、お猿さん」

と左京に渡された書を読み上げます。

「何読ませてるんだ、エロ猿！」

亜梨沙が切れました。

「うおお！　力が漲るゥ！」

左京は萌えました。いえ、燃えました。

「行け、我が僕よ！」

身体の毛をむしり、息を吹きかけると、それが全て蟷螂に変わります。

「おお！」

一同は驚きました。

「食い尽くせ！」

左京の号令で、蟷螂達は蝗の大群に襲いかかりました。

数で勝る蝗と強力な蟷螂の壮絶な戦いが始まります。

第二百八十一話　蟷螂対蝗編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はリックの妻である遊魔の言葉をヒントにして術で蟷螂（かまきり）を出しました。

蟷螂は蝗（いなご）に向かいますが、数が違い過ぎて蟷螂がやられてしまいます。

「ほら、もっと蟷螂出しなさいよ！」

蘭と亜梨沙が左京の身体の毛を容赦なく毟ります。

「いでえ！」

左京は絶叫しました。それでも、

「お猿さん、大好きです」

と樹里に書を読み上げてもらい、蟷螂を出します。

「まだ言わせるか、エロ猿！」

蘭と亜梨沙は逆恨みから左京の身体中の毛を毟ります。

「ぎええ！」

露津狗も鷺侘も鷺基も呆れています。

リックは日頃の恨みからか嬉しそうです。

馨は心中複雑な顔をしています。

遊魔は楽しそうです。

蘭と亜梨沙の活躍で蟷螂が多くなって行き、蝗を圧倒し始めます。

左京は稲葉の白兎のようになっていました。

「潮水に浸かると治るよ」

亜梨沙が言います。

「誰が騙されるか！」

左京は切れました。

第二百八十二話　羽厨逗、大いに焦る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために旅をしています。

孫左京の犠牲で、蝗（いなご）の大群を退けた樹里達です。

「食い尽くせ！」

左京はヒリヒリする肌を術で治癒しながら言いました。

蟷螂（かまきり）達は蝗を食いつくし、巨大化します。

「ひいい！」

それを見た親玉の羽厨逗（ぱずず）は慌てました。

「あとはその親玉だ！　食っちまえ！」

左京が涙目で叫びます。亜梨沙が塩をすり込んだのです。

巨大な蟷螂が羽厨逗に迫ります。

「お、おのれ！」

羽厨逗は大きく息を吸い込み、

「はああ！」

と吐き出しました。すると突然、蟷螂が倒れました。

「やっぱり歯槽膿漏だ」

亜梨沙が言うと、

「違うわい！　私の奥の手、毒の霧だ。お前らもこれで終わりだ」

羽厨逗が得意そうに言いました。すると遊魔が、

「始めからそうすれば良かったのにィ」

とゆったりと言います。まるで戦場カメラマンみたいです。

「う、うるさい！」

羽厨逗は怒りました。

一転してピンチの樹里達です。

第二百八十三話　毒の霧編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

三番目の四天王の羽厨逗（ぱずず）は歯槽膿漏のような毒の霧を吐きました。

「だから歯槽膿漏じゃねえって言ってるだろ！」

また地の文に切れる羽厨逗です。

「ううー……」

孫左京は毛を毟り取られた痛みで動けません。

「お師匠様……」

左京は力なく微笑み、樹里を見ました。

「大好きです、お猿さん」

亜梨沙が樹里を真似て言いました。

「やめろ、お師匠様が穢れる！」

左京が血の涙を流して抗議します。

「元気じゃん、左京」

一同の冷たい視線を浴び、左京は焦りました。

「でも、ここは一つお師匠様に」

「そうなんですか」

樹里が偽の芭蕉扇を取り出します。

「えい！」

毒の霧が風で戻されます。

「ぐえっ！」

羽厨逗は毒を浴びました。

「って、効くか、自分の毒が！」

羽厨逗が怒りました。

「これはちょっと眠ってしまうだけなのさ」

羽厨逗は笑います。

「げ」

気がつくと羽厨逗はかまきりに囲まれていました。

第二百八十四話　羽厨逗の最期編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羽厨逗（ばずず）は倒したはずの蟷螂（かまきり）に囲まれてしまいました。

「食い尽くせ」

孫左京が叫びました。

「グッシャグッシャ」

羽厨逗（ばずず）は蟷螂に食べられてしまいました。

「ひえ、残酷ゥ」

亜梨沙が震えます。

「やっと倒したか」

左京はホッとしたのか、そのまま倒れてしまいます。

「ああん、左京、しっかりしてえ」

亜梨沙がドサクサに紛れて左京に抱きつきます。

「何してんのよ？　介抱する気ないの？」

蘭が呆れます。

「いつもあんな感じなのか？」

鷺佗が尋ねます。

「いつもあんな感じです」

馨が言いました。

「お猿さん、大好きです」

樹里が書を見ないでそう言ったのを露津狗だけが聞いていました。

「蘭ちゃんと亜梨沙ちゃん、そんなに介抱したいのなら、僕を介抱して欲しいにゃん」

リックが言いました。すると遊魔が、

「お前様あ、何を言っているのです」

とニッコリ笑って殴りました。

第二百八十五話　最後の四天王編（前書き）

桂まゆ先生、ごめんなさい。

第二百八十五話　最後の四天王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は三人の四天王を倒し、更に山の奥へと向かいます。

道が険しくなり、亜梨沙が音を上げます。

「いやん、もう亜梨沙歩けないィ」

全然可愛くないので、全員が無視です。

亜梨沙は仕方なくまた歩き出します。

「よくぞ参ったな、愚かなる者共」

どこかから酒焼けした声が聞こえます。

「誰がはるな愛だ！」

声が地の文に突っ込みます。

「最後の四天王か？」

ようやく全身の毛が生え揃った孫左京が言います。

「その通り。最後にして最強の私だ」

「ユリアですか？」

樹里が尋ねました。

「誰が南斗最後の将だ！」

怒りながら現れたのはニューハーフでした。

「誰が新宿二丁目だ！」

黒い革のつなぎを着た長い黒髪の女で、防塵マスクをしています。

「私は闇羅曼諭（あんらまんゆ）。最強の四天王だ」

「桂まゆさんですか？」

樹里が言います。

「お師匠様、本当に叱られますのでやめて下さい」

左京が言いました。

第二百八十六話　闇羅曼諭の僕編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

最後の四天王である闇羅曼諭（あんらまんゆ）が現れました。

どうやら出身は京都ではないようです。

「よくも仲間を倒してくれたな。私がまとめて礼をしてやるぞ」

「お礼は君のチューでいいにゃん」

リックが唇を突き出します。

「お前様、おふざけなさいますな」

遊魔が微笑みの爆弾投下です。リックは倒れました。

「俺は女でも容赦しねえぞ！」

孫左京が凄むと、闇羅曼諭はニヤリとして、

「私は戦わない。我が僕が相手をする」

「和菓子も鼈甲飴がいい、ですか？」

樹里が聞き返します。

「誰がそんな事言った！？」

闇羅曼諭は切れました。

「恐れおののけ！　来たれ、亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）！」

すると空から巨大な龍が下りて来ました。

馨とは違って背中から翼が生えています。

「弩羅魂（どらごん）か？」

鷺佗（ろた）が言います。

「亜磁堕覇阿禍はその中でも最強だ。死ね！」

闇羅曼諭は叫びました。

第二百八十七話　三頭の龍、亜磁堕覇阿禍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

最期の四天王の闇羅曼諭（あんらまんゆ）は、亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）という巨大な龍を呼びました。

「弩羅魂（どらごん）だと？」

孫左京は鷺佗の言葉に振り返ります。

「そうだ。遥か異国の魔物だ。龍とは似て非なるものだ」

鷺佗が解説します。すると闇羅曼諭はニヤリとして、

「その通り。龍など足元にも及ばぬ程強い」

「聞き捨てなりませんね！」

馨が怒り、変化します。

「ぐおおっ！」

馨は水流で亜磁堕覇阿禍を攻撃しました。

「ぐわおっ！」

すると亜磁堕覇阿禍は雄叫びを上げ、頭を三つに増やしました。

「げっ！」

馨は後退りしました。

「キングギドラですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が東宝特撮映画だ！」

闇羅曼諭が切れます。

「やっておしまい！」

亜磁堕覇阿禍の三つの口が大きく開かれます。

何かを吐き出すようです。

「みんな、逃げろ！」

左京が素早く樹里を抱えて、きんと雲で飛びました。

第二百八十八話　亜磁堕覇阿禍の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）と言う巨大な龍の攻撃を受けました。

「きゃあ！」

蘭と亜梨沙は馨にしがみついて逃げます。

鷺侘と鷺基、そして薔鏤鬼吏（ばるきり）がリック達を助け、飛びます。

その直後、世界が破滅するような爆音が響き、火柱が上がりました。

「何だ、あれは？」

孫左京が火柱を見て呟きます。

「まるで地獄の業火ですね」

樹里が左京にしがみついたままで言いました。

「いっ！」

左京は樹里の顔がすぐそばにあるので、鼻血を出しそうです。

「逃げられやしないよ」

亜磁堕覇阿禍の背に乗り、闇羅曼諭（あんらまんゆ）が追いかけて来ます。

「どうすれば……」

困った時のコン○ックではなく、偽芭蕉扇です。

「お師匠様、お願いします」

「そうなんですか」

樹里はブンと扇ぎました。

「うへえ！」

闇羅曼諭は飛んで行ってしまいましたが、亜磁堕覇阿禍は大き過ぎて飛ばないようです。

第二百八十九話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と樹里は今まさに亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）の攻撃を受けようとしています。

「ますますまずい」

亜磁堕覇阿禍の巨大な口が再び開き始めました。

「やばっ！」

左京が逃げようとすると、

「オンメイギャシャニエイソワカ」

樹里が八代龍王真言を唱え、洪水で亜磁堕覇阿禍を押えつけました。

「グゲゲ……」

亜磁堕覇阿禍が怯みます。

「今です、お猿さん」

耳元で囁かれたので、左京のエロパワーはリミッターを振り切りました。

「はい、お師匠様！」

左京は如意棒を振り回して、亜磁堕覇阿禍の背中に飛び乗ります。

「どりゃあ！」

左京は亜磁堕覇阿禍の翼の根元を殴りました。

「ぐおうお！」

亜磁堕覇阿禍が苦しみます。

「ここはどうだ！」

次は真ん中の頭を殴ります。

「ぐおう！」

亜磁堕覇阿禍は身体を激しく揺らして、左京を振り落とそうとします。

「おらあ！」

と亜磁堕覇阿禍の右の頭を殴りました。

第二百九十話　亜磁堕覇阿禍の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の様々な支援により、孫左京は反撃を開始しました。

「もういっちょ！」

次に左の頭も殴ります。

遂に亜磁堕覇阿禍はフラフラし始め、地上に落ちて行きます。

「よっと」

左京はきんと雲に戻りました。

亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）は地面に激突し、大きな土煙を上げました。

「やったか？」

それを見ていた鷺佗が呟きました。しかし鷺基は、

「弩羅魂（どらごん）があの程度でくたばるはずがない」

と言いました。

「ぐがあ！」

鷺基の言う通りでした。土煙の中から、怒り狂った亜磁堕覇阿禍

が姿を現しました。

「まずい……。さっきより凶暴化している」

左京は焦りました。

「ブハハ、愚か者め！　お前達は亜磁堕覇阿禍を怒らせただけだ。もう知らぬぞ」

ボロボロになりながら戻って来た闇羅曼諭（あんらまんゆ）が言いました。

「姉さん、猿に手を貸そう。このままではお師匠様が危ない」

鷺基が言いました。

第二百九十一話　孫左京と樹里、危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗と鷺基は孫左京を援護するために飛翔しました。

「てめえら、手出しするな！　こんな龍一匹、俺一人で十分だ」

左京は鷺佗達を睨みました。

「お前はそいつを怒らせただけだ。さっきより強くなっているのはわかるだろう？」

鷺基が言います。図星なので左京は黙ってしまいました。

「左京はイケメンが嫌いだからね」

馨の背中で亜梨沙が言います。

「何を内輪で揉めているのだ？　お前らは阿呆か？」

闇羅曼諭（あんらまんゆ）が言い放ちます。そして、

「殺せ！」

亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）が咆哮を上げ、三つの口が火を吐きます。

「うわ！」

馨が慌てて逃げます。

「こら、龍、逃げるな！　水で援護しろ！」

蘭が馨を殴ります。

「そんなあ」

馨は泣きそうです。

「このヤロウ！」

左京が如意棒で真ん中の首を攻撃します。

「がああ！」

右の首が火を吐き、左京を攻撃します。

左京はその火を何とかかわしました。

第二百九十二話　鷺佗と鷺基編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と樹里は亜磁堕覇阿禍の挟み討ちに遭っていました。

「がああっ！」

左の首が火を吐き、左京を攻撃します。

「オンメイギャシャニエイソワカ」

樹里が八代龍王真言で洪水を起こし、火を阻みます。

「見事な連携だな」

鷺佗が言います。

「だがもう保たん。お師匠様が限界だ。猿め、それに気づいていない」

鷺基が言い、

「姉上、行くぞ」

「わかった」

二人は飛翔し、亜磁堕覇阿禍に接近します。

「お前達、後は頼んだぞ」

薔鏤鬼吏達(ばるきり)に言いおくと、二人は何かを唱え始めます。

「斬(ざん)！」

二人が気合いを入れて叫びます。すると天から雷撃が走り、亜磁堕覇阿禍を撃ちました。

「ぎおあ！」

三頭のうちの右がこれを食らい、のたうちます。

「何だ、今の雷は？」

闇羅曼諭(あんらまんゆ)が眉をひそめました。

「猿、お師匠様がお疲れなのだ。退け」

鷺佗が言いました。左京はハッとしました。

第二百九十三話　露津狗の奇襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里がグッタリしている事に気づきました。

「お師匠様！」

樹里は意識が朦朧としているようです。

「お師匠様！」

左京はその場を離れました。

「時の術を使ったな？」

闇羅曼諭（あんらまんゆ）が憎らしそうに言います。

闇羅曼諭は凶悪な顔になりました。

「時の術は連続して使う事はできぬ。亜磁堕覇阿禍よ、その裏切り者共を焼き尽くせ！」

鷺佗と鷺基は互いを庇うように抱き合います。

「何かムカつく、あの美男美女カップル」

亜梨沙が言いました。

亜磁堕覇阿禍が二人目がけて口を大きく開いた時でした。

「だああっ！」

いきなり土の下から狼男の露津狗が飛び出して来て、闇羅曼諭の喉に噛みつきました。

「ぐああっ！」

闇羅曼諭はそのまま倒れ、もがきますが、露津狗は離れません。

露津狗はずっと土の中に潜んでいたようです。

決して作者が忘れていた訳ではありません（忘れていました作者）。

第二百九十四話　四天王全滅編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

露津狗の奇襲で、闇羅曼諭（あんらまんゆ）は倒れました。

「ぐうう……」

鷺侘と鷺基は動きが止まった亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）に攻撃を仕掛けます。

「食らえ！」

鷺侘は銀の弓矢の釣瓶打ちです。

「はあっ！」

鷺基は自らを鋭い刃に変化させ、亜磁堕覇阿禍を斬り裂きます。

「がごお！」

亜磁堕覇阿禍は苦しみ出しました。

「おのれ、このままで終わるものか……」

露津狗の牙が深く喉に食い込み、闇羅曼諭は倒れ、粉々に砕けて消えました。

「飼い主は死んだぞ。お前は居場所に帰れ」

鷺佗が弓を引きながら言いますが無駄でした。

「がぁ！」

亜磁堕覇阿禍は制御不能になり、また暴れ出します。

「こいつ、何かされたな？」

鷺佗が苦々しそうに言います。

「飼い主が死んでもまだ留まっているという事は、こいつの本当の飼い主は奴だという事か」

鷺基が忌ま忌ましそうに言いました。

左京が戻って来ました。

第二百九十五話　孫左京の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は鷺基を睨み、

「手出しするなって言ったはずだ！　こいつは俺の獲物なんだからな」

鷺基は変化を解き、

「そうだったな」

と鷺佗と共に離れた。

「良いのか、鷺基？　猿だけでは……」

鷺佗が言うと、

「心配いらない。あの猿、お師匠様を守ろうと思うと、我らも及ばぬ力を発揮する」

「所謂スケベ心か」

鷺佗の身も蓋もない言い方に苦笑いする鷺基です。

そのスケベ心の権化である左京は暴走し始めた亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）に接近します。

「俺の七百九ある変化術の中の最強の術でてめえをぶっ倒してやるぜ！」

それを聞いた亜梨沙が、

「何で七百九なの？」

「きっとあの悪い猿が七百八の術を持っているからよ」

蘭が言いました。

「変なところで対抗心剥き出しなんだから」

亜梨沙は呆れて肩を竦めます。

「それよりお師匠様が休める所に行かないと」

馨は背中でグッタリしている樹里を見て言いました。

第二百九十六話　孫左京対亜磁堕覇阿禍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）を睨みつけます。

「お師匠様をあそこまで疲れさせちまった自分が情けないぜ。連携攻撃だなんて浮かれて……。お師匠様は女の子なのに……」

発言が意味不明の左京です。

「男は女の子を守るために戦うべきなのに、女の子を戦いに巻き込んだ俺は最低だ！」

亜磁堕覇阿禍も、左京が妙な事を言っているので唖然としているようです。

「何をしているのだ、あの猿は？」

鷺佗も驚いています。

「猿、血迷ったか？」

露津狗も訝しそうに左京を見上げます。

「ううう……」

左京はとうとう泣き始めました。

亜磁堕覇阿禍は完全に混乱しています。

「隙ありー！」

左京は突然如意棒を巨大化させ、亜磁堕覇阿禍を突きました。

「ごがああ！」

亜磁堕覇阿禍は地面に叩きつけられ、またしても土煙が舞いました。

「見たか、最強の術！」

左京は大威張りですが、他の者達は茫然自失です。

第二百九十七話　亜磁堕覇阿禍滅す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は姑息な手段で亜磁堕覇阿禍（あじだはあか）に攻撃しました。

「ごがあ！」

亜磁堕覇阿禍は激怒し、左京に三つの口を向けます。

「さあ、もっと怒れ！」

左京は不敵に笑います。

「猿め、何を企んでいるのだ？」

鷺基が左京の妙な自信を訝ります。

「がごああ！」

三つの口から今まで以上の業火が吐き出されました。

「左京！」

蘭と亜梨沙が叫びます。

「お猿さん……」

樹里がうわ言を言いました。

「これが俺のとっておきの術だ！」

左京は輝く楯を出しました。

「全部倍返しだ！」

炎が楯に当たるとその勢いが強まり亜磁堕覇阿禍に向かいました。

「何！？」

鷺佗と鷺基が仰天します。

「がおがあ！」

亜磁堕覇阿禍は自分の放った業火の倍返しをされ全身を焼き尽くされました。

「ごおお！」

断末魔と共に亜磁堕覇阿禍は消滅しました。

「やった！」

馨が叫びました。

「ざまあ見ろ」

孫左京はニヤリとしました。

第二百九十八話　戦い終わる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京の活躍で、遂に四天王は全滅です。

「お師匠様！」

左京は馨の背中から降ろされた樹里に駆け寄ります。

「よくやってくれました、お猿さん」

樹里は虚ろな目で言いました。

「お師匠様、俺のせいで……」

左京は号泣しました。馨はもらい泣きです。

「お師匠様！」

ガックリと項垂れた樹里を見て、左京が樹里を抱きしめます。

「死なないで下さい！」

樹里は寝ているだけでした。

「徹夜で戦っていたから、お師匠様眠かったみたい」

亜梨沙が言いました。左京は石化しています。

「それより、どさくさに紛れて抱きついてるんじゃないわよ、エロ猿！」

蘭が左京を蹴飛ばします。

「あんな凄い術があるのなら、サッサと出せばいいのに」

亜梨沙もお冠です。

「あれは太上老君の邸からくすねて来たんだよ。さっきやっと使い方がわかってさ」

左京は苦笑いして言いました。蘭と亜梨沙は顔を見合わせて呆れました。

第二百九十九話　六耳？猴現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は互いを労い、一時の休息をします。

「四天王、全滅してんのう、なんちゃって」

亜梨沙の寒いギャグが場を白けさせます。

樹里はまだ寝ています。リックがちょっかいを出そうとして、遊魔、左京、蘭に蹴飛ばされます。

露津狗は肩を寄せ合って休む鷺佗と鷺基を見ています。

「まだ未練があるの？」

亜梨沙が声をかけました。露津狗は、

「何の事だ？」

と惚けました。亜梨沙はニコッとして、

「無理しちゃって。妥協して、私と付き合ってみない？」

「お前は猿が好きなのではないのか？」

亜梨沙はギョッとしましたが、

「諦めたのよ。あいつ、お師匠様しか見えてないし」

「振られた者同士か」

露津狗が呟くと、

「やっぱり未練あるんでしょ？」

「知らん！」

露津狗は赤面して言いました。

その時でした。

「貴様ら、よくもやってくれたな！　生かしては帰さんぞ！」

六耳（ろくじびこう）？猴が現れました。

第三百話　六耳？猴の秘術編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

束の間の休息をとる孫左京達の前に六耳（ろくじびこう）？猴が現れました。

「四天王を倒すとはさすがだ。しかし、この俺はその四天王四人より強い」

左京は前に進み出て、

「誰だ、お前？」

「忘れたんかい！」

六耳？猴は切れました。

「陛下に頂きし術。これで俺の術は七千八十になった」

亜梨沙が、

「見栄っ張りなところは本当に双子みたいね」

と蘭に囁きました。

「嘘吐け！」

左京は如意棒を振り回します。

「見せてやろう。我が秘術を！」

六耳（ろくじびこう）？猴が十体に増えました。

「何！？」

鷺基がギョッとします。

「どうした、鷺基？　只の分身の術であろう？」

鷺佗は弟の反応を不思議に思いました。

「これは分身の術などと言う下等な術ではない。俺そのものが十体に増えたのだ！」

六耳？猴は高笑いしました。

「河東真君な術？」

左京が呟くと、

「誰がそんな事言った！？」

六耳？猴が切れました。

第三百一話　混戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳(ろくじびこう)？猴は十人に増えました。

「不細工がたくさんいるとキモいわ」

亜梨沙が言いました。

「かかれ！」

十体の六耳？猴が一斉に孫左京達に襲いかかります。

「おらあ！」

左京が如意棒を振るうと六耳？猴はあっさり倒れました。

「何？」

左京と六耳？猴が同時に驚きます。

「えい！」

「たあ！」

亜梨沙と蘭も簡単に六耳？猴を倒しました。

もちろん鷺佗と鷺基、露津狗もです。

馨とリックは手こずりましたが、薔薇鬼(ばらきり)吏達も簡単に倒しました。

六耳？猴はたちまち一人です。

「劇団ですか？」

目を覚ました樹里がボケます。

「誰が大沢あかねだ！」

六耳？猴は切れました。そして気づきます。

「今の術は……」

左京がニッと笑って、

「お前、第六天魔王に騙されたんだよ。十体に増えるんじゃなくて、分かれただけだ」

「要するに、強さが十分の一、という事だな」

露津狗が言い添えます。

第三百二話　第六天魔王の企み編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳（ろくじびこう）？猴は結局一体になりました。

「おのれ……」

六耳？猴は第六天魔王に嵌められたのに気づきます。

「俺が強くなり過ぎたという事か！」

すると天が暗くなり、雷鳴が轟きます。

「変身忍者嵐ではないぞ」

第六天魔王が樹里のボケ封じをしました。

「大野君は元気ですか？」

樹里がすかさず違うボケで応戦です。

「その嵐でもねえし、その魔王でもねえ！」

魔王は切れました。結構芸能界に詳しそうです。

「六耳？猴よ、その通りだ。お前は強くなり過ぎ我が地位を脅かす存在となった。だから弱くなってもらったという事だ」

「畜生、騙しやがって！」

六耳？猴は怒りに震え、雲に乗って飛翔します。

「我に歯向かうつもりか、六耳？猴？」

第六天魔王が尋ねます。

「ああ、そうだよ！」

六耳？猴は大声で言いました。

「おやめなさい、魔王の思う壺ですよ」

まともバージョンの樹里が言いました。

第三百三話　六耳？猴の反逆編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳（ろくじびこう）？猴は怒り狂い、樹里が止めるのも聞かずに飛翔します。

「我に歯向かうとは、所詮猿か、うぬも？」

第六天魔王が言いました。すると孫左京が、

「てめえ、猿をバカにするな！」

と怒鳴ってきんと雲で飛びます。

「ここにもバカが一匹」

蘭が呆れて言いました。

「お前は関係ない、孫左京。下がっていろ」

六耳？猴が怒鳴ります。

「うるせえ、ヘボヤロウ！　あいつは猿をバカにしたんだ。関係大有りなんだよ！」

左京退く気がないようです。

「お師匠様、よろしいのですか？」

馨が心配して尋ねました。

「大丈夫ですよ。あの二人は本当は仲良しなのですから」

樹里の言葉に馨は項垂れました。

「どうでも良い。うぬらがどれほど束になろうと、我に勝てる道理がないのだ。かかって来い、愚かな者達よ」

第六天魔王が挑発します。

「その前にここまで降りて来い、魔王！」

六耳？猴が言いました。

第三百四話　第六天魔王降臨編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳猴（ろくじびこう）と孫左京の前に大きな闇が降りて来ました。

「何だ、あれは？」

鷺侘が唖然とします。露津狗も鷺基も言葉が出ません。

薔薇鬼（ばらきり）吏達は互いに寄り添い、闇を見ています。

亜梨沙と蘭は思わず抱き合ってしまいます。

リックは遊魔の後ろで震えています。

馨は樹里を庇うようにしますが歯の根も合わないほど口が震えています。

「我が第六天魔王である」

闇が蠢き、声が聞こえました。

「……」

六耳猴は声が出ません。

「何だ、こいつは？」

お釈迦様にもビビらずに向かって行った阿呆の左京は、眉をひそめただけです。

「お猿さん」

樹里はキッと第六天魔王を睨みます。

「我は闇そのもの。愚かなる下界の生き物達の欲や憎悪こそが我の力の源。我には死はなく、終わりもない」

「お師匠様、お願いします！」

「はい」

樹里は偽芭蕉扇を出し、闇に向かって全力で振り抜きました。

第三百五話　第六天魔王の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の全力の芭蕉扇の風が闇にぶち当たります。

「ぬう！」

闇が揺れます。

「何だ？」

六耳？猴（ろくじびこう）が眉をひそめました。

「おのれ！」

闇が風でかき乱され、散って行きます。

「おお！」

鷺佗と鷺基が声を揃えて叫びました。

闇はまるで水中に垂らされた墨のように薄らぎ、消えました。

そこには正装した幼い子供が浮かんでいます。

姿は子供ですが、途轍もない妖気を身に纏っています。

「ここまでやるとは、その坊主、惚けた女だな」

子供が喋りましたが、それは紛れもなく第六天魔王の声でした。

「脅かしやがって！　只のガキじゃねえか！」

孫左京は大声で言いました。

「愚かな猿だな。我は第六天魔王の髪の毛一本に過ぎぬのだ。陛下はここにはおわさぬ」

子供が言いました。

「あれが、髪の毛一本？」

蘭が仰天しました。

「あいつの妖気は俺達全員の妖気より遥かに強い」

露津狗は歯軋りしました。

第三百六話　圧倒的な存在編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王の髪の毛一本に過ぎない存在のその子供は、孫左京達を圧倒する妖気を発しています。

「抜け毛でお悩みですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がお医者さんに相談だ！」

その子供は切れました。そして、

「お前達を相手にするのも一興だが、今はそんな暇はない」

と飛び去ろうとします。

「待て！　このまま行かせるものか！」

六耳？猴（ろくじびこう）が追いかけます。

「鬱陶しい！」

子供の右腕がまるで蛇のように伸び、六耳？猴の左胸を貫きました。

「ぐう……」

六耳？猴はまっさかさまに地上に落ちました。

「おらあ！」

左京はその隙を突いて子供に仕掛けます。

「遅いな」

子供の左手から炎が噴き出します。

「熱くなんかねえぞ！」

左京は子供に如意棒を振るいます。

「お猿さん」

子供の顔が樹里になりました。

左京は思わず攻撃を止めてしまいます。

「バカめ！」

子供は容赦なく左京を右腕で貫きました。

第三百七話　孫左京、切れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は第六天魔王の髪の毛の化身である子供の右腕で身体を貫かれました。

「咄嗟に心臓を避けたか」

子供はニヤリとしました。左京は右腕から抜け出して、

「この程度でやられるような孫左京様じゃねえぜ、化け物」

と言うと、口から血の塊を吐きます。

「お猿さん」

子供はまた樹里に化けます。

「騙されるか！」

左京は如意棒を振るいますが、どうしても攻撃できません。

「どう、お猿さん？　私を殴れますか？」

左京を惑わす子供です。

左京は鼻血を押さえます。

「止めよ、お猿さん」

子供は樹里の顔のままで左京に襲い掛かります。

その時でした。

「ぐ！」

子供の伸ばした腕に銀の矢が刺さりました。

「何か勘違いしていないか？　ここにいるのは猿だけではないぞ」

鷺佗と鷺基が飛翔しています。

すると子供は一瞬にして樹里の前に飛びました。

「まずお前が死ね」

その言葉に左京が切れました。

「ふざけるな！」

第三百八話　六耳？猴の最期編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王の髪の毛の化身である子供は、樹里の前に飛びました。

孫左京が切れ、子供に向かいます。

「お師匠様に手を出すんじゃねえ！」

しかし一瞬早く、子供は樹里に右手を突き立てました。

「わああ！」

左京が絶叫します。

「ワハハ、今回でこの話は終了にゃん。次回からお待ちかねのリックの西遊記が始まるにゃん」

場違いなボケを繰り出し、蘭と亜梨沙にボコられるリックです。

「何！？」

しかし、子供が何故か驚いています。

それは樹里ではなく、変わり身でした。

「残念だったな、クソガキ！」

六耳?猴が苦しそうに言いました。

「お前がやったのか？　愚かな」

子供が憎しみの目を六耳?猴に向けます。

「俺の秘術で消し飛ばしてやる！　死ねっ！」

六耳?猴は全身の毛を針のようにして子供に向かいました。

「用済みの奴は消すに限るな」

子供の放った業火が六耳?猴を焼き尽くしました。

第三百九話　孫左京の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳猴（ろくじびこう）は子供の攻撃で消えてしまいました。

「自分が弱くなっている事を自覚しないとは、愚か過ぎる」

「てっめえ！」

左京がいきなり攻撃開始です。

「てめえ、よくもよくも！」

如意棒を高速回転させ、子供に迫ります。

「ぬう？」

その迫力に子供は飛翔しました。

「何だ、こいつ？」

彼には意味がわかりません。

「がああ！」

左京は巨大化し、子供を殴ります。決して児童虐待ではありません。

「ぐお！」

子供はその衝撃に驚きました。

（バカな……。何だ、この力は？）

「もう一発！」

しかし、左京の渾身の拳は空を切りました。

子供は逃げたようです。

「お師匠様、すみません、仇を討てませんでした」

左京は樹里が死んだと思って怒っていたようです。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言いました。左京は唖然とします。

そして六耳？猴が死んだ事を知りました。

左京は歯軋りしました。

第三百十話　ここでお別れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は六耳猴（ろくじびこう）？を弔いました。

「てめえを倒すのは俺のはずだったのに」

孫左京も寂しそうに手を合わせます。

「お師匠様」

鷺佗が樹里を見ました。

「はい」

樹里は笑顔全開で応じます。

「私達は第六天魔王を追います。お師匠様は仏様の国にお向かい下さい」

「どういう事だ！？」

左京が鷺佗を睨みます。

「一刻も早くありがたい経典を受け取る事が第六天魔王を倒す近道のはずだ。それがわからんのか、猿？」

鷺佗に言われ、左京は何も言い返せません。

「わかりました。気をつけて下さいね」

樹里は言いました。

「俺もついて行くぞ」

露津狗が言います。鷺佗は、

「構わんが、死んでも知らんぞ」

「委細承知」

露津狗はニヤリとします。亜梨沙は寂しそうです。

「露津狗のいない穴は僕が埋めるにゃんよ」

リックが亜梨沙のお尻を触ります。

「何するのよ、エロ猫！」

亜梨沙は扇子で殴りました。

第三百十一話　子沢山の美女編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は薔薇鬼(ばるきり)吏の鷺佗達と別れ、仏様の国に向かいます。

「鷺佗ちゃん、可愛かったにゃん。しかも子供をたくさん産めそうにゃん」

リックがエロ剥き出しで言います。

「お前様、どういう事ですか？」

遊魔がニッコリ笑って容赦なく殴ります。

「じょ、冗談だにゃん」

リックは泣きながら言いました。

その時でした。

「わーい！」

もの凄い数の小さな子供達が現れ、亜梨沙のスカートと蘭の腰蓑を捲ります。

「きゃあ！」

馨がそれを見て鼻血を噴きます。リックは子供に混ざっていまし

た。

「このエロガキ！」

蘭が切れ、竜巻で子供達を振り払います。

「どさくさに紛れて何してるんだ、エロ猫！」

亜梨沙がリックを殴ります。

「あんたら、私の子供達を虐めるんじゃないよ」

そこに腰に僅かな布を巻き付けただけの美女が現れました。

「ぶ！」

美女は胸が剥き出しなので、孫左京達は鼻血を出しました。

第三百十二話　その名は鬼子母神編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前にエロい姿の子連れの美女が現れました。

「おねいさーん！」

リックが反射的に飛びかかろうとしますが、

「お前様、危ない！」

と遊魔に殴られます。

「エロ猫、命拾いしたな。その女は鬼だ」

孫左京は鼻血を拭いながら言いました。

「ほお。猿、お前、もしかして孫左京か？」

美女が尋ねます。

「だったらどうした？」

左京が凄みます。すると美女は子供達に、

「お前達、やっと父ちゃんに会えたよ」

「何！？」

左京と亜梨沙と蘭が叫びます。

「忘れたのかい？　あんなに愛し合ったのに」

美女の言葉に全身から嫌な汗が噴き出す左京です。

「誰なんだよ、お前は？」

動揺しながら尋ねます。

「私は鬼子母神。名前も忘れちまったのかい？」

鬼子母神はニヤリとして言いました。

左京が振り返ると、女性陣が遥か後方までドン引きです。

「左京、もう僕の事をエロ猫とか言わないでにゃん」

リックが言いました。

第三百十三話　孫左京、隠し子発覚？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は子沢山な鬼、鬼子母神と出会いました。

鬼子母神は子供達の父親は孫左京だと言いました。

そのせいで樹里達女性陣はドン引きしました。

「バ、バカな事言うな、俺はお前なんかと愛し合った覚えはないぞ！」

左京は汗まみれで反論しました。

すると鬼子母神はニヤリとして、

「引っかからなかったか。惜しいな」

「てめえ、どういうつもりだ！？」

左京が怒ると、

「あんたみたいに強い奴が父親だったら子供達も安全だと思ったのさ」

すると樹里が戻って来て、

「どういう事ですか、丹古母鬼馬二（たんこばきばじ）さん？」

「誰が悪役商会だ！」

鬼子母神が切れました。

「私の昔の悪い仲間達が第六天魔王に付いちまってさ、私の子供を攫おうとしたんだ」

樹里達は驚きました。

「詳しく話を聞かせて下さい、神田満さん」

樹里が言いました。

「それは丹古母鬼馬二の本名だろ！」

鬼子母神はまた切れました。

第三百十四話　第六天魔王の味方？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鬼子母神から、第六天魔王に味方する者達の存在を聞きました。

「一体、誰が魔王に付いたんだ？」

孫左京が尋ねます。

「阿修羅（あしゅら）さ」

鬼子母神が言いました。

「何だって！？　あの炎の魔神が？」

左京は仰天しました。

「マジンガーＺですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が光子力ビームだ！」

鬼子母神が切れました。

「それから、歓喜天だ」

「僕の大好きな方だにゃん」

リックが嬉しそうに言い、亜梨沙達に蹴飛ばされます。

「他にも何人か味方になっちまった奴がいてさ。私の子供達が危ないんだよ」

鬼子母神は色っぽい目で樹里を見ます。

「お坊様、私を助けて下さいな」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。鬼子母神は更に、

「いい男だね」

「お師匠様は女の人だよ」

左京の言葉に鬼子母神は固まりました。

「この女、意外にバカかも」

亜梨沙が囁きます。

「お前が言うな」

左京は呆れました。

第三百十五話　阿修羅襲来編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鬼子母神から第六天魔王に味方する者の名を聞きました。

「阿修羅か。手強いわね」

元天界の近衛大将である蘭が言いました。

「三つの顔に六本の腕を持つ闘神。とんでもなく強いよ」

鬼子母神が言います。

「ところで岸信介さん」

樹里が言いました。

「誰が昭和の妖怪だ！」

鬼子母神は切れました。

「何故第六天魔王は貴女の子供を攫おうとするのですか？」

「私を仲間に引き入れたいからです。私を通じて、天界の四天王を陥れようとしているのです」

鬼子母神が言いました。

「まだ四天王の話をしてんのう、なんちゃって」

亜梨沙が寒いギャグを言いました。

「ここにいたか」

阿修羅が現れました。孫左京はギョッとしました。

「Ｄｒ．ヘルは元気ですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「俺はそのアシュラじゃねえ！」

阿修羅は切れました。

「いい加減仲間になれ、鬼子母神」

阿修羅はニヤリとしました。

第三百十六話　孫左京対阿修羅編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は闘神である阿修羅の襲撃を受けました。

「猿、お前もかつては天界を敵に回して戦ったほどの手練。我らと思いは同じぞ」

阿修羅は孫左京を誘惑します。蘭がギクッとします。

（まずい。かつて左京は阿修羅以上に天界を憎んでいた……）

亜梨沙も心配そうに左京を見ます。

「ふざけるな、俺は昔から清廉潔白が信条だ」

左京は背中に大きく「お師匠様命」と字を浮き上がらせました。

蘭と亜梨沙が呆れます。

阿修羅が剣を出し、左京に斬りかかります。

「おらあ！」

左京は如意棒を回して剣を弾きます。

「何故だ？　何故我らに敵対するのだ？」

阿修羅が尋ねます。左京は、

「俺はありがたい経典を授かるために旅をしているんだ。お前のような邪悪な考えは持ってねえ！」

するとリックが、

「本当はお師匠様が大好きで一緒に旅をしたいからだにゃん」

と暴露します。

「この！」

左京はリックを蹴飛ばしました。

第三百十七話　阿修羅の猛攻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

阿修羅は孫左京の篭絡が無理だとわかると、途端に戦略を変えました。

「ならば全員、我が業火で焼き尽くす！」

阿修羅の剣の先から炎が噴き出します。

「がああ！」

馨が龍に変化し、水流で炎を押し返します。

「おらあ！」

蘭も竜巻で援護します。

「オンメイギャシャニエイソワカ」

樹里も八大龍王真言で洪水を起こします。

「うへえ」

しかし、起こした場所が悪く、阿修羅だけではなく左京も流されました。

「おのれ！」

阿修羅は態勢を立て直し、再び攻撃をします。

しかも今度は宙に浮いているので、洪水攻撃は効きません。

「このヤロウ！」

左京はきんと雲で阿修羅に迫ります。

「愚かなり、猿」

「何？」

振り返ると、鬼子母神が樹里を連れ去るのが見えました。

「鬼子母神は我が同胞。我らの狙いはあの坊主なのだ」

「何だと！？」

左京が追おうとすると、

「お前の相手は俺だよ」

阿修羅が立ちはだかりました。

第三百十八話　孫左京激怒する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は阿修羅と鬼子母神の策略に嵌り、樹里を連れ去られてしまいました。

「てめえ、よくもお師匠様を！　どうせ誘拐するなら、リックにしてくれ！」

左京はあまりにも頭に来たので、酷い事を言います。

「左京、あんまりだにゃん」

リックが泣きそうな顔で言います。

「私もそう思う」

亜梨沙が呟きます。蘭は黙って頷いています。

「鬼子母神を追いますよ、蘭さん！」

馨が蘭に呼びかけます。

「飛べ、マリュー！」

蘭が珍しくボケます。

「怪獣王ターガンじゃないです」

馨は涙ぐみながらも、蘭を乗せられて嬉しいようです。

「あん、私も！」

亜梨沙が馨の尻尾にしがみつきました。

「痛いです、亜梨沙さん」

馨は泣きながら鬼子母神を追います。

「頼むぞ、お前ら」

左京は阿修羅を見ました。

「おい、化け物、この孫左京様に喧嘩を売った事、たっぷりと後悔させてやるぜ」

左京は如意棒を振り回して言いました。

第三百十九話　阿修羅、滅多打ちにされる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鬼子母神に攫われた樹里を馨と蘭と亜梨沙が追いかけています。

孫左京は阿修羅と睨みあっています。

「情けない奴だな、孫左京」

「何がだ！？」

阿修羅の憎らしい笑みに左京は切れました。

「坊主の色香に迷いおって」

「うるさい！」

左京は如意棒を振り回します。

「あんな女、全然可愛くないわい」

阿修羅がそう言った時でした。

「何だと！」

左京の如意棒が阿修羅の鼻を掠めます。

「ぐ」

阿修羅は鼻血を垂らしました。

「もういっぺん言ってみろ！　誰が全然可愛くないだと！」

左京は完全に逝ってしまっています。

目が危ないです。

「おらおらおら、言ってみろってんだよ！」

阿修羅の三つの顔がボコボコにされます。

「ぐうう……」

阿修羅は剣で反撃しますが、左京は剣を受けても退きませんし、堪えていないようです。

「何とか言えよ、化け物！」

言いたくても言えないくらいボテ繰り回されている阿修羅です。

第三百二十話　樹里、鬼子母神と話す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭達は樹里を攫った鬼子母神を追いましたが、途中で見失ってしまいました。

「お前が遅いからだよ！」

蘭が馨の頭を小突きます。

「すみません、蘭さん」

馨は素直に謝りました。

「どうするの、これから？」

亜梨沙が言いました。

「うーん」

蘭は腕組みして考え込みます。

樹里は鬼子母神の住処である洞窟に連れて来られました。

「ここで大人しくしてな」

鬼子母神は樹里を檻に入れました。

「ところで、岸部一徳さん」

樹里が言いました。

「誰が小野田官房長だ！」

鬼子母神が切れます。

「貴女は何故第六天魔王に味方するのですか？」

鬼子母神の顔色が悪くなります。

何か腐ったものでも食べたのでしょうか？

「違うよ！」

地の文に突っ込みましたね。

「お前には関係ない事だ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。鬼子母神は立ち去りながら、

「亭主が人質なんて言えないよ」

と呟き、洞窟を出て行きました。

第三百二十一話　孫左京、阿修羅を倒す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里の事をバカにした阿修羅を蛸殴りです。

「ぶべべ……」

阿修羅は三つの顔を腫らし、口から血と涎の入り交じったものを吐き出します。

「お師匠様を悪く言う奴はこの孫左京が絶対に許さねえ！」

阿修羅は倒れていますが左京は殴り続けます。

「おらおら！」

そこへ観音様が現れました。

「やめよ、孫左京。阿修羅は気を失っておる」

ようやく左京は収まりました。

「お前の師匠を思う気持ちはわかるが、無抵抗の者を殴り続けるのはいかん」

観音様は微笑んで言います。左京は如意棒を耳の中にしまい、

「その化け物が悪いんだよ」

「いい加減にせんか！」

観音様が怒鳴ります。左京はギョッとして観音様を見ました。

「阿修羅も元は天界の者だ。ほんの些細な心の隙につけ込まれ、第六天魔王の味方になってしまった。許しておやり。阿修羅は私が預かるから」

観音様は阿修羅を連れて天界に帰りました。

第三百二十二話　樹里の行方編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は強敵の阿修羅を倒しました。

「あれ？」

ふと見ると、そこにはリックの妻の遊魔と子猫達しかいません。

「リックは？」

左京は遊魔に尋ねました。

「旦那様はあ、お師匠様の匂いを辿って行きましたよ」

「わかった。あんた達はここにいろ」

左京は遊魔達を残してきんと雲でリックを追いました。

しばらく進むと馨達に出会いました。

「見失っただと？」

左京は鬼の形相で怒ります。馨は怯えながら、

「すみません。亜梨沙さんが重くて速く飛べなかったんです」

「何ですって!?」

亜梨沙は切れました。

「それは正解ね」

蘭が言います。

「そうかも知れない」

左京までそう言ったので、亜梨沙は落ち込みました。

「そう言えばエロ猫を見なかったか?」

左京が尋ねます。

「見なかったよ」

蘭が答えます。

リックは鬼子母神の洞窟の前にいました。

「ここにお師匠様がいるにゃん」

リックは嬉しそうに呟きました。

第三百二十三話　リック捕まる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは洞窟の中に誰もいないのを確かめ、猫に戻って忍び込みます。

「お師匠様、どこだにゃん?」

奥へと進みながら呼びかけます。

すると樹里が閉じ込められている檻が見えて来ました。

「お師匠様!」

リックが声をかけると、樹里は、

「オンメイギャシャニエイソワカ」

といきなり八代龍王真言を唱えました。

「うへえ」

リックは洪水に呑み込まれました。

「猫さんですか?」

樹里はどうやら寝ぼけていたようです。

「酷いにゃん、お師匠様」

リックはイケメンに変化し檻に近づきます。

「今鍵を開けるにゃん」

リックは自分の毛を鍵に変えます。

「何してるんだ、そこで？」

鬼子母神が戻って来ました。

「な、何もしてないにゃん」

リックは汗まみれになります。

「中に入れ」

リックも檻の中に入れられました。

「大人しくしてろ」

鬼子母神は出て行きます。

「今はお師匠様と二人にゃん」

リックの目が危険です。

第三百二十四話　樹里危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里を助けに来たリックは捕まってしまいました。

しかも樹里と同じ檻に入れられました。

これは危険です。

「お師匠様」

リックがエロい目で樹里に近づきます。

でも樹里は身の危険を感じていないようです。

「何ですか、猫さん？」

いつものように笑顔全開です。

「取り敢えず、お互い服を脱ぐにゃん」

リックは気味の悪い笑みを浮かべ、服を脱ぎ出します。

「さあ、早く脱ぐにゃん、お師匠様！」

その時です。

「何してんだ、エロ猫！」

リックの後頭部を如意棒が直撃します。

「げひっ！」

リックは檻の反対側に激突しました。

「お猿さん」

樹里は微笑んで言いました。そこには孫左京と亜梨沙と蘭と馬に戻った馨がいました。

「助けに来ました、お師匠様」

左京が照れ臭そうに言います。

「早くここを出ましょう」

蘭が言いました。すると樹里は、

「まだです。鬼子母神さんが戻るのを待ちましょう」

と言いました。

第三百二十五話　鬼子母神の悲しみ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の考えで、孫左京達は岩の陰に隠れ、鬼子母神が戻って来るのを待ちます。

「ああん、左京ったら、どこ触ってるのよ」

亜梨沙の妄想が始まります。シリーズ関係なく変態な亜梨沙です。

「静かにしなよ！」

蘭が怒ります。

「うるさいわね、エロ河童。悔しかったら触られてみなさいよ」

亜梨沙が言い返します。

「私は触らせないよ」

蘭は言いました。

「触った事を前提に話をしないでくれ」

左京は項垂れて言いました。

しばらくすると、暗い表情の鬼子母神が戻って来ました。

「どうしたのですか、岸田今日子さん?」

樹里が尋ねます。

「誰が初代ムーミンの声だ!」

鬼子母神は切れました。

「お前には関係ない」

鬼子母神は奥へ行こうとしました。

「関係大ありだぜ」

左京達が岩陰から出て来ました。

「貴様ら!」

鬼子母神は身構えます。

「私達は戦いたくはありません。話を聞かせて下さい」

樹里が言いました。

第三百二十六話　鬼子母神の苦しみ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鬼子母神は溜息を吐き、話し始めました。

「私の夫の散支夜叉（さんしやしゃ）が第六天魔王に捕われているのです。言う事を聞かないと、夫だけではなく子供達も殺すと脅されて……」

鬼子母神は涙を流しました。

「鬼子母神ちゃんはええ女や。僕のお友達にしたいにゃん」

リックが言いました。

「お前様、今何て言いましたか？」

いつの間にやって来たのか、遊魔が尋ねます。

「何も言ってないにゃん」

リックが汗まみれで誤摩化します。

「貴女を差し出せば夫も子供達も助かると言われ……。お釈迦様に諭され、仏の道に帰依したはずなのに……」

鬼子母神は悔しそうです。

「俺が行って、魔王をぶっ倒してやる！」

孫左京が息巻いて言います。

「無理だよ。誰かの力を借りないと」

蘭が意見します。

「お館様におすがりすれば、何とかなるかも知れません」

鬼子母神が言いました。

「お館様？」

左京が尋ねました。

第三百二十七話　天界の四天王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鬼子母神は自分達の「お館様」に助けを求めると言いました。

「多聞天様だね？」

元天界の近衛大将の蘭が言いました。

「板門店さんですか？」

樹里が尋ねます。

「軍事境界線じゃないです」

蘭は脱力して言いました。

多聞天とは四天王の一人です。

日本では毘沙門天の名の方が知られています。

七福神の一人ですね。

「よし、すぐにそいつの所に行こう」

孫左京は鬼子母神を連れ、きんと雲で多聞天の所に向かいました。

「私も行くよ」

蘭が飛び乗ります。

「私もォ」

亜梨沙は間に合わず、置いて行かれました。

「お館様は気難しい方だ。もしかすると戦いになるかも知れぬ」

鬼子母神が言いました。

「その方が面白い」

左京は嬉しそうです。

蘭は呆れています。

きんと雲はたちまち多聞天の邸の前に着きました。

「待っていたぞ」

多聞天は門の前に立っていました。

「でけえ……」

多聞天は左京の三倍くらいあります。

第三百二十八話　多聞天編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と鬼子母神と蘭は、四天王の一人の多聞天の所に行きました。

多聞天は鬼子母神達の直属の上官で、天界の中でも上位にはいるほどの実力者です。

「何だ、やる気か？」

左京は如意棒を構えます。

「お前達の師匠は御徒町樹里ちゃんだな？」

多聞天が尋ねます。

「じゅ、樹里ちゃんて……。そうですが」

蘭が呆れながら応じます。

「わかった、お前達の味方になろう」

多聞天が何も聞かずに言ったので、左京達は唖然とします。

「実は観音菩薩様からお話があったのだ。樹里ちゃんに力を貸すようにとな」

左京は思いました。

（こいつ、お師匠様が可愛いから味方するんだな）

多聞天から目を離さないようにしようと思う左京です。

「広目天も増長天も持国天も樹里ちゃんの味方だ」

左京は項垂れました。

（大丈夫なのか、天界は？）

「四天王の皆様が全て、お味方なのですね？」

鬼子母神が嬉しそうに言いました。

第三百二十九話　四天王揃い踏み編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

多聞天を始め全ての四天王が力を貸してくれる事がわかり、鬼子母神は嬉しそうです。

「但し、我らでも勝てるかどうかわからぬ故、天界のお偉方に助けをお願いした」

多聞天のその言葉に嫌な予感がする孫左京と蘭です。

「天界一の術師である太上老君様がいらして下さるのだ」

それを聞いて、左京と蘭は項垂れましたが、何も知らない鬼子母神は、

「おお、それは心強い事です」

と大喜びです。

他の四天王も多聞天の所にやって来て、左京達は四天王と共に鬼子母神の洞窟に戻りました。

「お帰り、左京」

亜梨沙が悪さをしようとしたリックを遊魔と踏んづけながら言いました。

「おお！」

四天王が亜梨沙達を突き飛ばして樹里に近づきます。

「噂通りの可愛さだ」

増長天がその名の通り増長しそうです。

「そうなんですか」

樹里は何も知らずに笑顔全開です。

「何よ、この人達は？」

亜梨沙がムッとして言いました。

第三百三十話　歓喜天現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

四天王がでかい図体で樹里の前に居並びます。

馨はビビっていますが、樹里は笑顔全開です。

「ご紹介致します。四天王様です」

鬼子母神が言いました。

「そうなんですか」

樹里は言いました。

「儂が多聞天だ」

「儂が増長天だ」

「儂が持国天だ」

「儂が広目天だ」

四天王はそれぞれアピールタイムを終えました。

「板門店さんと盲腸店さんと痔持ち店さんと樫の木モック店さんですか？」

樹里のボケが炸裂しますが、

「はい」

誰も切れたり言い直したりしません。

「何なんだ、こいつら？」

孫左京は四天王の樹里信者ぶりに呆れます。

その時です。

「オッホッホ、皆さん、お集まりのようですな」

不気味な声がしました。

「歓喜天（かんぎてん）か！？」

鬼子母神が鬼の形相で見回します。

「よくおわかりだね、鬼子母神」

象の姿の歓喜天は空中に胡座を掻いて浮遊しながら、

「我が秘術で皆死ぬがいい」

と言いました。

第三百三十一話　歓喜天の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に第六天魔王の手先の歓喜天が現れました。

「我が秘術は恍惚のうちに死ねる故、喜ぶがいい」

歓喜天は言いました。

「貴様如きの術など通用するか、愚か者め。我らを誰だと思っている!?」

多聞天が激怒します。すると歓喜天はにやりとし、

「わかっておりますよ。しかし、そのような事は関係ないのです」

と言うと、手にしていた杖を振るいます。

「ガナハチイビナヤカ」

歓喜天は真言を唱えました。

「何?」

樹里が左京に抱きつき、キスの嵐です。

「ええ?」

狼男の露津狗が現れ、亜梨沙にキスの嵐です。

四天王も同じように幻を見せられています。

彼等も樹里にキスされて、メロメロになっています。

蘭も左京に抱きしめられ、腰が抜けてしまいました。

馨も蘭に抱きつかれて鼻血が止まりません。

鬼子母神も夫散支（さんしやしゃ）夜叉が現れ、熱い抱擁を交わします。

これこそ歓喜天の秘術です。

第三百三十二話　恐るべき悦楽編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

歓喜天の術で孫左京達は悦楽地獄に陥っていました。

「喜びにのたうち回り、死ぬがいい」

歓喜天は狂喜します。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言います。

「何だと!?」

歓喜天は仰天しました。

「何でお前には術が通じないのだ?」

ふと気がつくとリックと遊魔も変わった様子がありません。

「何かあったのかにゃん?」

リックはキョトンとしています。

「お前様、危のうございますよ」

遊魔はボーッとした顔で言いました。

歓喜天は三人の心を調べました。

樹里の心は真っ白で一点の曇りもありません。

「これでは我が秘術は効かぬ」

歓喜天は納得しました。

遊魔の心にはリックの事しかありません。

彼女も樹里と同じで心に曇りがないのです。

「こいつは純粋過ぎて操れぬ」

歓喜天は納得しました。

リックの心には歓喜天も呆れる程のエロ地獄が見えました。

「こいつは我より上手だ」

歓喜天は項垂れました。

第三百三十三話　歓喜天改心する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里とリックと遊魔は歓喜天の秘術を受けつけませんでした。

「おのれ、ならばお前らは別の秘術で葬ってやる！」

歓喜天は鼻を大きく膨らませました。

「パオー！」

その鼻から強烈な風が巻き起こり、リックが飛ばされます。

「にやーん！」

リックは遥か彼方に飛んで行きました。

「お前様！」

遊魔が叫びます。

「ハハハ、我に逆らう者は皆こうなる」

高笑いする歓喜天に遊魔が近づきます。

「こら、化け物、私の旦那様をどこに飛ばした？」

遊魔がいきなり歓喜天を殴ります。

「痛い！　貴様、何をする……」

歓喜天が言い返そうとすると、遊魔はまた殴りました。

「質問に答えなさい、化け物」

「痛い！　我を誰だと……」

何か言い返すたびに歓喜天は殴られました。

しばらくして、顔が倍くらいに腫れ上がった歓喜天が言いました。

「ごめんなさい、私が悪かったです」

こうして歓喜天は、遊魔の活躍で降参しました。

第三百三十四話　一件落着編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

遊魔の活躍で歓喜天は改心し、孫左京達は悦楽地獄から解放されました。

助けられたのに、皆悲しそうな顔をしています。

左京と馨は鼻血を垂らしていました。

鬼子母神の夫である散支夜叉（さんしやしゃ）は歓喜天のいた山の中に監禁されていて、左京達が助け出しました。

歓喜天は四天王に縛られ、天界に連れて行かれました。

四天王達は皆、樹里と別れるのが辛そうでした。

「どうしようもねえ奴らだ」

左京は呆れました。

「皆さん、本当にありがとうございました。皆さんの旅のご無事を祈っております」

鬼子母神と散支夜叉が言いました。

「そうなんですか。お二人もお元気で」

樹里は笑顔全開で言いました。

こうしてまた、西への旅が始まります。

「そう言えばリックは？」

亜梨沙が言いました。

「旦那様はそのうち追いつきますよ」

遊魔が笑顔で応じます。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言いました。

第三百三十五話　太上老君再び編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鬼子母神達と別れ、旅を再開しました。

「きゃあ！」

亜梨沙と蘭が叫びます。二人は何者かにお尻を触られました。

「ひさしぶりじゃの、皆の者」

太上老君が現れました。

「このスケベジジイ、何しに来た？」

孫左京は樹里を庇うようにして立ちます。

「今度触ったら殺していい？」

亜梨沙が涙目で左京に耳打ちします。

「いいよ」

左京はあっさり承諾します。

「ご用向きをお教え下さい」

蘭は顔こそ穏やかですが、目は笑っていません。

「実はの、第六天魔王が只一人恐れている存在があるのだ」

そう言いながら、太上老君は遊魔のお尻を触っています。

「何するにゃん！」

リックが怒ります。

「遊魔は僕の妻だにゃん。勝手に触らないで欲しいにゃん」

「お前様」

遊魔は感動しました。

「ではこの高級またたびで」

「はいにゃん」

あっさり買収されるリックです。

「お前様！」

遊魔はリックを蹴飛ばしました。

第三百三十六話　九霊元聖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の所に太上老君がやって来ました。

「第六天魔王が恐れる存在？」

孫左京は聞き返しました。

「如何にも」

「太上老君様ではなくて？」

馨が言います。老君はニヤリとして、

「儂も恐れられているがこの年だからな。もっと恐れられておる者がいるのだ」

すると亜梨沙が、

「その人に頼んでこのエロジジイを始末してもらう？」

と蘭に囁きます。蘭は苦笑いして、

「その話はまた後でね」

左京が、

「そいつは何て言う奴なんだ？」

太上老君は左京を見て、

「九霊元聖（きゅうれいげんせい）だ」

「急速冷凍さんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が三種の神器だ！」

老君が切れました。若い人には意味不明です。

「九霊元聖って、確か九つの頭を持つ獅子ですよね？」

蘭が言いました。老君は蘭を見て、

「さすが近衛大将だ。その通り」

「しかし、あの者が我らの味方になりましょうか？」

蘭は不安そうに言いました。

第三百三十七話　第六天魔王の天敵編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君は、第六天魔王が恐れる存在だと言う「九霊元聖（きゅうれいげんせい）」の事を教えてくれました。

「近衛大将だったお主が案ずるのも無理はないな。彼奴（あやつ）は天界に弓引いた者だからな」

太上老君は蘭を見て言います。

「その通りです。彼奴は第六天魔王とも敵同士ですが天界とも敵同士。相容れません」

蘭は真剣な表情で言います。それに見とれている馨です。

（蘭さん、かっこいいなあ）

「そんな事言ったら左京だってそうじゃん」

亜梨沙が反論します。

「左京は別よ」

蘭は亜梨沙を睨みました。

「左京は天界の味方じゃなくて、お師匠様の味方だから、そういうのは関係ないの」

蘭はムッとして言いました。亜梨沙も思わず納得です。

「ああ、そっか」

「ああ、そっかじゃねえよ！」

孫左京は切れました。

「その九霊何とかは、どうして第六天魔王に恐れられているんだ？」

左京が尋ねました。

第三百三十八話　九霊元聖の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖の秘密は孫左京でなくても知りたい事です。

「奴は不死身なのだ」

太上老君が言いました。

「群馬県前橋市と合併した村ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が富士見村だ！」

ローカル過ぎるボケです。

「左京もそうでしょ？」

亜梨沙が言いました。すると蘭が、

「左京は不老不死。九霊元聖は不死身。違うわよ」

「殺しても死なないって事か？」

孫左京が言いました。太上老君は頷き、

「その通り。だから第六天魔王にも倒せないのだ」

馨が、

「そんな妖怪が私達の味方になってくれるとは思えません」

「そうよ。危険だわ」

亜梨沙が同意します。

「心配するな。九霊元聖は可愛い女の子に弱いのだ」

太上老君の言葉に左京と蘭が項垂れます。

「何なんだ、それは……」

「私の魅力でイチコロよ」

亜梨沙が言うと、

「オバさんはダメじゃよ」

太上老君があっさり言います。

「誰がオバさんだ！」

亜梨沙は切れました。

第三百三十九話　太上老君の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、第六天魔王に対抗するために九霊元聖という妖怪の所に行く事になりました。

「参りましょう、お師匠様」

孫左京が言うと太上老君が、

「ダメじゃ。奴は男が大嫌いなのだ。連れて行くのは樹里と遊魔のみじゃ」

「どうして私達はダメなのよ！？」

亜梨沙が食ってかかります。

「オバさんはダメじゃと……」

言い切る前に叩きのめされる太上老君です。

「それに応援も要請しておる。程なく到着じゃ」

その言葉通り、薔鏤鬼（ばるきり）吏達と鷺基と鷺佗が現れます。

「老師様、遅くなりました」

鷺佗と鷺基が言いました。

「露津狗は?」

亜梨沙が尋ねます。

「第六天魔王を見張っている。ようやく奴の居場所を突き止めたのだ」

露佗が答えました。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で応じます。

「間に合いましたね」

馬に乗って樹里の姉の璃里がやって来ます。

「さて、出かけるぞ」

太上老君が言いました。

第三百四十話　お色気大作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君は樹里を始め、可愛い女性を集合させ、九霊元聖を説得するつもりのようです。

「では、今宵は我が邸で酒宴じゃ」

「違うだろ、エロジジイ！」

孫左京が老君を如意棒で殴ります。

こうして、樹里達は老君の用意した大きな雲に乗り、九霊元聖のいる所に向かいました。

九霊元聖は山奥の滝の裏の洞窟に棲んでいます。

彼は警戒心が強く周囲を強力な結界で守り、侵入者を排除しています。

「む？」

いい匂いがして来ます。

「これは女の子の匂いだ。ジジイも混ざっているが、凄くいい匂いがする」

元聖は九つの首をウネウネさせながら滝の外へと飛び出します。

「久しいな、元聖」

太上老君が雲の上から言いました。

「何と美しい方々だ」

元聖は老君を無視して樹里の手を取っています。

「話があるのだ、元聖」

老君はムッとして言いました。

「これは老師様。気づきませんでした」

相当なお調子者のようです。

第三百四十一話　最終兵器編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君達は地上に降りました。

「もしかして、第六天魔王の事ですか？」

九霊元聖はぶっきら棒に言います。

「そうだ。奴を倒すために力を貸して欲しい」

太上老君はいつになく真剣な顔です。

「私は不死身ですから確かに老師様のお役に立てましょうがね」

「何じゃ？」

含みのある言い方に老君はイラつきます。

「私には何の得もない取引ですよねえ」

元聖はニヤリとして老君を見ます。

「儂の宝を好きなだけ渡そう。それでどうだ？」

「どうしようかな」

惚ける元聖です。老君は樹里達を見ました。

「お願いします、元聖様」

薔鏤鬼(ばるきり)吏達と鷺侘が言います。

「さあて」

元聖は動きません。

「お願ーい、元聖様」

遊魔が言いました。元聖がピクッとします。

「私達を助けて下さい」

樹里が帽子を取り、璃里とダブルウルウルです。

「わかりました、力をお貸ししましょう」

こいつも只のスケベのようです。

第三百四十二話　九霊元聖、駄々をこねる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖は、「樹里と可愛い女の子軍団」の活躍によって、見事仲間になりました。

「羨ましいなあ、老師様。こんなにたくさんの女の子に慕われて」

元聖が言いました。太上老君はニッとして、

「儂の人徳じゃ」

と胸を張りました。鷺佗は呆れています。

「では他の仲間と合流して第六天魔王の所に向かうぞ」

太上老君が雲を呼び寄せます。

「老師様、このまま酒宴でも開きませんか？　その方が楽しいですよ」

元聖が言います。老君もその気になりかけましたが、鷺佗に睨まれ、

「そんな事はしていられん。一刻も早く第六天魔王を倒すのだ」

「そんなの後にしましょうよ」

我が儘を言い出す元聖に遊魔が、

「遊魔あ、早く悪い奴をやっつけてほしいなあ」

と鷺佗に耳打ちされた事を言います。

「私の妹を助けてあげて下さい」

樹里の姉の璃里がウルウル瞳で元聖を見ます。

「わかりました」

急にキリッとする元聖です。

第三百四十三話　第六天魔王の刺客編

御徒町樹はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖はようやく樹里達と共に孫左京達の待つ場所へとやって来ました。

「やあ、猿君。よろしくね」

軽い挨拶をされ、左京はムッとします。馨も面白くなさそうですし、鷺基も不満そうです。

「皆さん、仲良くして下さいね」

樹里と璃里が言うと、

「はい」

といい返事をする左京と馨です。蘭と亜梨沙が白い目で見ています。

「男って奴は……」

鷺佗は鷺基に、

「性格はどうしようもないが、強いのは確かだ。我慢しろ」

「わかったよ、姉さん」

それでも鷺基は面白くなさそうです。

いよいよみんなで出発しようとした時です。

「待て、貴様ら」

と声がしました。

「誰だ？」

左京が如意棒を構えます。

空から、顔が猿、身体が狸、脚が虎、尻尾が蛇の魔物が現れました。

「我が名は鵺。第六天魔王陛下の右腕ぞ」

魔物は言いました。

「左腕はどうしたんですか？」

樹里が尋ねます。

「知るか！」

鵺は切れました。

第三百四十四話　九霊元聖対鵺編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王の右腕の鵺（ぬえ）が現れました。

「ヤロウ、ぶちのめしてやる」

孫左京が出ようとすると、

「兄貴、ここは一つ、私が」

九霊元聖が出ます。

「おう、そうか」

兄貴と言われ左京は満更でもないようです。

「さあ、私が相手だ、ホルモン焼き君」

「誰がじゃりン子チエだ！」

鵺は切れました。

「くらえ！」

鵺が雄叫びを上げると、幾つもの雷鳴が轟き、稲妻が走ります。

「ぎゃん！」

リックがその一つを食らいました。

「お前様あ」

遊魔が嬉しそうに駆け寄ります。

「参ったか」

鵺は大威張りです。

「全然」

九霊元聖はニッとして鵺に近づきます。

「があっ！」

九つあった獅子の頭が一つにまとまって巨大化し、大きく口を開きます。

「燃え尽きろ！」

爆炎が噴き出し、鵺を包みました。

「ぐがあ！」

鵺は燃え尽きてしまいました。

「見かけ倒しか」

孫左京が言いました。

「まだですよ、兄貴」

元聖が言います。

第三百四十五話　鵺の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖（きゅうれいげんせい）は、第六天魔王の部下の鵺（ぬえ）を爆炎で焼き尽くしました。

「鵺はたくさんの妖怪が寄り集まっているんですよ。だから、この程度じゃやられません」

九霊元聖は首を九つに戻して言いました。

「よく知っているな、九霊元聖。さすが、陛下が一目置くだけの事はある」

鵺の声がし、何もない空中に塵のようなものが集まり始め、鵺になりました。

「礼をさせてもらうぞ」

先程より多くの稲妻が空を切ります。

「お前様、危ない！」

遊魔がリックを突き飛ばすと、そこに稲妻が落ちます。

「にゃーん！」

リックは感電しました。

「きゃ！」

亜梨沙や蘭、鷺侘達も稲妻から逃げ惑います。

「何！？」

鵺は仰天しました。

樹里と璃里は平然とカルタ取りをしています。

しかも稲妻は二人には落ちません。

「そういう事か！」

左京は何かに気づき、

「お師匠様、お願いします」

と言いました。

第三百四十六話　樹里の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鵺の雷撃を全くものともしない璃里と樹里姉妹です。

孫左京の呼びかけに応じて、樹里が立ち上がります。

「ところで、Nさん」

「俺は、ぬ・えだ！」

鵺は切れました。左京達は項垂れています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「では、参ります」

樹里が印を結びます。

「ナウマクサマンダボダナンインダラヤソワカ」

超弩級の稲妻が走り、鵺を直撃しました。

「ぐえええ！」

鵺は感電して倒れました。

「鵺の鳴く夜は恐ろしい」

リックが皆が忘れた映画のキャッチコピーを呟きました。

「今だ！」

鷺佗と薔鏤鬼(ばるきり)吏達が一斉に銀の弓を射掛けます。

「あぎゃぎゃ！」

鵺は身体中穴だらけになりながらのた打ち回りました。

「覚えていろ！」

鵺は泣きながら逃げて行きました。

「忘れるから心配しないでねえ」

九霊元聖が手を振って言いました。

「さすがです、お師匠様」

左京達が樹里を絶賛しました。

第三百四十七話　鵺、仲間にすがる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鵺(ぬえ)はヒーヒー言いながら飛翔し自分の住処がある断崖絶壁に来ました。

「どうした、兄弟、情けない声を出して？」

鵺に声をかけたのは彼の親友的存在の奇魔異羅(きまいら)です。

獅子の頭と山羊の胴体、蛇の尾を持つ魔物です。

「九霊元聖達にやられた」

鵺は涙ながらに語ります。奇魔異羅は、

「あいつは強い。相手が悪かったな」

「しかし、それではすまぬのだ。第六天魔王陛下のご命令で退治に行ったのに……」

鵺は歯軋りしました。

「わかった。俺が助太刀しよう」

「おお、ありがたい」

鵺と奇魔異羅の二体は樹里達への再戦を挑む事になりました。

孫左京達は鷺佗と鷺基の案内で第六天魔王がいる所に向かっています。

「ジジイの姿がないぞ」

左京は太上老君がいないのに気づきました。

「いない方がいいわよ」

亜梨沙がムッとして言います。

「今度こそやっつけてやる」

鵺と奇魔異羅が現れました。

第三百四十八話　奇魔異羅の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鵺（ぬえ）は、親友の奇魔異羅（きまいら）と共に戻って来ました。

「今度はさっきみたいに行かないぞ、九霊元聖」

鵺が強がります。

「ここは俺に任せろ」

孫左京が前に出ます。とうとう我慢できなくなったようです。

「奇魔異羅は俺より強いぞ、猿。覚悟しろ」

鵺が大威張りで言います。

「バーカ、俺はもっと強いよ、M」

「俺は、ぬ・えだ！」

「おらあ！」

左京のわざとらしい間違いに鵺は切れました。

何とかの一つ覚えのような左京の攻撃です。

「はっ！」

奇魔異羅は機敏な動きでそれをかわします。

「はあっ！」

奇魔異羅が口から何か怖い気体を吐き出しました。

「にんにく臭い息？」

亜梨沙が尋ねます。

「違うよ、豚！」

奇魔異羅が切れます。

「うは！」

左京はかわし切れずにそれを浴びてしまいます。

「何！？」

左京の身体が見る見るうちに石化しました。

「左京！」

「左京さん！」

皆が驚いて叫びました。

第三百四十九話　奇魔異羅の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、鵺（ぬえ）の助っ人の奇魔異羅（きまいら）の息で石にされてしまいました。

「どうだ、参ったか！　俺のこの息で石化すると解呪はできないんだよ。そのアホ猿はずっと石のままさ」

奇魔異羅は得意そうに言いました。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言います。

「お前も石になれ、坊主！」

奇魔異羅が樹里目がけて息を吐きます。

「危ない、お師匠様！」

亜梨沙がすかさず間に入ろうとしますが転けてしまいます。

「ドジ」

蘭が呆れます。

「えい！」

樹里は得意の偽芭蕉扇で扇ぎ、息を押し戻しました。

「残念だったな。自分の息では石化しないんだよ」

奇魔異羅は更に得意そうです。

「お前の仲間が石になってるぞ」

九霊元聖が言いました。

「えっ？」

ふと横を見ると鵺が石化しています。

「間抜けめ！」

奇魔異羅は切れました。

「まとめて石にしてやる！」

奇魔異羅はさっきより沢山息を吐きました。

第三百五十話　奇魔異羅、猛攻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

奇魔異羅（きまいら）の臭い息攻撃で、樹里達はピンチです。

「臭い息じゃねえよ！」

奇魔異羅は地の文に突っ込みます。

「ひっ！」

逃げ遅れた馨が石化します。

「にゃん！」

遊魔の楯にされたリックが石化します。

「お前様」

遊魔は石化したリックを乱暴に引き摺って逃げます。

「おのれ！」

鷺佗と鷺基と薔薇鬼（ばるきり）吏達が銀の弓で攻撃します。

「効かないぞ。はあ！」

銀の弓も全部石になってしまいます。

「お師匠様、逃げて下さい」

蘭が樹里と璃里を庇います。蘭も石になりました。

「これを叩いて壊せば……」

亜梨沙が良からぬ事を企んでいます。

「げ」

亜梨沙も石になりました。

「食らえ！」

九霊元聖が爆炎を吐きますが、

「効かぬ！」

それも石にしてしまいます。

「最後の手段です、樹里」

璃里が紙を渡しました。

「お猿さん、大好きです」

樹里がそれを読み上げます。

左京が鼻血を噴いて復活です。

第三百五十一話　孫左京復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里の「復活の呪文」のお陰で石化が解けました。

「そんなバカな……」

奇魔異羅（きまいら）は唖然としています。

「お師匠様、ありがとうございます」

左京は鼻血を止めながら言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「やい、化け物。よくもやってくれたな。この礼はきっちりさせてもらうぜ！」

左京は如意棒を振り回して奇魔異羅に飛びかかります。

「おのれ！」

また奇魔異羅は息を吐きます。

「何度も同じ手が通用するか！」

左京は息をかわし、奇魔異羅の背後に降り立つと背中を如意棒で叩きます。

「ぐえええ！」

奇魔異羅はのたうち回りました。

「兄貴、そいつの弱点は尻尾だ」

九霊元聖が言いました。

「おう！」

左京は奇魔異羅の尻尾を思い切り踏みつけました。

「ぐえええ！」

奇魔異羅は断末魔を上げ、倒れてしまいます。

やがて奇魔異羅は燃え出し、灰になって消えてしまいました。

第三百五十二話　鵺も一瞬復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京が奇魔異羅（きまいら）を倒したお陰で、亜梨沙達も石化が解けました。

「わーい、左京、大好き！」

飛び掛ろうとする亜梨沙を蘭が止めます。

「喜ぶのはまだ早いわ」

そう、鵺もまた、石化が解けてしまったのです。

「てめえら、よくも俺のマブダチを！」

鵺は激怒しています。

「死ねえ！」

雷撃の連続攻撃です。どこかの国の国債より乱発してます。

「お師匠様、どうぞ」

「そうなんですか」

左京は樹里を背負い、鵺に近づきます。

「あいつ、ドサクサに紛れて！」

亜梨沙が嫉妬しますが、

「あれは作戦よ」

蘭が言います。

そうです。雷撃は樹里には当たりません。

鵺は焦りました。

「おのれ！」

鵺は集中して雷撃を左京に見舞いますが、稲妻は全て逸れてしまいます。

「そんなあ！」

左京の会心の一撃が鵺の脳天に決まり、鵺は霧のようになって消えました。

「今度こそ、仕留めたな」

鷺佗がニヤリとします。

第三百五十三話　第六天魔王の住処へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は鵺を倒し、いよいよ第六天魔王のいる所に向かう事になりました。

「これより先は、生きて帰れない可能性がある。死にたくない者は去れ」

鷺佗が言いました。

「はいにゃん」

リックが躊躇なく帰り支度を始めます。

「お前様、ダメでございますよ」

遊魔が殴って止めます。

「姉上はお帰り下さい」

樹里がまともバージョンで言います。

「いえ、私も参ります。私には、部秘模（べひもす）洲様の加護があるから、大丈夫です」

璃里が言います。すると亜梨沙が、

「ミニモニですか？」

と使い古したギャグを言いました。皆知らないフリです。

亜梨沙は落ち込みました。

「では、参りましょう、お師匠様」

鷺基が言います。

「そうなんですか」

樹里が笑顔で応じます。

「兄貴と一緒に先に行きますよ」

九霊元聖が言いました。

「行くぞ」

孫左京は元聖と共に先に行きます。

「そっちじゃないぞ」

露侘が言いました。

第三百五十四話　魔王の分身編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は誰一人欠ける事なく、第六天魔王のいる所に向かいます。

「僕、嫌だにゃん。まだ死にたくないにゃん」

リックが泣き言を言います。

「第六天魔王を倒せば、褒美は望むままだぞ」

太上老君が現れて言いました。

「ジジイ、どこに隠れてやがった!?」

先に行ったはずの孫左京が戻って来ました。

「他人聞きの悪い事を申すな、猿。儂も忙しいのじゃ」

そう言いながら、鷺佗の尻を触る老君です。

「やめろ、エロジジイ!」

鷺基が老君を殴ります。

「左京は元聖と先に行ったんじゃなかったの?」

亜梨沙が尋ねます。

「ジジイの臭いがしたから、戻ったんだ」

左京は樹里を庇うように立ちます。

先発した九霊元聖は魔王の分身に出会っていました。

「お前が動くとはな」

分身は以前の子供の姿とは違い、妖艶な美女です。

「そんな姿で私を誑かすつもりか、大野君?」

「誰が嵐のリーダーだ!」

分身は切れました。

第三百五十五話　九霊元聖対分身編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

先発した九霊元聖は、第六天魔王の分身の美女と対峙しています。

「猿が戻ったのが、お前には運の尽きだな」

美女が言います。すると元聖は、

「さあ、それはどうかな。私は彼より強いと思うよ、オバさん」

「誰がオバさんだ！」

美女は激怒し、両手の爪を伸ばして元聖を突き刺そうとします。

「遅いよ、オバさん」

元聖はすでにそこにはおらず、美女の背後を取ります。

「ぬ！？」

ところが、美女は背中から無数の棘を突き出し、元聖を串刺しにしました。

「ははは、愚か者め！」

美女は高笑いしました。

「所詮力試しに送り込まれた貴女は哀れだ」

串刺しにされながらも元聖はニヤリとします。

「私は不死身なんだよ、オバさん。この程度じゃ痒くもない」

「何！？」

元聖は棘から離れると頭を一つにして爆炎を吐きます。

「ぐごお！」

美女は燃え尽きました。

「分身の力を吸収したね、魔王？」

元聖が呟きました。

第三百五十六話　露津狗危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狼男の露津狗は、第六天魔王が居城を構える山奥の断崖絶壁の岩陰で見張りをしています。

（先程、偵察が飛んで行ったが、大丈夫だろうか？）

露津狗は、自分の主人である俯炎驪琉（ふえんりる）の仇であるはずの薔鏤鬼吏（ばるきり）の鷺侘に心惹かれている自分を罵ります。

「俺は何と情けない男なのだろう……」

しかし、鷺侘を憎む事ができません。

彼は鷺侘の全裸を見てしまったからです。

「違うぞ！」

露津狗は地の文に文句を言いました。

その時です。

「くくく、まだこんな所にいたのか」

と声がしました。

「何？」

露津狗が声の主を見ると、そこにはあの子供が立っていました。

子供の妖気は前回より増大しています。

「貴様は第六天魔王の分身か！？」

露津狗は焦りました。

「お前はすぐには殺さぬ。奴らがここに来たら、八つ裂きにしてやるよ」

子供は、まさに子供とは思えないような顔で笑いました。

第三百五十七話　三段撃ち編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狼男の露津狗は、第六天魔王の居城がある断崖絶壁を監視中に、魔王の分身である子供が現れました。

（この前より確実に強くなっている……）

露津狗は嫌な汗を掻いています。

「しかし、お前らは愚かだな。陛下に逆らって、勝てると思っているのか？」

分身の子供は大人びた笑い方で露津狗に言います。

「勝てぬかどうかは、戦ってみなければわからぬ」

露津狗はキッと分身を睨み、言いました。

「笑わせる。戦ってみなくても、お前らの敗北は目に見えている」

子供が腹を抱えて笑った時です。

「おらあ！」

いきなり孫左京が分身に如意棒で殴り掛かります。

「おう、来たか、猿」

分身は如意棒を軽く受け止めると、横にいなします。

「そうやって油断すると大変だよ、僕ちゃん」

「何？」

分身が声がした方を見ると、九霊元聖が頭を一つにして爆炎攻撃です。

「ぐおおっ！」

分身はかわす余裕もなく食らいました。

第三百五十八話　分身焦る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王の分身は九霊元聖の爆炎攻撃を受けました。

しかし、さすが分身です。

身体の大半を燃やされましたが、焼け残りました。

「ほお。大したもんですねえ。私の本気の爆炎で燃え尽きなかったの、貴方が初めてですよ」

九霊元聖が褒めています。

「貴様らァ、この私を舐めおって！」

分身は身体を回復させながら怒鳴ります。

「おらおら！」

孫左京は怪我人にも容赦がありません。

ボコボコ殴ります。

「バカな、こんなはずが……」

分身は焦っています。

「まだわからないの、可哀想に」

元聖が言いますが、左京の蛸殴りで恐らく聞こえていません。

「おらおら！」

左京の方が疲れる程殴っています。

「ぶへえ……」

分身は倒れ、消滅しました。

「拍子抜だぜ」

左京が言いました。

「魔王が力を集め始めている」

露津狗が言いました。

「何だ、それ？」

左京が尋ねます。

「最終戦争開始ですよ」

元聖が言いました。

第三百五十九話　第六天魔王、動く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は、第六天魔王が動き始めた事に気づき、樹里達の所に戻りました。

九霊元聖が、事情を説明しました。

蘭は深刻な顔をし、リックはこっそり逃げようとして亜梨沙と遊魔に捕まります。

馨はブルブル震えています。

「最終戦争ですか」

璃里が樹里を見ます。樹里は璃里を見て、

「仏教には、末法思想というものがあります。この世が終わると勘違いする人達が多いのですが、本当は仏の教えが通用しなくなるという事です」

樹里のあまりのまともバージョンに左京達は唖然とします。

「それをこの世の終わりだという話にすり替え、人々に恐怖を植えつけようとするのが第六天魔王とその眷属です」

鷺佗が補足説明します。

「何にしても、魔王をぶっ倒せばすむ事だ」

左京が言いました。

「難しい話が分からないだけだにゃん」

リックが陰口を言います。

「聞こえてるぞ、エロ猫！」

左京はリックを殴りました。

第三百六十話　本体登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は目の前の断崖絶壁の上に建つ第六天魔王の居城を見ています。

「何も仕掛けて来ないのは何故だろう？」

蘭が呟きます。ツイッターにではありません。

「すでに吸収が完了したんだろう。眷属は残らず魔王に吸い込まれたのさ」

鷺基が言います。

「九州の官僚が軟骨と魔王で睡魔ですか？」

樹里が言います。鷺基が項垂れました。

「魔王が遂に出て来ますよ、お師匠様。驚かないで下さいね」

九霊元聖が言います。

リックと馨はちびりそうです。薔薇鬼（ばらき）吏達も震えます。

魔王の妖気が漂い始めているのです。

断崖絶壁の上から、黒い妖気が降りて来ます。

「あれは……？」

孫左京が眉をひそめました。

黒い妖気は大きな塊となりました。

「我が名は第六天魔王なり」

背筋が寒くなるような声がします。

「ところでブラック魔王さん」

樹里が言いました。

「誰がチキチキマシンだ！」

魔王は切れました。

第三百六十一話　第六天魔王の策略編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

遂に第六天魔王が現れました。

「愚かなり。我に逆らっても、死あるのみ」

魔王が言います。

「うるせえ。てめえなんかにやられる孫左京様じゃねえよ」

左京はきんと雲で魔王に近づきます。

「ならば我が怒りを受けよ」

魔王の声が聞こえた次の瞬間、左京に巨大な岩が落ちて来ました。

「ぐおおおっ！」

左京は岩を支えようとしますが、大き過ぎて無理です。

「五行山より重てえっ！」

そう言いながら、左京は絶壁を落ちて行きました。

「左京！」

「左京さん！」

「お猿さん！」

樹里達は驚いて下を見ます。

「ああ、私、高所恐怖症……」

亜梨沙がクラクラします。

「次はどいつだ？」

魔王が言いました。九霊元聖が前に出ます。

「お久、魔王さん。私が行きますよ」

「九霊元聖か。貴様の弱点を存じておるぞ」

魔王の言葉に元聖がビクッとします。

「何だと？」

黒い塊の中から、透明な玉に入れられた美女が現れます。

第三百六十二話　第六天魔王の人質編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖は、第六天魔王が出した透明な玉の中の美女を見て狼狽えます。

「黄姫(おうひめ)！」

「綺麗だにゃん」

震えていたリックが目を見張り、

「お前様！」

と遊魔に殴られます。

「誰なのですか？」

璃里が尋ねました。

「我が孫です。たった一人の肉親です」

元聖が悲しそうに言います。

「おじい様！」

玉の中の美女が叫びました。

「どうだ、元聖？　これでも我に逆らうか？」

魔王が憎々しい事を言います。

「う……」

元聖は何も言いません。

「そやつらを殺せ。さすれば、お前の孫は助けよう」

その言葉を聞き、鷺佗が、

「惑わされては駄目！　魔王は約束を守りはしない」

「黙れ、裏切り者め！」

魔王の叫び声が絶壁中に轟きます。

「さあ、早く殺せ。孫の命が惜しくないのか？」

魔王はまさしく「悪魔の囁き」で言います。

「さあ、元聖！　どうするのだ？」

「ううう」

元聖は首を一つにし、口を大きく開きました。

第三百六十三話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九霊元聖の口が輝き始めます。

「ダメです！」

璃里が立ちはだかります。

「姉上」

樹里が驚きました。

「貴方が肉親を守りたいと思うように、私もたった一人の妹を守りたい」

璃里は泣いていました。

「何を躊躇っておる、元聖？　孫の命が惜しくないのか！？」

第六天魔王が怒鳴ります。

「がああ！」

元聖の口が更に輝いた時でした。

「おらあ！」

絶壁の下から大きな岩が急上昇し、第六天魔王を掠めます。

「ぬう！」

次の瞬間、透明な玉に閉じ込められた黄姫（おうひめ）を、孫左京が助けます。

「猿め、生きておったか！」

第六天魔王は歯軋りしたようです。

「元聖、お前の大事な孫は助けたぜ！」

左京は得意そうに言いました。

「兄貴、忝（かたじけな）い」

元聖は涙ぐんで頭を下げます。そして、

「ぐあああ！」

と爆炎を魔王に放ちました。

「おのれ！」

爆炎の衝撃で、魔王を覆っていた黒い妖気が吹き飛びます。

第三百六十四話　第六天魔王の真の姿編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「ぬおお！」

黒い妖気が消え、遂に第六天魔王が姿を現しました。

「ひいい！」

馨とリックと薔鏤（ばるきり）鬼吏はその姿を見て怯えまくります。

蘭と亜梨沙も身じろぎました。

露津狗は目を鋭くし、鷺佗と鷺基は身構えます。

遊魔はボーっとしています。

「何だよ、脅かしやがる。只のジジイじゃねえか」

孫左京が毒づきます。

そこにいたのは黒い袈裟に黒い帽子を被った老人でした。

「愚かなり、猿。我の力を感じぬようだな」

突然爆発的な妖気が辺りに広がります。

「これは……」

九霊元聖も驚いています。

「おじい様！」

左京は玉を割り、黄姫（おうひめ）を元聖に渡します。

「お前は私が必ず守る」

元聖は魔王を睨みます。

「おのれ！」

鷺佗と鷺基が矢を射ます。しかし、矢は魔王の直前で溶けてしまいます。

「ところでハクション大魔王さん」

樹里が言います。

「誰がタツノコプロだ！」

魔王は切れました。

第三百六十五話　第六天魔王の再反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王はとうとうその真の姿を見せました。

只のジイさんです。

「違うぞ」

魔王まで地の文に突っ込みました。

「何だ、この力は……。信じられない」

蘭が震え出します。亜梨沙にそれが伝わり、

「ああ、もうダメ」

漏らしたようです。

「何してんのよ、あんたは！」

蘭が慌てて離れます。亜梨沙は豚に戻り、気絶しました。

「気の弱い者は、我が妖気を感ずるだけで失神する」

魔王はニヤリとして言いました。

「時が惜しい。我はこれから天界を叩くのでな。手早く片づけるぞ」

「何だと！？」

孫左京が前に出た時、魔王の力が放たれました。

「ぐう！」

露津狗と鷺基が、胸を切り裂かれます。

「な、何だ？」

鷺佗が倒れかけた二人を同時に支えます。

「何も見えなかった……」

息苦しそうに鷺基が言います。

露津狗の方が深手を負っており、意識を失っています。

「猿、お前もだ！」

左京も胸を切り裂かれました。

第三百六十六話　脱落する仲間達編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基、露津狗、孫左京の三人が魔王の攻撃でやられました。

亜梨沙が気絶し馨とリックは震えが止まりません。

「お前様」

遊魔が声をかけます。

薔鏤鬼(ばるきり)吏達も戦闘不能のようです。

今、まともに立っているのは、璃里と樹里の姉妹、九霊元聖、その孫の黄姫、鷺侘だけです。

「頼みの猿が死にかけているぞ」

魔王は樹里を見て言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「空元気もそこまでだ。見よ、猿を。あれほど夥(おびただ)しい血を流しては、死ぬしかあるまい」

左京は顔が蒼ざめています。

露津狗と鷺基は鷺佗が回復させていますが戦線復帰は無理のようです。

「大丈夫ですよ、お猿さんは。絶対に負けません」

樹里は尚も笑顔全開で応じました。

「死にかけている者が我に負けぬだと……」

魔王が言った時、左京が復活です。

「よくもやったな！」

如意棒が一閃し魔王が宙を舞います。

第三百六十七話　空中戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は奇跡の復活を遂げ、魔王に攻撃します。

「俺はあれくらいの出血じゃあ死なねえよ！」

如意棒が炸裂し、魔王がクルクル回ります。

「あいつ、普段から大量出血してるもんね」

蘭が呆れながら納得します。

「兄貴、助太刀するよ！」

九霊元聖が孫の黄姫を璃里に預け、飛びます。

「おのれ！」

魔王は左京の攻撃をかわし上空へと逃れます。

「逃がすかよ」

左京はきんと雲で追います。それに元聖が飛翔して続きます。

「燃え尽きろ！」

魔王が口から業火を吐きました。

「おらあ！」

左京は如意棒を回して炎を弾きます。

「お返しだ！」

左京の後ろから元聖が飛び出し、極大の爆炎を吐きます。

「ぬお！」

爆炎が魔王の左を掠め、袈裟が燃えました。

「貴様ら、我を本気にさせたいらしいな」

「ずっと本気のクセに」

元聖が挑発します。すると魔王は分身しました。

「け、目くらまし戦法かよ！」

左京が言いました。

第三百六十八話　増殖する魔王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王は、孫左京と九霊元聖の連携攻撃に押され気味になり、七体に分身しました。

「目くらましなどではないぞ。あの愚かな猿と一緒にするな」

魔王がそう言うと、左京がいきなりぶち切れます。

「ぶっ殺す！」

物騒な言葉を吐いて、左京は魔王の一体に攻撃します。

「我は分け身にあらず。これ全て我自身」

「何！？」

魔王が業火を吐きます。

「くそ！」

左京は慌てて下がりました。

「どういう事だ？　第六天魔王が増えた……」

鷺佬は唖然としています。

「どれ程増えようとも全て滅するのみだ」

元聖が爆炎を連射します。

「無駄だ。お前の術はすでに見切っておる」

魔王達は爆炎をかわします。

「そのように温い攻撃では愛しい孫が危うくなるぞ」

「何!?」

魔王の一体が、黄姫に接近します。

「駄目です!」

璃里が立ち塞がります。

「退け、女!」

魔王の一体が業火を吐きました。

「姉上!」

樹里が叫びます。

第三百六十九話　思わぬ救援編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

璃里が業火に焼かれる寸前に何かがそれを遮ります。

それはあの巨大なサイ、部秘模洲（べひもす）でした。

「部秘模洲様！」

璃里が歓喜の声を上げます。

「何と……。何故うぬが邪魔をするのだ、部秘模洲？」

魔王が眉をひそめます。部秘模洲は、

「知れた事。彼女は我が愛する女性。璃里に危害を加える者は、誰であろうと許さぬ」

魔王は歯軋りして退きました。

別の魔王が鷺佗に迫ります。

「がああっ！」

そこに狼の王の俯炎驪琉（ふえんりる）が現れます。

「ぬう！」

魔王は驚いて止まります。

「我が臣下を殺す事は許さぬ」

俯炎驪琉は露津狗を見下ろし、

「今こそ我が一族の秘術を使うぞ、露津狗」

と言い、露津狗に同化しました。鷺佗は呆然として見ています。

「ふあっ！」

露津狗が目覚め、魔王の一体に噛みつきます。

「ぐうおっ！」

魔王は身をよじって露津狗を振り払おうとしますが露津狗は離れません。

第三百七十話　第六天魔王の焦り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

俯炎驪琉（ふえんりる）の霊が乗り移った露津狗は今までにない強さを見せました。

「ぐあっ！」

露津狗の牙が第六天魔王の喉を食いちぎります。

「ぬあ！」

その魔王は断末魔と共に消滅しました。

「うおっ！」

部秘模洲（べひもす）も第六天魔王を踏み潰します。

「おのれ……」

第六天魔王は分身をやめ、一人に戻ります。

明らかに魔王は焦っていました。

「よりによって、何故うぬらが……」

部秘模洲も俯炎驪琉も、自分達の側の者だと思っていた魔王には彼等の行動が理解できないのです。

「おらあっ！」

隙を突く事にかけては天才的な孫左京が殴りかかります。

「うおっ！」

魔王は辛うじてそれをかわしました。

「逃がさねえぞ、化け物め」

左京が怒鳴りました。

「我を怒らせたな。どうなっても知らぬぞ」

魔王の目が怒りで血走ります。

「それがどうした？」

魔王の背後に霊媚阿壇（れびあたん）が現れました。

第三百七十一話　霊獣達の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊媚阿壇（れびあたん）は第六天魔王の背後を取りました。

「うお！」

魔王は霊媚阿壇の体当たりをかわします。

「うぬもか、霊媚阿壇！」

魔王は歯軋りします。

「お前の味方など三千世界のどこにもおらぬわ」

霊媚阿壇が言いました。

「やるぞ！」

俯炎驪琉（ふえんりる）が露津狗の口を借りて叫びます。

「承知！」

部秘模洲（べひもす）が応じます。

「はあ！」

三体の巨大な霊獣の力が辺りに満ちて行きます。

「うぬ」

魔王はキリキリと歯を軋ませて苛立ちました。

「があっ！」

部秘模洲と俯炎驪琉と霊媚阿壇が一斉に口から強烈な光を放ち、魔王に浴びせます。

「ぐおおっ！」

魔王はそれをまともに食らいました。

光が広がり、魔王は見えなくなります。

「やったか？」

鷺佗が鷺基を治癒しながら呟きます。

樹里達は眩しそうに目を細め、その戦いを見ていました。

「温いわ！」

魔王が叫び、光を弾き飛ばしました。

第三百七十二話　第六天魔王怒る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王は霊獣達の攻撃を弾き飛ばしました。

「我は、この世界全てを手に入れようと思い戦って来た。しかしもはやそれはどうでも良い」

魔王の目が吊り上がり、顔が獣化しています。

「いよいよ本性を現すか、魔王」

九霊元聖が孫の黄姫を庇いながら呟きます。

「ヤロウ……」

ビビる事を知らない孫左京もさすがに手が震えて来ます。

リックと馨は失神していました。

「遂に最終段階か？」

部秘模洲（べひもす）が言いました。

「はああ！」

魔王の背中に巨大な黒い翼が生えます。

「ふおお！」

魔王の手の爪が鋭くそして長くなります。

「ぐうお！」

魔王の歯が牙になり口が耳元まで裂けます。

「褒めてやろう。我をここまで追いつめた事。しかし、すぐに後悔する事になる」

魔王は真っ赤に染まった目を見開き、言いました。

「兄貴、来ますよ」

九霊元聖が何かを察知して前に出ます。

「おう」

左京は言いました。

第三百七十三話　最終戦争開始編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王がとうとう本当の姿を現しました。

やはり醜い化け物です。

「うるさい！」

魔王が地の文に突っ込みます。

「我はもはやこの世界などどうでもよい。うぬらを滅ぼすため、この力を解放する」

魔王は両手を高々と掲げ、翼を伸ばします。

部秘模洲（べひもす）が、

「結界を張るのだ。奴の全力の攻撃は、並みの者では防ぎ切れぬ」

と霊媚阿壇（れびあたん）と俯炎驪琉（ふえんりる）に言います。

三体の霊獣が強力な結界を張ります。

「その程度で防げるものか！」

魔王はせせら笑い、力を解放しました。

まるで核爆発のような閃光が放たれ、岩が一瞬にして蒸発し、木も草も燃え尽きて行きます。

「ぐうう！」

霊獣達の結界が揺らぎます。

「防ぎ切れるか……？」

俯炎驪琉が乗り移った露津狗が呟きます。

「えっ！？」

魔王は唖然としました。

「そうなんですか」

樹里と璃里が結界の外で平然としていました。

第三百七十四話　御徒町姉妹の力？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王の力の解放で全てが焼き尽くされてしまうかと思われました。

しかし、璃里と樹里の姉妹は何事もなかったかのように平然としています。

「お師匠様、危険です！　結界の中に入って下さい！」

孫左京が泣きながら言います。

「もう手遅れのはずだし。でもお師匠様達、何ともないみたいだし」

九霊元聖は驚愕しています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。璃里も微笑んでいます。

「何故うぬらは平然としているのだ！？」

魔王が怒鳴りました。

「どうしたのですか、第六天魔王さん？」

樹里が尋ねます。

「誰がって、あれ、間違ってないのかよ！」

魔王会心の乗り突っ込みです。

「お師匠様、芭蕉扇でこの力を押し戻して下さい！」

蘭が叫びました。

「そうなんですか」

樹里は背中の偽芭蕉扇を持ちました。

「えい！」

璃里と力を合わせて思い切り扇ぎます。

「うへえ」

魔王はそのまま飛ばされました。

第三百七十五話　魔王逃走？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王は樹里達の芭蕉扇攻撃を受け、飛ばされました。

「げへ！」

魔王は絶壁にめり込んで止まりました。同時に力の解放も停止したようです。

「今だ！」

孫左京と九霊元聖が飛びます。

「止めだ、化け物！」

左京が如意棒を限界まで太く大きくします。

「がああ！」

元聖が爆炎を放ちます。

「ぐごお！」

魔王はかわす事ができず、まともに食らいます。

「どりゃあ！」

極太の如意棒が魔王を潰しました。

「ぐべべ！」

虫が潰されたような音がしました。

「やった！」

左京と元聖は大喜びです。

「喜ぶのは早いぞ」

どこからか、声がしました。

「その声はエロジジイか！」

左京は太上老君を探します。

「第六天魔王はその程度で消滅するような奴ではない。逃げたのだ」

太上老君は樹里の袈裟の襟元から顔を出しています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「どこに入ってるんだ！」

左京が引き摺り出します。

第三百七十六話　小休止編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

第六天魔王は逃げたようです。

「今度こそやったと思ったのに」

孫左京は悔しそうです。

部秘模洲（べひもす）と霊媚阿壇（れびあたん）は人間の姿になり太上老君に跪きます。

「お久しゅうございます、老師様」

「エロジジイと知り合いなのか？」

左京が言うと、

「先程から失礼だぞ、老師様に対して！」

と霊媚阿壇が怒ります。

「こやつはこういう奴じゃ」

老君は笑顔で言います。その手は鷺佗のお尻を触っています。

「お止め下さい、老師様！」

鷺佗がその手を抓ります。

「先程、あの攻撃の中でお師匠様と姉上様を助けられたお方とは思えませぬ」

「ホッホッホ」

左京は鷺佗の言葉に驚きました。

「じゃあ、さっきのはジジイが？」

「如何にも」

老君は得意そうです。

「ありがとうございます」

樹里と璃里が礼を言いました。

「礼などいらぬ。居心地が良かったぞ、樹里の……」

左京が如意棒で老君を殴りました。

第三百七十七話　西を目指して編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は旅に戻る事になりました。

「第六天魔王も今回の戦いで力を使い尽くした。しばらくは大人しくしていよう」

太上老君が言います。その手は蘭のお尻を触っています。

「お止め下さい、老師様」

蘭が手を叩きます。

「今度会ったら、必ずぶっ倒す」

孫左京が力強く宣言します。

「では、また会おう」

太上老君は雲に乗って天界に帰って行きました。

「少しはそのエロを何とかしろ！」

左京が怒りました。

「では、我らも帰る」

霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）が言います。

「美子（メイズ）ちゃんによろしくにゃん」

余計な事を言って、遊魔に殴られるリックです。

「短い間だったけど、楽しかったよ、兄貴」

九霊元聖も孫の黄姫と共に故郷に帰る事になりました。

「皆さん、お元気で」

樹里が笑顔全開で言います。

皆それぞれの場所に帰って行きました。

「寂しくなるわね」

亜梨沙が言いました。

第三百七十八話　樹里、またしても攫われる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

強敵である第六天魔王を退けた樹里達は、お釈迦様がいらっしゃる天竺の国を目前にしています。

「感動だにゃん。思えば苦しい旅だったにゃん」

大して活躍していないリックの回想に白い目を向ける亜梨沙と蘭です。

現在一行は、孫左京達と鷺佗、鷺基、鷺津狗と薔鏤鬼（ばるきり）吏達、そして樹里の姉璃里。

人数が多いと食い扶持を心配し始めるのが亜梨沙の悪い癖です。

「あんた達も故郷に帰りなさいよ」

亜梨沙は鷺佗に言いました。

露津狗が鷺佗を諦めていないからです。

「我らは償いのためにお師匠様に同行しているのだ。それはできぬ」

鷺佗が言います。

「ああ、そう」

亜梨沙はムッとして顔を背けました。

その時です。黄色い砂嵐が巻き起こりました。

「うわ！」

左京は素早く樹里を庇います。

「く！」

しかし、砂が目に入り何も見えなくなりました。

「あ！」

砂嵐が止むと樹里がいなくなっていました。

第三百七十九話　黄風大王現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は砂嵐の最中に誰かに攫われました。

気づくとどこかの洞窟の中です。

目の前に茶色い毛に覆われた顔の妖怪がいます。

顔はフェレット風ですが身体はマッチョです。

でも名前はヴォ〇フではありません。

「目が覚めたか」

妖怪はニヤリとしました。

「どちら様ですか？」

樹里は笑顔で尋ねます。

「少しは狼狽えろ！」

妖怪は切れました。

「そうなんですか」

尚も笑顔の樹里です。

「わが名は黄風大王（こうふうだいおう）。お前を食って不老長寿になる」

黄風大王はドヤ顔で言いますが樹里は笑顔のままです。

「驚けよ！」

大王はまた切れました。股が切れた訳ではありません。

「ところで豆腐大王さん」

「誰が健康食品だ！」

更に切れる大王です。

「ここはどこですか？」

樹里はまた尋ねました。

「ここは黄風嶺黄風洞（こうふうれいこうふうどう）だ」

「豆腐の豆腐堂ですか？」

「違う！」

大王は倒れそうです。

第三百八十話　樹里、更に妖怪と話す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は黄風大王（こうふうだいおう）という小動物風の妖怪に攫われました。

「どうして私を食べるのですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。大王は、

「そんな嬉しそうにする質問じゃねえだろ！」

と怒り、

「お前を食べると不老長寿になれるからだと言ったろう！」

とまた怒ります。股が怒った訳ではありません。

「どうして不老長寿になれるのですか？」

樹里が更に尋ねます。

「えーと……」

大王は考え込みます。

「そんな事はどうでもいい！」

答えがわからないので八つ当たりで怒る大王です。

「もしかすると私を食べると短命になるかも知れませんよ」

樹里がドキッとするような事を言います。

「え？」

不安になる大王です。それでも、

「うるさい！　坊主を食べると不老長寿になるっていうのは昔から言われているんだ！」

と切れて反論です。樹里は笑顔で、

「昔っていつですか？」

大王は頭から湯気を出しています。

第三百八十一話　黄風大王焦る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は黄風大王（こうふうだいおう）と話をしています。

大王はイライラしているようです。

「今すぐ食ってやるからもう何も言うな！」

樹里は笑顔全開です。大王は大きな口を開けて樹里を飲み込もうとしました。

「虫歯だらけですね」

樹里は大王の口の中を覗いて棒のようなもので虫歯を突きます。

「グゲー！」

大王は痛さのあまりのた打ち回ります。

「そんなに歯が悪くては私を食べられませんよ」

「うるへえ」

涙ぐんで歯を突かれた方の頬を押さえる大王です。

「芸能人は歯が命ですよ」

「誰が東幹久だ！」

古いボケと突っ込みです。

「だったら食いやすいように鍋で煮てやるよ」

大王は樹里をつまみ上げて鍋に入れようとします。

「私を服ごと食べるのですか？」

樹里が尋ねます。大王はハッとして、

「それもそうだな」

大王は樹里の帽子を取りました。

「え？」

ようやくオチに気づいた大王です。

「お、女？」

第三百八十二話　黄風大王驚く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

黄風大王（こうふうだいおう）は樹里が女の子だと知り、唖然としています。

「袈裟も脱いだ方がいいですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。大王はハッとして樹里を地面に下ろし、

「と、とんでもない！　失礼しました！」

と土下座します。

「危なかった。女の人を食ったりしたら、母上に半殺しにされる」

大王はホッとしながら言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「命を生み出す女性を大切にしなさいと、子供の頃から言われております」

大王は苦笑いしながら言います。

「そうなんですか」

樹里はまだ笑顔全開です。

「では、私の妻にしますのでよろしくお願いします」

大王はそう言うと、いきなり服を脱ぎ始めます。

「さあ、元気な子を作りましょう！」

鼻息荒く、やる気満々の大王です。

樹里は別の意味でピンチになりました。

「待てこら！」

そこへようやく孫左京達がやって来ました。

第三百八十三話　孫左京激怒する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里が黄風大王（こうふうだいおう）に襲われようとしている時、孫左京達が洞窟に入って来ました。

左京は樹里の帽子が取れ、大王が上半身裸なのを見て、頭の血管が切れそうです。

「てめえ、お師匠様に何してやがる！」

左京はいきなり大王に如意棒で殴りかかります。

「おっと」

大王は身体が大きい割にはすばしこいようです。

「その乱暴な振る舞い、あの孫左京だな？」

大王が尋ねます。

「そうだ！　俺が孫左京様よ」

左京は胸を張って応じます。

「やはりな。頭が悪そうな顔をしている」

大王が腹を抱えて笑います。

「何だと、てめえ！」

後ろで笑っているリックと馨を一睨みしてビビらせてから、

「大きなお世話だ！」

と再び殴りかかる左京です。

「遅い！」

大王は素早く動いて如意棒を交わしました。

「逃げるな、毛むくじゃら！」

「お前に言われたくないわい！」

左京は全く大王の動きについていけません。

第三百八十四話　孫左京、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、樹里を攫った黄風大王（こうふうだいおう）が樹里に嫌らしい事をしようとしていたと思い、嫉妬心剥き出しで戦っています。

「うるせえ！」

地の文に怒るのは図星だからでしょう。

「その子は私の妻になるのだ。邪魔するな」

黄風大王はドヤ顔で言います。

「妻？」

左京だけでなく亜梨沙以下全員が驚愕します。

「樹里、早まらないで！」

特に姉の璃里はかなり動揺しました。

「ふ・ざ・け・る・な！」

左京の頭が噴火します。昭和四十年代の怒り方です。

「うわ！」

左京の動きが速くなりました。

「更にできるようになった」

「誰がアムロ・レイだ！」

千九百七十年代のボケ＆突っ込みです。

二人が激闘している間に蘭と亜梨沙が樹里を助け出します。

「おらあ！」

左京の如意棒が黄風大王の鼻に当たりました。

「てめえ、母上から頂いたこの顔に傷をつけるな！」

黄風大王がいきなり怒り出し猛反撃です。

第三百八十五話　黄風大王の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

黄風大王（こうふうだいおう）は突然激怒し、反撃を開始です。

「食らえ！」

黄色い砂塵が巻き起こります。

「ゴレンジャーですか？」

樹里が逃げながらボケます。

「誰が石ノ森章太郎だ！」

黄風大王が切れます。そして、

「行かないで、私の花嫁さん！」

と追いかけてきます。

「待てこら！」

孫左京は砂塵に阻まれます。

「お師匠様、芭蕉扇を！」

蘭が叫びます。

樹里は笑顔で偽の芭蕉扇を持ち、

「えい！」

と扇ぎます。

「とお！」

黄風大王が砂塵を放つと芭蕉扇の風が凪いでしまいます。

「芭蕉扇を操るとはますます魅力的だ」

大王は嬉しそうです。

「芭蕉扇が効かない」

蘭は慌てて樹里を庇うように逃げます。

「そこのオバさん、私の花嫁に汚い手で触るな！」

大王が言うと、蘭が切れ、

「誰がオバさんだ！」

と竜巻で攻撃します。

「風は我が僕（しもべ）だという事がわからんようだな」

大王は竜巻を消しました。

第三百八十六話　栄光ある撤退？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

黄風大王（こうふうだいおう）は風を操る妖怪でした。

「ルルが効きますか？」

樹里が尋ねます。

「その風邪じゃないです」

蘭が項垂れます。

「ならば！」

鷺佗と鷺基と薔鏤鬼（ばるきり）吏達が矢を射ます。

「無駄だ！」

大王は砂塵を起こし、矢を跳ね飛ばしてしまいます。

「ここは退くしかあるまい」

一行の中の知性派の蘭と鷺佗が頷き合います。

「ええ？　逃げるの？」

一行の中のおバカ派の亜梨沙が言います。

「誰が道重さゆみだ！」

亜梨沙が切れますが、誰も突っ込みません。

「手がつけられない所は似てるにゃん」

リックがこそっと言います。

「鷺基、お師匠様を頼む」

「わかった」

鷺基は樹里を抱き上げると、飛翔しました。

「我慢我慢」

鷺佗は嫉妬しそうな自分を抑えます。

「待て！」

大王が追いかけて来ます。

「てめえ、どさくさに紛れて！」

大王以上に怒っている孫左京が、きんと雲で鷺基を追います。

第三百八十七話　霊吉菩薩を探せ！編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、樹里を抱きかかえて飛翔している鷺基を追い越しました。

「その役目は、一番弟子の俺がする」

「わかったよ」

鷺基も姉である鷺佗の嫉妬の視線を感じていて、渡りに船でした。

樹里はきんと雲に移りました。

蘭達も黄風大王から逃げます。

「逃がさんぞ、私の花嫁！」

大王が風に乗って追いかけて来ます。

「しつこいな！」

左京は毛を引き抜き、身代わりをたくさん出します。

「何だと！？」

大王はそれを見て慌てます。

「今だ！」

左京は西の龍王の宮に行きました。

「黄風大王か」

龍王も思案顔です。

「霊山で本格的な修行をし、得度した者だ。並みの妖怪とは力が違う」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「霊吉菩薩様におすがりするしかないな」

左京達は顔を見合わせました。

「どこにいるんだ？」

「儂も知らん」

「役立たず！」

「うるさいわい！」

龍王は切れました。

第三百八十八話　孫左京、太上老君を訪ねる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は西の龍王の元に避難しています。

「誰が知ってるんだ、霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）の居場所を？」

孫左京が龍王に尋ねます。

「わからん。老師様にお尋ねしてみるがいい」

「役立たずなジジイだ」

左京が捨て台詞を吐いて飛び立ちます。

「うるさい！」

龍王はまた切れました。

左京は太上老君の邸に行きました。

「おう、左京。よう参った」

老君が笑顔で出迎えます。

「霊吉菩薩はどこにいる？」

左京は挨拶もせずに尋ねます。

「黄風大王が現れたようだな」

「よく知ってるな。あのヤロウ、お師匠様の芭蕉扇も受け付けねえんだ」

左京は老君に詰め寄ります。

「どうせあいつもジジイのものを盗んでいるんだろ?」

「違う。しかし、霊吉菩薩の居場所なら知っておる」

老君はニヤリとします。

「何だ、その嫌らしい笑みは?」

左京はゾッとしました。

「わかっておろう?」

老君は更にニヤリとしました。

第三百八十九話　孫左京、太上老君の条件を呑む編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、嫌らしい顔で笑う太上老君にギョッとします。

「ジジイ、またお師匠様を……」

すると老君は、

「それはない。先日お釈迦様に叱られてな。樹里には何もせんよ」

左京はホッとします。

「遊魔ちゃんじゃ。あの子とひとば……」

左京は容赦なく殴ります。

「それ以上言うとこの話が別の場所に移されるぞ！」

「わかった」

涙目で言う老君です。

「遊魔ちゃんとお茶でも飲んで話がしたいのじゃ。それなら良かろう？」

「呆れたジジイだ。リックと遊魔に話してみるよ」

左京は完全に軽蔑の眼差しです。

「それでは、霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）の居場所を教えよう」

左京は居ずまいを正します。

「お釈迦様がご存知じゃ」

「この！」

左京は如意棒で殴りました。

「最初からそう言え、スケベジジイ！」

左京は怒って屋敷を出て行きます。

「遊魔ちゃんの事は？」

「知るか！」

左京はサッサと飛び去ります。

第三百九十話　孫左京、久しぶりにお釈迦様に会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、きんと雲を飛ばし、天竺にある大雷音寺に向かいます。

「こうやって、きんと雲で行けば、一飛びなのにな」

左京は大雷音寺に着きました。

「お釈迦様ー！」

左京は寺の中を大声を出して走ります。

「孫左京、よくぞ参った」

大きな部屋の祭壇の上にお釈迦様がお座りになっています。

「長い旅であったな。これが其方達に渡すありがたい経典じゃ」

お釈迦様が経典を取り出し、左京に渡そうとします。

「いやいや、お師匠様はまだ着いてないし」

「おおそうか。最近、どうも老眼が酷くてな」

お釈迦様のお言葉に呆れる左京です。

「本日は、霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）様の居場所を教えて欲しくて参りました」

左京は跪いて言いました。

「誰じゃ、それは？」

お釈迦様のお言葉に固まる左京です。

「わっはっは、嘘じゃ。存じておる」

お釈迦様のおふざけにムッとする左京です。

（いつかぶちのめす）

第三百九十一話　孫左京、霊吉菩薩の邸に行く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、太上老君やお釈迦様の冗談に翻弄されながらも、何とか霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）の居場所を聞き出しました。

「霊吉菩薩は、ここから西へ十万八千里（約六万キロ）行った所に住んでおる。菩薩に授けた飛竜杖（ひりゅうじょう）を使えば、黄風大王（こうふうだいおう）は力を失うであろう」

真面目モードのお釈迦様が教えてくれました。

「ありがとうございました」

左京は礼を言って大雷音寺を出ました。

「十万八千里か。遠いな」

左京は数字が苦手なので気づいていませんが、西へ十万八千里進むのは、西へ三万六千里進むのと同じです。

「でも、きんと雲なら一飛びだ！」

こういう時、ものを考えない者は疲れを知りません。

左京は地球を一周して大雷音寺を通過し、目的地に到着しました。

「何か今、見た事がある風景を通った気がする」

ようやく霊吉菩薩のいる邸の前に着きました。

第三百九十二話　孫左京、霊吉菩薩と会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はきんと雲で遠回りした事も気づかず、霊吉菩薩邸（りょうきつぼさつ）に着きました。

「遠かったな、本当に」

気づいていない左京は幸せです。

「待ちくたびれたぞ、孫左京。先程ここを通り過ぎたが、どこまで行っていたのだ？」

霊吉菩薩が出迎えながら言いました。

「どういう事ですか？」

左京が尋ねます。すると霊吉菩薩は笑って、

「わからんならいい。気にするな」

「とにかく、急いでるんだ。早く助けてくれ」

「わかった」

左京は霊吉菩薩と共に西の龍王の宮に戻りました。

「お久しゅうございます」

龍王が言いました。霊吉菩薩は、

「挨拶は良い。彼奴(あやつ)を止めねばならぬ」

「じゃあ、サッサと行くぜ、菩薩様」

左京は樹里と菩薩をきんと雲に乗せ、黄風大王(こうふうだいおう)の所に向かいました。

「お師匠様を嫁にするとか許さねえぞ」

左京はそれを根に持っているようです。

第三百九十三話　黄風大王の母編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は、黄風大王（こうふうだいおう）がいる場所まで戻って来ました。

「我が花嫁、お戻りか？」

大王は樹里の姿を見て言いましたが、樹里の隣にいる霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）に気づいて蒼ざめます。

「久しいな」

霊吉菩薩が言うと大王は震え出し、その場で土下座しました。

「お久しゅうございます」

借りて来た猫のように大人しくなる大王です。

「少し見ない間に偉くなったな」

霊吉菩薩の嫌味に大王は土下座したままで、

「滅相もございませぬ！」

と叫びます。霊吉菩薩はニヤリとして、

「元の山に帰り、大人しく暮らすが良い」

「はは」

霊吉菩薩が杖を振るうと大王の身体が輝き、小動物になりました。

そこにたくさんの子供を伴った小動物が現れます。

「母ちゃん」

大王の母親のようです。

「菩薩様、ウチのバカ息子がご迷惑を」

母親は大王を殴り頭を下げながら、山へ帰って行きました。

第三百九十四話　霊吉菩薩の飛竜杖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊吉菩薩（りょうきつぼさつ）の力により強敵であった黄風大王（こうふうだいおう）は改心し、母親と共に山に帰りました。

「御徒町樹里よ」

霊吉菩薩が言います。

「はい、両津巡査」

「誰が亀有公園前派出所だ！」

樹里のボケに霊吉菩薩は切れました。

「お前は風の力を操る素質がある。これを授けよう」

霊吉菩薩は黄風大王を制した飛竜杖（ひりゅうじょう）を樹里に渡しました。

「その偽芭蕉扇より威力がある」

「そうなんですか」

樹里は飛竜杖を掲げました。

「どうだ、凄いであろう」

そう言いながら、霊吉菩薩は遥か彼方に飛んで行きました。

「いいのか、おい……」

孫左京達は狼狽えました。

「取り敢えず旅を続けましょうよ」

何も見なかった事にしたい亜梨沙が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。蘭と鷺佗は項垂れます。

「そうにゃんよ」

何も考えていないリックが言いました。

第三百九十五話　ツンデレ妖怪現れる？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。
黄風大王（こうふうだいおう）を退けた樹里一行は、再び天竺を目指して旅を始めます。
一行がある大きな森にさしかかった時でした。
「待て、お前達。この森は我が森。通りたくば、我と勝負しろ」
どこからともなく、甲高い声が聞こえました。
「もう中学生さんですか？」
樹里が尋ねます。
「誰が更級農業高校出身だ！」
声が切れました。
「我は霊感大王だ」
声が言います。
「ところで、箕輪まどかさん」
樹里が言いました。
「誰がツンデレ少女だ！」

声がまた切れました。股は切れていないのでご心配なく。

「いい加減にせんか！」

現れたのはブサイクな中年オヤジ系です。

「うるさい！」

地の文に突っ込む霊感大王です。

「おっさんか。俺が相手をしてやるよ」

孫左京が進み出ます。霊感大王はニヤリとし、

「我は大雷音寺の経典の全てを暗記している。貴様如きでは相手にならんぞ」

大王は胸を張りました。

第三百九十六話　孫左京、敗れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に霊感大王と言う甲高い声を出す気持ち悪い中年オヤジが現れました。

「何だと！？」

またしても地の文に切れる大王です。

「お前の相手は俺だよ、もう中」

孫左京が言います。霊感大王はムッとして、

「我は芸人ではない！　お前ら如きより遥かに優れた修行者である」

「どうでもいいよ。行くぜ！」

左京は問答無用で如意棒で殴りかかります。

「インダラヤソワカ！」

大王が帝釈天の真言を唱えます。

「ひ！」

稲妻が走り左京は慌ててそれをかわします。

「ナウマクサマンダバザラダンカン　」

次に大王は不動明王真言を唱えます。業火が左京を襲います。

「あちあち！」

左京はお尻を焼かれました。

「こいつ、強い」

蘭が呟きます。鷺侘と鷺基も身構えます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「オンマカキャラヤソワカ」

大王が大黒天真言を唱えると、

「うへえ！」

左京は遥か彼方に飛ばされました。

第三百九十七話　真言対決編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王の真言で、孫左京はあっさり飛ばされました。

どうやら主役交代の時のようです。

「僕が主役にゃん」

リックが前に出ます。蘭と亜梨沙が白い目で見ています。

「こう見えて僕も真言を使えるにゃん」

リックが胸を張ります。

「ほう。どのような真言か？」

霊感大王がニヤリとして尋ねます。

「ドドスコスコスコ……」

リックがそこまで言った時、

「誰が楽しんごだ！」

と霊感大王が切れました。

「ラブ注入！」

それでもめげずに続けるリックです。

「どいてろ！」

鷺基が蹴飛ばします。

「真言なら、お師匠様の方が凄いわよ、ツンデレさん」

何故か偉そうに言う亜梨沙です。

「我はツンデレではない！」

大王が怒ります。

「お師匠様、お願いします」

蘭が亜梨沙を押し退けて言います。

「そうなんですか」

樹里が進み出ます。

「ところで、野末陳平さん」

「誰が霊感ヤマカン第六感だ！」

大王は更に切れました。

第三百九十八話　遂に真言対決編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王は樹里を睨みます。

「お前が噂の坊主か？　食ったら美味そうだな」

「そうなんですか。食べた事がないのでわかりません」

樹里は笑顔全開で言います。

「自分を食べた事がある奴がいるか！」

大王が切れました。

「ふざけた坊主だ。我の真言を受けるがよい！　インダラヤソワカ」

帝釈天の真言を唱える大王です。

でも稲妻は樹里を逸れ、リックに当たります。

「にゃんで？」

リックは感電して倒れました。

「お前様！」

遊魔がリックを踏んづけます。

「どういう事だ？　何故当たらんのだ？」

大王が不思議がっていると、

「私の番ですね」

樹里が印を結び、真言を唱えます。

「オンメイギャシャニエイソワカ」

八大龍王真言です。大王は洪水に飲み込まれます。

「やるな」

大王は真言を唱えます。

「オンマユラキランデイソワカ」

孔雀明王真言です。大王は宙に浮かびました。

「凄い戦いだ」

鷲佗が目を見張ります。

第三百九十九話　孫左京、焦る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王と樹里の真言対決は、白熱しています。

「では続けて行くぞ。ナウマクサマンダバザラダンカン」

不動明王真言です。業火が樹里に向かいます。

「にゃーん！」

でも直前で逸れ、やっと痺れが取れたリックに当たります。

「猫の丸焼け」

亜梨沙が涎を垂らします。

「むむ、何故真言が当たらんのだ!?　貴様、どんな小細工を?」

大王はイライラして言いました。

「何もしていませんよ、フランキー堺さん」

樹里は笑顔全開で言います。

「だから霊感ヤマカン第六感の二代目司会者じゃねえよ！」

大王が切れました。

「ではこちらの番ですね」

樹里が真言を唱えます。

「オンマカキャラヤソワカ」

大黒天真言です。

「うへえ！」

大王は遥か彼方に飛ばされました。

「左京要らないじゃん」

亜梨沙が残酷な一言です。

孫左京はきんと雲で戻る途中でした。

「非常にまずい展開になっている気がする」

勘が冴えています。

第四百話　霊感大王、復讐に燃える編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、霊感大王を撃退し、森を抜けました。

そこへようやく孫左京が戻って来ます。

「役立たずのご帰還にゃん」

さっきまで亜梨沙と馨も言っていた事をリックが言います。

しかし亜梨沙と馨は知らんフリです。

「裏切りもにょー！」

リックは血の涙を流し、左京に蹴飛ばされました。

「妖怪は？」

左京が蘭に尋ねます。

「お師匠様のお力で撃退したわ」

蘭が冷めた目で言います。

左京は全身から嫌な汗を噴き出します。

「お前がいなくても、お師匠様は大丈夫のようだな」

鷺基が容赦なく現実を突きつけました。

左京は言い返す気力もないようです。

「そうなんですか」

樹里は左京の傷口に塩を塗るような笑顔で言います。

その時です。

「先程はよくもやったな」

霊感大王が戻って来ました。

「妖怪め、俺が相手だ！」

左京は如意棒を振り回して言いました。

しかし霊感大王は、

「今度は負けんぞ」

と樹里を見ます。

第四百一話　孫左京、荒れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

復讐に燃える霊感大王は、樹里を睨んでいます。

樹里は笑顔全開です。

無視された孫左京は怒り全開です。

「お師匠様に馴れ馴れしく話しかけるな！」

言いがかりがブラマヨ吉田並みです。

「何でやねん」

亜梨沙が意味不明な突込みをします。

「もう一度勝負だ、坊主」

霊感大王は左京を完全に無視して、樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「いいのか、放っておいて？」

露津狗が亜梨沙に小声で話しかけました。

「ああん」

亜梨沙は悶えました。露津狗は唖然とします。

「無視するなって言ってるだろうが！」

左京はいきなり霊感大王に如意棒で殴りかかります。

「オンマカキャラヤソワカ」

大黒天真言が左京を吹き飛ばします。

「うへえ」

左京はまた遥か彼方に飛ばされました。

「きんと雲！」

左京は飛ばされながらもきんと雲を呼び、飛び乗ります。

「あのヤロウ！」

左京は激怒しました。

第四百二話　樹里対霊感大王その弐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王は樹里を見ます。

「行くぞ、坊主」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「オンマケイシバラヤソワカ」

破壊神と呼ばれている大自在天の真言です。

大黒天真言より遥かに威力があります。

「オンアボキャベイロシャノウマカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン」

樹里は印を次々に結んで行き、真言を唱えます。

「何！？」

霊感大王は慌てました。

「それを使いこなすとは！」

霊感大王の真言は樹里の真言にかき消されました。

「今のは……」

蘭と鷺佗と鷺基が驚いています。

亜梨沙はドサクサに紛れて露津狗に抱きつきます。

遊魔はボーっとしています。

璃里は知っていたのか、頷いています。

「参りました」

霊感大王は土下座しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「光明真言は究極の真言。我も修行の折、会得したいと思いましたができませんでした」

大王は言いました。

第四百三話　霊感大王、改心する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王は樹里との真言対決に敗北し、改心したようです。

「是非、我も弟子にして頂きたく」

大王が樹里に懇願します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じますが、

「ダメダメ！　もうメンバーは定員オーバーなの」

食い扶持が心配な亜梨沙が言います。

「そこを何とか、お嬢さん」

大王が言います。

「お嬢さんですって」

喜ぶ亜梨沙を白い目で見る蘭と鷺侘です。

「左京が抜けたから、ちょうどいいにゃんよ」

ボロボロのリックが言います。

「何だと、エロ猫！」

戻っていた左京がリックを蹴飛ばします。

左京の後ろには観音様がいました。

「其方は旅をしている場合ではあるまい？」

観音様を見て大王が震えます。

「はい、観音様」

大王は平伏しました。

「戻れ」

観音様が金魚鉢を出すと、大王は光に包まれその中に入ってしまいました。

一同は仰天します。

「元は私の飼っていた金魚なのだ」

観音様は言いました。

第四百四話　霊感大王の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊感大王は観音様の飼っていた金魚でした。

「例え金魚でも、修行次第では力を会得する」

観音様の講話です。寂聴さんのように面白くはありません。

「こやつは誤った使い方をした。真言は力を振るうために使うものではない」

「はい」

孫左京が妙に真面目に聞いています。

亜梨沙は瞼に目を描いて寝ています。

「修行の成果が現れたな、樹里よ」

観音様が言います。

樹里は熟睡していました。

「お前もか！」

観音様は怒って天に帰ってしまいました。

「じゃあ、俺も行くよ」

左京が言いました。

「元気でね」

亜梨沙があっさり言います。

蘭と鷺佗が呆れます。

「お師匠様は俺がいなくても大丈夫です。お世話になりました」

左京は涙を堪えて樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。璃里が驚いて何か言おうとすると、

「お猿さんがいなければ私はここまで来られませんでした」

樹里が言いました。

第四百五話　孫左京、感動する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里の言葉にびっくりしました。

「お猿さんがいたから今の私があるのです。勝手に行く事は許しません」

樹里の目に涙が光っています。左京は感激しています。

「お師匠様」

雰囲気に呑まれやすい亜梨沙はさっきの態度も忘れてもらい泣きです。

蘭も鷺佗も涙ぐんでいます。

馨は号泣しています。璃里も泣いています。

鷺基と露津狗は顔を見合わせました。

「もう少しです。出発しましょう」

「はい」

左京は涙を拭い、歩き出します。

「お師匠様、感激です。これからもよろしくお願いしま……」

左京が振り向くと誰もいません。

ふと見ると、道が二股に分かれていました。

「勘弁して下さい！」

左京は慌てて戻りました。

「気がついちゃった、左京？」

亜梨沙が言います。

「うるせえ！　一番泣いてたくせに！」

「それは言いっこなし」

またいつもの旅が始まります。

「みんな、どこにゃん？」

リックを除いて。

第四百六話　青い山脈？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は森を抜け、岩肌の目立つ山の麓に出ました。

「ここを越えれば、天竺です」

樹里が言います。

「じゃあ、もう少しですね。良かったあ」

怠け者の亜梨沙は、ようやく旅が終わるとホッとしています。

「天竺までどれくらいなの？」

亜梨沙は蘭に尋ねました。

「知らない方がいいと思うよ」

「何でよ？　教えてよ」

亜梨沙はムッとして言います。蘭は仕方なさそうに、

「今まで歩いて来たのと同じくらいあるわ」

亜梨沙が石化しました。

「このままここに置いてくか？」

孫左京が言いました。

「それにしても、この山脈、妙に青いな。妖怪の臭いもする」

露津狗が言います。

「原節子さんですか？」

樹里が尋ねます。

「その青い山脈じゃないです」

露津狗が項垂れます。

するとその時、

「この儂の陣地によくも参った」

と声がしました。

「妖怪か？」

左京達が身構えます。

「歓迎するぞ」

樹里達は妖怪に囲まれました。

第四百七話　賽太歳現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は青い山脈の麓で妖怪達に囲まれました。

「俺達は賽太歳(さいたいさい)様の手下だ。許可なく足を踏み入れた者達は全員死刑だ！」

妖怪の一匹が言いました。

「喧しい」

孫左京がいきなり如意棒を振りかざし妖怪達を倒してしまいます。

「弱過ぎるぞ、てめえら」

左京は拍子抜けしました。

「覚えてろ！」

妖怪達は泣きながら逃げました。

「お猿さん」

樹里が怒った顔で左京を見ます。

「え？」

左京はギクッとしました。

「問答無用で相手を殴るのはダメです」

樹里の「ウルウル瞳ほっぺたぷう」攻撃です。

「申し訳ありません」

大量の鼻血を垂らしながら左京は土下座しました。

そこへ金毛の大きな猪が現れました。

「よくも我が手下をいたぶってくれたな！」

猪が吠えます。

「儂は賽太歳だ！」

そして雄叫びを上げます。

「ところで乙事主さん」

樹里が言います。

「誰が森繁久弥だ！」

賽太歳が切れました。

第四百八話　賽太歳の鈴編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

賽太歳（さいたいさい）は樹里を睨みます。

「美味そうだな。食わせろ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「ふざけるな、豚！」

孫左京が割って入ります。

「儂は豚ではない。猪だ！　豚と一緒にするな」

賽太歳が怒ります。

「何ですって、聞き捨てならないわね！」

亜梨沙が石化から復活し賽太歳を睨みます。

「我らは神の使い。豚は人間共の餌だ」

賽太歳は亜梨沙を蔑んだ目で見ます。

「豚をバカにするな！」

亜梨沙は左京を見て、

「後は宜しく」

と下がります。

「何なんだ、お前？」

左京は呆れました。

「そして人間共は我らの餌なのだ」

舌なめずりする賽太歳です。

「その前にお前は俺の餌だ！」

露津狗が賽太歳に襲いかかります。

「狼か？」

賽太歳は素早く動きました。

「ならばこれでどうだ」

賽太歳は右の前足に付いていた三つの鈴の一番手前を鳴らしました。

すると業火が露津狗を襲いました。

第四百九話　鈴の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

金毛の猪である賽太歳（さいたいさい）はその右前足に付けられた鈴の一つ目を鳴らしました。

業火が露津狗を襲います。

「危ない、露津狗！」

どさくさに紛れて抱きつこうとした亜梨沙ですがその前に露津狗は業火をかわしていました。

「ぴぎゃ！」

豚の丸焼きの出来上がりです。

「僕を笑った罰にゃん。僕を虐める奴は皆首がもげちゃえばいいにゃん」

リックが悪魔のような顔で言います。

根に持つ事があったようです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「亜梨沙が丸焼きになったのは自業自得だが、お師匠様を美味そうだと抜かしたのは許さねえぞ」

孫左京が進み出ます。

「お前も焼かれよ！」

賽太歳は鈴を鳴らします。

「させるか！」

左京はすばやく動いて火をかわします。

「わわ！」

左京が逃げ回るので蘭達も業火から逃げます。

「当たらなきゃ、何にもならねえんだよ」

左京は得意そうに言いました。

第四百十一話　二番目の鈴編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

賽太歳（さいたいさい）は素早く動く孫左京を睨みます。

「猿め。これならどうじゃ！」

賽太歳は二番目の鈴を鳴らしました。

すると鈴から真っ黒い煙が噴き出し、何も見えなくなりました。

「わわっ！」

左京は誰かに激突してしまいます。

「坊主は食わせてもらうぞ」

賽太歳の声がしました。

「そうなんですか」

樹里の声も聞こえました。

「お師匠様！」

左京が叫びます。

煙が消えると、賽太歳と樹里がいません。

「豚め！」

左京が怒鳴ります。

「豚じゃなくて、猪ね」

焼け焦げている亜梨沙が言います。

涎を垂らしてしまうリックと馨です。

露津狗は慌てて涎を拭います。

樹里は賽太歳の住処にいました。

お馴染みの洞窟です。

「ここはどこですか？」

樹里が尋ねます。

「麒麟山（きりんざんかいちどう）？豸洞だ」

賽太歳が答えました。

「麒麟さんが一頭ですか？」

「誰がそんな事言った！？」

賽太歳は切れました。

第四百十一話　樹里、賽太歳と話す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は、賽太歳（さいたいさい）に捕まりました。

「お前を食ってやる」

賽太歳が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔です。

「何故怖がらないのだ？」

賽太歳がムッとします。

「怖がった方がいいですか？」

樹里が笑顔で尋ねます。

「無理に怖がられても嬉しくない！」

賽太歳は怒りました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ところで前夜祭さん」

「儂は賽太歳だ！」

賽太歳が切れます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔のままです。

「どうして私を食べたいのですか？」

「美味そうだからだ」

賽太歳は舌なめずりします。

「不味いかも知れませんよ」

樹里が言います。

「食ってみてのお楽しみだ」

賽太歳は大きな口を開けます。

「口内炎がありますね」

樹里が口の中を覗いて言います。

「余計なお世話だ！」

賽太歳は更に切れます。

「私を食べると口内炎にしみますよ」

「え？」

ギクッとする賽太歳です。

第四百十二話　三つ目の鈴の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は賽太歳（さいたいさい）という猪の妖怪に食べられそうなのですが、全然危機感がありません。

「口内炎は痛いですよね」

樹里が笑顔で言うと、

「うるさい！　お前、面白がっているな？」

賽太歳が怒ります。

「その鈴、奇麗ですね」

樹里が話を逸らします。

「これは紫金鈴（しこんれい）というものだ。これさえあれば、どんな敵でも退けられる」

急に偉そうになる賽太歳です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔で応じます。

「体育祭さんが作ったのですか？」

「儂は賽太歳だ！　儂が造ったものではない。太上老君様がお造りになったのだ」

切れながらも、きちんと説明する律儀な賽太歳です。

「またあのジジイ絡みかよ！」

孫左京が乗り込んで来ます。

「お前か。今度こそぶちのめしてやる」

賽太歳は三つ目の鈴を鳴らしました。

「うわ！」

途端に砂塵が巻き起こります。

「うう！」

左京は目が見えなくなりました。

第四百十三話　孫左京、袋叩きに遭う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、賽太歳（さいたいさい）の巻き起こした砂塵で目をやられました。

「うわ！」

そこに雑魚妖怪がたくさん現れ、左京を滅多打ちにします。

「思い知るにゃん！」

どこかで聞いた事がある声がしました。

「いていてて！」

左京はあまりの猛攻にうずくまってしまいます。

「お猿さん」

樹里が声をかけました。

「お師匠様、ご無事ですか？」

左京は見えない目を向けて尋ねます。

「もうすぐ無事ではなくなるぞ」

賽太歳が言いました。

すると樹里は飛竜杖（ひりゅうじょう）を掲げます。

「うへえ」

雑魚妖怪はその力で洞窟の外に飛ばされました。

「にゃーん」

聞いた事がある声も飛んで行ったようです。

「うへえ」

ついでに左京も飛ばされました。

「それは飛竜杖か？　黄風大王（こうふうだいおう）を倒したのはお前か？」

賽太歳が尋ねました。

「誰ですか、黄風大王さんて？」

樹里は覚えていないようです。

第四百十四話　賽太歳の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はきんと雲を呼び亜梨沙達がいる所に戻りました。

砂が目から出て見えるようになったのです。

「猪の所にいなかったか？」

左京がリックに尋ねます。

「いないにゃんよ」

嫌な汗を掻いているリックです。

「猪が持ってる鈴は太上老君のジイさんが造ったものらしい」

「あの人、自作を盗まれ過ぎよ」

亜梨沙が言います。

「俺はジイさんの所に行く。お師匠様の所へ行ってくれ」

「わかった」

何故か赤くなる蘭です。

それを見て剥れる亜梨沙と馨です。

「頼んだぞ」

左京はきんと雲で飛び立ちました。

「私達も行こう」

知性派の蘭と鷺佗は最近仲良しです。

鷺佗が蘭と共に飛びます。

「私も」

亜梨沙が鷺基にしがみつきます。

「重い」

鷺基は辛そうです。

「行くぞ、猫」

露津狗は走り出しました。

「僕は龍君に乗るにゃん」

リックは遊魔と共に馨に乗りました。

「龍さん、お願いィ」

遊魔の囁きにデレデレの馨です。

第四百十五話　太上老君の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、賽太歳（さいたいさい）の持っていた鈴の事を訊くため、太上老君の邸に行きました。

「よう参った。遊魔ちゃんは元気か？」

老君は嬉しそうに尋ねます。

「今は二代目ぐんまちゃんだよ」

「そのゆうまちゃんじゃないわい！」

ネタがローカル過ぎて意味不明です。

左京は長話が嫌いなので、鈴の事を尋ねました。

「それは間違いなく儂が造った物だ」

「どうすれば勝てる？」

左京が更に尋ねます。

「教えて欲しければ、鷺佗のお尻……」

左京はいきなり如意棒で殴ります。

「そういう取引には応じねえぞ、エロジジイ」

老君は涙目で左京を見ます。

「その鈴は観音菩薩に造った物だ。菩薩に相談しろ」

言い方が投げ槍です。

「また観音様かよ。天界の連中は揃ってズボラだな」

老君は、

「賽太歳は菩薩の乗り物だったのだ。隙を見て鈴を盗み出し、妙な力を得たのであろう」

左京は観音様の所に向かいました。

第四百十六話　賽太歳、樹里に疲れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

賽太歳（さいたいさい）は樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を持っているので驚きました。

「黄風大王は儂の良き友であった。お前は許さん」

賽太歳が怒ります。

「我が良き友よですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がかまやつひろしだ！　友だったのだ！」

「強敵（とも）ですか？」

樹里が更に尋ねます。

「誰が北斗の拳だ！」

賽太歳はイライラしています。

「うるさい坊主だ。食ってやる！」

賽太歳がまた大口を開けます。

「ところでバンアレン帯さん」

「誰が宇宙物理学だ！　無理があるぞ、その間違え方は！」

賽太歳はかなりムカついています。

「その鈴どこから盗んで来たのですか？」

樹里の質問にギクッとする賽太歳です。

「盗んで来たのではない。借りているのだ」

汗まみれの賽太歳が見苦しい言い訳をします。

「物は言い様ですね」

樹里が笑顔で言います。

「うるさい！」

賽太歳は切れました。でも震えています。

第四百十七話　孫左京、観音様に会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里が賽太歳（さいたいさい）と話している頃、孫左京は観音様の邸に着きました。

「よう参ったな。どうした？」

観音様が笑顔で尋ねます。

「太上老君から聞いて来たんだけど、猪の鈴を何とかしてくれ」

左京は単刀直入に言いました。

「賽太歳か。土地の妖怪共と悪さをしているくらいなら、放っておいても良かったのだが、樹里を捕らえたとなると話は別だな」

「そうそう。他の誰がどうなろうと構わねえがお師匠様だけは助けないと」

左京の露骨な樹里贔屓に呆れる観音様です。

「樹里は飛竜杖（ひりゅうじょう）を持っているであろう？」

「ああ、あの杖ね」

左京はその杖に飛ばされた事を思い出しました。

「あの杖で鈴を叩けば、只の鈴になる。さすれば、賽太歳も只の猪

だ」

「感謝するぜ、観音様！」

左京はすぐさま飛び立ちました。

「相変わらず礼儀知らずな奴だ」

観音様はそれでも嬉しそうに言います。

第四百十八話　賽太歳の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭達は、賽太歳（さいたいさい）がいる洞窟の前に着きました。

「出て来い、猪！　お師匠様を解放しろ！」

鷺基が亜梨沙を投げ捨てるように下ろして言います。

「うるさいぞ、貴様ら！　ぶちのめしてやる！」

そこに雑魚妖怪が現れました。

「やっちまえ！」

雑魚妖怪が襲いかかります。

「あれ、あんたさっき一緒に猿を殴ってたよね？」

雑魚の一匹がリックに話しかけます。

「僕は知らないにゃんよ」

慌てるリックを馨が白い目で見ます。有罪確定です。

「おのれら！」

そこに賽太歳が現れます。

「儂の邸の前で騒がしいぞ。許さん！」

鷺佗が、

「まだ戦うつもりか？」

と尋ねます。すると賽太歳はニヤリとして、

「儂には人質がいる」

奥から別の雑魚妖怪が樹里と璃里を連れて来ました。

「あれ？」

蘭が驚きます。

「亜梨沙、お師匠様の姉上様、お守りしてなかったの？」

「私、知らないわよお」

責任のなすり合いです。

第四百十九話　樹里対蘭&鷺佗編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

賽太歳（さいたいさい）は得意そうです。チュートリアルではありません。

「さあ、姉の命を助けて欲しければあいつらを蹴散らせ」

何と、賽太歳は璃里を人質にして樹里を戦わせるつもりです。

あまりにも卑劣なやり方です。

「やっつけて下さい、お師匠様」

リックが久しぶりに寝返りました。

「そうなんですか」

樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を掲げます。

「うわ！」

途端に蘭と亜梨沙が飛ばされます。鷺佗と鷺基は素早く離れました。

「お師匠様！」

馨が悲しそうに叫びます。

「負けないわよ」

蘭が戻って来ます。

「鷺佗、手を貸して」

「わかった」

鷺佗は弓を引き、乱れ射ちです。

「とお！」

蘭は竜巻で攻撃します。

「はい！」

樹里が飛竜杖を掲げると、矢は落ち、竜巻は消えてしまいます。

知性派二人が、樹里に挑みます。

「ああ、何て事だ。蘭さんと鷺佗さんが、お師匠様と戦うなんて」

馨は涙ぐみました。

第四百二十話　知性派の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の持つ飛竜杖（ひりゅうじょう）の前に、蘭達はなす術がありません。

「無駄だ、愚か者め。抵抗するならこやつの命はないぞ」

雑魚妖怪が璃里に刀を突きつけます。

「卑怯だぞ！」

鷺基が怒鳴ります。

「卑怯は我らの誉め言葉だにゃん」

リックが偉そうに言います。

「お前、仲間なのか？」

雑魚妖怪が尋ねます。

「勿論ですよ、兄貴」

リックは歯を浮かせて言いました。

「仕方ない。ここは退こう」

蘭が言います。すると鷺侘が、

「そんな事はできない。お師匠様を助けるのよ、蘭！」

「璃里様が人質では戦いようがないわ」

蘭が言いました。

「仲間割れか。醜いな」

賽太歳（さいたいさい）が笑います。すると何故か蘭と鷺佗も笑います。

「引っかかったわね、猪ジジイ」

「何！？」

ハッと気づくと、地中を掘り進んで来た亜梨沙と露津狗が璃里を助けていました。

「おのれ！」

賽太歳は素早く洞窟に退きました。

第四百二十一話　賽太歳の罠編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙と露津狗の活躍で賽太歳（さいたいさい）は洞窟に逃げました。

ボスが消えたのを見て、雑魚妖怪も逃げました。

「よし、一気にやっつけるにゃん」

いつの間にか馨に乗ったリックが言います。

「あんた、さっきまで向こうの味方だったじゃん」

亜梨沙が言います。

「それは方便にゃん」

「お前の名字は鳩山か！」

亜梨沙が怒りました。

「突っ込むのはやめた方がいい。あいつはあの鈴を持っている」

冷静な露津狗が言います。

「露津狗の言う通りね」

亜梨沙が目をキラキラさせて同意します。

「試しにあんた行きなさい」

鷺侘がリックを洞窟に投げ込みます。

「にゃーん！」

リックは洞窟の奥へと消えました。

「にゃにゃーん！」

全身黒焦げのリックが飛び出して来ました。

「やはり罠か」

鷺基が呟きます。

「お前様、大丈夫ですか」

遊魔が塩でリックを擦ります。

「稲葉の白兎にゃん！」

リックは失神しました。

第四百二十二話　鈴の効果編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

賽太歳（さいたいさい）は洞窟の中で蘭達を待ち構えていました。

「入って来たらまとめてあの世に送ってやる」

賽太歳はニヤリとしました。

蘭達はどうすればいいか話し合っています。

「ここは一つ、お師匠様に」

亜梨沙が太鼓持ちのような嫌らしい笑顔で言います。

「そうなんですか」

樹里は爽やかに笑顔全開です。

「洞窟の反対側から穴を掘って後ろから不意打ちにしましょう」

馨が言いました。

「洞窟の向こう側は山だ。穴を掘るには半年ほどかかるぞ」

露津狗が言います。馨案はあっさり却下です。

「強行突破するか？　姉上と私の弓なら大丈夫だ」

鷺基が言います。すると、

「おびき出す方が良い。あの鈴は洞窟では無敵だ」

と観音様が孫左京と現れました。

皆、跪きます。

「あやつの好物を知っておる。それを入口に置けば絶対に出て来る」

観音様はとても悪そうな顔で言いました。

左京達はゾッとしました。

第四百二十三話　観音様の作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

観音様は洞窟の前にたくさんの芋を置きました。

「これは賽太歳（さいたいさい）の大好物なのだ。必ず出て来る」

「匂いを送り込みましょう」

樹里が偽芭蕉扇で扇ぎました。すると芋は全部洞窟の奥へと飛んでしまいます。

しかも、

「何をするー！」

観音様まで飛ばされました。

「お師匠様は、仏様の加護で飛ばされないはずなのにどうして観音様は飛ばされたのですか？」

孫左京は疑問に思いました。

「どうしてでしょう？」

樹里は笑顔全開で言いました。

「あちあち！」

観音様が着物を燃やされて飛び出して来ます。

「あの猪め、主人に向かって何という事を！」

観音様は激怒しました。

「その芭蕉扇で扇いではならん！」

観音様は樹里に言いました。

「はい」

樹里は笑顔全開です。

その頃、賽太歳はビビッていました。

「さっき入って来たのは、観音様だったような……。まずい……」

彼は逃げ支度を始めました。

第三百二十四話　賽太歳逃亡する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

観音様の作戦はやり直しです。

また芋が入口にたくさん置かれます。

「扇いではならんぞ。絶対だ。絶対に扇いではならんからな」

観音様がくどい程念を押します。

「はい」

樹里は笑顔で応じました。

「もうすぐ出て来るぞ」

観音様が入口を覗いた時です。

「えい！」

樹里がさっきより強く芭蕉扇で扇ぎました。

「扇ぐなと言ったろう！」

観音様は洞窟の中へ芋と一緒に飛んで行きました。

「何度も言うのは『扇げ』という意味だと思いました」

樹里が笑顔で言います。

「それは芸人の感覚ですよ、お師匠様」

孫左京が言います。

「そうなんですか」

すると観音様が戻って来ました。

「奴がおらん。逃げたようだ」

「ええ？」

観音様はキッと樹里を睨み、

「扇ぐなと言ったであろう！」

「申し訳ありません」

樹里は笑顔で言います。

「ここから出て来なかったという事は、抜け道があるんだな」

左京が洞窟に飛び込みます。

第四百二十五話　孫左京、追跡する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために旅をしています。

孫左京は賽太歳（さいたいさい）を追いました。

「あいつ、許せない！　豚の一族の名にかけて」

亜梨沙が珍しく燃えています。

「行くぞ、亜梨沙」

「おう！」

左京に言われて、亜梨沙は嬉しそうです。

「あいつ！」

亜梨沙の様子に気づいた蘭が、二人を追います。

「ああ、蘭さん、待って下さい」

馨が追おうとしましたが、

「僕が行くにゃん」

リックが駆け込みます。

「お前様」

遊魔が追いかけました。

「ならば、我らは抜け道の出口を探すぞ」

観音様が言いました。

その頃賽太歳は抜け道を走っていました。

「観音様に捕まったらまた奴隷の日々だ」

彼はどんな仕打ちを受けていたのでしょう？

「何としても逃げ切るぞ」

賽太歳は言いました。

左京と亜梨沙は二股に分かれた所に来ました。

「どっちだ、亜梨沙？」

「こっちが猪臭い」

二人は右に行きました。

しばらくして蘭が来ました。

「こっちか？」

蘭は左に行きました。

第四百二十六話　山の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と亜梨沙は、賽太歳（さいたいさい）を追って洞窟を走っています。

「近いわ！　もうすぐよ」

亜梨沙が言いました。

「え？」

二人が辿り着いたのは、賽太歳の寝床でした。煎餅布団が万年床を形成しています。

「くそ、騙された」

左京は慌てて戻ります。

「ごめん、左京」

亜梨沙が謝ると、

「仕方ねえだろ、臭いはしてたんだからさ」

左京の優しい言葉に亜梨沙は感激しました。

「大好き、左京！」

いきなり抱きつく亜梨沙を振り払う左京です。

「急ぐぞ」

「うん」

二人は二股の所まで戻り、蘭が行った左の道に進みます。

一方、鷺佗と鷺基は薔鍍鬼(ばるきり)吏達と共に上空から抜け道の出口を探しています。

「この山、鉱山じゃないか」

鷺基が言います。

樹里は観音様と共に山道を移動中です。

「この山は昔から人間達が宝石を採るために掘り尽くした山だ」

「そうなんですか」

観音様の話に樹里が頷きます。

第四百二十七話　迷路の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は山道を進んでいます。

「山が青く見えるのは鉱脈のせいなのだ」

観音様のワンポイント教養講座です。

「好色の精ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がりきて〇くすだ！」

観音様、問題発言です。

「その昔、欲に取り憑かれた人間達が山を掘り、その多くが落盤で命を落とした」

「そうなんですか」

樹里は山に向かって手を合わせます。

孫左京と亜梨沙は蘭と合流しました。

「あんたの鼻、役立たずね」

蘭が言います。

「ごめん」

素直に謝る亜梨沙に蘭が驚きます。

「どうしたの？　お腹痛いの？」

「私は幼児か！」

亜梨沙が切れました。

「ツンデレはもう流行らないのよ」

意味不明な発言は健在のようです。

左京と蘭は亜梨沙を白い目で見ます。

「ここから先は行かせないぜ」

そこへ雑魚妖怪達が現れます。

「待ち伏せか」

左京が言います。

「誰が石川ひとみだ！」

妖怪の一匹が切れました。

唖然とする左京達です。

第四百二十八話　坑道の恐怖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は賽太歳（さいたいさい）の手下に囲まれました。

「おらあ！」

弱過ぎる雑魚なので、描写する間もありません。

「酷すぎるう」

雑魚達は泣きながら逃げました。

「二度と現れるな！」

左京が怒鳴りました。その時です。

「我らの眠りを妨げるは誰ぞ？」

どこからともなく声が聞こえます。

「何だ、今の声？」

左京が言います。

「な、何も聞こえなかったわよ」

怖がりの亜梨沙が震えながら否定します。

「どこにいるの？　姿を見せなさい！」

強気の蘭が叫びます。

「よしなさいよ、蘭！」

亜梨沙が慌てます。

すると突然、三人の前にたくさんの鉱山労働者が現れました。

「どちらさん？」

亜梨沙が震えて左京の陰に隠れます。

「我らはこの山で死んだ鉱夫だ。我らの眠りを妨げる者は許さぬ」

「ひいい！」

亜梨沙は失神寸前です。

「うるせえ、てめえら！　幽霊は大人しくあの世に行ってろ！」

左京が怒鳴りました。

第四百二十九話　孫左京、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は無数の鉱夫の霊に取り囲まれました。

「おらあ！」

左京は如意棒で攻撃しますが、相手は幽霊なので当たりません。

「お前らも、我らの仲間になれ」

幽霊の一人が言いました。すると坑道の天井が揺れ、崩れて来ます。

「わわ！」

左京達は崩れる天井を避け、走ります。

「逃がさぬ！」

亜梨沙を担いでいるので、左京は走るのが遅くなっています。

「私を置いて逃げて」

亜梨沙が涙目で言います。

左京はあっさり亜梨沙を下ろして逃げます。

「鬼ー！」

亜梨沙は泣きながら叫びました。

崩れる天井を避け、亜梨沙も走り出します。

「あんたねえ……」

蘭が呆れました。

リックと遊魔も坑道を進んでいます。

「ここは宝の山にゃん」

「お前様、頑張って下さい」

遊魔が言います。リックは坑道を掘り始めます。

すると鉱夫の霊が現れました。

「お前ら、許さぬ」

「にゃん！」

リックは遊魔を抱えて逃げ出しました。

第四百三十話　リック、激走する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは遊魔を抱きかかえ、鉱夫の霊から逃げています。

「にゃーん、追って来ないで欲しいにゃん」

「待てえ！」

それでも霊は追いかけて来ます。

「お前様、この宝石を捨てれば良いのでは？」

遊魔がリックの懐から青い宝石を取り出します。

「それはダメにゃん、町の宝石商で高く売るにゃん」

「はい」

遊魔はリックの言葉を無視して、宝石を捨ててしまいました。

「にゃあん！」

リックは血の涙を流しましたが、霊が迫って来るのでそのまま逃げます。

「怨霊さんはもう追って来ませんよ、お前様」

遊魔が言いました。

「やっぱり、宝石を採ったから怒ったにゃんね」

リックは遊魔を下ろします。

「では、宝石を借りますにゃん、怨霊さん」

リックはまた地面を掘ります。

「いけません！」

遊魔が後ろからリックを蹴ります。

「そのような方便は鳩山さんにお任せしなされ」

「はいにゃん」

リックは落ち込みました。

第四百三十一話　怨霊さん、いらっしゃい編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と亜梨沙と蘭は、崩れる天井をかわしながら走っています。

「あいつら、しつこいな！」

左京が言いました。

「何で追いかけて来るのよ？　もういいでしょ！」

亜梨沙が泣きながら叫びます。

「あ、亜梨沙、そのせいかも」

蘭が亜梨沙のお尻を触ります。

「いやあん」

亜梨沙が悶えます。呆れる蘭です。

「あんたのお尻に、宝石の欠片が付いてるわ。これを追いかけているのよ、きっと」

「なら、早く捨てろ！」

走りながら、左京が叫びます。

「いやあん」

亜梨沙は必死にお尻の宝石の欠片を払いました。

「お、止まったみたい」

蘭が後ろを見て言いました。鉱夫の霊達は、亜梨沙が払い落とした欠片の所で立ち止まっています。

「またのお越しを」

一同が礼をしています。

「誰が鬼面組だ！」

蘭が切れました。

樹里達も、中の騒動を感じていました。

「霊達を導くぞ、樹里」

「はい」

観音様と樹里がお経を唱えます。

第四百三十二話　賽太歳、降参する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里と観音様の読経のお陰で鉱夫の霊達は成仏しました。

「お師匠様、出口を見つけました」

そこへ鷺佗と薔鏤鬼(ばるきり)吏達が来ました。

「よし、そこに行くぞ」

妙に嬉しそうな観音様です。

その頃、賽太歳(さいたいさい)は出口を目指して激走していました。

「何とか逃げ切れたか」

賽太歳はホッとしました。やがて前に出口の光が見えて来ます。

「やったあ、逃げ切ったぞ！」

喜んだのも一瞬でした。目の前に笑顔全開の観音様がいます。

「か、観音様！」

金色の毛が白くなる賽太歳です。

「また仲良く暮らそうぞ、賽太歳」

観音様は賽太歳に跨ると、天に戻って行きました。

「何だか悲しそうでしたね」

馨が呟きました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

そこへ孫左京達がやって来ます。

そして、賽太歳が観音様の所に連れて行かれたのを知り、

「可哀想に。また奴隷生活か」

と手を合わせました。

第四百三十三話　元始天尊の使い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は青い山脈を後にし、更に先へと進みます。

「この山を越えると、道半ばです」

樹里が真面目モードで言います。

「まだ半分なんですか？」

亜梨沙が唖然とします。

その時でした。

「御徒町樹里様とお見受け致します」

と声がしました。

「誰だ！？」

孫左京が怒鳴ります。

「私は元始天尊（げんしてんそん）様の使いの者です」

そこには小さな男の子が立っていました。

「可愛い」

亜梨沙のショタの虫が疼きます。

「元始天尊様って、太上老君様の弟弟子の方ですよね？」

蘭が尋ねました。

「はい。是非、我が主（あるじ）の元にいらして頂きたいのです」

男の子は言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「用があるならそっちから来いと伝えろ、ガキ」

左京が言いました。

「では参りましょうか、お猿さん」

樹里は左京の言葉を完全無視で言います。

「はい、お師匠様」

左京もすぐに前言撤回です。

第四百三十四話　元始天尊の邸へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は元始天尊という太上老君の弟弟子の招きで邸に行く事になりました。

孫左京は樹里をきんと雲に乗せ、飛んでいます。

「しっかり掴まっていて下さいね」

「はい」

エロ左京全開です。樹里が左京の背中にギュッと抱きつきます。

（このまま死んでもいい）

左京は恍惚としました。

鷺佗は蘭を抱えて飛び、鷺基は璃里を抱えて飛びます。

「鷺基、後で話がある」

鷺佗が言います。

「そのあの、姉上……」

狼狽える鷺基です。

亜梨沙は不満そうに馨の背に乗ります。

しかし馨は密かに乗り換えた遊魔が乗ってくれたので嬉しそうです。

「嫉妬は見苦しいにゃん」

リックが亜梨沙の胸を揉みます。

「何すんのよ！」

「お前様！」

亜梨沙と遊魔のダブルラリアートが炸裂します。

露津狗が空を走っています。

「空飛べたの？」

亜梨沙が尋ねます。

「ああ。俯炎驪琉（ふえんりる）様と合体したからな」

鷺津狗が言いました。

第四百三十五話　樹里、元始天尊に会う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙は露津狗が空を飛べると知り、露津狗に乗りました。

「ごめんね、重くて」

亜梨沙が言うと、

「いや」

と露津狗が赤くなります。

やがて樹里達は元始天尊の邸に到着しました。

そこは第六天魔王の四天王がいた崑崙でした。

「騙したな！」

気の早い孫左京が如意棒を出します。

すると案内の男の子が、

「違います。ここは元々は、元始天尊様のお邸だったのです。それを第六天魔王の手の者が奪い取ったのです」

「きゃあ！」

鷺佗と蘭が悲鳴を上げました。

頭の長い老人が二人のお尻を撫でています。

「何してるんだ、ジジイ！」

左京が老人を殴ります。

「お師匠様、お止め下さいませ」

男の子が恥ずかしそうに言いました。

「それじゃあ……」

蘭と鷺佗は踏みつけている老人の正体を知って驚きます。

「儂が元始天尊じゃ」

老人はドヤ顔で言いました。

「太上老君のジジイにそっくりな性格だ」

左京は呆れました。

第四百三十六話　九尾の狐その弐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は兄弟子の太上老君と一緒で、スケベジジイです。

「うるさいわい！」

登場早々、地の文に突っ込む元始天尊です。

「実はな」

真面目な顔で鷺佗のお尻を撫で、鷺基に弓を向けられます。

「待て待て、ほんの挨拶代わりではないか？」

元始天尊は慌てて鷺佗から離れます。

「お師匠様、大概になさいませ」

弟子の男の子も怒り出します。

「九尾の狐を知っておるか？」

「胡瓜のきゅうちゃんなら知ってるにゃん」

以前九尾の狐に酷い目にあったリックが言います。

「その狐の姉弟子だ。名を千年狐狸精（せんねんこりせい）と言う」

「千年凝り性さんですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が眼精疲労だ！」

元始天尊は切れながら遊魔のお尻を触ります。

「遊魔に何するにゃん！」

リックが怒りました。

「お前様」

遊魔が感動しますが、

「はい、高級またたび」

と太上老君と同じ手で引き下がります。

呆れる左京達です。

第四百三十七話　千年狐狸精の企み編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは遊魔にまたたびを取り上げられました。

「返して欲しいにゃん」

「これは私が稼いだまたたびです」

遊魔はそれを胸当ての中にしまいます。

元始天尊が後ろから覗いていました。

「見物料です」

遊魔の裏拳が炸裂し、元始天尊は倒れました。

「太上老君のジイさんより性質が悪いな」

孫左京が言いました。

「あのスケベと一緒にするな」

元始天尊が起き上がって言います。

「目糞鼻糞ね」

亜梨沙が言うと、

「女性がそんな事を言ってはいけない」

露津狗が言いました。亜梨沙は真っ赤になります。

見かねた男の子が代わりに話します。

「千年狐狸精（せんねんこりせい）とは、かつて商（通常は殷で知られる）を混乱させた妖怪です」

「聖戦士ですか？」

樹里が尋ねます。

「ショウ・ザマじゃないです」

男の子は項垂れて言います。

「その妖怪が第六天魔王が退いたのを機に動き出しました」

男の子が言いました。

第四百三十八話　千年狐狸精軍団現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は、元始天尊の依頼で、千年狐狸精（せんねんこりせい）を退治する事になりました。

「という事じゃ」

元始天尊が言いました。でも皆は弟子の男の子の話を聞いています。

元始天尊は項垂れました。

「要するにその狐をぶっ飛ばせばいい訳だな」

孫左京が言います。

「大略するとそうですね」

男の子は苦笑いです。

「どこにいるのだ、狐は？」

鷺佗が尋ねます。

「行かせぬぞ」

声がしました。

「誰だ?」

鷺基が声の主を睨みます。

宮廷の女官のような服装の美人が一人立っています。

「おねいさーん」

見境のないリックが飛びます。

「消えろ」

美人は右の袖から無数の羽を飛ばしてリックを跳ね飛ばしました。

「誰だ!?」

左京が怒鳴ります。美人は、

「我が名は九頭雉鶏精(きゅうとうちけいせい)だ」

と言いました。

「京成電鉄さんですか?」

樹里が尋ねます。

「誰が成田まで三十六分だ!」

美人は切れました。

第四百三十九話　九頭雉鶏精の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）が現れました。

見た目は美人ですが、妖怪です。

「彼女は千年生きたきじの妖怪です」

男の子が言いました。

「子供新聞ですか？」

樹里が尋ねます。

「その記事じゃねえよ、坊主！」

九頭雉鶏精が切れます。

「何でもいいよ、妖怪！」

孫左京が仕掛けます。

「ああ、不用意に近づいては！」

男の子が叫んだ時、左京は全身を羽で刺されていました。

「ぐうう……」

石猿の左京に刺さるとは、相当な羽です。

「おのれ！」

鷺基と鷺佗と薔鏤鬼吏達が矢を射ます。

「無駄だ！」

九頭雉鶏精は羽で矢を跳ねつけてしまいます。

「ならば！」

蘭が竜巻攻撃をしますが、

「温いわ」

九頭雉鶏精は両腕を翼に変えて風を起こし、竜巻を消しました。

「弱過ぎるぞ、お前達。本当に第六天魔王を退けたのか？」

九頭雉鶏精はニヤリとします。

「畜生」

左京は歯軋りしました。

第四百四十話　孫左京の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）というきじの妖怪は強く、孫左京もやられました。

「そんな事ありませんよ、給湯室さん」

樹里が言います。

「誰がＯＬの内緒話だ！」

九頭雉鶏精が切れます。

「お猿さんは強いのです。この世の誰よりも」

樹里のその「妄言」で左京が復活します。

「ぬおお！」

左京は刺さった羽を全部吹き飛ばしました。

「にゃん！」

ようやく羽を抜いて休んでいたリックに全部刺さります。

「そうです、私はこの世で一番強いお猿さんです」

何故か敬礼して樹里に答える左京です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「笑わせる。ならば、かかって来な」

九頭雉鶏精が中指を立てて挑発します。

「おらあ！」

またむやみに突っ込む左京です。

「バカか、お前は。やはり猿だな！」

九頭雉鶏精が無数の羽を飛ばします。

「キジよりはマシだよ！」

左京は如意棒を回転させ、羽を撃退しました。

第四百四十一話　孫左京対九頭雉鶏精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は如意棒で九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）の羽を封じました。

「どうだ、キジ？　お猿さんの方が強いだろう？」

左京が胸を張ります。

「後は犬さんが来れば揃いますね」

樹里が笑顔全開で言います。

「お師匠様、そのボケは以前使いました」

左京が項垂れて言います。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔です。

「惚けた事言いやがって！」

九頭雉鶏精は両腕を翼に変化させます。

「食らえ！」

羽ばたきが強風を起こします。

亜梨沙のスカートが捲れ、蘭の腰蓑が舞い上がり、二人は飛ばされます。

馨と露津狗が目を見張ったまま飛ばされます。

「お師匠様！」

左京は強大化し樹里を守ります。

「おのれ」

鷺佗達は飛翔し難を逃れました。

鷺基はしっかり璃里を助けています。

「後で話がある」

鷺佗に言われ、焦る鷺基です。

「参ったか？」

ドヤ顔の九頭雉鶏精です。

「その程度！」

左京が殴りかかります。

第四百四十二話　猿雉合戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）に攻撃をします。

「単調な戦い方をするな。やはり猿か？」

九頭雉鶏精が言います。

「うるせえ、キジが偉そうに言うな！」

「猿が偉そうに言うな！」

振り下ろされた如意棒を青龍刀で受ける九頭雉鶏精です。

二人の壮絶な立ち回りが始まります。

「おらおら！」

「でやでや！」

あまりに凄まじい戦いのせいで、周囲の地面に亀裂が走ります。

「お師匠様」

鷺佗が樹里を救出します。

「さすが、千年も生きたキジにゃん」

今までどこにいたのか、リックと遊魔が現れます。

「でも、おねいさんなら僕らの大好物にゃん」

遊魔の胸当てからたくさんの子猫が飛び出します。

「おねいさーん！」

子猫達は次々に九頭雉鶏精に飛び掛ります。

「何だ？」

左京は驚いて下がりました。

「やめ、やめ……」

描写する事を憚るような事が行われます。

鷺佗はそれを見てトラウマを感じます。

第四百四十三話　九頭雉鶏精撤退編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）はリックの子猫達の攻撃で身包みを剥がされてしまいました。

「覚えておれ！」

全裸のまま逃亡する九頭雉鶏精を見て、リックは狂喜します。

「すごいにゃん、九頭雉鶏精しゃん！」

「お前様」

遊魔にボコられるリックです。

「ようやった、皆の者」

どこに隠れていたのか、元始天尊と男の子が現れました。

「ジジイ、てめえ、太上老君の弟子の癖に隠れてたのか！」

孫左京が怒ります。

「何を言うか、いざとなったら、儂が出るつもりだったのだ」

元始天尊は言いました。隣で頭に手を当てている男の子です。

一同の白い目に元始天尊はビクッとしました。

「あれは、千年狐狸精（せんねんこりせい）の次の次に強い妖怪だ。千年狐狸精が出て来たら、儂が戦う」

まだ嘘の上塗りをする元始天尊です。左京達は信じていません。

「そうなんですか」

樹里だけは信じているようです。

第四百四十四話　千年狐狸精の隠れ家編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）は、裸のまま姉弟子である千年狐狸精（せんねんこりせい）の邸に行きました。

千年狐狸精の邸は、崑崙から西に行った所にあります。

煌びやかで豪華な建物です。

「はしたないわね、貴女は。どうしたの？」

絶世の美女の姿をした千年狐狸精が尋ねます。九頭雉鶏精は妖気で服を出して着ると事情を説明しました。

「猫又が邪魔をしたの。何故人間の味方をするのかしら、そいつは！？」

千年狐狸精の顔が凶悪になります。

「今度は私が参りますわ、お姉様」

そこにまた別の美女が現れます。

「いえ、私がもう一度！」

九頭雉鶏精が大声で言います。千年狐狸精はフッと笑い、

「わかったわ。今度こそ、仕留めなさいよ」

「はい、お姉様」

九頭雉鶏精は再び樹里達の所へ向かいました。

「良いのですか、お姉様？」

もう一人の美女が言います。

「いいのよ」

千年狐狸精は言いました。

第四百四十五話　逆襲の九頭雉鶏精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

見事に九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）を追い払ったリックですが、遊魔に殴られボコボコです。

「許してにゃん」

リックは泣きながら言います。

「簡単に許しちゃダメよ、遊魔」

亜梨沙が助言します。

「む？」

元始天尊が西の空を見上げます。

「いかん、持病の癪が」

急に苦しみ出し、どこかに行ってしまう元始天尊です。

「お師匠様、丸わかり過ぎです」

項垂れる男の子です。

そこへ現れる九頭雉鶏精です。

「さっきはよくもやってくれたね、猫！」

九頭雉鶏精に睨まれ、喜ぶリックです。

「僕に会いに来たにゃんね？」

また遊魔にボコられるリックです。

「お前様！」

それを見て呆れる九頭雉鶏精です。

「今度こそぶちのめしてやるぞ、キジ！」

孫左京が進み出ます。

「私が用があるのはその猫又だよ。同じ長寿妖怪でありながら、何故人間の味方をするのかとお姉様がお怒りなのだ」

九頭雉鶏精は言いました。

第四百四十六話　リック善戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）はリックに恨みがあるようです。

「あいつの気持ち、何となくわかる」

鷺侘が言います。それを聞いて、露津狗が鼻血を出しかけます。

「どういう事だ、姉上？」

事情を知らない鷺基が尋ねます。

「言えぬ」

真っ赤になって顔を背ける鷺侘です。薔薇鬼（ばらきり）吏達も赤くなっています。

皆、リックにトラウマを与えられたのです。

「私と勝負しろ、猫又！」

九頭雉鶏精が言います。リックは嬉しそうに、

「いつでもいいにゃん。早く服を脱ぐにゃんよ」

「アホか！」

蘭が怒ります。亜梨沙は白い目で見ています。

「お前様！」

遊魔がボコろうとした時、リックが真面目モードになります。

「僕は人間の味方なんかしていないよ、お嬢さん」

その流し目にドキッとしてしまう九頭雉鶏精です。

「僕は可愛い女性の味方なんだよ」

次の瞬間、九頭雉鶏精の肩を抱いているリックです。

第四百四十七話　九頭雉鶏精陥落？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは色仕掛けで九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）を落とすつもりのようです。

「ね、お嬢さん」

フッと耳に吐息をかけるリックを見て、

「ああん」

と一人悶える亜梨沙です。孫左京と蘭と露津狗が唖然とします。

九頭雉鶏精も膝がガクガクしていて、落ちてしまいそうです。

「さあ、お嬢さん」

リックの右手がいけない所に伸びます。

「ダメです、見ては！」

左京が慌てて樹里を目隠しします。

（ああ、お師匠様のお顔、柔らかい）

変態左京です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ああん、そこはダメェ」

九頭雉鶏精は顔を火照らせてリックを見つめます。

「お嬢さん」

リックの唇が九頭雉鶏精の口に近づいた時です。

「お前様！」

遊魔がいきなりリックを蹴飛ばしました。

「にゃーん！」

リックは遥か彼方に飛んで行きました。

「危なかった。助かったよ」

九頭雉鶏精が遊魔を見てニヤリとしました。

第四百四十八話　九頭雉鶏精の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）はリックのエロ攻撃で陥落寸前でしたが、リックの妻である遊魔の嫉妬に救われました。

「お礼をしなくちゃね」

九頭雉鶏精は腕を翼に変え、羽ばたきます。

「いやん」

遊魔も遥か彼方に飛ばされてしまいました。

「これであの下品な猫共はいなくなった」

九頭雉鶏精はニヤリとして樹里を見ます。

「お前も飛びな！」

九頭雉鶏精が強風を巻き起こします。

「きゃ！」

樹里の帽子が飛びます。ついでに裾が捲れます。

「おお！」

孫左京と龍の馨が目を見開きます。

「お師匠様」

蘭は役に立たないスケベ男共を一睨みし、樹里を庇って離れます。

「わ！」

しかし蘭は飛ばされ、亜梨沙も巻き添えで飛びます。

「何で私に掴まるのよお！」

絶叫しながら飛ぶ亜梨沙です。

「さすが、風使いだ。この程度では効かぬか」

九頭雉鶏精が樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第四百四十九話　樹里対九頭雉鶏精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精の羽ばたきで遊魔と蘭と亜梨沙が飛ばされました。

「おのれ」

鷺侘と鷺基は素早く空へ飛びます。

「ぐお！」

露津狗が牙を立てて九頭雉鶏精に攻撃です。

「無駄よ」

九頭雉鶏精は翼を更に大きくし露津狗を往復ビンタです。

「ぐえ！」

露津狗は跳ね飛ばされ地面に叩きつけられます。

「そう言えば、あのジジイとガキ、また隠れたのか」

孫左京が歯軋りします。役に立たない仙人です。

「行くぞ、馨！」

「はい！」

左京と馨が九頭雉鶏精に向かいます。

「今だ、鷺基！」

鷺佗と鷺基が弓を射ます。

「遅い！」

九頭雉鶏精は矢を風で飛ばし、左京の如意棒を片羽で受け止め、馨の水攻撃を飛翔でかわします。

「この九頭雉鶏精を舐めるでないわ！」

すると樹里が進み出ます。

「ところで美容形成さん」

「誰がビューティコロシアムだ！」

九頭雉鶏精は切れました。

「気に入らないね、自分が可愛いと思ってる女は」

第四百五十話　九頭雉鶏精の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）は樹里を睨みます。

「ちょっと可愛いと思って、図に乗るんじゃないよ！」

柄が悪い女のようです。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「違うぞ、キジ」

孫左京が真顔で割り込みます。

「何だ、猿？」

まるで桃太郎の一節のようです。

「お師匠様はちょっと可愛いんじゃねえ。凄く可愛いんだ」

唖然とする九頭雉鶏精と鷺佗と鷺基です。

「ええい、鬱陶しい！　皆、吹き飛べ！」

九頭雉鶏精が翼を滅茶苦茶に動かします。

「わわ！」

馨と左京が飛ばされます。

「く！」

露津狗は地面を転がります。

「姉上」

樹里が璃里を庇います。

「くう！」

鷺佗と鷺基と薔鏤鬼吏達も風に煽られます。

「えい！」

樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を掲げます。

「げ」

途端に風が逆流し、九頭雉鶏精に向かいます。

「ひええ！」

九頭雉鶏精はそのまま飛ばされてしまいました。

第四百五十一話　第二の女編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）は、ボロボロになって姉弟子の千年狐狸精（せんねんこりせい）の邸に逃げました。

「またやられたのかい、だらしがないね」

千年狐狸精が言います。九頭雉鶏精は震え出しました。

「あんたへのお仕置きは後でする」

千年狐狸精はもう一人の美女を見ます。

「私の出番ね、お姉様」

「お行き、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）。坊主を叩きのめしてあげなさい」

「はい」

美女はフッと消えました。

リックと遊魔も戻りました。

「てめえ！」

孫左京が隠れていた元始天尊を引きずり出します。

「儂は千年狐狸精が現れたら戦うと……」

「あ、千年狐狸精だ」

亜梨沙が言います。途端に逃げ出す元始天尊を殴る左京です。

「どっちにしても逃げるんじゃねえか、スケベジジイ！」

そこへ第二の美女が現れました。

「私は玉石琵琶精。お前達を始末に来た」

美女は胸を張って言いました。

第四百五十二話　玉石琵琶精対孫左京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）は樹里を睨みます。

「我が妹弟子の九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）を可愛がってくれたようだね。礼はたっぷりさせてもらう」

「お気持ちだけで結構です」

樹里が笑顔全開で応じます。

「ふざけるな！」

玉石琵琶精は激怒しました。

「てめえの相手は俺がするぜ、妖怪」

孫左京が前に出ます。

「おねいさんの相手は僕がするにゃん」

リックが言いますが、

「お前様！」

と遊魔に踵落としを決められて倒れます。

「誰でもいい。束になってかかって来な」

玉石琵琶精が挑発します。

「俺が相手だって言ってるだろう！」

左京が如意棒で殴りかかります。

「はい！」

玉石琵琶精は槍を出し如意棒を受け止めました。

「おらおら！」

「でやあ！」

二人の戦いが始まります。

「お猿さん、助けて」

樹里の声がします。

左京は驚いて振り返ります。

「隙あり！」

槍が左京の右肩を貫きました。

第四百五十三話　孫左京危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の槍で右肩を貫かれました。

「左京！」

亜梨沙と蘭が絶叫します。

「このくらい！」

左京は痛みを堪えて反撃です。

「お猿さん、助けて」

また樹里の声が聞こえます。

「え？」

思わず樹里を見てしまう左京です。

「ぐう！」

今度は槍が左京の原を貫きます。

「あの槍、もしや……」

鷺佗が眉をひそめます。

「蜻蛉切ですか？」

樹里が尋ねます。

「違います」

鷺佗は項垂れました。

「さっきから左京、何してんのよ。隙だらけだわ」

亜梨沙が左京の戦い方に疑問を呈します。

「そうね」

蘭は左京と玉石琵琶精を見比べながら呟きました。

「お猿さん、助けて」

また樹里の声がし、悲しいサガで振り向いてしまう左京です。

「ぐは！」

今度は右胸を槍が貫きます。

「もしや、これは！」

蘭が何かに気づきます。

「そこ！」

蘭の竜巻が宙を切り、

「ぎえっ！」

と叫び声が上がりました。

第四百五十四話　玉石琵琶精対蘭編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭は何者かが宙を飛んでいるのに気づき、竜巻で仕留めました。

「むぎゅう」

そいつは姿を現し、地面に落ちました。

どうやら、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の手下の虫の妖怪です。

「おのれ！」

玉石琵琶精は蘭を睨みました。

「左京、そいつに惑わされていたのよ」

「畜生、卑怯者め！」

孫左京は玉石琵琶精を睨みます。

「お猿さん、頑張って下さい」

樹里が言いました。

「すみません、頑張れないです……」

左京は倒れてしまいます。

「左京！」

亜梨沙と馨が駆け寄ります。

「猿はどうでもいい。私の可愛い手下をよくも殺してくれたね。許さないよ、河童！」

玉石琵琶精は蘭を指差しました。

「だったらどうするのさ？」

蘭が挑発します。

「こうするのさ！」

玉石琵琶精は無数の絃（げん）を飛ばしました。

「く！」

蘭はそれに巻きつかれ、身動きできません。

「蘭さん！」

馨が動きますが絃に縛られました。

第四百五十五話　最強の槍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭と馨は、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の放った絃（げん）に巻きつかれ、動けません。

「さあ、この槍で突いてやるよ！」

玉石琵琶精は狂喜して叫びます。

「鷺基、あの槍は……」

鷺佗が眉間に皺を寄せます。

「日の本一の槍ですか？」

樹里が尋ねます。

「違います、お師匠様」

鷺基が項垂れます。

「知ってるよ、それ。軍具爾琉（ぐんぐにる）だろう？」

蘭が絃を握りながら答えます。

「ほう。さすが、元近衛大将だな。その通り、これは最強の槍、軍具爾琉だ」

玉石琵琶精が言いました。

「やはり！　鷺基！」

鷺佗は鷺基と共に玉石琵琶精に仕掛けます。

「我が神で在らせられる欧殿（おうでん）様のお持ち物を返せ！」

玉石琵琶精はニヤリとします。

「持っている者が持ち主だよ」

「おのれ！」

鷺佗と鷺基が矢を射掛けます。

「温いわ！」

玉石琵琶精は槍を回転させて矢を弾き、

「そろそろ終わりにしようか」

第四百五十六話　軍具爾琉の威力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）は不敵な笑みを浮かべます。

「お前達、欧殿（おうでん）の配下か？　狼に食われた情けない神だったな」

「おのれ、欧殿様を愚弄するか！？」

鷺基が激怒します。鷺侘は複雑な表情で露津狗を見ます。

「ならばお前も俺が食ってやるよ！」

露津狗は狼の王である俯炎驪琉（ふえんりる）の力を放出します。

「そうか、お前、狼一族なのか」

玉石琵琶精はニヤリとします。

「その前に僕がおねいさんをいただくにゃん」

リックが復活し、遊魔の回し蹴りを掻い潜って玉石琵琶精に迫ります。

「蜜柑のおゆうさん！」

玉石琵琶精が槍を掲げて言います。

「え？」

リックは金縛りに遭ったように止まります。

「蜜柑のおゆうさん、蜜柑のおゆうさん」

玉石琵琶精が愉快そうに連呼します。

「ひい！　やめてほしいにゃん！　それはきつい言葉にゃん！」

リックは耳を塞いで蹲(うずくま)りました。

第四百五十七話　玉石琵琶精の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の謎の言葉で動けなくなりました。

「おのれ！」

露津狗が牙を剥いて玉石琵琶精に飛びかかります。

「鷺侘、鷺侘、愛しい人」

玉石琵琶精がニヤリとして言いました。

「うう！」

露津狗はその言葉に赤面し、動けなくなってしまいます。

「露津狗……」

鷺侘は露津狗の心を知り、動揺します。

「そのようなまやかし、通用しないぞ！」

鷺基が叫び、玉石琵琶精に弓を引きます。

「姉さん、姉さん、僕大好きだよ、だから叱らないで」

玉石琵琶精は更に悪い顔で言いました。

「ぐうう」

鷺基も動けなくなりました。

「よくも左京を！」

亜梨沙が豚に戻り、ボディアタックです。

「狼は生きろ、豚は死ね」

玉石琵琶精が大昔の映画の名台詞を言います。

「きゃん！」

亜梨沙はそのままドスンと地面に落ちてしまいます。

「何だ、あの力は……？」

孫左京は傷を治しながら呟きました。

第四百五十八話　孫左京の復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はドヤ顔の玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）を睨みながら、傷を治癒しています。

「お猿さん」

樹里が危険を省みず、左京に近づきます。

「坊主！」

玉石琵琶精が怒り、軍具爾琉（ぐんぐにる）を掲げました。

「え？」

しかし、何も起こりません。

「どういう事だ、こいつの弱点は……？」

玉石琵琶精が焦ります。

「その槍の秘密は、相手の弱点を見抜く事。そうだな？」

玉石琵琶精の絃を解こうとしながら、蘭が言います。

「それがわかったところで、どうにもなるまい？」

玉石琵琶精はニヤリとしました。

「お猿さん、頑張って下さい」

樹里が左京の傷に触れると、たちまち傷口が塞がりました。

驚愕する玉石琵琶精です。

「何だ、お前は！？」

玉石琵琶精の暴言に左京が応じます。

「世界一可愛いお師匠様だよ！」

左京のバカとエロも治療して欲しいです。

「行くぞ、妖怪！」

左京は如意棒を振るいました。

第四百五十九話　孫左京の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）を睨みます。

「お師匠様にそんな槍向けるとは、ふざけた女だ。ブッ倒す！」

玉石琵琶精は左京を嘲笑します。

「お前に私を倒せるものか」

玉石琵琶精は槍を掲げます。

「左京、気をつけて！」

蘭と亜梨沙が見事なハーモニーで叫びます。

「お師匠様、大好きです。結婚して下さい」

玉石琵琶精がドヤ顔で言いました。

「悪いか！」

左京は怯みません。

「何ィ！？」

玉石琵琶精は仰天しました。

「弱点を突いたのに何故!?」

彼女は左京の精神構造が理解できません。

「猿は単細胞だから効かないにゃん」

リックがボソッと言います。

「おらあ!」

左京の如意棒が振り下ろされました。

「くっ!」

玉石琵琶精は蘭と馨を縛っていた紘を解き、如意棒を止めました。

「お猿さん、頑張って下さい」

樹里が言いました。

「はい!」

左京は如意棒を振り回して、紘を引き千切りました。

第四百六十話　鷺佗と鷺基、無念編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の弦を引き千切り、反転攻勢です。

「貴様、何故怯まぬ？」

玉石琵琶精は左京が軍具爾（ぐんぐにる）琉の力を受けつけないので狼狽えています。

「だから、単細胞には効かないにゃんよ」

リックがまたボソッと言います。

「黙れ、猫！」

左京が聞きつけて怒鳴りました。

「この孫左京様にはそんなヘナチョコな槍、効かねえよ」

それを聞いて色めき立つ鷺佗と鷺基を止める蘭と馨です。

玉石琵琶精はフッと笑い、

「まあいい。こんな槍の力を借りずとも私は強いのだからな」

鷺基と鷺佗は玉石琵琶精に飛翔していました。

「欧殿（おうでん）様のお持ち物を愚弄するのは許さぬ！」

玉石琵琶精は軍具爾琉を掲げ、

「姉さん、愛してる、私もよ、鷺基」

途端に飛翔する事ができなくなり、鷺基と鷺佗は地面に落下します。

「ぐう……」

二人は悔しそうに玉石琵琶精を睨みます。

第四百六十一話　孫左京の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）と対峙します。

「覚悟しろ、妖怪」

左京は如意棒を振り回します。

「この槍の力は相手の弱点を見抜くだけではない。その固さにある」

玉石琵琶精は目にも留まらぬ速さで突きを繰り出します。

「おおっと！」

左京はそれを如意棒で受けたりかわしたりしながら間合いを詰めます。

「そんな攻撃当たるかよ！」

左京が踏み込んだ時です。

槍が数百に分かれ左京に襲いかかります。

「うお！」

左京は思わず仰け反ってそれをかわしました。

「次はかわせぬぞ！」

玉石琵琶精は更に槍で突きます。

「わわわ！」

クールファイブのように叫びながらかわす左京です。

「お前を串刺しにして次は坊主だ！」

玉石琵琶精が余計な一言を言います。

「何だと！」

左京は槍の突きをものともせず前に出ます。

「お師匠様に指一本触れてみろ、てめえをぶっ飛ばす！」

左京は雄叫びを上げました。

第四百六十二話　玉石琵琶精逃亡編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は激怒し槍の攻撃を食らいながらも突進します。

「左京、死んじゃうよ！」

亜梨沙が血だらけの左京を見て叫びます。

蘭も鷺侘も璃里も馨も唖然としています。

遊魔はボーとしています。

「何を考えているのだ、猿は？」

露津狗が呟きました。

「何も考えてないにゃん」

リックが言いました。鷺基が呆れます。

「お猿さん！」

左京の出血の凄さに樹里が叫びます。

「死んではダメです、お猿さん！」

樹里が叫びました。

「俺は死にませんよ、お師匠様！」

左京は遂に槍の動きを見切り、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）に如意棒を振り下ろしました。

「うごあ！」

無防備だった玉石琵琶精はそれをまともに食らい、倒れました。

「止めだ！」

左京が如意棒を振り上げます。

「ぬう！」

一瞬の差で玉石琵琶精は消えました。

「くそ！」

左京は如意棒で地面を叩き、倒れました。

「お猿さん！」

樹里が駆け寄りました。

第四百六十三話　孫左京、夢が叶う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）を撃退しましたが、力尽きて倒れてしまいました。

「お猿さん、死んではいけません」

樹里が左京を抱き起こします。

「お師匠様……」

左京はそれだけ言うと、気を失いました。

「お猿さん」

樹里は左京の頭を膝の上に載せました。

左京が夢にまで見た樹里の膝枕です。

「お師匠様、袈裟に血が……」

蘭が言いました。しかし樹里は、

「お猿さんが命を賭けて守ってくれたのです。袈裟など替えれば良いのです」

とまともバージョンを発動します。

「お猿さん」

樹里が左京の傷口を擦ると、嘘のように治ります。

「う……」

しばらくして左京が目を開けます。

「気がついた？」

亜梨沙達が顔を覗かせます。

「え？」

左京は目の前に樹里の顔があるので驚きます。

「お師匠様！」

樹里は笑顔全開で、

「ありがとう、お猿さん」

左京は樹里の膝枕に気づき、盛大に鼻血を噴きました。

第四百六十四話　元始天尊の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里のお陰で傷は治りましたが、膝枕のせいで鼻血が止まりません。

「お師匠様、嬉しいのですが、このままでは……」

左京はそう言って樹里の膝枕から起き上がりました。

貧血で倒れそうです。

「私の膝枕は嫌ですか？」

樹里が悲しそうに言うので、左京は慌てます。

「いえ、決してそのような……」

そう言いながらも鼻血を出す左京です。

「うむ、儂の出番はなかったようだな」

いつの間にか元始天尊が戻って来ています。

「あんたねえ！」

亜梨沙が激怒しました。

「次は千年狐狸精（せんねんこりせい）が来る。その時こそ儂の出番じゃ」

元始天尊はまたホラを吹きます。

「あ、千年狐狸精だ！」

亜梨沙が言うと元始天尊は逃げ出そうとしました。

「お師匠様、大概にして下さいませ」

弟子の男の子が元始天尊の袖を掴みます。

「そうじゃ、話があったのだ」

元始天尊のあまりの白々しさに一同は呆れます。

第四百六十五話　第三の男編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は皆を集めて話をしました。

「儂と太上老君の弟弟子に霊宝天尊（れいほうてんそん）という強い男がおる。そやつを呼んだのでもう安心じゃ」

元始天尊は自分の手柄のようにドヤ顔です。

孫左京達は呆れています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「では儂は孫のお守りがあるので、これで失礼する」

言うが早いか、元始天尊は雲に乗って逃げました。

「お師匠様！」

男の子の弟子が樹里達に頭を下げながら、元始天尊を追いかけました。

「何なんだ、あのジジイは？」

そこへ別の導師らしき老人が雲に乗って現れます。

「おーう、ここか、ここか」

顔が赤いのは酒を飲んでいるせいのようです。

「ホントじゃ、めんこい女子がいるのお」

亜梨沙が近づき、

「もしかして、霊宝天尊様？」

「正解！　賞品は酒じゃ」

霊宝天尊は亜梨沙に酒樽を渡しました。

「大丈夫なのか？」

蘭と鷺佗は顔を見合わせます。

第四百六十六話　妖怪の作戦会議編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）に続き、玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）まで撃退された千年狐狸精（せんねんこりせい）は、一計を案じました。

「闇雲に戦いを挑んではダメだ。作戦を練るぞ」

九頭雉鶏精と玉石琵琶精が冷たい視線を向けています。

「何だ？」

千年狐狸精はその視線に気づき、ムッとします。

「いえ、別に」

二人の妹弟子は姉弟子が怒ると怖いのはわかっているので何も言いません。

「次はお前達二人で同時に攻撃しろ。そうすれば坊主の一人くらい造作もない」

また冷たい視線を浴びせられる千年狐狸精です。

「何か言いたい事があるならはっきり申せ！」

千年狐狸精は切れました。

「いえ、別に」

二人は何も言わず、

「行って参ります」

と飛び立ちました。

「使えん連中だ」

千年狐狸精は溜息を吐きました。

「千年狐狸精よ」

声がします。

「はは！」

千年狐狸精はビクッとして跪きました。

第四百六十七話　霊宝天尊の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は、自分の代わりに弟弟子である霊宝天尊（れいほうてんそん）を呼びました。

霊宝天尊はどう見ても、只の酔っ払いジジイです。

「儂が来たからにはもう安心じゃ。心配するな。ヒック」

すでに出来上がっているような状態です。

「ジジイ、本当に強いのか？」

孫左京が尋ねます。

「強いぞ。儂は酔えば酔う程強くなるのじゃ」

霊宝天尊が言います。

「どこかで聞いた事ある台詞ね」

亜梨沙が蘭に囁きます。

「儂が来たからには、千年狐狸精（せんねんこりせい）などたちどころに退治するぞ」

酒臭い息を吐き散らして霊宝天尊は言います。

「あ、千年狐狸精だ！」

亜梨沙が言います。

「かかって来い！」

霊宝天尊は身構えて言いました。

「本当のようだな」

鷺佗と鷺基は頷きます。

「さっきはよくもやったわね」

そこへ九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）と玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）が現れました。

第四百六十八話　それぞれの思いぶつかる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊の弟弟子である霊宝天尊は酔っ払いですが強いようです。

また現れた九頭雉鶏精と玉石琵琶精はビクッとしました。

「酒臭！　何このジジイは？」

只嫌がられているだけのようです。

「おう、まためんこい姉ちゃんが来たのう。さあ、酒でも飲め」

霊宝天尊は酒樽を二人に渡します。

「うわわ！」

思わず受け取ってしまい、よろける九頭雉鶏精と玉石琵琶精です。

「さあ、ググッと空けろ」

霊宝天尊は飲酒を強要するパワハラ上司のようです。

「我らは酒を飲みに来たのではないわ！」

九頭雉鶏精がまず切れます。

「我らは坊主を始末しに来たのだ。酒など飲めるか！」

玉石琵琶精も切れました。

「何だと化け物！　可愛いお師匠様には指一本触れさせねえぞ！」

孫左京が進み出ました。

「何が可愛いお師匠様だ。我らの姉上には敵わぬわ」

九頭雉鶏精が言いました。

第四百六十九話　霊宝天尊の真の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京がいきり立っていると、霊宝天尊が、

「ここは儂に任せよ、猿。お主は狐退治の時力を出せ」

「何でだよ！」

樹里を愚弄された左京は納得がいきません。

「まあ、見ておれ」

霊宝天尊はどこからだしたのか、大きな酒樽を抱え、中の酒を飲み干します。

「うえ」

見ていた亜梨沙が酔っ払いそうです。

「このジジイ、ふざけおって！　そんな状態で我らと戦うつもりか？」

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）が嘲笑います。

「減らず口もそこまでじゃ、鶏（にわとり）」

霊宝天尊の目が鋭くなります。

「私はキジだ！　その呼び方、許さぬ！」

九頭雉鶏精は激怒し、翼を広げます。

「は！」

九頭雉鶏精が羽ばたく前に霊宝天尊はその懐に飛び込んでいました。

「速い」

蘭と鷺佗が目を見張ります。

「てい！」

霊宝天尊の掌底（しょうてい）が九頭雉鶏精の鳩尾に炸裂しました。

「ぐべ！」

九頭雉鶏精は吹き飛ばされます。

第四百七十話　元始天尊編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

三姉妹妖怪の長姉である千年狐狸精（せんねんこりせい）は一人邸で寛いでいます。

「そろそろ現れる頃だと思ったよ、老いぼれ」

彼女は爪を磨きながら表を見て言います。

邸の庭には、元始天尊とその弟子の男の子が立っていました。

「ほお、この儂が来るのを読んでいたというのか？」

元始天尊は真顔です。

「お前の作戦に引っかかってやったのさ。妹達が繰り出せば、お前がここに現れる。簡単な推理だよ」

千年狐狸精はニヤリとして元始天尊を見ます。

「なるほどな。伊達に長く生きていないな」

元始天尊は真顔のままです。

「いいのかい、たった一人で？　私は強いよ」

千年狐狸精は庭に出て来て言い放ちます。

「儂も強いぞ、狐狸庵先生」

元始天尊がボケます。

「誰が遠藤周作だ！」

千年狐狸精は切れました。

「儂は時間稼ぎよ。本当に強い奴らにはお前の黒幕と戦ってもらうつもりだ」

元始天尊は身構えます。

第四百七十一話　元始天尊対千年狐狸精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は右手を弟子の男の子の方に出します。

「ジジイ、お前、そういう趣味か？」

千年狐狸精（せんねんこりせい）が気色悪そうに言います。

「バカめ、儂が好きなのは女の子じゃ！」

元始天尊が切れますが、男の子は項垂れています。

「変化（へんげ）じゃ」

元始天尊が言うと男の子が刀に変化し、元始天尊の手に飛びました。

「それがお前の武器か？　ならば私も武器を出そうかね」

千年狐狸精はニヤリとし、右手に鉄扇を出します。

「これは幾千幾万もの仙人の血を吸うた扇。お前の血も吸わせよう」

「間寛平か？」

元始天尊がボケます。

「誰がアースマラソンだ！」

千年狐狸精は切れました。

二人は睨み合います。

「よう見ると、お前も美形よのう」

元始天尊が言います。

「私はジジイと愛で合う趣味はないぞ」

「お前もババアであろうが！」

元始天尊が刀で斬りつけると千年狐狸精はそれを鉄扇で受けました。

第四百七十二話　霊宝天尊対九頭雉鶏精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）は、滅り込んだ地面から飛び出し、霊宝天尊を睨みます。

「この包〇ヤロウが！」

品のない暴言なので伏字にします。

蘭、鷺侘、そして玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）までもが赤面します。

亜梨沙はニヤニヤしています。璃里はキョトンとしています。

「見たのか、儂のを？」

霊宝天尊が真顔で尋ねたので、九頭雉鶏精も真っ赤になって、

「見るか、そんな物！」

と切れました。

「そうなんですか」

樹里は意味もわからずに笑顔全開です。

「お師匠様……」

孫左京が項垂れます。

「殺す！」

九頭雉鶏精は翼を広げ、空へと舞い上がります。

「できるかな？」

霊宝天尊は不敵に笑いました。

「誰がのっぽさんだ！」

九頭雉鶏精はまた切れました。

「死ねえ！」

九頭雉鶏精は錐揉みながら霊宝天目がけて急降下です。

「はあ！」

霊宝天尊が気合を放つと、九頭雉鶏精が消し飛びました。

第四百七十三話　三姉妹の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）が消滅すると彼女の魂魄が飛び去ります。

「ぬ？」

霊宝天尊はそれに気づき、

「何と、そういう事か！」

と歯軋りしました。

玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）も唖然とします。

「まさか姉様……」

玉石琵琶精は震え出しました。

「哀れよのう。姉と慕っていたはずの狐に騙されておったのだからな」

霊宝天尊が言いました。

「どういう事ですか？」

蘭が尋ねます。

「狐はキジと琵琶の二人を儂らに退治させ、その魂魄を我が身に宿すつもりじゃ」

「て事は？」

孫左京が怒りに震えます。

「二人は狐の捨て駒じゃ」

霊宝天尊も怒りを露にしました。

「こうしちゃおれんな」

霊宝天尊は左京を見て、

「わしと一緒に来い。元始天尊が危うい」

と言いました。

「はあ？」

左京達には意味がわかりません。

「私も一緒に行かせてくれ。もうお前達の敵ではないから」

玉石琵琶精が言いました。

第四百七十四話　元始天尊の苦戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は、今まで三味線を弾いていたのかというくらい強いです。

「誰がかしまし娘だ！」

元始天尊は誰にともなく切れます。

「く！」

押され気味の千年狐狸精（せんねんこりせい）が歯軋りします。

「おのれジジイ、弱いフリをしていたな？」

「当たり前じゃ。儂はお前とはここの出来が違うでな」

元始天尊は自分の長い頭を指差します。

その時でした。

「む？」

空から九頭雉鶏精（きゅうとうちけいせい）の魂魄が飛んで来て、千年狐狸精の身体に宿りました。

「おお、もうやられたのかい」

千年狐狸精はニヤリとします。

「何と！」

元始天尊はギクッとしました。

千年狐狸精の身体が輝き、レベルアップしたのです。

「ふはは、ジジイ、形勢逆転だな！」

千年狐狸精は高笑いをし、鉄扇を振りかざします。

「お礼をしなくちゃね！」

「ぐほ！」

電光石火の踏み込みで千年狐狸精は元始天尊の喉を鉄扇で突きました。

第四百七十五話　玉石琵琶精の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）は、姉弟子である千年狐狸精（せんねんこりせい）の策略に怒りました。

「姉様を信じてこれまでついて来たのにこの仕打ち……」

霊宝天尊は哀れんだ目で玉石琵琶精を見ます。

「お主を信じよう。儂と共に来い」

玉石琵琶精は嬉しそうに頷きます。

「キジちゃんの仇、討たせて下さい、霊宝天尊様」

さっきまで憎み合っていた敵ですが、味方になればもうそんな蟠（わだかま）りは捨てるのが孫左京達です。

「信用できない」

亜梨沙が言いました。そうでもない者がいるようです。

「あんたねえ」

蘭と鷺佗が呆れます。

「亜梨沙殿、貴女の気持ちもわかるが今はその私情は捨ててくれ」

露津狗が言いました。亜梨沙は赤面します。

「はい」

二つ返事で応じる亜梨沙を冷たい目で見る一同です。

「皆で参りましょう」

樹里が笑顔全開で言います。

「そうじゃな」

霊宝天尊が同意しました。

第四百七十六話　元始天尊危機一髪編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）と戦っている元始天尊は次第に息が上がって来ています。

「もう限界じゃないのかえ？」

嬉しそうに言う千年狐狸精です。

「うるさい！　まだこれからじゃ！」

元始天尊は、先程突かれた喉を摩りながら言い返します。

「ならば、もう少し楽しもうかね！」

千年狐狸精が素早く踏み込み、元始天尊の鳩尾（みぞおち）を鉄扇で突きます。

「させるか！」

刀に変化した男の子がア○ロ並みの反応でそれを受け止めます。

「やるねえ、坊や。そういうの好きだよ」

千年狐狸精は刀に色目を使います。

「幼子（おさなご）に妙な目を向けるな、ババア！」

元始天尊が怒ります。

「五月蝿いよ、ジジイ！」

千年狐狸精の鉄扇が元始天尊の頭を直撃しました。

「ぐはあ！」

額から血を噴き出し、元始天尊は倒れました。

「止めだよ！」

千年狐狸精が言った時、

「そうはいかんぞ」

霊宝天尊が現れました。

第四百七十七話　玉石琵琶精の悲しみ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

元始天尊は危ないところを霊宝天尊に救われました。

「大事ないか、エロ兄？」

赤い顔をして霊宝天尊が言います。

「何じゃと！」

額から血を流したままで元始天尊は起き上がりました。

男の子は人間の姿に戻り元始天尊を支えます。

「酒臭いジジイか？　長兄はどうした？」

千年狐狸精が尋ねました。

「太上老君が来るまでもない。お前如き、儂が退治てくれる」

霊宝天尊がゲップをしながら言います。

「臭い」

千年狐狸精は鼻を摘みました。

「姉様」

玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）は意を決して口を開きます。

「文句でもあるのかい？」

千年狐狸精が凄むと玉石琵琶精はたじろぎます。

「てめえの相手はこの俺だ！」

場の空気を一切無視の孫左京が割り込みます。

「キジちゃんへのあの仕打ち、ご説明下さい」

玉石琵琶精が言いました。すると千年狐狸精は、

「あいつはヘマをした。そのお仕置きさ」

と言いました。

第四百七十八話　玉石琵琶精の最期編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）のあまりに冷たい言葉に玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）は涙を流します。

「私達を騙していたのですね？　私達は本当の姉妹と一緒だと仰ったのは嘘だったのですね？」

玉石琵琶精のの抗議にも千年狐狸精は怯みません。

「嘘じゃないよ。私達は本当の姉妹と一緒さ。だから妹は姉のために命を捧げるんだよ！」

千年狐狸精の顔が凶悪になります。

「う……」

玉石琵琶精は千年狐狸精の力で操られました。

「はあ！」

玉石琵琶精の攻撃に驚く孫左京です。

「てめえ！」

反撃に出ようとしたところを、

「いけません、お猿さん」

樹里が止めます。

「私が殺したんじゃあんたの魂魄は私に同化しないんだ。自分で死にな」

千年狐狸精に言葉で玉石琵琶精は自分の胸を右手で貫きました。

「ぐうう！」

玉石琵琶精は消滅し、魂魄が千年狐狸精に吸収されました。

更に強くなった千年狐狸精です。

第四百七十九話　千年狐狸精の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）は遂に玉石琵琶精（ぎょくせきびわせい）の魂魄も吸収しました。

「姉と慕っていた者達を騙し、その上魂魄を食うとは許せぬ」

霊宝天尊が激怒しますが、酔っ払っているので説得力がありません。

「弟よ。本当の義兄弟とはかくあるべきというところを見せるぞ」

元始天尊が言いました。

「承知！」

霊宝天尊と元始天尊が気を高めて行きます。

「主役の俺様が蹴散らしてやるぜ！」

如意棒を振り回して凄む孫左京の肩を亜梨沙が悲しそうに叩きます。

「主役はあんたじゃなくてお師匠様だから」

その言葉に落ち込む左京です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「笑わせるんじゃないよ、下等生物が。我らと対等に戦えると思っているのか！？」

千年狐狸精が気を高めると、周囲の地面が歪みました。

「凄いにゃん……」

リックがお漏らししました。

馨や亜梨沙は失神しそうです。

第四百八十話　樹里一行追い詰められる？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）の力のせいで、リックは失禁し、亜梨沙と馨は気絶しました。

遊魔がリックを支えます。

「お前様、しっかりなさいませ」

「だらしないわね」

そう言っている蘭も、気を抜けば意識が飛びそうです。

「第六天魔王に匹敵するぞ」

露津狗が呟くと、

「あんな下等な奴と同列で扱うなよ」

千年狐狸精が凶悪な顔で突っ込みます。

鷺基は姉の鷺侘を気遣い、支えます。

薔薇鬼（ばるきり）吏達もお互いに寄り添っています。

「だらしねえぞ！　狐一匹如きに」

孫左京は鈍感なので大丈夫です。

「うるせえ！」

地の文に突っ込む左京です。

確かにまともに立っているのは、樹里姉妹以外左京だけです。

「儂等も平気じゃぞ」

元始天尊と霊宝天尊のジジイコンビも元気です。

「うるさいわい！」

ジジイのダブル突っ込みでした。

「って、お師匠様と姉上様は大丈夫なんですか？」

左京は唖然としました。

第四百八十一話　千年狐狸精の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）はニヤリとしました。

「さあ。そろそろ死んでもらおうかね」

蘭と鷺侘がビクッとします。

「ヤロウ！」

孫左京が出ようとすると、

「猿、待て。狐は儂らに任せよ」

元始天尊が止めます。

「何でだよ！？」

喧嘩大好きの左京は納得がいきません。

「お前にはもっと強い相手と戦ってもらいたいのだ」

霊宝天尊が囁きます。

「そうか」

左京は仕方なく下がります。

「何だい、私の相手はジジイ二人かい？」

千年狐狸精が挑発します。

「二人ではないぞ」

どこかからどこかで聞いた声がします。

「この声は？」

孫左京は樹里を見ます。

樹里の袈裟の襟元から太上老君が顔を出しています。

「またてめえか、エロジジイめ！」

左京は老君を引き摺り出します。

「長兄もお出ましかい？　少しは楽しめそうだね」

千年狐狸精はフッと笑います。

「食らいな！」

千年狐狸精は無数の火の玉を放ちました。

第四百八十二話　三清対千年狐狸精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君、元始天尊、霊宝天尊の三人が一斉に飛び、千年狐狸精の放った火の玉を蹴散らします。

「我ら、三清（さんせい）がお前如きたちまち倒してくれるわ！」

長兄の老君が見得を切ります。

「次元さんはいないのですか？」

樹里が寂しそうに尋ねます。

「その三世じゃねえよ！」

元始天尊が突っ込みました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開になりました。

「漫才は終わったかい？」

千年狐狸精が軽蔑の眼差しで尋ねます。

「うるさい！　行くぞ！」

老君が言います。

「おう！」

元始天尊と霊宝天尊が応じ、三人は千年狐狸精に突進しました。

「ジジイめ！　長生きしたくないのかい！？」

千年狐狸精は鉄扇を振るい、三人の攻撃を受け止めます。

「すげえ。全然ジジイの動きが見えねえぞ」

孫左京も仰天するほどの戦いです。

「まずいのではないか、蘭？」

鷺佗が囁きます。蘭も頷いて、

「そうかも」

と応じました。

第四百八十三話　三清の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君以下三人の仙人が千年狐狸精に挑みますが、千年狐狸精は容易くそれを退けます。

「温過ぎるぞ、ジジイ共」

千年狐狸精は鼻で笑います。

「うぬぬ……」

太上老君があまりに真剣な顔で悔しがるので、孫左京は驚きます。

（あのエロジジイが焦ってるぞ。やばいのか？）

ふと後ろを見ると、リックが身支度を整えて逃げようとしています。

「お前様、何をなさっているのです」

遊魔が踵落としで止めます。

「ならばこれでどうじゃ！」

三人の仙人は声を合わせ、気を集中させます。

「む？」

千年狐狸精の笑いが止みます。彼女は初めて真顔になりました。

「三天尊最終奥義、酔六波(ようろっぱ)！」

霊宝天尊の酒臭い息を主成分とし太上老君と元始天尊のエロを動力源とする奥義のようです。

巨大な光の玉が飛翔し、千年狐狸精を襲いました。

「ぬう！」

千年狐狸精は鉄扇を巨大化させ、それを凌ごうとします。

第四百八十四話　千年狐狸精の真の姿編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精（せんねんこりせい）は、三人の仙人が放った光の玉を鉄扇で受け止めました。

「第二弾じゃ！」

太上老君が言います。今度は、老君のエロを主成分に元始天尊のエロと霊宝天尊のゲ〇を隠し味です。

「バカ、やめ……」

さすがに仰天する千年狐狸精です。

「グギャア！」

千年狐狸精は第二弾の攻撃を防ぎ切れず、まともに食らって邸の中に吹っ飛びました。

「やったか？」

鷺佗と鷺基が身を乗り出します。

「いや、ダメだ。皆退くのだ！」

老君が叫びました。

「お師匠様！」

孫左京は素早く動き、樹里を抱きかかえて後ろに飛びます。

鷺基も璃里を抱えて飛びます。鷺侘の視線が痛いです。

「あんたら！」

蘭が亜梨沙と馨を蹴飛ばして誘導します。

遊魔はリックを乱暴に引き摺ります。

「よくもやったね、あんた達！」

千年狐狸精の声が聞こえます。

次の瞬間、邸が吹き飛んで、巨大な九尾の狐が現れました。

第四百八十五話　千年狐狸精、切れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精は遂にその正体を現しました。巨大な九尾の狐です。

「ば、化け物か？」

リックがコン〇コンの真似をしますが、二番煎じは無視されます。

「お前達、よくもこの私にゲ〇をぶつけてくれたね！？　許さないよ！」

千年狐狸精は雄叫びを上げます。

「ようやく正体を現したか？　今度こそ、止めを刺してやるぞ」

元始天尊が言います。

「うるさいよ！　私は怒ってるんだ。もう何があっても許さないからね！」

千年狐狸精は九つの尾を広げます。

「死にな！」

その尾の先から巨大な火の玉が噴き出し、樹里達に降り注ぎます。

「くそ！」

孫左京は樹里を庇いながら、如意棒で火の玉を撥ね除けます。

「きゃあ！」

亜梨沙が走り回ります。

「えい！」

馨が水流を吐き、火の玉を消します。

遊魔はリックを楯にして火の玉を避けます。

「にゃん！」

「どこまで防ぎ切れるかな！？」

千年狐狸精は更に火の玉を飛ばしました。

第四百八十六話　思わぬ救援編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精は遂に正体を現しました。

「誰が黄色い悪魔だ！」

千年狐狸精は使い古されたボケを放ちました。

「皆、燃え尽きよ！」

九本の尾から、当社比三十パーセント増量で火の玉が出ます。

「お師匠様、芭蕉扇を」

孫左京は樹里の楯となりながら言います。

「そうなんですか」

樹里が芭蕉扇の偽物を出すと、

「させるか！」

とニュータイプ気取りの千年狐狸精がそれを尾で奪い取ります。

「ああ！」

一同が叫びました。

樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を出さないのはお約束です。

「ハハハ！　いつも同じ手が通じると思うな、マンネリ軍団め！」

千年狐狸精は作者の創作意欲を削ぐような事を言い放ちます。

「今度こそ、死ね！」

火の玉は当社比計測不能なくらい増加しました。

「させるか！」

三番煎じの声がして火の玉が風で吹き飛ばされます。

「待たせたな」

赤信号のコントみたいに牛魔王と鉄扇公主が登場です。

第四百八十七話　鉄扇公主対千年狐狸精編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鉄扇公主は千年狐狸精を睨みつけます。

「今日こそ私のお気に入りの鉄扇、返してもらうよ、狐！」

夫の牛魔王を押しのけて凄む鉄扇公主です。

「そんな昔の事をまだ覚えているのかえ？」

千年狐狸精はケラケラと笑います。

「おのれっ！」

鉄扇公主は芭蕉扇を構え、力任せに扇ぎます。

「同じ手は二度は通じないよ！」

千年狐狸精はフッと姿を消します。

「奴め、狐道（こどう）に隠れたか？」

牛魔王が言いました。

「何だ、そのこどうって？」

無学な孫左京が尋ねます。

「うるせえ！」

地の文に切れる左京です。

「九尾の狐だけが出入りできる異空間だ。あれでは勝てぬ」

「何！？」

左京はギョッとしました。本当はわかっていないのに。

「違うよ！」

また地の文に切れる左京です。

「股は切れてないわよ」

亜梨沙が色っぽく言います。

何故か露津狗が赤面しました。

「出て来い、卑怯者！」

鉄扇公主が怒鳴りました。

第四百八十八話　千年狐狸精燻り出し作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狐道（こどう）という異空間に隠れてしまった千年狐狸精です。

「燻り出そう」

牛魔王が鉄扇公主を見ます。

「またあれ？　嫌なんだけど」

何故か顔を赤くする鉄扇公主です。

「嫌らしい事かにゃん？」

リックが反応し、遊魔に殴られます。

「妻の着古した服を扇ぐと、奴が苦しむのだ」

牛魔王は妙に嬉しそうです。悪い顔をしています。

「お館様、後でお話があります」

鉄扇公主の氷点下の声にビビる牛魔王です。

「はい」

鉄扇公主は恥ずかしそうに古い着物を牛魔王に渡します。

「扇いで下さい」

牛魔王が樹里に言います。

「そうなんですか」

樹里は亜梨沙の扇子を借り、扇ぎます。

「おお！」

突風が吹き、牛魔王は遥か彼方に飛びました。

唖然とする孫左京達です。

「何て事するんですか、お師匠様！」

左京が涙ぐんで言います。

「大丈夫ですよ。狐さんの秘密がわかりました」

樹里はまともバージョンで言いました。

第四百八十九話　樹里の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

狐道（こどう）という異空間に隠れた千年狐狸精を燻り出すための秘策を樹里が思いついたようです。

「鷺佗さん」

樹里は鷺佗達に耳打ちをします。

それを羨ましそうに見ている孫左京です。

「馨さん」

樹里は馨にも耳打ちします。

馨は恍惚とした表情になります。

「頼みます」

「はい」

鷺佗達は一斉に飛翔します。

馨も飛び立ちました。

「何だ？」

左京はイライラします。

「左京、私が囁いてあげようか？」

亜梨沙が言うと、左京は、

「断わる」

と即答です。亜梨沙はムッとしました。

「お師匠様、俺には？」

左京が言いました。

「ありませんよ」

樹里は無情にも笑顔全開で言いました。

左京は唖然とします。

「露津狗さん、亜梨沙さん」

樹里は二人に耳打ちします。

既に真っ白に燃え尽きそうな左京です。

「合点だ！」

亜梨沙は嬉しそうに露津狗と走り去ります。

「お師匠様、何が始まるのですか？」

蘭が尋ねました。

第四百九十話　みんなで温泉？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里が自分には何も囁いてくれないので、すっかり落ち込んでいる孫左京です。

「お師匠様は私にも何も囁いてくれなかったよ」

蘭が左京を慰めます。

「お前は女だろ！　俺の気持ちはわからない」

左京はムッとしました。

「わかるよ。だって、あんたの事が好きだから」

蘭が衝撃の告白です。馨がいたら、失神していたでしょう。

「お前、熱でもあるのか？」

左京は冗談だと思っています。

「そうかもね」

蘭は苦笑いして言いました。

「お師匠様、お言いつけの物、お持ちしました」

鷺佗達が大きな布袋を持って現れます。

ＢＯＷＹの元メンバーではありません。

「ご苦労様です」

樹里は笑顔全開で労います。

「たっだいまあ！」

亜梨沙と露津狗が地面の下から穴を掘って戻って来ました。

「見つかりました、お師匠様」

土塗れの亜梨沙が言います。

穴からは温泉が噴き出します。

たちまち大きな露天風呂が完成しました。

第四百九十一話　作戦開始編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

湧き出した温泉に孫左京達は驚きます。

「そうか、そういう事か」

太上老君が鷺佗のお尻を触りながら言います。

「止めて下さい、老師様」

鷺佗はその手を抓ります。

「狐の嫌いな臭いで攻める訳か」

元始天尊は遊魔のお尻を触っています。

遊魔は高級またたびでメロメロです。

「うーい、温泉で一杯か。良いのう」

霊宝天尊はすでに湯に浸かっています。

「それを温泉に入れて下さい」

樹里が鷺佗達に言いました。

鷺佗達は布袋の口を開き、中から白い塊を温泉に落とします。

「そうか、湯の花！」

博識な蘭は樹里の作戦に気づきます。

「どういう事だ？」

間抜けな左京と牛魔王にはまだわかりません。

「こいつと一緒にするな！」

異口同音に地の文に切れる左京と牛魔王です。

「亜梨沙さん、扇いで下さい」

樹里の指示で、亜梨沙が扇子で温泉の湯気を扇ぎます。

「何か、バブル期を思い出すわ」

亜梨沙は言いました。

第四百九十二話　千年狐狸精、飛び出す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の秘策で造られた露天風呂。すでに霊宝天尊はできあがっています。

「うーい。ええお湯じゃのう」

亜梨沙はジュ〇アナばりの激しさで扇子を振ります。

「む？」

鷺佗が空気の振動を感じました。

「何事だ？」

露津狗もそれに気づきます。

「狐め、堪えられなくなっておるな」

元始天尊は嬉しそうです。

「笑顔でお尻触るのやめて下さい」

遊魔のお尻を触り続ける元始天尊を弟子の男の子が窘（たしな）めます。

「来るぞ」

蘭のお尻を触って殴られた太上老君が言います。

「何が来るんだ？」

間抜けな二人組が尋ねます。

「誰が間抜けな二人組だ！」

孫左京と牛魔王の見事なハモり突っ込みです。

「貴様ら、いい加減にせいよ！」

狐道（こどう）と呼ばれる異空間に隠れていた千年狐狸精が飛び出して来ました。

「坊主、あんた、私の嫌いなものを知ってたのかい！？」

千年狐狸精は美女に戻って、樹里に言いました。

第四百九十三話　千年狐狸精、逃げる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精は樹里を睨みます。

「貴女の苦手なのは、硫黄。だから、鉄扇公主さんの服が嫌だったのです」

樹里が笑顔全開で謎解き開始です。

「なるほど、加齢臭ではなかったのか」

そう言ってしまい、ハッとする牛魔王です。

「後でじっくりお話しましょう」

鉄扇公主が言います。

「おのれ、坊主め！」

千年狐狸精が鉄扇を出します。

「それ、私の！」

鉄扇公主が指差しました。

「おねいさーん！」

その時、またたびで酔っていたリックが叫びます。

同時に遊魔の胸当てからたくさんの子猫が飛び出します。

「わわ！」

千年狐狸精は防御する事もできず、子猫の襲撃を受けました。

「ひいい！」

鉄扇が宙を舞います。

牛魔王がご機嫌取りのために素早くそれを受け止めます。

「其方の扇だ」

苦笑いして受け取る公主です。

「おのれえ！」

全裸にされた千年狐狸精は逃げ出しました。

「追うぞ、猿」

太上老君が言いました。

第四百九十四話　黒幕登場、千年狐狸精退場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

千年狐狸精はリック親子のエロエロ攻撃に遭い、逃走しました。

「おのれ、猫又め！　何故人間の味方を繰り返すのだ？」

千年狐狸精は誤解しています。

リックは人間の味方をしているのではなく、本能のままに生きているだけです。

要するに何も考えていないのです。

「女（じょか）？様、お力をお貸し下さい」

千年狐狸精は叫びました。

女？とは誰なのでしょうか？

決してトランプのカードではありません。

声が言いました。

「千年狐狸精よ、無様である」

「え？」

千年狐狸精はビクッとして立ち止まります。

「消えよ。目障りじゃ」

更に声が言い放ちます。

「女?様、お許し下さい！」

千年狐狸精が命乞いをしましたが、

「ならぬ」

声は非情です。

千年狐狸精は一瞬にして石にされてしまいました。

「うぬ如き小妖怪に任せた我が愚かであったわ」

声の主が言います。

「やはり貴様か?」

太上老君達が追いつきました。

第四百九十五話　人間殲滅？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君は誰もいない空間に向かって話しかけます。

「ボケたのか？」

孫左京が眉をひそめます。

「来るぞ」

元始天尊が呟きました。

「何だ？」

空に黒い雲が現れました。

その雲は次第に人の形になっていきます。

長い黒髪を蛇のようにうねらせた美女です。

但し目は白目がなく、只黒いです。

着ている服は漆黒で長い裾のため、足は見えません。

「イザですか？」（拙作「イワレヒコ伝」参照）

後からやって来た樹里が尋ねます。

「わかりにくいボケは止めて下さい」

左京は項垂れて言いました。

「我が名は女?(じょか)。人間の創造神である」

女性はフワッと地上に降り立って言いました。

「何ヶ月ですか?」

樹里がまた尋ねます。

「誰が想像妊娠だ!」

女?は樹里のボケを打ち返します。

「おお、奇麗なおねいさんにゃん!」

エロ全開のリックが叫びました。

「これより、人間殲滅を開始する」

女?は言いました。

第四百九十六話　最強の敵？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達の前に現れたのは、人間の創造神を名乗る女？（じょか）でした。

決して、蝙蝠さんの敵役ではありません。

「人間殲滅、じゃと？」

霊宝天尊が赤ら顔で尋ねます。

女？は臭そうに袖で口を覆い、

「左様。我は失望したのだ。人間共は常に自分達の欲望を満たすためだけに生きておる。我は人間を創造した神としてその責めを負うのだ」

「何言ってんだよ、てめえは！？」

命知らずの孫左京が凄みます。

「無礼者！」

女？の黒い目が見開かれ、左京はズバズバッと斬り裂かれました。

「ぐう……」

血塗れになって倒れる左京を牛魔王が受け止めます。

「しっかりしろ！」

左京は反応がありません。

「何が起こったのだ？」

鷺佗が震えます。蘭も亜梨沙も驚愕しています。

「強い……」

鉄扇公主が呟きます。

「我の邪魔をする者は、全て滅する」

女？は大きな声で言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第四百九十七話　作戦開始？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女？（じょか）と名乗る女性は、目に見えない力で孫左京を斬り裂きました。

「我は神である。神に逆らう者は、死あるのみぞ」

女？は只黒い目を細めて言います。

「何が神だ！　おのれは妖怪ではないか？」

太上老君が挑発します。老君は真剣な表情です。

「真剣な表情で私のお尻撫でるな、エロジジイ！」

亜梨沙が切れます。

「貴様！　許さぬぞ！」

女？は目を見開きます。

「ほい！」

老君は亜梨沙を抱きかかえ、飛び退きます。

地面がドスッと抉れます。

「何だ？」

鷺佗と鷺基が顔を見合わせました。

「お前の妖術は見切っておる。降参しろ」

老君は亜梨沙のお尻と胸を触りながら言いました。

「いい加減にしろ！」

亜梨沙が扇子で殴ります。

「ならば！」

女？は両手を高く掲げます。

「いかん、逃げろ！」

元始天尊が叫びます。

牛魔王は左京を抱えて飛びます。

「お師匠様！」

馨が蘭と樹里と璃里を乗せて飛びました。

第四百九十八話　女?の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)が両手を掲げると空に黒雲が広がります。

「雨乞いですか?」

樹里が尋ねます。

「もっと面白いものじゃ」

女?はニヤリとして言いました。

「面白いものって、エロいもの?」

リックが嬉しそうに尋ねます。

そのリックの鼻先を何かが掠め、血が噴き出ます。

「にゃー!」

リックは痛さで飛び回ります。

「お前様!」

遊魔がリックを追いかけます。

次の瞬間、樹里達に無数の氷柱が降り注ぎました。

どれも長さが人間の背丈よりあります。

「えい！」

鉄扇公主が芭蕉扇で氷柱を吹き飛ばします。

「その程度では防ぎ切れぬぞ」

女？が言います。

見上げると、空一面、氷柱だらけです。

「我は申したはずじゃ。人間を殲滅すると！」

女？は高笑いしました。

「えい！」

樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を出します。

ところが何も起こりません。電池切れでしょうか？

「逃げるのじゃ！」

太上老君が叫びました。

第四百九十九話　樹里の決意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)の降らせた氷柱が樹里達を襲います。

「逃げるのじゃ！」

元始天尊が続けて叫びます。

馨は蘭と樹里と璃里を乗せて全速力で飛翔します。

牛魔王は鉄扇公主を抱きかかえ、孫左京を背負って走ります。

亜梨沙は露津狗の背中に乗って逃げます。

鷺佗と鷺基達はリックや遊魔を抱え、飛びます。

太上老君と元始天尊と霊宝天尊はそれぞれ飛翔しました。

元始天尊の弟子の男の子は再び刀に変化し、襲いかかる氷柱を薙ぎ払います。

「逃げられると思うな！」

女?が遥か後方で叫んでいます。

氷柱は樹里達を追いかけて来ます。

しかも、地上の村や町は氷柱のせいで壊滅していました。

人々が逃げ惑っています。

「馨さん、停まって下さい」

樹里が言います。

「でもお師匠様」

馨は迫って来る氷柱の雨を見て言います。

「このままでは罪なき人々を巻き込むばかりです」

まともバージョンの樹里が起動しました。

第五百話　女？の高笑い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は地上に降ろしてもらいました。

「お師匠様、危険です、止めた方が……」

馨が心配そうに言います。

姉の璃里も悲しそうに樹里を見ています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で、迫り来る氷柱の雨に向かって歩き出します。

「樹里！」

璃里が叫びます。

「危ないです、姉上様」

蘭が璃里を引き止め、

「龍、飛びなさい！」

「は、はい！」

馨は仕方なく飛び立ちます。

「狂うたか、御徒町樹里？　何をするつもりぞ？」

氷柱の雨の上に女？（じょか）が現れました。

「インダラヤソワカ」

樹里は帝釈天の真言を唱えました。

稲妻が幾つにも分かれ、氷柱を破壊します。

「無駄よ、御徒町樹里。焼け石に水じゃ」

女？は高笑いしました。

「そいつはどうかの」

太上老君の声がします。

「何！？」

女？の背後に老君と元始天尊、霊宝天尊が飛翔していました。

「奴は囮か？」

女？は黒い目を見開いて老君達を睨みました。

第五百一話　樹里対女?編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?（じょか）の背後をとった太上老君達が一斉に攻撃を仕掛けます。

「おらおら！」

三人の攻撃は目にも留まらぬ速さですが女?はそれを容易くかわします。

「奇襲になっておらんぞ、ジジイ共！」

女?はニヤリとし三人を弾き飛ばします。

「く！」

老君達は空中で停まり女?を睨みます。

「愚かな。神である我に逆らうとは三清の名が泣くぞ」

女?は嘲笑しました。

「貴女は神ではありません」

樹里の声がすぐそばでしたので、女?はギョッとして振り返ります。

樹里は孔雀明王真言で飛翔していました。

「オンマケイシバラヤソワカ！」

樹里は大自在天真言を唱えました。

「ぬう！」

女？は意表を突かれた顔で樹里を見ました。

「やった！」

老君達が叫びます。

「効かぬ」

女？は何事もなかったかのようにそこにいます。

「何！？」

老君達は仰天しました。

「不愉快じゃ。人間風情が我に」

女？は樹里を睨みました。

第五百二話　女?の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?（じょか）には、樹里の大自在天真言が通じませんでした。

「愚か者め。何度も申しておろう?　我は神なのじゃ。神である我に格下の者の真言が通じるものか」

女?は哀れむような目で樹里を見ます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「通じないとは言え、我に向かって力を振るったお前の所業は許せぬ。滅してくれるわ!」

女?の黒い目が見開かれます。

「させるか!」

誰かが使い古された名台詞を吐きました。

「何!?」

女?は唖然としています。

「見切ったぜ、オバさん。こんな物を飛ばしてたんだな」

孫左京が両手に鋭い刃の付いた輪を持っています。

「お猿さん！」

樹里が嬉しそうに言います。

左京はチラッと樹里を見て、

「お待たせしました。ここからはずっと俺のターンです、お師匠様」

と言いました。太上老君達は唖然としています。

「おのれェッ、誰がオバさんじゃ！」

女？が切れました。

第五百三話　孫左京の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里の危機を格好良く救った孫左京は胸を張ります。

「ぎええ！」

途端に縫い合わせたばかりの傷口が開き、血が噴き出します。

「アホか」

呆れる蘭達です。

「所詮猿か。愚か者めが」

女？（じょか）はニヤリとしました。

「うるせえよ、オバさん。ずっと俺のターンだって言ったろう？」

左京は噴き出す血を包帯を巻いて止めながら言います。

「オバさんと言うな、猿！」

女？の黒い目が見開かれ、刃の付いた輪が放たれます。

「無駄だよ」

左京は如意棒で弾き飛ばします。

「にゃー！」

そのうちの一つがリックの頬ひげを切りました。

「お猿さん、頑張って下さい」

樹里が言いました。左京はフッと笑い、

「勿論です、お師匠様。こんなオバさん、一捻りですよ」

「午〇さんですか？」

樹里が尋ねます。〇の中には「雲」が入ります。

「違います」

左京は項垂れます。

「行くぜ、化け物！」

左京は女？に突進しました。

第五百四話　孫左京対女？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京が女？（じょか）に仕掛けます。

「猿如きが！」

女？は黒い目を鋭くしました。

「油断するな」

元始天尊が言います。

「うるせえよ、ハゲ」

左京が暴言を吐きます。

「ううう」

元始天尊は落ち込みます。

「あごのひげを頭の上で結んだらどうじゃ？」

霊宝天尊が言います。

「余計なお世話だ！」

元始天尊は切れました。

「おらあ！」

左京は如意棒を振り下ろします。

「温いわ！」

女？は右手の人差し指で受け止めます。

「何！？」

ギョッとする左京です。

「死ぬるがいい！」

女？がニヤリとしました。

「うは！」

左京は至近距離で女？の輪を食らってしまいます。

「左京！」

亜梨沙と蘭が絶叫します。左京の首が飛びました。

「やったにゃん！」

喜ぶリックです。

「なーんてな」

すると左京の首が下からニュッと出て来ました。

「お猿さん！」

樹里が嬉しそうに言います。

「我を愚弄しおって！」

女？は激怒しました。

第五百五話　孫左京の意地編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は女?（じょか）の攻撃をかわし、更に仕掛けます。

「ボコボコにしてやるぜ、オバさん！」

左京は如意棒を振り回します。

「猿、いい気になるな！」

女?が正体を現します。

顔はそのままですが身体は巨大な蛇です。

「やっぱり化け物じゃねえか！　ふざけやがって」

左京はきんと雲を操り、女?に接近します。

「化け物ではない！　我は神ぞ！」

女?の目が鋭くなり、尾が左京を襲います。

「おっと！」

左京はかわしながら女?を如意棒で叩きます。

「その程度で！」

女？には全然効いていないようです。

「避難するのだ」

太上老君が樹里に言います。

「はい」

女？と左京の戦いは壮絶です。

亜梨沙やリックには両者の動きが見えません。

「頑張ってるわね」

蘭が言います。

「居場所がなくなりそうだからね」

亜梨沙があっさり言いました。

（ずっと俺のターンて言った手前、ここは何としても！）

左京の意地です。

第五百六話　女?の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)の正体は巨大な蛇でした。

しかし、顔は人間のようです。

「上半身も人間だった方が良かったにゃん」

リックが変な妄想をして遊魔に殴られます。

「おらあ!」

孫左京はきんと雲を自在に操り、女?に攻撃します。

「おのれ!」

女?の蛇の身体が鱗(うろこ)を逆立て、左京に向かって放ちました。

「おおっと!」

左京は古舘さんばりの声で叫びます。

「死ねえ!」

女?は鱗を樹里達にも放ちます。

「うおお!」

牛魔王が鱗を大きな青龍刀で薙ぎ払います。

「それ！」

鉄扇公主が芭蕉扇で鱗を飛ばします。

「揃いも揃うて我に歯向かうか！」

女？は目を見開きました。

「我は神ぞ！　神に逆らう者は死あるのみ！」

女？は身体を空へと伸ばします。

「何をする気だ？」

太上老君が眉をひそめます。

「かあ！」

女？は口を大きく開き、霧を吐きました。

「いかん、あれは蛇の猛毒じゃ！」

元始天尊が叫びました。

第五百七話　女？の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女？（じょか）は口から毒の霧を吐きました。

「それは以前に羽厨逗（ばずず）が使ったわよ」

亜梨沙が誰にともなく突っ込み、作者を動揺させます。

「いや、あれは浴びただけで即死じゃ。羽厨逗如きの毒とは違うぞ」

作者派の元始天尊が素早くフォローします。

でもツイッターではありません。

「えい！」

樹里がまた飛竜杖（ひりゅうじょう）を掲げます。

「無駄よ！　其方の力は全て我には通じぬ」

女？はニヤリとしました。

「ならば！」

蘭が竜巻を起こし、鉄扇公主が芭蕉扇を振るいます。

「がああ！」

馨も水流で霧を押し返します。

「俺の活躍の邪魔をするな！」

孫左京が切れ、女？に向かいます。

「何だにゃん？」

リックが落ちていた女？の鱗（うろこ）を拾いました。

「何か書いてあるけど老眼で見えないにゃん」

リックは鱗を遠ざけて目を細めました。

「遊魔はあ、漢字が読めないです」

遊魔が言いました。

第五百八話　全員敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は果敢に攻撃しますが、女？には通じていません。

「蚊に刺された程にもならぬわ」

女？は左京の全力の攻撃を罵ります。

「ならば！」

鷺佗達が一斉に銀の弓を射ます。

「我は神であるぞ。そのようなものが通用するか！」

鷺佗達は女？の鱗（うろこ）でやられてしまいます。

「おのれ！」

牛魔王が青龍刀で斬りかかります。

「無駄よ！」

女？はその攻撃を防いだばかりか、牛魔王の陰に隠れて奇襲を仕掛けた鉄扇公主をも退けました。

「それなら！」

亜梨沙と蘭が貴重な連携攻撃です。

亜梨沙が蘭の竜巻の力を借りてのボディアタックです。

「温いわ」

亜梨沙は女?の尾で跳ね飛ばされました。

「でやあ!」

馨に乗った太上老君と元始天尊と霊宝天尊が女?に飛びかかりますが、

「届かぬ!」

同じく女?の尾で跳ねつけられます。

「終わりか?」

女?がリックを見ます。

「は、はいにゃん」

リックは即答しました。

第五百九話　孫左京の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里一行の主だった戦士達が倒れました。

全滅状態です。

「待て待て待て！」

孫左京が割り込みます。

「俺は倒れていねえぞ！　俺はまだ戦える！」

しかし、如意棒で叩いても通じないのですから、負けたも同然です。

「黙れ、地の文！」

とうとう正面から地の文に切れる左京です。

「オバさん、俺が相手だ！」

左京は巨大化し、女？に向かいます。

「猿如きが、神である我に勝てると思うな！」

女？は尾を振り回し、左京を滅多打ちです。

「ぬおお！」

左京はジッと我慢しています。

（お師匠様、残念ですが、俺もこいつには勝てません。早く逃げて下さい）

左京は樹里を逃がすために犠牲になるようです。

「次回からは、リックの西遊記にゃん」

懲りずに言ってみるリックですが、遊魔に殴られます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で左京を見上げています。

「お師匠様、逃げて下さい！」

左京は大声で言いました。

第五百十話　樹里の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は強大な敵である女?（じょか）に勝てない事を悟り、自分を犠牲にして樹里を助けようとしています。

姑息な戦い方しかしない左京に似つかわしくありません。

「うるせえよ！」

左京は地の文に懲りずに突っ込みます。

「お師匠様、早く逃げて下さい！」

左京は女?の攻撃に堪えながら叫びます。

「私は逃げませんよ、お猿さん」

樹里は笑顔全開で言います。

「私は常にお猿さんと共にあります」

樹里はそう言うと印を結びます。

「オンバザラダドバン」

それは大日如来真言です。宇宙の最高神です。

「ぬう！」

女？が怯みます。

「今じゃ！」

太上老君達が力を取り戻し、気を集中させます。

「はあ！」

三人の気の塊が女？に激突します。

「ぬああ！」

女？はその衝撃で吹き飛ばされ、遥か彼方に飛んでしまいました。

「やったの？」

蘭が呟きます。

「退けたに過ぎぬ。今は逃げるのじゃ」

元始天尊が言いました。

第五百十一話　太上老君達の師匠編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は太上老君達「三清（さんせい）」の力で何とか危機を切り抜けました。

「こうなったらお師匠様にすがるしかないな」

太上老君が腕組みをして言います。

「お師匠様？」

孫左京が尋ねます。

「ル〇ンさんですか？」

樹里も尋ねました。

「その三世から離れろ！」

元始天尊が切れました。

「鴻均道人（こうきんどうじん）様じゃ。この世で只一人、女（じょか）？に立ち向かえるお人じゃ」

霊宝天尊がほろ酔い加減で言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「何だか嫌な予感がするのはどうしてかしら？」

鷺佗が言います。すると蘭と亜梨沙も、

「私も」

と言いました。

「あのお」

遊魔が言いました。

「さっきから私のお尻を触っているのがその方ですかあ？」

左京達は遊魔を見ました。

すると遊魔のお尻を撫でている老人がいます。

「何してるんだ、てめえは！」

左京が如意棒で殴りました。

第五百十二話　鴻均道人編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君達の師匠である鴻均道人（こうきんどうじん）も、蘭達の予想通り、スケベジジイでした。

「失礼な事を申すな。儂はスケベではない」

鴻均道人は孫左京に殴られたハゲ頭を撫でながら言いました。

「儂はドスケベなのじゃ」

胸を張って言う道人をもう一度殴る左京です。

「なお悪い！」

蘭達は呆れています。

「まあ、冗談はそれくらいにしてと」

鴻均道人は太上老君達を見ます。

「奴が動いてしまったのは、我らの失策よ。何とかせねばならぬな」

「はい。やはり、あの男を探すしかありませぬ」

元始天尊が言いました。

「あの男って誰？」

亜梨沙が尋ねます。

「女（じょか）？の夫じゃ」

霊宝天尊が答えました。

「ええ！？」

左京達は仰天します。

「どんな奴なんですか？」

心配になった蘭が尋ねます。

「超イケメンじゃ」

太上老君が言うと、

「すぐ探しに行きましょう」

亜梨沙が蘭を押し退けて言いました。

第五百十三話　女？の夫を探せ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

ドスケベの鴻均道人（こうきんどうじん）が驚くべき事実を言いました。

女？（じょか）に夫がいるというのです。

「ね、ね、露津狗よりイケメン？」

亜梨沙がこっそり道人に尋ねます。

「この世の者とは思えぬほどのイケメンじゃ」

道人は亜梨沙の胸に顔を埋めます。

「何すんのよ！」

亜梨沙は扇子で道人を殴りました。

「早くそのイケメンを探しに行きましょう」

ノリノリの亜梨沙に呆れる蘭達です。

「しかし、どこにいるのかわからんのだ」

元始天尊が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「気の小さい男だから、どこかに隠れていると思われる」

霊宝天尊が言いました。

「天狐（てんこ）なら知っておるかも知れぬ」

太上老君が言います。

「真面目な顔でお尻を撫でないで下さい！」

鷺佗が怒りました。

「天狐って誰だ？」

孫左京が尋ねます。

「天界の果てに棲む狐じゃ」

元始天尊が答えました。

第五百十四話　天狐を探せに変更編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)の夫を探すため、孫左京達は天界の果てに棲む天狐に会いに行く事になりました。

「天狐は全てを見通す千里眼の持ち主じゃ。女?の夫の事はもちろん、奴の弱点も知っているかも知れぬ」

鴻均道人(こうきんどうじん)が璃里の肩を抱いて言います。

「そうですか」

璃里は抵抗しないので道人が図に乗ります。

「ええ匂いやのう」

璃里の首筋に鼻を寄せる道人を左京が殴ります。

「いい加減にしろ!」

天狐に会いに行く者を選定します。

「きんと雲で行かないと間に合わないから俺は確定だな」

左京は樹里と二人きりで行こうと企んでいます。

「天狐は会う者を選ぶと言われておる。全員で行って、天狐に選ん

でもらうしかない」

霊宝天尊が言います。

「こんな大人数、どうやって運ぶんだ?」

左京が言います。すると道人が、

「案ずるな。儂の大型きんと雲で行けば大丈夫じゃ」

左京は唖然としました。

第五百十五話　天狐を探して三千里？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）が呼び寄せたきんと雲は孫左京のものの二十倍くらいあります。

「すごーい、お爺ちゃん」

遊魔が大喜びします。

「ムハハ、そうかい、そうかい」

鴻均道人は鼻の下を伸ばして言います。

「僕は行かないにゃん。面白くないにゃん」

嫉妬したリックが言い出します。

「残念じゃな。天狐は小雪似の絶世の美女ぞ」

霊宝天尊が言いました。

「行きますにゃん」

リックが一番に乗り込みました。

「パクリじゃねえか」

左京がボソッと作者批判です。

「行って来ます、お猿さん」

樹里が笑顔全開で言いました。

左京がブツブツ言っている隙に大型きんと雲は飛び立ってしまいました。

「わお！」

左京は仰天して自分のきんと雲で追いかけます。

「待って下さい、お師匠様！　主役を置いて行くなんて酷いです」

泣きながら言う左京です。

「主役はお師匠様よ、左京」

亜梨沙が容赦のない事を言います。

第五百十六話　天狐の試し編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、鴻均道人（こうきんどうじん）の大型きんと雲で千里眼を持つと言われている天狐（てんこ）の邸に向かっています。

「楽しみにゃん、天狐ちゃんに会うの」

リックが不用意な発言をして遊魔に殴られます。

「あの妖怪が追いかけて来る事はないのですか？」

蘭が道人に尋ねます。

「そんな面倒臭い話にするほど作者は利口ではない」

道人のとんでもない説明に唖然とする蘭と鷺佗です。

「俺も乗せてくれ」

孫左京が追いついて言います。

「ダメじゃ。儂を何度も殴ったからの」

道人はアカンベーをしました。

結構根に持つジイさんです。

「加速装置じゃ」

大型きんと雲は何かのパクリの装置で左京のきんと雲を突き放しました。

「ひい！」

左京は必死になって追いかけます。

樹里達は天界の果てにある天狐の邸の門の前に着きました。

「頼もう」

道人が呼びかけると、

「問題です」

と妙な返事が聞こえました。

第五百十七話　問題の正解編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天界の果てにある天狐の邸に着いた樹里達は、天狐に問題を出されました。

「始めは四つ足で、次に二つ足になり、最後は三つ足なのは何？」

すると蘭が得意満面で言います。

「簡単な問題ね。人間よ」

「その理由は？」

声が尋ねます。

「赤ん坊の頃はハイハイで四本足、大人になって二本足で歩き、年老いて杖を突くから三つ足です」

「不正解です」

「え！？」

仰天して皿の水が蒸発しそうな蘭です。

「さあ、他には？」

誰も答えられません。

「お引き取り下さい。次回は千年後です」

孫左京達は唖然としました。

「はい」

樹里が笑顔全開で手を挙げます。

「お答え下さい」

声が言います。

「最初はソロシ〇プで出かけましたが、イ〇オンに乗り換え、最後はザ〇ザ・ルブにしました」

その答えに更に唖然とする左京達です。

「正解です」

正解なのにもっと驚愕する左京達です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第五百十八話　天狐現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里のとんでもない答えが正解なのを知り、落ち込む蘭です。

「どうしてなのよ……」

そんな蘭を嬉しそうに亜梨沙が慰めます。

「仕方ないよ、蘭。お師匠様が主人公なんだから」

「ううう」

余計落ち込む蘭です。

「そのような胡散臭い理由で正解としたのではないぞ」

その声と共に、真っ白な服を身にまとった絶世の美女が現れました。

肌は透き通るように白く、髪も雪のように白いです。

「おお！　天狐しゃん！」

リックが絶叫し、遊魔に殴られます。

「久しいですね、お三方」

天狐は太上老君達に微笑みます。

「そうじゃな」

老君が応じました。天狐は蘭と亜梨沙を見て、

「知っている事で満足するな。そこから更に考え出す事こそが知恵なのだ」

「え？」

蘭と亜梨沙が天狐を見ます。

「昔より語り継がれし答え以外であれば、どれも正解という事だ」

要するに蘭の答え以外なら何でも良かったのです。

固まる蘭です。

第五百十九話　天狐の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐は蘭を見て、

「其方はかつて天界で近衛大将を任ぜられていたのであったな」

「はい」

蘭は硬直が解けて天狐を見ます。

「ならば、下界に落ちて後、其方は己を磨く事をしたか？」

天狐の鋭い指摘に蘭はビクッとしました。

「その事を責めておるのではない。生きるとは、日々精進なのだ。それを忘れるなよ」

天狐の言葉は厳しいものですが、その顔は慈愛に満ちています。

「ありがとうございます」

蘭は自分の傲慢さを恥じました。

「やっぱり天狐しゃんは素晴らしい女性にゃん」

リックが遊魔の踵落としをかわして言います。

「さすがよのう、天狐。ならば、我らが何故参ったのかも見抜いておるな？」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言います。

「無論です、道人様。伏羲（ふくぎ）の居所をお知りになりたいのでありましょう？」

天狐はお尻を触ろうとした道人の手をはねつけます。

唖然とする孫左京達です。

第五百二十話　天狐の条件編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐は一同を見渡し、

「伏義（ふくぎ）の居所をお教えするのに条件があります」

「条件？」

鴻均道人（こうきんどうじん）が眉をひそめます。

「仕方ない、僕のこの身を捧げるにゃん、天狐しゃん」

そう言って服を脱ぐリックが遊魔に殴られます。

「私と戦って勝ったらお教えしましょう」

天狐はそう言うと巨大な白い狐の姿に変化します。

「ひえ！」

その圧倒的な姿にリックは失禁しました。

「俺が相手だ！」

孫左京が進み出ました。

「戦う相手は私が選ぶ。猿、退（の）け」

天狐が言いました。

「何だと！」

凄む左京ですが、

「お猿さん」

と樹里に窘(たしな)められ、シュンとします。

（どうか選ばれませんように）

密かに祈る馨と亜梨沙です。

「私と戦うのは……」

天狐が樹里達を見回します。

（お師匠様を選んだら容赦しねえ！）

左京は身構えました。

「貴女です」

選ばれたのは璃里でした。

微妙な左京です。

第五百二十一話　璃里対天狐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐が選んだ対戦相手は樹里の姉の璃里でした。

「汚いぞ、狐！　姉上様を選ぶなんて！」

孫左京が怒鳴りますが、

「黙れ、猿！　不服なら私はこのまま邸に戻るぞ」

天狐の圧倒的な迫力と言い分に左京は身じろぎました。

「左京さん、私なら大丈夫。心配しないで」

璃里が意を決して言いました。

「姉上」

樹里も心配そうです。

「何か勘違いしているようだが、私はその女と力の勝負をするつもりはないぞ」

天狐が言いました。

「何？」

左京達はキョトンとします。

「私と知恵比べをするのだ」

天狐はフッと笑いました。

「知恵比べ？」

璃里はビクッとしました。

（千里眼を持つと言われている天狐に知恵比べで勝てるはずがない）

蘭が焦ります。

「私の出す問題に答えるのだ」

天狐は悪い魔女のような顔で言います。

「テレフォンは使えますか？」

樹里が笑顔全開で尋ねました。

「誰がみのもんただ！」

天狐は切れました。

第五百二十二話　天狐の出題編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐は璃里を見下ろします。

「では、問題です」

孫左京達の間に緊張が走ります。

璃里はギュッと両手を握りしめます。

「下は大火事上は大水。何だ？」

天狐は気取って言っていますが、内容は子供のなぞなぞレベルです。

さっき痛い目を見た蘭はギクッとします。

（これはもしや、王道の答えを言うと不正解という罠か？）

すると亜梨沙が、

「正解はお風呂よね？」

と囁きます。

「バカね、あんたは。それじゃあ、当たり前過ぎるでしょ？」

蘭は白い目で亜梨沙を見ますが、

「さっき不正解だったあんたに言われたくない」

と言われ、思い切り落ち込みます。

「先程と同じ考えで正しいのかわからんぞ」

鷺佗が言いました。

皆訳がわからなくなっています。

「さあ、早く答えよ」

天狐が催促します。

「では、オーディエンスで」

樹里が言います。

「だからミリオネアじゃねえって言ってるだろ！」

天狐はまた切れました。

第五百二十三話　天狐の真意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐は璃里を見て、

「さあ、答えよ」

璃里は焦りました。

（何と答えれば正解なの？）

正統派の答えで良いのか、奇をてらった方が良いのか。

悩む璃里です。

「璃里しゃん、可愛いにゃん」

リックがウットリ顔で言います。

「お前様！」

遊魔のラリアットが奇麗に決まります。

「では、５０・５０で」

樹里が言いました。

「ミリオネアじゃねえって何度言えばわかるんだ！」

天狐が切れます。

「妙じゃな」

鴻均道人（こうきんどうじん）が呟きます。

「そうですな」

太上老君が言います。二人は真剣な顔で鷺侘のお尻を撫でています。

「この非常時に！」

鷺基と孫左京が二人をそれぞれ殴りました。

「天狐は天界でも名立たる知恵者ぞ。その気になれば、人間には到底考え付かぬ問いかけをするも可能」

道人が言いました。太上老君も、

「お師匠様の仰る通りじゃ。天狐は時間稼ぎをしているとしか思えん」

と言いました。

第五百二十四話　天狐の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天狐の問いかけに悩む璃里です。

「ドロップアウトはできませんか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「しつこいぞ！」

天狐は樹里に怒鳴りました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「天狐様の時間稼ぎに協力しているつもりなのですが」

その言葉に天狐はギクッとします。

鴻均道人（こうきんどうじん）と太上老君達が驚いて樹里を見ます。

「千里眼をお持ちの天狐様であれば、私達の未来も見えていらっしゃるはずです。だから私達をここに引き止めているのではないですか？」

樹里はまともバージョンが起動したようです。

「どういう事だ？」

孫左京には意味がわかりません。

「私に訊かないでよ」

当然亜梨沙にもわかるはずがありません。

「そういう事なの」

蘭と鷺佗は顔を見合わせ、ゴクリと唾を飲みます。

「さすが御徒町樹里だ。そこまで見抜いておるとはな」

天狐はニヤリとして言いました。

第五百二十五話　未来の姿編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

天狐は樹里の言葉に本当の事を語ります。

「私には、あなた達が女?(じょか)に皆殺しにされる光景が見えるのです」

それを聞き、リックと亜梨沙が仲良く失禁します。

蘭と鷺佗は顔を見合わせます。

薔薇鬼(ばるきり)吏達は怯えました。

鷺基と露津狗はギクッとしています。

馨は気絶してしまいました。

牛魔王は鉄扇公主を抱きしめます。

「やはり、見えていたのか」

鴻均道人(こうきんどうじん)が真面目な顔で言いながら、璃里のお尻を撫でています。

「ふざけるな!」

孫左京は道人を殴って叫びます。

「俺はそんなの信じないぞ!　お師匠様がそんな……」

左京は言葉に詰まります。

「お心遣い痛み入ります。しかし、私達は負けません」

樹里は笑顔全開で言いました。すると天狐は、

「そうだな。未来は見えるものではなく、作るものだ。決まっている事ではない」

「はい」

樹里は更に笑顔全開で応じました。

第五百二十六話　行く者と退く者編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は孫左京達を見ました。

「これから進む道は険しく恐ろしい道です。皆さんの思いを教えて下さい」

樹里は一番先に大型きんと雲に乗ります。

俺のに乗って欲しかった、と思うバカな左京です。

続いて、璃里が無言で乗ります。

蘭達は顔を見合わせます。

「それなら僕はここで失礼するにゃん」

リックが立ち去ろうとすると、

「お前様！」

遊魔の踵落としが炸裂します。

「亜梨沙はどうするの？」

蘭が尋ねました。

「私は……」

亜梨沙は露津狗を見ます。

「俺はもう死んだ身。何も恐れるものはない」

露津狗は大型きんと雲に乗りました。

「私も」

亜梨沙が意を決して乗ります。

「我らは最後までお師匠様と共にあります」

鷺佗達が乗り込みます。

「ボヤボヤしない！」

蘭が馨を蹴飛ばして乗り込みます。

遊魔が気絶したリックを引き摺って乗りました。

「ありがとうございます」

樹里が目を潤ませて頭を下げました。

第五百二十七話　樹里の決意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達一行は誰も欠ける事なく大型きんと雲に乗りました。

「また俺は除け者？」

孫左京は項垂れました。

「其方達の力を信じておる」

女性の姿に戻った天狐が言いました。

「天狐しゃん！」

急に気がついたリックが叫び、遊魔に殴られます。

「皆さん、本当に感謝致します。私のような者のために」

樹里は目を潤ませて礼を言いました。

左京が鼻血を垂らします。

「未来は変わる。大丈夫」

霊宝天尊が最後に乗って言います。

「そうじゃな」

太上老君と元始天尊は鷺侘の肩を両側から抱いて言いました。

「何してるんだ！」

左京と鷺基が二人を殴ります。

「頼んだぞ」

何故か天狐の後ろで言う鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「何であんたがそこにいるの？」

亜梨沙が尋ねます。

「儂はここで天狐と作戦会議じゃ」

鴻均道人は言いました。すると天狐が、

「さっさと行け、スケベジジイ！」

と道人を蹴飛ばしました。

第五百二十八話　伏義を探して三千里？編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

樹里達は女？（じょか）の夫である伏義（ふくぎ）を探す旅に出ました。

鴻均道人（こうきんどうじん）の操る大型きんと雲と孫左京のきんと雲が大空を行きます。

「僕は来たくなかったにゃん」

リックが泣いています。すると霊宝天尊が、

「女？は一度戦った相手は全員逃がさんと言う。ここで戦いを降りたとしても、無事ではすまんぞ」

その言葉に失神しそうなリックです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「一緒にいた方がいいという事じゃ」

太上老君が言います。

「老師様、真面目な顔してお尻触るのやめて下さい」

蘭が言いました。

「ところであの蛇女の旦那はどこにいるのかわかったのか？」

孫左京が尋ねます。

「お師匠様が天狐からお聞きになっている」

元始天尊が言いました。

「面目ない、聞き忘れた」

笑って言う鴻均道人です。

「早く聞いて来い、エロジジイ！」

亜梨沙が道人を蹴落とします。

第五百二十九話　史上最強の妻と史上最弱の夫編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙に蹴落とされた鴻均道人（こうきんどうじん）が天狐に女？（じょか）の夫である伏義（ふくぎ）の居場所を聞いて戻って来ました。

「ここから一万里西に行ったところに伏義はおるそうだ」

道人は息を切らせています。

「なら、俺が先に行くぜ」

孫左京が先発しました。

「伏義は臆病な男だ。脅かすなよ」

太上老君が言いました。

「わかってるよ、うるせえジジイだ！」

左京はムッとして飛び去ります。

「女？があれほどの強さになったのは、伏義を守るためだったという伝説がある」

元始天尊が真顔で言いますが、右手は璃里の肩を抱いています。

「お師匠様！」

弟子の男の子が元始天尊を窘(たしな)めます。

「猫よ、奥方が凶暴になるのはお主が悪いのじゃぞ」

霊宝天尊が遊魔にお酌してもらいながら言います。

「説得力がないにゃん」

リックは面白くありません。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第五百三十話　伏義の居場所編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は樹里達に先駆けて、伏義（ふくぎ）がいる所へと急ぎました。

左京は地上に降りました。

人で賑わう町の大通りです。

「こんな所にいるのか？」

左京は歩いている男に尋ねます。

「伏義という男を知らないか？」

「ふくぎ？　知らないな」

「そうか」

左京は言いました。すると男は、

「金次第で知ってるかもな」

左京は男を如意棒で殴ります。

「こんなもんでどうだ？」

男は怯え出し、

「そいつなら、街外れの宿屋で働いてるよ」

と言うと、逃げて行きました。

「宿屋で働いてる？」

左京は首を傾げます。

「蛇女の旦那が何してるんだ？」

左京は宿屋に向かいました。

ここはその宿屋です。

伏羲は人間の男の姿で働いています。

「うん？」

彼は自分を探している者の存在に気づきました。

「まさか、女（じょか）？が？」

彼は妻の女？が誰かを寄越したと思いました。

そして、誰にも言わずに宿屋を逃げ出しました。

第五百三十一話　気の弱い男編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、樹里達に先行してひと足早く女?(じょか)の夫である伏義(ふくぎ)を探しにある町に来ました。

しかし、天性の憶病者である伏義は、それを察知し、働いていた宿屋から逃げ出してしまいました。

「ひい」

伏義はひたすら隣の町への道を駆けていました。

(女?め、どうして私がここにいるってわかったのかな。女?除けのお札が効かなくなったのかな?)

伏義は首を傾げます。

(有効期限は今年いっぱいだったはずなのに)

「とにかく、もう一度女?除けのお札を調達しないとな」

伏義はお札屋を探す事にしました。

「おのれ、あの腐れジジイ共が!」

その頃、女?は再び樹里達を追いかけ始めていました。

「む?」

何か懐かしい感覚になる女?です。

「これは……」

女?の姿が人間の姿に戻りました。

「貴方」

ポッと頬を染める女?です。気持ち悪いです。

「黙りゃ!」

女?は地の文に突っ込みました。

第五百三十二話　逃げる男、追う女編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は孫左京に追いつき、伏義（ふくぎ）がすでにいなくなっているのを知りました。

「役立たずね」

蘭が左京を罵ります。

「俺のせいかよ！」

左京があるお笑いコンビのような突込みをします。

「ある意味、猿のせいじゃな。伏羲は勘が鋭いのじゃ。お前が近づいて来るのを感じて、逃げたのじゃろう」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いますが、その手は璃里のお尻を撫でています。

「お師匠様、お止め下さい。我らが恥ずかしいです」

元始天尊と太上老君が声を揃えて言います。

「お前らが言うな！」

道人が言い返します。確かにそうです。

「取り敢えず、姉上様から離れろ、エロジジイ！」

左京が道人を殴りました。

「む？」

霊宝天尊が赤ら顔を空に向けます。

「女（じょか）？が動き出したぞ。こちらに向かっておるな」

その言葉に一同は騒然としました。

「そうなんですか」

しかし、樹里は笑顔全開です。

第五百三十三話　二人の馴れ初め編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、女?(じょか)の接近を知り、慌てます。

正確には樹里以外の面々が、ですが。

「伏義(ふくぎ)は恐らく、女?が追って来たと思っておるのだろう。そして、女?は伏義が動いたので、奴の居場所に気づいたのだ」

太上老君が真顔で解説しますが、右手が遊魔のお尻を撫でています。

「こら、老子よ、お主もそのような事をしているではないか！」

鴻均道人(こうきんどうじん)が怒ります。

「触るなら、璃里ちゃんにしなさい。ええぞお」

そこまで言って、孫左京に如意棒で殴られます。

「いい加減にしろ、エロジジイ共！」

左京は切れました。

「この方達、尊敬できそうにゃん」

リックが目を輝かせて呟きます。

それを蘭と鷺佗と亜梨沙が白い目で見ます。

「伏羲は哀れな男でな。その気がないのに女?と付き合わされていたのだ」

霊宝天尊が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

第五百三十四話　伏義捕獲作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、伏義（ふくぎ）を捕まえるために作戦会議を開きました。

「猿や狼が行ったのでは、気の弱いあいつは逃げるだけじゃ。ここはやはり、璃里ちゃんに」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

「いや、ここはやはり遊魔ちゃんでしょう」

太上老君が言います。

「何言ってんだ、このジジイ共」

亜梨沙が呆れて言います。蘭と鷺佗は項垂れています。

「リックさんと遊魔さんがいいでしょう」

樹里が笑顔全開で言います。

「え？」

リックは樹里に選ばれて涙ぐんでいます。

「嬉しいにゃん、お師匠様！」

樹里に抱きつこうとして、

「お前様！」

と遊魔の踵落としを食らいます。

こうして、伏義を捕まえる作戦が開始されました。

「どうだ、猿、僕はお師匠様に選ばれたんだにゃん」

リックが誇らしげに言うのを左京は悔しそうに見ています。

（いつかぶっ飛ばす）

左京はいつもぶっ飛ばしていると思います。

第五百三十五話　リック夫妻の冒険編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里に指名され、リックと遊魔は、伏義（ふくぎ）を追いかけて捕まえる事になりました。

「お前様、おめでとうございます」

遊魔はリックがやる気になったのが嬉しいようです。

「さすがお師匠様だにゃん。僕の本質を見抜いているにゃんよ」

二人は鴻均道人（こうきんどうじん）が分けてくれたきんと雲に乗って、伏義を探します。

「そいつは、宿屋の人の話だと、何も持たずに逃げ出したそうにゃん。だから、隣町を目指してるにゃんよ」

いつになく鋭いリックです。何か企んでいるのでしょうか？

「余計な事を言わないで欲しいにゃん」

地の文に懇願するリックです。

しばらく進むと、隣町の入口にある城門が見えて来ました。

妖怪に備えて武器をたくさん準備している町のようです。

「この姿はまずいにゃん。人間に化けるにゃんよ」

リックが言います。

「はい、お前様」

二人は、完全に人間の姿になりました。

第五百三十六話　リック、酒池肉林する？編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

リックと遊魔は町に入りました。

「パラダイスにゃん！」

リックが雄叫びを上げます。

そこは水着美女達が闊歩する温泉街でした。

「お前様！」

遊魔がリックを殴ろうとしますが、リックはすばしこく、

「今日は羽を伸ばすにゃん」

と逃げてしまいました。

「お前様！」

遊魔はカンカンですが、リックの姿はどこにもありません。

遊魔は泣きそうになりました。

「どうしたの？　迷子？」

するとそこへ何と探している伏義（ふくぎ）が現れました。

「迷子ではないですう。夫が勝手に行ってしまって」

遊魔はウルウルしながら伏義を見ます。

「そうなの」

伏義は遊魔が結婚している事に驚きました。

（まだ子供みたいだけど。騙されて結婚させられたのかな？）

リックは結婚詐欺師にされそうです。

「私の働いているお店で休みなさい。ご飯くらいなら食べさせてあげるよ」

伏義は遊魔を連れて自分が働く食堂に行きました。

第五百三十七話　伏義、遊魔に惚れる？編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）は、偶然出くわした遊魔を連れ、新たに働き始めた食堂に行きました。

（何だか可愛い子だなあ）

伏義はマジマジと遊魔を見てしまいます。

「あの、何か？」

遊魔がその視線に気づいて伏義を見ました。

「ああ、何でもないよ。さあ、ここだよ」

伏義は慌てて誤魔化し、遊魔を食堂で働く人達の休憩室に案内しました。

「残り物だけど、おいしいよ」

伏義が料理を出すと、

「頂きます」

遊魔は凄まじい勢いで食べます。唖然とする伏義です。

（亭主がロクなものを食べさせていないんだな）

リックは外道な夫にされそうです。

「ご馳走さまでした」

遊魔は残り物を全部平らげてしまいました。

「可哀想に。旦那に虐げられているんだね」

「はい？」

遊魔は伏羲の言葉の意味がわかりません。

「私が力になるよ。貴女の旦那と話をつけてもいいよ」

「そうなんですか」

思わず樹里の口癖が出てしまう遊魔です。

第五百三十八話　遊魔、求婚される編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はイライラしています。

「どうしたのよ、左京？」

亜梨沙が尋ねました。

「何だか、俺達、出番が減ってないか？」

左京の言葉に亜梨沙は肩を竦め、

「あんたが人気ないからでしょ」

「うるせえ！」

左京は図星を突かれて切れました。

「そうなんですか」

樹里の笑顔全開のその言葉に項垂れる左京です。

遊魔は食堂にあった残り物を全部食べてしまいました。

口あんぐりの伏義（ふくぎ）です。

「ご馳走様でした」

遊魔は深々とお辞儀をしました。その途端、隠していた猫耳が出てしまいます。

「あ！」

伏羲が驚いたので、遊魔はそれに気づきました。

「君は妖怪なのか？」

伏羲が尋ねます。

「黄身は半熟が好きです」

意味不明な回答の遊魔です。

「妖怪なら、私と新しい生活を始めないか？　君に惚れた」

伏羲はいきなり求婚しました。

「は？」

遊魔は意味がわかりません。

「私も妖怪なんだよ」

伏羲は言いました。

第五百三十九話　伏義の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）は遊魔を自分の部屋に連れて行きます。

もはや誘拐犯のようです。

「私の名は伏義。怖い女房から逃げて、ここで暮らしている」

伏義は言いました。

「そうなんですかあ」

遊魔オリジナルの笑顔全開応答です。

「君もロクでなしの亭主なんかと別れて、私の妻になってくれ。悲しませたりしないから」

伏義は本気で遊魔を口説きます。

「旦那様に相談してみますね」

遊魔は無邪気な笑顔で言います。

伏義は涙を零しました。

（心の奥底まで縛られているのか）

誤解もここまで来ると只の馬鹿者です。

「相談なんかしてはいけない。うまく丸め込まれるだけだ」

伏義は勇気を奮い起こして、外道の夫（リックの事です）と話す事にしました。

「君の亭主の居場所を教えてくれ」

遊魔は首を傾げて、

「旦那様はあ、女の人がたくさんいる所にいると思います」

伏義は、

（クズめ）

とリックを心の中で罵りました。

第五百四十話　リック対伏義編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）は遊魔に惚れてしまったため、完全にリックを「外道確定」です。

彼は遊魔を伴い、町で一番美女が集まる「女仙の館」という店に向かいます。

「外道が行くなら、多分あそこだ」

伏義は闘志剥き出しで歩きます。

遊魔は伏義を不思議そうに見つめながらついて行きます。

孫左京は更にイラついていました。

「猫のヤロウ、本当に伏義を探してるのかな？」

左京は顔が悪人になって来ています。

「それは言えてる」

蘭が同意します。

「我らが動けば伏義は逃げてしまうぞ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱いて言います。

「こら！」

左京が殴りました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

リックは遊魔の接近を感知しました。

「まずいにゃん、逃げるにゃん」

リックが裏口から逃げ出すと、伏義が待っていました。

「やっと出て来たか、外道め」

伏義の言葉にキョトンとするリックです。

第五百四十一話　伏義の主張編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

伏義(ふくぎ)はリックを鬼の形相で睨みつけ、

「可愛い奥方を放置し、お前は何をしているのだ、外道！」

と言い切ります。

リックはますます意味不明地獄に陥ります。

「何言ってるにゃん？　あんた誰にゃん？」

「私は伏義(ふくぎ)と申す。お前が虐待している奥方を哀れに思う者だ」

伏義は胸を張って言いました。

リックは仰天します。

（おお！　労せずして尋ね人を見つけたにゃん！）

樹里に褒められ、ご褒美のキスをしてもらう妄想で鼻血を出すリックです。

「な、何だ！？」

それを見て後退(あとずさ)る伏義です。

「お前様！」

次の瞬間、リックの妄想を見破った（？）遊魔の踵落としが炸裂します。

「にゃん！」

リックはかわす事もできず、縦に地面に減り込みました。

唖然とする伏義です。

そして彼は、虐待されていたのは夫の方だと悟りました。

でも、夫がロクでなしなのは確かだと知りました。

第五百四十二話　伏義の企み編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

リックは伏義（ふくぎ）と話をします。

「僕はお師匠様から言われて、貴方を探しに来たにゃん」

リックはこれまでのあらすじを説明しました。

「ええ！？」

伏義（ふくぎ）は、女（じょか）？の名前が出たところで仰天しました。

「あの女と戦ったのですか？」

尊敬の眼差しでリックを見る伏義です。

「僕達は何度も危険な目に遭いながら、蛇女と戦ったのです」

リックは涙ぐみながら言います。

「遊魔さんも危険な目に遭ったのですか？」

伏義が尋ねます。遊魔は、

「旦那様が守って下さいましたので大丈夫でした」

その言葉に驚愕する伏義です。リックはもっと驚いています。

（何か後が怖いにゃん）

遊魔に殺されるのではないかと思うリックです。

「わかりました。元妻とは言え、そのような非道、見過ごす訳には参りません」

伏羲は女？をリック達に倒してもらい、隙を見て遊魔を連れて逃げようと考えました。

第五百四十三話　伏義の過去編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）と話をしたリックは三人で樹里達が待つ場所へと戻ります。

（いっそここでこいつを突き落として……）

リックの暗殺を企む伏義ですが、それでは猛妻の女？（じょか）がそのままです。

（もう少し我慢しよう）

犯罪者のような目つきの伏義です。ロリコンでしょうか？

リック達のきんと雲は樹里達がいる町に着きました。

「お久しゅうございます、道人様」

伏義は鴻均道人（こうきんどうじん）に跪きます。

「うむ」

道人の話では、伏義と女？は元は道人の弟子でした。

気の強い女？が気の弱い伏義に惚れて二人は結婚しました。

「妻は術を覚えるのが早くて、どんどん強くなりました」

伏義は術を全然覚えられず、引け目を感じたのです。

「妻は私を叱り、もっと真剣に取り組むように言いました。私はそれが堪えられなくなって、逃げ出したのです」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

第五百四十四話　真実の愛編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは話を聞くうちに伏義（ふくぎ）に同情していきます。

「そうにゃん。男は縛られるのは嫌にゃん。縛るのは好きだけど」

リックの変態発言に呆れる孫左京達です。

「其方の不甲斐なさも女（じょか）?を猛妻にした一因じゃぞ」

偉そうな事を言いながらも璃里のお尻を撫でている鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「いい加減にしろ！」

左京が道人を殴ります。

「仰る通りです」

伏義は項垂れます。

「しかしまた、不甲斐ない其方だからこそ、女?は惚れたとも言える」

太上老君が言います。右手は遊魔のお尻です。

「僕の遊魔に何するにゃん！」

リックは高級またたびで黙ります。

「そんなもんで引き下がるな！」

左京がリックを叱ります。

「独り者の左京にはわからないにゃん」

左京はギクッとします。

「真実の愛とは何も求めない事にゃん」

リックが言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第五百四十五話　伏義の決意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）は意を決しました。

「わかりました。女（じょか）？の事は私が何とかします。もう一度彼女と向き合ってみます」

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で応じます。すると伏義は、

「貴女のために力を尽くします」

と樹里の手を握りました。

「こいつ、只の女垂らしじゃねえのか？」

孫左京が呟きました。亜梨沙が大きく頷きました。

「女？を説得してくれるのか？」

鴻均道人（こうきんどうじん）が尋ねます。

「はい。うまくいくかどうかわかりませんが」

伏義が言いました。

「遊魔はあ、伏羲さんは大丈夫だと思いますう」

遊魔の言葉に涙ぐむ伏羲とムッとするリックです。

遊魔はただ、自分にたくさんご馳走を食べさせてくれた伏羲をいい人だと思っているだけです。

（こいつ、後で崖から突き落とすにゃん）

リックは悪い顔になります。

そして、伏羲と共に女?の所に行く者を選ぶ事になりました。

第五百四十六話　女?を鎮め隊結成編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)を説得するために出発する伏義(ふくぎ)に同行する者を選びます。

「勿論俺は行くぞ」

孫左京が名乗り出ます。

「ならば俺も」

露津狗が言います。

「わかった、俺も行こう」

鷺基が言います。

「イケメン三人衆だな」

左京が言いますが、蘭と亜梨沙が白い目で見ます。

「頼みますよ、皆さん」

樹里が笑顔全開で言います。

「はい、お師匠様」

左京達は練習したかのような見事なハモりで言いました。

「では参りましょう、お師匠様」

伏羲が言うと、鴻均道人（こうきんどうじん）は逃げ出そうとしていました。

「待て、こら！」

左京が殴ります。

「貴方が行かずにどうするのですか」

元始天尊がここぞとばかりに言います。

太上老君と霊宝天尊が頷きます。

「戦いに行くのではないから大丈夫ですよ」

璃里が言います。すると道人は、

「璃里たんも行こう」

「いいから早く乗れ！」

鷺佗が蹴飛ばしました。

第五百四十七話　女？と伏義編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

伏義(ふくぎ)と孫左京、露津狗、鷺基の有志と、無理矢理乗せられた鴻均(こうきん)道人(どうじん)は大型きんと雲で女?(じょか)のいる所に向かっています。

「どうして儂が……」

ブツブツ言いながらきんと雲を動かす道人です。

「うるせえ、ジジイ！」

蘭と亜梨沙に「イケメン三人衆」をあっさり却下された左京は機嫌が悪いです。

「伏義殿」

鷺基がこっそり話しかけます。

「何ですか？」

「女子(おなご)は結婚すると変わるものですか？」

すると伏義は実に悲しそうな顔になり、

「そうです。ギョッとする程変わります」

その答えにビクッとする鷺基と露津狗です。

「あれも恋人同士の頃は優しかったのですが、夫婦となってからはそれはもう恐ろしくなって」

伏羲は涙ぐんで言います。

「女?(じょか)は心の優しい女だったのだ。お主のせいで変わってしまったのだ」

道人が腹いせのように言い放ちます。

第五百四十八話　女?、激怒する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は次第に女?（じょか）に近づいています。

「女?は本当にお前の事が好きなのじゃ、伏義（ふくぎ）。それを理解せぬ事にはあれの怒りは収まらぬ」

鴻均道人（こうきんどうじん）は手持ち無沙汰そうに指をクネクネさせます。

「それはわかるのですが、どうにもこうにも……」

伏義はもはや女?恐怖症のようです。

「情けねえ男だ」

左京が罵りました。すると伏義は、

「猿に言われたくない。お前とて、樹里様に思いを伝えられないではないか」

「ぐ」

悔しそうに伏義を睨む左京です。

「私は今は遊魔さんに惚れているのです。女?を説得はしますが、彼女の愛には応えられません」

伏羲は言いました。

伏羲の言葉を風が女?に伝えました。

「何と」

あまりの事に涙を流す女?です。

「おのれ、遊魔という女子(おなご)!」

女?は再び巨大な蛇に変化(へんげ)します。

女?の怒りは天地を揺るがしました。

第五百四十九話　世界崩壊？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女？（じょか）は怒り狂い、飛翔します。

彼女が通過した場所は草木は枯れ、人々は倒れ、牛馬も苦しみます。

「この世の終わりじゃ」

飛翔する女？を見上げた老人が呟きました。名前は四郎ではありません。

太上老君達は女？が急速接近して来るのを感じていました。

「どうしたというのだ？」

元始天尊は女？の壮絶な怒りを感じ、困惑しています。

「この波動は嫉妬です。何があったのでしょう？」

鷺侘が言いました。

「また左京達が何か仕出かしたんでしょ」

亜梨沙が言いました。半分当たっています。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

孫左京達も女？の接近を知りました。

「何だか知らないが、もの凄く怒ってる」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言います。

「そんなあ……」

すでにビビッている伏義（ふくぎ）です。

「やっぱり化け物なんだよ、あいつは。ぶちのめすしかないんだ」

左京が言いました。

第五百五十話　伏義切れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は自分のきんと雲に乗り換えました。

「化け物を退治してくるぜ」

左京はそう言うと飛び去ります。

「いいのか？」

鴻均道人（こうきんどうじん）が伏義（ふくぎ）を見ます。

「えっ？」

伏義はキョトンとしました。

「お前は奥方が孫左京のような阿呆に退治されて良いのかと訊いておるのだ」

道人が言うと、

「誰が阿呆だ！」

左京が戻って来て道人を殴りました。

「悪口はもっと小さい声で言え」

左京はまた飛び去りました。

「私は……」

伏羲は俯いてしまいます。

「呆れた男だ。いくら何でも女?(じょか)が気の毒だ」

鷺基が言いました。鷺佗が聞いたら大変です。

「全くだ」

露津狗が同意します。亜梨沙が号泣しそうです。

「じゃああんた達が女?の夫になってくれ!」

伏羲の逆ギレです。鷺基と露津狗はギクッとします。

「あいつと暮らした事もないくせに偉そうな事を言わんでくれ」

伏羲は言いました。

第五百五十一話　孫左京、特攻す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は飛翔する女?(じょか)を見てビクッとします。

(前より強くなってねえか?)

一人で飛び出した事を後悔する左京です。

「猿ーッ！」

女?も左京に気づき、速度を上げました。

「げ」

左京は身じろぎます。

その時、彼はリックの言葉を思い出しました。

「真実の愛とは何も求めない事にゃん」

リックの出まかせですが左京はわかっていません。

「俺はお師匠様のために戦う！　何も見返りは求めない！」

左京は如意棒を取り出して振り回しながら、

「行くぜ！」

と女?に向かいました。

「貴様如き、一瞬で屠(ほふ)ってくれるわ!」

女?の形相が凶悪になります。

樹里は左京が一人で女?に向かった事を感じました。

「お猿さん」

樹里は悲しそうに左京がいる方角を見上げます。

「樹里……」

璃里が樹里の手を取ります。

御徒町姉妹の思いが届いたのでしょうか?

「うおお!　燃えて来たぞ!」

左京は叫びました。

第五百五十二話　親友の助太刀編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達と一緒にいたすっかり影の薄い存在の牛魔王が言います。

「左京を助けに行くぞ」

「はい、お館様」

奥方の鉄扇公主が答えます。すると牛魔王は、

「其方は残れ。我らの新しい命のためにな」

「お館様……」

二人はヒシと抱き合います。感動的な場面ですが、蘭と亜梨沙は白い目で見ています。

「では参る」

牛魔王は自分専用の雲に乗り、樹里を見ます。

「頑張って下さい、牛魔王さん」

樹里は牛魔王のアイコンタクトを理解したのか、笑顔全開で言いました。

「牛魔王、行きまーす！」

鉄扇公主の鋭い目に気づき、牛魔王は慌てて飛び立ちました。

「男って奴は……」

鷺佗が呆れ気味に言い、お尻を触っていた太上老君の手を抓りました。

孫左京は女?(じょか)の鱗攻撃(うろこ)に苦戦していました。

「畜生、近づけねえ」

左京はきんと雲を女?から遠ざけます。

「猿、もう終いか?」

女?がニヤリとします。

第五百五十三話　女？の鱗の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王が飛び去ると、蘭が鉄扇公主に尋ねます。

「貴女、妊娠してるの？」

「ええ。人妻ですから」

公主のそのドヤ顔にムッとする蘭と亜梨沙です。

「公主ちゃんも美人にゃん」

リックが呟きます。

「お前様！」

遊魔の踵落としは不発に終わりましたが、逃げたリックに馨が足を引っ掛けて倒します。

「何するにゃん！」

リックが怒って立ち上がると、彼の懐から何かがこぼれ落ちました。

「何、これ？」

亜梨沙が拾い上げました。

「それは女？の鱗ではないか！」

元始天尊が驚きました。

「え？」

亜梨沙は思わず鱗を蘭に渡します。

「エンガチョ切った！」

亜梨沙が言います。呆れる蘭です。蘭は鱗に何か書いてあるのに気づきました。

「これは……」

それこそ女？の強さの秘密でした。

「どうしたものか」

牛魔王は女？と孫左京の壮絶な戦いを見て傍観しています。

「てめえ、何しに来たんだ！？」

左京が切れました。

第五百五十四話　伏義の説得編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蘭は女(じょか)？の鱗を樹里に渡しました。

「それがあの蛇女の強さの秘密です」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「鱗一枚一枚に光明真言が書き付けられているのか」

太上老君が樹里と璃里の肩を抱いて言います。

「こら、独り占めは許さんぞ！」

元始天尊がアホな事を言い出します。

「男って奴は……」

鷺侘と蘭が呆れます。

「あら、男はいいものよ」

鉄扇公主が言います。蘭と亜梨沙が公主を睨みました。

孫左京は女?の鱗の攻撃で疲れ果てていました。

そこへ伏義(ふくぎ)達の乗る大型きんと雲が到着しました。

伏義は女?に呼びかけます。

「今まですまなかった。其方と話がしたい」

ビビりながらも言う伏義です。

「黙りゃ！　お前の心は既に猫又の娘にあるのだろうが！」

女?は左京を無視して、大型きんと雲に迫ります。

「ひいい！」

どうして女?がその事を知っているのかわからない伏義です。

第五百五十五話　伏義、踏ん張る編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)は激怒しています。鴻均道人(こうきんどうじん)はビビります。

「儂らまで巻き込むな、伏義(ふくぎ)！　何とかせい！」

伏義は道人に背中を押され、きんと雲の一番前に出ました。

目の前に鬼の形相の女?が迫ります。

「ひいい！」

ビビる伏義です。

（しかし、ここで負けては遊魔さんとの楽しい生活は手に入れられない）

この期に及んでまだそんな事を夢想する伏義です。

しかも彼は強かになっていました。

迫る女?を見上げます。

「愛しい人」

目を潤ませて言います。女?はその目にドキッとします。

「お前様」

女?の目がトロンとします。

(女?はこやつの事を好いておる)

道人は少しホッとしました。

「すまなかった。其方を悲しませて」

伏羲は演技力で女?を落ち着かせるつもりです。

(隙を見て退治してくれ)

伏羲は孫左京に目で合図します。

「何だ、あいつ?」

気持ち悪くなる左京です。

第五百五十六話　伏義の策略編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

伏義（ふくぎ）の作戦は成功したようです。

女？（じょか）は人間の姿に戻り、きんと雲に乗り込みました。

「お師匠様失礼致しました」

女？（じょか）は鴻均道人（こうきんどうじん）に頭を下げます。

「よいよい」

道人は冷や汗を流しながら引きつり笑いです。

「お前様」

女？は潤んだ瞳で伏義を見つめます。伏義もドキッとしました。

（いつもこうなら奇麗なのに）

伏義は思いました。

「つまらねえな」

孫左京は不満そうです。

「お前様」

「女？」

二人はヒシと抱き合います。

流れがおかしくなって来ました。

「困ります、女？様」

どこからか、声が聞こえます。

「誰だ？」

左京が周囲を見渡します。

「あそこだ！」

牛魔王が天を指差しました。

「何！？」

上空に山のように大きな妖怪の姿があります。

「あれは！？」

道人も驚愕します。

「女？様、其奴のまやかしに騙されてはなりませぬ」

その妖怪は言いました。

第五百五十七話　新たなる敵編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

「面妖な気が現れたぞ」

太上老君が遊魔のお尻を触りながら言います。

リックは高級マタタビで買収されています。

「老師様、大概にして下さい！」

蘭が怒ります。

「これはあやつか？」

霊宝天尊が空の徳利を放り投げて言います。

「そのようじゃな」

璃里の肩を抱こうとしてかわされる元始天尊です。

「どうしたのよ？」

亜梨沙がキョトンとします。

「蚩尤（しゆう）が出て来たようだ」

太上老君が真顔で言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「蚩尤って、あの蚩尤ですか？」

蘭が震え出します。霊宝天尊が空を睨んで、

「そうじゃ。我らの祖である黄帝（こうてい）が封じた妖怪じゃよ」

「ユンケルですか？」

樹里が尋ねます。

「誰が佐藤製薬だ！」

霊宝天尊は切れました。

「女（じょか）？が蘇らせたと聞いた。まずいな」

元始天尊は真顔ですが、鷺佗のお尻を触ろうとし、鷺基に蹴飛ばされました。

第五百五十八話　蚩尤、ネタばらしをする編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蚩尤はヌウッと空の上から顔を下げて来ました。

「其奴は貴女様を謀っております」

其の言葉に血の気が引く伏義です。

「如何なる事か？」

女？は首を傾げて蚩尤を見上げます。

すると蚩尤は顔を赤らめて、

「その者は貴女様を討ち果たすためにそのような甘言を申しているのです」

と伏義を指差します。

「何と？　それは真かえ、お前様？」

女？が伏義を見ます。

伏義は全身から嫌な汗をたくさん掻いています。

「お返事なさいませ、お前様！」

女?はまた蛇の姿になります。

「ひいい！」

伏羲は恐ろしさのあまり、気絶しました。

「おのれ！　この私を騙したのか！」

女?が怒り狂います。

「まずいぞ」

鷺基と露津狗が呟きます。

「その通りじゃ！　煮るなと焼くなと好きにせい！」

鴻均道人（こうきんどうじん）は伏羲を突いてきんと雲から落としました。

第五百五十九話　伏義危機一髪編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

伏義(ふくぎ)は鴻均道人(こうきんどうじん)に大型きんと雲から落とされました。

「お前様！」

何故か女(じょか)？はそんな伏義を背中で受け止めます。

「遊魔さん……」

伏義の譫言(うわごと)が止めです。

「おのれ！」

女？は伏義を振り落としました。

「危ねえ！」

孫左京が素早く動き、きんと雲で伏義を助けました。

「わかりましたか、女？様。其奴は貴女様を謀(たばか)っていたのです」

蚩尤(しゆう)が得意そうに言います。

「あんた、随分酷い事をするな」

露津狗が呆れて道人を見ます。

「仙人の頂点とは思えぬな」

鷺基が同意します。

「うるさいわい。仕方なかったんじゃ」

道人は涙ぐんでいます。

「お主らはあの女の本当の恐ろしさを知らんからそんな悠長な事を言えるのだ！」

ほとんど絶叫系の道人です。

「……」

顔を見合わせる鷺基と露津狗です。

「今度こそ許さぬぞ！」

女？は叫びました。

第五百六十話　蚩尤対孫左京編

御徒町樹里はありがたい教典を授かるために西を目指しています。

蚩尤の行動によって、女?と伏義の関係は修復不能になりそうです。

女?を本当に怒らせたのは伏義の「遊魔さん」という譫言ですが。

「お猿さん、見抜いて下さい。本当に悪いのは誰なのかを！」

樹里のまともバージョンが急速起動しました。

その樹里の言葉は遥か遠くの孫左京に届きました。

「わかりました、お師匠様！」

左京は鴻均道人を殴ります。

「お前が一番悪い！」

道人は左京を睨み、

「違う！　悪いのは彼奴だ！」

と蚩尤を指差します。

「え？」

左京は改めて蚩尤を見上げます。

「よく見ると河東真君にそっくりじゃねえか」

河東真君とは、昔左京を取り押さえた天界の英雄ですが、顔が凶悪犯の人です。

「誰だ、俺の悪口を言う奴は！？」

蚩尤が睨みます。

「こいつじゃ」

道人は容赦なく左京を示しました。

唖然とする左京です。

第五百六十一話　蚩尤の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「ほうほう。お前が噂の孫左京か。一度戦ってみたいと思っていたのだ」

蚩尤はニヤリとします。

「お前は下がりゃ、蚩尤。この戦いは我のものぞ」

女?が怒鳴ります。さすがの蚩尤もそれには逆らえません。

「では、自分は猿と戦います」

「許す」

女?が言います。

「来い、猿。相手をしてやる」

蚩尤が飛翔します。

「俺に命令するんじゃねえ!」

左京は蚩尤をきんと雲で追いました。

その事を感じた樹里が言いました。

「お猿さん、その蚩尤こそ張本人です。倒して下さい」

樹里の言葉は左京に届きました。

「お師匠様のお許しが出た。てめえをぶちのめす！」

左京は如意棒を振り回して蚩尤を睨みました。

「この俺に勝とうなど一億年早いわ！」

蚩尤の腕が十本になり、その全てが青竜刀を持っています。

「げ」

焦る左京です。

「我らの強さを思い知れ」

「我ら？」

左京はキョトンとしました。

第五百六十二話　孫左京、苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は腕十本の蚩尤（しゆう）と睨み合っています。

「行くぜ、化け物！」

「来い、猿！」

蚩尤は青竜刀を振り回し、左京の接近を許しません。

「ならば！」

左京は如意棒を伸ばし、蚩尤を突きました。

「ぐおお！」

蚩尤はそのまま遥か彼方に飛んでしまいました。

「何だ、呆気ない」

左京が戻ろうとすると、

「待て！」

蚩尤が空から現れました。さっきより大きくなっています。

「おらあ！」

また如意棒で突くと飛んで行ってしまいました。

「もしかして見かけ倒しか？」

左京は今度こそ戻ろうとします。

「まだまだ！」

更に大きくなった蚩尤が現れます。

「何なんだよ、てめえは！？」

左京は切れました。

その頃、女？（じょか）は鴻均道人（こうきんどうじん）を睨みつけていました。

「貴方のせいで旦那様は悪い事を覚えた。まずは貴方から死んでいただく」

女？は往年の映画スターのような台詞を言いました。

第五百六十三話　鴻均道人、立つ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里が言います。

「私達も行きましょう。蚩尤はお猿さんが倒してくれます。あとは女?さんです」

すると元始天尊が、

「どうやらお師匠様が危ういようじゃぞ」

「ならばもう少し待ってからにしよう」

太上老君が酷い事を言います。

「そうじゃな。お師匠様がすべての元凶。責任をとってもらわんとな」

霊宝天尊が同意しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

その危機的状況の鴻均道人は、遂に戦う決意をしました。

「師匠に向かって何という口の利き方だ？　懲らしめてやるぞ」

道人は女？を睨み返します。

「大丈夫なのか？」

鷺基が露津狗に囁きます。

「さあ」

首を傾げる露津狗です。

「はあ！」

道人は気合を入れ、飛翔します。

「弟子が師匠に勝てるはずがない事を思い知るがよい！」

「何だあ？」

気絶していた伏羲（ふくぎ）が目を覚ましました。

第五百六十四話　鴻均道人の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「おらあ！」

孫左京はヘトヘトになりながら、次々に現れる蚩尤（しゆう）を如意棒で吹っ飛ばしました。

「待て待て！」

また現れる蚩尤です。左京は嫌になっていました。

「このヤロウ、いい加減にしろ！　何回同じ事させるんだ！？」

すると蚩尤が言いました。

「俺の兄弟は八十一人いる。だからあと三十回だ」

「何！？」

驚愕する左京です。

鴻均道人（こうきんどうじん）は気を漲（みなぎ）らせて、女？（じょか）に向かいます。

「お前はすでに師匠ではない、エロジジイ！」

女?の鱗攻撃で吹き飛ぶ道人です。

「ひい！」

鱗が剣山のように刺さった道人が伏羲(ふくぎ)の横に落ちて来ました。

「弱過ぎる」

呆れる鷺基と露津狗です。

「この程度か」

しかし、道人は立ち上がり、鱗を弾き飛ばします。

「少しは楽しめそうだな」

道人が言うと、

「ほざけ！」

女?が怒鳴ります。

「行くぞ！」

再び飛翔する道人です。

第五百六十五話　鴻均道人対女？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女？（じょか）が鱗攻撃をします。

「はあ！」

鴻均道人（こうきんどうじん）は浅田〇央も顔負けのトリプルアクセルでかわします。

「おのれえ！」

女？は更に鱗で攻撃します。

「とお！」

道人は華麗にかわします。

「もしかして、かわすので精一杯なのか？」

鷺基が言いました。

「いや、違う。お師匠様は鱗がなくなるのを狙っているのだ」

伏義（ふくぎ）が言います。

「もっと打って来い！　お主の憎しみの元であるその鱗を！」

道人は真顔で叫びました。

「うるさい！」

女？の鱗攻撃は激しさを増すばかりです。

「え？」

焦る道人です。

孫左京は八十一人目の蚩尤（しゆう）を跳ね飛ばしました。

「終わった……」

ゼイゼイ言っていると、

「まだだよ。今度は従兄弟軍団が相手だ！」

また似た顔が現れます。

「ふざけるな！」

左京は切れました。蚩尤はニヤリとします。

（残念ながら、俺も女？の鱗も尽きる事はない）

第五百六十六話　蚩尤の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蚩尤（しゆう）は孫左京を見てニヤリとします。

「どうした、猿？　もうヘロヘロか？」

図星を突かれ、左京は歯軋りします。

「お猿さん、もう一息です」

どこからか樹里の声が聞こえます。

「はい、お師匠様！」

左京は注射でも打たれたかのように元気百倍です。

「行くぜ、化け物！」

如意棒が蚩尤を突き飛ばします。

「茶番はおしまいだ！」

左京は飛んで逃げる蚩尤を追いかけ、如意棒で叩き伏せます。

「ぎゃうん」

蚩尤は煙のように消えました。

「畜生、俺は今までずっと幻と戦っていたのか」

左京はきんと雲で急上昇します。

「本体はどこだ？」

左京は空の上から地上を見渡します。

「探しても無駄だ。俺の居場所は貴様如きにはわからぬ」

蛍尤の声が言いました。

「てめえのような醜い化け物は可愛いお師匠様に敵対した時点で負けが決まってるんだ」

意味不明に怒る左京です。

蛍尤の高笑いが辺りに轟きました。

第五百六十七話　蚩尤の本体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は蚩尤（しゆう）の居場所を探りますが、全くわかりません。

（お師匠様、助けて下さい）

左京は目を瞑って樹里に願います。

つい、花畑を二人でじゃれ合って走る妄想をしてしまう左京です。

「お猿さん、蚩尤は上です」

樹里の声がしました。

「え？」

見上げると彗〇帝国の超巨大戦艦のような影が見えました。

「おのれ、御徒町樹里め、余計な事を！」

蚩尤の声が聞こえます。

「そこか！」

左京はきんと雲を飛ばして空の更に上に行きます。

「げ」

そこにいたのは、大き過ぎて全体が見えない蚩尤の本体でした。

「よくぞ来た。しかし、これで終いだ」

蚩尤は言いました。

鴻均道人（こうきんどうじん）は疲れ切っています。

「我の鱗は無尽蔵じゃ！」

鱗攻撃を続けながら、女？（じょか）が叫びます。

「ぬう」

道人は歯軋りしました。

「まずいな」

露津狗が呟きます。

「何か手はないのか」

鷺基が言いました。

第五百六十八話　蚩尤の猛攻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はあまりにも巨大な蚩尤（しゆう）に唖然とします。

「どうだ、参ったか？」

蚩尤がニヤリとしました。

「お猿さん、全ての元凶が蚩尤です。頑張って下さい」

また樹里の声が聞こえます。

「はい、お師匠様！」

左京はきんと雲で蚩尤に突き進みます。

「そんなに死にたいか、猿！」

蚩尤は十本の腕を縦横無尽に動かし、超巨大な青龍刀を振り回します。

「おっと！」

左京はそれを掻い潜り、蚩尤の懐に飛び込みました。

「おらあ！」

如意棒が蚩尤の喉元を突きます。

「効かぬわ、そのようなもの！」

蚩尤の青龍刀が左京を掠めます。

「うお！」

左京の胸から血が噴き出しました。

鴻均道人（こうきんどうじん）はまだ逃げ回っていました。

「鷺基！」

そこへ薔鏤（ばるきり）鬼吏達と共に鷺佗が来ました。

「お師匠様のお言いつけだ。来てくれ」

「わかった」

鷺佗と鷺基が行ってしまったので、寂しい露津狗です。

第五百六十九話　牛魔王動く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）は作戦続行中ですが女（じょか）？の鱗は終わりません。

「俺は孫の助太刀に参る」

存在感がまるでなかった牛魔王が言い、雲で飛び去ります。

「どうする？」

露津狗は伏羲（ふくぎ）を見ます。

「もう一度説得を……」

伏羲が立ち上がると、その顔を鱗が掠めます。

「ひい！」

蹲（うずくま）る伏羲です。露津狗は呆れました。

「何にしてもお師匠様を信じるしかないな」

樹里の命を受けて飛び去った鷺佗達を思う露津狗です。

孫左京は血塗れで蚩尤（しゆう）と戦っています。

「死に損ないが！」

蚩尤の猛攻に押され気味の左京です。

「助太刀致す！」

そこに大きな鉈を振り回しながら牛魔王が参戦します。

「貴様、我が眷属ではないか！　どういうつもりか？」

蚩尤が怒鳴ります。すると牛魔王は、

「誰が眷属だ、化け物め！　俺は常に女の子の味方だ！」

と言いました。呆れる左京です。

第五百七十話　牛魔王の因縁編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王は激怒しています。

「確かに貴様は俺と同じ牛魔族。しかし、俺は貴様ほど腐っておらぬわ」

大見得を切って大鉈を振り回す牛魔王です。

「見直したぞ、兄弟」

孫左京が感動して言いました。

「笑わせるな。貴様如きが加勢に来ようとこの俺の敵ではない」

蚩尤（しゆう）は高笑いします。

「わかっておらぬな！　我らには守るべきものがあるのだ！　貴様にはそれはない！　この違いは決定的だ」

何故か自分に酔いしれている牛魔王です。左京は唖然とします。

「いや、あるぞ」

蚩尤（しゆう）は自分の右腕を見せます。

そこには、

「喧嘩上等　女?命」

と刺青が彫られていました。仰天する牛魔王と左京です。

「俺は女?様のためなら死ねるぞ!」

牛魔王は歯軋りします。

「まずい。俺は公主のためには死ねない」

その言葉を耳にして左京は目を細めます。

「後で大変だぞ、兄弟」

牛魔王はギョッとしました。

第五百七十一話　孫左京、牛魔王と力を合わせる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

牛魔王は気を取り直します。

「俺は妻のためには死ねない。妻のために生きる」

うまい事を言った。ドヤ顔をする牛魔王に呆れる孫左京です。

「ふん、その程度の覚悟という事か。情けないな、牛魔王」

蚩尤（しゆう）が嘲ります。

「黙れ！　俺と孫が組んだら、この世に敵う者はいないのだ！　行くぞ！」

牛魔王は大鉈を振り回します。

「全く」

左京は呆れながらも牛魔王に合わせます。

「やるぞ、兄弟。かつて編み出した必殺技を！」

牛魔王が蚩尤を見てニヤリとします。

「必殺技？」

首を傾げる左京です。

その頃、鴻均道人（こうきんどうじん）は力尽き、きんと雲の上で伸びていました。

「もう終いか、ジジイ？」

女（じょか）？が笑います。

「もう動けん。無理！」

道人は開き直っています。

「そんなあ。お師匠様！」

伏義（ふくぎ）は泣きそうです。

「お待たせ致しました」

そこに鷺佗達と共に樹里が現れました。

第五百七十二話　女?の弱点編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?（じょか）は樹里が現れた事で警戒します。

「今度は何を企んでおるのだ!?」

女?の目が鋭くなります。

「企んでなどおりません。貴女に元の姿に戻って欲しいだけです」

樹里は笑顔全開で言いました。

「元の姿だと？　笑止！」

女?は樹里を嘲り笑います。

「高齢化ですか?」

樹里が尋ねます。

「誰が日本年金機構だ！」

女?は意味不明に切れます。

「お師匠様、始めます」

鷺佗が言います。

鷺佗、鷺基、薔鏤鬼(ばるきり)吏達が木桶を抱えて飛翔します。

「何をするつもりぞ？」

女？は鷺佗達に鱗攻撃を仕掛けます。

「させないわよ！」

そこに鉄扇公主が現れ、芭蕉扇で鱗を吹き飛ばします。

「数で来るか？　愚かな」

女？はニヤリとします。

「違うわ」

馨に乗った蘭と亜梨沙がやって来ます。

「何？」

女？が叫んだ時、鷺佗達が一斉に女？に白い液体を落としました。

「まさか？」

女？はそれを浴びて怯みます。

第五百七十三話　女?の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女?(じょか)は鷺佗達に白い液体をかけられ、目を見開きます。

「まさか、これは……?」

震え出す女?です。

「違うにゃんよ。そんな事したら、十八禁……」

更に後から現れたリックが言いかけ、遊魔の踵落としで倒れます。

「それは大根をすって作った汁です」

樹里が笑顔全開で答えます。

「やはりそうか。ならば我は……」

女?の鱗に書かれた光明真言が大根の汁で消えて行きます。

「大根の汁は墨を消す事が出来るのよ」

亜梨沙がドヤ顔で言うのに呆れる蘭です。

「ぬうう……」

女?の身体を溶かされた墨が流れ落ちます。

「女？……」

その様子を見て、伏羲（ふくぎ）が呟きます。

蚩尤（しゆう）とまさに雌雄を決しようとしていた孫左京と牛魔王でしたが、

「坊主め！」

蚩尤がいきなり飛翔したので、仰天しました。

「まずいぞ、孫！　奴はお師匠様の所に行くつもりだ」

「くそ！」

二人は蚩尤を追いました。

第五百七十四話　女?、伏義の元に還る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

伏義(ふくぎ)は女?(じょか)を見上げました。

「女?、すまなかった。全部私が悪い。許してくれ」

伏義はきんと雲の上で土下座しました。

「お前様」

女?は伏義を見下ろします。

「貴女の業を祓いますね」

樹里が印を結びます。

「オンアボキャベイロシャノウマカボダラマニハンドマジンバラハラバリタヤウン」

樹里は光明真言を唱えました。女?の身体が光に包まれます。

「おお！」

やがて女?は人間の姿に戻り伏義の前に立ちました。

「お前様」

「女？」

二人はヒシと抱き合いました。

「一件落着ね」

亜梨沙が蘭と顔を見合わせて言います。

その時です。

「待て待て！」

空から巨大な影が舞い降ります。

「科学忍者隊ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がタツノコプロだ！」

影の正体は蛍尤（しゆう）でした。

「女？様、私を好きだと仰ってくれた言葉は嘘なのですか？」

蛍尤の話に焦る女？、目が点の伏義です。

第五百七十五話　蚩尤の横恋慕編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蚩尤（しゆう）は本当に女?（じょか）を好いているようです。

「女?、どういう事だ?」

伏羲（ふくぎ）が尋ねると、女?は俯きます。

「お前が悪いんだよ。奥さんを大事にしないから」

露津狗が罵ります。伏羲はビクッとしました。

「さあ、女?様、私と共に新しい生活のための戦いをしましょうぞ」

蚩尤が右腕の「喧嘩上等　女?命」の刺青を見せます。

「私は……」

さっきまでの凄まじさは鳴りを潜め、赤面する女?です。

「おおう、女?しゃん、やっぱり可愛いにゃん!」

余計な事を言って遊魔に殴られるリックです。

「女?は我が妻。お前になど渡さぬ!」

伏羲が女?を庇うように立ち、蚩尤を睨みます。

「お前様！」

女?は感動して伏羲に抱きつきます。心なしかデレッとする伏羲です。

「おのれ！　貴様のような軟弱者に愚弄されたとあっては、この蚩尤の名折れ！」

蚩尤が巨大な青龍刀を振りかざしました。

第五百七十六話　蚩尤、フルボッコ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蚩尤（しゆう）は巨大な青龍刀を振り下ろします。

「おらあ！」

そこに駆けつけた孫左京と牛魔王が青龍刀を弾きました。

「おのれェッ！」

蚩尤が怒鳴ると、

「お前はもう死んでいる」

左京はモロにパクッた台詞を言います。

「何だと！？」

蚩尤は左京と牛魔王の攻撃を受け、鷺佗、鷺基、薔鏤鬼（ばるきり）吏達の銀の矢の乱れ撃ちを食らい、露津狗の業火を浴びました。

「何の！」

それでも退かない蚩尤ですが、

「まだまだ！」

馨の水流攻撃です。それに加えて、

「はい！」

蘭の竜巻に乗った亜梨沙のボディアタック。

「やあ！」

その上遊魔の踵落とし。

「はあ！」

太上老君と元始天尊と霊宝天尊の三位一体の気が放たれます。

「ぐはあ！」

遂に蚩尤はよろめきました。

「儂もいるぞ！」

鴻均道人（こうきんどうじん）が追い討ちの気を放ちます。

「ぬああ！」

蚩尤は倒れました。辺り一帯に轟々と土煙が立ちました。

第五百七十七話　蚩尤の改心編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

蚩尤（しゆう）は孫左京達の連携攻撃を受け、倒れました。

「やったか？」

左京が言います。すると、

「貴様ら如きにやられる蚩尤ではないわ！」

ぐおおっと蚩尤復活です。

「うわ！」

左京は慌ててきんと雲で離れます。

蚩尤は大きく息を吸い込みます。

「何をするつもりだ？」

伏羲（ふくぎ）が眉をひそめます。

「そんな事をするのなら、貴方の事を大嫌いになります！」

女（じょ）？が叫びました。

ギョッとする伏羲です。左京達も唖然とします。

「え？」

蚩尤は思わず息を吸い込むのを止めました。

「貴方の事は私の辛い時を助けてくれた友として好きです」

女？は頬を染めて言いました。

「……」

蚩尤の全身から闘気が失われて行きます。

「女？様」

蚩尤が小さくなり、大型きんと雲に乗り込みます。

「え？」

その姿を見て亜梨沙が目を見開きます。

「すっげえイケメンじゃん！」

亜梨沙は雄叫びを上げました。

第五百七十八話　亜梨沙、イケメンの海に溺れる？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

亜梨沙はイケメン天国に狂喜乱舞します。

鷺基、露津狗、伏羲（ふくぎ）、蚩尤（しゆう）。

周り中イケメンです。

「お師匠様、蚩尤さんを許してあげて下さい」

亜梨沙はウルウル目で懇願します。

「キモいぞ、亜梨沙」

ブサメンの孫左京が言いました。

「誰がブサメンだ！」

左京が地の文に切れました。

「すまぬ。私が貴方を惑わせたのですね」

女？（じょか）は跪く蚩尤に言いました。

「滅相もありませぬ。私の不徳の致すところです」

蚩尤は更に頭を下げます。

「蛍尤……」

涙ぐむ女？に鷺基も露津狗も馨もリックも胸キュンです。

「ちっ」

亜梨沙が舌打ちします。呆れる蘭と鷺侘です。

「貴方の背後に影が見えます。あの者が動き出したのですね？」

まともバージョンの樹里が蛍尤に尋ねました。

「はい。また力を蓄え始めております」

蛍尤は樹里を見て言いました。すかさずその視界に入ろうとする亜梨沙です。

第五百七十九話　魔王の影

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は地上に集まり、作戦会議です。

「しかし、彼奴（あやつ）の復活が早過ぎるな。儂はあと千年は大人しくしていると思ったが」

太上老君が遊魔のお尻を撫でながら言います。

リックは高級またたびにメロメロです。

「人間の悪意と憎悪と嫉妬などの負の思いが多過ぎるのだ。奴はそれを糧としている」

元始天尊が鷺佗に近づこうとして鷺基に矢を射られます。

「あいつって、誰だ？」

孫左京は牛魔王にこっそり尋ねます。

「俺に訊くな」

牛魔王もわからないようです。

「第六天魔王です」

呆れ顔で言う鉄扇公主です。

「やはり、一刻も早く天竺へ行くのだ、樹里よ。それが一番じゃ」

霊宝天尊が言いました。

「そうと決まれば、俺のきんと雲で」

左京が言うと、

「それでは意味がない。一歩一歩進んでこそ、天竺は己の目の前に姿を現すのだ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里のお尻を触りながら言いました。

第五百八十話　新たなる使命編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は取り敢えず鴻均道人（こうきんどうじん）を殴ります。

「何してるんだ！」

樹里はまともバージョンが続いています。

「第六天魔王はまた現れるのでしょうか？」

「恐らくな。奴の目的は仏法の破壊だ」

太上老君が樹里に近づこうとすると、左京が如意棒で殴ります。

「まだ何もしとらんぞ！」

老君が涙目で怒ります。

「これからするつもりだったんじゃねえか！」

左京は切れました。

「我らはこれより南に蠢く物の怪を退治て参ります。樹里様に置かれましてはどうぞ天竺へ急がれますよう」

女？（じょか）は伏義（ふくぎ）、蚩尤（しゆう）と共に跪きます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「何て言ったの？」

頭の悪い亜梨沙が蘭に尋ねます。蘭は呆れて、

「知らなくていいわよ、あんたは」

「そうなんですか」

亜梨沙は笑顔全開で言い、蘭に白い目で見られます。

女？達はやがて飛び去りました。

第五百八十一話　リックの過去編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

女(じょか)？達が去り、樹里達は再び西へと進み始めます。

そしてある町に着いた時でした。

「急用を思い出したにゃん。停止してる長編を更新しないと企画に参加できなくなるにゃん」

リックが突然意味不明な事を言い出し、駆け去りました。

「お前様！」

遊魔が追いかけようとすると、彼女の目の前の地面に大きな槍が突き刺さります。

「何だ？」

孫左京は如意棒を構えて周囲を見渡します。

ある宿屋の屋根の上に黒い胸当てとミニスカート姿の黒い猫耳の可愛い女の子が立っています。

「おお！」

太上老君が反応します。

「儂はやっぱり璃里ちゃんじゃ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱こうとしてかわされます。

「猫又か？」

霊宝天尊が尋ねました。女の子はピュンと屋根から飛び降り、

「如何にも。あたいは美衣由（みいゆ）。リックの許嫁さ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

第五百八十二話　遊魔対美衣由編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美衣由（みいゆ）と名乗る猫又の少女が現れました。

美衣由は遊魔を睨みます。

「リックったら、あたいという者がありながら、こんなボンヤリしたバカ女と子供まで作ったりして！」

美衣由は目を吊り上げて叫びます。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

「何だか面白い事になりそう」

無責任な立場の亜梨沙が孫左京に囁きます。

「という訳なので……」

美衣由はニコッとします。

「何だ？」

左京は美衣由の笑顔を妙に思いました。

「死になあ！」

いきなり鋭い爪を出し、ボーっとしている遊魔に襲い掛かる美衣由です。

「危ないですよお」

遊魔はボーッとしたままでかわします。

「舐めとんのか、おのれは！？」

更に怒る美衣由です。

「貴女はあ、旦那様とべったら漬けを食べたのですかあ？」

遊魔がボーッとしたまま尋ねます。

「何聞いてたんだ！　許嫁って言ったんだよ！」

美衣由は血管が切れそうです。

第五百八十三話　美衣由の言い分編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美衣由（みいゆ）は激怒しています。

「どこまで惚けた雌猫だよ！？　それにあんた、リックの力で猫又になったんだろ？　何て図々しいんだ！」

止め処なく怒りが湧き上がる美衣由です。

「遊魔はあ、人間になりたかったんですう」

遊魔はボーっとしたままで言います。

「意味不明な事言うな！」

美衣由はますます血管が浮き上がって来ます。

「リックの許嫁はあたいなんだ！　あんたは消えるか、ここでくたばるかだ！」

美衣由は再び鋭い爪を出し、遊魔に襲いかかろうとします。

「遊魔を殺めればリックさんの寿命を縮めますよ」

璃里が言いました。美衣由は璃里を睨みます。

「あんた、この雌猫の飼い主だね。どういう意味だい？」

璃里は笑顔全開で、

「リックさんは自分の命を分けて遊魔を猫又にしたのです。遊魔を殺めれば、リックさんの命を削る事になるのですよ」

「何！？」

美衣由はショックを受けたようです。

第五百八十四話　美衣由の落胆編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美衣由（みいゆ）は璃里の話を聞いてガックリとします。

「そんな……。それは生涯を共にすると誓った相手とする分魂（ぶんこん）の儀（ぎ）。許嫁のあたいを差し置いて……」

「美衣由さん」

項垂れる美衣由を心配し、遊魔が近づきます。

「触るんじゃないよ！　あたいはそこまで落ちぶれちゃいないんだ！」

美衣由は遊魔の差し伸べた手を弾いて立ち上がります。

「あの猫女、気分が悪いぞ」

孫左京が呟きました。亜梨沙が、

「私は何となくわかるな、あの子の気持ち」

「私も」

蘭が同意します。

「うう……」

そんな強がりを言いながらも美衣由はまた泣き出します。

「酷いよ、リック……」

遊魔は困った顔で樹里を見ました。

「ところで松任谷さん」

「私は美衣由だよ！」

美衣由は切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「貴女と同じ思いの殿方が見えますよ」

樹里の言葉に美衣由はハッとしました。

第五百八十五話　美衣由の事情編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は美衣由（みいゆ）に言いました。

「貴女を思っている殿方は、貴女がいつまでもリックさんに拘（こだわ）るのを嘆いていますよ」

その言葉にギクッとする美衣由です。

「何でそんな事がわかるんだよ、あんたは？」

すると亜梨沙が、

「決まってるじゃない、主役だからよ」

唖然とする美衣由と蘭達です。

「主役は俺じゃないのか……」

ひっそりと落ち込む孫左京がいます。

「貴女はその殿方と喧嘩をしたので、リックさんに慰めて欲しかったのですね？」

樹里は笑顔全開で言いました。美衣由がまた泣き出します。

「そうよお。あいつが私を大切にしてくれないから……」

「それは違うにゃん」

そこにリックそっくりのスケベそうな猫又が現れます。

「私はリックの兄のマックですにゃん」

左京達は仰天しました。

「ポテトのLもお願いします」

樹里が言いました。

「そのマックじゃねえ！」

マックは切れました。

第五百八十六話　マックと美衣由編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

マックは樹里のボケに切れましたが、何とか収まりました。

「あんたもスケベなの？」

亜梨沙が単刀直入過ぎる質問です。

「私はあの愚弟とは違うにゃん」

「磐神君ですか？」

亜梨沙が誰かの物真似をします。

一同が無反応で、亜梨沙は撃沈しました。

「美衣由（みいゆ）は愚弟のスケベなところが好きなのだにゃん」

マックが言いました。すると美衣由が、

「違うわよ！　あたいは貴方の堅物さが嫌なの！　全然優しくないし」

「それは誤解だにゃん。私は優しいにゃんよ」

二人の思いはすれ違っています。

「私は、お前があの愚か者をいつまでも追いかける姿が悲しいのだにゃん。私だけを見て欲しいにゃん」

リックと同じ顔がまともな事を言うので、亜梨沙と蘭は吐き気を催しました。

「そんな身勝手な事言わないでよ。あたいはリックの許嫁なんだからね」

「何にしても張本人を連れて来ないと」

孫左京が言いました。

第五百八十七話　リック対マック編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はきんと雲でリックを探しに行きました。

「リックは優しいのよ。あんたなんかと兄弟だなんて思えないくらい！」

美衣由（みいゆ）はリック教の熱烈な信者のようです。重症です。

「美衣由……」

マックは悲しそうに言いました。

「もういい。こうなったら、私はリックの側室で我慢するわ。だからもう私の事は諦めて」

美衣由は射るような目でマックを見て言いました。

「儂が仲を取り持とう」

太上老君が言います。

「遊魔ちゃんは儂の正室になれば良い」

するとリックを早くも見つけて来た左京が老君を殴ります。

「何抜かしてるんだ、エロジジイめ！」

「そうじゃ、そうじゃ」

囃し立てる元始天尊もちゃっかり鷺侘の肩を抱いています。

「お前が言うな」

鷺基が弓で射ます。元始天尊は逃げました。

「兄さん、僕と対決するにゃん」

リックがまともバージョンです。

「わかった」

マックもリックを見ました。

第五百八十八話　リックの攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックはまともバージョンのまま身構えます。

「お前様」

遊魔は心配そうです。

「いつでも来い、リック」

マックも構えます。

「頑張って、リック」

美衣由（みいゆ）が言いました。

リックは美衣由に見えている右側の顔だけデレッとします。

遊魔から見えている左側は真顔です。

「気持ち悪い奴」

亜梨沙が言いました。

「行くにゃん、マック！」

リックは呪文を唱えます。

「つるつるお肌の……」

著作権違反なので割愛します。

「ちゃん！」

リックは突き出した両手から業火を放ちました。

「子猫以外の術が使えるのか、あいつ？」

孫左京が感心します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

業火はマックに襲いかかりました。

「温いにゃん！」

マックは片手でその火を受け止め、消してしまいます。

「おお！」

左京と牛魔王は思わずハモってしまいました。

（スケベ猫を退治してくれ）

左京は心の中で願いました。

第五百八十九話　マックの反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

マックはリックを睨みます。

「貴様、本気で私を殺す気だったにゃんか？」

リックはニッとして、

「当たり前だにゃん。邪魔する奴は指先一つで……」

「お前様！」

遊魔が著作権違反を踵落としで未然に防ぎます。

「何するにゃん、遊魔！？」

リックが遊魔に文句を言っている隙にマックがリックの背後を取ります。

「終わりだにゃん、リック」

マックはフッと笑いました。

「滅びよ！」

マックが両手からリック以上の業火を放ちます。

「正義は勝つにゃん、マック！」

リックはそのまま業火を食らってしまいます。

「お前様！」

遊魔が叫びます。

「やった！」

思わず喜んでしまい、蘭や鷺佗に白い目で見られる孫左京です。

「効かないにゃん、マック」

リックは無事でした。全く燃えた形跡がありません。

「何だと！？」

マックは唖然としました。

「やはり、そうなんですね」

樹里もまともバージョンで変則の口癖です。

第五百九十話　マックの秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

マックの攻撃はリックに通用しませんでした。

リックはまだまともバージョンですが、そろそろ限界のようです。

「マックは僕が作り出した幻影にゃん」

リックの言葉に誰より驚いたのはマックです。

「そうなんですね」

樹里もまともバージョン起動中です。

「バカな事を言うなにゃん、リック。私は現にこうして……」

するとリックが、

「確かにマックは存在するにゃん。でもそれも僕の幻術にゃん」

マックは言葉も出ません。美衣由（みいゆ）も唖然としています。

「そうなんですかあ」

遊魔が言いました。

「最初は美衣由（みいゆ）から逃れるために作り出した幻影の兄だったにゃん」

「何だって！」

自分が騙されていた事を知り、美衣由が激怒しました。

「マックは僕の本当の兄に思えて来たにゃん」

リックは美衣由を見ます。

「マックと幸せになって欲しいにゃん」

「ふざけるな！」

美衣由は更に激怒しました。

第五百九十一話　美衣由の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美衣由（みいゆ）はリックの言い分に激怒しました。

「でも、僕と生きるより、マックと暮らした方が絶対にいいにゃんよ」

リックは美衣由を説得します。

「嫌よ、こんな堅物！　しかも幻術だなんて、いる価値ないわ！」

あまりの暴言に落ち込むマックです。

「ではこうしましょう」

樹里が言いました。

「リックさんの悪いところをマックさんに少し分けて、マックさんの良いところをリックさんに戻しましょう」

「でも、どっちにしてもマックは幻なんでしょ？　嫌よ！」

美衣由は聞き入れようとしません。

「幻術で作り出したお兄さんですが、お兄さんもリックさんから魂を分けてもらっているのですよ」

樹里は笑顔全開で言いました。美衣由はハッとしてマックとリックを見ます。

「さすが、お師匠様にゃん。その通りにゃん」

リックは言いました。

「マックは僕と同じにゃん。だからマックと暮らして欲しいにゃん」

第五百九十二話　リックの思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リックは美衣由（みいゆ）を杉良バリの流し目で見ます。

「ああん」

亜梨沙が巻き込まれて悶えます。呆れる蘭達です。

「お願いにゃん、美衣由。僕は君と遊魔の両方を愛してるにゃん」

「何だって!?」

「お前様！」

美衣由と遊魔のダブル踵落としが炸裂しました。

「にゃん！」

リックは伸びてしまいました。

美衣由はプイと背を向けて、

「呆れた。もうこんなスケベ、どうでもいいわ」

「あんたに任せる。後で嫌になってもあたいは知らないからね」

と言いました。

「美衣由さん……」

遊魔はボーッとしながらも感激しているようです。

「行こうか、マック。やり直そう、あたい達」

美衣由が言います。マックは嬉しそうです。

「美衣由、いいのか、こんな堅物で？」

「底なしのスケベよりはずっとマシよ」

美衣由はチラッとリックを見ます。

「お騒がせしました」

美衣由は樹里に頭を下げ、マックと共に去りました。

第五百九十三話　無事解決編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

マックと美衣由（みいゆ）が去るとリックはムクリと起き上がります。

「やっぱりやられたフリしてたのか？」

孫左京が言いました。リックは、

「美衣由は意地になっていただけにゃん。本当はマックが好きなのに強がっていただけにゃん」

「お前様」

遊魔はリックの男気に感激しています。

「ちょっとだけ残念だったにゃん」

亜梨沙がリックの声色で言いました。

「お前様」

遊魔が詰め寄ります。

「僕が言ったんじゃないにゃん」

リックは慌てて否定しました。

「見直したわ、リック」

蘭と鷺佗が言ったので、ギクッとする馨と鷺基です。

「立派でしたよ、猫さん」

樹里も言いました。左京がビクッとします。

「照れるにゃん」

そう言いながらも心の中では美衣由をマックに盗られた悔しさで涙するリックです。

「では、先を急ごうかの」

太上老君が樹里の肩を抱いたので、

「このエロジジイ！」

と左京に殴られました。

第五百九十四話　欧殿の使者編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は再び西へと進み始めます。

そこへ一人の薔鏤鬼吏(ばるきり)が飛んで来ました。

「お前は、素久琉堵(すくるど)！」

鷺佗が言いました。素久琉堵と呼ばれた女性は鷺佗に跪き、

「お懐かしゅうございます、鷺佗様」

「どうしたのだ、こんな遠くまで来て？　国で何かあったのか？」

鷺佗が尋ねます。素久琉堵は鷺佗を見上げ、

「欧殿(おうでん)様、ご復活の由に存じます」

鷺佗と鷺基、そして他の薔鏤鬼吏達は仰天しました。

「ねえ、なんて言ったの？」

語彙が少ない亜梨沙が蘭に尋ねます。

「彼女達の神様の欧殿は一度死んだのだけど、甦ったって事よ」

蘭は小声で言いました。彼女は露津狗を気遣ったのでした。

露津狗は複雑な表情です。自分と合体した俯炎驪琉(ふえんりる)こそが、欧殿を食い殺した張本人だからです。

「急ぎ国許へお帰りください」

素久琉堵が言いました。鷺佗は樹里を見ました。

第五百九十五話　孫左京、邪魔者扱いされる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗は救いを求めるように樹里を見ました。

「お行きなさい、鷺佗さん。新たなる修行の旅と思えば良いのです」

樹里はまともバージョン継続中です。

「忝い事です、お師匠様」

鷺佗と鷺基、そして薔鏤鬼吏達が樹里に跪きます。

「何かあったのだな、欧殿様の御身に？」

鷺基が尋ねます。欧殿の使者である素久琉堵が、

「世無蛾屡弩が動き出しました」

「世無蛾屡弩が？」

ギョッとする鷺佗と鷺基です。

孫左京が割り込みます。

「誰だ、そいつは？」

「昔、欧殿様が倒した魔物の頭領だ」

鷺基が答えました。

「何故奴は甦ったのだ?」

鷺佗が素久琉堵を見ます。

「第六天魔王が力を授けたと聞きました」

「何!?」

太上老君達がギョッとします。

「俺が一緒に行こう」

左京が言うと、

「断わる」

鷺基が言いました。

「何だと!?」

左京は切れました。

第五百九十六話　鷺佗と鷺基編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、助太刀を申し出て断られ、ムッとします。

「お前にはお師匠様をお助けするという重大な使命があろう、猿」

鷺佗が微笑んでいいます。何故か左京は赤面し、

「そうだな。とにかく、頑張れ」

「ありがとう」

鷺佗は樹里を見ます。

「しばらく留守に致します事をお許しください」

「はい」

樹里は笑顔全開で応じました。

「行こう、鷺基」

「ああ、姉さん」

二人は使者の素久琉堵（すくるど）と薔鏤鬼（ばるきり）吏達を伴って飛び立ちました。

「ついて行きたいんでしょ？」

亜梨沙が寂しそうに露津狗に尋ねます。

「いや。俺の出しゃばる事じゃない」

露津狗は苦笑いして亜梨沙を見ました。

「そうなんですか」

亜梨沙が懲りずに樹里の真似をしたので蘭が白い目で見ます。

「鷺侘……。ええ尻をしとったが」

元始天尊が呟きます。

「そのような事、仰らないでください、お師匠様」

弟子の男の子が言いました。

第五百九十七話　第六天魔王の影編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

いつになく真面目な顔で話し合う三清と鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「第六天魔王が動き出すのが早過ぎるな」

霊宝天尊が言いました。

「この世に苦しむ民が多過ぎるのだ」

太上老君が言います。

「こら！」

孫左京が老君と道人を殴ります。

「何をする！？」

道人と老君が左京を睨みます。

「何をするじゃねえよ！」

左京は二人に両側から抱きかかえられた璃里を助けました。

「油断も隙もねえな」

今度は元始天尊が璃里を連れて行こうとします。

「おら！」

如意棒が伸び、元始天尊は倒れました。

「真面目に話し合え、ジジイ共！」

左京は激怒しました。

「西の国々でも良からぬ者共が動きを強めておるようだ。急がねばなるまい」

酔っ払いですが、スケベではない霊宝天尊が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「出発だ」

左京が歩き出すと、

「左京、そっちじゃないよ」

亜梨沙が言いました。

第五百九十八話　寒い北の国の魔物編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

道中、たびたび西の空を見上げる露津狗に気づき、悲しそうな亜梨沙です。

（やっぱり鷺佗を忘れられないのね）

「亜梨沙、お前には儂がいるぞ」

樹里にチョッカイを出して孫左京に殴られた太上老君が言います。

「消えろ、ジジイ！」

亜梨沙はお尻を触る老君の右手を捩じ上げ、投げ飛ばします。

「儂等も西の国へ行かんか？」

鷺佗派の元始天尊が言います。

「儂は璃里ちゃんがいい」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

「では、儂は西の国へ行く。ついて来る者はおらんか？」

元始天尊が同行者を募りますが、普段の行いの悪さから誰も手を挙げません。

元始天尊は項垂れました。

「儂が行こう」

霊宝天尊が空になった酒瓶を振りながら言います。

「おお、同志よ」

元始天尊は涙ぐみます。

「世無蛾屡努（よむがるど）は相当な魔物だ。力を貸した方が良い」

霊宝天尊は真面目です。お酒さえ飲まなければ。

第五百九十九話　北の国から来た刺客編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

霊宝天尊と元始天尊は、鷺佗達の向かった北の国へ行く事になりました。

「寂しくなったらこれを儂だと思ってくれ」

元始天尊が自分そっくりなキモい人形を樹里に渡そうとしました。

「止めんか！　樹里がうなされる！」

太上老君が言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「フンだ」

元始天尊はムッとして弟子の男の子と共に雲で飛び去ります。

「では儂も」

霊宝天尊も雲で飛び立ちました。

「ふっふっふ」

どこかで歩が鳴きました。

「将棋の駒が鳴くか！」

歩が切れました。

「だから歩じゃねえよ！」

現れたのは男の薔鍍鬼吏（ばるきり）です。但し思いっきり悪人面です。

「河東真君（かとうしんくん）ですか？」

樹里が尋ねました。

「違う！　俺は世無蛾屡弩（よむがるど）様の一番弟子の卑琉度琉（ひるどる）。お前達を抹殺しに来た」

雑魚の癖に偉そうです。

「誰が雑魚だ！」

卑琉度琉は切れました。

第六百話　卑琉度琉の攻撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗達の主神である欧殿（おうでん）の敵である世無蛾屡弩（よむがるど）の一番弟子を名乗る歩が現れました。

「話を跨いでボケるな！　俺は卑琉度琉（ひるどる）だ！」

歩が切れました。

「だからもうそれはいい！」

卑琉度琉は更に切れます。すると露津狗が、

「ならば、我が神である俯炎驪琉（ふえんりる）の力を見せてやろう」

と言い、巨大な狼に変化（へんげ）しました。

「うお！」

焦る卑琉度琉です。

「があ！」

露津狗は卑琉度琉をその大きな口で飲み込もうとします。

「なんてな」

卑琉度琉はニヤッとして手鏡を出しました。

「これを見よ、狼の王よ」

露津狗は思わずその鏡を見てしまいます。

「ぬ！」

その途端、露津狗に宿っていた俯炎驪琉が鏡に吸い込まれてしまいました。

「何？」

露津狗は力を失い、元のイケメンに戻ってしまいます。

「その姿も気に食わん」

悪人面の卑琉度琉はイケメンが嫌いです。

第六百一話　魔鏡葎譚編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）の一番弟子を詐称する卑琉度琉（ひるどる）が現れ、妙な手鏡で俯（ふ）炎驪琉（えんりる）を吸い込んでしまいました。

「わはは、どうだ、参ったか！」

悪人面の卑琉度琉は高笑いしました。

「男前は皆滅びよ！」

卑琉度琉は露津狗を睨みます。

「あんたこそ滅びなさい！」

亜梨沙がボディアタックです。

「くそ」

卑琉度琉は何故か手鏡を使わず、亜梨沙をかわしました。

「その手鏡、もしかして魔鏡の葎譚（りったん）か？」

露津狗が尋ねました。卑琉度琉はニヤリとして、

「その通り。あらゆる霊体を吸い込む魔鏡、葎譚だ」

「何ておぞましい名前にゃん」

リックが身震いします。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「おらあ！」

孫左京は得意の不意打ちをしましたが、

「食らえ！」

卑琉度琉が手鏡から俯炎驪琉を放ちます。

「うわ！」

左京は俯炎驪琉に体当たりされ、吹っ飛びました。

第六百二話　操られる狼の王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

卑琉度琉（ひるどる）は魔鏡を使い、俯炎驪琉（ふえんりる）を操っているようです。

「皆殺しにしろ！」

俯炎驪琉が樹里達に襲いかかります。

「おらあ！」

孫左京と牛魔王の強力タッグが俯炎驪琉を押し留めます。

「ぐがあ！」

猛り狂う狼王を見て露津狗は涙を流します。

「露津狗……」

露津狗の苦しみを感じ、亜梨沙も涙ぐみます。

「狼王は左京達に任せて、私達はあの雑魚を」

蘭が耳打ちしました。

蘭と亜梨沙と鉄扇公主のトリオが卑琉度琉に近づきます。

「そうはいかないぞ」

卑琉度琉はニヤリとし、魔鏡から別の霊体を出しました。

「うわ！」

それはあの千年狐狸精でした。

「うお！」

千年狐狸精も凶悪な顔です。

「あんたね！」

千年狐狸精には個人的な恨みがある鉄扇公主は芭蕉扇攻撃です。

「そいつは霊体。風など受け付けぬ」

高笑いする卑琉度琉ですが、

「うへえ！」

自分が飛ばされた事に気づきました。

第六百三話　狼と狐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

俯炎驪琉（ふえんりる）だけではなく千年狐狸精まで現れ、樹里達はピンチです。

「狐のおねいさんは僕に任せるにゃん」

リックが進み出て子猫攻撃です。

「ふあ！」

ところが千年狐狸精は霊体なので、服を脱がせる事ができません。

「にゃあん」

リックは千年狐狸精の力で遥か彼方に飛ばされました。

「お前様！」

それを遊魔が追いかけます。

「役に立たないわね」

亜梨沙が罵りました。

「そうだ！」

鉄扇公主がある事を思い出します。

「どうだ！」

公主は自分の古着を出します。

「ぎえええ！」

硫黄の臭いがするその服のお陰で千年狐狸精の霊体は逃げ出しました。

「凄い、貴女の体臭」

亜梨沙が鼻を摘んで言いました。

「誰が加齢臭だ！」

公主は切れました。

「ぬおお！」

孫左京と牛魔王はまだ俯炎驪琉と押し合っています。

「力を貸すか」

太上老君が俯炎驪琉にデコピンしました。

「ぐあ！」

俯炎驪琉が倒れました。

第六百四話　魔鏡の秘密編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君のデコピンの威力に仰天する孫左京と牛魔王です。

「すげえ、ジイさん」

孫左京が珍しく尊敬の眼差しで老君を見ます。

「むおっほっほ、これが儂の実力じゃ」

調子に乗って樹里の肩を抱き殴られる老君です。

「嘘じゃ。俯炎驪琉（ふえんりる）は影故、簡単に倒せたのだ」

鴻均道人（こうきんどうじん）がネタ晴らしです。

「お師匠様、あんまりです」

老君は道人を罵りました。

「要するにあの魔鏡はその名の通り紛い物なのね」

蘭が推理を展開します。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「雑魚らしい話ね」

亜梨沙が肩を竦めます。すると、

「よくもやったな！」

と懲りずに卑琉度琉（ひるどる）が戻って来ました。

「紛い物じゃないぞ。長い間封じておいた霊体はもっと強いんだ！」

次に飛び出て来た霊体を見て左京は驚愕しました。

「六耳？猴（ろくじびこう）！」

そうです、別名「孫右京」です。

第六百五話　孫左京、切れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

六耳（ろくじびこう）？猴の登場に孫左京は呆然としました。

「ふおお！」

六耳？猴は如意棒を取り出すと、グルグルと振り回します。

「世の中には触れちゃいけねえもんがあるんだよ！」

左京は全身に闘気を漲（みなぎ）らせます。

「何を言ってるんだ、ボケ猿？」

卑琉度琉（ひるどる）がニヤリとします。

「おらあ！」

左京は一足飛びに卑琉度琉に近づくと、魔鏡を割ろうとします。

「ふお！」

しかし、六耳？猴がそれを阻みます。

「お師匠様！」

左京は血の涙を流して樹里に叫びます。

「お猿さん、貴方の心、しかと受け取りました」

まともバージョンの樹里が起動します。

「お師匠様、危ないです！」

六耳？猴に近づこうとする樹里を蘭が止めようとしますが、

「大丈夫じゃ。樹里に任せよ」

と太上老君が言いました。

「そうですね」

蘭はそう言ってお尻を触る老君を蹴飛ばしました。

樹里は六耳？猴を見ました。

第六百六話　世無蛾屡穹の囁き編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は六耳?猴(ろくじびこう)を見て、お経を唱え始めます。

「オンカカガミサンマエイソワカ」

地蔵真言です。

「ぐううう」

六耳?猴が苦しみ始めます。

「俺の使い魔に何をする!」

卑琉度琉(ひるどる)は次に玉石琵琶精(ぎょくせきびわせい)を出しました。

「死者の魂を蔑(ないがし)ろにするのは許しません」

樹里は卑琉度琉を見ます。

「インダラヤソワカ」

帝釈天真言の稲妻が卑琉度琉を直撃しました。

「ぎえ!」

卑琉度琉は痙攣して倒れました。

「はあ！」

太上老君が魔鏡を卑琉度琉の手から奪い取り、六耳？猴達の魂を解放します。

「お前達は逝くべき所に行くのじゃ」

真顔で言う老君ですが、右手でしっかり璃里のお尻を触っています。

「こら！」

孫左京が老君を殴りました。その時、

「ぐわお！」

卑琉度琉がその顔に相応しい叫び声をあげ、燃え尽きます。

「うぬら、我に逆らうか」

と声がしました。

第六百七話　世無蛾屡弩現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

声の主は世無蛾屡弩（よむがるど）のようです。

「我は世無蛾屡弩。うぬらを滅する」

天が暗くなり、稲光と共に巨大な影が現れました。

「O沢知事ですか？」

樹里が尋ねます。

「伏字になっていません、お師匠様」

孫左京が項垂れます。

「御徒町樹里よ、覚悟するが良い。我の眷属の恐ろしさを」

世無蛾屡弩がおぞましい声で言いました。

「きゃん」

亜梨沙と馨が失神しました。

「群馬県は未開の地ではありませんよ」

樹里が言います。

「我はO沢知事ではない！」

世無蛾屡弩は切れました。

「欧殿は死ぬ。その眷属もな」

世無蛾屡弩は高笑いしながら消えました。

「鷺佗達が危ない」

蘭が呟きます。

「お師匠様」

左京が樹里を見ます。

「すみません、寝てました」

左京達は唖然としました。

「鷺佗達には元始天尊と霊宝天尊がついておる」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱こうとして左京に殴られました。

第六百八話　樹里の決断編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）の影の言葉に孫左京達は騒然としました。

「鷺佗達のためにも一刻も早く天竺に着くのが其方達の使命だ」

真顔で説く太上老君ですが、右手は亜梨沙のお尻を触ろうとし抓られて赤くなっています。

「お師匠様」

もう一度樹里を見る左京です。樹里は今度は起きています。

「鷺佗達を助けに行きましょう」

「樹里！」

老君は胸を触られた蘭にビンタされて赤くなった顔で樹里を見ます。

「本当にそれで良いのか、樹里よ？」

鴻均道人（こうきんどうじん）も真顔ですが、璃里の肩を抱こうとして左京に殴られ、涙目です。

「鷺佗達は私達の仲間です。仲間の窮状を見捨てる者にありがたい経典が授けられるとは思いません」

樹里はまともバージョンです。

「なるほどな」

老君と道人は同時にニヤリとしました。

「行きましょう、お師匠様」

左京が言います。そこへリックと遊魔が戻って来ました。

第六百九話　鷺佗、欧殿と再会する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗達は欧殿の使者の素久琉堵（すくるど）と共に欧殿の宮殿に到着しました。

「よう戻った」

玉座の間の椅子に座った欧殿は以前と変わらず、巨大で強大です。

鷺佗達は欧殿の前に跪き、

「お懐かしゅうございます」

「其方達も変わりないようで安心した」

欧殿は言いました。そして、

「話がある」

と鷺佗を呼びます。鷺佗は鷺基と顔を見合わせてから、

「失礼致します」

と欧殿のそばに行きました。

「お前達は下がれ」

欧殿は鷺基達を玉座の間から下がらせました。

「欧殿様、これは如何なる事でしょうか？」

鷲佗は驚いて欧殿を見ました。

「お前だけに伝えたい事がある」

欧殿は言いました。

鷲佗達を追いかけた元始天尊と霊宝天尊は道に迷っていました。

「ここはどこかの？　ヒック」

霊宝天尊は酒臭い息で言いました。

「そんな事わからん」

元始天尊は逆ギレしました。

頭に手を当てて項垂れる弟子の男の子です。

第六百十話　欧殿、衝撃の事実を話す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

欧殿は鷺佗を近くに呼び、声を低くして言いました。

「我を殺めた者は狼の王であるが、その父がわかった」

「父、ですか？」

鷺佗はキョトンとしました。欧殿は更に声を落として、

「狼の王の父は、其方の弟の鷺基だ」

鷺佗は仰天しました。

「何と仰せです、欧殿様？」

鷺佗は何を言われたのかわかりませんでした。

「鷺基は元々お前とは姉弟（きょうだい）ではない事は存じておろう？」

欧殿は言いました。鷺佗は頷いて、

「はい。戦場で一人佇んでいた幼子。我が父が家に連れて帰り我が弟となりました」

欧殿も頷いて、

「鷺基は自分の名を覚えていたのみで記憶を失っていた。その理由がわかったのだ」

「理由？」

鷺佗はドキッとします。

「鷺基はその昔、我と戦った巨神族の一人。戦に敗れ幼児化して記憶を失っていたのだ」

欧殿の言葉に唖然とする鷺佗です。

「そんな……」

鷺佗は欧殿の話が信じられません。

第六百十一話　鷺佗の迷い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗は欧殿の話を聞き、驚きのあまり動けません。

「どうした、鷺佗？」

欧殿は心配になり、鷺佗の胸を揉みました。

「お戯れはお止めください！」

鷺佗は欧殿の手を抓ります。

「おお、気がついたか、鷺佗」

欧殿は手をさすりながら言います。

「鷺基には何と申せばよいのですか？」

鷺佗は尋ねました。すると欧殿は、

「それは其方が決めるが良い。我は何も干渉せぬ」

「はい……」

鷺佗は項垂れたまま、玉座の間を出ました。

その頃、孫左京は恍惚としていました。

急いで鷺佗達のところに行くためにきんと雲に樹里を乗せているからです。

「しっかり掴まっていてくださいね、お師匠様」

「はい」

樹里が左京の背中にしがみついたので左京は鼻血が出そうです。

（やっぱりお師匠様はでかい）

何がでかいのでしょう？

「左京ったら！」

馨の背でムッとしている亜梨沙です。その横を不安そうな露津狗が走っています。

第六百十二話　鷺佗の決意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗は欧殿の玉座の間を出ると、鷺基達の待つ控えの間に行きました。

「如何なされた、姉上？」

暗い様子の鷺佗に鷺基が尋ねます。

「鷺基、ちょっと」

鷺佗に柱の陰に呼ばれ、ドキドキする鷺基です。

「ここでは人目が」

「何を言っているのだ？」

キョトンとする鷺佗を見て鷺基は早合点に気づきます。

「お前に言わなければならぬ話がある」

「何でしょう？」

只ならぬ雰囲気の鷺佗に鷺基も緊張します。

「実はお前は私の弟ではないのだ」

仰天する鷺基です。

「しかも、お前はあの俯炎驪(ふえんりる)琉の父親なのだ」

鷺基は何を言われているのかわからないようです。

孫左京達は大きな山を越え、麓に向かっていました。

「お師匠様、もっとしっかり掴まってください」

左京は術で鼻の穴を封じて言いました。

「はい」

樹里は笑顔全開で言いました。

(限界だ……)

左京の鼻血は巡り巡って耳から噴き出しました。

第六百十三話　姉弟の別れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

宮殿の庭で鷺基はようやく正気を取り戻しました。

「姉上、私が嫌いになったのか？」

鷺基が悲しそうに尋ねます。

「違うわ」

鷺佗も辛そうです。

「真実なのか？」

「ええ。ごめんなさい、鷺基」

鷺佗は泣きながら鷺基に抱きつきます。

「姉上」

鷺基は優しく鷺佗を押し返します。

「ならばしばらく離れて生きよう。時間をくれ」

「鷺基……」

そんな事を言われる気がしていた鷺佗です。

「では」

鷺基は飛び立ちました。

「鷺基……」

鷺佗は鷺基が飛び去った空を見上げていました。

その頃孫左京は樹里を乗せてまだ飛んでいました。

（このままでは失血死する）

左京は身体の三分の一の血を失いました。

「おーい、ここじゃ」

そこに元始天尊と霊宝天尊が飛んで来ました。

「道に迷っての」

元始天尊が苦笑いして言います。

「俺達はあんたらが知ってると思って追って来たんだぞ！　どうするんだよ？」

左京は呆れました。

第六百十四話　くりびつな展開編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗は溜息を吐き、薔鏤鬼吏達（ばるきり）の所に戻りました。

「鷺佗様」

薔鏤鬼吏達は心配そうに鷺佗を見ます。素久琉堵（すくるど）が、

「鷺基様は？」

と尋ねました。鷺佗は迷った末全部打ち明けました。

「何と……」

素久琉堵は仰天しました。薔鏤鬼吏達もです。

「鷺佗よ」

欧殿の声がします。

「はい」

鷺佗は憂鬱そうな顔で玉座の間に行きます。

「これより世無蛾屡弩（よむがるど）との戦いを始めようと思う」

「はい」

「もそっと近くに来い」

欧殿の言葉に仕方なく鷺佗は近づきます。

「え？」

鷺佗は欧殿の大きな腕に抱きすくめられます。

「欧殿様、何をなさいます！？」

鷺佗は振り解こうとしますが、ビクともしません。

「我は第六天魔王様のお力で甦ったのだ、鷺佗よ。其方もその身をあの方に捧げよ」

欧殿は死人としてこの世に戻ったのです。

「く……」

鷺佗は欧殿の発する臭気に顔をしかめました。

第六百十五話　鷺佗捕縛編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗は欧殿の発する臭い息に眩暈がして来ます。

「其方は美しい」

アシ○カの台詞をパクる欧殿です。

しかし、鷺佗は怯みません。

「誰か！」

彼女は薔鏤鬼吏達を呼びました。

「鷺佗様！」

薔鏤鬼吏達は欧殿に抱きすくめられた鷺佗を見て赤面します。

「そのようなプレーは……」

苦笑いする素久琉堵です。

「誰が羞恥プレーだ！」

鷺佗は切れました。

「欧殿様、ご乱心だ。討て！」

鷺佗が命じます。

「え？」

素久琉堵達は顔を見合わせます。

「乱心は鷺佗だ、皆の者。縄を打て」

欧殿が言うと、素久琉堵達は、

「ははっ！」

と従い、鷺佗を縛りました。

（おのれ……）

鷺佗は歯軋りしました。

孫左京達は後からやって来た太上老君達と合流し鷺佗達の国へと向かいます。

「どうしようもない奴だな」

老君が元始天尊と霊宝天尊を見ます。

「面目ないぞい」

シュンとする元始天尊と霊宝天尊です。

第六百十六話　北の国へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は、鷺佗が第六天魔王の策略で捕縛されたのを知りません。

もちろん欧殿が第六天魔王の力で蘇ったのも知りません。

樹里達は大型きんと雲で飛行中です。

「最初から一緒に行けば良かったのよ」

亜梨沙が追い討ちをかけます。

元始天尊は蘭のお尻を触ります。

「随分元気ですね！」

蘭の張り手が元始天尊を吹っ飛ばします。

「まあ、しゃあないわな。ヒック」

霊宝天尊は遊魔にお酌をされて言います。

「何となく嫌ーな予感がするにゃん」

リックが呟きます。

「鷺佗……」

露津狗は遥か向こうの空を見ました。

「気になるか、露津狗よ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱こうとして空振りしながら言いました。

「はい。何やら面妖な気配がします」

露津狗が言いました。

「儂も感じる。何やらしてやられた感じじゃ」

太上老君が言います。

「真顔でお師匠様の肩を抱くな！」

左京が老君を殴りました。

第六百十七話　鷺基の苦悩編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺侘の元を去った鷺基は当てもなく彷徨(さまよ)っていました。

（俺は本当は誰なんだ？）

自分の正体に疑問を感じる鷺基です。

『お懐かしゅうございます、父御(ちちご)』

どこからともなく声が聞こえます。

「何奴！？」

鷺基は周囲を見渡しました。

『貴方の息子、世無蛾屡努(よむがるど)でございます』

「何！？」

鷺基は仰天しました。

『貴方は闇の王なのです。我らと共に光の眷族を討ちましょうぞ』

世無蛾屡努の声が言います。

「姉上と戦えと言うのか？」

『いえ。欧殿は我らが同志』

世無蛾屡弩の声は更に囁きます。

「欧殿様が同志だと！？」

鷺基は目を見開きました。

『そうです。我らが敵は御徒町樹里一行。倒すべき相手です』

「バカな……」

鷺基は鷺侘が心配になりました。

その頃、孫左京達は確実に欧殿の宮殿に近づいていました。

「面妖だ。これ以上近づかぬ方が良い」

太上老君が言いました。

第六百十八話　激突！　孫左京対鷺基編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達は遂に鷺侘達の生まれた北の国に到着しました。

「ざぶびよぼお」

鼻水を垂らして亜梨沙が震えます。

「頭のお皿が割れてしまいそう」

蘭は泣きそうです。

「儂が暖めてやろう」

太上老君が二人を自分の着物の中に抱き込みます。

「ぎやああ！」

亜梨沙と蘭は絶叫しました。

「お師匠様、大丈夫ですか？」

元々石猿の孫左京は寒くないようです。

「大丈夫ですよ」

樹里は笑顔全開です。

「私はもうダメ」

璃里は気絶しそうです。

「眠ってはいかん！」

そう言いながら璃里を抱きしめようとする鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「このヤロ！」

左京は道人を殴り、

「姉上様、これを」

と自分の毛で編んだ服を差し出します。

「ありがとう、左京さん」

「へへ」

本編共々璃里に傾きかけている左京です。

そこへ突然鷺基が現れました。

「鷺基！」

左京が声をかけると、

「猿、いざ尋常に勝負だ！」

鷺基は言いました。

第六百十九話　孫左京苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基はブンと大きな槍を出しました。

「どうしてもやる気か？」

孫左京は如意棒を耳から取り出して尋ねます。

「是非も無し！」

鷺基はいきなり槍で左京を突きます。

「うお！」

左京は素早くかわしますが、太上老君が危うく貫かれそうになります。

「うおお！」

老君は姑息にも抱きかかえていた亜梨沙と蘭を盾にしようとしました。

「何さらすんじゃい！」

蘭と亜梨沙がダブル踵落としです。

「むぎゃ！」

折角鷺基の槍をかわしたのにもっと痛い目に遭う老君です。

「ここじゃ狭い。来い」

左京はきんと雲で飛びます。

「望むところだ」

鷺基が追います。

「お猿さん」

樹里が祈るような目で見ていました。

「はあ！」

鷺基の高速の突きが繰り出され、左京はかわします。

「この！」

左京は如意棒を伸ばし鷺基を攻撃します。

「見た目的には鷺基を応援したい自分がいる」

亜梨沙の発言に呆れる蘭です。

「あんたねえ……」

第六百二十話　鷺基の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基は凄まじい勢いで槍を繰り出します。

「ぬう！」

孫左京は避けるのに精一杯で反撃できません。

（さすがだ。敵に回したくなかった）

それでも左京は前に出ます。

「死を覚悟したか、左京！？」

鷺基が怒鳴ります。

「俺は死なない！」

左京は血だらけになりながら、鷺基に接近します。

「くそ！」

槍はその長さ故、接近戦には不向きです。

「おらあ！」

如意棒が一閃し、槍が折れました。

「どういうつもりか知らねえが、それなりの覚悟はできてるんだろうな、鷺基！」

左京は如意棒を振り上げます。鷺基は左京を見て、

「そのつもりなくば、こうして戦いを挑まぬ」

「よく言った！」

左京が如意棒を振り下ろそうとした時です。

「お待ちなさい」

樹里達が追いつきました。

「お師匠様、止めないでくださ……」

そこまで言いながら、久しぶりに樹里の「ウルウル瞳ほっぺたプウ」攻撃を受けてしまい、黙る左京です。

第六百二十一話　鷺基の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里達はひとまず寒さを凌ぐために近くの洞穴に避難しました。

「こぼりづぎぞうだびょお」

鼻水まで凍った亜梨沙はすでに何を言っているのかわかりません。

「左京さんのくださった服、温かいです」

璃里はニッコリして言いました。

「そうですか」

孫左京は柄にもなく照れています。

「鷺基さん、理由を話してください」

樹里は鷺基を真っ直ぐに見て尋ねます。

「はい」

鷺基は全てを話しました。

一同は唖然としました。樹里を除いて。

「そうなんですか」

樹里は鷺基の話を聞いても笑顔全開です。

「お師匠様、私は貴女を殺しに来たのですよ。罰してください」

鷺基は泣きながら樹里に言いました。

蘭と亜梨沙と馨がもらい泣きしています。

その隙に、二人のお尻を触ろうとした太上老君と元始天尊が左京に殴られます。

「では罰として、私達と共に鷺佗さんを救いに行くのです」

樹里の言葉に鷺基は号泣しました。

第六百二十二話　可愛い襲撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は慈愛に満ちた目で鷺基を諭しました。

孫左京は鼻血を噴きリックは飛びかかろうとして遊魔に踵落としを食らいます。

「ありがとうございます、お師匠様」

鷺基は土下座をしました。今度はそれを見て蘭と亜梨沙がキュンとします。

露津狗と馨は気が気ではありません。

「顔を上げてください、鷺基さん。貴方は私達の仲間ではないですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

今度は元始天尊が樹里に飛びかかろうとしたので、左京が殴りました。

「儂等は第六天魔王の動きを探るとしようか、老子よ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱いて言いました。

「わかりました、お師匠様」

老君は遊魔のお尻を触りながら答えました。

「いい加減にしろ！」

左京の如意棒が二人を叩き伏せました。

その時です。

「かかったな」

と声がしました。

「誰だ？」

左京が怒鳴ります。

「俺さ」

現れたのは出っ歯のリスです。

第六百二十三話　闇のリス羅佗杜巣玖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リスはニヤリとして言いました。

「我が名は羅佗杜巣玖（らたとすく）。世無蛾屡弩（よむがるど）様の一番弟子」

出っ歯を光らせて得意そうなリスです。

「一番弟子はこの前倒したぞ」

孫左京が呆れ顔で言います。すると羅佗杜巣玖はビクッとし、

「それは嘘だ。俺が一番弟子だ！」

と言い張ります。

「何番弟子でもいいよ。かかって来い」

左京は指をクイと動かして言いました。

「行くぞ！」

羅佗杜巣玖はフッと消えました。

「何！？」

左京はたちまち血だらけになります。

「く……」

左京は血を拭い、羅佗杜巣玖を睨みます。

「俺にも見えなかった」

鷺基が言いました。

「俺も見えなかった」

露津狗が言います。

「僕には見えたにゃん」

リックが見栄を張りました。蘭と亜梨沙が白い目で見ます。

「遊魔にも見えましたよ」

遊魔が言いました。

「嘘を吐くな！　俺の動きが見えるはずがない」

羅佗杜巣玖は切れました。

第六百二十四話　遊魔の活躍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羅佗杜巣玖（らたとすく）は遊魔を睨みます。

「お前のようなボーッとした猫如きに見切られる羅佗杜巣玖ではない！」

羅佗杜巣玖は遊魔に襲いかかります。

「危ない！」

遊魔はリックを楯にしました。

「にゃん！」

羅佗杜巣玖の出っ歯がリックの顔に突き刺さる寸前にリックはそれを止めました。

「本当に見えていたの？」

蘭と亜梨沙はビックリしました。

「お前は邪魔だ！　俺が用があるのはその猫女だ！」

羅佗杜巣玖はリックを飛び越え、遊魔に飛びかかります。

「きゃあ、お前様、助けて下さい！」

遊魔はそう言いながら踵落としで、リックも巻き添えにして羅侘杜巣玖を叩き伏せました。

「にゃん」

リックは羅侘杜巣玖と共に地面に顔から減り込みました。

「やっぱり弱い奴だったか」

孫左京が気絶した羅侘杜巣玖の尻尾を掴んで持ち上げました。

「何か知っているかも知れん。聞き出そう」

露津狗が言いました。

第六百二十五話　羅佗杜巣玖の命乞い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羅佗杜巣玖（らたとすく）はグルグル巻きにされ、洞穴の奥のでっぱりに吊るされました。

「あの光景、トラウマにゃん」

リックが涙ぐみます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「目を覚ませ」

孫左京が羅佗杜巣玖を如意棒で突きました。

「う……」

羅佗杜巣玖は目を開けました。

「お前の知っている事を全部話せ」

露津狗が牙を剥いて威嚇します。

「ひいい！　命だけはお助けを！」

羅佗杜巣玖は涙を流して言いました。

さすがに姿はリスですから、蘭や亜梨沙や璃里までもが同情してしまいます。

でもお金はあげません。

「乱暴はしないでよ、左京」

亜梨沙がウルウル瞳で言いました。

「うるせえよ。関係ないぜ」

左京は速攻で却下です。

「乱暴はしないでください、左京さん」

璃里がウルウルしながら言うと、

「そんな事しませんよ、姉上様」

左京は急に気取って言います。

「けっ」

亜梨沙は舌打ちしました。

第六百二十六話　羅佗杜巣玖の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羅佗杜巣玖は璃里のとりなしで縄を解かれました。

「さあ、話せ」

孫左京が如意棒を突きつけます。

「乱暴は止めるんでしょ？」

蘭が抗議します。

「乱暴してねえだろ？」

左京は惚けました。

「左京さん、優しくしてあげてください」

璃里が言いました。

「はい、姉上様」

変わり身の早さを白い目で見る蘭と亜梨沙です。

「助けてー、助けてー！」

突然叫び出す羅佗杜巣玖です。

「何のつもりだ？」

露津狗が詰め寄りますが、

「助けてー、助けてー！」

羅佗杜巣玖は叫ぶだけです。

「何なんだ、こいつ？」

左京は訝しそうに羅佗杜巣玖を睨みます。

「お前様、外が騒がしいですよ」

遊魔が言いました。

「何でにゃん？」

リックはこっそり洞穴の外を見て、

「にゃあん！」

と叫ぶと失禁しました。

「どうしたの？」

蘭と亜梨沙が外を見ます。

するとそこにはあたり一面を埋め尽くすような数のリスがいまし

た。

第六百二十七話　リス軍団の恐怖編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

リス達はジワジワと洞穴に近づいて来ます。

「どうするのよ、左京？　数が多過ぎるわ」

亜梨沙は寒さと恐怖でブルブル震えます。

「簡単ですよ」

樹里が笑顔全開で言い、羅佗杜巣玖（らたとすく）の縄を解きました。

「え？」

孫左京は唖然としました。羅佗杜巣玖はササッと洞穴から逃げ出します。

「いや、それだと余計に攻撃されるんでは……」

「そうなんですか？」

樹里は笑顔全開で言いました。

「バカめ、この俺を解放するなんてその坊主は頭が悪過ぎるな」

羅佗杜巣玖は調子に乗って尻を向け、叩きます。

「何だと！」

左京は樹里の悪口を言われると、例えお釈迦様でも止められません。

「ぶっ殺す！」

如意棒を振りかざし、外に飛び出します。

「お師匠様をバカ呼ばわりした以上、死を以って償え！」

左京はリス達に襲いかかります。

「ダメです、お猿さん」

樹里が言いました。

「はい」

素直に止める左京です。

第六百二十八話　リス軍団の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

樹里は孫左京を止め、自らリス軍団の前に出ます。

「お師匠様、危険です」

左京が言いますが、

「大丈夫ですよ」

樹里は笑顔全開でリス軍団に近づきます。

「愚かな坊主だ。骨まで食らっちまえ！」

羅佗杜巣玖（らたとすく）がリス軍団に命じました。

リス軍団が一斉に走り出し、樹里に飛びかかります。

「お師匠様！」

左京は血の涙を流して叫びました。

「きゃ！」

リスが飛びかかったせいで樹里の帽子が外れ、長い髪が風になびきます。

「おお！」

羅侘杜巣玖は思わず目を見開きました。

「申し訳ありませんでした」

リス軍団は全員土下座しました。皆オスのようです。

久しぶりの女の子パワー炸裂でした。

「うう」

左京も鼻血が逆流してまた耳から噴き出しました。

「キモ」

蘭と亜梨沙が言いました。

羅侘杜巣玖は降参し、樹里に跪きます。

「お師匠様と呼ばせてください」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第六百二十九話　欧殿現れる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

羅佗杜巣玖（らたとすく）は改めて樹里一行に詫びを入れました。

「世無蛾屡努（よむがるど）はどうしているのだ？」

鴻均道人（こうきんどうじん）が尋ねます。すると羅佗杜巣玖は聞こえないフリをしました。

「何じゃ、こやつ！？」」

ムッとする道人です。

「世無蛾屡努はどうしているのですか、リスさん？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「世無蛾屡努様は、欧殿様と共に世界を闇に変えるための話し合いをしています」

羅佗杜巣玖は言いました。

「何だと！？」

孫左京と露津狗が色めき立ちます。

「いかんな。行動を迅速にせんとな」

太上老君が真顔で言いますが、右手は遊魔のお尻を撫でます。

「お止めください」

遊魔の踵落としが炸裂しました。

その時です。

「鷺基、我が同胞よ。何をしている？　早く御徒町樹里を始末せぬか？」

八本脚の愛馬である鬆令符爾（すれいぷにる）流に跨って、欧殿が現れました。

第六百三十話　鬆令符爾流編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

いきなり登場した欧殿に一同唖然です。

「どちら様ですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねました。すると、

「欧殿じゃ。北の国の最高神のはず」

太上老君が答えます。亜梨沙が、

「味方なの、敵なの？」

すると鴻均道人（こうきんどうじん）が、

「敵だ。こやつ、一度死んで死人として戻って来たのだ」

今度はリックが、

「乗ってるのは蛸かにゃん？　足が八本あるにゃん」

と言いました。

「それは鬆令符爾流（すれいぷにる）。欧殿の愛馬だ」

老君が答えます。

「何しに来たのかしら?」

蘭が言います。

「儂等を殺しに来たのだろう」

道人が言うと、

「我にも喋らせろ!」

欧殿が切れました。

(欧殿様……)

鷺基は悲しそうに欧殿を見上げます。

(世無蛾屡努(よむがるど)から話を聞いた時はまさかと思ったが……)

鷺基は現実を受け入れました。

「うぬら全てを滅する!」

欧殿が叫び、鬆令符爾流が嘶(いな)きました。

第六百三十一話　頼もしい救援編（前書き）

河先生、お待たせ致しました。再登場です。

第六百三十一話　頼もしい救援編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

欧殿は手に大きな槍を出しました。牛魔王の背丈ほどあります。

「俺が相手だ、化け物！」

存在感がなくなりかけていた牛魔王が前に出ます。

「お館様」

奥方の鉄扇公主が見守る中、牛魔王はあっさり欧殿に槍で跳ね飛ばされます。

「使えねえ奴」

孫左京が非情の一言です。

「死人とは言え、尋常な強さではないぞ。気をつけよ」

太上老君が遊魔のお尻を懲りずに触ります。

「いい加減にしろ！」

左京が如意棒で殴りました。

「さて、真打の出番だぜ」

左京が前に進み出ます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「待たれよ！　その勝負、私がお相手致す！」

雲に乗って現れたのは肩も胸元も太腿も剥き出しの金の鎧を身に纏った美女です。

「どちら様ですか？」

樹里が尋ねます。美女は地面に飛び降り、

「お久しぶりです。美子（めいず）です」

と言いました。

「おお！」

リックが色めき立ち、遊魔に殴られました。

第六百三十二話　美子、善戦す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「どうして急に戻って来たのよ？」

食い扶持を気にして突っ込む亜梨沙です。

「作者が某先生の人気にあやかろうとしてるにゃん」

リックが究極のネタバラシをします。

「成長した私の姿を樹里さんに見て欲しくて！」

美子（めいず）はバンと胸を張ります。

「おお！」

孫左京までもが見とれる美子の胸の谷間です。

「うぬはあの霊獣の娘か？」

欧殿が尋ねました。

「そうよ！　私は霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）の娘よ！」

美子は丈夫そうな楯と剣を出します。

「父の角から作った楯、母の歯から研ぎ出した剣よ。受けてみなさ

い！」

美子はバッと飛び上がり、欧殿に斬りかかります。

「ぬお！」

欧殿は槍で防御しますが、美子の剣はそれをへし折り、欧殿を斬りました。

「ぐぬ！」

欧殿は呻き声を上げましたが、死人なので血が出ません。

「鷺侘！」

欧殿が叫ぶと、目も虚ろな鷺侘が飛翔して来ました。

第六百三十三話　鷺佗対美子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

目も虚ろな鷺佗を見て、鷺基は叫びました。

「姉上！」

しかし、鷺佗には鷺基がわからないようです。

「さあ、鷺佗よ、その忌ま忌ましい霊獣の娘を屠(ほふ)ってしまえ！」

欧殿が命じます。鷺佗は頷き、美子(めいず)を見ました。

「貴女は……」

美子は鷺佗の様子が変なのに気づき、樹里を見ました。

樹里は黙って頷きます。美子は頷き返し、

「相手にとって不足なし！　参られよ！」

と剣を構え、盾を掲げます。

「出る幕がなくなりそうだ」

孫左京は妙な心配をしています。

「お師匠様、姉上は……」

鷺基が樹里に駆け寄りました。

「大丈夫ですよ。美子さんに任せなさい」

樹里は笑顔全開で言いました。

「はあ！」

鷺佗は気合いを入れ、右手に槍を出します。その先は三つに分かれていて刃の間に稲妻が走っています。

「あれは、雷神の槍！」

蘭が目を見開きました。

「何それ？」

亜梨沙がバカな質問をしました。

第六百三十四話　リック悩む編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

二大霊獣の娘である美子（めいず）は鷺佗と睨み合います。

鷺佗は雷神の槍を持ち、美子に襲い掛かりました。

「はああ！」

三つに分かれた刃の先が稲妻を走らせながら美子に向かいます。

「その程度で！」

美子は母である霊媚阿壇（れびあたん）の歯で作った剣で槍を受けます。

「うわ！」

辺りに稲妻が走り、孫左京は慌てて樹里を庇いますが、稲妻は樹里を避けてリックに当たります。

「にゃん！」

また犠牲になるリックです。でもめげません。

「悩むにゃん」

リックはボソリと言いました。

「何がですか、お前様？」

遊魔が尋ねました。リックは腕組みして、

「美子たんも鷺佗たんもムチムチにゃん。どっちを応援すればいいか、悩むにゃん」

そこまで言って、リックは遊魔の真空飛び膝蹴りで倒れました。

「姉上！」

届かないとわかっていながらも、再び鷺佗に呼びかける鷺基です。

すると鷺佗は鷺基を見ました。

第六百三十五話　悲しき運命編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

虚ろな目で鷺基を見る鷺佗です。

「姉上？」

鷺基は鷺佗が自分の声に反応したと思い、微笑みました。

「はあ！」

すると鷺佗は一足飛びに鷺基に接近し、彼の胸を槍で貫いてしまいました。

「グホ……」

鷺基は口から血を吐きました。

「鷺基！」

一番早く反応した孫左京が鷺佗に殴りかかります。

「く！」

しかし、その行く手を欧殿の愛馬である鬆令符爾流（すれいぶにる）が遮ります。

「邪魔するでない、下等な猿よ」

欧殿がニヤリとして言い放ちます。

「何だと！？」

左京は欧殿を睨みました。

「ぐ……」

鷺基は何とか槍から抜け出しました。

「鷺基さん」

樹里が声をかけます。

「大丈夫です、お師匠様」

鷺基は苦しそうな顔を樹里に向けて言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「貴女の相手は私よ！」

美子（めいず）が鷺佗に斬りかかります。

「ふお！」

鷺佗は美子の剣を槍で受けました。

第六百三十六話　鷺基覚醒編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美子（めいず）と鷺佗は火花を散らして激突します。

「はあ！」

「ほお！」

二人の美女の凄まじい戦いに失禁寸前のリックです。

「興奮するにゃん！」

そのリックの頭を殴る遊魔です。

「お前様、大概になさいませ！」

その時、孫左京は鷺基の放つ異様な気に気づきます。

「何だ？」

鷺基は先程までと様子が違います。

「ますますイケメンじゃん！」

亜梨沙が雄叫びを上げます。それを見て複雑な心境の露津狗です。

「逃げよう」

リス軍団と共に羅佗杜巣玖(らたとすく)が逃げ始めます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ふおお！」

鷺基が身体中に闘気を漲(みなぎ)らせました。

「何だ？」

蘭が眉をひそめます。

「これはいかん！」

太上老君が師匠の鴻均道人(こうきんどうじん)を見ます。

「鷺基が過去の記憶を蘇らせてしまった」

道人が言いました。

「何だ、まともな言葉か」

左京はがっかりしました。

第六百三十七話　鷺基の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基は闘気を発しています。

「お前達は逃げよ。こやつは神殺しの一族。強さの桁が違い過ぎる」

太上老君が完全真面目バージョンです。

「そのようじゃな」

霊宝天尊が酒を飲むのを止めます。

「早く逃げよ」

元始天尊が亜梨沙達に言います。

「失敬！」

亜梨沙はリックと遊魔を連れ、馨の背に乗って逃亡しました。

「お主も逃げよ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が真顔で言ったので、蘭はビクッとしました。

「そんなに凄いのですか？」

「女（じょか）？よりも強いだろう」

道人の言葉にビビる孫左京です。

（あの蛇女より強いのか？）

完全に強さのインフレです。

「えい！」

遂に美子（めいず）が鷺侘を打ち倒しました。

鷺基が剣を出して美子に襲いかかります。

「貴方は一体！？」

美子は辛うじて剣撃を受け止めます。

「鷺基はあらゆる暗黒神の生みの親。うぬら如きにはどうする事もできぬ」

欧殿が言いました。

第六百三十八話　神殺しの力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基はその身に妖気を纏い始めました。

「黄泉路古神道（よみじこしんとう）ですか？」

樹里が笑顔全開で言いました。

「さり気なく自作の宣伝するのは止めてください、お師匠様」

孫左京が項垂れて言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。緊張感がなさ過ぎです。

「さあ、私達も逃げるわよ」

鉄扇公主が蘭を促します。すると蘭は左京に駆け寄り、

「頼んだわよ、左京」

と言うと、接吻をしました。仰天する璃里と公主です。

「儂にも一つ」

太上老君が言い、蘭に殴られます。

「生きて」

蘭は目を潤ませ、左京に言いました。左京はドキドキしています。

蘭は公主と共に芭蕉扇に乗って飛び去りました。

(俺は逃げてはいけないのが確定?)

実は泣きそうな左京です。

「ふおお!」

鷺基はその力を解放しました。彼の周りの地面が裂けます。

「すげえ」

露津狗は汗を滲ませ、鷺基を見ました。

第六百三十九話　鷺基対三清

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基は遂にかつての力を完全に取り戻しました。

すでに欧殿をも凌駕するような妖気です。

（やっべー、絶対殺される）

嫌な汗が止まらない孫左京です。

「猿、お主は逃げよ。こやつは我ら三清が引き受ける」

太上老君が悲愴感溢れる顔で言います。

「待てこら」

逃げようとしていた元始天尊を捕まえる露津狗です。

「ジジイ……」

左京は老君の表情を見て鷺基がどれほど強いのか知りました。

「お主には樹里を守るという使命があろう。それを果たせ」

霊宝天尊が酒の匂いを全くさせずに言います。

「わかった。後は頼む」

左京はきんと雲に樹里と璃里を乗せてサッサと飛び去ります。

「こら、俺も残ると言わんか！」

老君が切れました。

「心配しないで、お爺ちゃん達。私が残る」

美子（めいず）が言います。

「俺も残るぞ」

露津狗が言います。

「その気持ちだけ受け取っておくよ」

三清が一緒に鷺基に向かいました。

第六百四十話　三清の敗北編（前書き）

河先生、ごめんなさい。

第六百四十話　三清の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

太上老君と元始天尊と霊宝天尊は、妖気を放出する鷺基に向かいます。

「お爺ちゃん！」

美子（めいず）が叫びました。

「俺も行く！」

露津狗は俯炎驪琉（ふえんりる）の力を解放し、巨大な狼になります。

「うぬも我らが眷属ではないか」

欧殿がニヤリとして言います。

「黙れ、闇に堕ちた神が！」

露津狗は力を高めていきます。

「私も！」

美子はその身体に霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）の力を呼び込みました。

「はあ！」

美子の身体に力が漲(みなぎ)ります。

「ほお！」

気合を入れた時、鎧が全部弾け飛んでしまいます。

「いやん！」

胸と股間を慌てて隠す美子です。露津狗はそれを見てしまい、クラクラします。

「うごお！」

老君達は鷺基に叩き伏せられました。

「戦闘場面を割愛された」

項垂れる三清です。すると鴻均道人(こうきんどうじん)が、

「弟子の敵は儂がとる」

と進み出ました。

第六百四十一話　鴻均道人、真面目に戦う編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）は鷺基を睨みつけると、

「ようやくこの儂が本気を出して戦える相手が登場したな」

とすぐやられてしまう雑魚キャラのような台詞を吐きます。

「うるさいわい！」

地の文に切れる道人です。そして気を高めます。

「あら、このお爺ちゃん、本当に強い」

美子（めいず）が新しい鎧を術で出しながら呟きます。

「ほうほう」

それをジッと見ている太上老君と元始天尊が露津狗に殴られます。

孫左京は、樹里と璃里を遠く離れた森のそばに下ろしました。

「俺は戻ります、お師匠様」

「頑張ってください、お猿さん」

「頑張ってください、左京さん」

樹里と璃里のダブル「頑張ってください」に左京は勇気づけられます。

（行かないでって言ってほしかった……）

実は心の中で大号泣の左京です。

道人はその身体を筋骨隆々に変えました。

「始めよう、神殺しの男よ」

道人はニヤリとしました。

第六百四十二話　鴻均道人対鷺基編

御徒町樹里がありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）は鷺基に一足飛びに近づきます。

「おらら！」

凄まじい速さで拳を繰り出す道人です。

「はあ！」

それを全て受けてしまう鷺基です。

「おらあ！」

道人の左回し蹴りが鷺基の左脇腹に食い込みます。

「ぐぬう！」

鷺基は態勢を立て直し、道人に向かいます。

「どらあ！」

鷺基の正拳突きが道人の鳩尾（みぞおち）に炸裂したかに見えましたが、それは残像でした。

「何！？」

鷺基はハッとして上を見ます。

「ほあ！」

上空から道人が鷺基の顔面に踵落としを決めます。

「ぐは！」

鷺基は仰向けに倒れました。

露津狗は衝撃を受けていました。

（さすが三清の師匠。只のエロジジイではないな）

「そのまま決めてください、お師匠様！」

太上老君が言いました。ところが道人は返事をしません。

「お師匠様？」

元始天尊が声をかけると、

「ぐうう……」

道人は胸から血を噴き出して倒れました。

第六百四十三話　美子対鷺基編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）は鷺基と相討ちでした。

「ぐう」

道人は呻き声を上げて倒れました。

「お爺ちゃんの仇は私が討つわ！」

さっきよりも肌の露出が少ない鎧を装備し、美子（めいず）が進み出ます。

「俺は女と戦いたくはない。退（の）け」

鷺基が冷め切った目で言います。

「バカにするなあ！」

美子は鷺基に接近し、剣を振るいます。

「はあ！」

鷺基はそれを素手で受け止めてしまいます。

「何ですって！？」

美子は驚愕しました。

「退いていろ」

鷺基は剣ごと美子を放り出します。

「いやん！」

美子は地面に叩きつけられました。

「むぐ」

偶然にも道人の上に落ち、痛みが和らぐ美子です。

「お師匠様が動いた気がするが」

太上老君が元始天尊に囁きます。

「大丈夫か？」

道人が美子に尋ねます。

「大丈夫です」

答えながらお尻を触る道人を殴る美子です。

「そういう事か」

老君と元始天尊は納得します。

第六百四十四話　鴻均道人復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鴻均道人（こうきんどうじん）は美子（めいず）に囁きます。

「其方の霊獣の力を儂に授けてくれ。そうすれば、其方は儂と共に鷺基と戦える」

何やら怪しそうな事を言う道人です。

「わかった。嫌らしいのはなしだよ、お爺ちゃん」

美子は承諾し、自分に宿る霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）の力を道人に授けます。

「おおお！」

「きゃああ！」

道人はドサクサに紛れて、また美子のお尻を触って殴られます。

「む？」

鷺基は道人がパワーアップしたのに気づきます。

「お師匠様、ずるい」

太上老君と元始天尊が不満を述べます。

「うるさい！　これが師匠の特権じゃ！」

何故か道人は顔はそのままですが、身体が美子です。

「いやあん！」

美子は絶叫しました。美子の身体は道人の身体になっていたのです。

それにしても超絶な変態技です。

「行くぞ、神殺し！」

道人は疾風の速さで鷺基に向かいました。

第六百四十五話　鷺基、変態攻撃に苦戦する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

超絶な変態奥義で、鴻均道人（こうきんどうじん）は美子（めいず）の力を吸収し、鷺基に挑みます。

「ぬう！」

鷺基も道人の強さに気づいたのか、身構えました。

「おりゃあ！」

道人の蹴りが鷺基の顔面に決まります。

「ぐう！」

鷺基は鼻血を噴き出して倒れました。

「うりゃあ！」

道人は倒れた鷺基に容赦なくヒップアタックです。

「変な技はやめて！」

美子が絶叫しました。

「どうじゃ！」

今度は鷺基を胸の谷間攻撃です。

「いい加減にしろ！」

美子が道人を殴りました。

「何をする！？」

道人は涙目で美子を見ます。

「むう……」

鷺基は実は純情なのでエロエロ攻撃が効いています。

「鷺基よ、どうした？」

欧殿が動こうとしますが、

「手出し無用だ」

鷺基は何とか立ち上がります。

「ジジイ、何だその身体は？」

忘れられた主人公の孫左京が登場です。

「誰が忘れられた主人公だ！」

左京は地の文に切れました。

第六百四十六話　孫左京、主役を張る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

意外に強い鴻均道人（こうきんどうじん）に目を見張る孫左京ですが、その気持ち悪さに眩暈がします。

「何で身体が女なんだよ！？」

左京は気分が悪くなって露津狗に怒鳴ります。

「俺も眩暈がする」

真面目な露津狗はもっと気持ち悪いようです。

「おらおら！」

でも道人はそんな気持ち悪さを武器にして鷺基を攻め立てます。

「主役は俺だ！」

左京は道人を押し退けて鷺基に向かいました。

しかし展開は無情です。

森の近くに避難した璃里と樹里の美人姉妹は、先に避難していた亜梨沙達と合流しました。

「左京は戻ったのですか」

蘭は悲しそうに言います。

「はい。お猿さんは強いですから」

樹里は笑顔全開で言いました。

（私はここまで左京を信じていただろうか？）

蘭は樹里の左京に対する信頼を知り、ビクリとします。

「ぐは！」

場面が変わっている間にあっさりやられた左京です。

「ううう」

泣きそうです。

第六百四十七話　孫左京、気合い一発編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺基にあっさりとやられて、孫左京は地面に這いつくばりました。

（つえええよおおお）

心の中でビビりまくる左京です。

その時です。風に乗って、樹里の声が運ばれて来ました。

「お猿さんは強いですから」

その声で左京は復活しました。エロのパワーに優るものはないのです。

「うおおお！」

怒濤の勢いで鷺基に突進する左京です。

「ぬありゃあ！」

いつもと掛け声が違います。

「ぬあ！」

鷺基は左京の如意棒を受け止めようとしましたが、左京はそれをヒョイとかわして、鷺基の脇腹を殴ります。

「ぐええ……」

無防備な脇を殴られ、鷺基は悶絶しました。

「下等な猿めが！」

欧殿が鬆令符爾流（すれいぶにる）で襲いかかります。

「おっと！」

左京はそれを紙一重でかわします。

「お師匠様のお力をいただいた俺様は簡単にはやられないぜ」

見得を切る左京ですが、

「おりゃ！」

後ろから鷺佗に殴られ、倒れました。

第六百四十八話　鷺佗戦線復帰編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗に不意を突かれた孫左京は呆気ない最期を迎えました。

「死んでねえよ！」

左京は地の文の勝手な進行に切れました。

「貴女、もう気がついたの？」

鷺佗を打ち負かした美子（めいず）が言います。

身体は鴻均道人（こうきんどうじん）なので気持ち悪いです。

「はあ！」

鷺佗はまだ操られたままのようです。

彼女は左京に攻撃を続けます。

「このヤロウ！」

左京はまた樹里の声が聞こえないかと思い、耳をすませます。

「エロ左京」

何故か亜梨沙が悪口を言うのが聞こえました。

項垂れる左京です。

「わわっと！」

そこへ更に鷺佗が攻撃を仕掛けて来ます。

（姉上）

昔の記憶が蘇ったとは言え、鷺基は鷺佗との楽しい日々も覚えていました。

そして苦悩します。

「何をしている、鷺基よ？　鷺佗を助け、孫左京を殺せ」

欧殿が言いました。

「誰が殺されるかよ！」

左京は如意棒で鷺佗と打ち合いながら言い返しました。

第六百四十九話　美子超進化？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「お爺ちゃん、元に戻してよ！」

美子（めいず）は鴻均道人（こうきんどうじん）に迫ります。

「頃合いじゃろう。戻してしんぜよう」

道人が偉そうにいったので美子に殴られます。

「あーみー○ー」

どこかで聞いた事があるような呪文を道人が唱えると、二人の身体が輝きます。

「何だ？」

欧殿が訝しそうに目を細めました。

「おらあ！」

バカな孫左京は構わず鷺佗と戦っています。

「これは……」

太上老君達が目を見張ります。

「これぞ我が秘術。合一進化じゃ！」

輝きの中から道人の声が聞こえます。

「いやん、お爺ちゃん、どこ触ってるのよ！」

美子の雄叫びも聞こえました。

「これは……」

鷺基が身構えました。

光の中から、ますますボン、キュ、ボンな身体になった美子が現れました。

しかも、パワーアップしています。

「儂の力を吸収したんじゃ。より強くなったぞ」

皺々の道人がよろけながら言いました。

第六百五十話　欧殿逃走編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「わーい、ありがとう、スケベなお爺ちゃん！　私、また強くなったみたい！」

キランと音をさせてウィンクをする美子（めいず）です。

「おお！」

鴻均道人（こうきんどうじん）は鼻血を垂らし、とうとう倒れてしまいました。

「お師匠様！」

太上老君と元始天尊が駆け寄り、助け起こすのかと思ったら、蹴飛ばします。

「自分だけ若い子といい思いしおって！」

醜い嫉妬です。

「行くわよ、神殺しの貴方！」

美子は剣と盾に気を込め、鷺基に向かいます。

「ふおお！」

すると孫左京と打ち合っていた鷺佗が立ち塞がります。

「おーい、俺は？」

いきなり相手をしてもらえなくなった左京は手持無沙汰です。

「どきなさい！」

美子は一撃で鷺侘を跳ね飛ばし、鷺基に迫ります。

「よくも姉上を！」

鷺基も鬼の形相で迎え打ちます。

「温い！」

美子は鷺基も一撃の下に倒しました。

「おのれ！」

欧殿は逃走してしまいました。

第六百五十一話　鴻均道人の秘儀編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

欧殿が逃走し、戦いは一旦終了です。

「儂を鷺佗の所へ」

死にそうな声で鴻均道人（こうきんどうじん）が言います。

「どうして？」

美子（めいず）が警戒しながら尋ねます。

「鷺佗に取り憑いた妖気を儂が吸い取る」

「本当に？」

半信半疑で道人を鷺佗の所に引き摺る美子です。

「こら、もう少し大事に扱わんか！」

道人は怒りながらも美子のお尻を触ります。

「何すんのよ！」

会心の一撃が決まりました。

「お爺ちゃん、鷺佗の所に来たわよ」

「おう、そうか」

道人は鷺佗の身体を触ります。

「変態ジジイ！」

美子がまた殴ろうとすると、太上老君と元始天尊が、

「違う。これぞお師匠様の秘儀、妖気除去だ」

と口を揃えて言いました。

「コ〇モクリーナーですか？」

そこに戻って来た樹里が言います。

「誰がイスカ〇ダルだ！」

老君と元始天尊のダブル切れです。

「お師匠様！」

樹里を見て嬉し泣きする左京でした。

第六百五十二話　鷺佗と鷺基編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗と鷺基は鴻均道人（こうきんどうじん）のエロい秘義で妖気を取り除かれました。

「鷺基」

鷺佗が涙を浮かべて鷺基を見つめます。

「姉上」

鷺基も目を潤ませて鷺佗を見ます。二人は強く抱き合いました。

「また元に戻っちゃったね」

亜梨沙が露津狗に言いました。

「俺には亜梨沙がいる」

露津狗は亜梨沙を見て言いました。

「ええ？」

亜梨沙は驚きのあまり動かなくなりました。

「立ったまま気絶してるにゃん」

リックがどさくさに紛れて亜梨沙のお尻を触り、

「お前様！」

と遊魔の飛び膝蹴りを食らいます。

「お師匠様、ご無事で何よりです」

孫左京は男泣きです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ありがとうございました、道人様」

鷺佗と鷺基が道人に礼を言いました。

「大した事ではない」

そう言いながら美子（めいず）のお尻を触り、殴られる道人です。

「しょうもな」

太上老君達は呆れました。

第六百五十三話　樹里の提言編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

只のスケベと思われた鴻均道人（こうきんどうじん）の力で鷺基と鷺佗は元に戻りました。

「欧殿様をお弔いし、世無蛾屡弩（よむがるど）を倒そう、鷺基」

鷺佗が言いました。すると樹里が、

「お二人はここに留まってください。世無蛾屡弩は貴方達の心に付け入る策があるようですから」

とまともバージョン全開で言います。

「そんな……。あの魔物は我が手で！」

鷺佗が樹里に詰め寄ります。すると鷺基が、

「姉さん、お師匠様の仰る通りだ。俺と姉さんは奴に取り込まれやすい。だからここで待とう」

「鷺基……」

鷺佗は驚いて鷺基を見ます。

「お前ら、足手まといにゃん。子作りでもしてればいいにゃん」

リックがそう言って、また遊魔の飛び膝蹴りで倒れます。

「心配するなって。俺が必ずそいつをぶっ倒す」

孫左京は、世無蛾屡弩の名前が覚えられないようです。

「うるせえ！」

左京は地の文に切れました。

第六百五十四話　いざ敵地へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

いよいよ敵の本拠地に向かう事になり、気持ちが高揚する孫左京です。

「欧殿様の強さは霊獣に匹敵します。お気をつけて」

鷺佗が言いました。

「僕も皆の無事を祈ってるにゃん」

やばい所らしいと気づいたリックがいつの間にやら見送り側にいます。

「お前様は人気者ですから行かねばなりませぬ」

そう言いながら遊魔が踵落としを決めます。

「姉上はここでお待ちください」

樹里が璃里に言うと、

「私には部秘模洲様のご加護があるわ。大丈夫よ、樹里」

そう言ってしまってからその娘である美子に気づき、ハッとする璃里です。

「気にしないで、璃里さん。貴女は私のもう一人のお母さんよ」

美子のその言葉に涙ぐむ璃里です。

「そうなんですか」

でも樹里は笑顔全開です。

「では参ろうか」

大型のきんと雲を用意しながら美子のお尻を触った鴻均道人（こうきんどうじん）が殴られました。

第六百五十五話　欧殿の宮殿へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「儂らは、第六天魔王の居場所を探って来る」

霊宝天尊が久しぶりに台詞を喋りました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「お師匠様、皆を頼みます」

太上老君が言いました。

「うむ」

鴻均道人（こうきんどうじん）は璃里の肩を抱こうとして孫左京に殴られます。

老君と元始天尊と霊宝天尊は第六天魔王を追うべく、更に西へと向かう事になりました。

「南に行った女（じょか）？達もいずれ戻ろう。全員集まったところで、第六天魔王に挑むぞ」

いつになく凛々しい顔で言う元始天尊ですが、その視線は美子（めいず）の胸の谷間です。

「お爺ちゃん達、嫌らしい」

美子は谷間を手で隠します。

「残念にゃん」

リックは溜息を吐き、遊魔はリックの顔を突きます。

こうしてようやく樹里達は大型きんと雲で飛び立ちました。

今回は左京も同乗しています。

「必ず勝ちます、お師匠様」

左京は言いました。

第六百五十六話　魔王軍の襲撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

でも今は北を目指している樹里達です。

「そうなんですか」

地の文に相槌を打つ樹里です。

「む？」

大型きんと雲の先端で監視をしていた最近影の薄い露津狗が何かを発見します。

「魔王軍の手先か？」

空を埋め尽くさんばかりの魔物の大群です。

「雑魚は俺達に任せて先にお進みください、お師匠様」

露津狗が巨大な狼に変化（へんげ）しました。

その背に乗る亜梨沙と蘭です。

「あんたは乗らないでよ、蘭！」

亜梨沙が言います。

「何でよ?」

鈍感な蘭は寂しそうにしている馨に気づきません。

「お前は龍に乗れ、河童」

露津狗にまで言われ、

「何よ、もう!」

怒りながら馨に乗る蘭です。

(ああ、蘭さんの太腿)

馨は恍惚としました。

「おお、魔物の中に女の子がいるにゃん!」

リックが目敏く見つけます。

「おねいさーん」

子猫達が遊魔の胸当てから飛び出して行きます。

「頼んだぜ、皆!」

孫左京が言いました。

第六百五十七話　孫左京先発する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京達は、雑魚敵を亜梨沙達に任せて、先に進みます。

「美子（めいず）ちゃんは儂が守る」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いましたが、美子は、

「樹里さん達は私が必ず守ります」

と言っていて全く聞いていませんでした。道人は項垂れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「ありがとうございます」

璃里は美子の優しさに感動しています。

「では、俺は先に行きます」

左京は樹里と璃里に言いました。

「頑張ってください、お猿さん」

「頑張ってください、左京さん」

ダブル「頑張って」に勇気百倍の左京です。

「左京、行きまーす！」

きんと雲に乗って飛び立とうとすると、

「私も一緒に行く！」

美子が後ろからしがみつきました。

「おお！」

背中に当たる物で鼻血が出そうな左京です。

「よおし、行きましょう！」

美子は笑顔全開です。

「お、おー！」

左京はフラフラしながら飛び立ちました。

第六百五十八話　孫左京、美子にメロメロになる？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はバイクの二ケツのようにしがみつく美子（めいず）の巨乳に鼻血暴発寸前です。

「め、美子ちゃん、そんなにしがみつかなくても大丈夫だよ」

左京は息も絶え絶えに言いました。すると美子は、

「どうして？　もしかして左京さんたら樹里さんの目を気にしてるんですかあ？」

とニヤニヤして言います。

「ち、違うって！　お師匠様は関係ないよ」

樹里は自分の事なんか「アッシー君」くらいにしか思っていないと自虐的になる左京です。

確かにそうかも知れません。

「うるせえ！」

すかさず地の文に突っ込む左京です。

「樹里さんはね、左京さんの事が好きだよ、絶対」

美子が悪魔の囁きです。

「そ、そんな事ないって」

そう言いながらも嬉しそうな左京です。

「だからさ、絶対に生きて帰ろうね、左京さん！」

美子が急に真剣な表情で言います。

「もちろんだ」

左京は噴き出しかけた鼻血を吸い戻して言いました。

第六百五十九話　欧殿再登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と美子（めいず）を乗せたきんと雲は、欧殿の宮殿が見える位置まで来ていました。

「あれがそうか？」

左京が呟くと、

「みたいね」

左京にのしかかるように美子が言います。

「美子ちゃん、重い……」

左京が言いました。

「失礼ね！　女の子に『重い』とか言わないでよね！」

美子はムッとして言いました。

「あ、いや、そんなつもりはないんだけど」

左京は焦ります。

「先に行くね！」

美子はきんと雲を飛び降り、飛翔します。

「美子ちゃん、空飛べたのか？」

「あれ、言わなかったっけ？」

悪戯っぽく笑う美子に項垂れる左京です。

「ふおお！」

そこに突然欧殿が現れます。彼の愛馬である鬆令符爾流（すれいぷにる）に乗っています。

「舐められたものよ。うぬらだけで参ったのか？」

欧殿が言いました。

「こっちこそがっかりだわ、あんたしかいないみたいね？」

美子が言い返すと欧殿はギョッとしました。

第六百六十話　欧殿対孫左京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と美子（めいず）は欧殿に対しました。

「てめえなんか、俺だけで十分だ、おっさん！　行くぜ！」

左京は美子がきんと雲から離れたのを良い事に一人で欧殿に向かいます。

「うぬ如きにやられる儂ではない！」

欧殿は異空間からズンと巨大な槍を出します。

「な、何だ？」

左京はそれを見て驚きました。

「左京さん、それ、禍津槍（まがつやり）だよ！　刺されたら、死ぬだけじゃなくて、魂まで砕かれるよ！」

美子が教えてくれました。

「そんな物騒な槍か」

左京は欧殿から距離をとります。

「霊獣の娘め、余計な事を！」

欧殿は美子を睨みました。

「これは道人のお爺ちゃんの知恵さ」

美子は誇らしそうに言います。

どうやら鴻均道人（こうきんどうじん）の力が美子に受け継がれているようです。

「ならば！」

左京は如意棒を伸ばし、欧殿を攻撃しました。

「温いわ！」

欧殿は槍で如意棒を跳ね除けました。

第六百六十一話　孫左京の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は弾かれた如意棒を縮ませて欧殿に突進します。

「おらあ！」

いつもの代わり映えのしない攻撃です。

「馬鹿め」

欧殿はそれを容易くかわします。

「何！？」

かわしたはずの如意棒が欧殿を追いかけて来て殴りました。

「ぐわう！」

欧殿の顎に如意棒が炸裂しました。

「いつも同じだとは思うなよ！」

左京はニヤリとして欧殿の前に回り込みます。

「死んだ奴は大人しくあの世に行ってろ！」

如意棒が欧殿を滅多打ちです。

「ぐわあ！」

欧殿は砕かれそうになりますが、

「ブフォオ！」

鬆令符爾流（すれいぶにる）がいななき、左京から離れます。

「逃がさない！」

鬆令符爾流の前に美子（めいず）が立ちはだかります。

「左京さんの言う通りよ。死人はあの世に戻りなさい！」

美子は剣を振り上げ、欧殿に斬りかかります。

「ブフォオ！」

鬆令符爾流が瞬時に横移動し、それをかわします。

美子は歯軋りしました。

第六百六十二話　鬆令符爾流の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鬆令符爾流（すれいぶにる）は美子を睨（ねめ）つけるようにいななき、彼女に突進します。

「きゃ！」

美子は鬆令符爾流をかわし、剣を振り降ろします。

「ブフォオ！」

鬆令符爾流の尻に剣が当たりますが、かすり傷すら負わせられません。

「鬆令符爾流の皮膚は鋼より硬い。無駄よ！」

欧殿がニヤリとします。

「……」

美子が剣を見ると、刃こぼれをしていました。

「お母さんの歯から造った剣が……」

「隙あり！」

姑息一番の孫左京が欧殿に殴りかかりますが、

「ブフォオ！」

鬆令符爾流に阻まれてしまいます。

如意棒は鬆令符爾流の鬣（たてがみ）に当たり、跳ね返されました。

「畜生、この馬が邪魔だ」

左京は歯軋りしました。そして、

「ならば！」

と毛を引き抜き、分身を出します。

「やっちまえ！」

数にものを言わせる左京です。さすが姑息の星です。

「うるせえ！」

左京は地の文に切れました。

第六百六十三話　孫左京、善戦す編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は分身を使い、髪令符爾流を攻め立てます。

「ブフォオ！」

髪令符爾流は分身猿を振り払おうと動き回りました。

「うお！」

そのせいで欧殿が振り落とされそうです。

「へへ、畜生の浅ましさだ。主人の事より自分の事だもんな」

左京は自分も「畜生」なのを忘れています。

「うるせえ！」

また地の文に切れる左京です。

「よおし、今ね！」

美子が再び欧殿に仕掛けます。

「小癪な！」

欧殿は禍津槍で美子の剣撃を防ぎました。

「お母さん、力を貸して！」

美子が叫ぶと、彼女の背後に巨大な鯨の影が現れました。

刃こぼれしていた剣が修復されます。

「何だと？」

欧殿は仰天しました。

「うお！」

分身猿に苛立った鬆令符爾流が暴れます。

「そこだ！」

鬆令符爾流が後ろ足四本で立ち上がります。

左京はその機を逃さず、鬆令符爾流の腹を強く如意棒で突きました。

第六百六十四話　鬆令符爾流の最期編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は「将を射んと欲すればまず馬を射よ」を実践したようです。

「何だ、それ？」

知らないようです。やっぱり所詮「畜生」です。

「うるせえ！」

左京の切れ祭です。

「止めだあ！」

左京は如意棒を伸ばします。

「ぐお！」

鬆令符爾流（すれいぶにる）は欧殿の危機を感じ、欧殿を振り落としました。

「ブフォオ！」

鬆令符爾流はそのまま飛ばされ、岩山に叩きつけられました。

「ブフォア！」

鬆令符爾流は息絶え、消えました。

「よくもわが愛馬を！」

欧殿が左京を睨みます。

「馬に助けられたな、おっさん」

左京はニヤリとしました。

「許さん！」

欧殿は槍を振り回して左京に突進して来ます。

「遅いよ！」

左京は欧殿の股下を潜りながら、股間を如意棒で殴りました。

「ぬぐ」

欧殿は死人ですがそこは痛いようです。

「いやん、左京さんたら」

美子（めいず）は手で顔を隠したフリをして指の間から見ています。

第六百六十五話　欧殿昇天編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

「おりゃあ！」

姑息な孫左京の姑息な攻撃が続きます。

「うるせえよ！」

左京は切れまくります。竹山さんより切れています。

「ふお！」

欧殿は禍津槍（まがつやり）を振り回しました。

「おっと！」

左京は槍を交わして下がります。

「今度は私よ！」

美子（めいず）が突進し、槍を楯で受けます。

「お父さん、私に力を貸して！」

美子の背後に巨大なサイの影が現れ、楯が巨大化しました。

「左京さん！」

美子が呼びました。

「よし！」

左京は美子と共に楯に身を隠し、欧殿に迫ります。

欧殿は槍を両手で持ち、

「楯ごと貫いてやる！」

と突き出しました。

「できるものか！」

美子が叫びます。槍は楯に激しくぶつかり、その先端が砕けます。

「父の力を舐めるな！　死人はあの世に還れ！」

美子の剣と左京の如意棒が同時に欧殿の脳天を直撃しました。

「ぶはあ！」

欧殿は頭から黒い妖気を噴き出して消滅しました。

第六百六十六話　人心地編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は、霊獣の子である美子（めいず）と協力して、遂に死人の欧殿を倒しました。

「これで鷺佗と鷺基も元のようになるな」

左京は消滅して行く欧殿を見ながら言いました。

「ええ。さ、左京さん、帰りましょ」

美子がピョンと左京にのしかかります。

「重いって、美子ちゃん……」

左京が言うと、

「だからそれって失礼なのよ、女の子には！」

美子が怒りました。

その頃、雑魚軍団をようやく全部倒した蘭達が、樹里達に追いつきました。

「お師匠様、ご無事で何よりです」

蘭が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「左京と美子ちゃんがいないけど、どうしたんですか？」

亜梨沙が尋ねました。

「二人だけで先に行きました」

樹里は事も無げに言いましたが、亜梨沙は、

「うわ、あっやしい。あのエロ猿、美子ちゃんの色香に迷って今頃……」

「あんたの妄想はとめどないわね」

蘭は呆れました。

第六百六十七話　世無蛾屡弩動く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と霊獣の娘である美子（めいず）は死人と化した欧殿を倒し樹里達の所に戻って来ました。

「よ、色男！」

亜梨沙が妙なテンションで言います。

「何言ってるんだ、あいつは？」

左京は首を傾げます。

「欧殿は倒しましたが、世無蛾屡弩（よむがるど）がいます」

美子は樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「そんな奴、私が一捻りだ」

どこにいたのかもわからない程影の薄い存在になった牛魔王が突然大声で言います。

「お館様、恥ずかしいです」

鉄扇公主が扇で殴りました。

「欧殿如きを倒したくらいで、我に勝てると思うなよ、愚か者共が」

声がしました。

「どちら様ですか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「我こそは世無蛾屡弩だ」

「そうなんですか」

それでも笑顔全開の樹里に世無蛾屡弩は切れました。

「少しは驚け！」

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

第六百六十八話　樹里対世無蛾屡弩

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）は樹里のボケに完全に切れ、その姿を現しました。

「我を見て恐れおののけ！」

黒い雲が天を蔽い、黒い塊が中から現れます。

「どうだ、怖いか？」

どうやらその紙屑みたいな塊が世無蛾屡弩のようです。

「誰が燃えるゴミだ！」

世無蛾屡弩が地の文に切れます。

「お師匠様！」

孫左京が樹里を庇うように立ちます。

「大丈夫ですよ、お猿さん」

耳元で久しぶりに囁かれたので、左京は鼻と耳と目から血を噴きました。

「左京、大丈夫？」

蘭と亜梨沙が駆け寄ります。

「ところでガルドさん」

樹里が言いました。

「その呼び方は誤解を招くからよせ」

世無蛾屡弩が言いました。

「そうなんですか。では、よっつぁん」

「誰が長屋のお隣さんだ！」

世無蛾屡弩は更に切れました。

「よし、お師匠様が化け物を引きつけている隙に」

復活した左京が動きました。

「私も！」

美子（めいず）も動きます。

第六百六十九話　毛屋辺魯棲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京と美子（めいず）はこっそり世無蛾屡努（よむがるど）の背後に回り込みます。

「おらあ！」

左京が如意棒で殴りかかります。

「愚かな猿よ」

世無蛾屡努が言いました。

「何！？」

世無蛾屡努の黒い身体から、ヌッと何かが飛び出して来ました。

「ぐおお！」

それは三つの頭の巨大な犬です。

左京の十倍程の大きさです。

「ひい！」

相手が犬とわかりビビる左京です。

「ビビってなんかいねえぞ」

強がる左京ですが、足が震えています。

「毛屡辺魯棲ね？」

美子が犬を見て言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「地獄の番犬と言われている最強の犬だ」

狼の露津狗が言います。

「でも、狼の方が強いんでしょ？」

亜梨沙が尋ねました。

「当然だ！」

燃える露津狗です。

「がああ！」

力を解放し、巨大化しました。

「凄いわ、露津狗、大きい」

誤解をされそうな亜梨沙のコメントです。

第六百七十話　狼の意地編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

露津狗は亜梨沙の言葉で奮起しました。

決して「大きい」と言われたせいではありません。

「そうなんですか」

樹里が地の文に納得しました。

「犬風情が偉そうにするな！」

露津狗の中の俯炎驪琉（ふえんりる）が雄叫びをあげます。

「ぐあああ！」

毛屡辺魯棲（けるべろす）も牙を剥いて威嚇します。

「ひいい！」

孫左京は完全にビビッています。

「び、びびってねえし！」

誰かの真似をして惚ける左京です。

「これは見ものだな。狼対犬か」

世無蛾屡弩（よむがるど）が言いました。

（狼族の名にかけて、決して負けられぬ！）

露津狗は毛屡辺魯棲を睨みました。

「この隙に」

ようやく歩けるようになった左京は世無蛾屡弩に近づきます。

「があ！」

するともう一頭毛屡辺魯棲が世無蛾屡弩の中から現れました。

「うへえ！」

左京は少しちびってしまいました。

「一頭だけだと思うなよ」

世無蛾屡弩は高笑いしました。

第六百七十一話　二頭の冥界の番犬編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京はもう一頭現れた毛屡辺魯棲（けるべろす）にちびってしまいました。

「何を狼狽えているのだ！」

牛魔王が言い、剣を振りかざします。

「があ！」

毛屡辺魯棲が牛魔王を威嚇します。

「その程度でビビッていたら鉄扇公主の夫は務まらぬ！」

牛魔王は思わず言ってしまいます。

「後でお話があります」

公主は目が笑っていない笑顔で言いました。

「うおお！」

牛魔王は墓穴を掘った事に涙しながら久しぶりの出番に張り切ります。

「牛魔王さん、頑張ってください」

樹里と璃里が言いました。

「うおお！」

元気百倍の牛魔王です。でも樹里達は左京が術で出した偽者です。

「バカな奴だ」

左京は親友を哀れみました。

「ぐおお！」

一方、巨大化した露津狗は別の一頭の毛屡辺魯棲に襲い掛かります。

「ぐわあ！」

露津狗の鋭い爪が毛屡辺魯棲を切り裂きます。

「ぐげえ！」

毛屡辺魯棲の腹から血が噴き出しました。

第六百七十二話　予想外の助太刀編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

毛屡辺魯棲(けるべろす)が二頭出現し、苦戦している孫左京達です。

「ぐおお！」

露津狗は一頭の毛屡辺魯棲を倒しました。

毛屡辺魯棲は煙のように消えました。

「しかし、我の番犬は無限ぞ」

世無蛾屡弩(よむがるど)が言いました。

また世無蛾屡弩の身体から別の毛屡辺魯棲が現れます。

「またかよ！？」

孫左京は泣きそうです。

「百一匹いますか？」

樹里が笑顔全開で尋ねます。

「著作権に引っかかりそうな事を言わないでください」

蘭が項垂れて言います。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

「何頭現れようと、全部俺が倒す！」

露津狗は燃えています。

しかしいくら露津狗でも何頭も一度に戦えません。

もう一頭の毛屡辺魯棲が左京達に襲いかかります。

「待て待てい！」

そこに脱獄囚が登場です。

「誰が終身刑だ！」

脱獄囚は切れました。

「俺だ、河東真君だ」

それは天界の河東真君でした。

第六百七十三話　毛屋辺魯棲対河東真君編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

天界の河東真君が助太刀に来てくれました。

「お元気そうですね、樹里さん」

河東真君が言いました。

「どちら様ですか？」

樹里は笑顔全開で尋ねました。

河東真君は撃沈です。

「ざまあみろ」

孫左京はそれを見てほくそ笑みます。

「ええい、この私が来たからにはこんな小犬、蹴散らしてくれるわ！」

河東真君は意外に早く復活しました。

「何、あの怖い顔の人？」

美子（めいず）が亜梨沙に尋ねました。

「罪人でしょ」

亜梨沙は適当な事を言いました。

「太路(たろ)と治路(じろ)、こやつらを倒せ！」

二頭の白い犬が天から駆け下りて来て毛屡辺魯棲(けるべろす)に襲い掛かります。

「ぬ？」

その犬の登場に世無蛾屡弩(よむがるど)が焦ったようです。

「ぐがあ！」

毛屡辺魯棲はたちまち太路と治路に倒されてしまいました。

「おのれ！」

世無蛾屡弩は河東真君を睨んだようです。

顔がないのでわかりません。

第六百七十四話　世無蛾屡弩の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）はその身体に纏わりついている黒い妖気を振り払います。

「我（われ）が世無蛾屡弩である」

そこに現れたのは鷺基と瓜二つイケメンです。

「おお！」

イケメンハンターの亜梨沙が雄叫びを上げます。

「これは一体？」

蘭が目を見張ります。

「そうか、貴方は鷺基の息子だから彼にそっくりなのね？」

美子（めいず）が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「イケメンが敵なら僕の出番はないにゃん」

リックは肩を竦めます。

「ならば俺が相手だ！」

今この場にいる樹里側で一番のイケメンの露津狗が襲いかかります。

「それは俺だ！」

身の程知らずの孫左京が加わります。

「私もだ！」

同じく牛魔王です。

「イケメンは嫌いだ！」

河東真君が叫びました。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

「いいぞ、束になってかかって来い」

世無蛾屡弩はニヤリとしました。

第六百七十五話　イケメンは無敵？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

実はその正体がイケメンだった世無蛾屡弩（よむがるど）です。

鷺基そっくりなので、露津狗がいつもより多めに燃えています。

「違うぞ！」

露津狗は地の文に不服申し立てをしました。地の文はそれを却下しました。

「イケメンは嫌いだと言ってるだろう！」

河東真君が田路治路（たろじろ）と共に世無蛾屡弩を攻撃します。

「醜いのは犯罪だ」

世無蛾屡弩がイケメン光線を放射しました。

「ぐげえ！」

脱獄囚顔の河東真君はあっさりやられました。

「そんな出鱈目な攻撃があるか！」

孫左京が怒って殴りかかります。

「醜いぞ、お前も」

世無蛾屡弩の流し目が孫左京を跳ね飛ばします。

「きゃああ！」

亜梨沙と蘭はすでにイケメンパラダイスに行ってしまいました。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

「お前様、遊魔も行きたいです」

遊魔が言うとリックがビクッとします。

「それはダメにゃん、遊魔」

第六百七十六話　イケメン対イケメン編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）のイケメン光線にやられてしまった亜梨沙と蘭です。

「ヨム様！」

ちょっとギリギリの呼び名です。しかも世無蛾屡弩は微笑んでいます。

「胸糞悪い！」

ブサメンズの一人の孫左京が言います。

「誰がブサメンズだ！　ブサメンはこいつだろう？」

左京は容赦なく河東真君を指差します。

「何だと！？」

醜い者同士の醜い争いです。

「があ！」

イケメンの露津狗が世無蛾屡弩に襲い掛かります。

「はあ！」

世無蛾屡弩は剣を取り出し、露津狗に斬りつけます。

「おお！」

露津狗はそれをかわしました。

「お前様、遊魔は誰を応援すれば良いのでしょう？」

遊魔が尋ねました。

「勿論僕にゃん」

リックも久しぶりにイケメン力を全開にしました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「あんた達、何してるのよ！？　敵はあいつでしょ！」

醜い争いをしている左京達に美子（めいず）が切れました。

第六百七十七話　イケメン三竦み編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）と露津狗のイケメン対決にリックが参戦しました。

「どうだにゃん、僕の方がイケメンにゃん」

リックは気取って言いました。

「露津狗さんの方が素敵です、お前様」

遊魔の無情な一言でリックは敗戦しました。

「にゃん」

項垂れて戦場を去るリックです。

「イケメンは大嫌いだあ！」

河東真君の怒りが乗り移ったかのように田路治路の二頭が世無蛾屡弩に襲いかかりました。

「おのれ！」

世無蛾屡弩が田路治路を退けようとすると、

「ヨム様に何するのよ！」

イケメンパラダイスの住人と化した亜梨沙と蘭が田路治路に立ち塞がります。

「蘭さんと亜梨沙さんまで何してるのよ！」

真面目な美子（めいず）は泣きそうです。

「今だ！」

姑息な攻撃が得意な孫左京と牛魔王は後ろから世無蛾屡弩に殴りかかります。

「引っかかったな」

世無蛾屡弩が言いました。

「何？」

左京はギョッとしました。

第六百七十八話　闇のイケメン編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）が言った不吉な言葉に孫左京は思わず後退りしました。

「何だ、こいつ？」

牛魔王はすでに左京より後ろに避難しています。

「情けない」

奥方の鉄扇公主が呆れています。

「我の力は我を賛美する者を贄とする」

世無蛾屡弩がニヤリとして、蘭と亜梨沙を取り込んでしまいます。

「ああん、ヨム様と一体になれるわあ！」

蘭と亜梨沙は喜んで世無蛾屡弩に取り込まれました。

「何て事だ……」

露津狗が世無蛾屡弩を睨みつけます。

「だから言ったのよ、もう！」

美子（めいず）が言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「何！？」

蘭と亜梨沙を吸収したので世無蛾屡弩が大きくなりました。

「我は無限に力を取り込めるのだ。我こそがこの世の支配者よ」

左京はその姿を見て唖然としました。

（やばいんじゃないの、俺ら？）

ふと見るとリックはすでに逃走した後でした。

第六百七十九話　美子、奮闘する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美子（めいず）は世無蛾屡弩（よむがるど）を睨みつけて、

「あんたなんかにこの世を渡すものですか！」

と叫ぶと、剣を振り上げ、挑みます。

「霊獣の子よ、何故我に刃向かう？」

世無蛾屡弩が尋ねます。

「私は孫左京さんが好きだからよ！」

美子が大声で言いました。左京はそれを聞いて驚愕しました。

「ええ！？」

まるで某マスオさんのように驚きます。

「何だ、醜い者が好きなのか」

世無蛾屡弩が嘲りました。

「左京さんは醜くなんかない！」

美子が剣を振り降ろします。

「そうかな？」

世無蛾屡弩はニヤリとして黒い剣を出し、それを受けます。

「醜いのはてめえだ！」

左京はまた姑息にも世無蛾屡弩の背後から殴りかかります。

「見切っている」

世無蛾屡弩が言いました。

「ぶあ！」

世無蛾屡弩は全く動いていないのに左京はボロボロになって倒れました。

「何だ、今のは？」

露津狗にもわからないようです。

第六百八十話　世無蛾屡弩の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

孫左京は世無蛾屡弩（よむがるど）の謎の攻撃で倒れました。

「享年五百五十歳。安らかに眠れ」

牛魔王が左京に土をかけます。

「死んでねえよ！」

左京は切れました。

「良かった！」

抱きついて誤魔化す牛魔王です。

「我は更に強くなる。そして第六天魔王をも凌ぎ我が全てを手に入れるのだ」

世無蛾屡弩は第六天魔王をも倒すつもりのようです。

「だったらあんたの方が危険だからここで倒す！」

美子（めいず）がもう一度攻撃を仕掛けます。

「温い！」

世無蛾屡弩は美子の剣を弾き飛ばし、隙を突こうとした左京と牛魔王を薙ぎ払いました。

「そこだ！」

更にそこへ突進した露津狗の牙を剣で受けます。

「ぐぬ！」

黒い剣が露津狗の鋭い牙を溶かします。

「おのれ！」

露津狗は慌てて退きました。

「何という強さだ」

鉄扇公主が牛魔王を助け起こしながら言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

六百八十一話　脱獄囚顔の逆襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

美子（めいず）、孫左京、牛魔王、露津狗が束になってかかっても、世無蛾屡弩（よむがるど）に敵いませんでした。

「お師匠様、逃げた方が良いのでは？」

すっかり存在感がなくなっている龍の馨が言います。

「大丈夫ですよ。きっと勝てます」

樹里は笑顔全開で言いました。璃里も心配そうです。

「どうした、もう終いか？」

世無蛾屡弩がニヤリとします。

「まだだ、まだ終わらんよ！」

ある人の名台詞を真似て、脱獄囚が復活です。

「誰が西川寅吉だ！」

マニアックな切れ方をして河東真君が世無蛾屡弩に田路治路を向かわせます。

「ぬう！」

世無蛾屡弩は田路治路の攻撃を受け、怯みました。

「お前は闇の種族。私のような正当な天界の者には敵わんのだ」

河東真君が言いますが、見た目は闇の種族です。

「うるせえ！」

河東真君は地の文に切れました。

「があ！」

田路治路の連携攻撃に世無蛾屡弩は後退します。

第六百八十二話　天界人の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

脱獄囚の河東真君の活躍で形勢逆転です。

「脱獄囚じゃねえよ！」

河東真君が地の文に切れます。

では模範囚ですか？

「俺は天界人だ！　いい加減にしないと運営に通報してＩＤ剥奪してもらうぞ」

それは困ります。何でも言う事を聞きますから許してください。

「だったら俺をイケメンにしろ」

通報してください。

「……」

河東真君は項垂れました。

世の中にはできる事とできない事があります。

「おのれ！」

世無蛾屡弩（よむがるど）が怒り出します。

「天界の者がどれほどのものだ！」

世無蛾屡弩は妖気を噴き出しました。

「危ない！」

美子（めいず）と孫左京が樹里と璃里を庇って飛びます。

「いかん！」

露津狗は遊魔を庇いました。

「露津狗様！」

遊魔は感激しています。

「僕はどうすれば……」

途方に暮れる馨ですが、

「儂と一緒に逃げるのじゃ」

ずっと隠れていた鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

第六百八十三話　妖気対女子力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西をめざしています。

世無蛾屡弩（よむがるど）は妖気を爆発的に噴き出しました。

ブサメンの河東真君に天界人との違いを指摘され、まさかの逆ギレです。

「ブサメン言うな！」

今度は河東真君が切れますが、

「あわわ！」

世無蛾屡弩の妖気が迫って来たので、田路治路と共に離れます。

「お猿さん、大丈夫ですよ」

樹里は自分を庇っている孫左京に言いました。

「はい」

樹里に耳元で囁かれた左京はフニャッとしました。

「む？」

世無蛾屡弩は前に出て来た樹里、璃里、遊魔、美子（めいず）の四人を見ました。

「何のつもりか？」

その四人の並んでいる姿を見ただけで牛魔王は鼻血を出しました。

「お館様！」

奥方の鉄扇公主が殴りました。

「妖気には陽気です」

樹里は笑顔全開で帽子を取ります。

「まずい、目を伏せろ、失血死するぞ！」

左京はハッと我に返って馨と露津狗とついでに鴻均道人（こうきんどうじん）を伏せさせました。

第六百八十四話　陽気の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）の前に並んだこのお話の美少女四人衆です。

「私達は数に入れてくれないの？」

どこからか、世無蛾屡弩に吸収されてしまったはずの亜梨沙と蘭の声が聞こえます。

貴女達は「美少女」ではありませんから。

「何だと！？」

亜梨沙と蘭が地の文に切れます。

「陽気？　そんなもので我を倒せるか！」

世無蛾屡弩はせせら笑いました。

「そうなんですか」

樹里が帽子を取った時点で牛魔王は鼻血地獄です。

「いきますよ、よっちゃん」

樹里が言いました。

「誰が三つ子の姉ちゃんだ！」

世無蛾屡弩はマニアックに切れました。

「来る！」

孫左京達は一斉に伏せました。

「笑顔全開です」

「はい！」

樹里の呼びかけに璃里と美子（めいず）と遊魔が応じニコッと会心の笑顔を炸裂させます。

「何！？」

その恐るべきパワーが世無蛾屡弩に激突します。

「うへえ！」

世無蛾屡弩はその力に圧倒されました。

第六百八十五話　世無蛾屡弩、飛ぶ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）は樹里達四人の美少女の「陽気」力に圧倒され、吹き飛びました。

「にゃんだ？」

逃走中のリックは、空を飛んで行く世無蛾屡弩を見上げました。

「にゃん！」

そしてリックは、「陽気」の余波にやられ、鼻血地獄です。

「死んでしまうにゃん……」

リックは痙攣しました。

樹里達は大型きんと雲で世無蛾屡弩が飛ばされた方へと向かい、途中で枯れ木のようになったリックを拾いました。

リックは樹里達から数里離れた所にいたのに危うく死にかけました。

それほど樹里達の力は強いのです。

「いたぞ」

目のいい露津狗が言いました。

「先に行きます」

鼻血が止まった孫左京がきんと雲で先発します。

（お師匠様からしばらく離れていないと死ぬ）

左京は樹里の怖さを知った気がしました。

馨と鴻均道人（こうきんどうじん）はまだ気を失っています。

「ううう」

牛魔王はうなされていました。

第六百八十六話　世無蛾屡弩、改心する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

最強の四人衆のお陰で、世無蛾屡弩（よむがるど）は倒されました。

樹里達は世無蛾屡弩が落ちた所に着きました。

「お師匠様、私が悪うございました」

世無蛾屡弩は頭を地面に擦りつけて詫びました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

亜梨沙と蘭も、世無蛾屡弩が改心したせいで分離していました。

「むしろこの二人の方が悪に見える」

孫左京が呟きました。

「私も第六天魔王の力で操られていたようです」

世無蛾屡弩が涙ぐむと、

「ヨム様、可哀想！」

亜梨沙と蘭が絶叫します。

「どうにも納得がいかん」

ブサメンの河東真君が言います。

「ブサメン言うな！」

ブサメンが切れました。

「ううう」

項垂れる河東真君です。

「気を許すな、猿。世無蛾屡弩を監視するのだ」

ようやく復活した鴻均道人（こうきんどうじん）が言います。

「どういう事だ？」

「イケメンは信用できん」

道人も河東真君派のようです。

第六百八十七話　そして、お別れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

世無蛾屡弩（よむがるど）は本当に樹里に屈服したようです。

「私を弟子にしてください」

世無蛾屡弩が言いました。すると食い扶持ばかり気にする亜梨沙が、

「ダメよ」

と言います。

「そこを何とか」

世無蛾屡弩がウルウルした目で亜梨沙を見ます。

亜梨沙はまたやられてしまいました。

「お師匠様、私からもお願いします」

蘭は呆れました。

やがて鷺基と鷺佗が来ました。

「これからは父御（ちちご）と姉上様と共に働きます」

世無蛾屡弩が言うと、鷺基は、

「父御はやめよ」

と言いました。

「お師匠様、お名残惜しゅうございますが、我らも世界の安定のために力を尽くします」

鷺佗が涙ぐんで言いました。キュンとする孫左京と牛魔王と馨と露津狗とリックです。

「鷺佗、元気でね」

蘭が涙ぐんで言いました。

「頑張ってくださいね」

樹里が笑顔全開で言うと、世無蛾屡弩は鼻血を噴きました。

後遺症のようです。

第六百八十八話　遂にお別れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗達との別れの時です。

「今まで世話になった。お師匠様を頼む、猿」

鷺佗が涙ぐんで言ったので、

「お、おう」

孫左京は赤くなって応じます。

「心配しないで。お師匠様は私と左京さんでしっかりお守りしますから！」

嫉妬からか、美子（めいず）が割り込みます。

「そうか。頼んだぞ」

鷺佗は美子を見ました。

「もちろん」

美子も涙ぐみます。

「達者でな」

露津狗が鷺基に言います。

「お前もな。亜梨沙殿とうまくやれよ」

鷺基が言うと露津狗は赤くなりました。

「第六天魔王は東の魔物達を求めていたはず。東の地が危ういかも知れません」

世無蛾屡弩（よむがるど）が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。また鼻血が出そうになる世無蛾屡弩です。

「鷺佗しゃん、行ってしまうのかにゃん」

リックは寂しそうに言いました。

「お前様！」

遊魔が怒ります。

鷺佗達は北へと飛び立ちました。

第六百八十九話　東の魔物編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

鷺佗と鷺基と薔鏤鬼(ばるきり)吏達が去り、亜梨沙は食い扶持が増えた事を喜びました。

「心置きなく食事できるわね」

「あんたねえ」

呆れる蘭です。

「東に危うい兆しがあるのは確かだ。行かねばなるまい」

鴻均道人(こうきんどうじん)が璃里のお尻を触りながら言います。

「そうだな」

孫左京は道人を殴って同意しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「東ってどこ？」

大型きんと雲に乗りながら、美子(めいず)が尋ねます。

「倭(わ)だ」

道人が言いました。

「ミツワ石鹸ですか？」

樹里が尋ねました。

「誰がバトンガールだ！」

道人が切れました。古過ぎて誰も知らないＣＭです。

「三国志魏書東夷伝倭人条にある国だ」

「邪馬台国ですね」

蘭が言いました。

「邪馬台国はなかったのよ」

亜梨沙が付け焼き刃の知識をひけらかします。

誰も聞いていないのに気づき亜梨沙は項垂れます。

第六百九十話　東へ東へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指しています。

しかし、ここに来て東を目指す事になりました。

「話が目茶苦茶にゃん。僕は嘘はいけないと思うにゃん」

リックは正当な主張をしました。

「じゃあ、ここで降りろ」

絶対樹里主義の孫左京がリックを大型きんと雲から蹴落としました。

「にゃん！」

リックは真っ逆さまに落ちました。

「何て事するのよ！」

優しい美子（めいず）が飛翔し、リックを助けました。

「ありがとうにゃん、美子たん」

リックは美子のお尻を触ります。

「どこ触ってんのよ！」

またリックは蹴落とされました。

「お前様、お達者で」

遊魔は落ちて行くリックに別れを告げ、露津狗に寄り添います。

「ダメにゃん！」

リックは嫉妬の炎によって空を飛び、大型きんと雲に戻りました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「こんな展開で一話使うの？」

蘭は項垂れました。

「見えて来たぞ、倭だ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

第六百九十一話　八頭の蛇編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東を目指しています。

樹里達の乗る大型きんと雲はたちまちのうちに樹里が暮らしていた国を通り過ぎ、倭の国にさしかかりました。

「領空侵犯ですか？」

樹里は笑顔全開で言いました。

「この時代にはそんな言葉ないです、お師匠様」

蘭が項垂れます。

「天界で倭の国に恐ろしい魔物がいると聞いた事がある」

存在感の欠片もなかった河東真君が突然言いました。

「お前の顔の方が恐ろしいだろ」

孫左京が言いました。

「うるせえ！」

河東真君は切れました。

「倭の出雲と言う国に八つの頭を持つ蛇がいると聞いたぞ」

「八つの頭の蛇？」

俄然興味が湧く孫左京です。

「その蛇は素戔嗚尊が退治したでしょ？」

ネタ晴らしをする亜梨沙です。

「いや、その子供がいたのだ。今出雲は大変な事になっている」

河東真君は更に奥の手を出して来ました。

「結局出鱈目にゃん、この話は」

リックがボソッと言いました。

第六百九十二話　出雲の国へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していました。

でも今は樹里の暮らしていた国より東に来ています。

良いのでしょうか？

樹里達は天界でも噂になっている八つの頭を持つ蛇がいる倭の国の一つである出雲に向かっています。

何故かボコボコになっているリックです。

「僕が何をしたって言うにゃん……」

作者の横暴に抗議するリックです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「見えて来たぞ、出雲の国だ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里のお尻を触って言います。

「本当だ」

孫左京が道人を殴って言いました。

「美人の匂いにゃん！」

リックが大型きんと雲から飛び降りました。

「あいつ頭おかしくなって飛び降りたわよ」

亜梨沙が言いました。

「お前様」

遊魔が露津狗の腕に寄り添ったままで叫びます。

「旦那が飛び降りたんだから後を追いなさいよ」

嫉妬に狂った亜梨沙が詰め寄ります。

「そうなんですかあ」

遊魔は笑顔全開で言いました。

第六百九十三話　リックの小冒険その壱編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里一行は倭の国にある出雲の国に来ていました。

そして突然、猫又のリックが、

「美人の匂いにゃん」

と言って、大型きんと雲から身を投げました。

「スケベな奴だったが、どうか成仏してくれ」

孫左京はリックの冥福を祈りました。

「僕は死んでないにゃん！」

遥か彼方でリックの声がしました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

リックは無事大地に降り立ちました。

「美人の匂いにゃん！」

リックは猛烈な速さで走ります。

「誰が小川ローザだ！」

リックは地の文に突っ込みました。

「いたにゃん！」

リックは美人を見つけました。

その美人は櫓（やぐら）の上に載せられ、シクシク泣いていました。

「どうしたにゃん、お嬢さん？」

リックは櫓を登り、声をかけました。

「私は日照りが続くこの村を救うために神様に捧げられるのです」

「にゃにー！？」

リックは仰天しました。

第六百九十四話　リックの小冒険その弐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

第六天魔王の不穏な動きを感じた樹里一行は、樹里が暮らしていた国より東にある倭の国に来ました。

猫又のリックは美人の匂いを探知し、大型きんと雲を飛び降りて別行動です。

早速リックは櫓の上にいる生け贄に捧げられた美女を見つけました。

「君の名は？」

リックは気取って尋ねます。

「真知子です」

女性が答えます。

「誰が菊田一夫だ！」

リックはほとんどの読者が知らない切れ方をしました。

「本当の名を教えて欲しいにゃん」

リックは女性の手を取って言いました。

「異国の方、我が国では真の名を教えし時は、その方と添う時でございます。故にお教えできませぬ」

女性は言いました。するとリックは意味がわからないにも関わらず、

「じゃあ真知子たんでいいにゃん」

と言いました。

「早くお逃げくだされ。ここにいると神のお怒りに触れまするぞ」

真知子さんは言いました。

第六百九十五話　リックの小冒険その参編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

猫又のリックは単独行動をして自称真知子さんと出会いました。

真知子さんは神の生け贄に捧げられていて高い櫓の上にいました。

「神様が現れるにゃんか？」

リックは俄に曇り始めた空を見上げます。

いかにも何か出て来そうな雲行きです。

「貴様、何奴だ？　我が贄を奪う者か？」

雷鳴のような大きな声が辺りに響きます。

「違うにゃん。僕は孫左京という猿に言われて貴方に猿の言葉を伝えに来たにゃん」

リックは恐ろしさのあまり嘘を吐きました。

「孫左京だと？」

神の声が尋ねます。

「そうにゃん。お隣の国にいる乱暴者の猿にゃん。自分が一番強い

と思ってるにゃん」

「身の程知らずの阿呆か」

神の声が笑ったようです。

「そうにゃん。でもそいつは貴方を軽くやっつけると言ってたにゃん」

「何だと!?」

八つの頭の巨大な蛇が山の向こうから現れました。

リックは卒倒しそうです。

第六百九十六話　リックの小冒険その肆編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは山の向こうから姿を現した八つの頭の巨大な蛇にチビりそうです。

（こいつは強そうにゃん。あのバカ猿も今度こそ死ぬにゃん）

リックはまだ主人公の夢を諦めていません。

結構粘着質です。

「その猿はどこにおるのだ、猫！？」

蛇の真ん中の頭が叫びました。

「も、もうすぐここに来るにゃん。早く逃げた方がいいにゃんよ」

リックは少しチビりながら言いました。

「ふざけるな！　我が何故逃げる必要があるのだ！」

蛇は怒りました。

「異国の方、どうぞお逃げください。私が生け贄になればすむ事です」

自称真知子さんが言いました。

「いや、貴女のような美人は死んではいけないにゃん。世の中には生け贄になるために生まれて来たような奴がいるにゃん」

リックは亜梨沙を思い浮かべて言いました。

「ブエックシ！」

その亜梨沙は噂をされたせいか、大きなくしゃみをしました。

第六百九十七話　リックの小冒険その伍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは何とか自称真知子さんを助けられないかと思案しました。

「異国の方、貴方のそのお気持ちだけで十分です。どうぞお逃げください」

真知子さんのその言葉と涙に、リックは決意しました。

「取り敢えず、逃げるにゃん！」

真知子さんをスッと抱きかかえ、リックは櫓を飛び降ります。

「む？　猫め、我が生け贄をどこへ連れて行く気だ？」

八つの頭の蛇がリックを追いかけて来ます。

「そうにゃん！」

リックは起死回生の策を思いつきました。

「おねいさーん、チューするにゃん」

リックは真知子さんにキスを迫りました。

すると、

「お前様！」

どこからともなく遊魔が現れて、リックに飛び膝蹴りが決まります。

「にゃん！」

リックはその衝撃で、真知子さんを抱えたまま飛んで行きます。

奇想天外な脱出策です。

「うぬでも良い。我が生け贄となれ！」

蛇は遊魔に襲いかかりました。

第六百九十八話　リックの小冒険終の章編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックの奇策で自称真知子さんは助かりましたが、遊魔が危機一髪です。

「ぐおお！」

するとそこへ巨大化した露津狗が現れ、蛇の頭を踏みつけました。

「ぐう！」

蛇はそのせいで地面に倒れました。

「露津狗様！」

遊魔は感激して露津狗の広い背中に飛び乗ります。

「遊魔殿、怪我はないか？」

「はい、ありません」

露津狗と遊魔のいい感じをムッとして見下ろす亜梨沙です。

「浮気者」

蘭は身勝手な発言をする亜梨沙を白い目で見ます。

「こいつはすげえな。倒し甲斐がある蛇だ」

孫左京は嬉しそうです。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「露津狗、そいつは俺の獲物だぜ！」

左京はきんと雲で蛇に向かいました。

リックは地面で気絶しています。

「ありがとうございました、異国の方」

自称真知子さんはリックにお礼のキスをして駆け去りました。

リックの小冒険はおしまいです。

第六百九十九話　八岐大蛇編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八つの頭の蛇は、自分を踏みつけた巨大な狼である露津狗を十六の目で睨みます。

「神である我の頭を踏みつけるとは何という不届き者ぞ！　許さぬ！」

すると露津狗はニヤリとして、

「何が神だ。お前は蛇ではないか。蛇が神を騙るなど、片腹痛いわ」

「おのれ！」

露津狗の挑発に蛇は怒り心頭です。

「この八岐大蛇（やまたのおろち）を侮辱した報い、受けてもらうぞ」

蛇は自分の名前を聞いてもいないのに名乗りました。

「ごちゃごちゃうるせえ、バカ蛇！」

孫左京が卑怯な戦法で後ろから如意棒で殴ります。

「ごお！」

八岐大蛇は前のめりに倒れました。

「がぁ！」

露津狗が業火で攻撃します。

「うお！」

大蛇は炎に包まれました。

「やったか？」

大型きんと雲の上から蘭が呟きました。

「いや、あの程度では無理よ」

鴻均道人（こうきんどうじん）は璃里のお尻を触りながら言いました。

第七百話　大蛇の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇は、露津狗の業火で燃え尽きるかに思われました。

「何!?」

露津狗は仰天しました。

大蛇は業火の中で平然としているのです。

「この程度で燃え尽きるほどやわではない」

大蛇の十六の目が赤く輝きます。

「露津狗様、逃げてください」

背中の遊魔が叫びました。

「くう!」

露津狗は大蛇が放った八つの口からの溶岩を辛うじてかわしました。

「何だ、あれは?」

空から見ていた孫左京が眉をひそめました。

溶岩は辺りの草木を焼き尽くして固まりました。

「あれがあの蛇の力だ」

璃里のお尻を触って蘭に殴られた鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

「手強そうね」

亜梨沙が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「私の出番だな」

脱獄囚がしばらくぶりに言いました。

「誰が白鳥由栄だ！」

河東真君はマニアックに切れました。

誰にもわからないボケです。

第七百一話　大蛇対脱獄囚（河東真君）編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇（やまたのおろち）は溶岩を吐く宇宙怪獣でした。

「誰が怪獣だ！　我は神である」

大蛇は地の文に切れました。

「く……」

露津狗は歯軋りします。

「露津狗様、頑張ってくださいませ」

背中の遊魔が囁きます。

「うおお！」

突然燃える露津狗です。ロリコンでしょうか？

「違う！」

露津狗は地の文に切れ、大蛇を睨みます。

「待て待て！」

するとそこへ田路治路を引き連れた河東真君（本名脱獄囚）が降りて来ました。

「本名じゃねえよ！」

河東真君は地の文に切れました。

「神を名乗るとはおこがましい。真の天界人の力、思い知るがいい！」

田路治路が走り大蛇に飛び掛ります。

「おい、その蛇は俺の獲物だぞ！」

孫左京が急降下して言いますが、

「グルル！」

田路治路の威嚇にビビり、引き下がります。

「お前もよくその顔で天界人を名乗るな？」

大蛇は河東真君を嘲笑いました。

第七百二話　河東真君、奮闘する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

河東真君は大きな青龍刀を抜き大蛇を睨みます。

「顔は関係ない！　私は天帝の妃の弟の奥さんの従弟だ。紛れもなく天界人だ！」

「それがどうした、バ河東真君」

大蛇は何故か河東真君の渾名を知っています。

「何故それを？」

河東真君は狼狽えました。

「有名だよ」

大蛇はまた笑いました。

「おのれ！　田路治路！」

二頭の大きな犬が更に巨大化し大蛇に襲い掛かります。

「ぐああ！」

大蛇は八つの口から溶岩を吐きました。

「酔っ払いのゲ〇みたいね」

亜梨沙が品のない例えを言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じます。

「遅い！」

河東真君は大蛇の攻撃をかわし田路治路と共に間合いに入り、大蛇を斬りました。

「何！？」

青龍刀は折れ、田路治路の牙は大蛇の鱗に弾かれました。

「何て硬さだ」

孫左京は空から見ていて呟きます。

「その程度か？」

大蛇はニヤリとしました。

第七百三話　露津狗の急襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

河東真君は歯軋りして八岐大蛇から離れました。

田路治路も唸り声を上げて離れます。

「どいていろ、悪人面！　ここからはずっと俺のターンだ！」

孫左京が意味不明の事を言って、大蛇に向かいます。

「今度は猿か？」

大蛇は左京を見上げます。

「今だ！」

露津狗が猛然と突進し大蛇の腹に噛みつきました。

「ぐわ！」

どうやら大蛇の鱗は硬いのですが、腹はモチモチしてちょうどよい食感のようです。

「ぐう！」

露津狗は更に牙を食い込ませ、

「遊魔殿、降りてください。危険です」

「大丈夫です。遊魔はここにいます」

遊魔が露津狗の背中にしがみつきました。

露津狗はジンとしました。

「狼如きが！」

大蛇は背中に翼を出しました。

「キング〇ドラですか？」

樹里が尋ねました。

「そのボケは以前使いました、お師匠様」

蘭と亜梨沙が項垂れます。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第七百四話　八岐大蛇の変化編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇は翼を生やし空へ舞い上がります。

「こっちに来る！」

亜梨沙が絶叫します。

「お師匠様！」

それを見た孫左京が大蛇を追いかけます。

「ぐう！」

露津狗は大蛇を放しません。

「いい加減にせんか！」

大蛇の七つの首が露津狗に噛みつきました。

「ぐう！」

露津狗は全身血まみれです。

「露津狗さん！」

遊魔が絶叫しました。

「狼王の血、確かにもらったぞ」

大蛇が言いました。

「何？」

露津狗は遂に力尽き、大蛇から離れて落下します。

「きゃあ！」

錐揉みながら落ちる露津狗を美子（めいず）が追いかけました。

「しっかり！」

美子は露津狗の落下を食い止めました。

「お師匠様が危ない……」

露津狗は苦しそうに呟きます。

「待てこら、蛇！」

左京が大蛇に追いつきます。

「誰が蛇だ！　我は神だ」

そう叫んだ大蛇の身体に四本の足が生えました。

「何ッ！？」

左京は仰天しました。

第七百五話　進化する大蛇編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇は樹里達の乗る大型きんと雲に襲いかかります。

「させるか！」

孫左京が大蛇の前に立ちはだかります。

「退け、猿！　うぬ如き、我の敵ではない！」

大蛇は前足で左京を払い退けようとします。

「おっと！」

左京は素早く避けました。

「はあ！」

大蛇は溶岩と業火を吐きます。

「あれは露津狗の力……」

蘭が目を見開きます。

「どういう事よ？」

亜梨沙が尋ねます。

「あの魔物は進化するのだ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱いて言います。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開ですが蘭は道人を殴ります。

「何してるんだ！」

左京は大蛇の攻撃をかわし如意棒で殴りました。

「はあ！」

今度は大蛇の身体から鱗が槍のように襲いかかります。

「あの蛇女の力か？」

左京は女（じょか）？との戦いを思い出します。

「く！」

鱗で身体を切り裂かれ左京は血を噴き出しました。

第七百六話　進化続く編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇は噴き出した孫左京の血を浴びました。

「これで猿の力も得た」

「何？」

左京は身体を術で治しながら眉をひそめます。

「次が来るわ、左京さん」

美子（めいず）が露津狗を地上に降ろしてから左京に追いつきました。

「次？」

左京はキョトンとします。

「はあ！」

四本の足が生えた大蛇は気合いを入れると、無数に分身しました。

「何！？」

左京は仰天しました。

「左京さんの力を受け継いだのよ。これがあいつの強さの秘密よ」

美子が大蛇を睨んで言いました。

「ひいい！」

亜梨沙が分身した大蛇を見て気絶しました。

「何なのよ、こいつ？」

蘭は目を見開きました。

「でも大丈夫ですよ」

樹里は笑顔全開です。

「私がいるからな！」

田路治路を伴い河東真君が大蛇に飛翔します。

「悪人が空を飛ぶ図は怖いな」

左京が呟きました。

「私もいるぞ！」

牛魔王も雲に乗って飛びました。

第七百七話　蘭の秘策編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京の力を得て分身の術を使った八岐大蛇です。

「もうおしまいだ！」

馨が絶叫しました。

「大丈夫ですよ」

また樹里が笑顔全開で言いました。

「そうか」

蘭はふと思いつきました。

「やってみる価値はあるかも」

蘭は樹里に耳打ちします。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「おらあ！」

分身達と戦う孫左京達です。

大蛇の分身は強く牛魔王は苦戦します。

「お館様、頑張ってください！」

奥方の鉄扇公主が言いますが、

（樹里さんに言って欲しい）

と不届きな事を思う牛魔王です。

「左京、こっちに来て！」

蘭が左京を呼びます。

「後にしろ！」

左京が怒鳴り返します。

「お師匠様がお呼びなのよ！」

「それを早く言え！」

左京は分身に分身を出して戦わせ、自分は蘭のところに行きます。

「お師匠様、今です」

蘭が叫びます。

「そうなんですか」

樹里は帽子を取りました。

第七百八話　八岐大蛇の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里が帽子を取ったので、わかっている人達は目を閉じ、身を伏せます。

「璃里様と美子（めいず）ちゃんと遊魔ちゃんもお願いします！」

蘭が叫びました。

「やば！」

孫左京は慌ててきんと雲で戦線離脱です。

（あれはそばにいるだけで死にかける）

「陽気全開です」

樹里が笑顔で言いました。

樹里、璃里、美子、遊魔が一斉に笑顔になります。

「何をしているか！？」

事情を知らない八岐大蛇は彼女達を思い切り睨みました。

「ぐあああ！」

その途端、身体中の血液が大蛇の鼻の穴から噴き出しました。

「ぶおおお！」

大蛇は分身が解け、真っ逆さまに墜落して行きました。

「ぐああ！」

大蛇は地面に激突し、凄まじい砂埃を舞い上げました。

「凄いわね。私達も加わった方がいいのでは？」

鉄扇公主が言いました。

「ダメなのよ。悲しいけど」

蘭は公主の肩を叩き、寂しそうに言いました。

第七百九話　大蛇の敗因編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

八岐大蛇は樹里達の陽気力に負け、墜落しました。

「凄い効果でしたね。何故なんですか？」

余波で鼻血を噴き出した馨が尋ねました。

「あの蛇は血を浴びて左京の能力を手に入れたでしょ？」

蘭は得意そうに言います。

「そうですね」

馨はまだわからないようです。

「要するに左京の弱点も吸収したって事」

「なるほど」

馨はようやく合点がいきました。

「あの蛇は元は蛇ではあるまい。あの力をどこで身に着けたのか気になる」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里のお尻を触りながら言いました。

「そういう事か！」

孫左京が戻って来て道人を殴りました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「助かったよ」

遊魔を背に乗せた露津狗が戻って来ました。

「リックはどうしたの？」

美子（めいず）が尋ねました。

「どうしたんでしょう？」

笑顔で言う遊魔に顔を引きつらせる美子です。

第七百十話　リックの帰還編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京と露津狗は、墜落した八岐大蛇の様子を見に行きました。

「どうしてまた露津狗に乗ってるんだ？」

露津狗の背にいる遊魔に左京が尋ねました。

「亜梨沙さんが怖いんです」

遊魔は何故か笑顔で言いました。

（リック、お前の奥さんはもうすっかり元気だ。安らかに眠ってくれ）

左京はリックの霊に祈りました。

「僕は死んでないにゃん！」

どこからかリックの声が聞こえました。

「お前様？」

遊魔は怪訝そうな顔です。

「ここにゃん！　早く助けるにゃん」

リックは地上で手を振っていました。

「猫は生きていたのか？」

露津狗が呟きました。心なしか悔しそうです。

「残念だったなあ」

左京がからかいます。

「うるさい」

露津狗は赤面しました。

左京と露津狗は地上に降りました。

「一緒に戻るにゃん」

リックが遊魔に近づきます。

「嫌です」

遊魔は露津狗の背後に隠れてしまいました。

第七百十一話　遊魔の質問編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは露津狗の背後に隠れてしまった遊魔を悲しそうに見つめて、

「遊魔、僕は寂しいにゃん。僕よりその狼がいいのかにゃん？」

すると遊魔はピョコンと顔を出して、

「違います。貴方はリック様ではありません。大蛇さんです」

と言いました。

「何！？」

露津狗と孫左京は仰天しました。

「何言ってるにゃん、遊魔。僕はリックだにゃん」

リックは苦笑いして言いました。遊魔は、

「リック様はそんな不細工ではありません」

露津狗と左京は、

（どこから見てもエロ猫だけど？）

と首を傾げます。

「怒ってるにゃんね。僕が悪かったにゃん。許して欲しいにゃん」

リックは涙を流して言いました。遊魔は更に、

「ならば、私の秘密の場所にある黒子は、身体のどちら側にありますか？」

エロい質問に左京と露津狗はビクッとしました。

（秘密の場所って……）

想像して鼻血を出す左京です。

第七百十二話　遊魔の答え編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは肩を竦めて、

「そんな話、ここでする事じゃないにゃん。それは僕と遊魔の秘密にゃんよ」

と答えました。すると遊魔はキッとしてリックを睨み、

「貴方は偽者です。私の秘密の場所に黒子なんてありません」

あっとなるリックです。どうやら本当に偽者のようです。

「貴様！」

露津狗と孫左京が同時に攻撃します。

「は！」

リックは素早く飛び退き二人の攻撃をかわしました。

「やるねえ、子猫ちゃん。引っかかったよ」

リックは不敵な笑みを浮かべています。

「てめえ、やっぱりさっきの蛇か！？」

左京が怒鳴りました。偽リックはフッと笑い、

「そうさ。でもあれも俺じゃない。いただいた力で作り出した幻影さ」

偽リックはそう言うと更に後ろに下がります。

「そして俺がいただいた力は第六天魔王様に送られる」

「おらあっ！」

露津狗が巨大化し、偽リックを踏みつけました。

第七百十三話　偽リックの正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

露津狗に踏みつけられた偽リックは潰されたかと思われましたが、

「この程度でやられる蛭子様じゃないぜ」

偽リックはヌルッと露津狗の足の下から抜け出しました。

それはプヨプヨした不定形生物でした。

目も鼻も口もありません。

「何だ、てめえは？」

孫左京が大声で尋ねました。

「我が名は蛭子。あらゆるものの力を自分のものにできるのだ」

「麻雀賭博で逮捕された人ですか？」

樹里が上空から尋ねました。

「誰がヘタウマ漫画家だ！」

蛭子は切れました。

「じゃあ、エロ猫の力も手に入れたのか？」

露津狗が尋ねます。

「その通り。だからこんな事もできるぞ」

蛭子の身体から無数の子猫が飛び出て来ます。

「おねいさーん！」

何とその偽子猫は遊魔に飛びかかります。

「きゃあ！」

遊魔は身ぐるみを剥がされそうになりました。

「僕の奥さんに何するにゃん！」

そこに本物登場です。

第七百十四話　蛭子の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

蛭子は「えびす」ではなく、「ひるこ」と読むようです。

「かつてこの国を創った神が最初に産んだのが蛭子と聞いた事があるわ」

元天界人の蘭が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「それなら私も聞いた事がある」

脱獄囚が言いました。

「だから脱獄囚じゃねえよ！」

河東真君は涙目で切れました。

「女神から声をかけて産まれた子だったので、習わしにより海に流されたと聞いた」

しかし河東真君の話を誰も聞いていませんでした。河東真君は項垂れました。

「聞いた通りさ。俺は紛れもなく神なんだよ」

蛭子はブニュブニュしながら言いました。

「でも遊魔に悪戯するのは許さないにゃん！」

リックが真面目バージョン起動です。

「おねいさーん！」

本家の子猫が遊魔の胸当てから飛び出し、偽者と戦い始めました。

「何だ、あれ？」

孫左京は唖然としました。

第七百十五話　リック対蛭子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

遊魔の胸当てから飛び出した子猫は、偽者を圧倒します。

「ぐへへ、変態なら僕の方が上にゃん」

リックが嬉しそうに言います。

「どういう事だ？　盗んだ力は、本物を上回るはずだ！」

蛭子が叫びました。

「変態でリックを上回るなんて不可能なんだよ」

孫左京が言いました。

「そうなんですか」

樹里が笑顔全開で言いました。

「何だか誉められてる気がしないにゃん」

リックは項垂れました。

「ならばこれならどうだ！」

蛭子が左京に化けました。

「左京さんなら、これでどうですかあ?」

遊魔は笑顔全開で蛭子を見ました。

「ぎえ!」

蛭子は鼻血を噴き出して倒れました。

「何だか悔しい感じがする」

左京は落ち込みました。

「良かったにゃん、無事で!」

リックは遊魔を抱きしめますが、

「お前様、どこにいたのですか? ほっぺの紅の痕は何です?」

遊魔の鋭い追及に蒼ざめるリックです。

第七百十六話　謎の美女編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは遊魔の鬼のような追及に焦ります。

「許して欲しいにゃん、遊魔。そいつに食われそうになっている子を助けただけで何もしていないにゃん」

リックは遊魔の耳元で囁きます。

「ああん」

関係ない亜梨沙が悶絶しています。

白い目で見る蘭です。

「その紅の痕、妖気が感じられるぞ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が大型きんと雲を着陸させて言います。

「え？」

蒼ざめるリックです。

「この紅はいつ着けられたか知らないにゃん。気絶している間にその子もどこかに行ってしまったにゃん」

「鈴木さんはどこへ行ったのでしょう？」

樹里が尋ねました。

「そのその子じゃないにゃん！」

リックは樹里のわかりにくいボケに切れました。美白の女王の事です。

「蘭さんの親友ですよね？」

樹里がさらにボケます。

「その蘭じゃないですし、その鈴木園子でもないです」

蘭は項垂れました。

第七百十七話　蛭子の証言編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

謎の美女の正体を探るために、孫左京は気絶した蛭子を樹里の書いたお経の札で縛りました。

「お前が食おうとしていた女はどこの女だ？」

脱獄囚が凄みを利かせて尋ねます。

「だから脱獄囚じゃねえよ！」

河東真君が泣きながら言いました。出番終了です。

「知らん。生け贄は村の人間が決める。俺は関知していない」

蛭子はウネウネしながら言いました。

「キモ」

亜梨沙が呟きます。

「知らないだと？　隠すとためにならんぞ」

今度は牛魔王が凄みます。出番終了です。

牛魔王はロケ弁を受け取って帰りました。

「嘘吐くな！」

地の文に切れる鉄扇公主です。

「隠すも何もない。生け贄を差し出す村には妖怪がたくさん出るのだ。俺はそれを食らっていただけ。むしろ感謝してもらいたいくらいだ」

俄かに信じがたい話ですが、本当だと悪いのはリックです。

「え？」

ギクッとするリックです。

第七百十八話　妖怪のいる村があるらしい編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

自分の立場がやばくなって来たリックは、

「妖怪がいる村ってどこにあるにゃん？」

話をそらそうとします。

「ここから五里ほど行った先にある漁村だ」

蛭子はウネウネしながら言いました。

「そうなんですか」

樹里は習わしに則り(のっと)蛭子を葦の舟に乗せて海に流しました。

「おーい！」

全力で焦る蛭子ですが、誰も助けません。

蛭子はやがて大陸に流れ着き、ジンギスカンになりました。

「嘘吐くな！」

蘭が地の文に切れます。

「どうしますか、お師匠様？」

行く気満々の孫左京が尋ねます。

「行ってみましょう。妖怪がたくさんいるとは聞き捨てなりません」

樹里は何故か笑顔全開で言いました。

「そうなんですか」

左京達は顔を引きつらせて言いました。

（もしかするとあの子にまた会えるにゃん）

リックはグフッと笑います。

「お前様！」

遊魔がその妄想に気づき、殴りました。

第七百十九話　妖怪の村編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは昔懐かしい如意棒の刑に処せられています。

「許して欲しいにゃん」

リックの願いは却下されました。

やがて樹里達は蛭子が言った漁村上空に到着しました。

「ここじゃな」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里に触ろうとしたので孫左京が殴りました。

「そのようだな」

すると美子（めいず）が、

「行きましょう、左京さん」

と左京を引き摺って大型きんと雲から飛び降りてしまいます。

「わわ！」

左京はきんと雲を呼び、飛び乗りました。

「不便ねえ」

自在に飛べる美子は笑って言います。

左京はムッとして地上に向かいました。

「怒らないでよ、左京さーん」

美子は慌てて左京を追いかけました。

「何だか最近あの二人急接近だな」

露津狗が言いました。

「私達もね」

亜梨沙が露津狗に寄り添おうとすると、

「露津狗様」

間に遊魔が割り込みリックと亜梨沙が同時にムッとします。

第七百二十話　美女ばかりの村編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックと亜梨沙は嫉妬剥き出しでそれぞれのライバルを睨みます。

「あら、二人、お似合いね」

蘭がすかさず恐ろしい事を言います。

「冗談じゃないわ！」

亜梨沙が切れました。

「僕だって豚は嫌だにゃん」

そう言いながらしっかり亜梨沙のお尻を触るリックです。

「言う事とやる事が一致してねえよ！」

亜梨沙がリックを蹴飛ばします。

「にゃん！」

リックは大型きんと雲から地上に落下しました。

「お達者で！」

嬉しそうに手を振る遊魔です。

「遊魔あ！」

泣きながら落ちるリックですが、

「これは女の子の匂いにゃん！」

と復活し、クルリンパと着地を決めます。

「おお！」

そこには桃源郷がありました（リック視点）。

「奇麗な女の子ばかりにゃん！」

リックは狂喜乱舞しました。

「何喜んでるんだ、あいつ？」

上空から孫左京が見ています。

「さあ」

美子（めいず）は首を傾げました。

第七百二十一話　美女達の罠編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは大喜びで女性達のところに走ります。

「あら、可愛い事」

女性達は微笑んでリックを見ています。

「おねいさーん！」

リックが女性達に飛びかかろうとした時です。

「食べちゃいたいくらい可愛いわね」

女性達は皆、妖怪です。鋭い牙を剥き出しにし、リックを待ち受けます。

「おねいさーん！」

しかしリックにはそれがわかっていません。

「猫、食われちまうぞ！」

孫左京が慌ててきんと雲で接近します。

「待って、左京さん！」

それを美子（めいず）が追いかけます。

「おねいさーん」

リックはイケメン力をフルパワーにして妖怪達に流し目です。

「きゃん！」

リックの魔力にやられた妖怪達は、

「好きにして」

とリックの虜です。

リックを誑（たぶら）かすつもりが逆になってしまいます。

「桃源郷にゃん！」

リックが喜んでいると、

「お前様！」

遊魔の踵落としが炸裂しました。

第七百二十二話　妖怪達の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックにメロメロにされた妖怪達は付近の漁村の男達をからかっている程度で生け贄に捧げられるほどの悪い妖怪ではありませんでした。

「リック様、どうかここで暮らしてくださいまし」

泣きながら懇願する妖怪美女達ですが、

「悪いけど、僕には使命があるにゃん。また後でね」

カッコ良く決めようとしたリックですが、最後にアホ発言をして、

「お前様！」

と遊魔の飛び膝蹴りを食らいました。

「遊魔ちゃんに振られちゃったわね、露津狗」

亜梨沙が嫌みを言いました。

「すまぬ、亜梨沙殿。これからは亜梨沙殿のみを見よう」

露津狗は恥ずかしそうに言いました。

「聞いた？」

嬉しそうに蘭に言う亜梨沙ですが、

「美味しそうだからじゃないの？」

と返され、

「ブヒ！」

と固まる亜梨沙です。

妖怪達の話で更に東に強い妖怪がいると聞いた孫左京は、

「燃えて来た！」

と張り切りました。

第七百二十三話　都へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は大型きんと雲で更に東へと向かいます。

「もう少し行くと倭の国の都に入るぞ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里のお尻を触ろうとして孫左京に殴られます。

「何と奇麗な平城京ですか？」

樹里が尋ねます。

「それはもう少し先の時代です、お師匠様」

蘭が項垂れて言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「泣くよ坊さん平安京ですか？」

今度は悲しそうに訊く樹里です。

「それはもっと先です、お師匠様」

蘭は項垂れ疲れました。

「そうなんですか」

樹里はまた笑顔全開です。

「都は飛鳥と言う所にあるぞ」

脱獄囚が豆知識を披露しました。

「脱獄囚じゃねえよ！」

河東真君は切れました。

「今は中大兄皇子（なのおおえのおうじ）がいる頃ね」

ネタバレ注意な亜梨沙です。

「取り入ってお妃にしてもらおうかしら？」

亜梨沙は悪い魔女のような顔になりました。

第七百二十四話　都の権力者編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は倭の国の都の飛鳥に着きました。

「チャゲさんも元気ですかね？」

樹里が尋ねます。

「その飛鳥じゃないです」

蘭は項垂れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

大型きんと雲が地上に降りると兵達が押し寄せて来ました。

「敵だと思われたのか？」

河東真君が呟きます。

「お前のせいだろう？」

孫左京が言います。

「何だと！」

河東真君は切れました。

「ワレワレハウチュウジンダ」

亜梨沙が下らないボケをかまします。

白い目で見る蘭と美子（めいず）です。

兵達は亜梨沙の一言でいきり立ち弓を引きます。

「てめえら！」

左京が樹里を庇います。

「待て」

そこへ髭男爵が現れました。

「違う！」

髭男爵は切れました。

「だから違うよ！　私は蘇我入鹿。この国で一番偉いのだ」

「バドは元気ですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がわんぱくフリッパーだ！」

入鹿は切れました。

第七百二十五話　権力者の願い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

蘇我入鹿は樹里達を自分の館に招待しました。

「遠く唐の国からいらしたとは、驚きました」

入鹿はこれ見よがしにきらびやかな宝を並べた部屋に樹里達を通しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「兵共の無礼のお詫びです。召し上がってください」

入鹿はたくさんのご馳走を用意していました。

「あのヒゲヤロウ、胡散臭いな」

孫左京が呟きます。

「心配しなくてもそのうち殺されるわよ」

また亜梨沙がネタバレです。

「お坊様にお願いがあるのです」

入鹿は言いました。

「膝枕ならさせないぞ」

左京が意味不明の事を言います。

樹里以外の全員が白い目で左京を見ました。

項垂れる左京です。

「膝枕ならいいですよ」

樹里が元も子もない事を言います。

「膝枕なんか頼まん！」

入鹿は切れました。更に項垂れている左京です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第七百二十六話　飛騨の怪物編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

飛鳥の都の権力者である蘇我入鹿の邸に招かれた樹里一行です。

「実はここから東に行ったところにある飛騨の国に怪物がおるのです」

入鹿は言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「おお！」

孫左京は興味津々です。

「そいつを退治して欲しいのです」

入鹿は樹里の手を取って言います。

「お師匠様に触るな！」

左京が入鹿の手をはねつけると兵達がなだれ込んで来て一斉に左京に弓を向けます。

「下がれ」

入鹿はニヤリとして命じました。兵達はサッといなくなりました。

「如何でしょうか、お坊様」

入鹿は樹里を見ます。

「お師匠様、危険です。やめた方が……」

蘭が囁くと樹里は熟睡していました。

唖然とする蘭と美子（めいず）です。

「すみません、寝てました」

樹里は言いました。

「お聞き届けいただけない場合は」

入鹿の指示で兵達が亜梨沙と遊魔を取り囲みます。

第七百二十七話　両面宿儺という怪物編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

蘇我入鹿は亜梨沙と遊魔を人質にしました。

「この可愛いお嬢さん方を助けたければ、飛騨の怪物を退治する事です」

亜梨沙は「可愛いお嬢さん」と言われてにやけています。

「お前より悪人面だな」

孫左京が河東真君に言いました。

「うるせえ！」

ムッとする河東真君です。

「お前様」

遊魔がリックに助けを求めます。

「何だにゃん？」

リックは入鹿に寝返っていました。

「遊魔を人質に取るなんて卑怯だぞ」

左京が言いました。

「私もいるわよ」

亜梨沙が泣きながら主張しますが、左京は聞か猿になっています。

亜梨沙は項垂れました。

「怪物の事を聞かせてください」

樹里が尋ねました。入鹿はフッと笑い、

「さすがお坊様、話が早い。怪物は両面宿儺と言います」

「ラーメン少ないですか？」

樹里が尋ねます。

「そんな事言ってねえ！」

入鹿は切れました。

第七百二十八話　飛騨の国へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は蘇我入鹿の半強制的な願いを聞き、飛騨の国へ行く事になりました。

「お師匠様、気をつけてください。あの入鹿という男、何やら面妖な気を発しています」

蘭が言いました。また樹里は寝ています。蘭は膝をついて項垂れました。

「何はともあれ、飛騨の国とやらに行くしかあるまい」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里のお尻を触りながら言います。

「そうだな」

孫左京が道人を殴りました。

こうして樹里達は大型きんと雲で飛騨の国に向かいました。

「これで奴らはおしまいですにゃん」

揉み手をしながら言うリックですが、

「この猫を捕らえよ」

入鹿はリックを取り押さえました。

「何するにゃん、僕は貴方の味方だにゃん」

リックは泣きながら言いました。

「仲間を裏切る奴は信用しない」

入鹿は正論を言いました。

（もうすぐ死んじゃうのに）

またネタバレな亜梨沙です。

第七百二十九話　飛騨の国を偵察編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里一行は飛鳥の都を発ち、飛騨の国に来ました。

「竜鉄也さんはいますか？」

樹里が尋ねます。

「竜さんは去年お亡くなりです」

蘭が項垂れて言いました。

「そうなんですか」

さすがの樹里も悲しそうに応じます。

「安らかにお眠りください、ゴリさん」

樹里は手を合わせて言いました。

「その竜さんはまだ生きてます！」

蘭が慌てて言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開になりました。

樹里達の乗る大型きんと雲は地上に降りました。

「偵察に行って来ます」

孫左京と美子（めいず）と牛魔王は上空から露津狗と馨と河東真君は地上から偵察です。

「待って、私も行く」

亜梨沙が露津狗に乗りました。

馨は蘭が乗ってくれないかと思いましたが、

「早く行きなさいよ！」

と言われ、悲しそうに駆け去ります。

「楽園じゃな、ここは」

鴻均道人（こうきんどうじん）は嬉しそうです。

第七百三十話　地元民との遭遇編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達を待っている樹里達のところに地元の民が近づきます。

「あんた達は都の人間か？」

その地元民は尋ねました。

「いえ、私達はチャゲさんのファンクラブの者です」

樹里が笑顔全開で答えました。

蘭達が一斉に項垂れます。

「何だそれ？」

地元民は眉をひそめました。

「この国には、両面宿儺（りょうめんすくな）という怪物がいると聞いた。どこにいる？」

鉄扇公主が尋ねます。

「何言ってる？　両面宿儺様は我らの守り神だ。お前らやっぱり都の回し者だな？」

地元民の目つきが鋭くなります。

ふと見渡すと周りには鍬や鋤を構えた人達が集まっていました。

「私達は都はるみさんのファンクラブではありません」

樹里が言いました。

「お師匠様、話がややこしくなります。お喋りにならないでください」

蘭が泣きながら懇願します。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

第七百三十一話　魔物の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は、何とか怪しい者ではない事をわかってもらい、飛騨の国の支配者である宿儺(すくな)家の邸に連れて行ってもらいました。

「私が飛騨の国の国主の宿儺太郎である」

邸の広間に現れたのは河東真君といい勝負の悪人面です。

「今誰か悪口言わなかったか？」

太郎が言いました。

樹里が話すとややこしくなるので蘭が代わりに事情を説明します。

「そういう事か。相変わらず汚い事をする男だ、蘇我入鹿は」

太郎は言いました。

そこへ孫左京達が駆けつけ、蘭に事情を聞きました。

「お前の生き別れの兄貴じゃないのか？」

左京は太郎を見て河東真君に言いました。

「私はあんなに不細工ではない」

河東真君は目が悪いようです。

「うるさい！」

地の文に切れる河東真君です。

「入鹿が魔物と言ったのは我らが守り神にして正統な倭の後継者である大海人皇子様だ」

太郎が言いました。

第七百三十二話　皇子登場編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は遂に宿儺（すくな）太郎のとりなしで倭の国の正統後継者である大海人皇子に会う事になりました。

「皇子様に無礼のないようにな」

太郎が言うと、

「お前の顔が無礼だろ？」

孫左京が小声で言いました。受ける亜梨沙です。

「皇子様のおなり」

その声と共に皇子が部屋に入って来ました。

「おお！」

亜梨沙が雄叫びを上げます。皇子はまだ子供でした。

しかも飛び切りの美少年です。

亜梨沙のショタの虫が蠢きます。

（お持ち帰りしたい）

「皆の者、よう参った。私が大海人皇子である」

そのミルキーボイスに蘭と鉄扇公主までメロメロです。

「可愛い」

それを白い目で見る牛魔王と馨です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

何故か皇子は樹里を見て赤面します。

「……」

皇子の異変に太郎が気づきます。

「皇子様、如何なさいましたか？」

「何でもない」

皇子は言いました。

第七百三十三話　皇子の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

皇子は言いました。

「其方達が都の使いではない事はわかった。ならば私に力を貸して欲しい」

そのミルキーボイスで、

「はいはい、いくらでも貸しちゃいますぜ」

揉み手で答える亜梨沙です。

「私達も！」

蘭と鉄扇公主もウットリとした目で言います。

「どうにも胡散臭い。あの悪人面、都の悪人面と同じ臭いがする」

孫左京が言いました。

「悪人面に悪い奴はいない」

河東真君が言いました。

「嘘吐くな」

左京が言いました。

「お坊様」

皇子が樹里に話しかけます。

「何でしょう、天皇陛下？」

樹里がネタバレをかましました。

「お師匠様、それはまだ今はわからない事です」

蘭が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「貴女と二人きりでお話をしたい」

皇子が言いました。

「何だと？」

途端に動揺する左京です。

「そうなんですか」

樹里は皇子と共に奥の間に行きました。

第七百三十四話　樹里と皇子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里は皇子の部屋に通されました。

「下がれ」

留まろうとする宿儺（すくな）太郎を退室させます。

「お坊様、貴女は女子（おなご）ですね？」

皇子は顔を赤くして尋ねます。

「はい」

樹里は笑顔全開で答えます。

「帽子を取ってくださいませぬか？」

皇子は恥ずかしそうに言いました。

「はい」

樹里は帽子を取りました。女の子パワーが全開になります。

「やはり貴女は私の愛しい方に瓜二つだ」

さすが皇子です。直撃を受けても鼻血を出しませんでした。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

孫左京はもう気が気ではありません。

（お師匠様に何かあったら只じゃ置かねえ！）

醜い男の醜い嫉妬です。

「うるせえ！」

地の文に切れる左京です。

すると樹里と皇子が戻って来ました。

「お師匠様！」

左京は涙ぐんで叫びます。

「これからある女の方を探します」

樹里は言いました。

第七百三十五話　額田王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里は皇子から頼まれた事を孫左京達に話しました。

「額田王は大海人皇子の思い人です」

「お師匠様にそっくりなんですか」

蘭は左京が失血死するさまを妄想しました。

「はい。でも私より年下ですよ」

「おお！」

それに反応する鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「ロリコン！」

美子（めいず）が殴ります。

「そのお姫様が捕まっているのですね？」

左京は妄想で鼻血が出そうなのを何とか堪えて言いました。

「フリッパーさんに監禁されているのです」

樹里は笑顔全開で言います。

「蘇我入鹿ですよ、お師匠様」

蘭が項垂れて言いました。

「ここからは内緒の話です」

樹里は一同を集めてヒソヒソと話します。

「何ですって!?」

大きな声で叫ぶ悪人二人です。

「誰が凶悪犯だ!」

牛魔王と河東真君が切れました。

「頼みます、お猿さん」

樹里に名指しで頼まれて、左京は得意そうです。

第七百三十六話　額田王救出作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達はこっそり宿儺（すくな）太郎の邸を出ます。

宿儺太郎が入鹿と共謀しているのを皇子に聞かされたからです。

加わるのは美子（めいず）、牛魔王、河東真君、露津狗です。

鴻均道人（こうきんどうじん）も行きたがりましたが、額田王が危ないので残らせました。

「お師匠様達、大丈夫かな？」

左京は不安そうです。

「大丈夫よ。あの邸には妖怪はいないわ。蘭さん達がいるから心配ないでしょ」

美子が言いました。

「我が妻もおるから心配いるまい」

牛魔王が言いました。

「むしろ心配なのはあのスケベ道人だ」

露津狗が言います。

一同は頷きました。

左京はきんと雲、美子と露津狗はそれぞれ飛翔、牛魔王と河東真君は自分の雲に乗って飛びます。

「お師匠様にそっくりなのかあ。楽しみだなあ」

つい口走って、美子に睨まれてしまいます。

「左京さんのスケベ」

美子の嫉妬です。

第七百三十七話　蘇我入鹿、焦る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里の命を受けた孫左京達は飛鳥の都に戻りました。

左京達が戻って来たのを察知した蘇我入鹿は兵を集め、迎え討つ準備を進めていました。

「おのれ、人質がいるのに我らに弓引くつもりか！？」

入鹿は鬼の形相で怒ります。

「亜梨沙、困っちゃう」

亜梨沙が怖いフリをしました。

亜梨沙は左京達と一緒にいたような気がしますが気のせいでしょう。

亜梨沙は人質になっていたのですから。（気のせいではなく作者が間違えました　作者）

「連中は山に向かったようです」

伝令兵が言いました。

「何！？」

入鹿は更に凄まじい形相になります。

（大海人皇子め、奴らに話したのか？）

入鹿は左京達を早馬で追わせました。

早馬が追って来るのに気づき、

「左京さん、何か来るよ」

美子（めいず）が言います。

「悪人面の手下だろう。捕まえて姫の居場所を吐かせてやる！」

左京は急降下しました。

第七百三十八話　入鹿討たれる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京は追って来た入鹿の兵を捕まえました。

「お前達、人質がどうなっても良いのか？」

その兵は脅かして来ました。すると左京は、

「別に構わないよ。殺せば？」

「え？」

焦る兵です。

「ええ？　遊魔ちゃんが可哀想よ、左京さん。スケベ猫はどうなってもいいけど」

美子（めいず）が言います。

「そうだな」

露津狗が同意します。

亜梨沙は思い出してももらえません。

その頃、浮き足立つ入鹿の兵達の様子を知ったある人達が動きました。

中臣鎌足と中大兄皇子です。

「皇子、今こそ逆賊入鹿を討つ時です」

鎌足が言いました。

「そだね」

中大兄皇子は言いました。

「出撃だ！」

中大兄皇子軍は一気に入鹿の邸を取り囲み、入鹿を討ち取ってしまいました。

「無念……」

悪人面はたちまち殺されてしまいました。

捕らえられていた亜梨沙と遊魔とリックは中臣鎌足の陣に連れて行かれました。

第七百三十九話　中臣鎌足の吟味編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

亜梨沙と遊魔とリックは鎌足の前に引き出されました。

三人は後ろ手に縛られています。

「その方達は何者か？」

鎌足が尋ねました。

「怪しい者ではないにゃん」

リックが答えますが、顔が怪し過ぎです。

「うるさいにゃん！」

リックは地の文に切れました。

「よし、其方は許す」

遊魔だけ縄を解かれます。

「何で！？」

亜梨沙とリックがハモります。

「決まってるだろう、可愛いからだ」

鎌足は嫌らしい笑みを浮かべて言いました。

「じゃあ、亜梨沙も許して」

亜梨沙は身をくねらせて言います。

「ダメだ」

鎌足の即答に固まる亜梨沙です。

「私はオバさんは嫌いなのだ」

「何だと！」

復活して切れる亜梨沙です。

亜梨沙とリックはそのまま牢に入れられました。

「変な事しないでよね」

亜梨沙が言いました。

「頼まれてもしないにゃん」

リックが言ったので、亜梨沙は踵落としを決めました。

第七百四十話　鎌足の野望編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

宿儺（すくな）太郎は孫左京達がいない事に気づきました。

「猿達はどこに行った、坊主！？」

と凄みました。

「山へ柴刈りに」

樹里が笑顔全開で答えます。

「嘘を吐くな！　入鹿の所に行ったな？」

太郎は鬼の形相です。するとそこへ兵が来て、

「蘇我入鹿様、討たれましてございます」

「何！？」

仰天する太郎です。

「大変ですね、山本さん」

樹里が労います。

「その太郎じゃねえよ！」

太郎は切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

その頃、鎌足は遊魔にお酌をさせています。

（あのボンクラ皇子をうまく抱き込めば倭の国は我がものよ）

鎌足は野望を抱いていました。

「異国の者達が額田の姫の所に向かいました」

兵が告げました。

「姫を飛騨に連れて行かれるのはまずい。始末しろ」

と鎌足は命じました。

（お師匠様達が危ないのかなあ）

遊魔はそれを聞いて思いました。

第七百四十一話　中大兄皇子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達は入鹿が討たれて慌てている兵達をたちまち打ち倒しました。

「姫様を助けに行くぞ」

左京達は額田王がいる山へと向かいました。

中臣鎌足は左京達を殺すために兵を送りました。

遊魔はそれを聞いていてどうすればいいか悩んでいます。

「どうすればいいのかなあ」

遊魔はリックに訊こうと思いましたがリックは牢の中です。

「いかがした、異国の方？」

そこへ中大兄皇子が現れました。

「私の仲間が殺されそうなんですう」

遊魔が言いました。皇子は遊魔に一目惚れです。

決して米ではありません。

「誰がそんな事を言ったのだ？　私が懲らしめてやる！」

急に怒り出す皇子です。

「鎌足さんですう」

遊魔が言いました。

「そか」

急に鎮まる皇子です。

「鎌足は怖いんだ。助けて欲しい」

皇子は遊魔にすがりつきます。

「旦那様を助けてくれたら助けてあげますう」

遊魔は言いました。

第七百四十二話　遊魔活躍編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

遊魔は中大兄皇子と取引して、リックと亜梨沙を助けてもらう事にしました。

「私だ。通せ」

皇子は遊魔を伴い、リック達が入れられている牢に行きました。

「ああ、遊魔、助けて欲しいにゃん、豚女に襲われそうにゃん」

リックが涙ぐんで言いました。

「嘘吐け！」

亜梨沙が切れました。

「私の名において命ずる。二人を牢から出せ」

皇子が言うと、兵達はすぐにリックと亜梨沙を牢から出しました。

「お前達が入ってるにゃん」

リックは兵達を牢に押し込めました。

「皇子様、私をお妃にして欲しいの」

亜梨沙が胸の谷間を強調して言いました。

「私の妃はこの方にする」

皇子は遊魔を見て言いました。

愕然とする亜梨沙とリックです。

孫左京達は遂に額田王が監禁されている山の頂上に着きました。

「姫様、どこにいるんだ?」

左京達が探し回っていると、

「こちらです」

と声がしました。

第七百四十三話　額田王の話編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達は額田王がいる所まで辿り着きました。

「私が姫です」

声がしたのは洞窟に鉄格子を取り付けた監禁室でした。

「おお！」

左京は驚きました。

確かに額田王は樹里にそっくりです。

但し、左京の守備範囲からは外れています。

「まだ子供か」

姫はどう見ても十歳くらいです。

「リックが喜びそうね」

美子（めいず）が言いました。

「養女にしたい」

河東真君が言います。

白い目で見る左京達です。

「あなた方は私を助けに来てくださったのですか？」

額田王が言いました。

「そうです。蘇我入鹿は討たれました。もう大丈夫です」

美子が言うと、額田王は、

「違います。黒幕は中臣鎌足と飛騨の宿儺（すくな）太郎です」

「何ですって？」

左京達は驚愕しました。

「鎌足は宿儺太郎と共謀して入鹿を討ち、私の愛しい人の大海人皇子様を討つつもりです」

額田王は悲しそうに言いました。

第七百四十四話　真の両面宿儺編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達は監禁されていた額田王を助け出しました。

「ありがとうございます」

ウルッとして礼を言う姫に孫左京は鼻血を垂らします。

（お師匠様のご幼少の頃を想像してしまった）

止め処ないスケベ猿です。

「うるせえ！」

左京は地の文に切れました。

「姫様に何かしたら殺すわよ」

美子（めいず）が嫉妬剥き出しで言います。

「まさか」

そう言いながらも自信がない左京です。

樹里達は、宿儺太郎の兵に取り囲まれました。

「どういうつもり？」

蘭が太郎を睨みます。太郎は樹里を睨んで、

「我らを騙した礼をさせてもらう」

樹里は笑顔全開で、

「お気持ちだけで結構です」

「何度も同じボケ使うな！」

太郎は切れました。

「そうなんですか」

それでも樹里は笑顔全開です。

「我らが守り神である両面宿儺様の生け贄にしてやるぞ！」

太郎は叫びました。

第七百四十五話　囚われの大海人皇子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

宿儺（すくな）太郎は怒りの形相です。

只でさえ悪い顔がもっと悪くなります。

「こうなったら最後の手段だ。皇子を捕らえ、両面宿儺様を復活させる」

「両面テープ様ですか？」

樹里が尋ねます。

「そんな便利な物まだあるか！」

太郎が時代考証に切れました。

「皇子を引っ捕らえろ」

太郎は言いました。

「麻生さん、皇子様はまだ子供ですよ」

樹里が言いました。

「その太郎じゃねえよ！」

太郎はまた切れました。

部屋にいた大海人皇子はあっさり捕まってしまいました。

「皇子、両面宿儺様を呼び出してください」

太郎が言いました。すると皇子は、

「嫌だ」

と答えました。

「いいのですか？　貴方が逆らうとこの人達が痛い目に遭いますよ」

太郎は樹里を見て言いました。

「わかった、呼び出そう」

皇子はあっさり応じました。

「育ちがいいから素直なのね」

蘭がうっとりして言いました。

第七百四十六話　両面宿儺現る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

宿儺（すくな）太郎は大海人皇子を脅かし、両面宿儺を呼び出す事を約束させました。

「儀式をお始めください、皇子」

太郎は悪い顔で言います。

「出て来い両面宿儺！」

皇子があっさりとした儀式で両面宿儺を呼び出しました。

「パッパラパー」

両面宿儺が煙と共に現れました。

どこかのパクりみたいです。

両面宿儺は顔が表と裏にあり、腕はそれぞれ二本ずつの計四本。

足は爪先が表と裏にあり、踵がありません。

要するに両面宿儺は背中がぴったりくっついた二体の魔神なのです。

「シャザーンではないのですか？」

樹里が尋ねます。

「誰がアラビアンナイトだ！」

太郎が切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「皇子、用はすみました。死んでください」

太郎が言いました。彼は杖のようなものを持っています。

「これは両面宿儺を操る杖だ」

太郎はドヤ顔で言いました。

第七百四十七話　両面宿儺の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

大海人皇子が呼び出した両面宿儺（りょうめんすくな）は強そうです。

「両面宿儺様、こやつらを討ち取ってください」

宿儺太郎は嬉しそうに言い、杖を掲げます。

「ぐおお！」

両面宿儺は樹里達を睨みました。

「お坊様、お逃げください。両面宿儺はあやつの意のままです」

皇子が涙を流して言います。

「可愛い！」

蘭と鉄扇公主までショタの虫が疼いてしまいました。

「お師匠様、逃げましょう」

馨が言いました。

「儂に任せろ」

鴻均道人(こうきんどうじん)が進み出ます。

「儂は強いぞ、両面印刷」

道人はボケをかましました。

全員無視です。

「そうなんですか」

樹里だけ反応しましたが危険球です。

「がああ！」

両面宿儺が道人に迫ります。

「はあ！」

道人は巨大化し、両面宿儺とがっぷり四つです。

「ぎええ！」

その力の大半を美子(めいず)に託した道人はあっさり倒されました。

第七百四十八話　樹里対両面宿儺編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

鴻均道人（こうきんどうじん）を倒した両面宿儺（りょうめんすくな）は樹里を見ます。

「がああ！」

両面宿儺は雄叫びをあげますが、

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開なので、落ち込みます。

「両面宿儺様、負けないでください！」

宿儺太郎が杖を掲げて叫びます。

立ち直る両面宿儺です。

「お師匠様、危ないです！」

蘭が言いました。そして、

「龍、お師匠様を助けなさいよ！」

と馨をけしかけます。

「蘭さんが私を好きになってくれるのなら、頑張ります」

馨が言いました。

「断わる」

あっさり却下され、落ち込む馨です。

その間にも、両面宿儺は樹里に迫ります。

「樹里様！」

鉄扇公主が芭蕉扇を取り出しますが、

「えい！」

久しぶりに飛竜状を掲げる樹里です。

「うへえっ！」

両面宿儺以下、宿儺太郎達も吹き飛んでしまいました。

「凄い……」

その威力に唖然とする鉄扇公主です。

第七百四十九話　第六天魔王の影編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里の禁じ手の飛竜杖であっさり決着がついてしまいました。

孫左京が知ったら号泣しそうです。

「都に行きましょう。兄上が危ないのです」

大海人皇子が言いました。

「そうなんですか」

樹里達はすぐさま飛鳥の都に向かう準備をしました。

その時でした。

「どの時ですか？」

樹里が地の文に訊きました。

あのですね……。

地の文が困っていると、

「大儀である、御徒町樹里」

どこからか声が聞こえました。

「どちらさまですか？」

樹里が尋ねます。

「我は第六天魔王である」

声が言いました。

「ご出産おめでとうございます」

樹里が言いました。

「その麻央じゃねえよ！」

声は切れました。

「どういう意味だ？」

いつになく真面目な顔の鴻均道人（こうきんどうじん）が言います。

「両面宿儺の力は我がもらったという事だ」

「何ですって！？」

蘭と鉄扇公主が皇子を庇いながら叫びました。

第七百五十話　第六天魔王の企み編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

第六天魔王は両面宿儺（りょうめんすくな）の力を吸収したようです。

「うぬらが闇の者を倒すとそれは全て我の力となる。更に励むがよい」

第六天魔王は言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「少しは慌てろ！」

第六天魔王は切れました。

「ではまた会おう」

第六天魔王は去りました。

「何という事だ。更に強くなろうとしているのか」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱きながら言います。

「左京の代理！」

蘭が道人を殴りました。

「とにかく都に急ぎましょう。左京達に知らせないと」

蘭は樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

道人の大型きんと雲に大海人皇子も乗せ、樹里達は出発しました。

「皇子様は私達が守ります」

蘭と鉄扇公主が跪いて言います。

「ありがとう、おば様方」

皇子にそう言われ、血の涙を流す二人です。

第七百五十一話　鎌足の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

孫左京達は額田王を連れ、都を目指しました。

「第六天魔王が飛騨に現れたらしいぞ」

河東真君がそう言いながら額田王をジッと見ます。

「ロリコンめ」

左京が罵りました。

「宿儺（すくな）太郎と魔物は退治したらしいが、第六天魔王がその力を吸収したようだ」

左京はムッとして、

「まだあのヤロウ、何か企んでいるのか」

「大丈夫よ、左京さん。父と母ももうすぐ合流するわ。そしたら、魔王なんてイチコロよ」

美子（めいず）がまた左京に飛びつきます。

「重いって、美子ちゃん」

「失礼ね！」

美子は怒りました。

「おのれえ、射かけろ！」

そこへ中臣鎌足の兵が現れ、弓を射ました。

「おらあ！」

左京と河東真君と牛魔王が兵達を蹴散らします。

「そこまでだ。こやつらの命がどうなっても良いのか？」

鎌足は亜梨沙とリックを人質にしています。

中大兄皇子と遊魔は逃げたようです。

第七百五十二話　鎌足の呪術編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

中臣鎌足は亜梨沙とリックを人質にしています。

「別に殺せば？」

孫左京が非情な事を言いました。

「猿、化けて出てやるにゃん！」

リックが泣きながら叫びます。

「左京、私を助けないと、お師匠様にいろんな事をばらすわよ」

亜梨沙は脅しで来ました。

「左京さん、作戦があるから、ここは従って」

美子（めいず）が囁きます。

ふと見ると、露津狗がいません。

地中を進んでいるようです。

「我が中臣家に伝わる呪術で貴様らをあの世に送ってやる」

鎌足が悪い顔で言います。死亡確定です。

「何？」

地の文に切れる鎌足です。

「受けてみよ、中臣が呪術を！」

鎌足が何か唱えると黒雲が湧き、雷が起こりました。

「何だ？」

左京達は空を見上げました。

「悪しき者を祓う祝詞だ。消えよ、化け物！」

鎌足が言いました。

「誰が化け物だ！　化け物はこいつだ」

左京は河東真君を指差しました。

第七百五十三話　露津狗奮戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

中臣鎌足の呪術で消されそうな河東真君です。

「私は化け物ではない！　天界人だ」

河東真君は切れました。顔が怖過ぎてやっぱり化け物です。

「がああ！」

その時地面の下から露津狗が飛び出して来ました。

「何！？」

不意を突かれた鎌足は驚いて後退ります。

「亜梨沙殿！」

露津狗は素早く亜梨沙を救い背中に乗せます。

「ああん、カッコいい、露津狗」

亜梨沙が露津狗に巨乳を擦りつけます。

「亜梨沙殿、それは止めてくれ」

真っ赤になる露津狗です。

「僕は？」

リックがなきながら尋ねます。

「あんたは寝返ったんでしょ！」

亜梨沙が言いました。リックは焦ります。

「それは敵を欺くためにゃん」

それを敵陣で言ってはいけないですね。

露津狗はそのまま戻ってしまいました。

「にゃん！」

見捨てられて泣き喚くリックです。

露津狗は亜梨沙を安全な場所に下ろすと鎌足に向かいました。

第七百五十四話　中大兄皇子の決断編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

露津狗は中臣鎌足に突進しました。

「危ない！」

兵達が鎌足を庇い、弓を射ました。

「があ！」

露津狗は業火を吐いて焼き尽くしました。

「ひい！」

兵達は鎌足を連れて逃げ去ります。

「参ったかにゃん」

逃亡する鎌足軍に勝ち誇ったかのように言うリックです。

「あんた、何もしてないでしょ」

亜梨沙が呆れました。

「これも作戦にゃん」

得意そうなリックです。

そこへ遊魔を連れて中大兄皇子が現れました。

「遊魔！」

リックが血の涙を流します。

「この方は我が妃だ」

皇子が言いました。

「何だって？」

孫左京達は仰天します。

「鎌足の事は私に任せてくれ。きっといい国を作る」

皇子が言いました。

「いい国作ろう鎌倉幕府ですか？」

そこへ大型きんと雲で樹里達がやって来ました。

「それはもっと後の時代です、お師匠様」

蘭は項垂れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

第七百五十五話　リックの改心？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックは遊魔が中大兄皇子に寄り添っているので泣きました。

「遊魔は僕の妻にゃん。人の奥さんを盗るのはいけない事にゃん」

リックは皇子に食ってかかります。

「貴方は人ではなく猫でしょう？」

皇子がドヤ顔で言います。リックは固まりました。

「お前様、お許しください」

遊魔が追い討ちをかけます。

「遊魔……」

リックは項垂れます。

「今まで逆の事をして来た報いだ」

孫左京が言います。

「お猿さん、そんな事を言ってはいけません」

樹里が言いました。

「はい」

左京はしょんぼりしました。

「もう僕は浮気したり奇麗な女の子に目を奪われたりしないにゃん」

リックは涙を流して懇願しました。

「今の言葉に二言はないはないな、猫？」

露津狗がリックに迫ります。

「ないにゃん」

そう言いながら額田王をジッと見るリックです。

「言ってるそばから！」

蘭がリックを殴りました。

第七百五十六話　鎌足の正体編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

リックはとても改心しているとは思えなかったので、またしても如意棒の刑です。

「もう嫌だにゃん」

リックは泣いて嫌がりましたが、誰も聞いてくれません。

「猫さん、貴方は嘘を吐いてばかりいます。そんな事を続けていてはいつか酷い目に遭いますよ」

樹里が言いました。すでに酷い目に遭い続けていると思うリックです。

「其方は」

中大兄皇子は額田王に気づきました。

「兄上様」

額田王は言いました。

「兄上？」

河東真君が素早く反応します。

「違う！」

地の文に焦る河東真君です。まだ何も言っていませんが。

「うるさい！」

切れる河東真君です。

「大海人皇子様は中大兄皇子様とご兄弟なのです」

額田王が言いました。

「鎌足はいずこに？」

皇子が尋ねます。

「逃げました」

亜梨沙が寄り添って答えます。呆れる露津狗です。

「奴は鎌足ではありません」

中大兄皇子が言いました。

第七百五十七話　鎌足狂乱編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

中大兄皇子の発言は衝撃的でした。

「鎌足はある日を境に様子が変わりました」

すると、

「それこそまさに第六天魔王です」

樹里達と来た大海人皇子が言いました。

「大海人皇子」

中大兄皇子が大海人皇子を見ました。

「大海人皇子様」

額田王が抱きついたので河東真君とリックが血の涙を流しました。

蘭と鉄扇公主も泣いています。

それを白い目で見る牛魔王と馨です。

「鎌足はいずこかに閉じ込められているはずです」

大海人皇子が中大兄皇子に言いました。

「揃ったな、愚か者共が」

そこへ鎌足が現れました。

「てめえ！」

孫左京がリックを吊り下げたままの如意棒を振るいます。

「にゃあん！」

リックは目を回しました。

「まとめて我の糧としてくれるわ！」

鎌足は大声で笑います。

「ところでかまきりさん」

樹里が言いました。

「誰が五月みどりだ！」

鎌足はマニアックに切れました。

第七百五十八話　第六天魔王現る？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

中臣鎌足の姿を真似た第六天魔王はニヤリとします。

「御徒町樹里、お前達の旅もここで終わりだ。念仏でも唱えよ」

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で言いました。

「少しは慌てろ！」

第六天魔王は陽気な樹里に切れました。

「インダラヤソワカ」

樹里は帝釈天の真言を唱えました。

「その程度の真言が効くものか！」

第六天魔王は余裕です。

「隙あり！」

孫左京と露津狗と美子（めいず）が攻撃を仕掛けました。

「皆見えておる」

第六天魔王は動きませんでしたが、三人は跳ね飛ばされました。

「ぐ！」

「く！」

「きゃ！」

左京の上に露津狗が落ち更にその上に美子が落ちました。

「ぐえ！」

左京は押し潰されそうです。

「うぬらの浅知恵は飽きた」

第六天魔王は言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「とう！」

遊魔の踵落としが第六天魔王の頭に炸裂しました。

第七百五十九話　第六天魔王逃亡編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

遊魔の不意打ちまでは予測していなかった第六天魔王は前のめりに倒れます。

「さすが僕の奥さんにゃん！」

リックが懸命に遊魔のご機嫌をとります。

「余計な事を言わないで欲しいにゃん」

リックは地の文にクレームをつけました。

「くくく、まあ良い。良い余興だ。八岐大蛇（やまたのおろち）と両面宿儺（りょうめんすくな）の力は手に入った。もうこの国に用はない」

第六天魔王は起き上がってそう言うと、

「さらばだ！」

と叫び消えてしまいます。

「奴の狙いは魔物の妖気と力か」

鴻均道人（こうきんどうじん）が璃里の肩を抱きながら言いました。

「そういう事か」

孫左京が道人を殴ります。

「お坊様、第六天魔王はこの世の全ての民の敵。全ての災いの元です。どうか倒してください」

大海人皇子と額田王が頭を下げました。

「私からもお頼み申す」

中大兄皇子も頭を下げました。

第七百六十話　再び西へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は倭の国を去る事になりました。

本物の中臣鎌足は藤で作られた藁の中に埋もれていました。

「お前は今日から藤原鎌足（ふじわらのかまたり）と名乗れ」

中大兄皇子が言いました。

「ありがたき幸せにございます」

鎌足は跪きました。

世に言う藤原氏の始まりです（これは嘘です　作者）。

「そうなんですか」

紙に書いている樹里です。

「これは嘘です、お師匠様」

蘭が項垂れて言いました。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

いよいよ出発です。

亜梨沙と蘭と鉄扇公主は名残惜しそうです。

河東真君とリックも涙ぐんでいます。

「皆さん、お元気で」

樹里が言うと大型きんと雲は飛び立ちました。

「お妃の座があ」

亜梨沙が絶叫します。

「うるせえ奴だ」

孫左京が言います。

「何よ、あんただって額田王がお師匠様に似ているって言ってた癖に」

亜梨沙が言い返しました。

第七百六十一話　第六天魔王の焦り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は倭の国を飛び立ち、再びお釈迦様の国を目指します。

「どうやら南は落ち着いたようだ。女(じょか)？達がこちらに向かっているそうだ」

鴻均道人(こうきんどうじん)が言いました。

「どこを触っている！」

璃里のお尻を触る道人を殴る孫左京です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「私の父と母ももうすぐこちらに来ます」

美子(めいず)が言います。

「左京さんと結婚するから」

美子がそう言うと、左京はギクッとしました。

「冗談は止めてよ、美子ちゃん」

左京は汗まみれで言いました。

「冗談じゃないわ」

美子は言います。左京は固まりました。

その頃、第六天にある第六天魔王の邸では第六天魔王が焦っていました。

「霊獣ばかりかあの蛇女まで坊主に味方するのか。考えねばならぬ」

魔王は眉間に皺を寄せました。

でも姿が真っ黒なのでわかりません。

第七百六十二話　強豪集結編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里達は凄い速さで西に進んでいました。

「最初からこうすればいいのに」

禁句を平気で口にする亜梨沙です。

「それではありがたい経典を授かれないのよ」

蘭が窘(たしな)めます。

「わかってるわよ」

知ったかぶりが下手な亜梨沙です。

「うるさい！」

亜梨沙は地の文に八つ当たりです。

その時、南から雲に乗って美男美女が来ました。

「お久しゅうございます」

女(じょか)？と伏義(ふくぎ)と蚩尤(しゆう)でした。

「早かったですね」

樹里は笑顔全開で応じます。

ボケないのは先を急いでいるからです。

「女？しゃん、やっぱり奇麗にゃん」

リックのエロが発動しますが、

「お前様」

遊魔のラリアットも発動しました。

「美子（めいず）、久しいな」

別の美男美女が登場です。

「お父さん、お母さん！」

美子は大喜びです。

霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）夫妻です。

第七百六十三話　第六天魔王の陰謀編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

樹里の元に強豪達が集まっているのを知り、第六天魔王は一計を案じました。

（世間知らずな天帝を騙すなど造作もない）

第六天魔王は絶世の美女に姿を変え、雲に乗って天帝がいる天界を目指しました。

第六天魔王の動きは太上老君達三清が察知していました。

「何をする気だ、彼奴（あやつ）？」

霊宝天尊が呟きます。

「酒臭い顔を近づけるな」

元始天尊が怒りました。

「まずい気配だ。我らも天界へ向かうぞ」

老君は言いました。

時既に遅く、第六天魔王は天帝に拝謁していました。

「第六天魔王の使いとな？」

呑気が服を着ているような風貌の天帝が玉座に座って尋ねます。

「はい。第六天魔王は陛下に敵意はありませぬ。御徒町樹里達との仲裁をしていただきたく」

第六天魔王はその妖力を発揮し、天帝に流し目で言いました。

「あいわかった」

天帝はあっさり承諾してしまいました。

第七百六十四話　乗っ取られた天界編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

第六天魔王はあっさりと天帝を騙し、樹里達との仲裁をしてもらう約束を取り付けました。

「陛下への敵意なき証に第六天魔王自らが陛下に恭順の意を表しに参ります」

第六天魔王が化けた美女が言います。

「あいわかった」

すでに美女の虜の天帝は何を言っても「あいわかった」です。

（勝った）

第六天魔王はニヤリとしました。

太上老君達は天界に着きましたが、天帝の命令で中に入れません。

「第六天魔王め、すでに陛下を……」

老君は歯軋りしました。

第六天魔王が天帝に恭順の意を表するという情報は河東真君のところにも入りました。

「そんなバカな事があるはずない！」

元近衛大将の蘭が激怒しました。

「陛下はお人がよろしいので、奴に騙されたのです」

河東真君は樹里に言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「急ぎましょう、お師匠様」

孫左京が言いました。

第七百六十五話　第六天魔王の恫喝編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、今は東に来ています。

第六天魔王はすでに天界の中枢を掌握し、天帝を人質にしてしまっています。

「うぬら、我に逆らうなら天帝の命はない」

第六天魔王の恫喝に太上老君達もなす術がありません。

「抜かったな。儂らの負けかも知れぬ」

元始天尊が呟きます。

「まだ諦めるは早計ぞ」

霊宝天尊が言いました。

樹里達も天帝が人質に取られたのを知りました。

「おのれ、第六天魔王め」

誰よりも怖い顔で河東真君が言いました。

「何て事だ……」

蘭は動揺しています。

「天帝が人質では手出しできません」

伏羲(ふくぎ)が言います。

「関係ねえよ。乗り込んでぶっ飛ばす！」

孫左京がいきり立ちます。

「ダメよ、左京さん！」

美子(めいず)が左京に抱きついて窘(たしな)めます。

「美子、はしたない！」

霊媚阿壇(れびあたん)が叱ります。

「お久しぶりです」

璃里は部秘模洲(べひもす)と話していました。

第七百六十六話　天帝救出作戦開始編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、元いた辺りまで戻りました。

そして作戦会議です。

「天界にはそれぞれの者しか使えない専用通路がある。それを使い、乗り込もう」

とても天界の人間とは思えない顔の河東真君が言いました。

「そいつはいい。あのヤロウ、今度こそ逃がさねえぞ」

孫左京は言いました。

「まだです。少し待ちましょう」

樹里が言いました。

「どうしてです、お師匠様？」

蘭が尋ねました。

「まだ集う方達がいますから」

樹里は笑顔全開で言います。

「まだ来るの？」

食い扶持の心配をしている亜梨沙です。

しばらくして来たのは第六天魔王最大の敵である九霊元聖でした。

「兄貴、久しぶり」

元聖は言いました。そして、

「美子(めいず)ちゃん、大きくなったね」

美子は元聖に微笑んで、

「おじ様も相変わらずね」

と応じました。

「あら、元聖、元気?」

霊媚阿壇(れびあたん)が部秘模洲(べひもす)を殴りながら言いました。

第七百六十七話　第六天魔王の罠編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、元いた辺りまで戻りました。

樹里達は天界人の河東真君と元近衛大将の蘭による天界の地図を見て更に作戦を詰めます。

「なるほど、それならうまくいきそうだな」

まだ戦っていないのにボロボロの部秘模洲（べひもす）が言いました。

彼は璃里と嬉しそうに話していたので、霊媚阿壇（れびあたん）にボコられたのです。

「大変そうだな」

九霊元聖が囁きます。部秘模洲は黙って頷きました。

「これだけの強豪が集まれば、第六天魔王などあっと言う間に退治できる」

退治されそうな顔の河東真君が言いました。

「うるせえ！」

河東真君は地の文に切れました。

天界を制圧した第六天魔王は美女の分身を出していました。

「女に弱い奴はうぬに任せる」

美女の分身は魔王に言われてニヤリとしました。

「はい」

美女は跪いて言いました。

「後は女共だが……」

第六天魔王は樹里達の弱点を突く作戦を考えていました。

第七百六十八話　分裂作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので作戦会議中です。

河東真君専用の天界への抜け道を使い、孫左京達が天帝救出に向かう事になりました。

「お前の専用通路って何か臭そうで嫌だな」

左京が言いました。

「臭くないわい！」

河東真君は切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

いろいろ悶着がありましたが、河東真君と共に左京と露津狗、牛魔王、馨、部秘模洲（べひもす）、蚩尤（しゆう）が行く事になりました。

「留守は僕が守るにゃん」

リックが言いました。

「お前は連れて行く」

左京がリックを縛ってしまいました。

「では頼みます」

樹里が言いました。

「留守は儂が守る」

鴻均道人（こうきんどうじん）が嬉しそうに言いました。

「てめえも来い！」

左京が道人を殴りました。

「行って参ります」

左京達は河東真君について飛び立ちました。

「お姉さん、遊ぼ」

そこに美少年が現れました。

第七百六十九話　落ちた女達編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので作戦を立てて、男達が天界に向かいました。

留守を守る女達の前に超絶な美少年が現れました。

「きゃああ！」

亜梨沙と蘭と鉄扇公主があっさり陥落です。

「可愛い！」

オバさん三人が美少年に近づきます。

「誰がオバさんだ！」

オバさん達が切れました。

「お姉さん、遊ぼうよ」

その一言で、女？（じょか）と霊媚阿壇（れびあたん）も陥落しました。

「美形である」

女？があまりにメロメロなので、夫の伏義（ふくぎ）が嫉妬します。

「そいつ、第六天魔王の手下じゃないか？」

「何を言うのです、お前様！」

女？が睨むと、伏羲はビクッとして引き下がりました。

「ちょっと、お母さん達、どうしちゃったの？」

若い美子（めいず）は美少年の魔力が通じないのか、正常です。

「そうなんですか」

璃里樹里姉妹も無事です。

「どうしたんですかあ？」

遊魔も平気のようです。

第七百七十話　落とされる男達編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので作戦を立てて、男達が天界に向かいました。

樹里達のところに美少年が現れていた頃、孫左京達は河東真君専用の通路を使って、天界の中枢に向かっていました。

「もうすぐ終点だ」

先頭の河東真君が言いました。

左京達は天界の中枢にある河東真君の部屋に辿り着きました。

「くせえぞ、ここ」

左京が遠慮なく言います。

「仕方ないだろう、私はずっと部屋に戻っていなかったのだ」

河東真君はムッとして言いました。

彼らは加藤真君の部屋を出て、天帝が監禁されていると思われる部屋を目指しました。

「あら、皆さん、どちらへ？」

そこへ絶世の美女が現れます。

「にゃん！」

リックが反応しました。

「お酒でも飲まない？」

美女が強烈な流し目で見ます。

リックと馨はすでに落ちています。

「そうしましょうよ」

そこへ樹里と鷺佗が現れます。

左京と露津狗も落ちました。

第七百七十一話　美少年哀れ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので男達が天界に向かいました。

蘭や亜梨沙達が美少年に落とされ、樹里と璃里と遊魔が残りました。

「お姉さん達も遊ぼうよ」

美少年は更に上目遣いで迫りますが、

「はい、遊びましょう」

樹里は笑顔全開で返します。

美少年はイラッとし、

「けっ」

と舌打ちしました。

「オンマリシエイソワカ」

樹里がすかさず摩利支天（まりしてん）の真言を唱えます。

「ぎっ！」

美少年は正体を現しました。

「貴方でしたか、小林さん」

樹里が言いました。

「その麻央じゃねえよ！」

第六天魔王の分身は言いました。

「お前達の大事な男達は我が手中よ」

分身は高笑いして消えようとしました。

「許さぬ！」

女（じょか）？が変化して鱗攻撃し霊媚阿壇（れびあたん）が体当たりです。

「ぐべえ！」

分身は押し潰され、消滅しました。

「女の純真な心を弄ぶ奴は許さぬ」

霊媚阿壇が言いました。

第七百七十二話　お父さん頑張る編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので男達が天界に向かいました。

その男達も、河東真君と牛魔王、部秘模洲（べひもす）が残っているだけで、後は役立たずです。

「おのれ、分身を使って来るとは！」

河東真君が田路治路を使い、美女を襲わせます。

「その描写は語弊があるだろ！」

河東真君は地の文に抗議しました。

「やめろ！」

孫左京と露津狗が田路治路を阻みます。

「くそ」

河東真君は偽者の樹里と鷺佗を睨みました。

「何を騒いでいるのです？」

そこへ熟女が現れました。

「ママ！」

河東真君は仰天しました。彼の母親が現れたのです。

河東真君は偽の母親に抱きつきました。

顔が怖い上にマザコンです。

「何をしているのだ！」

牛魔王が呆れますが、

「牛魔王さん、頑張ってください」

偽の樹里に言われて、あっさり陥落する牛魔王です。

「俺一人でも戦うぞ、美子（めいず）！」

部秘模洲は叫びました。

第七百七十三話　部秘模洲孤独なる戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

ほとんどの男達が第六天魔王の罠に嵌ってメロメロです。

娘がいる部秘模洲（べひもす）は何とか踏み止まり、

「そのような幻覚に惑わされる俺ではない！」

部秘模洲はその力で美女を吹き飛ばし、偽の樹里と鷺佗を消滅させました。

「第六天魔王、卑怯だぞ。堂々と戦わぬか！」

部秘模洲は挑発しました。

「では我自らが参ろう」

第六天魔王の声が応じました。

「いつでも来い、貴様如き俺一人で捻り潰す！」

闘志満々の部秘模洲です。

（美子（めいず）、お父さん、頑張るからね！）

美子は苦戦していました。

美少年がまた登場し、女?(じょか)も霊媚阿壇(れびあたん)もメロメロです。

「同じ手に引っかかってどうするの！」

美子は母達を叱咤します。

「結婚してくれ」

孫左京の偽者が現れ、美子も陥落です。

「左京さん！」

思わず抱きつく美子です。

第七百七十四話　三清到着編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

天界では部秘模洲（べひもす）が孤軍奮闘しています。

それも終わりです。

「部秘模洲様、一緒に暮らしましょう」

璃里の偽者が現れ、部秘模洲も陥落しました。

男共は全滅です。

「何をしておるか！」

そこへ太上老君達三清が駆けつけます。

「第六天魔王、焼きが回ったか？　せこい手を使いおって」

霊宝天尊が容赦なく璃里の偽者を叩き伏せます。

「しっかりせい、お主ら！」

いつになく真面目な老君です。

「しっかりせい！」

元始天尊が孫左京を殴りました。

「それより、お師匠様は？」

老君が言います。

鴻均道人（こうきんどうじん）がいません。

蚩尤（しゆう）もいません。

「まさかお師匠様、自ら犠牲となるおつもりか？」

老君が呟きます。

「もう終わったかの？」

すると物陰から道人と蚩尤が現れました。

「隠れてたんかい！」

三清は激怒しました。

第七百七十五話　樹里覚醒編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

男達は三清の到着で盛り返しましたが、女達がまたピンチです。

「樹里、まずいんじゃないの？」

璃里が言いました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。そして、

「遊魔さん、力を貸してください」

「はあい」

遊魔はニコッとして応じます。

「行きます。陽気全開」

樹里が帽子を取り、笑顔になります。

遊魔と璃里も笑顔全開です。

陽気のパワーが偽者の孫左京を消し飛ばし、美子（めいず）が復活します。

「私も」

美子も笑顔全開になります。

「くお！」

美少年は正体を現します。

只のおっさんでした。

「おのれ！」

陽気の力で消滅するおっさんです。

「さあ、参りましょう」

某テレザートのテ〇サのような発言をし、輝き出す樹里です。

「はい」

女達は手をつなぎ、飛翔します。

手を繋いだ事により、全員が輝き出しました。

女達も復活です。

第七百七十六話　天帝の盾編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

樹里達女性陣は光りながら天界に向かいました。

その様子を知った第六天魔王は、孫左京達との戦いから撤収し、天帝を監禁している玉座の間に逃走しました。

「おのれ、御徒町樹里め。あやつは一体何者なのだ?」

第六天魔王は天帝に化け、天帝と共に玉座の間に留まります。

「追いつめたぞ、第六天魔王!」

左京が玉座の間に一番乗りです。

「天帝陛下がお二人?」

太上老君が唖然とします。

「どちらが本物の陛下なのだ?」

元始天尊が歯軋りしました。

「簡単な事さ」

左京は言いました。

「どういう事だ？」

河東真君が尋ねます。

「どっちもぶっ飛ばしちまえばいいんだよ！」

左京は如意棒を振り上げて突進しました。

「陛下を殺めれば天が崩れ落ち、この世が終わるぞ、猿！」

鴻均道人（こうきんどうじん）が叫びます。

「何！？」

左京は仰天しました。

第七百七十七話　再び逆転編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

第六天魔王を追いつめた孫左京達でしたが、形勢を逆転されてしまいました。

「おい、お前、天帝の近親者だろう？　天帝にしかわからない事を訊いてみろ」

左京が河東真君に言いました。

「わかった」

河東真君は天帝に質問しました。

「私の渾名をご存知ですか？」

「バ河東真君だ」

二人共正解です。

「バカヤロウ！」

左京は河東真君を殴りました。

（何を訊いても無駄よ。我は天帝を写し取ったのだ。天帝の事は全て把握している）

第六天魔王は心の中でほくそ笑みました。

「皇妃陛下の恥ずかしいところの黒子があるのは右側か、左側か？」

太上老君が尋ねました。

（何て事訊くんだ、このジジイは？）

左京は呆れました。

（さすがに知らないだろう）

誰もが偽者の発覚を確信しました。

「右側だ」

二人の天帝は声を揃えて答えます。

唖然とする左京達です。

第七百七十八話　最後の質問編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

孫左京達は次々に質問しましたが、二人の天帝はあの双子芸人より見事に答えを一致させ続けました。

「全くわからぬ」

太上老君が呟きます。

「奴の気配は、天帝陛下の荘厳な気に紛れてしまってわからぬしな」

霊宝天尊が赤ら顔で言います。

「どうするんだよ、ジイさん達？」

左京も焦っていました。

「私が本物の天帝である。何故わからんのだ？」

それもまた見事にハモっています。

「助けてくれ！」

左京が叫ぶと、

「そうなんですか」

樹里達が現れました。

「陛下がお二人？」

蘭が仰天しました。

「お前にはわからぬか？」

元始天尊が蘭に尋ねます。

「私も全然わかりませぬ」

蘭は二人の天帝を見て言いました。

「グランプリシリーズ、頑張ってください」

樹里が言いました。

「その真央じゃねえよ！」

つい反応してしまい、ボロを出した第六天魔王です。

第七百七十九話　奇襲編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

樹里の会心のボケで正体がばれた第六天魔王です。

「おのれ、御徒町樹里め！」

天帝の姿のままの魔王は憎らしそうに樹里を睨みます。

「元宝塚の方ですか？」

樹里が更に尋ねます。

「その真央でもねえよ！」

魔王は疲れています。

「今だ！」

鴻均道人（こうきんどうじん）と蚩尤（しゆう）が仕掛けました。

「温いわ！」

魔王はニヤリとして二人を軽く跳ね飛ばしました。

「ぐは！」

道人と蚩尤ほどの使い手がたちまちやられ、唖然とする孫左京です。

「やはり以前より強くなっている」

霊宝天尊が呟きます。

「そうなんですか」

樹里はそれでも笑顔全開です。

「もう終いか、うぬら？」

魔王は天帝の首を持ち、引き寄せます。

「陛下！」

太上老君が叫びました。

「天を落としたくはあるまい。ならばうぬの地位を我に譲ると言え！」

魔王は天帝に迫りました。

第七百八十話　切り札登場？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

第六天魔王は天帝に譲位を迫りました。

「うぬ……」

天帝は苦しそうに魔王を見ました。

「其方は私の地位が欲しいのか？」

「そうだ。寄越すか？」

魔王がニヤリとします。

「横浜」

樹里が言いました。

「その横須賀じゃねえよ！」

魔王は切れました。

その時でした。

「真打ち登場ね」

ゴオオと炎が巻き起こり魔王と天帝を引き離します。

「何!?」

魔王の顔色が変わりました。

「お久、魔王。私をお忘れのようで」

そう言って現れたのは九霊元聖でした。

魔王は悔しそうに元聖を睨みました。

三清がすぐに天帝を守ります。

「天帝の地位はあんたには渡さないよ。いずれ私がいただくんだからね」

元聖はニヤリとして天帝を見ます。

「まさか……」

蘭が焦ります。

「其方も敵かえ?」

女?(じょか)が元聖を睨みます。

「場合によってはね」

元聖は言いました。

第七百八十一話　九霊元聖の思惑編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

九霊元聖の登場で一気に盛り返した樹里一行ですが、元聖は微妙な発言をしました。

「でも今はお嬢さん方の味方さ」

元聖は九つの獅子の頭を一つにしイケメンに変身しました。

「きゃあ！」

亜梨沙が絶叫し、露津狗がイラッとします。

「おお」

さっきまで元聖を睨んでいた女子（じょか）？が頬を染めたので、蚩尤（しゆう）がムッとします。

伏羲（ふくぎ）は留守番なのでいません。

「私は貴女の味方です」

元聖は跪いて樹里の手にキスしました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「何だと！？」

孫左京が仰天します。

「おのれ……」

そう言いかけて鉄扇公主の視線に気づき黙る牛魔王です。

「ならばうぬも屠（ほふ）るまでよ！」

第六天魔王が正体を現します。

「ここで変化するつもりか！？」

太上老君が焦ります。

天界が魔王の妖気で揺れました。

第七百八十二話　第六天魔王の目的編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

第六天魔王は妖気を解放しました。

「まずい！」

三清が動き、強力な結界を張ります。

「陛下！」

太上老君達が天帝を結界で守ります。

「うぬ！」

霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）も結界を張り、樹里達を守ります。

「魔王よ、其方はこの女（じょか）？と戦う覚悟かえ？」

女？が強烈な一睨みです。亜梨沙は失禁しました。

「奇麗にゃん」

リックは燃えています。

「お前様！」

遊魔が踵落としを決めます。

「うぬらも全て消す。天帝が死に天が崩れ落ち、あらゆる生き物が死に絶えるのだ」

第六天魔王は真の姿を見せました。只闇があり、そこに毒々しく赤い目が二つあります。

「元聖、可愛い孫娘も天が崩れては助かるまい？」

魔王は大声で笑いました。

「させるか！」

九霊元聖はその強大な妖気をものともせず、魔王の本体に向かいました。

第七百八十三話　九霊元聖の特攻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

九霊元聖は九つの頭に戻り、

「私とて指をくわえて見ていた訳ではない！」

と叫ぶと、そのまま九個の口から爆炎を吐きました。

「何！？」

第六天魔王も焦ったようです。

魔王は爆炎をかわすため、小さくなりました。

「逃がさないよ！」

やり過ごしたかに見えた爆炎は反転し、油断した魔王に直撃します。

「ぐうおお！」

魔王は悶絶しました。

「それはまだ挨拶程度さ」

元聖はニヤリとしました。

「なんてな」

魔王が言います。

「何!?」

元聖はギョッとしました。

「和久さんですか?」

樹里が尋ねました。

「誰がいかりや長介だ!」

魔王は切れました。

「効かぬよ、その程度。我を誰だと思っているのだ、獅子よ?」

魔王は勝ち誇ったように言いました。

「誰でもいい!」

元聖は激怒していました。

「うおお!」

彼は全身を爆炎と化し、魔王に向かいました。

第七百八十四話　九霊元聖の執念編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

九霊元聖は爆炎となって第六天魔王に突っ込みました。

「死ぬ気か？」

元始天尊が呟きます。

「あの人は不死身でしょ？」

亜梨沙が意識を回復して言いました。

「不死身ではあるが、不滅ではない。身体の全てを消滅させられれば、死にはしないが、消える」

太上老君が蘭のお尻を触りながら言いました。

「この非常時に！」

孫左京が老君を殴りました。

「うおお！」

爆炎となった元聖は魔王に突っ込みました。

「おのれえ！」

さすがの魔王も余裕をかませないようです。

「消えてしまえ、魔王！　お前の時代は終わったんだ！」

元聖は更に炎を強力にして叫びます。

「消えるのはうぬだ、獅子よ」

魔王はニヤリとしました。

「何！？」

元聖は自分の爆炎が魔王に吸い取られているのに気づきました。

「うぬは不死身だが不滅にあらず」

魔王の言葉に焦る元聖です。

第七百八十五話　元聖消滅？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

「ぬうう！」

第六天魔王に力を与えていた事を知り、元聖は離れようとしました。

「させぬよ」

魔王はニヤリとします。元聖は身動き取れなくなっていました。

「弟は俺が守る！」

孫左京が極大如意棒を振りかざし、魔王を殴ります。

「何だと？」

完全に意表を突かれた魔王はそれをまともに食らい、吹っ飛びました。

「ぶへえ」

魔王は壁に激突し、ずり落ちます。

「兄貴、すまない」

元聖は爆炎を解いて膝を折りました。

「兄貴として当然の事だ」

左京は照れ臭そうに言います。

「ぎゃん！」

左京は魔王の妖気で気絶しました。

「あのバカ、後先考えずに」

蘭が呆れます。

「でもそれが左京なんだよ」

亜梨沙が言いました。

「魔王の気が弱まっておる。今じゃ！」

鴻均道人（こうきんどうじん）が叫び、三清と共に走ります。

「お猿さん！」

樹里は祈りました。

第七百八十六話　魔王逃走編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が第六天魔王に乗っ取られたので行き先変更です。

鴻均道人（こうきんどうじん）と三清が迫るのを知り、

「おのれ……」

第六天魔王は立ち上がります。

「ジジイ共、小賢しい！」

「貴様も相当なジジイであろうが！」

太上老君が怒鳴りました。

「三清弾！」

三清の新必殺技の大きな気の塊が魔王に向かいます。

「お師匠様弾！」

続けて道人が気を放ちました。

「おのれえ！」

魔王はそれを弾くと、スッと姿を消しました。

「逃げおったか」

霊宝天尊が呟きます。

「お猿さん！」

樹里が左京に駆け寄ります。

左京は薄目を開けて状況を確認しました。

樹里が涙ぐんでいるのが見えます。

それを見て盛大に鼻血を噴く左京です。

「元気そうじゃん」

蘭と亜梨沙が呆れて言いました。

「左京さん！」

美子（めいず）も駆け寄りました。

「面白くなりましたぜ、旦那」

亜梨沙が言います。蘭は白い目で亜梨沙を見ました。

第七百八十七話　追撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、天界が大騒動になったので駆けつけました。

第六天魔王は孫左京の捨て身（？）の一撃で勝機を失い、逃走しました。

「今度は逃がさん。奴の根城に行くぞ」

太上老君が言うとこっそり逃げようとしている元始天尊です。

「そのギャグはよせ！」

老君が怒りますが、その手は亜梨沙のお尻を触っています。

「何すんよ！」

亜梨沙は露津狗が殴る前に老君をエルボースマッシュです。

「お猿さん」

左京はまだ朦朧としていました。鼻血を出し過ぎたようです。

「兄貴、大丈夫か？」

九霊元聖が言いました。

「おじ様、左京さんは大丈夫。私の愛で支える」

美子（めいず）が言いました。

「そうかい？」

元聖は悲しそうな顔をします。

「行くぞ」

真顔の鴻均道人（こうきんどうじん）ですが、しっかり璃里の肩を抱いて大型きんと雲に乗ります。

「璃里さんはダメよ、お爺ちゃん！」

美子が道人を殴り璃里を下ろしました。

第七百八十八話　第六天魔王の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

追撃隊は鴻均道人（こうきんどうじん）、三清、孫左京、美子（めいず）、九霊元聖、露津狗、牛魔王、河東真君、蚩尤（しゆう）、部秘模洲（べひもす）です。

「お嬢さん方は樹里様達と陛下をお守りください」

元聖がイケメンになって言いました。

「はい！」

亜梨沙と女？（じょか）が声を揃えて頷きます。

後から駆けつけた伏義（ふくぎ）、そして蚩尤はムッとします。

「心配しないでにゃん。もしもの時は僕が全員面倒見るにゃん」

リックが言いました。

直後、遊魔のダブル跳び膝蹴りが決まりました。

「猫は私達が抑えます」

伏義と馨が言いました。

（部秘模洲様、ご無事で）

璃里は目で部秘模洲に伝えました。

しかし、霊媚阿壇（れびあたん）に気づかれ部秘模洲は目を逸らします。

「行くぞ」

左京達が飛び立ちました。

「待っていたよ」

魔王の軍隊が現れました。

第七百八十九話　魔王軍対女？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王軍は空を埋め尽くすほどの大軍です。

「第六天魔王陛下のご命令で貴様らを滅する！」

その中の一体の魔物が言います。

「誰にものを言うているか、わかっているのかえ？」

女？(じょか)が魔物を睨みつけます。

チビリそうになる亜梨沙です。

「かかれ！」

魔物達が一斉に樹里達に襲いかかります。

「舐められたものよ！」

ズオオオッと女？は変化し、魔物達より遥か上空までその身体を伸ばします。

「……」

唖然とする魔物達です。

「どっちが悪い奴かわからないにゃん」

リックがビビって呟きます。

「消えよ、小者共が！」

女?は身体から鱗を放ち、魔物達を切り刻みました。

「オンマリシエイソワカ」

樹里が摩利支天(まりしてん)真言を唱え、魔物の破片を浄化しました。

「彼らもまた魔王の犠牲者。弔えば救われます」

樹里は言いました。

一同は感動しました。

第七百九十話　第六天へ編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

孫左京達は第六天魔王の根城である第六天を目指しています。

「遠いのか、そこは？」

左京が太上老君に尋ねました。

「遠いと思えば遠く、近いと思えば近い。第六天は我らには計り知れぬ場所だ」

妙に真面目な太上老君を見て訝る左京です。

（ジジイ、何か企んでいるのか？）

疑い深い左京です。

「天は、それぞれ途方もなく遠き場所だ。いつ着けるかはわからぬ」

霊宝天尊が新しい酒徳利を開けて言いました。

「悪口言えば、向こうから来るんじゃないの？」

九霊元聖がニヤリとします。

「第六天魔王なんて、すぐにやっつけちまおう、なんつって」

左京が下らない駄洒落を言いました。

「我を愚弄するのか！？」

魔王が現れました。

（思ったより単純なのか？）

露津狗は呆れました。

「左京さん！」

美子（めいず）が左京にしがみつきました。

巨乳を感じ、焦る左京です。

第七百九十一話　第六天魔王の底力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「愚かなり、我の城に来たが間違いと知らしめようぞ」

第六天魔王が言いました。黒衣の僧のような老人の姿です。

「日本語で言え！」

孫左京が怒鳴ります。

「愚者には理解できぬか。哀れな」

魔王は言いました。

「意味が通じねえと思ってバカにしてるな？」

バカにされたのは感じ取れる左京です。

「む？」

太上老君が気づいた時はもう手遅れでした。

「魔王の空間に引き込まれたのか？」

元始天尊が言います。

「今更気づいても後の祭よ」

魔王はニヤリとしました。

「左京さん、やっちゃえ！」

美子（めいず）が言いました。

「おう！」

左京は如意棒を振るいました。

「おらあ！」

黒衣の魔王は幻影で、如意棒は空振りです。

「よくやった、猿！」

霊宝天尊が言い、反対側に潜んでいた魔王に掌底を叩き込みました。

「ぐべえ！」

魔王はそのまま遥か彼方に吹き飛びました。

第七百九十二話　無限空間編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

霊宝天尊の鮮やかな技で第六天魔王は吹き飛びました。

「やった！」

美子（めいず）がはしゃぎますが、

「奴は全体の一部に過ぎぬ。まだ本体は奥じゃ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が前方を睨みますが、その右手は美子のお尻を触っています。

「スケベ！」

美子の右回し蹴りが道人に決まりました。

「行こう、兄貴。サッサと終わりにして、お嬢さん方の所に戻ろう」

九霊元聖が先行します。

「あ、待てよ」

孫左京がそれを追いました。

「儂らも行きましょう、お師匠様」

太上老君が言いました。

「そうじゃな」

道人は美子に蹴られた顎を治しながら言いました。

元聖と左京は何もない空間を飛翔していました。

「どこまで続くんだ？」

左京はうんざりしています。

「うぬらが死ぬるまでよ」

魔王が現れました。

「懲りてねえな、ジジイ！」

左京が如意棒で殴りかかります。

第七百九十三話　九霊元聖対第六天魔王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

左京は如意棒を振るいました。

「温いわ」

魔王はそれをかわすと、

「吹き飛べ」

と唱えました。いきなり左京が飛ばされました。

「うへえ！」

左京は見えなくなってしまいます。

「さてと。うぬにはたっぷり礼をせんとな、元聖？」

魔王は元聖を睨みます。元聖はニヤリとして、

「お気持ちだけで結構ですって」

「それは以前御徒町樹里が使ったボケだ！」

魔王は切れました。なかなかの樹里マニアです。

「へえ、そう？」

九霊元聖はおとぼけをかましながら、

「があ！」

いきなり獅子の顔に戻り爆炎を放ちます。

「おっと！」

魔王はスッとそれをかわし、

「今頃うぬの孫娘は我の眷族に嬲（なぶ）られておろうの」

と挑発します。

「何？」

普段は冷静な元聖ですが、孫娘の黄姫（おうひめ）の事を言われると感情を剥き出しにしてしまいます。

「貴様！」

元聖は激怒しました。

第七百九十四話　心理作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

九霊元聖は孫娘の黄姫（おうひめ）の安否が気になってしまい、戦いに集中できません。

（黄姫は絶対にこいつが手出しできない天竺に送ったんだ。嘘だ）

そう思いたい元聖ですが、ニヤニヤする第六天魔王に惑わされそうです。

孫左京は飛ばされ続けて、大型きんと雲の舳先に激突して止まりました。

「左京さん！」

美子（めいず）が左京を助け起こします。

「魔王にやられた……」

美子の巨乳に埋もれるように気を失う左京です。

「ここは私にお任せください」

部秘模洲（べひもす）が巨大なサイに姿を戻します。

「まやかしの空間を私の身体で打ち破ります」

部秘模洲はどんどん巨大化しました。

（これが霊獣の力か……）

露津狗が唖然としていると、

『露津狗よ、お前も同じ。私と一つになったお前にも、霊獣の力がある』

俯炎驪琉（ふえんりる）の声が聞こえました。

第七百九十五話　樹里の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

部秘模洲と露津狗の巨大化によって第六天魔王の作り出した空間が撓みます。

「おのれ、霊獣共！」

魔王は憎らしそうに言いました。

魔王軍を打ち破った樹里達も第六天を目指していました。

「魔王は心の隙間を突いて来ます。私達も行きましょう」

鉄扇公主が言いました。

「喪黒さんですか？」

樹里が尋ねました。

「誰が笑ゥせぇるすまんだ！」

鉄扇公主は切れました。

「九霊元聖さんが危ういです。急ぎましょう」

突然まともバージョンになる樹里についていけない公主です。

「はい」

亜梨沙と女?(じょか)が見事にハモりました。

「惑わされないでください。貴方のお孫さんはご無事ですよ」

樹里が祈りながら言いました。

樹里の言葉が遠く離れた元聖に届きました。

「ありがとうございます、樹里様。もう大丈夫です」

元聖は魔王を睨みました。

第七百九十六話　九霊元聖対第六天魔王その弐編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

九霊元聖は怒りの力を身体に溜め始めます。

「ぬう？」

第六天魔王もその力を感じ、身じろぎます。

（おのれ、御徒町樹里め！　やはり一番の敵はあの女か？）

魔王の顔が醜く歪みます。

「魔王よ、私は今の今までこの世がどうなろうといいと思っていた。しかし、黄姫（おうひめ）はそんな事を喜ばない。そして、樹里様もな！」

元聖は九つの頭に戻り、爆炎を連射します。

「ぬおお！」

魔王は慌てて退き、爆炎をはねつけます。

「まだまだだ！」

霊獣の力で撓む空間を爆炎の嵐が貫きました。

「何！？」

魔王はその時初めて、元聖の目的に気づきました。

「うぬは始めから空間を破壊するために……？」

魔王は歯軋りしました。

次の瞬間、空間が弾けて、

「おらあ！」

孫左京の如意棒が魔王の脳天に炸裂しました。

「ぐおお！」

魔王はその衝撃で仰向けに倒れてしまいました。

第七百九十七話　第六天魔王の変化編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

孫左京の会心の一撃が決まり、倒れる第六天魔王です。

「止めだ！」

九霊元聖は九つの頭を一つにして巨大な爆炎を放ちました。

「やったか？」

牛魔王達ギャラリーが言いました。

「誰がＢＥ　ＱＵＩＥＴだ！」

牛魔王が切れました。

魔王は爆炎をまともに食らい、燃え上がりました。

「おお！」

左京は喜びますが、元聖は歯軋りします。

「くそ、こいつ以前より遥かに強くなっている」

「何？」

左京はギョッとしました。

「ふおお！」

魔王の声がし、爆炎が消失しました。

「我をここまで追い詰めたのは誉めてやろう」

爆炎が消えて現れたのはまさに第六天魔王の真の姿です。

「それがてめえの本当の姿か？」

左京がビビりながら尋ねました。

「その通り。我は元天界人だ」

魔王の背中には真っ黒い翼が生えています。

「何となく信じられる」

左京は河東真君を見て呟きました。

第七百九十八話　河東真君の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「貴様！」

河東真君が凶悪犯面目躍如の怖い顔になりました。

「ほお、バ河東真君、うぬも元天界人だったな？」

第六天魔王が強烈な皮肉を言います。

思わずそうだなという顔をしてしまう孫左京です。

「私は現役だ！」

河東真君が田路治路を向かわせます。

「相変わらず犬に頼らねば戦えぬのか？」

魔王は更に挑発しました。

「ふざけるな！　私も強いんだ！」

河東真君は挑発に乗せられ、青龍刀を抜いて突進しました。

「単純バカだな、あいつ」

単純王の左京が呟きました。

「うるせえ！」

左京は地の文に切れました。

「うぬ如き、指一本で倒してくれるわ」

魔王は右手の人差し指を見せました。

「愚弄しおって！」

河東真君は田路治路を下がらせ、一人で魔王に向かいました。

「やばくないか？」

牛魔王が言います。

「あいつも強い事は強いからな」

左京は静観の構えです。

第七百九十九話　天界人の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

河東真君は無謀にもたった一人で第六天魔王に向かいました。

「お前の事は忘れない、脱獄囚」

孫左京が言いました。

「まだ死んでねえし脱獄囚じゃねえ！」

河東真君は会心の切れ芸を披露しました。

「誰がカンニング竹山だ！」

更に円熟の芸を見せる河東真君です。

「うぬはそれなりに上位の天界人のようだな？」

魔王は河東真君を見て言います。

「気づいたか？　私は天帝の妃の弟の奥さんの従弟だ」

河東真君は胸を張って言いました。

「それってもうほとんど他人よね？」

美子（めいず）が左京に囁きます。

「顔に似合わず高貴な気を纏（まと）っているのはそのせいか」

魔王はニヤリとしました。

「誉め殺しにするつもりか？」

牛魔王が訝（いぶか）りますが、

「そこまで誉めてねえだろ？」

左京は呆れました。

「わかったか、私の凄さが」

河東真君はフッと笑いました。

第八百話　河東真君対第六天魔王編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

河東真君は更に魔王との間合いを詰めます。

「どうした、怖じ気づいたか？」

魔王が挑発します。

「違う！」

河東真君がバンと踏み込みます。

「おりゃあ！」

青竜刀が唸りを上げて魔王に振り下ろされました。

「これはかわせないぞ」

孫左京が言いました。

「何！？」

青竜刀は魔王の予告通り、人差し指一本で止められていました。

「ぐぬう！」

河東真君は渾身の力を込めて押し込みますが、魔王の指はピクリともしません。

「何という怪力だ……」

力では河東真君に引けを取らない牛魔王が驚愕します。

「くそ」

河東真君は一旦引き、もう一度踏み込もうとしました。

「ぐは！」

そのほんの刹那で魔王は河東真君の身体を指一本で突きました。

「ぐお！」

河東真君はそのまま後ろに跳ね飛ばされてしまいました。

「弱過ぎる。天界人は今はその程度か」

魔王は鼻で笑いました。

第八百一話　一進一退編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王はニヤリとして孫左京達を見ます。

「次は誰だ？」

左京が出ようとすると、

「次は俺だ！」

露津狗が抜け出します。

「ほう、狼、覚悟は良いか？」

魔王は嘲るように尋ねます。

「貴様こそ覚悟はいいか！？」

露津狗は魔王の直前で巨大化し、業火を吐きました。

「おお！」

魔王はかわす暇もなく、業火の中に消えました。

「まだだ！」

露津狗は業火を連射し、魔王にぶつけます。

辺りはまるで灼熱地獄です。

「あつう……」

美子（めいず）が鎧をずらすのを食い入るように見る鴻均道人（こうきんどうじん）です。

「スケベ！」

美子の裏拳が炸裂しました。

「はあはあ……」

露津狗は業火を吐くのをやめました。

「もう終（しま）いか、狼？」

業火の中から涼しげな魔王の声が聞こえます。

「全部返すぞ」

声が聞こえた次の瞬間、業火が倍返しで露津狗に襲いかかりました。

第八百二話　男達の敗北編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王は露津狗の業火を倍返ししました。

「ぬあ！」

部秘模洲（べひもす）が前に出ました。

「させぬ！」

強力な結界で部秘模洲は業火を阻みます。

「おまけだ」

魔王はそれに加えて自分の力で生み出した炎を放ちます。

「何だと！？」

それが加わった途端、部秘模洲の結界が破れました。

「お父さん！」

美子（めいず）が叫びました。

「ぐはあ！」

鴻均道人と太上老君達も結界を張りますが、それすら効果なしです。

「何という強さだ……」

男達は魔王の業火に破れ、吹き飛ばされました。

「美子ちゃん」

左京は如意棒を大きくし、美子を守りました。

「弱過ぎるぞ！」

魔王は高笑いをしました。

「くそう……」

本調子でない九霊元聖は悔しそうです。

その時です。

「情けない、それでも男か」

女？と霊媚阿壇がやって来ました。

第八百三話　怒れる女達編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

女?(じょか)と霊媚阿壇(れびあたん)は魔王を睨みます。

「蛇と鯨か。相手にならぬ」

魔王が鼻で笑いました。

「黙りゃ！」

女?が変化します。霊媚阿壇も変化しました。

「其方に謀(たばか)られた恨み、ここで晴らすぞ！」

女?が叫びました。

「女をバカにすると許さないよ！」

霊媚阿壇も叫びます。

「こええ……」

その光景を飛ばされながら見ていた孫左京が呟きました。

「左京さん、仇討って来るね！」

美子（めいず）は如意棒を左京から取ると、魔王に向かいました。

「美子ちゃん！」

左京は美子の健気さにジンとします。

「儂等も加勢に行くぞ」

太上老君が言いました。

左京達は何とか踏み止まり、態勢を立て直します。

「あんた達は少し休んでなさい！」

大型きんと雲に乗っている蘭が言いました。

「お師匠様！」

左京は樹里を見て元気一万倍になりました。

第八百四話　女達の戦い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「食らえ！」

女？（じょか）が鱗攻撃を仕掛けます。

「その程度！」

魔王はその全てを指で弾きます。

「隙あり！」

霊媚阿壇（れびあたん）が口から強力な光を放ちます。

「ぬう！」

魔王がそれをかわそうと動きました。

「伸びろ！」

追いついた美子（めいず）が叫びました。

美子の持って来た如意棒が伸び、魔王に当たりました。

「ぬぐ！」

魔王は後ろに跳ね飛ばされました。

「逃がすか！」

女？が飛翔して追います。

「こやつら、格が違うか」

魔王は焦っていました。

「待て！」

美子も母親の霊媚阿壇と共に追いかけます。

「この私から逃げられると思うな！」

女？が叫びます。すると魔王はニヤリとして、

「その手があったか」

と呟くと美少年に変化します。

「お姉さん、許して」

美少年になった魔王は涙ぐんで言いました。

「許す」

女？と霊媚阿壇は即座に言いました。

第八百五話　美子奮戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「女?(じょか)さん、お母さん、何言ってるのよ!」

美子(めいず)は美少年に化けた魔王にあっさり篭絡された二人に怒ります。

「ダメよ、美子、あんな可愛い男の子に暴力を振るっては」

霊媚阿壇(れびあたん)はトロンとした目で言いました。

「そうじゃ」

女?が頷きます。

「もう!」

美子は呆れて一人で魔王に向かいます。

「卑怯な手を使って!」

美子は如意棒を振るい、魔王に迫りました。

「卑怯は我の得意技よ」

魔王はニヤリとしました。

「うぬ一人では相手にならぬぞ」

「それはどうかしら！」

美子は鴻均道人（こうきんどうじん）から授かった力を解放しました。

「私には道人のお爺ちゃんの力が宿ってるのよ」

「ぬ？」

魔王はビクッとしました。

（こやつ、霊獣二体の力と鴻均道人の力を持っているのか？　それは使える）

魔王は何かを思いついたようです。

第八百六話　孫左京復帰編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

孫左京は樹里に会って完全復活ですが、如意棒を美子（めいず）に持って行かれたので、がっかりしています。

「お猿さん」

樹里が飛竜杖（ひりゅうじょう）を左京に差し出します。

「お師匠様、その杖は俺が持っていても役に立ちません」

「いえ、大丈夫です。この杖は、持ち主のために姿を変える杖なのです」

樹里は笑顔全開で言いました。

「そうなんですか」

思わず樹里の口癖で返す左京です。

「ありがとうございます！」

左京は杖を受け取り、きんと雲で飛びました。

「美子さんが魔王に陥れられる前に着いてください、お猿さん」

樹里は祈るように呟きました。

美子は魔王に攻撃していました。

しかし全く当たりません。

「そのような不慣れな棒切れを振り回したところで我を倒せるはずがない」

魔王は美子を嘲りました。

「美子ちゃん！」

そこへ左京が着きました。

第八百七話　第六天魔王の策略編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王は女?(じょか)と霊媚阿壇(れびあたん)を見て、

「お姉さん、あの猿が僕を虐めに来たよ。やっつけて」

「はい！」

女?と霊媚阿壇は孫左京に向かいました。

「何だと!?」

左京は向かって来る二体を見てビビります。

「魔王より始末が悪いぞ！」

それを見た美子(めいず)が、

「女?さん、お母さん、何してるのよ!?」

と叫びますが、二人には聞こえません。

「其方、猿に惚れているのであろう?」

魔王が呼びかけます。ドキッとする美子です。

「我に力を貸せば、その願いは叶うぞ。御徒町樹里を殺せば、猿はお前の夫になる」

まさに悪魔の囁きをする魔王です。

「……」

その言葉に図らずも心が揺れてしまう美子です。

（左京さんと結婚したい。でも樹里様を殺めるなんて……）

美子の動揺を感じ取った魔王はニヤリとしました。

（勝った）

悪魔の微笑みです。

第八百八話　美子の思い編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王の策略に美子（めいず）は動揺していました。

（私は左京さんが大好き。でも、それと同じくらい樹里様をお慕いしている……）

「やめろ、おい！」

そんな中、孫左京は女？（じょか）と霊媚阿壇（れびあたん）の攻撃を必死になってかわしています。

「逃がさん！」

女？と霊媚阿壇は血眼になって左京を追いました。

「うぬが決断すれば、猿は助かる。さもなくば、奴はそのうち死ぬ」

魔王が更に囁きます。美子の身体が震えました。

（どうしたらいいの？）

魔王はそんな美子を見てニヤリとしました。

（悩み抜くのだ、美子。それこそが我の狙い）

その時美子が振り返り、魔王を見ました。

「決めたわ。貴方に力を貸す。だから、左京さんを助けて」

美子は悲しそうに言いました。

魔王はフッと笑い、女?(じょか)と霊媚阿壇(れびあたん)にかけた術を解きました。

第八百九話　美子の決意編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

美子（めいず）は魔王を見ました。

「さあ、我のそばへ参れ、美子」

魔王はニヤリとして言います。

「ええ。私の力、貴方にあげるわ」

美子は悲しそうに微笑み、魔王に近づきました。

「美子！」

術を解かれた霊媚阿壇（れびあたん）は娘が何をしようとしているのか気づき、叫びます。

「不甲斐ない。すまぬ、美子殿」

女？（じょか）が詫びました。

「美子ちゃん！」

孫左京が美子に近づこうとします。

「よるな、猿！」

魔王は美子をグイッと抱き寄せました。

「きゃ！」

美子は魔王に首を掴まれました。

「それ以上近づくと、この首を引きちぎる」

「何だと！？」

左京は身じろぎました。

「さあ、美子よ、其方の力を我に与えよ。さすれば猿と其方を結ばせよう」

「じゃあ、向き合わせて。キスで力を分けるのよ」

美子が言いました。

「何だって！？」

左京は仰天しました。

第八百十話　部秘模洲の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

美子（めいず）の言葉に驚いたのは孫左京だけではありません。

「何て事を！」

母親の霊媚阿壇（れびあたん）も目を見開きました。

それより驚いているのは部秘模洲（べひもす）です。

「お父さんはお前をそんなふしだらな子に育てた覚えはありません！」

璃里と不倫していた奴が言う台詞ではありません。

「うるさい！」

部秘模洲は地の文にサイだけに「うるさい」と切れました。

「お父さんは許しませんよ！」

部秘模洲は復活し、飛翔しました。

魔王は部秘模洲が接近している事を感じていました。

（雑魚が）

魔王は目の前に迫る美子の可愛い唇を見ました。

（これで我は更に強くなる。やはり所詮は子供。我の罠にまんまと……）

その時、魔王の股間に激痛が走りました。

「なんてね」

美子は魔王の股間を思い切り蹴飛ばしていました。

「ぬぐお！」

悶絶する魔王です。

第八百十一話　美子の失恋編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

孫左京は悶絶する魔王を見て、

（何だ、こいつもそこが急所か）

と思いました。

「左京さん！」

大金星を挙げた美子（よしこ）が如意棒を左京に投げます。

「美子ちゃん、これは美子ちゃんが使ってくれ。俺にはこいつがあるから」

左京は樹里から授かった飛竜杖（ひりゅうじょう）を見せました。

「そうなんだ」

悲しそうな顔になる美子です。

（やっぱり勝てないや、樹里様には）

美子は意を決して左京から如意棒を受け取ります。

「おのれ」

痛みが引いた魔王が美子を睨みます。

「許さぬぞ」

魔王は凄まじい妖気を放ちました。

「危ない！」

左京が美子を庇い、きんと雲に乗せます。

「許さぬのは我らも同じだ！」

女？（じょか）と霊媚阿壇（れびあたん）が迫ります。

「お姉さん、許して」

魔王が美少年の顔で言いますが、

「同じ手が効くか！」

二人の女は激怒しました。

第八百十二話　孫左京の怒り編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

孫左京は美子（めいず）を庇うように立ち、

「許さねえ」

ときんと雲で魔王に接近します。

「女は強し！」

霊媚阿壇（れびあたん）が叫びます。

「妻は強し！」

女？（じょか）が叫びます。

「されど母はもっと強し！」

霊媚阿壇がもう一度叫びます。

「父も強いぞ！」

部秘模洲（べひもす）が飛んで来ました。

「お母さん、お父さん！」

美子は涙ぐみました。

「我はそれよりもっと強いわ！」

魔王が言います。

「残念だったな、俺は更にその上だ！」

孫左京が魔王の脳天に飛竜杖を突き立てます。

「お師匠様！」

左京が叫びます。

「インダラヤソワカ」

樹里の真言が炸裂しました。

「ぐげえ！」

雷撃が飛竜杖を通して魔王に直撃しました。

「効いているぞ」

左京が呟きました。

「魔王は幾重もの結界にその身を守られている。飛竜杖はそれを貫いたのだ」

部秘模洲が言いました。

第八百十三話　不死身？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

樹里の帝釈天真言が魔王に直撃し、魔王は雷撃を食らいました。

「ぐげげ！」

魔王は黒焦げになって倒れました。

「やった！」

孫左京は大喜びです。

「おお！」

霊媚阿壇（れびあたん）と女？（じょか）は人間の姿に戻って手を取り合います。

「お母さん！」

美子（めいず）が父である部秘模洲（べひもす）と共に近づきました。

「いかん、油断するな！」

鴻均道人（こうきんどうじん）が叫びました。

「え？」

左京は自分の胴体が真っ二つになるのを感じました。

「ぐは！」

それを見て美子が絶叫します。

「いやああ！」

部秘模洲達も唖然としました。

「ぐうう……」

左京はそれでもまだ生きていました。

「猿！」

女？と霊媚阿壇が近づきます。

「よくもやったな」

黒焦げの第六天魔王から、鋭い爪が伸びています。

「生きていたのか？」

部秘模洲が呟きました。

第八百十四話　魔王の嘲笑編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

黒焦げのはずの魔王が起き上がります。

煤のような物が落ち、その下から美少年の顔が現れました。

「不意を突かれて不覚をとったよ。だが、この程度では勝てぬぞ」

魔王は身体を真っ二つにされた孫左京の顔を踏みつけました。

「ぐう」

生きているのが奇跡の左京は動く事ができません。

「やめて！」

美子（めいず）が叫びました。

「おのれ！」

霊媚阿壇（れびあたん）と女？（じょか）と部秘模洲（べひもす）が魔王に向かいました。

「うぬらも死ぬか？」

魔王は爪を幾本も操り三人を翻弄します。

「く！」

あちこちを切り裂かれ、近づけません。

「この程度で死なせんよ。うぬにはもっと苦しみを与える」

女？達の相手をしながら魔王は左京に言いました。

「お猿さんは負けませんよ、浅田さん」

樹里の声がしました。

「だからその真央じゃねえよ！」

魔王は切れました。

第八百十五話　第六天であるという事編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

樹里達が到着しました。

「左京！」

孫左京の状態を見て蘭が叫びます。亜梨沙は言葉もありません。

「左京さん」

馨は泣いていました。

「うぬらは第六天に我を追って来た時点で負けが決まっていた。ここは我の治める世界。我そのもの。故に我は不死なのだ」

魔王は美少年の顔で憎らしい事を言います。

「うぬも死ぬか？」

魔王は地の文を脅かしました。

死にたくないので言葉には気をつけます。

地の文は無条件降伏しました。

「お猿さんも不死身ですよ。貴方になんか絶対に負けません」

樹里は笑顔全開で言いました。

「お師匠様、いくら何でも……」

蘭は泣きながら樹里に言いましたが、

「その通りです、お師匠様！　俺は絶対に負けません！」

左京はいつの間にか胴体が元に戻っています。

魔王は唖然としました。

「左京さん！」

美子（めいず）が泣きながら叫びました。

第八百十六話　左京復活編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

真っ二つになったはずの孫左京でしたが、樹里の言葉で嘘のように復活です。

縫い目もなく、ブラック○ャックも逃げ出す完璧なくっつき具合です。

「うぬは何者だ、猿？」

魔王が歯軋りして尋ねます。

「俺は正義の味方だ」

左京はドヤ顔で言いました。

「お師匠様の味方の間違いにゃん」

大型きんと雲の後ろでリックが呟きました。

「お猿さん、頑張ってください！」

樹里が大声で言いました。璃里も蘭も亜梨沙もその声に驚きます。

「左京、行きまーす」

左京は飛竜杖を振るい、魔王に突進します。

「どうなってるんだ、あいつ？」

牛魔王が言いました。

「愛の力ね」

鉄扇公主が言います。

「そうか、愛の力か」

牛魔王は意を決した顔で、

「頑張ってください、牛魔王さんと言ってくれませんか？」

と樹里に頼みます。

「このロクでなし！」

鉄扇公主が芭蕉扇で殴りました。

第八百十七話　美子変化編（前書き）

河先生、ごめんなさい。

第八百十七話　美子変化編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「左京さん！」

美子（めいず）が左京を追いかけます。

「美子ちゃん、危ないから下がってて！」

左京が言いました。すると美子は、

「バカにしないでよ。私は霊獣の娘よ。貴方の援護くらいできるわ」

その言葉に霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）が驚きます。

「まさか、あの子……？」

霊媚阿壇が部秘模洲を見ます。

「そのようだな」

部秘模洲は言いました。

「変化！」

美子が叫びました。すると彼女の身体が巨大化し、鎧がメリメリと砕けます。

「おお！」

リック、太上老君、元始天尊、鴻均道人（こうきんどうじん）が雄叫びをあげます。

「がああ！」

美子は今まで自分が霊獣の娘だという事を否定していました。

でも、愛する人を守るためにそれを受け入れたのです。

美子の身体は獣化し巨大なサイになりました。

「……」

太上老君達は複雑な表情です。

第八百十七話　美子変化編（後書き）

決してモデルの方がサイみたいだという事ではなくてですね……（汗）。

第八百十八話　美子特攻編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

獣化した美子（めいず）は孫左京に駆け寄り、

「乗って、左京さん。魔王の結界を破らないと奴には攻撃が届かないわ」

「あ、ああ……」

美子の姿に戸惑いながらも、左京は美子の背中に乗りました。

「行くわよ、魔王！　覚悟しなさい！」

美子は全速力で突進しました。

「させるか」

魔王はフワッと飛翔し、鋭い爪を伸ばします。

「それはこっちの台詞じゃ！」

女？（じょか）が叫び、鱗攻撃です。

「美子の思い、受け止めましょうぞ、貴方」

霊媚阿壇（れびあたん）が言います。部秘模洲（べひもす）は頷き、

「おう！」

二人も獣化し、美子の援護に回りました。

「我らも！」

蚩尤と牛魔王の牛魔族が飛びました。

「雑魚共が！」

魔王は歯軋りしました。

「その程度で我に届くと思うな！」

魔王が叫んだ時、美子が魔王の結界に激突しました。

第六天が揺れました。

第八百十九話　魔王驚愕編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

美子（めいず）の特攻で魔王の結界が揺れました。

「ぬう！」

魔王に焦りの色が見えます。

美子は頭から血が流れているのにまた結界に激突しました。

「美子ちゃん、もうやめろ！」

彼女の背に乗っている孫左京が叫びました。

「やめない！　私は勝つのよ！」

美子はもう一度下がり、結界に突進しました。

「私達も力を貸すわ！」

霊媚阿壇（れびあたん）が一緒に結界にぶつかりました。

「私もだ！」

部秘模洲（べひもす）もぶつかりました。

「おのれ！」

魔王は結界に力を集中し、崩壊を防ごうとしています。

「お猿さん！」

樹里が叫びました。

「はい、お師匠様！」

左京は飛竜杖を持ち、飛びました。

「おら！」

飛竜杖が結界に当たりました。

「くう！」

魔王は歯軋りしましたが、結界は遂に崩壊し美子の身体が魔王に激突します。

「ぐはあ！」

魔王は吹っ飛ばされました。

第八百二十話　さよなら、美子編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

美子（めいず）の決死の特攻で魔王は跳ね飛ばされました。

「美子ちゃん！」

ガクッとなった美子に驚き、孫左京が駆け寄ります。

「美子！」

霊媚阿壇（れびあたん）と部秘模洲（べひもす）も駆け寄りました。

美子は力を使い果たしたのか、人間の姿に戻りました。

鎧は砕け散ったので、全裸です。

「わ！」

左京は驚いて顔を背けます。

「にゃん」

全裸の匂いを嗅ぎつけてリックが飛び上がります。

「お前様！」

遊魔が殴りました。

「頑張ったね」

霊媚阿壇と部秘模洲も人間の姿になり美子に上着をかけます。

「お母さん、お父さん……」

虚ろな目で父母を見てから気を失いました。

「少し休もう、美子」

部秘模洲が美子を抱き上げます。

「後は俺達に任せろ。美子ちゃんを安全な場所に」

左京が言いました。

「頼む」

霊媚阿壇と部秘模洲は美子を連れて第六天を去りました。

第八百二十一話　魔王の反撃編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「おのれ……」

跳ね飛ばされた魔王が飛翔して戻って来ました。

美少年の姿ではなく、黒衣の老僧の姿です。

「効いているぞ」

鴻均道人（こうきんどうじん）が言いました。

「これまで集めた妖気と邪気をほとんど費やしてしまったようだな、魔王？」

露津狗が変化して言いました。

「……」

魔王は悔しそうに睨むだけで何も言いません。

「止めだ！」

孫左京が飛竜杖を振り上げて魔王に向かいます。

「不用意だぞ！」

牛魔王が叫びました。

「ふん！」

魔王は身体から幾本もの触手を出し、左京を串刺しにしました。

「ぐえ！」

左京は左右の肩、腹、両腿、両手首、両足首を貫かれました。

「危なかった」

一番の急所は無事だった左京です。

「一番の急所ってどこですかあ？」

遊魔がリックに尋ねます。

「ここにゃん！」

リックが見せようとしたので、蘭と亜梨沙が殴りました。

第八百二十二話　孫左京いたぶられる編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王の触手に串刺しにされた孫左京は振り回されました。

「ぐえ！」

三半規管が崩壊しそうなくらいの勢いです。

「回転ジェットですか？」

樹里が尋ねました。

「誰が大怪獣ガメラだ！」

魔王が切れました。

「どうして猿は抜け出せないのだ？」

露津狗が眉をひそめます。

「あの触手には返しがついているのだ。無理に抜こうとすれば傷が広がる」

太上老君が遊魔のお尻を触りながら言いました。

「無理に抜くのは痛いにゃん」

何故か顔を赤らめて言うリックです。

「そういう意味じゃないわよ！」

蘭が殴りました。

「どういう意味ですかあ？」

遊魔が亜梨沙に訊きました。

「ＩＤ剥奪されるから言えない」

赤くなる亜梨沙です。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「このままでは猿が危ういぞ」

璃里のお尻を触りながら元始天尊が言います。

「こら！」

蘭が殴りました。

第八百二十三話　魔王進化編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「何だ？」

蚩尤（しゆう）が魔王の変化に気づきました。

「奴が若返っているぞ」

蚩尤は牛魔王に囁きます。

「うぬ」

牛魔王は魔王の放つ妖気がまた強大になって来たのを感じました。

「どういう事だ？」

露津狗が呟きました。

「言ったはずだ。うぬらはここに来た時点で負けが決まっていたと」

魔王は老僧の姿からイケメンになりました。

服装も黒衣から金ぴかの袈裟に変わりました。

「きゃあ！」

イケメンに耐性がない亜梨沙が絶叫します。

「くう……」

さっき酷い目に遭った女(じょか)?は真言を唱え、堪えています。

「この魔力のような感覚は?」

蘭も魔王の誘惑光線に必死に抵抗しています。

「遊魔は魔王様にお味方致します」

遊魔も落とされてしまいました。

「ダメにゃん、遊魔」

リックを踵落としで倒し、遊魔は亜梨沙と共に魔王のそばに行ってしまいました。

第八百二十四話　干涸びた孫左京編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「そろそろ返すか」

魔王はそう言うと、孫左京を投げ出しました。

「ひえ！」

左京はクルクル回りながら落ちました。

「うえ！」

左京の姿を見た蘭が思わず呻きます。

左京はミイラのように干涸びていました。

「キモーい、左京」

遊魔と共に魔王に落ちてしまった亜梨沙が言いました。

「猿の力を吸い取ったのか」

霊宝天尊が魔王を睨みます。

「猿程度ではまるで腹の足しにならぬ」

魔王はニヤリとします。

「お師匠様」

左京は樹里を呼びました。

「大丈夫ですよ、お猿さんは無敵ですから」

樹里は笑顔全開で言いました。

しかし、左京は復活しません。

「無駄だ、御徒町樹里。猿には一欠片の妖気もない。もはや死ぬるのみ」

魔王が高笑いしました。

「では陽気を与えます」

樹里が帽子を取り、笑顔全開になりました。

「その陽気じゃないです、お師匠様！」

蘭が慌てました。

第八百二十五話　陽気の力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王に力を吸い取られ、干涸びてしまった孫左京です。

「お師匠様、それでは左京が！」

陽気を全開にした樹里に蘭が叫びましたが、すでに発動された後でした。

「ぐおお！」

巻き添えを食ったリックと馨と蚩尤（しゆう）と牛魔王が鼻血地獄です。

「ぶばば！」

枯れていた左京から何故か大量の鼻血が噴き出します。

「何だと！？」

魔王も仰天しました。

「ありがとうございます、お師匠様！　確かに陽気の力、受け取りました」

何故か顔がイケメンになっている左京です。

「左京、かっこいい！」

絶叫する節操のない亜梨沙です。

「よくもやってくれたな！　礼をさせてもらうぜ！」

左京は如意棒と飛竜杖を呼び寄せ、両手に持ちました。

「何という支離滅裂な奴なのだ……」

魔王は完全に意味不明地獄です。

「援護します」

何故か恋する乙女顔の女？（じょか）が言いました。

第八百二十六話　女?、孫左京に恋する編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

女?(じょか)は孫左京に恋してしまったようです。

「女?ァ」

涙ぐむ夫の伏義(ふくぎ)です。

「何で急に男前になったのかしら?」

蘭が首を傾げます。

「猿の身体にあった妖気を魔王が吸い取って、そこへ樹里の陽気が注入されたので、悪の顔が引っ込んだのであろう」

太上老君が蘭のお尻を触りながら言いました。

「ああ、そうですか!」

蘭は老君を殴りました。

「どうして女?まで……」

伏義が泣きながら尋ねます。

「それはお前が悪い」

鴻均道人(こうきんどうじん)が言いました。

項垂れる伏義です。

「行くぜ、お嬢さん！」

何故か行動までかっこよくなる左京です。

「はい！」

女？は目をハート型にして左京に従います。

「私達も！」

亜梨沙と遊魔が魔王から逃げ出しました。

「うぬ……」

何となく悔しい魔王です。

「正義は勝つんだ、悪党」

左京が言いました。

第八百二十七話　イケメンの威力編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

「何だかわからんが、魔王の味方をしたくなった」

河東真君が言いました。

「俺もだ」

牛魔王が頷きます。

「何を言っているのです、お館様！」

鉄扇公主が牛魔王を扇子で殴ります。

「私達の子供のためにも、左京様に力を貸しなさい！」

公主まで孫左京にメロメロです。

（妻が左京に夢中になっている隙に……）

牛魔王は樹里の前に行き、

「愛人になってください」

「お前様！」

しかしそれも許さない公主のハリセンチョップが炸裂しました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「おらあ！」

顔はイケメンになっても戦い方は一緒の左京です。

「はあ！」

女?(じょか)が鱗攻撃です。

「おのれ！」

魔王は後ろに飛びました。

「ならばもう一度うぬの力を吸い取るまで」

魔王の爪が左京を貫きました。

「ぐえ！」

左京は血を吐きました。

「左京様！」

女?が叫びました。

第八百二十八話　樹里の作戦編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王は孫左京を爪で串刺しにし、またその力を吸収しました。

「うええ……」

左京は力を吸い取られたせいで、元のブサメンになりました。

「きゃあ、魔王様！」

亜梨沙はまた魔王につきました。

遊魔はそのまま樹里達の所に戻りました。

「全く、あの豚女は」

蘭が呆れます。

「残念だったな、猿。元の醜い顔に戻ったぞ」

魔王がニヤリとして言います。

「何！？」

左京はまたグルグル回された揚げ句、放り出されました。

「何じゃ、つまらぬ」

途端に戦線離脱する女(じょか)？です。

夫の伏義(ふくぎ)はホッとしました。

「ふええ」

また干物になった左京です。

「う？」

その時でした。魔王の顔が苦悶に歪みます。

「ぐはあ！」

魔王はイケメンの顔を醜くし、悶絶しました。

「何？」

亜梨沙は思わず離れます。

「何をした、御徒町樹里！？」

魔王が樹里を睨みつけました。

第八百二十九話　魔王悶絶編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王は何故か苦しみ出しました。

「まさか、そのような手を使うとは……」

苦悶の表情で樹里を睨む魔王です。

「何が何やらわからねえけど参ったか！？」

大威張りの孫左京です。

「なるほど、左京の身体に真言を込めた陽気を吸わせてそれを魔王に吸収させたのですね？」

蘭が目を見開いて樹里に尋ねました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開で応じました。

「ええ！？」

蘭は樹里の反応に驚きます。

「魔王自らが吸収するのであれば、奴の結界は関係ないという事ね」

鉄扇公主が牛魔王を踏みつけながら言いました。

「さすがお師匠様」

いつの間にか大型きんと雲に戻っている節操がない亜梨沙です。

「ぐおお！」

魔王は身体の中を駆け巡る真言に悶え苦しんでいます。

「勝ったな」

霊宝天尊が祝杯を掲げました。

「宴会じゃ」

元始天尊が璃里に迫り、蘭に殴られました。

第八百三十話　助太刀現る？編

御徒町樹里はありがたい経典を授かるために西を目指していましたが、第六天魔王を追撃する事になりました。

魔王を奇策で追い詰めた樹里一行です。

魔王はまだ悶絶していました。

「ぐああ！」

イケメンが台無しなほど苦しんでいます。

「待て」

どこからか声が聞こえます。

「誰だ？」

孫左京が周囲を見渡しました。

「俺に止めを刺さなかったのは間違いだったな」

声の主が現れました。

八岐大蛇（やまたのおろち）です。

「もう出番終わったよ、あんた」

亜梨沙が台本を捲りながら言います。

「誰が大部屋俳優だ！」

大蛇は切れました。

「蛭子（ひるこ）ね？」

鉄扇公主が言いました。

「麻雀賭博で捕まった人ですね」

樹里が言いました。

「それは蛭子能収（えびすよしかず）だろ！　それに二度目だ、そのボケは！」

大蛇は切れました。

「そうなんですか」

樹里は笑顔全開です。

「魔王、この時を待っていたよ。この蛭子がお前に代わって第六天の魔王となる」

蛭子はニッとしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2689o/

御徒町樹里の西遊記(四百文字小説)

2011年11月20日21時40分発行